VIRINA REKONSTRUO

女性改造

1923



新年號

モスコースキ原著

理學士 高橋誠譯

アインスタイン

（最新刊）

定價壹圓六拾錢

送料拾五錢

四六版

千古の天才―新宇宙の創見者―

彼アインスタインの神韻幽渺たる精神Xを解剖した思想評傳中の光として賞讃を博しつゝある本書は、我が高橋理學士によりて飜譯された、怒濤の如き歡迎を受けつゝある我がアインスタインを知らんとするものは先づ本書を讀め、そして本書によりて彼の爲人と思想とを具さに知了して彼の心界深く燃ゆる思索の光明に接せ、

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

賀川豊彦著

生存競爭の哲學

定價貳圓

送料十七錢
四六版上製

生存競爭は愛の力を超越するか？

本書は賀川氏の人生哲學から出發して、生存競爭の原理を闡明したものだ、生存競爭と成長競爭、生存競爭と生存互助の哲理を解說し、生存競存は建設か、破壞か——のどちらであるか——を指示し、生命力と愛の力は生存競爭を超越するものであることを進化論的に實證して人類の向ふべき針路を科學的に解示し、相互扶助と生存競爭が延び上らんとする生命の倫道であることを斷言して第一線に立たんとする先驅者たちへのはなむけとした。

生命力は生存競爭を超越するか？

我々は何故に生存する？

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四二〇

ビクトリヤ月經帶

純良ゴム製罐容器附



一號品
純良ゴム製
（丸罐入）

御婦人方が
衛生＝輕快＝簡便なる……
ビクトリヤ月經帶を御使用遊ばす時は新春の潑溂たる氣分を一層強く感じ得る事が出來ます。

（內地送料十二錢
（鮮韓送料四十五錢



二號品
保溫ネル腰衣附
（角罐入）

□特色□

ビクトリヤは伸縮自在の、柔軟なるゴム製品にして、御運動には頗る自由◎月經中も、コレさへお用ひになれば全く御安心◎センタクは只ザット水をかけるばかりにてキレイになり◎久しき御使用に堪へ◎美麗にして携帶保存に便利な罐容器附なり。

◎定價

一號品 金五拾錢
二號品 金七十錢

外に徳用二個入三號品金九拾錢のものあり。

到る處の
薬店小間物店に
あり！

イージーおしめ

文明的
保潔
衛生的

ゴム製おしめカバー

▼お使ひ遊ばした方は必ず具合の宜しいのに感心遊ばします

特色

大小便は決して洩れず お子さんの衣服は常に清潔です◎伸縮自在のゴムにし少しも窮屈の思ひなく、御運動は自由◎センタクは只サラ〳〵さ水をかけるばかりにてキレイになり◎體裁頗る宜しく上品です◎着脱に手數がかゝらず◎カサ張らずして旅行携帶に便利。



到る所の
薬店小間物店洋品店
にあり

定價	純ゴム製	純ゴム特製	別製
小形	七十錢	一圓	六十錢
大形	八十錢	一圓十錢	七十錢

直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金にてお願ひいたします◎代金引換は二十四錢切手御前送下さい

發賣元
東京市本所區番場町

大和ゴム製作所

電話墨田一〇三三・一〇三四番
振替東京一三〇〇二番

法學博士 堀江歸一著

定價壹圓九十錢

送料十五錢

四六版布製

國際經濟と國民經濟

第五版

本著は我國財政、經濟學の權威たる堀江氏の近著、先づゼノア會議の前後から最近に至る間に於て世界の經濟が如何に動いてゐるか之に對して我國の經濟社會は如何なる地位と狀態にあるかを詳說し、世界大戰後の今日、國際平和の不徹底より國民生活を蹂躪する政策の行はるゝを痛擊し對外債務、租稅、不景氣に對する國民の依るべき道を明示す**國際經濟と國民經濟**に通ぜんとするものゝ必讀に値する快著。（刻下の經濟界を相する唯一の參考書）

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

革命前後

八版發賣

島田清次郎著

定價壹圓六拾錢

◇送料十七錢◇

◇四六版布裝◇

「革命」の後ろには女がある、「大化維新」の背後には遠智姫がある、若い遠智姫を圍む鎌足と中大兄皇子とがある遠智姫の殉情のいぢらしさ、鎌足の「革命」への悲しき戀の犧牲、それは情熱の若き天才思想家島田氏の筆を以つて悲壯に、深刻に、大膽に描かれた、敢えて若き人々に本書の一讀をお薦めする。

◆革命に殉ぜし彼女の犧牲的苦惱を見よ◆

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

賀川豊彦著

星より星への通路

氏の苦しき體驗からにじみ出た此の人生觀が、若き人々にどんな感激を與へるであらうか、氏のシンミリした宗教觀が我々をどこに引きいれるであらうか、我々はかく考へつつ本書のページを愉快にめくつて行く、冷秋の空にウツトリしつつ氏のふくよかな詩筆に囚はれて行く我々は、魂の髓までも、心の奥底までも矢つ張り敬虔なる神の實在へと導かれて行くのであつた。

第四十五版

定價貳圓
送料十七錢
四六判布製

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

中村吉藏作

戯曲 錢屋五兵衛父子

定價壹圓五拾錢

◇送料十五錢

◇四六判上製

最新刊

波狂ひ風寒き北越の俠商「錢屋五兵衛」父子は封建末期に於ける事業的天才の一巨人として無産階級の民衆との葛藤から胚まれて來た運命的な、又性格的な一悲壯劇を描いてそこに舊社會解體の一の豫兆としての、ブルジョアジーの崩壞を示さうとしたのが作者の意圖である、現代の思想と生活の潮流の或る方向への指標を、その中から發見する者もゐるであらう、又「白隱和尚」は嘗て幸四郎氏に依て「帝劇」に「小山田庄左衞門」は延若氏に依て「浪花座」に初演せられ、共に成功したものである。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

アインスタイン博士の演奏



十二月一日、本社主催で、社會の各方面の人々が百數十名相集まつて、アインスタイン博士の歡迎會を帝國ホテルに於て開催しました。その當日、博士は、ベエートーベンの『クロイツエル・ソナタ』を演奏して非常な感激を與へました。熱情的なその演奏振りには一同全く魅惑されて、なかく拍手が止みませんでした。

VIRINA REKONSTRUO

JANUARO 1923

新年に思ふ事ども

羽根をついたり、歌留を酌んだり、かるたを取つたりする新年は、ともすれば人生を墮落へ……と誘ふ動機ともなり得る、しかしながらまた一面には美はしく奢かざりたる所に優美の心操を涵び、父祖を慕ひ歴史を憧憬する古典味に蘇らしむることが多い。

わたしどもの希望するのは、この新しい氣持を召び返す人生飛躍の瞬間に子供から成人に至るまで、すべての點を包括して――家庭生活の革新に充てたいのです。

たとへば、鬼ヶ島、桃太ん、大砲、軍人、日本刀、戰艦の玩弄品よりは――飛行機、メイプライター、萬年筆そしてやさしい可愛い人形……文化をむとし、平和を象徵し、人倫の大本にもとらぬ玩弄品を――元旦から殺伐の氣風を以つて子女を敎育するのいかに人道に悖叛するかを考慮せればならぬ。

さればとて私共は所謂文弱を謳歌するものではない、剛健と、優美とは並行して人生に成長することを知つてゐる、藝術の助長、審美心の發達は必らずしも邁往、勇進の志向と衝突するものではありませぬ。

この機會におきまして家庭解放の事にも一言したいのです。

家庭の解放、靑春士女の解放が――直に墮落・無節制への道だと思ふは大なる誤謬だ。いつも無理解な親たちが、かくの如き事にいらざる眼を光らせるのは却つて士女をして猜疑と隱蔽の心情を增長せしむるのみだ、かうした外間の壓迫が何にならう、時代錯誤の女大學式意見がどれほどいい結果を齎らさう、かう云ふ思想は心の敎育、時代の敎育の敎育を無視するものであり、士女ののび上らんとする燃ゆるがやうな靑春を枯木寒林のやうに凋渇するものだ。

それからもう一つ、それは母性敎育の覺悟、今日の如きはまた珍しい、自分の子供は女子大學までも、また洋行までもさせんとするその母親が、自分自身の執るべき道、進むべき道を打忘れてその子供のみを時代に捧げんとする傾向――これほど家族制度を危機に瀕せしめ、親と子との思想を無理解に陷らしめるものはない、私どもは必ずしも家族制度を偶像の如く讃美崇拜するものではない、しかしながら日本の家庭にはこの恐怖がドクロを卷く蛇の如くひかへてゐる、この危機を救濟するのは子と親との敎育が並行して行はるることにある。それは實に母性敎育によりて救はるるのみです。

私どもはこの感じたままの二三をかかげて一般女性の深慮を促しておきます。



改造日本に於ける女子

文學博士　藤井健治郎

一

婦人運動の倫理的考察は、之を一般論と特殊論との二部に分けるを便利とする。一般論とは婦人運動の全般に關する一般原理、又は根本原理の考察を指し、特殊論とは婦人運動のプログラム例へば廢娼、結婚改善、男子の私通に對する刑法の改正、女子を社會への解放、職業の自由、慈善、救濟、感化事業、教育の開放、參政權の獲得等、特殊の方面に關する研究を指すのである。而してそれ等一般論にも特殊論にも、取扱はるべき問題は澤山ある。今それ等のすべてを論究するの遑がないから、單に一般論に於いては「家」といふ一問題に就いて述べるに止めておかうと思ふ。

我が國の「家」は戸主と稱する家長の權力の下に統率せられてゐる小血族團體を指すものであつて、家族（民法第七三二條）は其居所を定むる上に於いても（民法第七四九條）、婚姻又は養子緣組をなす上に於いても（民法第七五〇條）、その庶子及び私生子を其家に入るゝに於いても（民法第七三五條）、他家を相續したり、分家したり、又は廢絕したる本家・分家・同家その他親族の家を再興せんが爲めにも（民法第七四三條）、すべて戸主の同意を得なければならぬ。その代りには戸主は家族に對して一定の義務を負うてゐる（民法第七四七條）。而して此戸主の位は家督相續といふ名に於いて世々繼承せられて行くものであつて（民法第九六四條）、從て家は相續不斷の實體であるといふことが出來る。更に語を換へていへば家は現在の家族が存在するに依て而して後始めて存在するものでなく、現在の家族以上に超越してゐる實體であつて、現在の家族のある前に既に存在し、現在の家族の亡くなつた後に猶存續するものであると謂ふことが出來る。而して戸主の位の相續順位は男が先きであつて女が後である（民法第九七〇條）。此點からいへば我が國の家は、法理學者、社會學者、人類學者等の間に、從來パトリアーカル・フアーミリーと稱へられてゐたものに近似してゐる者である。

二

以上に述べたのが現下我が國に於いて「家」と稱へられてゐる者であるが、此家が女子の問題に就いても、多分の關係を有つてゐる。

第一に結婚である。家の制度のある我が日本に於いては結婚は或る特定の男と、特定の女との間に生ずる特殊の關係でなく、或る「一家」と、他の「一家」との結合を指して謂つてゐるのである。ことに女の方からいへば某「家」へ「嫁」していつたので、某男と「婚」したのでない。從て某家へ嫁した女には、夫と琴瑟相和していくと謂ふよりは、むしろ舅姑機嫌氣妻を取つて、彼等の意に迎合していくといふ方が、第一の務になつて來る。處が若い嫁と、老いた舅姑とは思想

感情に於いて皆異つてゐる。一は感傷的で他は意欲的であり、一は進歩的、冒險的、空想的であるのに、他は嬰退的、保守的、因循的である。若い夫婦は青春の麗々した煦々した光に浴つてゐるのに、老夫婦等は漸く霜枯時の寂寥と沈鬱とを感ぜざるを得ない。割合に我が強くなり、骨つぽくなつてゐる老者と、比較的水々しい、血の氣の多い若者と。三四十年も前に教育された老年、今日の學校に學んだ若者。殊に我が國は今猶過渡期の中にあるので、其變遷、推移は實に急激で目眩るしい位で、爲めに同時に發足したものゝ間にも、一寸の足溜の遲速から、非常な隔が生じて來る程である。かやうな譯で思想にも感情にも隨分大なる懸隔のある老若が、眞底から一致融合するといふことは、殆ど望み難いことである。そこで互に腹の探り合ひをしたり、お天氣見をやつたり、癖根性で互に曲解したりするやうになる。此際最も苦しい立場に立つものは嫁である。嫁を貰つて樂しまうと思つたら、却て苦の種を蒔いたとは世間の姑の能く言ふ言葉であるが、而してさうした事も慥かに事實であらうけれども、併し何といつても年は若し、他家から忽然と入て來たので其家の勝手がよく分らず、世故には長けず、權力はなし、それに動もすれば離縁といふ致命的打撃を與へられる危險があるしするから、どうしても嫁の方が姑よりも二倍も三倍も苦しまねばならぬのは事實である。嫁が家庭の不和から自殺した、家出したといふ例は澤山あるけれども、姑がさうした事をやつた例は稀である。我が國は離婚數の夥しい點に於いて、世界文明國中で上位にあるのであるのが、其原因中で最も多いものは此家庭の不和である。しかし結婚が、一男一女の結合でなく、其「家」へ「嫁」にいくといふ意味である以上、右の現象は免れ難いことである。

次に夫との關係である。我が國の「家」は、嚴格なる意義に於けるパトリアーカル・ファーミリーとはいへぬにしても、しかし極めてそれに近似してゐるものであることは前に述べた通である。かうした族制の下に於いては妻の夫に對する關係は二重となるものである。一つは單に夫としての關係であつて、一つは主人としての關係である。夫は單に妻として自分の妻に對してゐるのみならず、一家の家長として、統率者として妻に對してゐる。夫は妻から見れば吾の「良人」である

のみならず、同時に内の「主人」である。此場合の關係は主從の關係であり、首長と部下との關係である。從て同等關係對等關係でなくして、上下關係であり、命令、服從關係である。爲めに此事からして夫は自然に專制の君主のやうになり妻は自然に奴婢のやうになる。一切對外對內の家務が男子の擅斷に出づると同時に、貞操の如きも、男子は男の腕と稱して勝手な擧動をなし、而して妻をして毫末も嫉妬がましい言動をなさしめぬ。否若しも妻にして夫の行跡に對して嫉妬がましい言動でも發すれば民法の規定以外の「妬去」の習慣法に照らして處分されてしまふことさへ稀でない。

第三にパトリアーカル・ファーミリーに近似した家から見れば、「貰うた」嫁は、家の血統を繼承させる機關たるに過ぎぬ。女は子を生み、それを育てるといふ以上何等の職務もなければ、又意味もない。それも其筈である。何となれば家から觀れば、家族の各員殊に家長の最大義務は、其家を絕さずして永遠に之を繼承させてゆくことである。其最大義務を果たすの要具としての女が、其要具たるの任務を果さなければ、若しくは果すことが出來なければ、そんな女は其家に取つて用のないものである。是に於いて是も前の「妬去」と同じやうに「慣習は時として法律よりも有力である」が爲めに民法の規定以外の「無子去」と謂ふやうな悲慘な結果を見るやうなことにもなるのである。

第四に再婚と貞操と女子との關係である。妻を亡つた夫が後妻を迎へることは、當然の事柄として、何等の問題を起さないが、夫に別れた女が再婚することになると、兎角色々面倒な問題を惹起する。たとひ問題を惹起さないまでも、貞女といへぬことにされてしまふ。それ故に結婚といふことは、女子の運命を一度に永久に定てしまふことである。次に貞操問題であるが、家は血族間に於ける相續不斷の實體なるが故に、その血統を純粹に保持することは、家の制度に取つては極めて重大なる事柄である。而してその血統を純粹に保持するには、妻の貞操てふことを絕對に必要とする。それ故我が民法に於いては女の貞操破亂を離婚し得る條件の一に認めてゐる（民法第八一三條第二項）。而して其場合男子の破亂については何等規定してゐる所がない。又刑法に於いても女の貞操破亂は之を罰してゐる（刑法第一八三條）が、男子の破亂

に對しては何等の制裁をも規定してゐない。

最後に「在家從父、適人從夫、夫死從子」といふが如き支那から傳來した三從の敎の如きも、絕對的に「家」といふものがなければ起つて來ることが出來ない現象であるとはいへぬが、しかし「家」といふ制度があるが爲めに一層顯著に現はれて來ることは拒むことが出來まい。

是等が家と女子との間に存する關係の重なるものであるが、是に依つて觀ると、家といふものがあるが爲めに、女子は種々不利不便の位置に置かれ、段々低下するやうになり、さうして終には所謂男尊女卑の風を馴致するやうになつたらしい。

三

かやうに「家」の制度は女の位置に對して深い關係を有つてゐるものであるが、此制度は昔西洋にもあつたがその後段々崩壞して其形を失ひ、今は我が日本、朝鮮、支那等東洋諸國に遺つてをるやうになつたが、その中で我が國に於いては家はたとひ全く崩壞して來たといへぬまでも、甚しく動搖の變化の狀勢を示してゐるし、支那に於いては胡適、吳虞、及陳獨秀等の新人達は頻りに所謂家族制度の支那を毒する所以を說いて自由戀愛を絕叫してゐる。私は此等新人達の絕叫がどれ程實際の社會組織を動かしてゐるかを詳かに調査する遑を有たないが、兎に角かうした主張と運動とがあり、それに若い連中（ヤンガー・ゼネレーシヨン）、殊に若い女子の連中が非常な共鳴をして、此に新社會を築造しなければならぬと力んでをる事は事實である。それ故我が東洋に於いても此家制は段々に變動しつゝあることは事實である。私は我が國に於いて家制の崩壞を促がすやうになつた事情を數へて左の如く擧げてある。

一經濟上の原因、（イ）「家產」の破壞、（ロ）人口の增殖、（ハ）居住、移轉の自由、（ニ）交通運輸機關の發達、（ホ）職業選

律の自由、(ヘ)

二政治上、法律上の原因、(イ)所有權の制度、(ロ)租税の制度、(ハ)選擧權の制度、(ニ)徴兵の制度、(ホ)義務敎育の制度

三思想上の原因、(イ)個人自由主義の思想、(ロ)女子敎育の普及及び向上(ハ)文學殊に現代文學の思想。

以上列擧した十四の事情は、すべて家制の維持に不利となり得る事情であつて、從てそれ等が自然家制を崩壞させる原因となるのである。故に是等の事情を杜塞若しくは根絕するの道あるならば兎に角、然らざる限り家制の崩壞は免れ難い狀勢と認めざるを得まい。

一部の人々は家制は我が國家組織の根本であつて、それが崩壞するやうになれば、我が國家組織も亦自然に動搖することになる。それは誠に憂慮すべきことであるから、其崩壞の勢を阻止しなければならぬと提唱し、運動してゐる。しかし族制も一つの社會制度である。而して社會制度といふものはすべて變遷發達するものであつて、一つの制度が始めから終まで全然變化せずにあるやうなものでない。故に族制も亦然りである。現に現時の我が家制は太古からあつた族制でなく種々の變遷を經て來たものである。それ故に變化は急激するよりも徐々にする方が望ましいといふことはいへるにしても全然其變化の勢を阻止してしまふことは出來る筈がない。

かやうに家制が段々力弱いものとなるにつれて、其の爲に蒙つてゐた女子の不利益の點は段々除かれて、女子の人格の自由と尊嚴とが認められるやうになるであらう。

四

かやうに所謂家制は我が國に於いても既に動搖し變化し始めてゐるが、次に來る族制はどんなものであらう。一部には家制が壞れたなら次に來るものは全然族制破壞の自由戀愛になるだらうと憂慮した人々もある。如何にもさうした事も絕

婚とは謂はれぬやうである。支那の新人達の思想行動は前に述べた通であるが、我が國にもさうした思想を懷抱してゐる者や、又實行を試みてゐるらしい者も若干は見えるやうである。しかし眞にどれだけかがあるらしいといふだけで、それが現時並にすぐ現時に引續いての將來に於ける一般的に行はれる族制であるといふことにはならぬ。しかしそれはさうであるが、外に結婚年齡に達してゐるもので、而かも結婚せずに獨身でをるものが、男女共に著しく多くなつたし、又それが段々多くなりつゝある傾向のあるのは事實である。一部の人々は之を以て家制崩壞若しくは動搖と結び付けて因果關係のあるものの如く考へ、それ故、かうした點からも家制の崩壞を阻止しなければならぬと說いてゐる。是は見當違ひの議論である。家制が崩壞したから未婚の男女が多くなつたのではない。是は西洋などと共通の現象であつて、一つは經濟上の事情から來り、一つは女子其人の自覺から來たものである。經濟上の事情といふのは、男が――殊に高き敎育をうけたやうな男が家庭を構成しても差支がないといふ程の收入を得るのは、餘程の年配にならねばならぬ。盛りの青春の血が少し鎭まつて來て、幾分左顧右眄の意欲の年頃になる。それに殊に都會に於いては生活が便宜になつてをつて妻を迎へずとも何事にも事を缺かぬ程度になつてゐる。自然結婚の機會を逸してしまふことになる。女子の自覺といふは、新しい敎育をうけて、多分世界の文化の香を嗅ぎ、色に接した女子の自覺といふのであるが、――又さうした程の女子にでなくては自覺などあり得ないのであるが、かゝる敎育をうけたる女子は唯從來の家制の中に於けるやうな危險な屈辱な不愉快な位置にある所の「嫁」に「貰はれ」ていくのを嫌ふのであつて、必ずしも結婚其者を嫌ふといふのでない。それ故男尊女卑的でない、人格を認められた純潔な愛情に基づいてをる結婚ならば喜んで之をする樣子である。それ故家制が壞れたから未婚の**男女が多くなつたといふ因果論は事實に當つてをらぬ。**

又西洋では男尊女卑の陋風は女子が經濟的に獨立してをらず、常に男子に從屬して其生活を支持するの途から生じたものである。それ故に此陋風を改めるのには女子をして經濟的に獨立せしめるのが根本的であり、又その近道であるといふ

思想から、女子を家庭から社會へ解放して、男女と相並行競爭もして社會内に自由に職業を求めるやうに唱道し獎勵した人人々も隨分ある。しかし其の議論の影響は何程のものか、判然とは分り難い。何となればミル等がさうした思想を說いた頃から、即ち前世紀の半過ぎから所謂「職業婦人」の數が俄然增して來たのが事實にしたにした處が、それはむしろ其當時の經濟事情と、男女の數の差違等に由る處が多いのであつて、學者の議論の結果といふことは、何程であるか甚だ疑問の[illegible]い。又さうした議論も國々の事情によつて異つてをることはバーネットがアメリカのギルマンの說と、スウエーデンのエレン・ケイのそれとを對比して論じてゐる通である。故に家制の崩壞と職業婦人の增加との間にも、必ずしも因果の關係があるのではない。我が國は西洋諸國と異つて女子の數は男子のそれよりも少い。さうした事情の下にあるから、所謂職業婦人の問題は西洋に於ける程にならぬかも知れぬが、しかし段々增殖しつゝある事は事實である。しかしその增殖は經濟上から來る自然の趨勢であるから、區々人力で回轉させるといふことは難しい。私は婦人の本來の天職は家庭にあるものなることを承認するものであるが、しかしそれだからというて經濟上の壓迫から餘儀なく獨身生活を送るやうになつてゐる男女を呪ふといふ了見は毫もない許でなく、むしろ同情を禁じ得ないものである。同情を禁じ得ないが故に一方では經濟事情をして成るべく結婚を可能ならしめるやうにし、一方では既に職業婦人になつてゐるものに對して十分その自由と權利とを認め、精神上身體上に故障なからしめるやうに務めなければならぬ。

だから家制が崩壞したからとて、すぐ所謂自由戀愛といふやうなものになるものでない。家制の廢墟に萠え出づる族制は恐らく夫婦制――今現在歐米などに見えてゐる族制に近似したものになるであらう。その夫婦制の族制の支配原理は何であらうか。一部にはそれは自由戀愛である。否それでなければならぬといふ所謂戀愛至上主義を唱道してゐるものもあるがそれの謬見であることは、私は曾て之を「大每」紙上に論じたことがあるが、それを參照されんことを願つて、今は擱筆しよう。（大正一一・一二・一稿）

普通選擧と婦人參政權

法學博士　穗積重遠

大正十二年劈頭の重大な出來事の一つは、議會の內外に於ける普通選擧論でありませう。否さうでなくつてはならぬと思ひます。今年こそはどうか今までの樣な空騷ぎでなく、黨爭でなく、政府側と云はず民間と云はず、國民全體が國民全體の問題として眞面目に研究審議した上で、せめて普通選擧制度採用の根本方針だけでも確立したいものです。

普通選擧問題は實に國民全體の問題です。而して國民全體――と云ふ中には婦人を含むこと勿論であります。從來の普通選擧論の多くに對して私が同情をもち得ないのは、婦人に選擧權を與へること卽ち婦人參政權の問題に冷淡だからであります。又婦人の側でも或一部の人々を除いては此自分自身の問題に頗る冷淡なことを、私は甚だ殘念に思ひます。普通選擧は文字通り普通選擧でなくてはなりません。婦人を除外した普通選擧は普通選擧ではありません。制限選擧の然かも甚だ不道理なものであります。もし制限選擧制度を維持するにしても、男女の性によつて區別を立てることは最早充分な理由がありません。況んや苟くも普通選擧と云ふ以上は、二十歲以上とか二十五歲以上とか云ふ年齡上の制限以外には、何等の制限何等の區別も不合理であります。男子のみの普通選擧と云ふのは言葉自身矛盾であります。

元來我々が普通選擧制度を主張し參政權を要求するのは何の爲めでせうか。これは決して各自の利益を主張し要求するのではありません。もしさう云ふ意味で普通選擧論をする人があるならば、啻にそれが理論上大間違ひであるのみならず實際上折角の普通選擧制度を弊害だらけにするものだと思ひます。選擧權とか參政權とか云ひますが、それは言葉上の便

宜上の話で、實は在來の樣な意味の權利ではないのでありま す。權利とは各人が自己の利益主張を法律の力によつて貫徹實現し得ること、と云ふ樣に今まで考へられて來ました。今日の權利思想が斯う云ふ考へ方の下に發達して來たことは著明な事實で、其意味で此考へ方の功績が認められねばなりませんが、併し時代は此個人主義的權利思想から更に一段の進轉を要求して居ます。權利は利益なり義務は負擔なり、權利者は義務者にあらず義務者は權利者にあらずと、權利義務を相容れざる對立と觀る思想は少しづつ、變化して來ました。而して將來あらゆる權利義務について大に變化せねばなりませんが、差當り此變化が特に著明な權利があります。それは親權であります。

親子間の法律關係は、子が親の所有物であると云ふ思想から出發しました。其觀念の下に於ける親權は「親の所有權」であります。其中にやがて子は財産ではなくて人格者だと云ふことが認められて來ました。併しまだ親に對する對等人格ではなくて被支配人格であり、即ち此意味での親權は「親の支配權」であります。これが從來の親權の觀念で、親權は即ち一般の權利並みに權利者の利益の主張と考へられ來つたのであります。所が近頃になつて段々と、親權は親の利益の爲めのものではなくて子の利益の爲めのものだ、と考へられる樣になりました。さうすると親權は文字通り「親權」ではなくて「親義務」だと云ふことになります。併し此義務は、親たる以上は當然盡さねばならぬものであると同時に、親のみが盡し得る義務であります。此義務を盡しつゝある親は、自分が親たる義務を盡すことは何人によつても妨げらるべきでないと主張し得ねばなりません。これが新しい意味での親權であつて、親權は即ち「義務を行ふ權利」であります。

私は、啻に親權のみならず、すべての權利が結局「義務を行ふ權利」なのだと考へたいと思ひます。併し他の權利については暫らく措いて、此種類に屬することの最も顯著な權利がモウ一つあります。それが即ち選擧權であります、參政權であります。參政權は自己の利益を主張する權利ではありません。國民としての義務を盡す權利であります。それ故にこそ選擧權については、丁度親權者が親權を拋棄することが非難されると同じく、棄權と云ふことが非難されるのでありま

す。而して參政權を與へられた者がそれを適當に行使しないことが非難されるならば、一人前の國民でありながら參政權を與へられない者があると云ふことは更に非難さるべき事柄であります。參政權を與へないと云ふことは、結局其人が國民たることを認めないと云ふことであります。私は我國現在の親權制度に就て甚だ不滿であります。我民法は父だけを親權者として、母は父が親權者でない場合に初めて親權者たるべきものとして居ります。これは正に母が親であると云ふ自然の大事實の否認であつて、これ程不自然なことはないと考へます。今普通選擧制度を採つて男には一般に參政權を與へようとしつゝ、女には參政權を與へまいとするのは、男だけを國民と認めて女を國民と認めないことであつて、丁度父だけを親と認めて母を親と認めないと同じ不自然であります。母の親たることが公認されねばならぬと同じく、女の國民たることが公認されねばなりません。參政權の要求は、自己利益の主張ではなくて、國民たる義務を盡させて與れと云ふ要求であります。これ程美しい要求がありませうか。これ程喜んで應じられねばならぬ筈の要求がありませうか。而して其要求が何故男だけの要求なのですか。何故に女の要求であつてはならぬのですか。

婦人參政權の要求に對する反對理由の一つは、婦人の能力が不足だと云ふことであります。さう云ふ論者は私の說を聞いて得意になつて云ふでせう。參政權が義務を行ふ權利ならば尙更其義務を行ふ能力のない者に與へる譯にはゆかぬではないかと。そこで私は反問します。選擧權の行使による參政と云ふことがそんなにむつかしいことなのでせうか。もしそれがそんなにむつかしい事とすれば、男には皆其能力があるのでせうか。義務と云ふものは能力がないと云つてそれを盡すことを努めなくてもよいものでせうか。而して義務を盡させることが其能力を發達させる所以ではないでせうか。婦人にモット政治教育を施してから、と論者は云ひます。成程婦人に――而して男子にも――政治教育の必要があることは、私も痛切に同感であります。而して選擧權を與へること其事が、最も手近で最も有效な政治教育の一手段であります。

反對理由の他の一つは、政治は婦人の仕事でないと云ふのであります。これは政治と云ふものを專門政治家の獨占事業

と考へた舊思想の餘波で、政治を國民生活其ものとしようとする普通選擧論と時代が違ひます。

右の議論と關聯して、參政は婦人の美しい性情を害すると云ふ反對論があります。これは男に支配させ女を服從させることが男の勇敢女の從順のそれぞれの長所を發達させる所以だと云ふ從來の考へ方でありますが、此考へ方に從つて數百千年やつて來た結果は、却つて各自の長所を發達させないで各自の短所を助長し、男を粗野ならしめ女を因循ならしめました。私が婦人に參政權を與へよと云ふのは、婦人の眞の美しさを發揮させたいからであります。元來政治と云ふものが殺風景になつたのは、男のみがそれに參與したからではありますまいか。私は婦人の性情の美しさが參政によつて損はれることを心配するよりも、政治の殺風景さが婦人の性情の美しさによつて美化されることを期待します。

こゝに一つさも尤もらしい議論があります。獨身婦人に選擧權を與へるはよからうが、妻には困る、夫と妻とが同一人に投票しては投票が二重になるし、夫と妻とが別人を選擧すると家庭の不和を醸す、と云ふのであります。これ程尤もらしくてこれ程間違つた議論はありますまい。斯う云ふ考へ方が嵩じると、例の戸主だけに選擧權を與へようと云ふ樣な時代錯誤な考案になるのであります。男女が夫婦になると兩人の人格が合一して――寧ろ夫の人格が妻の人格をカヴァーして――一人格になると云ふ考へ方は、以前法律上にも用ひられました。併しそれはもう今日の考へ方であり得ません。夫婦は別々な而して對等な人格者であります。別々な對等な人格者として御互の人格を承認尊重してこそ婚姻が眞の共同生活なのであります。夫婦とか家とかはそれが又社會上の一單位には相違ありません。併し國民と云ふのは一人々々の夫、妻、戸主、家族であります。既に國民全部に參政權を與へることを精神とする普通選擧制度を採らうとする以上、戸主に與へたから家族には與へなくてよい、夫に與へたから妻には與へなくてよい、と云ふ理窟の餘地は斷じてありません。普通選擧に於ける投票方法は勿論無記名秘密投票でせうから、夫婦互に相談せずにそれぞれ自分が適當と思ふ候補者に投票するのが一番よいでせう。併し或は相談して意見が一致すればそれも結構ですし、又意見が一致しなかつたからと云つて

其爲めに破れる樣な夫婦仲ならば外の原因でもこはれませうそれまでの心配には及ばぬことです。

其他婦人參政權の弊害を色々並べ立てる人もありませうがたとへさう云ふ弊害があり得るにしても、それは多く普通選擧其ものゝ弊害であつて、婦人をも加へるによつて、事によつたなら緩和されるかも知れないものではありますまいか。普通選擧にも成程弊害方面がありませう。併し普通選擧は進歩せる國家の當然の要求であります。弊害があるからと云つて止むに止まれぬ要求であります。行はずして弊害を避くべきでなく、行つて弊害なからしむべきであります。今婦人を無視して男子のみの普通選擧を行つたならば、普通選擧元來の弊害の上に更に一つの大弊害の種を蒔くことになります。それは外でもない、男女間の階級鬪爭であります。

斯う云ふ事を云ふ人がありさうです。西洋諸國だつて先づ男子のみの普通選擧を認めたのであつて、婦人參政權は極めて最近になつて認めたのもありまだ認めないのもある次第ではないかと。さう云ふ議論をする人は多く平生は西洋の眞似などする必要はないと云ふ口癖の人なのですが、こゝは一つ其口癖で西洋の眞似などする必要はないと云つて貰ひたい所です。西洋諸國は婦人參政權を後廻しにした爲めに、苦い經驗を嘗めました。そして結局婦人にも參政權を與へねばならぬものと數へられました。この前車の覆轍を履む必要がどこにありますか。男子に普通選擧權を與へて婦人には與へぬことは、第一の普選運動を免かれて第二の普選運動を惹き起すものです。而してこの第二の普選運動は正に男子と女子との階級鬪爭であります。我國の婦人はイギリスのサフラジエツトの樣な亂暴はしますまい。併し男子のみが勝手な政治をし勝手な法律を造ると云ふ感じを婦人に抱かせることは、抑も國家社會の破綻であります。私はすべての階級鬪爭を惡くみます。併し遺憾ながら既に發生して居る階級鬪爭の事實を否認する譯には行きません。唯だせめてモウ一ツの更に一般的な更に深刻な而して國家社會に取つて更に致命的な階級鬪爭――即ち男と女との爭ひ――だけは、其端緒だけでも開きたくないものと切望して居ます。

序に被選擧資格のことも一言しませう。婦人に選擧權を與

へる以上、國會議員市町村會議員としての被選擧資格を婦人にも與ふべきことは當然であります。私は元來すべての職業について男に限る女にはなれぬと法律制度上きめてあることを不必要なことだと思つて居ます。勿論婦人が男子のやるすべての職業に就けと云ふのではありませんが、それに適しそれを望む婦人があるのを妨ぐべきではありません。議員は專門政治家ですから、今の所婦人が一般にそれに適するとは思はれません。併しそれに適する婦人が出たら歡迎すべきだと思ひます。元來が選擧ですから、衆目の見る所衆指の指す所に從ふべきです。被選擧資格なるものは原則として制限すべきものでありません。

こゝに頗る皮肉がつた冷笑があります。我國の婦人はまださして選擧權を要求して居ないではないか、男の方から持出すには當らない話だと。私は最も此考へ方――男と女とを對抗的に取扱ふ考へ方――を惡くみます。故に聲を大にして今一度云ひます。私が婦人參政權を要求するのは、婦人の爲めのみに要求するのではありません。國民全體の問題として國民全體の爲めに要求するのです。折角の普通選擧を眞正の普通選擧たらしめんが爲めに要求するのです。婦人を除外した普通選擧は眞正の普通選擧でありません。私は國民の重要なる一半を國民として取扱はない制度に賛成することは出來ないのであります。

社會學者の女人崇拜

米田庄太郎

一　緒言

夫れ女人崇拜は人類發達史上或は文化發達史上の重要なる一事實にして、之を一般的に理解することは、社會學上の重要なる一問題であり、又之を一般的に評價することは、文化哲學上（一層詳しく云へば歷史哲學上）の興味深い一問題である。併し余は此處では、此の問題を社會學上から見て、一般的に理解しようとするのでも、亦文化哲學上から見て、一般的に評價しようとするのでもない。余が今日此の問題に就て有する事實的知識は、社會學及び文化哲學の何れの方面から見ても、一般的な研究を企だてるには、尚ほ甚だ不充分である。それで、此處では只近代人の女人崇拜に就て、科學的に少し論究して見るに止めるのであるが、尚ほ近代人の女人崇拜に就ても、余は之を一般的に論究するには、矢張り充分な事實的知識を有つて居ないので、只特殊的或は、個別的一研究を述べるだけに止める。而して余が此處に特に個別的研究の題目として選んだのは、社會學の創設者、或は少なくも其の最も重要なる先覺者と認められる、オーギユスト、コントの女人崇拜である。要するに女子は全體としては男子に劣り、隨ふて男子に服從す可きものなるを大に主張して居たコント

が、晩年に至つて女人を崇拜するに至れる過程を研究して、以て近代人が女人を崇拜するに至る過程の一類型を、理解したいと思ふのである。但し余はコントが女人を崇拜するに至れる過程を以て、近代人の女人崇拜の唯一の過程と見るのではなく、只其の一類型と見るだけであるのであるから、讀者は此の點に就て誤解されない樣、特に注意して置く。尙ほ本論文は、余のコント研究の一副産物であることを附記して置きたい。

二　コントの思想生活の發達の三期

コント(1798-1857)の思想生活の發達は、一般に三期に分たれて居る。第一期は準備時期とも云ふ可きものにして、千八百二十六年彼が精神病に罹れる時までの時期である。此の時期は又彼の著作の上から見て、小冊子(les opuscules)の時期とも云はれて居るので、而して此等の小册子の中で殊に重要なるは、彼が後に「實證政治體系」第四卷に、附錄として編入せる六小册子である。殊に其の中の第三小册子「社會改造の爲めに必要なる科學的仕事の考察」(Plan des travaux nécessaires pour réorganiser la société)にして、此の著作によりて彼は始めて學界に名を知られたのである。又此の著作は、彼の大著作「實證哲學講義」の半以上を占むる社會學の根本思想を、大體上含蓄して居るので、彼の社會學の發達を研究する爲めには、甚だ重要なるものである。而して本書はコントが二十四歲の時に著述したのであるから、之れによつても彼は如何に早熟の天才家であつたかが、推察されるのである。尙ほ近來エネルギー哲學の大家或は其の創設者とも云ふ可きウイルヘルム・オストワルト氏(Wilhelm Ostwald)が本書の現代的重要を認めて、千九百十四年に自から之を獨譯し、且つ序論と附註とを加へて出版して居るのを見ても、(Auguste Comte, Entwurf der wissenschaftlichen Arbeiten welche für eine Reorganisation der Gesellschaft sind. Deutsch herausgegeben, eingeleitet und mit Anmerkungen versehen von Wilhelm Ostwald.) 本書の價値が推察されるのである。

コントの思想生活の第二期は、彼が精神病から快復して、實證哲學の講義を再始した千八百二十九年（但し彼は千八百二十六年に、同講義を始めて間もなく精神病に罹つたのである)、及び「實證哲學講義」(Cours de Philosophie Positive)第一卷を公にせる千八百三十年より始まり、クロチルド・ヅ・ヴォー夫人(Madame Clotilde de Vaux)を熱烈に戀愛し始めた千八百四十五年を以て終ると見做し得られる。此の時代は又彼の著作の上から見て「實證哲學の時期」と稱せられて居るので、彼は「實證哲學講義」第一卷を千八百三十年に公にして以

來、其の最終卷、第六卷を千八百四十二年に公にするまで、實に其の間十二年を同書の著述に獻けたのである。而して同書は實證哲學を、始めて組織的に詳論したものとして、哲學史上コントの名を不朽ならしめたもの、又同書の第四、第五及び第六の三卷は、社會學を始めて組織的に詳論したものとして、後の社會學者をして、コントを以て社會學の創設者、或は少なくも其の最とも重要なる先覺者と認めしめたものである。

コントがクロチルド・ヅ・ヴォー夫人と相識り、熱烈な戀に陷つたのは、千八百四十五年にして、彼が四十八歳の時であつたが、此の頃からして彼の思想に於ける重大なる變化は、著しく現はれて來たので、吾人は此の頃からして彼は其の思想生活の發達の第三期、即ち最終期に這入つたと見做すことが出來る。而して此の期間に彼は彼の第二の大著作「實證政治學體系、或は人道敎を設立する社會學書」(Système de Politique Positive, ou Traité de sociologie instituant la Religion de l'Humanité, 4 vol.) 四卷千八百五十一年より、每年一卷づつ千八百五十四年までに公にしたので、それで此の第三期は、「實證政治學の時期」とか「人道敎の時期」とか稱せられて居る。

コントの思想生活の發達は、以上述べしが如き三期に大別されるのであるが、今第一期と第二期との間には、つまり後者は前者に於て立てられた社會改造案の、理論的基礎の方面の計畫を遂成せるものとして、完全なる統一が認められるので、兩者の統一性に就ては何人も疑はない。然るに第二期と第三期との間には、果してコント自身の考へしが如くに、實質的統一が認められ得るや否やと云ふ問題、換言すればコントの實證哲學と人道敎との間に、コント自身の考へしが如き、本質的統一性が存するや否やと云ふ問題は、コント在世の時からの一大問題である。而して此の問題は社會學史の研究に於ても、重要なる又興味ある一問題である。併し此處に是れを詳しく論述する暇はなく、又其の必要もないと思ふが、しかも此の第二期と第三期との思想の間に、少なくも其の外觀上如何なる特質的差異が存するかを、大體上理解して置くことは、第二期に於けるコントの女人思想と、第三期に於ける彼の女人思想との、重大なる差異を會得する爲めに肝要であると思ふ。

三　第二期の思想と第三期の思想との差異

却說コントは彼の思想生活の第三期に於て、彼の社會改造論の根本的方針を確立したのであるが、此處に其の要旨を簡

單に述ぶれば左の如くである。

夫れ社會の發達を根本的に規定するものは、思想の發達である。而して思想の發達は先づ神學的階段から始まり、次に形而上學的中間階段或は過渡階級を通過して、實證學的階段に達するものであるから、社會の指導は先づ僧侶の手によりて行なはれ、次に形而上學者の手に移り、最後に實證科學者殊に實證哲學者の手に委ねらる可きである。然るに今や神學的體系は形而上學によりて破壞され、而して形而上學は其の本來の使命を果したが、まだ實證哲學は建設されて居ないから、思想發達の自然法則上、今や全く無意味となれる神學的體系が、一時的である可きであるが、とにかく勢力を恢復し又其の本來の破壞的使命を果したる後は、當然消失す可き形而上學が、尙ほ勢力を振うて居る。是れ今日の思想界が混亂し、隨ふて又社會が紊亂して居る所以である。されば今日社會を改造せんとするに當て、吾人の先づ着手す可きは實際的仕事ではなくして、思想及び科學の改造、卽ち實證哲學の建設、殊に其の冠冕たる社會學の建設である。而して社會改造の實際的仕事は、其の理論的仕事卽ち實證哲學の建設が完成されたる時に、始めて着手さる可きである。

コントは其の思想生活の發達の第一期に於て、彼の社會改造論の根本的方針を右の如くに決定し、又其の理論的仕事の大體上の輪廓、卽ち實證哲學及び社會學の一般的計畫を立てたのである。而して彼は其の思想生活の發達の第二期に於て、右の實證哲學及び社會學の一般的計畫を、さきに述べし「實證哲學講義」六卷に於て、組織的に詳しく實現したのである。されば彼の思想生活の發達の第一期と第二期との間には、完全なる統一が明らかに認められるので、此の二期間に於ける彼の思想の發達の統一性に就ては、何人も之を疑はない。而して此の二期間に於ける彼の思惟の基調は、つまり知力が感情及び想像を、或は知が情を支配しつゝ、行動を組織して行くのを以て、人類の發達、社會の進歩と見ることである。彼の有名なる精神發達の「三階段の法則」なるものは、つまり右の思想に基いて立てられたものである。

然るにコントは其の思想生活の發達の第三期に入りてより其の根本思想に於て、少なくも外觀上重大なる變化を示して居る。彼は第二期に於ては、上に述べし如く、つまり知が情を支配して、行を組織し行くのを以て、人類の發達社會の進歩と認めたのであるが、然るに第三期に於ては、情を以て知を組織して行を調整すること、或は情操を以て科學を組織し、實際的生活を調整することを以て、社會改造、人類の進歩の根本義と見て居るのである。而して彼は第二期の見方或は方法を客觀的方法と稱し、第三期の見方或は方法を主觀的方法

と稱して居る。又前者を知の方法、後者を情の方法或は愛を原理とする方法と稱して居る。此くて彼は第三期にありては知或は科學に於て精神生活を統一せんとしたるに對して、第三期にありては先づ情或は道德に於て、之を統一せんとし、他人を愛し、他人の爲めに生活すると云ふ人道主義を、其の根本原理としたのである。而して第二期に於て立てた彼の有名なる學問の位階的體系、(數學、天文學、物理學、化學、生物學、社會學)にありて、其の最上位を占むる處の社會學の上に更に倫理學を加へ、下位の諸學問を統一する社會學の上に位して、更に社會學をも統一するものとして、倫理學を認めたのである。されば今や倫理學が眞の最後の學問となり、一切の他の諸學問はつまり倫理學の準備に外ならぬものとなつた隨ふて又倫理學は政治學及び政治術を同時に支配するものとなつた。

併しコントは人生の倫理的統一を以て滿足しなかつた。而して彼の主觀主義、主情主義は更に進んで、人生の宗敎的統一を求め、此處に明らかに神祕主義に化したのである。コントの宗敎と云ふは、要するに完全なる感情的、知力的及び道德的統一の狀態を意味するものにして、而して彼は實證主義は結局此の如き意味の宗敎となることによりて、人類の歷史上是れまでに發達せる一切の宗敎にとり代はる可きものと考へたのである。(但し實證主義と云へば、一般に理論的實證哲學と同意味のものと解されて居るが、コントの實證主義と云ふは啻に理論的實證哲學を意味するだけでなく、更に彼の主觀的な所謂實證的道德、政治及び宗敎をも意味するものである。此くて彼は第二期即ち實證哲學の時代に於ては、常に實證哲學と云ふ語を用ひ、實證主義と云ふ語は殆んど用ひて居ないが、然るに第三期に於ては盛んに實證主義と云ふ語を用ひて居る。それで吾人は第二期を實證哲學の時代と稱するに對して、第三期を實證主義の時代と稱することも出來るのである)。併しコントの實證主義的宗敎は、神も天啓も認めず、大實在者としての人間或は人類(l' Humanité)を崇拜の對象となすものにして、此くて彼は之を人間敎(或は人類敎或は人道敎、la religion de l' Humanité)と稱して居る。而して彼は其の禮拜、敎義及び制度を、加特利敎に準じて詳しく規定し、制定して居るので、此くて彼の社會學は人間敎の建設するもの(Traité de Sociologie, instituant la religion de l' Humanité)となつたのである。

コントの神祕主義は、彼の最後の著作『主觀的總合』(la Synthèse Subjective, 1856)に於ては更に進み、人間敎は新呪物敎(le neo-fétichisme)となつて居る。彼は人間或は人類 l' Humanité を大實在者として活物化するのみならず、地及び星

辰を活物化し、又法則を運命の名の下に活物化し、空間を大圜境(Grand-Milieu)の名の下に活物化して居る。而し大呪物たる土地、大實在者たる人間、及び大圜境たる空間は、實證的三位一體(la Trinité positive)となつて居る。

要するにコントの思想生活は、第二期に於ては客觀的、實證的、科學的であつたが、然るに第三期に於ては主觀的、倫理的、宗教的、神祕的となつて居る。然らば此の如き變化は、如何にして生起したか。其の深い原因はコントの性格及び生活事情に潛在すると思はれるが、併し其の直接の原因は、クロチルド・ヅ・ヴォー夫人との關係より生ぜる、女人崇拜的傾向に在ると思はれるのである。併し余は之を論究するに先たち、尙ほ特に第二期に於ける女性思想と、第三期に於ける女性思想との重大なる差異を述べ、又クロチルド・ヅ・ヴォー夫人に對するコントの熱烈なる戀愛の事實及び其の特質を研究し、夫れよりして、右の戀愛の特質が、コントの其の後の精神的生活の發達に如何なる影響を及ぼしたかを、究明したいと思ふ。

四　第二期に於ける女人輕視と第三期に於ける女人崇拜

今コントは彼の思想生活の發達の第二期に於ては、女人に對して如何なる思想を抱いて居たかと云ふに、夫れは「實證哲學講義」第四卷第五十講中の家族論に於て、包括的に論述されて居るから、此處に其の論述の大要を約述することゝする。

夫れ家族の社會學的理論は、つまり二種の關係の吟味に歸着すると認められ得る。其の一は男女の從屬關係にして、是れ家族を構成するもの、其の二は年齡の從屬關係にして、是れ家族を維持するものである。而して結婚制度の精神は、何れの時代にありても、つまり女子を男子に從屬せしめることに存する。此の事は生物學的哲學が、總ての動物の種に於て存する、殊に人類に於て存する身體的及び精神的差異を解剖學的吟味及び生理學的觀察によりて證明して居るので、所謂男女の平等なる思想は全く謬見である。實證的生物學は、あるが如き人類の構造に於ては、根本的に女性を男性に比して、種屬の理想的類型から遠ざける一種の幼年者の狀態にあるものとして、證示する傾向も有する。社會學は此の科學的評價を補充し、家族内に於て男女が各々遂行す可き任務を特質附けることによりて、男女の理想的平等と一切の社會存在との矛盾を示すであらう。男女が平等であるとすれば、一切の社會的存在は不可能であるであらう。而して人間の構造に關する社會學的吟味によりて、吾人の學び得たる事は、吾人をして

右の如き哲學的考察を大體上遂行させることが出來るので、吾人は其の社會學的吟味によりて、社會的見地より見れば、女性有機體は一方に於ては根本的に劣つて居ること、及び他方に於ては第二次的に優れて居ることを覺るのである。先づ感情的諸能力が優勢を振ふといふことは、人類にありては他の總ての動物に於けるほど著しくはなく、而して思惟的活動の一定の自發的度合は、人間の主要なる腦髓的屬性を成すものにして、隨うて又社會的有機體の特質の淵源を成すものであるが、今此の點に於て女子が男子に劣つて居ると云ふことは、何人も爭ひ得ない。女子は其の知能の本有の力が、男子に比してより弱いが爲め、或は其の道德的及び身體的感受性が男子に比して一層强いが爲め、知力的仕事を持續的に又大なる强度に於て遂行するには、男子よりも劣るのである。尙ほ藝術に關しても、經驗は女子が男子に比して著しく劣つて居ることを確定して居る。而して政治或は統治の機能に關しては、其の最とも進歩的な家族の統治に於て見るも、女子の不適當なることは、更に著しく認められる。蓋し統治の仕事の性質は甚だ複雜なる諸關係の總體に注意を拂ひ、其の何れをも看過してはならぬことを要求し、又同時に感情、熱情に對して、知力が大に獨立性を保持すること、つまり多大の理性を要求するからである。此くて女子は指揮、命令するには適しないが、併し服從することには勝れたる性質を本來具有して居る。女子の主要なる力は、服從の困難に打ち勝つにある。而して女子は男子よりも遙るかに强き他愛的傾向を具へて居る。女子は知力及び理性に於て男子に劣るが、同情及び社會性のより大なる發達によりて、男子に勝れて居る。此くて家族に於ける、隨うて又社會に於ける女子の任務は、社會的本能を大に發動させることによりて、男子のあまりに冷たき或はあまりに粗野な理性の方向を改變するとにあると、認めらる可きである。要するに性慾本能の結果として、男女兩性間に持續的關係が成立しなければならぬとすれば、夫れは女子が男子に服從することによりて成立す可きである。尙ほ其の優勝なることによりて、自然に命令する首領を有することが、一切の社會の存在の一條件であるので、而して男女の兩性の中で、一が他に勝れて居なかつたならば、家族は到底成立し得ないであらう。今日若し男女の同權を認めるとすれば、家族は破滅し、隨うて社會も破滅するであらう。

コントは彼の第一の大著作「實證哲學講義」に於ては、女子に對して右の如き思想を抱いて居たのである。而して彼が親しく文通して居た、又物質的に援助を受けたこともある英國の大哲學者、ジョン・スチユワート・ミルとの親交が薄らいだ一原因は、兩者の女子に關する意見の差異にあるとも云は

れて居るが、要するにミルは女子が男子に劣つて居るのは、其の本有の性質に基づくのではなく、男子が腕力を濫用して女子に加へた壓迫の結果に外ならないので、此の壓迫から解放すれば、女子は男子と、同等な發達をなすことが出來る、隨うて將來の社會に於て、女子は男子の有すると同等の權利を有す可きものであると主張したのに對して、コントは女子の劣性は其の生理構造に基因する本有的なものにして、女子は男子に服從す可きものであり、而して文明が如何に進步するとも、兩性間の此の關係は持續しなければならぬものであるから、女子が其の服從の地位をよく承認し將來の社會に於ても、其の活動を傳說的に認められたる任務に限ることは、男女兩者の爲めに最善であり、又最とも望ましきものなるを、强く主張したのである。

却說コントは其の思想生活の發達の第二期に於ては、女子に關して以上述べしが如き見解を抱いて居たのであるが、然るに其の第三期に於ては、さきに述べし如く、彼の思想の根本的方針に重大なる變化が生ぜしと共に、女子に關する思想も驚く可き變化を示して居る。而して其の原因に就ては後に詳しく論究したいと思ふから、本節に於ては只彼の女子に關する思想が、如何に變化したかを簡單に指示するだけに止めるが、余は此處に先づ彼は將來の社會に於て、如何に重大なる任務を女に認めたかを述べ、次に人道敎或は人間敎に於て、女性に如何なる地位を認めたかを述べて置く。

さきに述べし如く、コントの思想生活の第二期に於ては、其の根本的方針はつまり理性が心情を、或は智が情を抑制して發達することを以て、人類の發達の眞髓と認めることであつた。而して彼は女は理性或は智力に於て、本來男に劣るものと考へたから、心靈的或は精神的支配(Pouvoir spirituel)に於ては、其の本來勝れたる同情性及び他愛性によりて、男の活動を寛和すると云ふが如き只第二次的な重要を、女に認めるだけであつた。然るに第三期に於ては、コントの思想の根本的方針は、矢張りさきに述べし如く、第二期に於けるとは反對に、心情或は情によりて、理性或は智力の働きを調整し、組織することを以て、人類の進步の眞義と認めて來たから、此處に心靈的或は精神的支配に於ても、女子に重要なる地位が認められて來た。彼は『心情の組織的勢力に基いて、健全なる哲學の全體を建設するに當つて、吾人は直ちに女子が新しき精神的支配力の本質的一部分を、構成することを求めるのである』と云うて居る。而して彼は如何なる精神的改革も、觀念の組織化が感情の組織化に到達する時に非らずば決して眞に社會を更生させ得るものでないが、然るに感情の組織化を遂成するものは、實に女子であることを說いて居る。

彼は又「只女性要素のみが、理性及び行動の常に普遍的愛に從屬することを、自發的に保證することによつて、有機的衝動をして其の眞性の發揮を可能ならしめるであらう」と述べて居る。要するにコントの考へる處によれば、女子は社會性をして個人性を支配させるものであるが故に、眞に男子に勝るものである。而して將來の社會に於ては、女子は先づ第一には母として、次には妻として、人類の道徳的教育を司るであらう。女子は調整力にして、而して哲學者は女子に接して、己を鍛へ、又氣力を恢復するであらう。更にコントは一歩進んで、女は「人類」の自然的女祭司であるであらうとまで云うて居る。而して彼の實證的宗教の禮拜は、多くの點に於て、女性によりて象徴化されたる「人類」を、崇拜することに歸着して居るのである。それで余は次に、コントは彼の實證的宗教即ち人類教或は人道教に於て、女性に與へたる地位を稍々詳しく述べることにする。

今コントは彼の人類教を、加特利教に準じて、禮拜と教義と制度との三部に分つて居るが、此處に彼が女性に認めたる宗教的地位を示さんとするに當つては、只禮拜の部を考察すればよいのである。而して其の禮拜の部も、更に私拜と公拜とに別たれ、尚ほ私拜は個人的禮拜と家庭的禮拜とに別たれて居るが、此處には只個人的禮拜に就て述べるだけに止める。蓋しコントが女性崇拜の主旨を、特に明白に表示して居るのは、個人的禮拜に於てゞあるからである。

夫れ社會崇拜(人類教の禮拜)の直接的基礎は個人的禮拜であるが、個人的禮拜は總ての眞實なる女子の有する「人類」の代表者或は表現者となり得る内有的能力に基いて、女性を眞心から尊崇することによりて、先づ第一に特質附けられるのである。抑々存在の最高形態は複合的なものであるから、夫れは人格化され、或は人間に擬せられるに非らずば、到底理解され、感賞されることは出來ない。而して「人類」の總ての眞實なる下隷は、各々其の勝れたる屬性の力によりて、種々なる度合に於て「人類」を代表或は表現することが出來るが、併し同情心は統一の大源泉にして、而して夫れは又女子に於て最とも強いのであるから、女子は愛を以て其の存在の基礎となす實在者の、最善の人格化或は代表者である。家族觀念の自然的發現たる只女子のみが、何れの集團的存在をも適當に表現し、代表し得るのである。而して種屬本能は、女子がまだ「人類」の代表者たる資格を、認められるだけの尊敬を得て居なかつた時代でも、女を「國」の象徴としたので、吾人は今尚ほ母國と云ふ語を用ゐて居る。

されば吾人は女子に於て「大實在者」の總ての下隷が、各々の社會的任務に對して、己をよりよく適するものとなす爲め

に、常に其の元氣を恢復する私的源泉を與へられて居るので、日常生活の仕事は、夫れは研究であらうとも、亦實際的活動であらうとも、女子の具體的形態に於ける「人類」の崇拜から生れる理想的生活を、屢々回想することを必要とする。若し然かせざるに於ては、吾人は吾人の義務と幸福との、最とも健全なる基礎を失なふのである。而して右の必要は其の本質上、其の適當なる滿足を得る爲めに、家族から選び出されたる一の典型を求める。但し家族がかゝる典型を供給しない例外の場合には、他の場處から「大實在者」の適當なる代表者を求めねばならぬが、一般に吾人は家族から右の選擇をなすに困難を感じない。是れ家族は各人に對して、彼の一切の愛情の中心を、各人にありて必然的に「人類」の最初の體現者たる母に於て、提供するからである。實證主義は母に於て「人類」の組織的崇拜が築き上げられる、第一次的基礎を求めるので、母は其の保護者及び模範としての二つの任務を常に行なふことによりて、一般に吾人の最高守護者の地位を占む可きである。

　右に述べし如く、母は「人類」の殊に勝れたる形像であるが、併し只母だけでは「大實在者」の一般の代表者としては、尚ほ充分でない。是れ母は直接には只尊崇の念を起させ、只過去との吾人の關係を表現するだけであるからである。而して將來及び現在を代表し、表現する爲めには、吾人の崇拜の第一次的目的物としての母の外に、更に同じく家族から選ばれる二つの補助者、妻と娘とが必要である。卽ち妻は愛者心を養ふ爲めに、又娘は慈愛心を養ふ爲めに必要である。此くて個人的禮拜は他愛心を構成する三つの本能、家族の運營、及び社會的關係の全體（優者、同等者及び劣者に對する吾人の關係）を體現し、聖別するのである。併し「大實在者」の此の三重代表或は三重表現を判明に調整する爲めに、吾人は常に母の形像に優位を認めねばならぬ。而して此の如く必然的に母に認められる優位は、つまり主觀的合一に於て、其の最とも單純な最とも完全な形に於てすらも、他の合一に於けると均しく、總ての種類の團結に共通する處の、一の位階的秩序の必要が存することを示すのである。

　如上の構想の遂行は、又吾人をして、私的禮拜が其の完全なる均衡に達した時期に於て、三つの典型の各の狀態が、正常的には如何にあるかを理解せしめるが、夫れは普通には吾人が充分成熟の年齢に達するまでは現はれないであらう。而して吾人が其の年齢に達する頃には、母は一般に死去して居るので、其の典型は主觀的であり、娘は生存して居るから、其の典型は客觀的であり、妻は主觀的又は客觀的の何れでも同樣にあり得る。併し三者の關係者の右の自然的混合は、決して腦髓に於ける私的禮拜の結果を弱めるのではなく、却て之を强めるもので、主觀的要素は之を淨化し、而して客觀的要素は之れに生氣を與へるのである。

今さきに述べし例外の場合に於ては、第一に家族は其の構造上、其等の三つの一般的典型の何れかの缺乏を補なふ手段を呈供する。是れ私的禮拜は、其の正常的組織に於ては、姉妹を看過して居るからである。但し姉妹の地位が、一般に明確性と固定性とを缺いて居ることは、三つのより多く自然的な守護者の何れの地位を占める資格をも、姉妹に與へないのである。併し其の地位の不決定的、曖昧なることは、又姉妹卽ち女性典型中其の判明性の最とも小なる典型をして、必要に應じて他の三典型と聯合せしめ、其等の三典型の影響を强めさせることが出來る。かくて母、妻、或は娘が缺ける例外の場合に於ては、姉妹は三者の何れの地位をとるにも同等に適し、以て其の缺乏を補なふのである。されど此の代用によりても、吾人は西歐に於ける無政府狀態の完全なる終止の後でも、起るであらう處の一切の不正常狀態に、應ずることは出來ないであらう。而して吾人が主觀的家族の正當なる構造に比適する精神を有するならば、吾人の私的禮拜に本質的なる一切の典型を、已を得ず家族外に求めねばならぬ極端な場合があるであらう。各者の典型は普通に三つの正常的守護者の各々の周圍に集まる處の、心靈的か又は現在的かの保護者、同盟者或は從屬者の間に見出され得るのである。

人的禮拜の此の體系に於ては、過去も亦將來さへも、併し殊に過去は禮拜の性質に適合するだけ、又其の目的によりて要求されるだけ、充分に表現されて居ない。而して其の主觀的完成に對する第一の貢獻として、余輩は加特利敎が洗禮名に關して立てた計畫、卽ち夫れが崇め得る最高の諸典型の特別の尊敬の爲めに、其等の諸典型に洗禮名を獻げることによりて、有益なる目的に之を運用せんとする計畫を、組織的に採用し、且つ一層完成したいと思ふ。此くて中世紀の僧侶が創始せる守護聖徒制度は、其のまゝに、併し最とも完全に、社會崇拜に適用されるのである。是れ只社會崇拜のみが、其の制度の適用を、吾人の總ての祖先に擴張し得るからである。

今吾人は個人的禮拜によりて、『大實在者』の眞の下隷となるだけ高められたとすると、吾人が正當に認めらる可き不滅性は、吾人を助けて之を獲得させた聖徒に推し及ぼされるであらう。かくて其等の聖徒は、將來の諸世代の最とも高尙なる要素中に攝取せられ、將來の世代の最善の成員から、日々の禮拜を受けるであらう。而してかゝる豫想は今日に於てすら、吾人自身の最とも內面的な禮拜を繼續す可き總ての吾人の繼承者に對して、個人的同情を抱かしめる。吾人自身の最とも內面的なる禮拜が、吾人の上に有益なる影響を及ぼす力に關する吾人の感じが大なるほど、吾人は夫れが吾人の死後存續することを愈々多く望み、又其の存在を延長する後代の人々に對して、愈々强く愛情を感じなければならぬ。而してかゝる延長に對する正當なる希望は、後代の人々の爲めにする吾人の奉仕を、殊に獎勵するものであらねばならぬ。蓋し吾人は後代の人々から報酬を期待するが、其の報酬は直接に吾人自身に與へられのでなく、吾人が依て以て尊敬されるものとなつた大型に與へられるほど、夫れは愈々純潔なるもの

になるからである。

今日にありては、かゝる報酬は只非凡な功績にのみ與へらる可きものと考へられて居る。是れ實證的宗教以外の如何なる宗教か、社會的感謝の念に組織的に訴へることによりて、其の當然の影響を推し擴めることが出來ないからである。併し利己的禮拜より生ぜる習慣が、社會崇拜によりて作られたる習慣及び感情によりて壓倒された時には、「人類」の總ての員の下隷は、此の正當なる報酬を望むことを許されるであらう。但し彼等の奉仕に對する感謝は彼等自身の光榮の本源に逆つて行くのである。

　個人的禮拜に對する右の必要なる附加物を、充分に評價する最後の助けとして、吾人は女子は基本的守護の本質的一要素であることを忘れてはならぬ。女子は男子よりも自己犧牲の魅力を一層鋭く感ずるものにして、隨うて主觀的不滅の慾望を感ずると男子よりも少ない。實に女子は榮譽に對する一切の直接的要求の本源たる公的生活から、一般に除外されて居るから、不滅の慾望を抱くことを、本來許されないものの如くにさへ見えるのである。併し女子は高尚なる永久性の奉引を、個人的には全く感じないものとするも、女子の同情の本能は、女子をして女子の道德的祐助が、只其の直接の目的物たる人々にのみ限られずして、遠く推し擴められることを願望させる可きである。されば總ての女子は其の神聖なる奉仕の直接の報酬以上を望み、又之れに加へて其等の奉仕を無限に擴張せんとする希望を養ふであらう。是れ女子が直接にはなし得ない處の、理論家或は實際家の奉仕に屬する不滅性に、女子が間接に參加する形式である。「大實在者」が其の最とも重要な、又最とも困難な任務、卽ち其の總ての下隷或は信奉者を養成する任務を託するのは、女子に於てゞある。各女子は結局其の仕事によりて判斷されるであらう。而して各女子は、如何に結果の種々不完全なる中に、訓育の功績を辨別す可きかを知るであらう將來の世代によりて其の仕事に認められる不滅性を分有するであらう。

　却說余は以上述べ來りし處によりて、コントの人類教に於ける女人崇拜の意味を、大體上說述したと思ふが、之を彼の思想生活の第二期に於ける女人思想と比較すると、吾人は兩者の差異の甚大なるに驚かざるを得ないのである。然らばコントの女人思想は、如何にして此の如き甚大なる變化をなしたか。其の深い原因は彼の人格や、彼の生活事情に在ると思はれるが、彼れ自身は之をクロチルド・ヅ・ヴォー夫人に獻げたる愛情の影響に認めて居る。而して少なくも其の顯著なる直接原因は、コント自身の告白する如く、同夫人に對する彼の戀愛の影響にあることは疑はれない。夫れで此處に先づ右の戀愛事件と、夫れがコントの精神生活に及ぼせる影響とを考究し、更に夫れより五十に近い年齡のコントが、如何にしに同夫人に對して、さほどに熱烈なる戀愛を感ずるに至れるかを、彼の性格及び彼の生活事情に就て、深く探究して見たいと思ふ。（以下次號）

コロンタイ女史の「家庭解放論」

尾瀨敬止

一

コムミユニズム的國家においても家庭は保たれるでせうかその家庭は現在行はれてゐる通りのものでせうか。この問題は、勞働階級にゐる多くの婦人を苦しめ、また、彼等の配偶者である男子をも惱ましてゐます。ことに勞働婦人は、自分の目の前で生活が改められ、今日までの風俗や習慣がなくなり、無産階級的家庭の全存在が、他の新しくてまだ試みられないものに――つまり、ある人達が期待する(不可思議な)ものに積上げられやうとしてからは、今言つた問題を屢々考へるやうになりました。それも、サウエート・ロシヤで離婚といふことが簡單に出來るやうになつてからは、もつと〳〵研究を進めるやうになりました。さる一九一七年十二月十八日附の國民委員會布告によりますと、離婚は金を持つてる者ばかしの遊戯では無くなつたのです。けれども、勞働婦人が、醉つぱらつたり打ちのめしたり亂暴をしたりして妻君をいぢめる夫の手からはなれるには、五月や六月ぐらゐ經つたとか無理な註文かも知れません。ひよつとすると何年といふ年月が要かるかとも思ひます。しかし、今日は離婚が、雙方の承諾さへあれば一週間か二週間で許可が下りることになりました。たゞ、從來の家庭で甘んずる婦人達を眞に幸福にした此の離婚の簡單といふことは、どの婦人をも――特に男子を養育者又は生活的唯一の支柱であるとは知ても、その生活上の支柱を他の別な方面で、つまり、男子からではなくて集合團體もしくは國家から求めるもの、とは知らない婦人たちを吃驚りさせました。

眞理を覆ふことは出來ません。夫が主人であつて養育者でもあり、妻は自分の意志も自分の金錢も自分の時間をも有た

ず、只もう彼に從ふやうな從來の傳統的家庭は、私たちの目の前で改められました。と言つたとて何も慌てるには及びません。もつとも、ロシヤ婦人の無自覺で無智であることは私たちの見慣れた家庭を一變することが難しいと考へさせるかも知れません。これは無理もない話ですが、さう言つた理由は立派に立つのであります。もし古人の生き方を尊重するならば、すべての物が改められて、今日のやうな精神も、今日のやうな國家組織も今日のやうな習慣も、みんな放任しては置けないことがハッキリするでせう。家庭生活は、いろ〳〵な時代を通る間に何遍となく樣式を變へ、私たちの求めるものとは大變距りました。曾て人々はかう考へてゐたのです。唯一の典型的家庭生活は――「世襲的」のものであると。つまり、祖母さんが家長、それから、その周圍には子供や孫や曾孫がゐて、皆んな祖母さんのために働くといふのです。また、「族長的な」――家庭生活もありました。これは、父親が家庭の主人となり、その周圍といふよりは彼自身の眼鏡に叶ふやうに、言ひ換へると、その意志とその規則とに從つて子供や孫が暮してゐたことがありました。今日とて、邊鄙な農村ではさういふ家庭に出喰はします。この家庭の性質や規則は、都會勞働者の夫れと全然違つたものであると共に、都會的プロレタリヤの家庭では全く見られない習慣があります。

また、各國民の間でも家庭の樣式と習慣とは夫れ〴〵異つてゐます。たとへばトルコ、アラビヤ、ペルシヤ――のごとき國民の間では、法律で一人の男が多くの妻をもつことを許されてゐます。かと思ふと、現在でもかういふ種族がありますそれは今言つた例とは正反對で、一人の妻の周圍に夫が澤山ゐることを許してゐるのです。私たちは、男子が處女と法律的結婚をするまで貞操を要求することに慣れてゐれば、許嫁を求める婦人が戀人を澤山見付け到頭多くの夫を持つた國民のあることも知つてゐます。かうして、私たちをして吃驚させると同時に無感覺呼ばりをさせる先きに言つた習慣のかず〳〵は、他の種族や國民によつて法律と認められ、私たちの有する法律や習慣は、彼等國民によつて（罪惡）と見られてゐます。だから、今日家庭生活が改められ、その生活中の古いのは不必要な物を除き、私たちの目の前で、男女關係が新しくされたとて少しも驚く理由はないのです。夫れ故、私たちは次ぎのやうな見識をもつて考察しなければなりません。家庭においては、勞働者と勞働する女と農民と農業に從事する女との間に介在した權利と習慣のすべてを、何よりも先づ新しい勞働サウエート・ロシヤの生活のもとに積上げねばならないのです。その時、どんなものが近付き又どんな生活が始まるかは兎に角として、しかし古くて既に經驗された帝

政時代の地主と資本家の呪はれた誓約は、おそらく貧乏人とプロレタリアートの敵である資本家と共に破毀され又は消滅するでせう。

一と口に家庭とは言つても、現在都會や農村のプロレタリアートがなずんでゐる夫れはやつぱり過去のプロレタリアートの家庭に過ぎないのです。嘗てかういふ家庭生活がありました。僧侶さん自身が結婚を祝福し、離婚を永久に排斥することを認める堅く閉された家庭があつて、それが家庭の全員のために必要な時代がありました。當時は誰が子供を養ひ、彼等に着物を着せ又た教育を施したでせうか。また、誰が彼等を家庭以外で悧口者になるやうに教へたでせうか。孤兒は過去における最も痛ましい不幸でした。私たちの目にふれる家庭では、夫は稼ぎに出て妻と子供とを養ひ、妻は家政と家計とにつくし、その智慧に應じて子供を教育しました。しかし、最近には、資本が支配する凡ての國において諸工場が長足の進歩をし又た日傭取り勞働による資本主義的企劃が同じく非常な發達を遂げてからは、今日までに慣れてゐた家庭が破壞されかゝつたのです。そして、その家庭の習慣も氣持も――周圍の一般的な生活條件と共に變へられました。殊に家庭に對する見方の大きな變化は、到るところで婦人の日傭取り仕事を發見させるやうにしました。過去において、家庭の養育は單に男子ばかりとされてゐましたが、最近の五六十年間に、(他の諸國ではモウ少し前から)、資本主義は婦人にも家庭の內外で勞銀を求めるやうになりました。養育者である夫の勞銀では家庭を支へることが出來なくなると、妻もそれを得やうとすることとなつたと同時に、婦人たちは工場の事務室の扉を叩くやうになりました。彼等は每年、家庭の外で、つまり工場とか日傭取りの仕事に、帳場又は事務室に、他人の家庭の勤めに、洗濯屋に、さてはレストランで働く勞働階級の婦人數は增大しました。かの世界戰爭の當初に作られた表によりますと、ヨーロッパとアメリカでは獨立して働ける婦人が六千萬人と算せられました。この數は、戰爭中にはモット〳〵增加しましたが、彼等婦人のほとんど半數は既婚者でした。しかし、母であり妻でもある婦人たちが、八時間若しくは十時間の勞働に出たあとの家庭生活はどんなものでせうか。その時はキット家庭經濟が滅茶々々になり、子供はいろ〳〵な危險のある往來へ、母親の目のとゞかぬところへ勝手氣儘に出るやうになるでせう。ところで、勞働にゆく妻でもあり母でもある婦人たちは、一人して三つの仕事を受持ちへト〳〵になつてゐます。即ち、彼等は工場とか印刷所とか事務室とかで夫と等しく働き、その收入で家庭の經濟をよくしては子供の面倒を見ます。また、資本主義は婦人の兩方の肩に力

以上の重荷を課しました。更に、その資本主義は、婦人をして日傭取り勞働に就かせはしましたが、彼等の家庭の經濟をも物質的要求をも決して滿足させなかつたのです。そして、婦人たちの額(ひたひ)は、三つの力以上の重荷を負はされてへシ曲げられ、胸からは呼吸(いき)を窒めるやうな呻きを洩らさせ、眼からは涙の乾いたためしが無いでは有りませんか。「女の務め」はいつも輕くはなかつたのです。しかし、今日のやうに諸工場の作業が盛大になつた時、數百萬の女勞働者が資本のくびきのもとに、無光明な生活をいや〳〵勤めるやうな時代は決して無かつたでせう。

婦人の日傭取り勞働が速かに發達すればするほど、過去の家庭生活も速かに破壞されて行きます。もし婦人が、男子と代つて働くものとしたら家庭はどうなるでせう。また、妻に考へる時間も食事の時時も與へなかつたとしたら家庭はどうなるでせう、更に、一晝夜に亙る重苦しい勞働の間に、たつた一時間も子供といつしよにゐることが出來ないとしたらその兩親はどんな風になるでせうか。嘗てかういふ時代がありました。その時、主婦である母は收入に應じて家のために働き、子供は母の監視を受けてぢつとしてゐました。しかし今日といふ今日は製作場のゴウ〳〵といふ音に曳かされて其の方へ急ぎ、家庭經濟を整理しやうと慌てて家に歸つてもぐつすり眠ることさへ出來ず――また勞働に出掛けます。そこには、生活らしい生活がない代りに、おの〳〵の既婚の女勞働者に對する徒刑(カートルガ)があるばかりです。ところで、かういふ狀態を續けてゆくと、家庭は物質的に破壞された揚句、家族は自ら離散しなければなりません。さも無ければ、家族を支へる凡てのものの影が薄くなる一方です。かうして、家庭はその各員のためにも亦た國家のためにも必要では無くなりました。家庭生活といふ過去の樣式もたゞ障害物として殘ることになりました。

今日までの堅く閉された家庭は何物の上に支持されてゐたのでせう。と言へば、第一には父と夫とが家庭の養育者となつてゐました。第二に家庭の經濟はその各員に必要な一般的のものでした。第三は、子供を養ふのは兩親でした。若しさうなら、今日は過去の家庭生活から何が殘るといふのでせう私たちは、夫が家庭における唯一の養育者でなくなつたと前に述べました。そのやうに、勞働婦人は男子と等しく立ち働いてゐます。彼等は自分と子供を養ひ、時には夫をも養ふことを學びました。殘るものは家庭の經濟と子供の支持と敎育だけです。ところで、これらの使命をも家庭から除くことは出來ないでせうか。それを次ぎに調べて見やうと思ひます。

二

農村と都會との極く貧しい婦人たちが、その全生涯を家庭で送つた時代がありました。彼等は家庭の外のことを少しも知らなかつたのです。たゞ、少數の者だけが戸外のことを知つてゐるだけでした。だから、さういふ家庭でどれだけの事が出來たかは略ぼ察しられます。ところで、いろ〳〵の必要な仕事は家庭のためばかりでなく、又た國家のためにも無くてはならなかつたのです。婦人たちは家庭でものを煮たり、掃除をしたり、片附けたり、下着を繕つたり縫直したりばかりはしてゐられませんでした。つまり、今日農村と都會とにある極く貧しい婦人たちの全部がしてゐる仕事の外に、他の仕事をも遣つてのけなければならなかつたのです。彼等は麻絲と獸毛とを紡ぎ、羅紗と麻布とを織り、靴下を編んだり紐を綯つたり、また冬にはいろ〳〵な鹽漬食料品やジャムを用意したり肉類を燻製にしたり鹽漬にしたり、多少の藥やクワス(飲料)の用意をもしたり、蠟燭を作つたり火をともしたり――、當時の婦人の仕事は數へきれないほど澤山ありました。かうして母親も祖母さんも暮してゐたのであります。ところで、今日とて鐵道線路からズット離れてゐたり水の溢れる河向ふにあるやうな邊鄙な大小の村では、相變らず昔の生活をしてゐるものです。そこでは、勞働者の家庭にある婦人が、大きな都會や盛大な工場中心地ではツイぞしたことのないいろ〳〵な仕事を主婦たちがしてゐるのです。

私たちのお祖母さんの時代には、今言つたやうな家庭内のいろ〳〵な仕事が必要で、さういふ生活の中に家族の幸福も得られたのでした。主婦が精を出して働けば、農民や職工の家庭よりもいゝ暮しが出來、その家庭には富も秩序もあつたのでした。そして、かうした家庭の勞働の中に、主婦は國家のすべての經濟にも關係してゐたのです。婦人たちは、自分の手で家族の食料となるスープやジャガ芋のジャムばかりでなく、その他のものも作つてゐたのでした。つまり、家庭のうちで直ぐ必要なものばかりでなしに、麻絲とか紡ぎ絲とかバターとかいふ物資から、進んでは、各市場で商品として賣買されるものまで準備してゐたのです。

本統に、私たちの祖母さんや曾祖母さんの時代には勞働が金にならなかつたのです。しかし、家庭の主人である農民や勞働者のすべてが、家庭の仕事やその經濟以外に、所謂「黄金の手」を婦人に揮はせやうと努めて來ました。妻をして「家庭のうち仕事をせずと」働かせることを學びました。そして一方は國家といふ觀念から、一方は國民の利益といふ觀念から、主婦やその家庭の各員がまめに働き、家族に必要な物質

(麻綿、獸皮、獸毛等)を整へたあとの殘りのものを市場へ賣りにゆき、今迄よりか凡ての國家とすべての國家經濟に努めるやうになりました。

ところで、資本主義は過去の生活を一變してしまひました。この資本主義は、主に主婦が以前手で拵らへたものを、大勢かゝつて工場や製作所でこしらへるやうにしました。かういふ物質の全部がどん〳〵賣られる時に、かの主婦達のうちの誰が蠟燭を作つたり獸毛を紡いだり麻布を織つたりするでせう年若い娘たちに靴下を編むことを教へた時代がありました。しかし、今日勞働をする婦人達のうちの誰が靴下を編んだり何かするでせうか。彼等はさういふ時間を何處に見出すことが出來るでせうか。時は金です。ですから、利益も所得もない不生産的な仕事にそれを費すことは出來ません。只今では勞働をして多少の儲けのある主婦が靴下をほしいと思へば、それを編む時間を惜しんで出來上りを買ひに行きます。もつとも、稀れには勞働婦人が冬を迎へて胡瓜を鹽漬けにしたり何かすることはあります。そんなものは、小ッちやな店ででも金で買へるのに。但し、質素な主婦の手でこしらへたものより、そこで買はれる工場出來は性が惡いか知れません。しかし、勞働婦人はさういふ儉約のために時間と力とを使ふのを厭ひます。彼等は――何んと云ても家庭の外で働く日傭取り勞働者です。さういふ風に、今日までに慣れて來たすべての勞働は、それが假令少しでも家庭から又た家庭の經濟から逃げて行つてゐます。それらは、祖母さんたちが得意でやつてゐた勞働なのですが、かういふ家庭で用意されたものは、今日男女勞働者の共同作業のもとに專門の製作場や工場で作り上げられるやうになりました。

家庭には需要が殘つて製造する事が無くなつたのです。いま、家庭内の經濟を次ぎの四つに分類して見ませう。第一は家の取片附け(床を洗ふこと、塵埃を拭ふこと、暖爐を焚くこと、ランプを修繕すること等)、第二は晝食と夜食とを煮たり調理したりすること、第三は下着の洗濯、第四は家族の着物一式を繕つたり縫ひ直したりすること。

婦人たちの力と時間とをつぶす勞働がどんなに辛いものであるかは、彼等が同時に工場でも働くことを思へば十分です。しかし、それらの仕事はすべて私たちの祖母さんがやつたものでは有りません。若しさうなら、この仕事は、どこに勝れたところが有るといふのでせう。何よりも先づ、現在家庭で行はれてゐる家計上の今言つた四つの仕事は、國家のため又國民の經濟のために必要なものでも利益のあるものでも有りません。又たこれらの仕事ば、國民の富といふ立場からしますと少しも新しくも利益のあるものでも有りません。

主婦としての女は、朝から晩まで自分の貧しい住家を片附けることが出來れば、毎日その下着を洗濯したり皺を伸ばしたりすることも出來ます。また、自分の着物を叮嚀に繕つたり縫ひ直したりすることも出來れば、質素な材料で自分だけに都合のいゝ御馳走をつくることも出來ます。しかし、晩になつてみると、その婦人の勞働から何んにも物質的なものも殘らなければ、その婦人の勞働する手からは、商業市場で値打付けられる何物をも造つてはゐないのです。よし、彼等に千年生きさしたところで、やつぱり毎日々々家庭の經濟に努めるだけでは有りませんか。やがては床の上に塵が積もり、夫は勞働後の空腹を抱へて歸つて來るやうになり、子供は着物を汚すやうになるでせう。かうして、主婦の毎日の仕事は相も變らず必要のない非生産的なものとなるでせう。

家庭の經濟は滅びやうとしてゐます。その位置を社會的經濟に讓らうとしてゐます。そして、勞働者である妻が部屋を取り片付ける代りに、毎朝部屋の中を散歩したり取片付けたりたりする專門の男女勞働者がコムミユニズム的社會に現はれることとなるでせう。富豪は、久しくこれらの退屈で疲れる仕事を妻に課しはしませんでした。しかし、勞働する女はさういふ恩典にあずからずに何故苦しまねばならなかつたのですか。サウエート・ロシヤにおけるすべての女勞働者生活は、過去に富豪が得た愉快と光明と健康と美とによつて組立てられねばなりません。割烹に苦しんだり、晝食又は夜食のために自分の最後の自由な時間を臺所で費す代りに、コムミユニズム的社會では、社會的な食堂と中心的な臺所とが大きく備へられるでせう。資本主義時代にも生活をかういふ方面に向けたものでした。しかし、最近の半世紀において、すべての大都會にあるレストーランやカフエーは雨後の筍のやうな速かさで急に殖えて來ました。けれども、資本主義的組織では人々がレストーランを金錢で左右してゐましたに引換へコムミユニズム組織における中央臺所と食堂では一般的な値段で需要を充たすといふ差があります。女勞働者だとて下着を繕ふのに夢中となつたり、その洗濯で湯槽(おけ)の前にぐんなりするやうなことは確かにあります。で、中央洗濯所は、毎日かういふ勞働者たちから家族の下着を持つて來させて皺も何もかもきれいになつたのを與へ、さういふ勞働を婦人の手から除きます。また、着物のほころびを直す專門の工場は、彼等女勞働者に數時間もかゝつて補布(つぎ)を當てさせる代りに、夜の一時間を讀書したり、集會や音樂會や其他の會合に行くことを許します。今なほ家庭で行はれる此等四つの仕事は、コムミユニズム的組織の勝利として認められるでせう。彼等がかういふ仕事の上に泣かされることはもう無いでせう。コム

ミュニズムは、生活を富ませ又た完全で樂しく自由なものにする事により、婦人を家庭的奴隷狀態から解放するでせう。

二

もし家庭經濟が無くなつたとしたら、その家庭に殘るものは何でせうか。おそらく、これは家庭のたつた一つの保證である――子供でせう。しかし、同僚主義の勞働的國家は家庭に打勝ちます。何故なら、社會は今まで兩親が果たしてゐた凡ての仕事をだん／＼自分で遣つて行くからです。資本主義的時代には、子供の教育が家庭の仕事では無かつたのでした子供は學校で勉强しました。まづ彼等が入學年齡に達すると兩親はかういふことを悟つたものです。子供を教育する仕事は自分達の手からはなれてしまつた。が、またその手の中には他の少くない仕事が殘つてゐる、つまり、子供を喰べさせたり履かせたり着せたり、また兩親が離れた時には、いろ／＼な世話をし又た養ふやうな正直で適當な勞働者を作るやうにと。けれども、とかく勞働者の家庭では兩親としての義務を子供に果すことが難かしかつたのです。と言ふのは賃金が少いので子供を滿足に喰べさせることさへ出來ないばかりか、暇と自由な時間との不足は、彼等の若い時代を養ふに必要な注意を兩親とも與へることが出來なかつたのです。だから、いくら家庭が彼等を養育するものだと判つても、それを果たすことは骨だつたでせう。無產階級の子供は往來の眞ン中で養成されます。彼等は、私たちの兩親が始終口にする家庭生活がどんなものやら少しも知らないのです。

かうした兩親の僅かな勞銀と家庭の飢餓と不安とは、十歲になつたばかりの無產階級の子供を或る獨立した勞働者とせさるやうになります。しかし、彼等の男の子や娘がひとりで稼げるやうになると、兩親の言葉や敎訓やらが命令的で無くなりその以前にあつた從順な性質は消え、兩親の言ふとは力が弱くなります。これと同じやうに家庭經濟も滅びるので、兩親が果してゐた子供に對する家庭的義務もだん／＼影が薄くなります。これらの義務、すなはち、子供の支持と敎育とはだん／＼兩親から社會に移つて行くのです。子供が無產階級者の家庭で持て餘しのものだつたことは無論ですが、資本主義的組織においても、夫れが力以上の困難な重荷であつたことは決して珍しく無かつたのでした。

コムミユニズム的な社會は、一日も早く彼等の兩親に逢つてその困難な重荷を和らげやうと待つてゐます。そして、もはやサウエート・ロシヤでは、文部と社會救濟との兩委員會が家庭と子供の支持と敎育といふ難問題に對し、今日以上家庭の者を苦しめないやうにする多くの仕事をやつてゐます。幼兒をあづかる家、馬槽、子供のブランコを備へた庭園、殖民地、[illegible]、病兒の病院や保健所、それから子供の食堂、學校の朝飯、子供に有益な本の分配、生徒への暖かい着物と長靴

この供給――。おそらく此等すべてのものは、子供の世話といふことが家庭の枠の外に出ると共に兩親からも去つて、集合團體へ社會へ移つてゆくことを示さないものは有りません。

　兩親が家庭における子供の世話とその經濟とは、次ぎの三つの項目のために先づ無駄となりました。その第一は幼兒の離散、第二は彼等の養育、第三は彼等の敎育です。資本主義的時代でも、子供が小學校卒業後中學から大學へゆくまでの敎育は國家の事業となつてゐました。そして、勞働階級者の生活條件と要求とは、子供の遊び場とか庭園とか寮とかいふ彼等に必要な養育機關の設備を命じたのです。勞働者たちが目覺め、社會がよい設備をするより前、その社會は子供の世話といふものを兩親から奪ひました。しかし、中產階級的社會は、家族制度が破壞されることを恐れると共に勞働階級者に接近することを余りにも避けました。資本家たちはかういふことをよく知つてゐたのです。勞働者と勞働する女たちの革命的精神を和らげ、又た自由を求めやうとする彼等の努力を無くするに最も都合のいゝのは――夫は家族を幸福にし飢えさせないとする責任を持たせ、女は奴隷狀態に沈めておくことだと。家族の杞憂は勞働者を地上に跪かせ、彼等を資本の前に跪かせもします。さうしなければ子供は飢ゑるので、兩親はどうしやうも無かつたのでした。もし、兒童養育事業が、資本主義的社會で全然社會、もしくは國家の仕事とならないならば、又もし、彼等の親戚や中產階級がそれを妨害したとすればです。コムミユニズム的社會においては、夫れが社會の事業となるばかりか、今迄よりか反對に生活上の新しい法律や習慣の基礎ともなります。肉親者の幸福ばかりを思ふ習慣と兩親爭鬪とによつて廣められ放たれた家庭では、新しい人間を養ふことが出來、同時に、子供の遊び場、庭園、寮とかいふ養育機關の設備を促します。その機關の中で、子供は殆んど一日を暮らし、頭のいゝ養育者は彼等の間から、共同一致、同僚主義、相互補助、集合團體の尊敬といふ、一つの淸いモツトオを承認する目覺めたコムミユニストをつくります。

　おそらく母親である女勞働者たちは驚かないでせう。コムミユニズム的社會は、子供を兩親から手放さうとも、幼兒を母親の胸から奪はうとも、そして壓制的に家庭を破壞しやうとも企らんでゐません。これに類したことは少しもないのです。コムミユニズム的社會は全然違つた使命を有つてゐます。その社會は、過去の古い家庭が破壞され、この家庭が支へてゐたすべての保證とすべての仕事がそこから離れつゝあることを見てゐます。家庭經濟は滅び、無產階級にある兩親たちは子供の世話をすることも、彼等を支へ又は養ふ力も無くなつてゐます。その上、兩親も子供も物質方面に飢ゑてゐるのであります。だから、コムミユニズム的社會は、男女の勞働者に早く接近し、次ぎのやうに語らうと急いでゐます。貴方がたは若い、貴方がたは互に愛し合つたと。おの〳〵の人間は幸福を求める權利を有つてゐます。生活は貴方がたを脅かしはしません。幸福を見遁さないやうになさい。結婚を恐

れないやうになさい。結婚は――經濟的服從だなんて考へて男女の勞働者が資本主義組織の時に恐れたやうに。健康で若年の貴方がたは、それを恐れず新しい市民となる子供を勞働社會に與へて下さい。勞働社會は新しい勞働力を求めるために幼兒の出產を歡迎してゐます。幼兒が私たちに加盟するのを脅かしてはいけません。資本主義的時代のやうに、不安も寒さも飢えも彼等を待つてはゐません。コムミユニズム的社會では、おの／＼の幼兒が精算の後に保護され、その幼兒にも母親にも勞働や給養切符を心配しないやうに國家が努めてゐます。社會は彼等を養育し、子供の養育に加はりたいと望むその兩親から彼等を奪ふことがないばかりか、彼等に敎育と食料とを與へます。また、育兒に對する凡ての物質的保證を自ら引受けて、兩親のよろこびを、この喜びを感じ又は解する者に殘しておきます。かういふのを家庭の强制的破壞と言ひませうか。また、民によつて子供を母親から奪ふことになるでせうか。

すべてをブチまけますなら、古い家庭は滅びつゝあるのであります。しかし、それは社會主義的な國家が家庭を强制的に破壞するのではなく、さういふ家庭は、新しい生活の條件のために排斥され又た廢止されたのです。

家庭は必要で無くなつてゐます。家庭經濟は、國家のためにならないから家庭にも國家にも必要がありません。それは却つて利益のある生產的勞働から勞働者を避けさせやうとさへしてゐます。家庭はその各員にも不必要だといふのは、家庭の他の使命――すなはち子供の養育――が家庭からだんだん社會に移つて行つてゐるからです。過去の家庭の位置に男女の一般的な新樣式が生ひ立つてゐます。つまり、コムミユニズム的社會にある二個の自由で獨立した、そして平等に働く各員の兄弟親和の熱誠な同盟がです。今日以上婦人の家庭的「奴隷狀態」は存在しますまい。家庭における不平等も、婦人が夫を棄てた時兩手に子供を擁して無援孤立を嘆くこともありますまい。コムミユニズム的國家においては、婦人はその夫によりも自分の勞働力に賴るのです。夫ではなく、自分の勞働の手が彼等を養ひます。子供のことを心配する必要もありません。勞働的國家は自ら彼等の斡旋をします。過去の家庭生活を不具者にするまで痛めた、すべての金錢上の計算やすべての物質上の計算やも結婚に無關係のものとなつてゐます。結婚は、生活を考察し又た自覺するおの／＼の男女勞働者にとつて最も完全なよろこびと、最も大きな滿足とを約束する精神を、お互ひに愛し且つ信ずる二個の人間の最高な同盟に關係を有つやうになりました。過去の誓約的家庭の代りに、その同僚主義的精神で固められた自由な男女勞働者の同盟は彼等の勞働者にコムミユニズム的な社會を約束します。そして、勞働條件の改革と、女勞働者の不安の芟除と、過去の强制的で敎會的で虛飾的で且つ牢乎として拔くことの出來なかつた結婚を眞に自由で同僚主義的な同盟に移した轉換とは、人道上許すべからざる他の忌はしく怪しき、餓ゑた婦人の罪惡であり疾患でもある賣淫行爲をも絕たせます。

物資による家計と財産の存在とは賣春行爲を生みました。しかし、その二つのものの廢止と共に、今日以上婦人の肉體を賣る職業は繁昌しますまい。

おそらく、家庭が破壞されると言つて嘆く婦人はもう勞働階級には無いでせう。反對に、ある歡喜をもつて新社會出現の曙光を迎へるでせう。その社會では、おの〳〵の婦人の身邊から家庭的奴隷の鎖を剝り、おの〳〵の婦人に母としての十字架の苦しみを和らげ、彼等婦人を苦しめた甚だ惱ましい呪咀――すなはち賣春といふ疾患に最後が來るでせう。

勞働婦人は、勞働者解放てふ大事業の社會的戰士として、次ぎのやうな過去の分配を斥けることを學ばねばなりません。すなはち、これは私の子供だ。だから、母としての世話もすれば母としての愛を注がねばならぬとか、これはお前さんの子供だ。だから、隣りの者なんぞに庇つてゐられるものか。あの子供たちは私の子供よりか餓えてゐる。寒がつてもゐるだらう。でも、他所の子供なんぞのことを心配してはゐられないなど〻。今や、自覺した母であり勞働者である婦人たちは、私とお前さんといふやうな差をつけないやうに、そして、コムミユニズム的勞働ロシヤの子供は、みんな自分たちの子供であるといふ考へをもつまでに發達しなければなりません。

新しい勞働的國家は新樣式による兩性の統一を必要とします。自分の子供ばかりに注ぐ狹苦しい母の愛のかはりに、大きな勞働者家族のすべての子供にすべての母の愛をそ〻ぐやうに發達しなければなりません。強制的で誓約的な結婚のかはりに勞働的社會における二個の愛すべく又た平等である各員の自由な同僚主義的聯盟は創設されつ〻あります。利己的に固く閉された家庭のお目附のかはりに、すべての男女勞働者が何よりも先きに兄弟でありタワーリシチ(「同僚」の意)となるところの世界的な大きい勞働者家庭が生ひ立つてゐます。若しさうとすると、兩性統一をコムミユニズム的組織の中で行ふにはどんな樣式に因らねばならないでせうか。それは兎に角として、眞にこの樣式は、資本主義的時代の物資を買した社會の知らない本統の平等と親和との感情に貫かれた、自由な愛の花のやうな歡喜を人類に保證します。

健康で花やかな子供たちに道を、その眞面目な生活の中では少しも狹められない自由で强固で生甲斐がある若い世紀に道を。これが、過去の中產階級による資本主義的家庭の誓約的樣式を一掃したコムミユニズム的社會のモットオです。おそらく古い家庭制度は滅びるでせう。そして、新しい結婚による同僚的な愛と自由と眞實な平等との名において、勞働者と勞働する女と、農民と農業に從ふ女とは、今日より以上の新しくて完成して又た正しくして燦かしいコムミユニズム的基礎の上に、社會改造の興奮と信念とをつなぐでせう。ロシヤについで、世界の他の國に翻へつてゐる社會的〇〇〇〇は、人類が幾世紀に亘つて憧れた極樂を地上に築くのも遠いことではないと私たちに語つてゐます。

罪は何れに有り

有島武郎

最近――殊に近頃になつて際立つて私達の眼に觸れるものは、離婚事件であります。毎日の新聞紙は、大抵一件乃至二件はかうした事柄を報導してゐます。實際、新聞紙上に現はれる世の中の出來事といふものは、ホンのその中の一少部分に限られてる所から推して見ますと、新聞紙上に現はれない離婚事件といふものはいくら行はれつゝあるか知れないと思はれます。

何故かうした痛ましい事件が起されるか？　この問題に對して何人が責任を負はなければならぬか？　若し責任を負はぬとすれば男か、女か。それはいふまでもなく社會全體が責任者でなければなりません。何故といひますと、現在の社會組織なるものは、すべてが男本位で、何も彼も男にとつては有利な事柄ばかりです。そして女に對しては何等特權が與へられて居りません。これは實に公平を缺くもので、女にとつてこれ程不利なことはありません。何故かうした不公平を男と女の間に設けなければならぬか、その理由を知るに私達は苦しむものです。

ですから一度夫婦間に離婚問題が持上つたら最後、いつも男は有利の位置に立ち、女はその反對の立場に置かれて泣寢入りの態です。女は自分に正當の理由はあつても、男の立場に在つて而も男にのみ有利に決められた現在の法律では、何等その申出を入れてくれません。どこまでも女は男に從屬したものだといふ觀念の下に、かうした問題に對しても男の方を主にして斷定を下すことになります。果してこれは正しいといはれませうか？　ですから、法律は男女平等に行はなければならぬなどと女の方から叫ばれるのです。女の立場からすればさう叫ばずには居られないでせう。しかし元々男と女の間にさうした差別のあるべき筈でない所に差別が勝手に設けられたのですから、女の方からは何にもそんなに遠慮したり自分自らを卑下したりするに當らないと思ひます。どこまでも一個の人間として、男と同等の考へで押進んで行けばそれで好いことゝ思ひます。さうして行く所に女としての生命

があり、自由があり、幸福があるので、それが女としての本來の持つべきものなのです。

けれ共、前にも言つたやうに、現在ではすべてが男本位に定められて居ります。弱者の味方となり、弱者を保護すべき法律でさへも事實に於ては寧ろ強者の味方となり、強者のために設けられた感があります。これでは女は何によつて自分を主張すれば好いのでせう？　何處へ自分の苦しさを訴へればよいのでせうか？

殊に離婚問題の如き人生の微妙なる出來事を、不公平なる法律の力を藉りて判定しようといふが如きは、大きな誤りです。否寧ろ法律といふものが設けてあるために、却つて眞直に行く事柄までも變にこぢれて了ふのではないかとも思はれます。さういふ意味で、法律なるものはない方が好いと思ひます。

□

私は最近かうした實例にぶつつかりました。

或る田舍の△△町に若い娘が居ります。その娘が未だ小さい時に母親が死にました。と、その父親は家出をして了ひました。そして後に祖母と二人殘されました。娘の家は△△町でも一流の旅館だつたのですが、母親が死に、父親の家出のため祖母一人の手では經營がなか〳〵困難となり、從て客もあまり來てくれなくなり、漸々左前となつて來ました。そのうちにその娘も年頃になつて物心がついて來ると、初めて自分の周圍が顧られて來ました。父母の無い、祖母と二人限りの寂しい生活が考へられました。さうした生活を顧るにつけて陰鬱な彼女の性格は尙更あぢきなく冷たくなつて行きました。その時です。彼女の家に一人の技師が泊つてゐました。彼女はその技師を一目見るなり、非常に心が惹かれてつい夢中になつて技師の手へ飛込んで了つたのです。世間を知らない純な彼女は、夫婦になるといふ技師の甘い言葉に乘せられて、とう〳〵關係を結んで了ひました。

すると技師は、轉勤と稱して東京へ歸つて了ひました。そしていくら待つても「やがて伴れに來る」といふ約束を履行してくれないので、彼女は初めて瞞されてゐたことを知ると同時に、自分のしたことが後悔されて幾度自殺しようかと決心したか知れませんでした。そして益々陰鬱な冷たい女になつて行きました。

祖母は非常に心配して、いやがる彼女に無理に說きすゝめて養子を迎へることにしました。その養子といふのは無口な從順しいといふので、すゝまぬながらも彼女はそれを承諾しなければならなくなりました。然し愈々結婚するとなると、

先づ第一に彼女を苦しめるものは、技師との事件であります。彼女は自分の犯した罪を夫の前にすべてを打明けて許しを乞はうと決心しました。そしてその日を結婚當夜に擇びました。しかしその夜になると、どうしてもそれを思ひ切つて打明けることが出來ませんでした。そして一ヶ月後になつて初めて打明けました。夫はそれを許しました。間もなく彼女は結婚しました。すると夫は次第に家をあけるやうになりました。そしてそれがだん〳〵甚くなつて行きました。そして子供が生れた時、夫は『それは自分の子供ではない』といつてどうしても承知しません。そればかりでなく何に彼につけて彼女に當り散らして酷い目にあはすやうになりました。で仕方なく夫を離婚することになりました。

その時彼女は考へました。何故自分は祖母の言葉に從ひ、家のために犠牲になつてこれまで働いて來たのだらうか？又働かねばならなかつたのだらうか！　と……彼女は今更の如くさうした大きな問題にぶつつかりました。夫等の疑問を解くために彼女は多くの書物を讀みました。そして微かながらも漸くにして前途に光を見得るやうになりました。

さうしてゐる時、彼女は平和博覧會見物のために上京して彼女の家へ來て泊つてくれる客の家に厄介になりました。するとその家にゐた四十歳位な男と又關係が出來て了ひました。而もその男には十三歳になる男の子があります。そしてその男は戸主です、彼女も戸主です、ですから彼女が家出でもしなければその男と一緒にはなれないのです。そればかりでなく彼女にも一人の子供があります。そして二人はどうしても結婚しようとしてゐます。………

□

この實例などはよくあることで、現代の日本婦人の傾向を最もよく現はしてゐると思ひます。この娘さんなどは、八十幾歳になる祖母に氣の毒だとか、さうかといつてそんな年老一人を殘すには忍びないとか、又親戚の手前があるとか言つて、而かも一方には何うしてもその男と一緒にならなければならぬといふ決心に燃えてゐるに拘らず、今だにそれを實行せずに迷つてゐるのです。勿論それはさうあるべき筈です。

然し私達は將來の問題に對しては、何うしようとかかうしようとかいふことが今から決めてかゝれません。決めてかゝることが既に無理です。この娘さんの場合にしましても、自分で蒔いた種は自分で苅取るより外仕方がありますまい。それは誰の問題でもありません。みんなこの娘さん自身の問題です。それより外に仕方がないのです。よかれ惡しかれ、それは自然の結果で何うすることも出來ますまい。それだからといつてその結果に對して苦情を言ふことが出來ません。

近代の世界音樂

露西亜音樂の基調

辻荘一

國民的自覺とロシヤ音樂

十九世紀後半は音樂史上極めて興味ある時代である。ことに我々がこれを念頭に置いて普通歴史の頁を繙せばその理由は極めて明瞭になつて來るであらう。然らば果して如何なる意味に於いて興味があるのであらうか、今それを考へて見たい。フランス革命、アメリカ合衆國の獨立宣言に驚かされた歐洲諸國はその對策として、又當時漸く重んぜられ始めた機械工業、及びそれに伴隨して起る經濟組織、その他食糧問題の解決の一策として所謂帝國主義を唱導しはじめたのであつた。今自分は政治論をするつもりでもなければ又帝國主義の批判をするつもりでもない。その帝國主義に當然の結果として――或は考へ方によつてはその原因として存する――所のものを考へれば良いのである。この時代になつて人々は個人としての存在を自覺するのみならず、ある一國の國民として自覺せねばならなかつたのである。十八世紀以前にあつては歐羅巴大陸は一般に封建制度が行はれてゐて、その國家組織は形式上は兎も角實質上に於いてはその國民をして深き國民的自覺をおこさせることは出來なかつた。方数里の國土の中にあつて、隣國との境界に山脈も、大海もないやうな所では隣國と云ふのは、吾々のやうに洋上の孤島に國を形成してゐるものゝ考へることの出來ないやうな特別の觀念でなくてはならぬ。即ち封建時代にあつては實質上、精神上の國境は先づ存在しなかつたと云ふことが許されることと思ふ。

爰に顧つてその封建制度の下における音樂を考察して見たい。勿論交通の不便その他の原因のために音樂の流派は歐羅

巴の各地によつて皆異つてゐたのである。その中でもウイインに相次いで起つた一群の音樂家は、ウイイン樂派と呼ばれて最も榮光ある冠をさづけられてゐる。ハイドン、モオツアルト、ベエトオフエン、シユウベルトの記憶すべき名は實にこの樂派であつた。この輝ける星と比べやうはないがその他各地に相當の音樂家が活動をしてゐた。そしてこれら當代の作曲者の音樂は形式上から比較して見ると、各人の間に、又各地に於ける傳統の間に歴然として區別を設けることが出來る。しかしその音樂に抱藏せられてゐる理念——それはその形式ほど相異つたものであつたらうか。モオツアルトの音樂にあらはれた春のやうな心の和みとベエトオフエンにあらはれた火のやうな情熱との間には勿論天地の差がある。しかしそれでもその理念に至つてはこの兩者、又は當代の樂家のすべてを通じて一つのエレメントを缺いてゐたのである。それはかの國民的自覺である。帝國主義的精神である。

かくして封建制度は大なる國家となり、國民は個人としての自覺と共に國家の人民としての自覺を強めて來た。それに對して音樂は一の方向轉換をもつて應じなければならぬ。ウエベルの歌劇はドイツに於ける眞に獨逸的なる歌劇の初めである。彼の「自由獵手」は他の國の人の追從を許さぬものである。ベリニの歌劇も同じ種類のものであつて彼がイタリア人なるの故をもつて出來たものである。東歐の新興國ロシアはこの氣運に乘じて一人の眞のロシアの音樂家を産出した。それはグリンカその人である。彼は貴族の門に生れ少年の時からすでに樂才をあらはして、後「皇帝の爲の生命」及び「ルスランとルドミラ」と云ふ歌劇を公けにした。後者の序曲はかつて東京で演奏せられたのを聞いたが、その印象は鮮かなものである。チムパニの猛烈な打撃を伴ふ一種吾々にグロテスクと感ぜらるゝリズムは、ロシアの農夫の生活狀態を思はさせずにおかないものであつた。

グリンカのことども

グリンカの生れたのはスモレンスクなるノヴオスハスコエと云ふ田舍町であつた。彼は貴族の子弟として完全な教育をうけるためにペエトログラアドに來り言語學の研究を始めた同時にヴアイオリン、ピアノ等を習ひはじめた。ピアノの先生は、形式上シヨパンの先驅者なるフイイルドであつた。その後彼はカウカサスに旅行してその樂想を練らうとしたが不幸にして健康を損した。そのため彼はイタリアに轉地するに至つた。ロマ、ナポリ、ミラノ等を遍歴して、醫療に手をつくすと同時に專心音樂の研究と作曲に身を委ねたのであつた。しかしその結果に滿足せず、懷郷病の虜となつて又ロシアに

歸つた。しかし彼はこゝで一革命に遭遇した。それはデエンと云ふ一人の獨逸人から彼の國民的獨創性を認められて「ロシア的」な音樂を造つた方が良からうと云ふ暗示をうけたことがそれである。かくして出來たものが「皇帝のための生命」である。このうちにはロシア的なるものは、波蘭土的なるものと對立して、良き結果を收め、ロシアの民謠は再び新しき生命を帶びて公衆の前に姿を現したのであつた。その後彼はプウシユキンの中出でによつてその幻想的な叙事情「ルスランとルドミラ」に作曲して歌劇とした。これも前の歌劇同樣に大成功を收めて、歐洲の各地で上場せられた。ベルリオ自身この音樂に感服したと云ふことである。その後彼は諸種の作品に手を着けたが、最も苦心したのはロシアの民謠の最も自然な和聲法を如何にすべきかの問題であつた。彼はこの解決を得ずして遂にベルリンに客死したのである。それは一八五七年の二月のことである。

ロシヤ音樂の材料

何處の國にあつても民謠が音樂の基礎になつてゐる。このことは殆んどすべての國民に通じて斷定し得ることであるが封建時代のドイツ音樂にあつては民謠の力は微々たるものであつた。それは當時のドイツ音樂はある意味において民謠の力を藉りなくとも獨立の性質を失はないほど立派なものであつたからこのやうな結果になつたのである。しかしスペインと云ひイタリヤと云ひ大抵の國においては民謠は絶大の力を發揮してゐるのである。ことにロシアに新しく與つた音樂は當然民謠を背景として立たなければならぬ。ロシアの民謠は獨特のものである。大抵の歐洲諸國にあつては音階法が一定してゐたのであるが、その根源において東洋的なるロシアにおいては獨立の發達を遂げたのである。その音階形式は中世紀の敎會音樂の旋律法のあるものを保存し、近代の和聲學の理論があてはまらぬやうな所が往々ある。その旋律の形式はイタリヤやドイツに比して全く貧弱で有て、同じ旋律――それも極めて短少であつて、時には二小節を超えぬ時もある――を多數反復することによつて出來てゐる。その結果として音樂は單調となると同時に感じが奥深く、力強くなつて來る。そして一種特色あるリズムが含まれてゐて、西歐の人々には全然「異國のもの」と感ぜられたのは無理もない。その上、ロシアの國民のもつてゐる聲は驚くべく低いものである。そのため一種の異つた合唱が行はれる。これは特に敎會の合唱隊において發揮せられてゐるものであつて、低音部が特殊の發達を遂げてゐる。

ロシアの敎會はその聖堂の中で、如何なる種類の樂器を禁

することをも許さぬ。しかもその儀式は極めて官能的なものであつて立派な音樂なしには不具者となる。この故にロシヤの教會樂は純然たる聲樂であつてその合唱隊のよく訓練されてゐることは他に比類がない。彼らはいくら多人數集つてもその歌ひはじの聲の高さをあやまることなく、又指揮者なしに完全に困難な音樂を演奏することが出來る。これはロシアの音樂の材料として極めて有力なものである。ボルトニアンスキイは「ロシアのパレストリナ」と稱せられる人であつてロシアの教會音樂の第一者である。彼は生れはグリンカに先立つこと約半世紀であつて一七五一年のことである。當時有名なオペラ作者なるイタリヤのガルツピがその當時ペテログラアドに來てゐたので、少年の時から彼について音樂の研究をはじめた。そしてガルツピがその故鄕ベニスに歸つた時、彼は女帝カタリナ二世の保護の下にその先生に從つてイタリアに遊學してボロニア、ロマ、ナポリ等を旅行した。彼はヴエニスにおいてその處女作のオペラを演奏した。その後彼はもう一つのオペラをモデナにおいて演奏してその後故鄕ペテログラアドに歸つた。そこで彼は後に帝室付合唱隊の指揮者となり又帝室附教會の作曲者となつた。この地位にあつて彼は豊富な聲樂曲を遺したのであるが、それは皆ロシア風のものであつて他人の追從を許さない體のものである。

ロシヤ音樂の兩巨頭

以上の二人は純ロシア式の作家として認められるべき人であるが世界の大潮流の中に立たせられる時未だ大きな波を上げるだけの力はなかつた。彼ら及び彼らの後にオペラの方面に力をつくした多數の小天才は、露西亞音樂の礎石として十分の役目を果したのであつた。今や新しい天才の生るべき時である。果して異常なる努力と豊かな天分を有するルビンシユタインが生れたのである。彼の精力は目覺ましいものである。頑强なる體軀と透明なる頭腦と情熱とは彼をして早くからピアノの名手として名手たらしめ、次いで未だかつて生れたことのない大演奏家が出來あがつたのである。彼の間斷なき演奏旅行は歐洲の文明都市を股にかけて行はれ、彼は未だ十二才の少年として、當時の權威リツトの前で演奏したが、賞讃と驚異の的になつた位であつた。中年以後彼はペトログラアドに落ついて音樂學校の教職につき、三四のオペラを上演した。併しこれも長くはつゞかず、彼は又演奏旅行に出かけた。それから歸つても又各地における彼の評判は又彼を演奏旅行に惹き出し、遂にはアメリカにまで出かけたのであつた。その後彼は專ら作曲に從事したのであつたが、世人の要望拒み難く又演奏旅行に出かけねばならなかつた。そして遂

に一八九四年（今から二十八年前）物故したのであつた。彼は演奏家として名聲が上がつたのみならず作曲家としても決して人後に落ちる人ではなかつた。十三箇の歌劇、神劇歌が四箇、交響曲が六箇、音詩一、管絃樂のための幻想曲一、序曲四、などをはじめとして無數の室内樂、獨奏曲二百餘の獨唱曲を遺つてゐる。彼の演奏は極めて力強くかつ印象的なものであつた。精確なことや美しいことを通り越して一種の魅力をもつてゐたのである。彼の作曲も同じやうな力をもつてゐる。彼の作風を強ひて比類を求むればシユウマンであらう。しかしシユウマンは十分に熱考の上で作曲する人であつたがルビンシユタインにはこの自制力がなかつた、そのために彼の作品は往々にして統一なきものと非難せられるのであるがこの非難は恐らく當を得たものであらう。しかし吾々は先づ彼の前にその天才の豐富の故をもつて跪座しなくてはならぬ。彼は作曲と演奏の片手間をぬすんで二冊子を著した。「音樂とその諸大家」及び「音樂論」である。特に前者は音樂研究者に取つては有益な著書である。

チャイコウスキイはルビンシユタインにおくること十一年一八四〇年に生れた。ルビンシユタインが早くから音樂生活に入つたに反してチャイコウスキイは實業的な父親の意見によつて二十歳になるまで正式の音樂教授をうけることが出來なかつたのであつた。彼はこの時自分の天才を自覺したのであつた。早熟の天才はこの年齢にはすでに相當の名聲を得てゐる時である。しかも彼は五十三才にしてコレラのために死んだのであつて僅か三十三才の音樂生活であつた。此れは誠に惜むべきことであつて批評家が筆を揃へて論じてゐる處である。彼の先生はツアレンパと云ふ人であつてロシアにおいて相當の名をなした作曲家であつた。その急激な進歩は人々を驚かせ、轉じてルビンシユタインの門人となつた。五年の間に彼は完全な音樂家となり終つて作曲しはじめた。その處女作なる一唱詠曲は大成功であつて、彼は直ちに新設のモスコオ音樂學校の教授の職についた。彼の作曲は、ルビンシユタインと同じやうにあまり内容が豐富すぎる。天才が溢れていづこにも迸つたのである。そのために彼の作曲はシユベルトの作曲のあるものゝ如く冗長であると云ふ非難をうける。彼は又管絃樂指揮者として極めて熟練であつた。彼は諸方の都市の音樂團體の請に應じて演奏旅行に赴いて、アメリカにも行き、ロンドンには三度行つてオクスフオオドの大學からは音樂博士の稱號を與へられた。彼は自作の第六交響曲を指揮してその後九日にして死亡したのであつた。

チャイコウスキイの作曲は叙情的なる點に於いてシユウベルトと共通點が澤山ある。又作品が豐富な點においても、こ

の若くして逝けるドイツの天才と類似してゐる。しかし彼はロシア人であることを忘れなかつた。しかしそのロシア的なる點は極めて洗練せられてゐる。しかしこのロシア的なる方面は、彼のうちにある處女の如き優しさと、内氣なことと相對する時に、殆んど野獸の如き兇猛性をあらはす。彼は七箇の交響曲を作つてゐる。その第六は「悲壯」と題せられてゐるものであつて、我國においても不完全な演奏が行はれたほど人口に膾炙せるものである。又六箇の管絃樂用組曲を殘したがそのうちに「胡桃割り」と稱する歌劇の中から取り集めたものは同じ名稱の下に公にせられ、我國においては演奏せられたことがあるさうである。不完全なレコオドを通じて聽いてもその魅力に打れずには居られない。彼の序曲の中で最も有名なのは「一八一二年」と題さるものでモスコオの救世主聖堂の聖別式に演奏せられた。この曲は度々吾々の耳に觸れるものである。ほんとうの演奏に際しては大砲をも用ひなければならないやうに、總譜上に記されてゐて、その初演に際しては實に大砲を發射したのである。この曲は彼の愛國心の結晶と見ることが出來るのであつて、フランス軍がナポレオンの命令の下にロシアに侵入し、却つて自ら破滅を招いたことを主題としてある。彼の室内樂は一體に冗長であるがそれでも皆美しい、チヤアムに富んだものである。その他無數の洋琴曲十箇のオペラがある。彼のオペラは初めは不評判であつたが、「オイゲン・オネエギン」なる純露西亞的の作を公けにしてから彼のオペラ作者としての名聲が頓に昇つた。彼の敍情的の性質は獨唱曲に最も明瞭にあらはれてゐる。しかし今はその一々の批評をする時ではない。

新ロシヤ樂派

ルビンシユタインとチヤイコウスキイがその天才を誇つてゐる間に種々の新しい試みが新しい思潮の結果としてあらはれて來た。繪畫にあらはれた印象主義は又音樂の上にもあらはれなければならない。又文學の方面における象徴主義、それの一顯現としての氣分藝術、その手段としての異國情調、或は表現主義の藝術　——これらのものはその反映を音樂にうつさないでゐられないものであつた。かゝる大勢に應じたのは、天性云ひ知れぬ憂愁を絶えず抱いてゐるロシア人が先頭であつた。チヤイコウスキイ、又はルビンシユタインは共にある意味で大陸的であり、その傳統としては歐洲音樂全體の一種の古典的なるものが、ロシアの洗禮をうけたのであつて、ある一派の論者がこの三天才をロシア的ならずと罵るのはある程度まで許さるべきである。しかしこの二人と時を同じくして全くロシア的に生活し、しかも古典の流れを汲まずして

直ちに現代の音樂の仲間入りをした人々がある。彼らは自から「新ロシア樂派」と稱して大きな抱負と自信をもつて立つた人々であつた。セザアル・クイ及びアルヒエヴイッチ・バラキリエフはその先驅者である。前者はオペラに關して大改革を企て、自から數箇のオペラを作つたが遂に世に容れられなかつた。しかし彼は歌謠作曲の方面において大きな成功を收め、本國よりもむしろ佛蘭西で歡迎せられた。バラキリエフは自から作曲したが、むしろ演奏者として名聲を得た。又民謠の研究者として記憶せらるべき人である。又彼の少數のピアノ曲は優秀なものである。

この二人は遂に十分の成功を獲ることは出來なかつた。しかしこの二人のために眞に音樂的に活動したのはボロディンであつた。彼はもと〱音樂家ではない。彼は化學の一泰斗であつたことは、クイが兵法學者として有名であつたことやチャイコウスキイが法律學校に學んだことゝ並んで特筆に價する。彼は早くから天分をあらはしたが、彼の價値は晩年に發表した所の「プリンツ イゴオル」なるロシア歌劇である。その題材は純粹のロシヤの傳說に取り、古い時代の貴族の戰爭を背景とする重々しく、しかも氣分に富んだ劇である。ムソルグスキイははじめから音樂家としての生活をはじめたが、不幸にして世に容れられなかつた。しかしその歌劇「ボリス・ゴドノフ」は價値あるものと認められた。しかし彼の奔放な性質と生活はこれを完全なものに書き上げることは出來なかつたが、リムスキイ・コルサコフが手を入れて十分の功果を得た。彼はその他の小曲を殘してゐるが、皆在來の形式を全然無視して作つたものであつてその價値を論ずることはこゝでは差控へたいと思ふ。しかしその歌曲のあるものゝうつくしさは、吾々の考へ及ばぬ程度のものが往々ある。

これらの人々の最後の幕を飾る人は前述のリムスキイ・コルサコフであつて、完全な音樂教育をうけた人である。この人はオペラの方面では「金の鷄」及び「恐しきイヴン」を傑作とする。その他交響曲を三つ殘してゐるが、これも價値あるものである。その他彼の音樂理論の造詣の深さを示す無數の少曲があるが、爰ではたゞ彼のロシヤ的なもののみを擧げれば足りる。要するに彼の音樂の材料は悉くロシア民謠であつた。彼はルビンシュタイン及びチャイコフスキイの死後は、その名聲を彼自身に惹きつけるだけの力があつた。彼の衣鉢をついだ音樂家はグラスノフ、アレンスキ、レアドフ、グレチヤニノフ等の著名な人々であつて、現在活動せる人々である。特にスクリアビンの名は記憶すべきである。彼の音時のあるものは我國でも演奏せられ、又研究者によつて紹介せられた。

結論

田邊尚雄氏はその講演の中において、歐洲音樂の行きつまりが、ロシアその他異國の音樂に興味をおこさせる原因であると云ふ意味を述べられたことを記憶するが、私はそれに反對したい。勿論その講演會は通俗向のものであつたために、手取早く理解せしめるためにこのやうな表現法を取られたことゝ思ふ。しかしさなきだに新を好む一般人は氏が目下一流の音樂學者たるの權威をもつて、氏の言を膽に銘じて了つたに相違ない。私は氏の不斷の努力に對して尊敬するが、同時に通俗の故をもつて、誤解をひきおこしやすい表現法を用ひらるゝことを惜むものである。實に自分は未だ歐洲音樂が行きつまつてゐないと思ふ。一時の異國的音樂の流行——その中にはロシア音樂も入るが——は一の變動にすぎない。自分は特別にロシャ音樂について深遠な研究をしたものでないがかのルビンシュタイン及びチャイコフスキイの活動は事實の上から、ロシア音樂が必らずしも現代の音樂の中心ではないことを示す。何となれば、彼らの作品は、「正統的なるものをロシア風に衣を着せたにすぎないからである。彼らの偉大なる點は、ロシア的なる點ではなくして世界的なる點である。近來のロシア音樂の無理解なる流行に關して感ずるまゝに所見を述べる。

波蘭土及びチェコ・スロヴァキアの音樂

牛山充

波蘭土人が音樂を愛好することも決してスラヴ、ゲルマンの民族に劣らない。若しも此國が昔より戰爭の慘禍のために、其の文化的生活の安定を脅かされたり、破壞されたりすることが少かつたならば、必ずや世界の音樂史上にもつと重要な貢獻をして居つたに違ひない。擾攘國中の狂暴なものゝために領土を分割され、政治上の獨立を失つて後は、國民の藝術的生活も又獨立性を確立する機會を拒まれて、他の民族の開拓した道を辛じて辿ると云ふ有樣であつた。併し斯樣な環境

の中に在つても此國民固有の音樂性は幾多の優秀なる樂人の事業となつて、世界の音樂史上に數朶の美花を飾つてゐる。遠い過去に於て顯著な役割を勤めた人々は暫く置き、近世音樂史上は現れた著名な音樂家十數人の事業の跡を調べて、間接に波蘭土音樂の輪廓を描かう。

ヨーゼフ、ノワコフスキーは一八〇五年ムユスクに生れ、一八六五年ワルシャウで歿した洋琴演奏の名家である。ワルシャウ音樂學校でウェルフェルとエルスナーに學び、東西に幾度も樂旅を試みた後、ワルシャウのアレクサンドゥラ學院の教授となつた。其作中六十曲許り出版されてゐる。世に知られてゐるのは序曲一つ、五重奏曲一つ、四重奏曲數篇。洋琴曲では十二大練習曲、作品二十五、大悲愴波蘭土舞曲、作品十四、マヅルカ、作品十九と二十六。洋琴教則本一つ等である。

イニャーシ　フェリークス　ドブヅィンスキーは一八〇七年ヴァルヒニアのロマノフに生れ、一八六七年にワルシャウで長逝した洋琴洋琴家である。父のジェイ　ドブヅィンスキー（一七七一——一八四一）がヴィオリンの名手であつたので、初音樂を父に學び、次にエルスナーの教を受けた。ショパンと兄弟弟子で、非常な親交を結んだ。一八四五年より六年にかけてライプツィッヒ、ドレスデン、及び伯林等に樂旅を試みて大成功をした。一時ワルシャウで歌劇座の指揮をし、遂に此國を永住の地とした。作品には歌劇が二つ、「冶成」（ワルシャウ、一八六二）「モンバル」（未完）、ハ短調交響曲、「サンフォニー　カラクテリスチック」、絃樂六重奏曲一つ、絃樂五重奏曲二つ、絃樂四重奏曲二つ、洋琴三重奏曲一つ、洋琴と提琴奏鳴曲一つ、洋琴と提琴の夜想曲一、「涙」マヅルカ數篇、洋琴の夜想曲數篇及び歌曲が若干ある。

アントアーヌ　ドゥ　コントスキーは一八一七年にクラカウに生れ、一八九九年にイヴァニッチーで亡くなつた洋琴の名手である。ワルシャウでヨハン　マルケンドルフに學び、一八三〇年には莫斯科でフィールドに師事した。（此ジョン　フィールドは一七八二年に波蘭土のダブリンに生れ、一八三七年に莫斯科で長逝した獨創的の作曲家で、又洋琴家であつた。夜想曲は彼の創始する處で、ショパン及び其以後の作家は此のフィールドに負ふ處が少くない。）コントスキーは幾度となく演奏旅行をしたが、其技巧の燦然たるのと、嫻雅なのと、優麗、微妙を極めたのとで到る處に絶大の成功をした。一八五一年迄巴里に住み、伯林にも約二年居り、宮廷洋琴演奏家に任ぜられ、一八五四年から六七年迄彼得倶羅土に居を定め、各市に樂旅を試み、後洋琴教授のため倫敦をも訪れた。一八八五年より六年合衆國に樂旅を試み、一時バファローに住んだ事がある。一八九六年より九八年に亘り、紐育で振出

じに八十の高齢で世界漫遊の大樂旅を企て、濠洲、日本、支那、西伯利亞を經て歐露を廻り、ワルシャウで芽出度此大規模の旅行を終へた。一八九九年の正月には彼得倶爾土でまだ演奏會を盛んにやつて居つた。作品には技巧的には困難であるが藝術的の性質から云ふと稍凡庸の感がある。中でも作品百十五の「獅子の目醒め」は洋琴曲としても、又管絃樂曲に改められたものの方も評判が高い。此外洋琴競奏曲二つ、圓舞曲「捷利者」作品八十九、「ビアッリッツの思ひ出」作品二百七十八、「大波蘭土舞曲」作品二百七十一、「海上の夜」作品二百五十九、歌劇「二人の迂闊者」(倫敦、一八七二)、小歌劇「ツァンツィバルのサルタン」(紐育、一八八六)、神劇一つ、交響曲、序曲、彌撒曲各數篇ある。

アッポリネール ド・コントスキーはアントアンヌの弟で一八二五年にワルシャウで生れ、一八七九年に同市で長逝した。此人は兄とは違つて提琴演奏家で、長兄シャルル(一八一五──一八六七巴里)の弟子である。四歳の時(日本流に云へば五つであらう)ロードの競琴曲を大抵演奏する事が出來たと云ふ程の神童であつたから、後年巴里で、當時ヴィオリンの神樣のやうに思はれて居つたパガニーニの秘藏弟子となつて、其の寵を受けたのも不思議ではない。佛蘭西、獨逸(一八四七)に樂旅を試み、彼得倶爾土(一八五二)では非常な評判となつたので、一八五三年から六一年迄帝室の御用掛を命ぜられ、宮中の室内樂演奏員となつた。其後ワルシャウに居を定め、一八六一年に音樂學校を創立し、歿する迄其長であつた。作家としては次兄程の價値あるものを出してゐない。作品は主として提琴曲である。

其兄スタニスラスは一八二〇年にクラカウに生れ、主として巴里で提琴の教授に從ひ、比較的重要でない提琴曲を作つてゐる。兄弟孰れも名を成してゐる斯のコントスキーの如きは餘り他に類を見ない。

スタニスラフ、モニューシュコは一八一九年にリト・アニアのミンスク縣、ウビエルに生れ、一八七二年にワルシャウで歿した。一八二八年にワルシャウで風琴家フレイエルに師事し、三七年より九年迄伯林でルンゲンハーゲンに就いた。此間風琴樂手と教師をして生活した。後ヴィルナに定住、一八五八年ワルシャウ歌劇座の長に任ぜられ、後音樂學校の教授に擧げられた。

彼は風琴樂手としてよりも作家として波蘭土音樂史上重大なる貢獻をした。作家としての生涯は歌曲を以つて始めたが長く時期の到來を待つた後、六册をヴィルナで出版した。風琴又は管絃樂の伴奏を有する多くの彌撒、管絃樂付唱謠曲を數篇、合唱及び管絃樂のための「オスト・ロブラーメル リ

タエー」並びに多數の寺院樂を作つた。併し最とも有名な作は十五の波蘭土國民歌劇である。孰れも流麗典雅な作風を有し、彼の樂才の非凡を語つてゐる。「富籤」「理想」(一八四六)「新ドン キホーテ」「アッペニーネ山中の夜營」「田園詩人」「ベットリー」、「流浪の民」、「ハルカ」(一八五四、ヴォルナ(演奏會用の形にては一八四七))、「ヤウヌータ」、「筏乗り」、「ヴェルブム ノビレ」、「ロキチャーナ」、「伯爵夫人」、「幽靈城」、「ベアータ」、「茶」、(未完) である。此中「ハルカ」は純粋な波蘭土歌劇の嚆矢とも見る可き名篇で、最も重要な傑作である。此外「ハムレット」に付けた音樂」、幻想曲「冬物語」等がある。●

洋琴曲はショパンの感化を示してゐると云ふ。●

ミハイル ベルグソンは一八二〇年ワルシャウに生れ、一八九八年に倫敦で歿した。洋琴演奏家、又作曲家として名がある。チャサウでジュナイダーに師事し、伯林でルンゲンハーゲンとタウバートの門に學んだ。一八四〇年に巴里へ、一八四六年に伊太利亞に行き、翌年フイレンツェで其歌劇「モントフォートのルチア」を上場して成功した。一八五〇年より五三年迄維也納にそれから伯林とライプツィヒに住んだ後再度巴里を訪ひ、一幕物の小歌劇の「狩に行く者は場所を失ふ」(一八五九)を上演した。一八六三年にジュネブ音樂院の首席洋琴教師、後少時同校校長の席に就き、後英京を訪ひ、自宅教授をした。作曲には十二大練習曲、作品六十二「教則本」作品六十五、ホ調交響樂的競奏曲、三重奏曲、作品五、英雄的波蘭土舞曲、作品七十二、横笛付奏鳴曲、洋琴と横笛の劇的二重奏曲、洋琴と提琴の二重奏曲、マヅルカ數篇、幻想曲數篇、其他等がある。

アンリー ヴュエャヴスキーは一八三五年ルブリンに生れ一八八〇年に莫斯科の有名なメック夫人邸で長逝した近世最大の提琴演奏家の一人である。幼時母に伴はれて巴里に行き、八歳で巴里音樂院のクラヴェルの受持つて居た級に入學し、一八四五年にはマッサールの敎へたゐた上級に進み、翌四六年には提琴演奏の第一等賞を獲た。一八四八年に彼得堡と、莫斯科で初めて演奏會に立ち、四九年より五〇年迄巴里音樂院に戻り、コレーに和聲を學んだ。それより弟のヨーゼフ(洋琴家)と兄弟で波、露、獨、スカンディナヴィア、白、和、英等の諸國に幾度も樂旅を試み、到る處に非常な成功をした。一八六〇年には露帝附提琴獨奏家となつたので、一八七二年迄は主として露都に住み、又一八六二年より六七年迄此國の音樂院で教職を執つた。七二年には近世洋琴界の巨匠アントン ルービンシュタインと合衆國に樂旅を試み、後單身カリフォルニア迄進んだ。七四年にはヴィエータンの後を繼いでブリュッセル音樂院の提琴演奏教授となつたが、七七年之な

辭して、樂旅又樂旅と南船北馬を續け、健康日に傾き遂に死に及んだ。

近代の提琴演奏家中最も卓越した一巨材たるを失はない。技巧上の困難の如きは彼に對して存在しなかつた。其壯麗、雄大な音は、大膽な奏法と、猛烈な、時としては火山の爆裂するやうな氣質と相俟つて、聽衆を熱狂し了らなければ止まなかつた。又合奏物の演奏者としても立派な伎倆を有つてゐた。

彼の作品は孰れも能く作曲され、燦然たる、極めて力強い效果を有つてゐる。競奏曲、傳說曲、二つのマヅルカは今でもあらゆる提琴家の愛彈する處となつてゐる。提琴及び管絃樂のための作は、作品四のニ調波蘭土舞曲、作品六の「莫斯科の思ひ出」作品十四、嬰ヘ調第一競奏曲、作品十六の諧謔曲、タランテル、同十七の傳說曲、同十九の特性的二マヅルカ、同二十のファウストの主題に據る光耀幻想曲、同二十一の光耀波蘭土舞曲、同二十二のニ調第二競奏曲がある。提琴と洋琴曲には作品一の幻想的狂想曲、同三の「ポーゼンの思ひ出」同五の悲歌的緩徐曲、同七の狂想圓舞曲、同九の「言葉無き物語と上品なロンド」同十一の「露西亞の謝肉祭」、同十二の二つのマヅルカ、同十五自作の主題とその變奏曲、同二十三のジーグ舞曲、同二十四の「東洋的幻想曲」(遺作)、提琴獨奏曲は作品十、狂想的練習曲、同十八の狂想的練習曲（第二提琴付）。彼は又弟と共に作品二の「奏鳴曲の快速調」及び大波蘭土二重奏曲を書いた。

ヨーゼフ　ヴェーニャヴスキーはアンリの弟で、名高い洋琴家である。一八三七年にルブリンで生れ、一九一二年にブリユツセルで長逝した。一八四七年巴里の音樂學校に入り、洋琴をツィムメルマン、マルモンテル、及びアルカンに學び、作曲をル　クッペイに習つた。一八五〇年兄と共に樂旅に上り、五五年より五六年迄ワイマーでリストに師事した。其後伯林で音樂理論をマルクスに學び、一八五七年巴里に戻る。一八六六年莫斯科音樂學校敎師となつて、同府に居を定め、自ら又洋琴學校を創立して盛運に向つた。七五年より六年迄ワルシャウ音樂協會の長となり、後ブリユツセル府に永住の居を定めた。歐洲各國に幾度か大規模の樂旅を試み、提琴に於ける兄の名譽に匹敵する名聲を洋琴界に占めたのである。

作品は管絃樂曲に浪漫的組曲、作品四十一、序曲「沈默王ギヨーム」、作品四十三、ト調洋琴競奏曲、作品二十、イ調絃樂四重奏曲、作品三十二、ト調洋琴三重奏曲作品四十、ホ調提琴奏鳴曲、作品二十四、ホ調洋琴、チェロ奏鳴曲、作品二十六、二洋琴聯奏の幻想曲、洋琴獨奏曲では波蘭土舞曲、作品十三、二十一、二十七、四十八、圓舞曲、作品三、七、十八、三十、

四十六、ロ調奏鳴曲、作品二十三、マヅルカ、作品二十八、幻想曲と遁走曲、作品二十五「大洋の上にて」作品二十八、夜想曲作品三十七等。演奏會用練習曲四、作品九、十、三十三、三十六、及び二十四練習曲、作品四十四等が知られてゐる。

ラディスラス　ヅェレンスキーは一八三七年にガリシアにある自家の所領グロト・コウォーチに生れ、初めクラカウでミレッキーに、プラーハでクレイチに、巴里でダムケに學んだ。ワルシャウ音樂院の敎授で令名が高い。又クラカウの音樂學校長の椅子も占めた事があり、作家として名を知られてゐる。

其作中名あるものは、國民歌劇にショパンが取材した有名な譚詩曲としたものと同じ「コンラード　ワァレンロード」（一八八五、レムベルグ）、「ゴプラーナ」（一八九六、クラカウ）、「ヤーネック」（一九〇〇、レムベルグ）「昔物語」（一九〇七、同上）「パランティーナ」（一九一〇、同上）、小歌劇「ティロールの花」、管絃樂では「二つの波蘭土舞曲」、作品三、序曲「タトラ山中にて」、作品二十七、「悲郷音」、作品三十六、チェロと管絃樂の幻想曲、作品四十「波蘭土舞曲組曲」、作品四十七、洋琴競奏曲、作品六十、交響曲一、第一序曲「森の谺」。室樂では、絃樂四重奏の自作の主題に據る變奏曲、作品二十一、ホ調洋琴三重奏曲、作品二十二、ヘ調絃四重奏琴、作品二十八、ヘ調提琴奏鳴曲、作品三十、イ調絃四重奏曲、作品四十二、ハ調洋琴四重奏曲、作品六十一、管絃樂付唱歌曲十一、風琴付彌撒曲、經文歌、合唱曲多數。洋琴曲は狂想圓舞曲、作品九、諧謔曲とガヴォット・作品十八、ホ調奏鳴曲、作品二十、演奏會用大諧謔曲、作品三十五、大波蘭土舞曲、作品四十五、謝肉祭の時、作品五十二、其他。二十五、風琴前奏曲、作品三十八。又和聲論、（ログスキーと共著）音樂原論、對位法論を波蘭土語で著した。

ヅィグムント　フォン　ノスコヴスキーは一八四六年ワルシャウに生れ、一九〇九年同府で長逝した。一八六四年より七年迄ワルシャウ音樂專門校に學んだ。盲人用の記譜法を發明した後音樂協會は一八七三年に彼を伯林に留學させ、キールとライフの下に研究させた。七六年にはコンスタンスのボダウ協會の指揮者となり、八一年より九二年迄ワルシャウ音樂協會長、一八八八年ワルシャウ音樂院の敎授、一九〇四年ワルシャウ好樂會の第二指揮者、六年にはワルシャウ歌劇座の第一指揮者に歴任した。作家としても又少からぬ貢獻がある。

歌劇には「リヴォア　クインティラ」（レムベルク、一八九八）、「ヴォローク」（ワルシャウ、一九〇七）、舞踊劇「火の莖」（ワルシャウ、一九〇二）小歌劇二、交響曲三、（イ調、ハ

詞、「春より春へ」)、「海の眼」、演奏會用序曲「人生より」「ショパンのイ調前奏曲の主題に據る變奏曲」「曠野」作品六十六、交響曲詩、獨唱、合唱及び管絃樂のための唱詠曲「ヴォヂツィアンカ」「ヤシオ」「歸還」「民謠の中の年」「騎士唱詠曲」「波蘭土民謠のための音[illegible]」絃樂四重奏曲三、洋琴四重奏曲一、洋琴獨奏、聯奏曲多數、多くの歌曲がある。是等は孰れも興味深いものであるが、吾々外國人にとつては、殊に各國の民謠研究家にとつては彼の出版した二冊の民謠集である。又一九〇二年に和聲論を、一九〇八年に對位法論を公けにした。

ヤン　ガルは一八五六年ワルシャウに生れ、一九一二年にレムベルグに逝く。波蘭土では名ある聲樂家、聲樂教師で、又指揮者である。維也納でクレンに、ミュンヒェンでラインベルガーに、ミラーノでラムペルティに教を受けた。一八八〇年レムベルグのガリシア音樂協會指揮者、一八八六年にはクラカウ音樂院の聲樂教授、一八九二年後はレムベルクの合唱會「谺」の指揮者をした。作品は數百の多きに上るが、殆んど全部聲樂曲で、約四百の歌曲、合唱曲、四重唱曲を作つてゐる。

マリア　ヴァ　ロヴスカ　シュ　マノフスカは一七九〇年に波蘭土に生れ、一八三一年に、彼得俱羅土で歿した。有名な女流洋琴家である。莫斯科でフィールドに教へを受け、一八一五年より三〇年迄ワルシャウに住み、幾度も獨逸に樂旅を試みて成功し、又彼得俱羅土で盛に演奏會を開き、滿都の好評を博したので、遂に宮廷付洋琴家に任ぜられた。演奏の餘暇作曲にも親しみ、多くの練習曲、マヅルカ二十四曲。夜想曲「囁き」等を公けにし、大シューマンの賞讚を受けた。

以上列敍した十三樂家は十九世紀より、二十世紀にかけて世に現はれ、波蘭土音樂の水準を世界的の高さに上げると云ふ國民的偉業に貢獻した多くの樂家中、最も名ある人だけである。此の外尙ほ記すべき樂家は數十の多きに上るのであるが、紙數を大分越えてゐるので省略する。又古來世に出た波蘭土音樂家中最大の人はフランソア　フレデリック　ショパン（一八一〇――一八四九）である事も、現時最大の波蘭土の樂家が復活後の波蘭土共和國第一世の大統領に推され、最近政界を退いて再び米國に樂旅を試み、或は近き將來に來朝の噂あるイミヤス　パデレフスキー（一八六〇、露領波蘭土アドリアのクリロヴカに生る）と、現に昨秋來朝して帝劇始め、京阪地方で妙技を示したレオポルド　ゴッドフスキー（一八七〇、露領波蘭土ヴォルナに生る）である事も、餘りに知られてゐる事であるから、之を略し、最近に於けるワルシャウ樂界の消息を語つて此稿を結ばうと思ふ。

大戰も終つて波蘭土はショパン以來多年國民の熱望してゐた獨立を得、諸般の平和的施設も漸次舊態に復し、音樂、戯曲、繪畫、彫刻等の藝術も一時に擡頭して、將に百花撩亂の春を迎へようとしてゐる。國立歌劇座では昨年の樂期に「トリスタン」「ヷルキューレ」「ローエングリーン」「ボエーム」「トスカ」「蝶子夫人（マダム・バタフライ）」「椿姫」「アイーダ」「リゴレット」「ホフマンの物語」「ピックダーム」「エウゲニー オネエーギン」「惡魔」「ティーフランド」「盲目（トートアウゲン）」、國民歌劇では前に述べた「ゴプラーナ」「ハルカ」アダムスの「バビノのレイ」(初演)、シュマノフスキーの「ハギート」(初演)が上場され、ロシュッツキーの舞踊（バレー）「パン トゥワルドフスキー」は一樂季中に百回以上演出され、今年はコーペンハーゲンの王立歌劇座で上場される。歌劇座の監督はエミル ムリナルスキー、歌優には保音（テノール）にアダムディガスとグルシュツィスキーの兩名優があり、ワルシャウ歌劇座の首席女歌優（プリマドンナ）にマリア モクルシュツカ夫人、低音（バッソ）に名手ムソシューがあり、舞臺監督にボプラフスキー、意匠家にヴォンシチェンティー ドゥラビークがある。外國で有名になつてゐる人に紐育メトロポリタン座のアダモ ディドゥールがある。以前ワルシャウ好樂（フィルハ）會の指揮者であつたヷルチマール ケーニッヒと洋琴家ヅビニエフ ドゥルゼヴゥツキー等も盛んに活動し、又演奏會歌者のシュマノフスカ夫人が能く波蘭土作家の作にかゝる歌曲の紹介に力めてゐる。ドゥルゼヴゥツキーとシュマノフスカ夫人は相携へて同じ演奏會をプラーハ、維也納、伯林等諸外國の都府で開き、專ら波蘭土音樂の紹介に力を盡してゐる。一般に國民的の自覺に基き、音樂上に於ても、政治上と同じく、露、獨、佛、伊の影響を離れ、民族的獨立を得ようとの運動が見えるやうである。

チェコ・スロバキアの音樂

由來歐羅巴に國を樹てゝゐる民族は孰れも音樂を愛好するが殊にスラヴの諸民族は他の民族よりも一層強い熱愛を有つてゐる。ウォトコムの音樂史の中にもドゥヴォルザークの少年時代を叙するに當り「幸にも彼は音樂的の環境の中で暮らすことが出來た、何となれば、ボヘミアでは音樂の嫌ひな人は一人も無い。」と書いてある。又チェコ・スロバキア最大の作曲家スメタナの歌劇「ダリボル」の中でも、年寄りの牢番が囚囹の人となつてゐる騎士にヴィオリンを一つ贈つて、「チェック人で音樂の嫌ひなものはありませんよ。」と云つてゐる。これは六世紀にスラヴ民族が東北から移住して來て、現今チェコスロヴキア共和國と稱せられてゐる處（即ち昔のボヘミア）に定住するやうになつてから、今日に至る千三百餘年の間常に

其通りであつた。チェック民族は、世界の藝術及び學術の進步發展に夫々貴重なる貢獻をする事に努力して來たのであるが殊に彼等が其爲めに最も顯著なる位置を文明國民の上位中に占め得るやうになつたのは、主として音樂上に於ける彼等の絕大なる功績に他ならない。近代の藝術に於ては古代より現今に至る迄常に高い名聲を維持して、之を失墜する事なく、單り作曲家中に世界有數の鉅匠を躍出させたばかりでなく、あらゆる樂器の獨奏家、及び管絃樂の演奏家中に優秀なる巨材を無數世に贈つてゐる。

孰れの國の音樂もさうであるが、チェコスロヴァキアの音樂も宗教樂と民俗樂とに分ける事が出來る。其中宗教的の歌謠中に數ふ可きものは極めて多數あり、中には隨分立派なものがある。就中最も愛唱されるものは「主よ御惠みを垂れさせ給へ」で、十世紀の末葉より現時に至るも、彼等の口は此が吟誦を絕たない。次に有名なのは「聖エンセスラス」で、一三〇〇年頃より世人の愛唱する處となつてゐる。フシテの雄壯な軍歌「汝等神の戰士共よ」も亦極めて有名である。

チェック語で書かれた最古の音樂理論は一五五八年に出版されてゐる。それはヤン　ブラホスラフの「音樂」である。彼はボヘミア同胞教會の屈指會員で、又卓越した音樂家であつた。此書はチェック音樂史上重要な著述である。

一六二一九年に白山の役で大敗の憂目を見た後、ボヘミアは遂に獨立を失つた。斯くて首府のプラーハはチャールス四世の治下に在つては中央歐羅巴の中心であつたのに、戰敗國の悲しさ、遂に後ろに押し込められ、ブーダペストや維也納が代つて幅を利かすやうになり、敗れた國民は貧困に陷り、一家を擧げて東西に離散するものも多く、行方定めぬ放浪の旅に追はれた人々も少くはなかつた。ボヘミアの音樂者も多くは外國に逃れたが、其中には音樂史上有名な人々もあつた。恰も此頃教會に於ける器樂が以前よりも一般的になつて來たので、彼等は優良な器樂家の需要が盛な處ならば何處の國へでも行つて活動した。或者は獨逸に行つた。或者は露西亞に逃れた。又或者は佛蘭西に、又或者は伊太利亞に糊口の道と安住の地とを求めた。當時高名な音樂家中ヴイオリン演奏家のヤン　スタミッツ（一七一七――六一）がある。獨逸のマンハイムに古典交響樂會を創立したのは此人である。

故國を去つて異鄕の空に彷徨つた樂人達は、各々其國で行はれてゐた樂風の影響を受けた。ヨゼフ　ミスリヴェチェック（一七三七――八一）の作を見ると能く之が窺はれる。即ち彼の居つた伊太利亞の感化が多分に現はれてゐる。彼國ではヴェナトリーニといふ伊太利亞名で知られてゐるが、一般には「神樣のやうなボヘミヤ人」と呼ばれて居た。

十八世紀に至つてチェック音樂は旋律に於ても和聲に於ても極めて明らかに國民性を發揮し始めた。當時最も注意すべき作家はボフスラフ チェルノホルスキー、ヤン ディスアス ゼレンカ、フランティシェク ハーベルマン、ヤン ヴァラフ及びフランティシェク トゥーマである。ヘンデルはハーベルマンの旋律を採つて樣々の曲を作つた。

十八世紀の末葉より、十九世紀の初めにかけて、樂界最大の人物はモーツァルト、ベートーヴェンの二大家である。モーツァルトの歌劇「フィガロの結婚」が一七八六年の五月一日に維也納で初演された後、其成功を嫉む徒黨は何とかして彼の盛名を毀損しようと、あらゆる陋劣の奸策を弄した。斯くて彼等徒黨の辛辣な計略は極めて有效であつたために、モーツァルトは激怒して、斯かる卑劣な待遇をした處では二度と其歌劇を上演しないと云つた。次に「フィガロ」がプラーハで上演されたが、維也納とは打つて變つた大成功で、公衆の熱狂は極度に達し、モーツァルトは一躍全プラーハ樂界の崇拜の的となつた。爾來此都は約半世紀間モーツァルト一人の天下たる觀があつた。當時第一流の國民的作家は盡く彼の熱心なる崇拜者となつたので、其中にあの高雅でまた詩的な洋琴家のヤン ラディスラフ、及び十九世紀前年に於けるボヘミヤ最大の樂家ヴーツラフ ヤン トマシェック（一七七四——一八五〇）を算へる事が出來る。

チェック歌劇が初めて作曲されたのは、浪漫的劇派が獨逸に優位を占めてゐた時である。作者はフランティシェック シュクロウプ（一八〇一——六二）で、其歌劇はチェック音樂史上記憶すべき「鋳掛屋」である。上演されたのは一八二六年二月二日である。彼の筆になつた、人を動かして止まぬ歌は直ちにチェック國民の國歌となり、以て今日に及んでゐる。此歌とは即ち「我家や何處？」である。

民謠の有する美は特種のものである。古來偉大な作曲家は皆彼等の國の民謠を其作中に取り入れてゐる。チェコスロヴァキアにも多くの美しい民謠がある。先づ第一に靈感を之に仰いだチェック作曲家にパヴェル クシシュコフスキー（一八二〇——八五）がある。彼は幾多の特性ある佳作を遺した。其合唱曲「溺れし少女」「愛の形見」等は合唱曲中の名篇佳什たるを失はない。

三大チェック作曲家

十九世紀に現はれて、チェック音樂をして世界的意義を有するに至らしめた作家中、特筆大書すべきはスメタナ、ドヴォヴァーク、及びフィビッヒの三大家である。

一、ベドッシュツヒ　スメタナ（一八二四—一八八四）

近代チェック音樂の祖と稱せられるスメタナはボヘミアのリトミシュルに生れた。彼も亦神童の一人で、六歳の時既に巧妙なピアニストとして演奏場に現はれた。稍長ずるに及んでプラーハに赴き有名なプロクッシュに學んで古今を通じ最大のチェック洋琴家の一人となつた。又彼はワイマールでリストの敎を受けたが、リストは死に至る迄スメタナのために心から心配した。一八五六年聘せらせた瑞典に赴き、ゴーデンブルク好樂會の指揮者となり、一八六一年迄止まり、初めて交響樂詩「ハーマン　ヤール」、「リヒャルト三世」「ワァレンシュタインの陣營」を作つた。

瑞典に於ける彼の活動は目覺ましいもので、其占め得た位置と、博し得た名聲は一世の樂人の羨望する處であつた。併し惜し氣もなく之を棄て、故國に足を向けたのはプラーハロインチリム劇場が出來たからであつた。之こそ今の廣大な國立劇場の前身である。此報に接して、自分を措いてチェック歌樂劇創始の重任に當り得べき力量のある者は見渡した所無い。これはどうしてもプラーハに歸つて努力奮鬪しなければならぬ。自分の天職は之であると内心深く覺悟したに違ひない。

スメタナは八箇の歌劇を作つた。最も有名なのは「取換へられた花嫁」である。滑稽歌劇「接　吻」と「祕　密」も前者に劣らず美しい。併し彼が祖國に捧げた最大の作品は六つの交響曲詩よりなる一組の傑作「祖國」で、其構想は瑰麗を極め、雄渾、雄偉の趣を盡してゐる。其他の作では、近代樂中の珠玉とも稱すべきホ短調絃樂四重奏曲「我生涯より」洋琴曲の「チェック舞曲」、「海上の歌」、「ロルニッカー」、「ピーセニュナモツィ」があり、歌曲では「ヴェチェルナイ　パイスネ」、「夕の歌」等がある。

二、アントーニン　ドゥヴァヅァーク（一八四一——一九〇四）

第二に數へられる偉大なチェック作曲家ドゥヴァヅァークはスメタナよりも先に外國で名を擧げた。彼の作品は極めて多いが、其中で彼の個性の能く現はれたものはスラヴ舞曲である。合唱曲「スタバト　マーテル」、「聖ルドゥミラ」「幽靈の花嫁」は極めて有名で、交響曲も世に知られてゐる。紐育音樂學校の長として數年米國に住み、名高い交響曲「新らしき世界より」を作つた。劍橋大學は名譽博士の稱號を贈與した。

彼は滑稽歌劇「冗談好きの百姓」「頑　固　頭」「惡魔とカーチャ」悲歌劇「ディミトゥリイ」「ヤコビン」及び傑作として知られてゐる「妖精」其他多くの樂曲、獨唱曲、合唱曲を作曲した。彼の旋律は無限の種々なる情緒の陰影を表はしてゐる。

多感にして、しかも素朴なる形式より、或は嬉々たる、或は熱烈なるスラヴ少女の節奏的な舞踏に至る迄、殆んどあらゆるものが彼の特色ある旋律によつて描き出されてゐる。彼の音樂に在つては、最も強い感動を與へるものは形式よりも、寧ろ美しい表現法と、音の充實して、且つ明朗なる事である。美しい旋律の創造力に於ては容易に彼の匹儔を見出す事は出來ない。

三、ツデニェック　フィビッヒ（一八五〇―一九〇〇）

三大家の第三位を占めるフィビッヒは幾分ワーグナーの感化を受けたが、單に彼の方法の模倣に止りはしない。國民的の傳說に據つたのがフィビッヒの歌劇に二つある「シャールカ」と「プラニーク」である。他の二つは英文學に取材した「嵐」と「ヘイディー」である。併し最も獨創的の作は默劇「水の精」、「降誕祭の前夜」及び「ハコン」である。

默劇はボヘミアの音樂家イーヅィー　ベンダ（一九二二―一七九五）の創設に係り、其作「ナキソスのアリアドゥナ」が此形式に於ける最初の作である。從つて之を更に發達させたはのチェック作曲家の繼承した傳統である。

フィビッヒの音樂は本質的に浪漫的である。スメタナやドゥヴァツァークの音樂程獨創的ではなく、一層近くシューマン浪漫主義の精神を遵奉し、云ひしらぬ美趣と、情熱の表現に於て卓越してゐる。併し手法の上ではシューマンよりも寧ろワーグナーの方法に從つてゐる。

フィビッヒはチェックスロヴァキア國民樂派と稱すべき物の傳統を繼承し、之を後世に傳へる有爲の弟子を多く殘して二十餘年前に長逝した。紙數が無いから姓名だけ列擧する。ヨゼフ　ファースター、カレル　コヴァショヴィッツ、ドゥヴァツァークの弟子にヴィチェスラフ　ノヴァーク、ヨゼフ　スックがあり、其他にヤナチェック、ネシュヴェラ、チューランスキー等の諸作家がある。

靑年作家中で最も華麗な天分を有する人々としては洋琴の大家ヴァーツラフ　シュチェパーン、ヤロスラフ　クシチュカ、及びイイラークを擧げなければならない。併し靑年作曲家中で最も有望なる前途を期待されてゐるのはオタカル　オストルツィルであらうと思はれる。彼はボヘミア、即ちチェコ・スロヴァキアに於ける歌劇作家中最近の代表者で、其歌劇「ヴラスタの最期」「クナルの眼」「蕾」の三佳作は國立劇場で大歡迎を受けた。

終りに、各種の音樂的活動の諸機關に一瞥を與へて見ると、國立劇場と音樂學校の外にも首都プラーハには尙ほ多くの著名な音樂家の團體がある。藝術家組合は有名なノヴァーク

を會長とし、新進作家の爲めを圖り、合唱團として盛名ある共鳴合唱團（フラホル）は男女會員三百九十名を算し、スピルカの指揮する「ボヘミア教師合唱團」（ズドルヂエニー・チエスキフ・ウチテル）ミクラーシュ　ヴァフの指揮するモラギア教師合唱團（ズドルヂエニー・モラフスキーフ・ウチテルー）は孰れも全歐に名を知られた合唱團である。器樂では「チエック室樂協會」（ズドルヂエニー・コモルニー・フドビ）「チエック四重奏團」（チエスケ・クヴアルテト）國民を音樂的に教育するために音樂季節（シーズン）中低廉な會費で多くの人人に聽かせる「チエック好樂會」（チエスカ・フイルハルモニツカー・スポレチノスト）オストルチルを會長とする「管絃樂協會」（オルケストラルニー・スポレチノスト）があつて、夫々各方面で盛んに活動してゐる。又實際にプラーハ程藝術的の音樂會が頻繁に開催する處は世界の何處にも無い。樂季（シーズン）中は毎日のやうに市內各所にある奏樂堂や公會堂、其他で同時に幾つ音樂會が開かれるか數へきれない程である。

ボヘミア、（卽ち今のチエコスロヴキアは從來多くの著名なる音樂教育家を世界に出してゐる。さうして國內に於ける音樂教育は音樂院（コンセルヴアトアール）に於ても、又大學に於ては、世界孰れの國に比しても些の遜色が無い。大學に於ける音樂史の講座は、以前はホスティンスキー教授の擔當する處であつたが、今は其高弟ネエドゥリーが占めてゐる。歐洲の大戰が勃發する迄はオタカル　シェフチークの音樂學校は有望な青年ヴィオリニストが世界の各地より集る處であつた。シェフティークがプラーハ音樂院に教鞭を執つた頃數へた多くの弟子の中有名なものは第一に現今ヴィオリンの名家の多い中でも第一位に立つ有名なコチアンがあり、ツィムバリストがあり、クベリークがあり、マリー　ホールがある。此外餘り我邦にこそ知られては居ないが、オンドツィチエック、カルバートスン、エム・シカルド、マリー　ヘリテ、ス、エリーナー　ジャクスン、フラン　ランヂ等がある。コチアンとクベリークと、オンドツィチエックの中では、コチアンが最大の名手である事はチエコスロヴキアの批評家の盡く一致する處であるが、世界的名聲を博してゐる點では、早く國外に出たり、亞米利加へも行つたりしたゝめにクベリークの方が上である。

ヤロスラフ　コチアンは一八八四年にボヘミアのウォルチンシュエールトに生れ、四歲の時より學校教師をしてゐた父よりヴィオリンを學び、十二歲でプラーハ音樂院に入學し、シェフチークに教へを受け、其祕藏弟子となつた。卒業試驗の時パガニーニの競奏曲（コンチエルト）を彈いたが、非常な出來で二十回以上も拍手で呼び返された。一九〇一年に初めて樂界に立ち、爾來歐米各國に樂旅を試み、到る處に好評を博したが、クベリークのやうな外交的手腕を振はない、地味な藝術家であるから、一般の人氣は後者には及ばない。併し非常に立派な技術と高い藝術家氣稟とを有つてゐる。今年は再度の樂旅を米國に試み、場台により日本を訪れる希望を有つてゐる。

ヨハン　クベリークは一八八〇年にブラーハに生れ、子供の時より庭師であつた父親にヴイオリンを習ひ、後シェフチークに就き、ブラーハ音樂學校で學び、其後又維也納で修業した。一八九八年に初めて樂界に打つて出で、一九〇〇年に歐洲各國を、一九〇一年より二年にかけ米國に樂旅を試み、絕大の好評を博した。一九〇二年に倫敦好樂會はベートーヹン賞牌を贈呈した。其後歐洲全土、及び米國に數回の樂旅を試みた。驚嘆すべき技巧家で、燦然たる演奏は人を醉はさずには置かない。又好んで華麗な曲、熟練と妙技を示すに都合よいものを選ぶので、大多數の狂喜する處となつてゐる。

チェロの名家としてはボフミル　シコラが居る。一八九〇年にグリンスクで生れ、子供の時より樂長であつた父にヴイオリンを習はせられたが、厭がつて學ばなかつた。會々人よりチェロを貰ひ其男性的な音色が氣に入つたので勉強する氣になり、急速の進步をしたので、キエフの帝王音樂學校に入り、ミュ　ラートに學び、後ライプツィヒ音樂院で、有名なクレンゲル教授に敎へを受け、其特寵の下に卒業後も内弟子として一九一一年迄止つた。同年此都でクレンゲル教授が特にシコラのために作曲された二重競奏曲を彈いて初演奏を試みて、大成功をし、爾來獨墺二國の大都市、露國各地、コーカサス、シベリア、支那、日本、米國に樂旅を試み、到る處に非常な成功をした。一批評家が米國の音樂雜誌で論じた通り日本の音樂界の門を世界の音樂界のために開いた第一の人がシコラであつた。彼の成功が傳へられるや、先づエルマンが來、シューマン　ハインクが訪れ、ヂィムバリスト、バーロウ、ゴッドフスキーが之に續いた。此意味に於てもシコラの名は我邦の音樂史上特筆さるべきものである。

聲樂家ではエムマ　デスティンノーヴ（デスティン）の名が全世界に響いて居る。これは舞臺名で本名はキットゥルである。劇的上高音歌手で現時第一流の中に數へられる。一八七八年ブラーハに生れ、初めヴイオリンを學んだが、聲の良いのを發見されてから、レーウェ　デスティン女史に就いて、敎へを受けた。デスティンの名を舞臺名にしたのは師に對する謝恩の美しい心より出たと云ふ。一八九八年に伯林の王立歌劇座で、サントゥッァに扮して初舞臺を勤め、爾來同座の常任技藝員となつた。聲樂上の優秀な技術と、俳優としての卓越した天才とのために第一流の名優として一世の仰ぐ處となつてゐる。一九〇一年バイロイトの第一回演奏に大ワーグナーの未亡人、コジマは女史を選んで「さまよへる和蘭陀人」の中のゼンタを、リヒャルド　シュトラウスは有名なワイルドの作に作曲した歌劇「ザローメ」を伯林と巴里で上演するに當りサローメを歌はせた。一九〇五年に倫敦でプッチーニの

「蝶子夫人」の蝶子夫人、ヹルディのアイーダを歌つた時は幽のやうな喝采であつた。又一九一〇年にはプッチーニの「カリフォルニアの娘」のミンニーを初めて歌ひ、非常な評判であつた。其得意とする役割は八十の多きに及び、明眸珠のやうな美聲は、無限の聲調を自由自在にすることが出來ると云はれてゐる。

以上擧げた四人は現時幾千を以つて數へるチェコ・スロヴキア出身の音樂中最も偉出した人々の中の又偉出した名家であるが、此外にも我邦で第一流と云はれる人々より數倍も偉大な音樂家が數百を以つて數へる程ある。

歐洲大戰前の此國に於ける音樂生活は頗る高い水準に達した、整然たる組織を成してゐた。戰亂中は一時秋風落寞の觀を呈してゐたが、平和克復と共にチェコ・スロヴキア共和國の成立を見、長く墺洪國の壓制の下に呻吟し乍ら、民族的復活の夢を見てゐたのが、實現されたので、捲土重來の勢を以つて、更生の溌剌たる意氣を示し、勃興の一大氣運は正に力強く動きつゝある。露西亞と共に、將來樂界に雄飛すべきは此新興國民であらう。

獨逸及び佛蘭西音樂の歷史的研究

遠藤宏

現代歐洲に於ける此の二大音樂の潮流を二つに分けて論ずるよりは、二つの異つた文化を背景として同時代に如何なる音樂が對立して發達して來たかを歷史的見地から略說したいと思ふ。尙此の二國の音樂が如何に影響し合つたか、又如何なる傾向が同じ樣に存在してゐたか、又伊太利の音樂の發達が如何に二國の音樂に移植され、變化したかを考へたいのである。而も私の此の研究の立場は全然リーマンの音樂史的立場と組織とは異つて、主として時代と文化とを常に背景としてゐるのであるから、音樂の形式、理論の發達を基礎とした音樂史ではない。勿論必要な場合には形式の發達をも混ぜて書く考へである。

一、中世期より文藝復興期（1300―1600）まで

紀元前及び十一世紀迄は論ずるに足るものは無い。中世の大部分は伊太利に於て、宗敎音樂が漸次發達してゐた。單一の聲樂から多聲的となり、ディスカントウースの發達につれて、和聲は漸次複雜となり、同時に此等の聲樂を表現する爲めの、音譜（メンシフラル・ノーテン）が發達してゐた。此の中世期の末期に佛蘭西の明るい野と、獨逸の森の中から非宗敎的な歌謠が生れた。それは南佛蘭西のトロバドールと北佛蘭西のトルベール及び獨逸のミンネジンゲルとマイステルジンゲルとであつた。いづれも一一〇〇年頃から起つてゐる。彼等は自ら詩を作りそれを歌謠として、ハープ・リュート・ヴィオルに合せて歌つた。詩と音樂とは密接に結びついて彼等の精神の裡に生れた。マイステルジンゲル（平民歌手）を除いて他は皆貴族と騎士であつたから、愛を歌ひ、婦人の美を稱へ、傳說を詠んだ。特にトロバドール（十三世紀に消滅）は後世の詩的文學に、トルベールはフランダース地方と英國の音樂に强い影響を與へてゐる。反之獨逸のミンネ（愛の意味）の歌人の歌謠は愛を歌ふのみでなく、自然を讚美してゐる。且つトロバドールの氣輕さに比してもつと宗敎的英雄的な精神に富んでゐる。乍併それだけ貴族的であつて一般の民謠として殘らずに過ぎた樣である。彼等の歌謠の中にはフラウ・ホダの傳說もあれば、ワルテルがハインリッヒ王の訃を傷んだ歌もある。「獨逸の國はあらゆる國に優る」と云ふ愛國の歌もあるし十字軍に勇しく出征して、東方の海に嵐と戰ふ事をも詠んでゐる。當時の大事件は十字軍の問題であつた。この出征によつてラテン民族とゲルマン民族との接觸の影響は、音樂の形式にも現はれてゐると音樂史家は云ふ。

最後に平民歌手（マイステルジンゲル）（十四世紀――十六世紀）に就いて簡單に述べる。此の時代は十字軍の失敗と共に文藝復興期となり、獨逸の商工業の發達について平民の社界的運動が盛んとなつた時代である。靴屋のハンス・ザックスに依つて代表された平民歌手の歌謠の精神はミンネジンゲルのそれとは異つたものではあるが、其形式には關係がある。商工業の發達と共に平民歌手は盛んとなり、先づ一三〇〇年頃ライン河畔に始り、フランクフルト、ニュールンベルグ、プラーグに及び十五世紀には平民歌手はストラスブルグ、ミユヘンに及び獨逸國內に廣まつたが、十六世紀には漸次廢れた。此の平民歌手の音樂上の影響は民間に音樂の盛んになつた事のみではなく、十六世紀に於ける宗敎改革（レホルマツィオン）に際し、平民歌手の歌調が新敎派の寺院の聖歌に多く採用された事である。

二、十六世紀

十五世紀の音樂は伊太利よりはネーザーランドの方が盛んであつたけれども、文藝復興の末期に、卽ち十五世紀の末葉から十六世紀に掛けては、伊太利文化の最盛期であつた。此の時代に樂譜の印刷、出版がベネチアとローマを中心として始めて行はれ出した。又伊太利に於ける宗教樂は、ベネチア派(聖マルタ寺院を中心としたる)とローマ派(シスメイン・チャペルを中心としたる)によつて發達し、此の間パレストリーナが宗教樂の先導者となつてゐた。此の樣な時代に獨逸も佛蘭西も共に宗教樂の變化と發達とがあつた。

(A) 獨逸に於ける宗教學

十六世紀に於ける獨逸宗教樂の中心には三つある。第一はハプスブルグ家の膝下であるオーストリア と第二はバヾリア、第三はサキソニアである。オーストリアとバヾリアとは宗教の關係上伊太利宗教樂と同一系統であるが、サキソニアのみは新しき宗教樂を必要としなければならなかつたのは前記の如く宗教改革の爲めであつた。

宗教改革はマルティン・ルーテルに依つて、十六世紀の初期にサキソニアを中心として行はれたのは論ずる迄もない。ルーテル(一四八三――一五四六)は新教の爲めにラテン語を廢して一般民衆の理解する自國語を用ゐ、動搖せる民衆の統一の一方法として、新らしき讃美歌の必要を感じ前述の如く民衆間に行はれる普通の歌を採用し、且つ又新しき讃美歌をも作曲せしめた。ルーテルは一五二四年に四つの聖歌と四五年に三十四の聖歌を作詩してゐる。此の中數個の聖歌の爲めに自らメロディーを作曲した。元來彼は音樂を愛し、フリユートとリユートとを好く奏したさうであるが作曲家ではなかつた。音樂上の顧問はヨハン・ワルチル(一五七〇年歿)等であつて、讃美歌の編纂や作曲は彼等に命じてゐた。合唱曲としての聖歌は最初テノールの中にメロディーを歌はせる樣な對位法的のものであつたが一六〇〇年頃より和聲的の合唱曲に發達して行つた。音樂史的に重要な事は對位法(コントラプンクト)よりも和聲(ハルモニー)によりて多く據つて作曲される新しい傾向が新教宗教樂に行はれて來た事である。且つパレストリーナの派を摑んだ對位法的宗教樂がカトリツク寺院の中に於てそれ以上發達し得なかつたのに反して、此の新教の宗教樂が新しい精神を持つて新教の行はれる所へ發展して行つた。そして幾多の作曲家を生んでゐるそれが後世に非常に影響をした。

最初に擧げたオーストリアの宗教樂とは何んであるかを一言して置く。――それは神聖ローマ皇帝の爲めの音樂である。一四三八年以後皇帝はハプスブルグ家から出てゐる。皇帝は

上古ローマ帝國を夢みる浪漫的觀念と中古に於けるカトリック敎的統一の精神と、且つ皇帝及び朝廷の威嚴の爲めに舊敎的宗敎樂を採用して音樂の施設をなした。これが皇帝の音樂である。此の音樂を司つた音樂家は多くネーザーランドから來た。ハインリツヒ・イザーク、パウル・ホーフハイメル、ヤコブ・クレメンス等であつて多くの作曲をしてゐるが中には、新敎的聖歌に似たものも多數にある。

十六世紀に於ける獨逸音樂のもう一つの中心は前に擧げた様に南獨のバヷリアである。宗敎的には反新敎であつて、ローマとの關係が密接であつた。平民歌手の根據であつたニュールンベルヒ、アウグスブルグ、ウルムズ等の南獨の諸市は皆音譜の印刷や樂器の製造が盛んであつた位ゐに諸藝術と共に音樂も盛んであつた。特に當時パレストリーナを除いては他に比類の無い程音樂の天分を持つたオルランド・ディ・ラッソ(一五三二――一五九四)が南獨逸に來て、一五五六年招かれてミュンヘンに來り、六〇年に宮廷音樂長となり、以後卅年間尊敬の中心となつて作曲に從事してそこで歿した。

彼は堅固なる舊敎信者であつたバヷリア王アルベルト五世の爲めに、多くの宗敎樂を作曲した。又彼は非宗敎樂マドリガール、カンツオネツタ等をも作曲した。

(B) 佛蘭西に於ける宗敎樂

十六世紀の佛國は政敎共に騷亂の渦中にあつた。バロア家のフランシス一世が保護した巴里の宮廷音樂は主としてネーザーランド派の音樂家によつて行はれた。勿論舊敎派の音樂であつた。けれども宗敎改革の波はツウイングリ及びカルビン派の新敎運動に依つて起され一五五〇年に前には既に佛蘭西全土に浸入した。かくして十六世紀の後半の大部分はナントの勅令の出る迄新舊兩敎徒の爭亂の時代となつてゐる。此の間フーゲノート(カルビ派新敎徒)は彼等自身の讃美歌を必要とした。最初ツウイングリ派の改革者は舊敎寺院の攻擊に際し、大オルガンを破壞し、合唱曲集等を滅却したが、カルビンは新しい聖歌の必要を感じてこれが作曲を奬勵した。カルビン派の聖歌は、ルーテルのそれに似てはゐるが異つた特色を持つてゐて、美しい和聲をした合唱曲が多い。クレマン・マロー(一五四四年歿)は最初カルビン派の聖歌の作曲者である。彼は初めバロア家の國王に奉仕した音樂家であつたがブルボン家の勝利となつて逃れてスイスに行きそこで新敎的聖歌を作つた。彼の歿後、ロアン・ブールジョア及びクロード・グーディメール等の音樂家によつてカルビン派即佛蘭西新敎の聖歌が作られたのである。尚ヘンリー四世はフーゲノートに同情があつた爲め大いに力强かつた。

三、十七世紀

獨逸は三十年戰爭（一六一八――四八）の爲めに十七世紀の大部分を戰禍と其後の疲弊とに送つた。反之佛蘭西はルイ十四世の長い統治の下にあつてロココ時代の文化の基礎を作つたけれども新教徒は國王の絕對的權力と豪奢な生活の背後に再び壓迫されてゐなければならなかつた。たゞ伊太利のみが比較的平穩無事であつた。

十五、六世紀に發達した宗敎樂（聖樂）と、十七世紀後半期から十八世紀に亙つて發達したオラトリオ（聖劇）の如き大宗敎樂との間には直接的關係は無い。音樂史は其間に器樂の發達と劇的音樂の發達を論じなければならぬ。

劇的音樂の發達――これが十七世紀音樂の最も重要な問題である。文藝復興の運動は造形美術や文學のみではなく、音樂に於ても亦さうである。フロレンスに於けるバルデイ、コルシ、ガリレイ等の學者間に行はれたギリシヤ劇の復活の運動に刺戟されて歌劇が起つたのである。最初の歌劇と一般に考へられてゐるのはヤコポ・ペリの「ダフネ」であつて、一五九四年（パレストリーナの歿年）フロオレンスで上演された。この樣な劇的音樂に刺戟されて、ローマに行はれた宗敎劇は音樂の要素を採り入れて、オラトリオの端緖をなした。その最初のものと考へられるのは一六〇〇年ローマで上演されたカバリエリの聖劇「アニマ・エ・コルポ」であつた。此等の劇的音樂は器樂の發達と共に漸次發達し、モンテベルデ、カバリ、カリツシミ、セスチイ、及びスカラツチイ（ナポリ派）等を生んでゐる。かくして佛蘭西及獨逸もこの樣な傾向の影響を受け、且つ多くの伊太利音樂家が伊太利歌劇を移植し、彼等も亦佛獨の風に同化して、こゝに新しい音樂の運動が起つた。其中最も有名なのが、佛蘭西の舞踊劇（バレー）と獨逸の歌ふ劇（ジユングシユピール）と英國の假面劇（マスク）とであつた。此等は皆後世の大歌劇に非常な影響を與へた。

(A)　佛蘭西のバレー

舞踊劇的な要素は十四世紀頃に既に見られる所であつて、元來佛蘭西人の趣味である。宮廷の儀式にさへバレーが用ひられ、十六世紀後期には國王がこれを奬勵した。ヘンリー四世は在位廿年間に八十のバレーを宮廷で演出してゐる。それが伊太利歌劇の移入によつて、劇的音樂に舞踊的要素を多分に混入したものを劇的場面に從つて舞臺上に展開しようとする趣味は正しくロココの藝術である。佛蘭西人には伊太利歌劇の無形式のレチイタチイーフは向かなかつたし、又正確なリズムを持つて居ないアリアも喜ばれなかつた。そこで彼等はもつとリズム的な音樂を好んだのである。器樂はすべて舞

踊樂の裝飾となつた。それ故に初期のバレーは華麗な輕快な型を持つてゐた。

バレーに次いで一層劇的な歌劇が十七世紀の中頃に劇詩人ペルランと作曲家ガンベールによつて試みられたが、ルリ（一六三三――八七）が出て目覺しい發達をし、こゝに佛蘭西歌劇の確固たる基礎が出來たのである。卽彼は伊太利歌劇と佛蘭西歌劇との統一をなし、自己の天才にまかせて數多の歌劇及びバレーを作曲した。彼は音樂のみならず劇の方面にも非常な天才を持て居た。ルリはフロレンスで生れ子供時代に巴里に伴はれ初め或る家の臺所の小僧をしてゐたが音樂的天才を認められルイ十四世の樂手となり、後其樂隊の指揮者となり、一六五三年には宮廷作曲家と迄出世し、彼の作曲するバレー及び歌劇は王の最も愛好する所であつたと云ふ。彼は遂に貴族に列せられた。彼の死はふとした事からであつた――彼は或日例の如く熱心に歌劇の練習を指揮してゐた際、指揮棒の代りにしてゐた杖で熱心の餘り足を打つた。其が原因で一六八七年に沒した。彼の作曲は數多に上つてゐる。彼はグルックやワグネルが歌劇に大改革を與へた樣に十七世紀に於て歌劇の改革をしたのである。グルックが十八世紀の中頃出現する迄はルリの歌劇は絕對の權威を有してゐたのである。彼は歌劇の序曲を立派な形式に發達させ、且つレティタティーフをもつと平易に而も劇的表現に効果ある樣に作曲し、アリアは美くしく優雅に、合唱は再々劇的に作つた。彼は又オーケストラに管樂器を多數混じへて音樂の効果を大いに擧げる事に努力したのである。

（B）獨逸の劇的音樂

獨逸に於ける此の種のものは最初、歌の劇（ヂングシュピール）として現はれた中世期以來行はれた劇の會話の間に民謠的な獨唱や合唱が劇の効果と其意味內容に餘り關係を持たずに歌はれる樣なものをジングシュピールと稱したのである。

佛蘭西のバレーが十四世紀頃から其萠芽を持つてゐた樣に獨逸のジングシュピールは十二、三世紀に始つてゐる。けれども十五世紀には一度墮落したが十六世紀に入つてから詩人のパウル・レプフンと有名な平民歌手のハンス・ザックス等によつて再び其威厳を保持して來た。十七世紀に入つてから伊太利歌劇の目覺しさに影響された事は前述の如くであるがシュッツの「ダフネ」（一六二七年作）やシュターデンの「ゼーレウイッグ」（一六四四年作）等は其影響によつて出來たジングシュピールであると言へよう。此の頃からジングシュピールは歌劇と混同し始めた。併し初期の獨逸歌劇は殆んど伊太利のそれを移植して其形式で作られてゐたに過ぎぬ。十七世紀に於ける獨逸歌劇が佛蘭西、伊太利の其に比して發達の

遅れた最大の原因は前述の如く三十年戰爭の爲めであつた。宮廷と富と平和と華美との裡に於て初めて南歐の歌劇が榮えたが、實實は獨逸精神と、戰爭の間に於ては容易に發達し來ねたであらう。獨逸の諸都市は三十年戰爭終結（一六四八年）に以後に初めて歌劇場或は劇場を建設してゐる事によつて明かに證明されるであらう。左に歌劇場の初めて建設された年を記して置く——

ミュンヘン	一六五一年
ヴィーン	一六五九年
ドレスデン	一六六七年
ニユールンベルヒ	一六六八年
ハンブルグ	一六七八年
ハンノーフエル	一六八九年
ブルンスウイツグ	一六九一年
ライプツイヒ	一六九一年
ベルリン	一七四二年

四、十八世紀（前半期）

十八世紀の概觀——音樂史上に於て此の時代は最も興味がある。多くの天才が輩出して音樂の諸形式を發達せしめ古典的偉大さを完成し、十九世紀音樂の基礎を作つてゐる。バッハは十七世紀より殘されたものを完成し盡した。ベートーヴエンはハイドン、モツアルトの古典音樂と十九世紀初期の浪曼的精神との中間に建られた不滅の殿堂である。それ故に我々は十八世期の前半期を十七世紀の延長と考へ、後半期を十九世紀への過渡期と考へる事が當然である。前半期はゲネラルバスの時代、後半期は近代音樂の基礎を作つた時代、又音樂に個性的表現が入つて來た時代である。我々はいつもベートーヴエンが餘りに新しく、バッハが餘りに古く感ぜられるのに驚かされるが、バッハが歿してから僅か廿年を經て一七七〇年にベートーヴエンが生れてゐるのである。而も其間が非常に隔つてゐる樣に感ぜられる幾多の理由を音樂史は說かなければならない。それ故に十八世紀を二期に分つ。

(A) バッハ時代の宗教音樂

獨逸の宗教樂は新教運動と共に伊太利宗教樂とは非常に異つたものとなつて來た事は前述の如くである。而して其後劇的音樂の勃興に對抗して宗教音樂は二つの傾向を現はして來た。それは合唱音樂と大オルガン樂である。（オルガンとはパイプオルガンを言ふ。）兩者共に對位法的多聲樂（コントラプンクテイツシエ・ポリホニー）。十七世紀の宗教樂の作曲家は、コーラル、フーゲ、モテット及び禮拜式の爲めのオラトリオ等の作曲に努力して來た。ルーテル派の寺院では音樂を非常に重んじて毎日曜の禮拜（午前中約四時

間其中一時間說敎）に於てさへ、オルガン曲の前奏とモテツトキリー、リタニー、クレド及びコラールを歌ひ奏する。此等の宗敎樂は大バツハ（一六八五――一七五〇）の出現によつて完成されたのである。

バツハの音樂は宗敎樂のみならず、非宗敎樂的な管絃樂にも絃樂にも、又聲樂やピアノの前身であるクラピコードの樂曲及びオルガン曲にも皆な立派な作曲を殘してゐるが、たゞ歌劇には注意を拂はなかつた。歌劇の方面に於てはヘンデルが作曲してゐる。バツハ音樂の中心は何んと言つてもパイプ・オルガン曲である。彼は最初ヴァイオリン彈きであつた爲に、勿論、絃樂にも秀でたものを作曲してはゐるが、漸次に發達して來たパイプ・オルガンを使用して複雜な多聲的音樂を自由に作曲してゐる。バツハの聲樂及び器樂よりなる宗敎樂の中には劇的のものがある。それはカンターテ（約三百曲を作る）及びパツシオン、オラトリオ、メツセ等合して十數曲を作曲した。それ等の中後世紛失してゐるものもある。

「カンターテ」は十六世紀頃には器樂に對して聲樂を區別して稱したものであるが十七世紀中頃には宗敎樂及び非宗敎樂に於て獨唱的な歌を言つたものである。此の形式がカトリツク寺院音樂に入つて來たものであるが、十七世紀の獨逸の宗敎樂に於ては「カンターテ」と云ふ語を聖書の章句に基いて獨唱及び合唱からなる樂曲の名稱としたのである。バツハの先驅者シユツツ等によつてそれは作曲された。聖書物語を音樂にしたものであつて、明に伊太利の歌劇的カンターテ（獨唱）とは異つたものであつた。それではバツハのカンターテの取扱ひ方はどうであるか。――バツハのそれは非常に複雜で色々の要素から成つてゐる。レチイタチイーフとアリアは歌劇的であり、合唱は新敎の寺院合唱曲に基き、序曲及び間奏的器樂は室內音樂的である。そして多聲的合唱及び伴奏はオルガン曲の複雜な多聲的要素によつて作曲されてゐる。けれども斯く多くの要素から成つてはゐるが、それ等はバツハの天才に依つて完全に統一されたる「カンターテ」と云ふ宗敎樂の形式を形成し、且深遠な宗敎意識を內的に感銘せしむるものである。彼の他の大宗敎樂、パツシオン及びオラトリオ等も此のカンターテの擴張である。バツハは歌劇を作らなかつたかはりに劇的要素の勝つた音樂として前述の樣な宗敎樂を作曲した。反之バツハと同時代の大音樂家であつたヘンデル（一六八五――一七五九）は歌劇も宗敎樂も作曲してはゐるが歌劇の作曲の方が音樂史上には重大な意味を持つてゐる。ただ、ヘンデルの歌劇はオラトリオに比して後世演奏される機會も餘く過ぎて來た爲めに「メツシア」を以てヘンデルの價値を云々し勝ちである。同樣にバツハの大宗敎樂の價値と意

義とを本當に認めて其復活を企てたのは浪曼派の大音樂家メンデルスゾーンとシユーマンの功績と言はなければならぬ。

新敎派の宗敎樂はバツハによつて極度に發達したが、舊敎派の宗敎樂はヴイーンの皇帝の保護の下に榮えてゐた。勿論歌劇發達の影響と室内樂の影響とを蒙り新しい形式と表現とを持つ樣になつたが、主として伊太利の音樂家の司つてゐる此のヴイーンの舊敎派の寺院音樂と、皇帝の爲めの儀式的音樂は無伴奏的多聲樂（アカペラポリフオニー）の古い形式を全然捨てなかつた。

音樂史上に於ける十八世紀前期の最も重大な問題は獨逸に於ける宗敎音樂であつて、伊太利、佛蘭西の宗敎樂は論ずる必要はない。伊太利は此の時代に於て前時代からの伊太利歌劇が最も發達し、且つ新しくスカラツテイによつてナポリ派の音樂が榮えた事を記憶しなければならない。

（B）佛蘭西歌劇

十八世紀前半に於てはさしたる發達は無く、たゞルリの歌劇を規範とし、それにデトウーシユ及びカムプ等が多少の貢献をしたに過ぎぬ。民衆の趣味は而も尙オペラとバレーにあつた爲め、發達してまた管絃樂の盛んな演奏と混つて、獨唱や舞踊の勝つた此の種の劇的音樂が盛んであつた。劇の筋は獨逸のジングシユピールの如く會話的に行はれてゐた。而も全體に統一があつてそれがやがて佛蘭西喜歌劇の隆盛を來すのである。此の時代の歌劇作家としては前記の二人の他に多數あるが其中最も有名なのはジヤン・フイリツプ・ラモーで（一六八三——一七六四）である。ラモーは近代和聲樂に非常に貢献したばかりでなく、歌劇を多く作つてゐる。

（C）獨逸に於ける歌劇

獨逸に於ける此の時代の歌劇の中心と考へられるのはハンブルグである。マツテソン、カイゼル等の作曲家がそこにゐたオルガン彈きのヘンデルが彼等の影響を受けて十九歲の時即一七〇四年に最初のオペラ「アルミーラ」を作曲した。彼は其前年にはカイゼルの率ゐるオーケストラの二番バイオリンを彈いてゐた。彼はハンブルグ時代に旣にオペラ及び宗敎樂の作曲家として知られるに至つた。けれども五十三歲迄は主として歌劇を作り、それ以後に有名な大宗敎樂を多く作曲したのである。

ヘンデルの歌劇とは如何なるものかはグルツクの歌劇と共に述べる事にしたい。又十八世紀前半の器樂の發達もハイドン、モーツアルトと共に論ずるのを便利と思ふ。佛蘭西及び獨逸の音樂の歷史的研究は十八世紀前半期を以て一先づ筆を絕つて、後半期より十九世紀及び現代に亘る迄は改めて書く事にする。（一九二二年十一月）

伊太利の音樂に就いて

大沼　哲

伊太利音樂の眞の樂派の興つたのは、文藝復興の氣運の盛んになつた十六世紀でありました。一方宗敎の方面に於ては、新しい宗敎的信念が起りまして、從來の形式的束縛から脫出して、內部から直に神に接しようとする樣になりますと共に音樂も亦頗る影響を受けまして宗敎樂革新の事業が起る樣になつたのであります。此時代は對位法樂の盛んな頃でありまして、ポリホニーの動かす事の出來ない基礎を作り、其殿堂を天空にまで押上げた樂家はカバノニ、ミケランヂエロ・ロシー、と神の如きパレストリナであります。又文藝復興は、歌劇の發達をも促したのであります。而して十七、十八世紀に於ては、モンテベルデの憂愁なるアクセントやカルダラの純なる聲やスカルラッチ及コレリの無限の變化を巧妙なる表現又はナポリ風の狂劇の放逸なる快さを聽く事が出來たのでありました。十九世紀に入りましては、舊來の形式に新手法を用ゐて歌劇に光輝を與へたロシニを筆頭にドニヅエチやベリーの美しい旋律を聽き得たのであります。其他ヴエルデイの對照と感情の激烈に發露した歌劇を聽く事が出來たのでありましたが、伊太利は藝術のみでなく、政事、社會等あらゆる點に於て、其困難な播種の作業から果實を收穫するために外國の畑を凡べて等閑に附して居た觀があります、殊に音樂藝術に於ては一つの住居として劇場に籠居して了つたのであります。主都ローマと佛蘭西の間に靴の裏を磨滅する迄も往復して居た八十年間と云ふものは、劇場に屬せぬものからは價値ある音樂的作品が少しも生れなかつたのでした。唯だ例外として一人は、佛蘭西に於て、一人は英吉利に於て彼等の作品の全部を發表したケルビニとクレメンテイとがあるばかりでありました。要するに十九世紀末葉の伊太利音樂は、ヴエルヂーの歌劇ですら寧ろ無用の改作が盡きて了つて、非劇的と云はれても拒み得ぬ樣な狀態になつたのであります。此の惡風が竟に寺院樂の方にも進入して來まして眞面目な研究をする者がない樣になりました。併し現代の人々の內にはワーグナアやリスト等の感化を受けて、一度墮落した音樂を更

に高き地位に到達せしめ樣との企を起して活動して居る人があります、例へばリストの該に刺戟された羅馬のスガンバチの如き、或は伊太利のブラームスと言はれたるマルッシもボシもあるが何れも北方の影響を免れ得ない樣であります。其他勇氣あるフオレヒス、シニガリア、ブゾニ、ロンゴの如き人人もありますが大人物ではないと考へられます。併し佛蘭西の批評家の云ふた樣に、恐るべき三人同盟卽ちマスカニとレオンカヴロとプチニとの作品に由るならば此境地から脫出する事が出來ない事もあるまいと思はれます。伊太利に於てワーグナア黨に叛抗する黨派の起る事は寧ろ當然な事であります、それはヂウビユシー黨が起つた事に由つて明らかに證明されます。此印象派の特質は、當今の伊太利音樂に於て竟に現はれて來ました。此處に於て在來の拍子はダンスの思出でしかない樣に、年每に等閑にされ、而して傳來の對位法の如きは非藝術的なものとされる樣になりました。

此の新らしい、美の新思想を有する人々の名と主なる作品とを前述しました事を實證するために次に擧げませう。

先づ第一にフランコ・アルフアノ（一八七七）を擧げねばなりません、彼は（レズレクシヨン）と（ドンフアンの影と交響樂一つと組曲一つと歎賞すべき聲樂四部曲とを作りました。此等の作品は、高き靈感を受けて、出來たものであります。

次にリカルド・ヅアンドナイ（一八八三）を擧げます、彼は纖細なる感情の微細な表現家でありまして、山村の狀を寫したる感じと農夫の描寫が得意であります。

次にギアコモ・オレヒス（一八六五）を擧げねばなりません、彼は多くの室樂を作りましたが、それは別にして、最近の作品はブユテイの詩に由つたもので、幸ある靈感と旋律に充ちた（夢の城）を書いて劇場に戻りました。

次に擧げるブリユノ・バリリ（一八八〇）は其（メヂユーズ）を以て、アドリアン・リアルデイ（一八八七）はオペラ（王の姫）を以てマック・コルミツク博士院の一九一七年のコンコルソで榮冠を得ました。

次にウオルフ・フエラリ（一八七六）を擧げます、次はゴルドニ劇場の秀でた註解者で又嘆賞すべき十八世紀音樂の改造者であります。其作品には神劇と室樂とがあります。

次に擧げるヴイクトル・デ・サバタ（一八九二）は十八歲で名高くなつた作家で（交響樂的組曲）と（マシノ）とを作りました。

次の人々アリゴ・ヘドロロ（一八七八）セビリ（一八六〇）ラセテイ（一八七九）ベルランデイ（一八七七）ブセリ（一八七三）モンレオン（一八七五）ドナウデ（一八七六）とノ

（一八六七）等は交響樂と室樂とを發表しました同じ位な作家であります。

羅馬のアウグユステオの永久なるオルケストラの建設と重なる都市に音樂會の出來た事は近代の純音樂の作家を刺戟し鼓舞しました結果、尚次の如き人々が現はれる樣になりました。

ピヅエテイ（一八八〇）は現今最も特徴あり最も卓絶した音樂家の一人であります。其作品には（ヘードレ）（リザネラ）（タワトオル）（ヴイオリンのソナータ）及歌曲等がありまして理解と感激の豐かなる點が注意すべき所であります。

伊太利音樂家で他の注意すべき人はフランセスコ・マリピエロ（一八八二）であります、彼は新表現法を研究し、クラシツクの淡泊な形式を怪異な樂器編成で近代風にして居ります。彼の後年作つた、七つの歌曲が其れであります。

其他ヴエンセント・ダヴイコ（一八八九）オツトリノ・レスピイ（一八七九）ヴイクトル・グチ（一八八五）等尚澤山の大家が居ますが頁に限りがありますから是位で他の人々は略します。

以上擧げました音樂家は今日伊太利で重要な人々でありまして、最も純な藝術の極致を求むる者であります。尚今日若しくは明日に於て若く勇氣ある他の人々を得るでありませう。

ラテンの個人派は他の國よりも伊太利に於て養はれて居ります、而して伊太利の藝術家は羅馬、フロレンス、ミラン、チユリン等の都市に散在して、互に競つて居ります。

伊太利音樂に就いて此處まで談して參りました時に、どうしても伊太利で發達したマンドリンの音樂の事を語らずには居られません。

然し餘り長くもなりますから詳細に書く事は遠慮してざつと御談をしますと伊太利のマンドリンは隨分古くから存在しては居りましたが今誰もが見る樣なものは玆七十年程以前に完成されたもので此完成によつてマンドリン音樂は著しい發達を遂げました。そしてムニエル、クリストフアロ、ベルレンギ、プランツオリ、カラーチエと云ふ樣な名手名作曲家が現はれまして世の中に非常な刺戟を與へマンドリン合奏の獨立を完全にしました。マンドリン合奏は決して普通のオーケストラの模倣ではありません。そしてマンドリン其物もヴアイオリンのイミテーションでは決してないのです。

伊太利に於けるマンドリンオーケストラは恰度露國に於けるバラライカオーケストラの樣に一種特別の音樂をもつて居るのです。而も伊太利人の多くがマンドリン及び其オーケストラに就いて無智なのは驚くべき奇蹟と云ひ得ます。日本にも

今日では數多くのマンドリン合奏團が出來ました。そして米國に於けるマンドリンオーケストラの如く迷路に踏み迷ふ事なく健全な發達をなしつゝあるのは心强い事であります。只々伊太利手を通過して名人のひくマンドリンを聞いて直ちにマンドリンの價値を云爲する樣な輕薄な真似は止してマンドリン其物が樂器として如何なる能力を有するか、如何に獨創的な音樂を有するかを研究した後よろしくマンドリンを論じたいものであります。

附記　此項は私自身に執筆せよとの依頼に執筆すべく種種材料の蒐集を試みつゝあつたが年末の際いろ〱公務と私事上の用務山積の、本誌締切迫に執筆し得ざるより茲に、私の最も尊敬する樂友大沼氏に起稿せらるゝ事を託賴することとした。氏は奏樂に深き造詣家であり現に陸軍戸山學校一等樂手（指揮者）であり又我作曲、和聲樂に精通せらるゝ人であることを紹介すると共に私の本誌に執筆し得なかつた事を一言附記する。（一二、一、武井守成）

印度の音樂

齋藤佳三

印度の音樂と書いては見ましたが、實は何んにも解つてはゐないのであります。

スケール（音階）さへも。

まして時代的に發展して來た其形式とか構成などの解つてゐる筈はありません。けれども印度の古い歴史を見たり、古畫を見たり、或はバリタナやグワリオルの寺院、エレファンタやアヂャンターノ洞窟、及其内部に偉大な古代文化を物語る壁畫を見たり、又は「大理石の詩である」とまで賞讃されてゐる彼のタジマハルの絕美なるサラセン式印度建築を見ても私は之等に伴奏すべき好個の音樂が乾度あつたに違ひないと何時も考へてゐるのであります。兎にも角にも此タジマハルを建てんとした動機に於てサージヤハン王の胸の中には彼の建築以上に强烈な音樂的情熱と大ローマンスが釀されてゐた事を見ても判斷が出來るのでありませう。

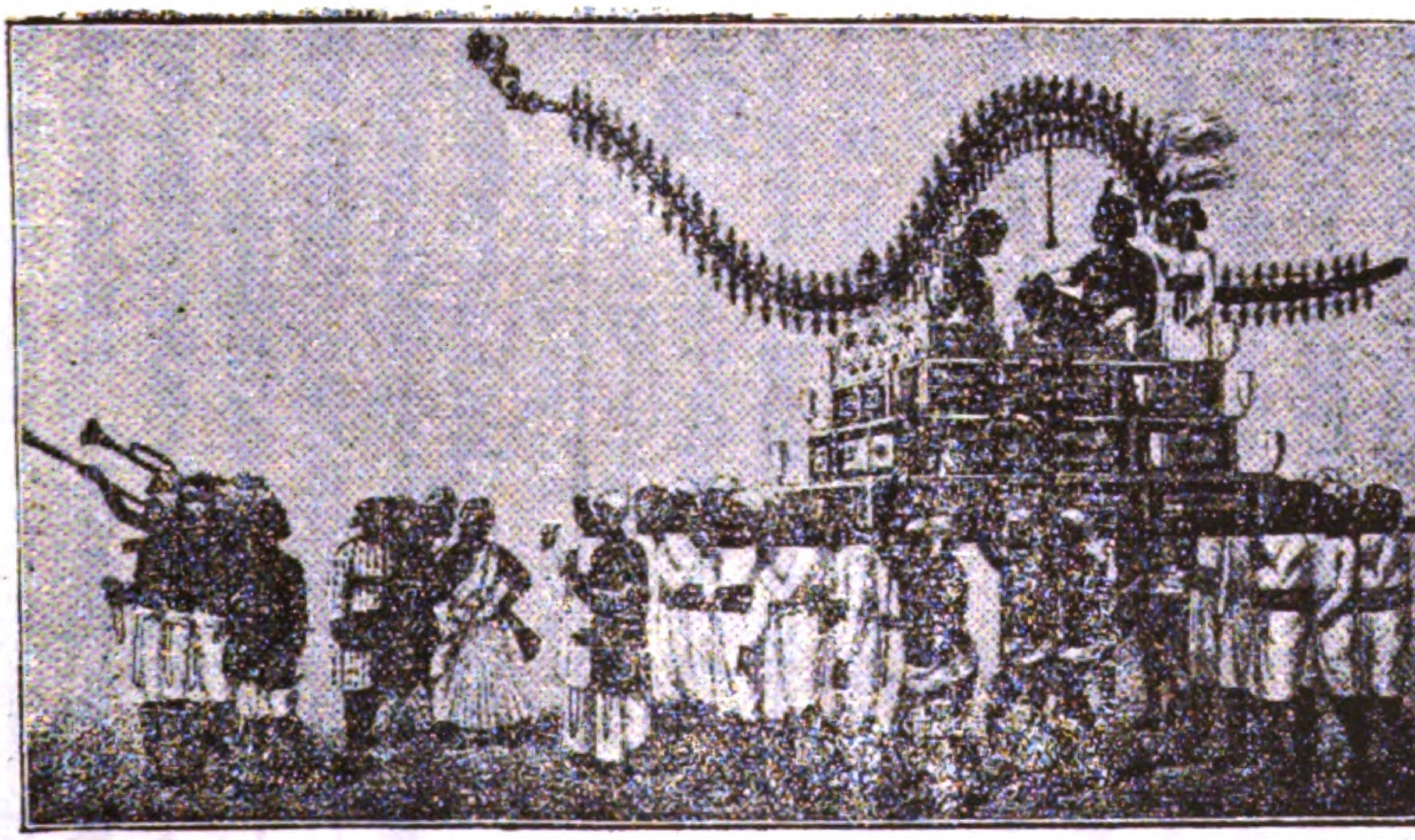
加ふるに宗教的儀式や冠婚葬祭には古來より種々の樂器を用ゐ之に和して唱名をなし或は舞踊となすと傳へられてゐますから、奈何にかして此國民の純粋な心の響としてのメロデー、左なくば民謡、或は牧歌、聖歌、哀歌、戀歌(ラヴソング)、何んでもいゝから一つ完全なものを知りたいものだと年來心がけて居たのであります。

けれども遂ひには此希望を滿足させる機會と譜面は見つかりませんでした。

嘗、大戰前私が獨逸に居て、伯林の博物館に遊んだ時の日記に、此國の周到な陳列方や紹介法に感



宗教的の音樂



婚禮の音樂

心した事を記し、其頁に、一つのスケッチを添へてあるのがあります。

それには、印度の樂器を見て、一千九百十三年五月八日、としてあります。

恁ういふ樣に書いたカードが即陳列棚の一つの樂器の側に添へてあつたので、此樂器は『フオンギ』と云ひ、其吹き方は恁ういふ風に、又恁ういふ『節』をやるのだといふの

が分かるばかりでなく、之は『蛇遣ひの節』である事までわかる譯であります。

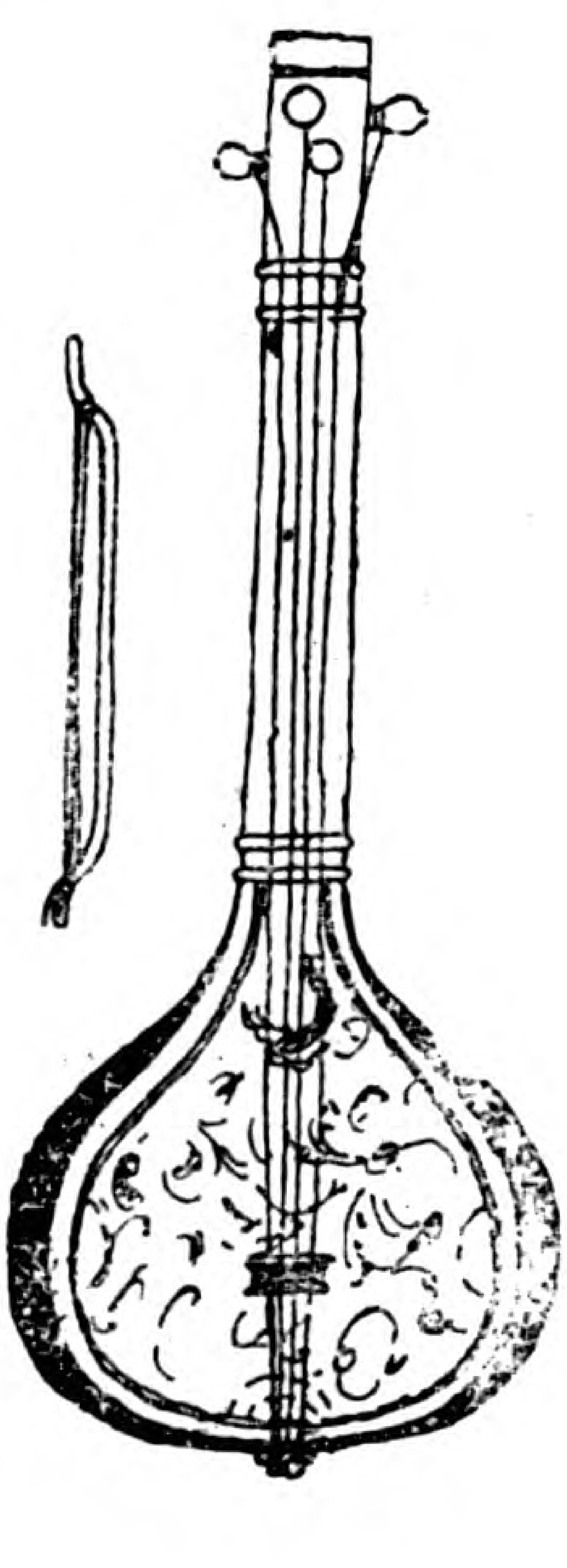
此メロデーはもとより印度の音樂として代表的なものではありますまいが、ただ此一節を見ても、第一非常に東洋的色彩の豊富な事が解ると同時に、一小節毎の音譜に注意して見ますと最近或西洋の最新らしい作曲家が小節を割る從線を撤廢しなければならないといふ音樂の心持がよく首肯かれる様な不思議な節（自由であるけれどもリズムは整然としてゐる處の域が）である事も解ります。

蛇遣ひの樂器としては此外に『マグデー』と呼ぶ絃樂器があ

Melodie der Schlangengaukler



ります。之は丁度伊太利樂器のマンドラの形に似てゐますが爪で彈くのではなくて弓で奏するのです。胴が丁度石榴を眞中から割つた様な形で、其表面には美しい唐草などを赤く描いてあるのです。





Phoongi

それから最も通俗的な例へば日本の三味線の如き絃樂器に『ヴィナ』といふのがあります。之は長さ一メートル位の胴

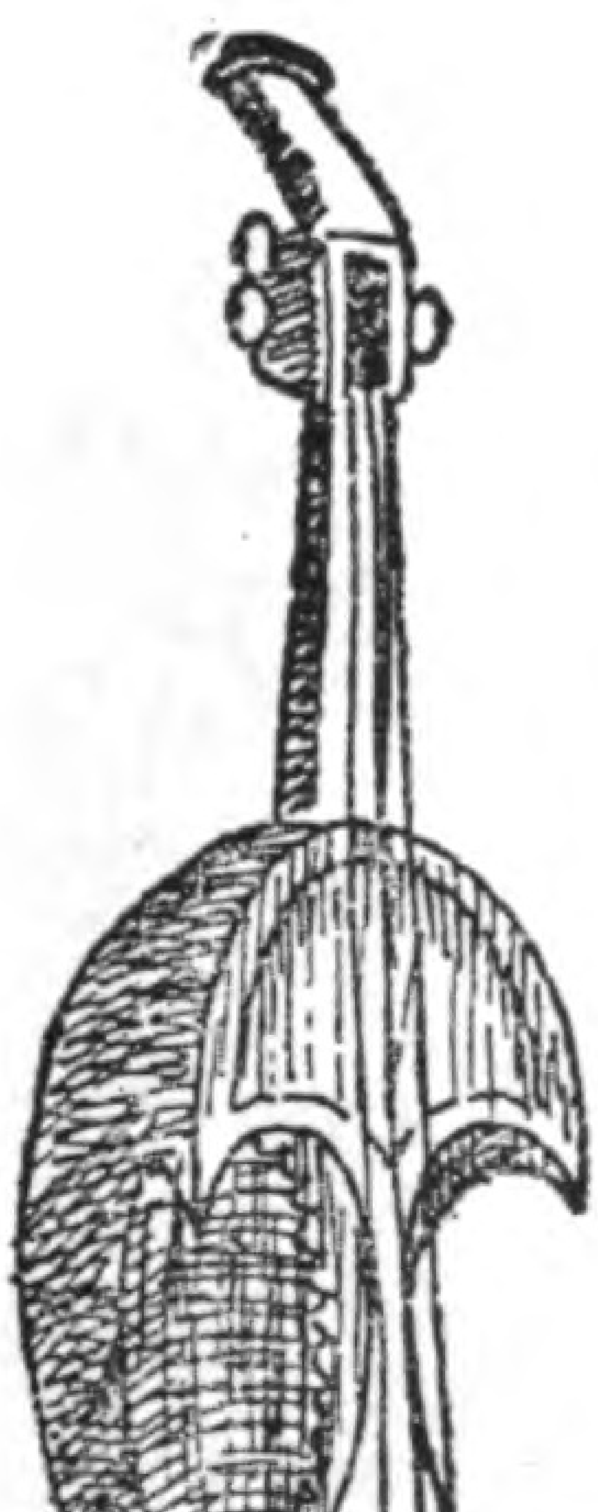
に十九箇の駒が置いてあつて四本の針金を渡してあるのです。それで半音階は勿論全音階にして二オクターヴの音域を保つてゐるのですが不思議な事に此箇（竿）の上下に二つの空なかぼちやの胴が付いてゐて音のハーモニーを柔かく圓ろく美しく響かしてゐるのです。



此外打奏樂器として「トムトム」（タンボリン）があり大太鼓と小太鼓（小太鼓はつゞみの形）があり、シンバルと拍子木があります。



小太鼓の事は「マタラン」と云つて之を帶に結びつけて掌で打つ事、丁度日本の鼓の樣なわけであります（無論日本の鼓は印度、支那、朝鮮を經て渡來したもので、印度古代の石刻に此鼓の繪が盛んに見えてゐます。）



シンバルは滑稽な程小さい（直經二、三寸位）もので双方

を糸紐で繋いであつて、此國では之を「タル」と名づけてゐます。

吹奏の樂器には埃及、希臘、羅馬のものとよく似たトランペットをホルンとチャルメラがあり、「トウルチ」又は「トウワリ」と呼ぶ風笛があります。

此外には鈴、及び埃及、希臘、羅馬のそれの如き簡單なハープがあり、其外三本の絃を張つた「セリンダ」と呼ぶ不思議な形の絃樂器などが此國個有のものであります。(挿繪參照)

支那の音樂とその曲調

村田孜郎

若し皆さんの中で神戸か横濱の南京町をお通りになつた方があればあの薄暗い支那人の家から洩るゝいやにキイ〳〵いふ悲しい胡弓の音をお聽きになつたでせう、又先年帝劇に出た梅蘭芳を御存じの方は支那の音樂が大體どんな感じを與へるものかを體驗なさつたでせう。そして恐らくはその音律の好惡を聽き分ける前にその癇高い鋭どい聲に辟易されたであらうと思ひます。日本の音樂の地味なそして西洋の音樂の陽氣な——むろん一般的に評してゞありますが——のに比べますと支那の音樂は一種の寂しさ、もつと露骨に云へば頽廢的な非興國的の音調を持つてゐます、一言に寂しい咏歎的な音樂であると云ひますといかにもセンチメンタルな柔かい音樂のやうに思へますがそれがあのキイ〳〵いふ胡弓にいやにカチ〳〵いふ堅い鼓と大銅鑼小銅鑼のヂャン〳〵いふ金屬性の音響が交るのですから並大抵のものは耳を蔽うて降參してしまひます、尤も支那の音樂も一概にこんな喧騷なものばかりではありません。南方に流行る小曲などのやうに低い柔かい調子のものもありますが只一般的にいふ支那の音樂は初めての人にはどうも耳障りが好くないやうに思はれます。それでは支那の音樂はそんなつまらぬ騷がしいばかりのものかといふに決してさうではありません。四千年の古文明が生んだこの音樂は決してそんな單調な低級なものではありません。もつと複雜なもつと高雅なものでなければなりません。若し多少

でも音樂を聽き得る人ならばその騒々しい合音の中に動かすことの出來ないリズムがあるのを聽き分けられるでせう、そしてその冴え渡つた胡弓の音に始めて支那音樂の棄て難いところがあるのを聽取されるでせう。

その國の音樂はその國の國民性を現すものであるやうに支那の音樂は實に能くその國民性を現してゐます。そして北方と南方と兩方の國民性が異るやうに音樂も亦南北同一でないのが面白く思れます。前にも一寸述べました通り北方の音樂は寂しい悲痛な調子がありますが南方の音樂は柔かい優雅な調があります、いはゆる燕趙古來悲歌の士多しで北方に興つた音樂は慷慨激越、哀惋悽楚の音があります、私は北方の音樂を聽くといつもあの風蕭々として易水寒しといふ詩を想ひ出します。秦始皇を刺さんと刺客の荊軻が易水を渡つて行く悲壯な光景を思ひ出します。又あの王昭君が漢宮の危難を救はん爲め故國を後に遙々と蠻夷の國に送られ行く哀れにも美しい姿を思ひ出します。そして茫々たる朔北の曠野が眼前に見えるやうな氣がします。それ程北方の調は悲しくそして寂しいものであります。私は一度北京の北の張家口といふところに旅をしたことがありました。張家口は蒙古と支那本土の境にありますが此處迄來るともう朔北の氣分がします。丁度秋の月の美しい夜でありましたが街外れの芝居小屋で昭君出塞といふ曲を聽き何んとも云へぬ哀れな寂しさを感じましたしかしその時から初めて支那の音樂がしみ〴〵と好きになつたやうに思ひます。之に反して南方の音樂は寂しい中にも優雅な調があります。揚州の小曲などは長閑な春の調といふやうな柔かさがあります。

卑俗なものに至つては甘つたるい性の觸手を感ずるやうなものがあります。すなはち若し北方の調が易水蕭々の音があるとするなら南方の調は洞庭湖上波靜かとでも形容したらいいでせう。

◇

餘談が長くなりましたが右に述べた北方の調と南方の調を具體的に分けて見ますと次のやうです。先づ北方の調を申しますと

一、京調、これは湖北省の黃波といふところから起つたもので一般に二黃西皮というて居ります。二黃は其調が圓穩、西皮は悲壯であります。此調は胡弓を主とし囃しは鼓、板、大鑼、小鑼、鈸、月琴、南弦子を用ゐます。京調は一名徽腔（腔とは調子のこと）ともいひまして現今南北を通じて最も隆盛を極めて居ります。

二、秦腔、俗に梆子腔と云ひまして山西省に起り北支那一帶から滿洲方面に流行してゐます。其調は哀惋悽楚で纏綿たる情緒があります、上流の支那人は此調を上品でないと排斥して居りますが必ずしも棄てたものではありません。これは同じく胡弓を主とするものですがその胡弓は二黃西皮の胡弓より少しく大きく梆子といふて音の高いものです、囃は鼓、板、大鑼、小鑼、鈸、笛を用ゐます。

これが大別した北方の調で支那の代表的音樂です。囃に用ゆる鼓は日本の鼓のやうにポン／＼なるあんなのではありません。一寸太鼓の堅いやうなもので二本の細い棒で叩きますがカチ／＼いふ音が出ます、板といふのは本を二つ紐でくゝり合せたもので片一方の手で、これを鳴らして調子を取るものです。大鑼小鑼は大小の銅鑼のことです。次に南方の調を申しますと、

一、崑腔　江蘇省の崑山から出たもので低調合唱に適し丁度日本の樂器のやうで極めて高尚優雅なものです。この調は日本人が聽いて一番愛好するやうです。笛がその主たるもので囃には鼓、板、大鑼小鑼、笙を用ゐます。此調は一時衰微してゐましたが最近再び盛んになつて來たやうです。

二、弋腔、江西省の弋陽から出たもので鼓、板、大鑼小鑼を用ゐ殺伐の調があります、これに崑曲を交へたものを崑弋と云ひますがあまり流行しません。

此外「揚州小曲」は目下南方支那に盛んに流行してゐます。所謂俗謠で娼家などに多く唄はれ甘つたるい艶めかしい調子であることは前にも述べた通りです。樂器としては少しく大きな型の胡弓で音の低いものを用ゐます。更にも一つ北方に「鼓詞」といふのがあるのを見逃すことは出來ません。俗に「太鼓」と云ひますが竹を三本組んだ上に小さな太鼓を載せそれを叩いて物語りを獨唱するのです。北方の娼家などで二黃西皮を唱はぬものは大抵これを唱ひます。此外南弦子、いはゆる蛇味線や琵琶もありますが極めて一少部分です。琵琶は御承知のやうに形は日本のと似て居りますが彈き方などは大分違ふやうです。そして彈くのは大抵婦人に多いやうです。潯陽江の名殘を掬んだものでせう。

◇

次ぎに支那の音樂の音律について一寸述べて置きたいと思ひます、聊か專門的になりますが序だから申上げます。支那の歌には極めて嚴格な規矩法則があります。だから節廻しよりもこの法則に外れないことが大切であるとされてゐます。解り易く云へば一つの調には必ず板と眼がある。この板と眼が調に合はねばその歌は駄目であります。つまり板とは一つの

調の節目で眼とはその間の調子です。前に述べた囃の板がこれで鼓が眼に相當します。今二黄西皮に就て板眼を表解しますと次のやうです。

二黄
- 正板（快三眼／慢三眼）
- 原板（一眼一板）
- 倒板（板眼なし）
- 搖板（板眼なし）
- 反調（原板／快三眼／慢三眼）
- 四平調（一眼一板）

西皮
- 正板（快三眼／慢三眼）
- 元板（一眼一板）
- 二六板（快／慢一眼一板）
- 反二六板（一眼一板）
- 搖板（板眼なし）
- 快板（眼なし）

右に就き簡單な說明を試みますと例令ば梅蘭芳の得意と云はる〻「天女散花」の第二場雲路の場合に天女が霧の中で唱ふ「祥雲冉冉婆羅天」の數句は西皮倒板で板眼がなく緩急遲速は唱ふもの〻隨意であります。次で出場「離卻了衆香國遍歷大千……」は西皮正板の慢三眼で、眼から唱ひ出し離の字は初めの眼に落ち卻の字は中眼に落ち、了の字は末眼に落ち、衆の字に至つて板に落つるといふやうに一字一句と雖も動かすことの出來ない法則に縛られてゐます。

それで板によつて早い調子ともなり遲い調子ともなります快板のやうに眼がなく、極めて急調なものもあります。反調といふのは凡て半音を用ひ咏歎の場合にのみ唱ひます。四平調は高低の少ない調子ですが唱ひ出しの句が眼から始まるので極めて難かしいものとされてゐます。

◇

誰かゞ北京を訪れて北京は色彩と音響の都だと云ひましたが實に其通りで私は世界の中に支那人程音樂の好きな國民はなからうと思ひます。御承知のやうに昔唐の玄宗皇帝は一代の風流天子で自ら霓裳羽衣の曲を作り樂士宮女數百人を侍らし歌曲を梨園の子弟に敎へました。淸朝が滅ぶるとき北京の滿洲人は革命の流血を餘所に梨園に音樂を聽きながら夢の如く滅んでしまつた。支那へ來て街を歩いて御覽なさい。殊に北京の街を步いて御覽なさい。道行く閑人といふ閑人は皆歌を唱つてゐる。それ程支那人は音樂の好きな國民であります。國は亡びて山河あり只音樂を聽いて歌を唱つて居ればそれで滿足してゐます。實に泰平無事の國民ではありませんか。

私は支那の音樂はその國民性そのもの〻やうに思ひます。頹廢的な非興國的な其音調には四千年の古文明と茫々たる山河とが表現されてゐます。其音樂は決して世界的ではありません。又決して進取的ではありません、只古へを慕ふ極めて保守的な哀歌であるやうにしか思へません。だから支那の音樂を聽くには必らずその歷史的の背景に彩られなければなりません。或は長い煙管を啣へた支那人と朽ち果てた古塔とを

背景とせねばなりません。又は赤青白の燈に彩らるゝ淡斜の巷を背景としなければなりません。何處の音樂もさうでせうが支那の音樂は此點に於て最もその特徴を持つてゐるやうです。支那の色とその音樂は常に合一のもので分離することの出來ぬものゝやうに考へられます。鴉片の煙と支那の音樂、それは最も相應しいものでなくてはなりません。私はつねにさう思ひます。

朝鮮・琉球・臺灣の音樂

田邊尚雄

朝鮮の音樂

朝鮮の音樂は李王家のものと民間のものとの二種類に區別することが出來る。尤も我が日本の音樂でも之を宮中の雅樂と民間の音樂と二種に分けることも出來る筈であるが、然し近世の狀態では宮中の雅樂は唯極めて一小部分を占めて居るに過ぎなくて、日本音樂の大部分は悉く民間で發達したものであるから、斯く區別することは極めて不自然である。然し昔の平安朝時代を考へると、雅樂なるものは宮中を中心にして非常に大きな勢力を持つて居り、之に對して民間の音樂たる任務はその勢力が劣つて居る。中には田樂や散樂の類が民間と宮中とに共通に行はれて可なりの力を持つて居たといふこともあるが、今日の朝鮮の音樂界を見ると何うも之れに似た傾があるやうに思はれる。それに近頃は李王家の音樂も見る影もなく衰頽して來たし、又民間の音樂も大なる勃興をなすといふ樣子もないから、恰度今日の朝鮮音樂は我が鎌倉時代の狀態に似て居ると謂つてよい。外に民間の音樂と宮中の音樂との或る連鎖を持つた中間のものを取扱つて居て、上流社會の間に大なる勢力を持つて居た所の白拍子が朝鮮の妓生とよく似た位置を占めて居るのも面白い現象であると思ふ。

李王家の音樂は支那の唐朝の宮中の音樂の輸入である。それが支那に於ては既に大部分滅びてしまつたのに、李王家に

於てはその型が其儘（小規模ながら）保存されて居るといふことに於て非常に珍らしいものである。

一體朝鮮に於て歴史上に音樂の記録を求めると、古代の三韓時代に於て多少支那から俗樂の輸入もあつてそれが此半島に古くから有た所の原始的民樂と結び付いて、可なり面白い音樂が勃興して來た。今日伽倻琴と稱して居る十二絃の琴も其頃から盛んに用ひられ、我邦にも之れが輸入された。之れを我邦では新羅琴と呼んで居る。今から一千年位前になつて高麗朝になつたが、其の頃になつて六絃の琴が大改良を施されて今日の玄琴といふものになつた。之れも朝鮮固有のものが支那大陸の文明を受けた結果の產物である。此の高麗朝の間には支那の唐代の音樂が餘程輸入されて、可なり組織立つた音樂が發達して來た。斯様な時代が約五百年繼續して、今から約五百年以前に朝鮮は李朝となつたが、李朝の初めに朴堧といふ偉人が居て、此の人が全生涯を盡して宮中の音樂を整備するに勉めた。その結果として唐代の全盛時代に於ける音樂が李王家に確立さるゝに至つたのである。李朝第七代の王たる成宗の時には李朝音樂の最盛期で、朝鮮音樂の唯一の成典たる「樂學軌範」といふ書が此時に編纂された。然るに第十代の王たる燕山君の頃から宮中の風儀亂れ、官妓の勢力が盛んになり、雅樂が衰へて妓樂が盛んになつて來た。

李朝が終に近くなるに從ひ、王勢非常に衰靡して來たと共に宮中の音樂も亦益々衰靡して以て今日に至つたのである。

李王家に傳はつて居る音樂は大體に於て雅樂と俗樂とに分つことが出來る。但し此の俗樂といふのは民間に行はれて居る俗樂とは違ふ。又雅樂といふのも我邦の雅樂とは違ふ。此の雅樂は支那の夏殷周三代の音樂に基いて居る。樂器なども周代のものが今日行はれて居るのが頗る珍らしい。最も李王家にある雅樂は周代の儘ではなく、唐代に復活されたものであつて、唐朝の樂器も之れと混用されて居る。

又李王家の俗樂は法樂と宴樂との二種に分たれる。法樂といふのは宮中の儀式（例へば天長節の如き）等に用ひられるもので、宴樂は公私の宴會に餘興として用ひられるものである。今日では別に法樂と宴のといふ區別と言はず、之れを宮中樂と普通樂との二つに分ける。

李王家には我が宮内省と同じ樣に宮中の音樂を掌る爲めに伶人が置かれてある。それは從來は掌樂院と稱せられる所でやつて居た。此の掌樂院の組織は李朝第三代の太宗の時に設けられた。然るに李太王が朝鮮を韓帝國と改めた際に掌樂院を國樂司と改め、それから又再び之を掌樂課と改めた。その後日韓併合となつて李王職と成てから之を小規模にして雅樂隊と稱する樣になつた。それで掌樂院の頃には今の京城の明

治町は廣大な建物としてあつたが、今は西大門の上の唐珠洞に小さな見すぼらしい建物と化してしまつた。此の建物を奉常寺と呼んで居る。

今日の雅樂隊の伶人は雅樂師長一人、雅樂師數名、雅樂手長、雅樂手若干名居るに過ぎない。今の雅樂師長は明完壁といふ人で、本年七十九歲の老翁である。

昔の掌樂院時代には樂人は七百餘人居たが、今日は五十餘人しか居ない。一體宮中の祭儀をやるのには奏樂の人が一組少なくも百二十人を要するのであるが、今はその不足の人數を嘗て解散した樂人の民間に殘存して居るものゝ中から臨時に募集して之を補つて居る。

宴樂の方に於ては奏樂する人は掌樂院の伶人であるが、舞ふ人は女であつて、卽ち官妓である。尤も以前は舞童といつて男子が舞つて居つたが、李朝の中頃から官妓の手に移つてしまつた。李太王の頃から官妓が表向き廢されて、今は多く民間の妓生の手に移つてしまつた。

李王家の雅樂は宗廟の音樂と文廟の音樂とに分れる。宗廟の音樂といふのは宗廟、永寧殿、景孝殿、懿孝殿の四つの宮中大祭を指していふのである。又文廟は孔子祭であつて、孔子を文宣王と呼んで、その祭禮を宮中の祭式と同等に見做して居る。春秋二季にその大祭がある。

況て宮中の音樂は軒架と登歌と二ヶ所にて奏せられる。軒架は正門の兩側の廻廊の軒下に樂座を設けて奏樂し、登歌は宮殿の正面階段の上の兩側樂座を設けて奏樂するのである。卽ち軒架は野外的で、登歌は室內的である。此の兩者を交互に併用するのが普通である。

軒架と登歌とは樂器が多少違ふ。軒架の方が大規模である。舞は宗廟も文廟も共に武舞と文舞とに分れ、昔は八佾の舞と稱して六十四人で舞ふたが、今は六佾であつて三十六人である。その舞ひ方は學校の體操のやうに各自その位置を離れることがなくて手を揚げ足を動かし、體を左右に向け又は屈伸せしめるのみである。服裝は同一であるが、兩手に持つものは文舞は右に翟、左に籥(三孔の尺八)を持つ、武舞は宗廟では劍を持ち、文廟では右に戚(卽ち斧)左に干(卽ち楯)を持つのである。

樂器は非常に澤山の種類を合奏する。其の最も大仕掛けのものは鐘と磬とであつて、其音が十數町に響き渡る。又太鼓の種類にも頗る大きなものがある。又琵琶、琴、箏、月琴、瑟、玄琴(六絃)、大箏(十五絃)、牙箏(七絃で弓で擦る)等の絃樂器や、笛、尺八(洞簫)簫、笙、篳篥、太平簫の類の管樂器や又土製の古代樂器たる塤や缶、木製の古樂器たる柷や敔など頗る珍らしい樂器を數十種用ひるのである。その規模の大

なること到底西洋のオーケストラの比でない。最も今日は非常に衰微して極めて小規模のものと化してしまつた。

宮中宴樂の中の宮中樂には、體步盧子、慢、洛陽春、井邑、民樂等があり、その歌詞は有名なる成宗の時代に作られた飛御天歌を歌ふのである。樂器も雅樂と大體同じくて極めて美しい。我が宮中と大同小異である。

普通樂は公私の遊宴に歌ふ俗樂で、宮中のみならず民間でも高尙なる音樂として扱はれて居る。その種類は澤山ある。佛敎に關したものには「靈山會像」、「平調會像」、などがあり、その他の俗樂は羽調、界面調、時調の三つに分たれて居て、初數大葉、二數大葉、中擧、平擧、頭擧、三數大葉などといふ曲がある。此の羽調、界面調等の差違は調子の差違といふが、實際音階の相違ではなく、唯歌調の差違である。それに雅樂は支那語で唄はれるが、俗樂は凡て鮮語で唄はれる。樂器は朝鮮樂器なる玄琴、伽倻琴、洋琴、長笛、奚琴等を用ひるのである。

宮中宴享の舞は官妓が舞ふのであつて、その曲は數十曲あるが、今日殘つて居るものは少ない。「五方處容舞」「舞山香」「春鶯囀」「長生寶宴之舞」等は今も有名なものである。是等は多くは唐代から元代へかけて支那の舞樂が朝鮮へ入つて來たものである。然し朝鮮特有の官妓の爲めに餘程變形されたものであらう。

宮中舞樂の外に所謂散樂に相當する者に「劍舞」「僧舞」等が有名である。又近年作られた「四鼓舞」といふ濃艶なる女伎が盛行して居る。又平壤の妓生學校では「霓裳羽衣舞」といふ上品な舞をやつて居る。

之等の散樂は主として民間の藝妓たる妓生が扱つて居る。妓生は各地に妓生學校なるものがあつて、之等を敎育するのである。その中で平壤の妓生學校が最も整頓して居て大規模である。妓生々徒は此學校へは約八九十名も居る。孰れも非常に上品で、內地の藝妓とは比較にならない程立派なものである。

俳優が行ふもの〻中には朝鮮傳來の歌劇がある。その最も有名なるものは「春香歌」「沈愊歌」の二つで、歌劇として立派なものである

民謠も澤山あるが、此の方面には立派なものは少ない。「愁心歌」といふ歌が最も有名で、靑年男女がよく之を口にして居る。又「遊山歌」「勸酒歌」等がある。民謠の唄ひ方は全然支那式でなくて[illegible]である。

琉球の音樂

琉球と云へば今日では沖繩縣全體を指すのであるが、然し

所謂沖繩と稱する北方の部分と、先島と稱する南方の宮古島及八重山群島とは其の性質が著しく違つて居る。或る博物學者の說によると、太古に陸地と島とが續いて居た頃には、沖繩は大島などと共に九州の島に續いて居て、從つて日本本州と共に亞細亞大陸の北部と連絡して居たのであるが、宮古島及八重山群島は臺灣島に續いて居て、從つてフイリツピンなどと共に亞細亞大陸の南方に連絡して居たといふことであるそのことは動植物の分布でよく判り、先島列島（卽ち宮古及八重山群島）は凡て熱帶性のものゝみを含んで居る。それで宮古島と沖繩本島との中間は極めて海が深くて、昔から此間が切斷されて居たといふことを示して居るといふことである斯樣な理由であるのか、凡ての樣子に於て沖繩本島と宮古八重山諸島とは大に異なつて居る。言語なども全く違つて居る。それに人種が全く違つて居て、沖繩本島の住民は北方のアイヌ系であつて、先島列島の住民は南方のマレイ系である。八重山群島の農民などの容貌が臺灣の生蕃のタイヤル族に實によく似て居る。それに八重山群島の女などは入墨をする（之れもタイヤル族に似て居る）。沖繩本島の人は昔は入れ墨をしなかつたが、後世になつて南方の人の眞似をして入れ墨をするやうになつたといふ話がある。

斯樣な理由で一言に琉球の音樂といふけれども、沖繩本島と先島列島とは全く違つて居るので、今之れを別々に御話することにする。

琉球には極めて昔から何等かの原始的歌謠のあつたことは勿論であるが、如何樣なる歌謠があつたかといふことは今日全く判らない。それに就て何等の記載も殘つて居ない。兎に角樂器は殆んど進步したものは一つもなかつたが、歌は行はれて居たに相違ないのである。所が第十三世紀頃になると「オモロ唄」といふものが現はれて來た。此の唄は「オモロ草紙」といふ古書が今日も琉球に殘つて居る最古の書として珍重されて居るが、此の書の文句を歌つたものである。此の書は琉球の萬葉集とも稱すべきもので、琉球最初の歌書であつて、頗る神話的の材料に充ちて居る。此の書の文學上の價値に就ては今日多くの學者が研究をして居て、此の書に依つて琉球の太古の歷史を探らんと骨を折つて居る。その意味から言ふと此の書は琉球の古事記と稱してもよい。所が此の書の文句に一種の節を附けて歌ふといふことが第十三世紀頃には行はれて居たのである。之れが今日知られて居る最古の琉球音樂である。

其の後之れに類した歌謠が追々と進步して來る時に第十五世紀になつて琉球音樂を一變せしめるやうな大事件が起つたそれは何かと言ふと支那から蛇皮線卽ち三絃が輸入されたこ

とである。此の樂器を使用するに就ては可なりな技巧が必要である所から急に音樂が技巧的に進歩をして來た。それと今一つ蛇味線が輸入された爲めに音樂上に大なる變革のあつたことは、元來蛇皮線は絃を彈いて音を出すものであるから、音が斷點的である。從つて音階の確立といふことが生じて來る。何うも聲樂許りが主であると、特種なる音階の發達は極めて遲々たるものであるが、彈絃樂器の存在によりて之れが急進せしめられる傾がある。琉球音樂が特種ある音階を持つやうになつたのは、勿論蛇皮線の輸入以後であると考へられる。

斯樣に蛇皮線が輸入されて技巧的の音樂が進んで來たが、一面に於ては古いオモロ歌謠の變形したる純聲樂も行はれて居て、第十五六世紀頃には「クワイナ」といふ歌謠が盛んであつた。

輸入されたる蛇味線は漸次改良され消化されて行つたが、斯ういふ事は必ず天才の出現によつて初めて徹底的に行はれるものである。玆に第十六世紀の初めにアカインコと稱する一大天才が現はれて、此の蛇皮線を用ひて多くの立派な作曲をした。之が古節又は昔節として今日も澤山にその作曲が殘つて行はれて居る。中々堂々たる立派なものである。支那から輸入された頃の蛇皮線は今日のものよりも大きかつた。後になつて琉球に第一流の三味線名器製作家なる眞壁といふ人が現はれて、實に立派な蛇皮線を作つた頃から現今のやうに小さなものになつてしまつたのである。信長の時代に我が日本に琉球の蛇皮線が傳來して之れが三味線になつたといふ言ひ傳へてあるが、或る人は我が三味線は大きくて支那の蛇皮線に似て居り、之に反して琉球の蛇皮線は非常に小さいといふ所から、我が三味線は支那から傳來したものであつて、琉球のものではないといふことを稱へて居る人があるが、然し信長時代に於ける琉球の蛇皮線は我が三味線のやうに大きかつたのである。その形も琉球の方が我が三味線に似て居る。

第十七世紀になつて湛水といふ蛇皮線の大家が出て多くの作曲をやり、湛水流といふ一派を開いた。此の頃は琉球も王朝の盛んな頃であつて、後世の如くに支那や又鹿兒島の勢力の壓迫を蒙つて居なかつた頃であるから、音樂も快活なものであつたが、今は琉球音樂は孰れも哀調を帶びて居る。湛水流では蛇皮線の手も細かくて技巧に富んでゐる。

湛水の弟子の中で最も有名な人が澤岻良澤、その又弟子の有名な人が新里朝住、此の人の弟子に聞覺（第十八世紀の初）といふ大家が居て、大に湛水流を改革して聞覺流といふのを開いた。その後此の聞覺流の派の方が盛んになつて、湛水流

は衰へてしまひ、今日では湛水流はタッタ一人、山内盛彬といふ若い音樂家が辛うじて之を傳へて居るのみである。此の山内君の後に誰れが之を傳へるか心細い次第である。

聞覺の弟子に屋嘉比朝寄といふ人が居た。此の人はアカインコ以來の天才であつて、鹿兒島に渉つて我が謠曲を研究し之れを消化して蛇皮線に和して以て今日の琉球音樂を作つたのである。之れを當流といひ、之れが今日迄盛大を極めて居るのである。

屋嘉比の弟子に高原朝典といふ者が居り、その又弟子に知念績高といふ人が居た。此の人も中々偉かつたが、その人の弟子の中に安富祖正元といふ人と野村安趙といふのと二人の大家が居て、その時から當流が安富祖流と野村流との二流に分れて相對立するやうになつた。之れは第十九世紀始めのことである。此の兩名とも中々の大家であつて互ひに相讓らなかつた。安富祖流の方では今は豐見山安均氏、讀谷山朝慶氏、金武良仁氏等の名家が居られる。

又野村流の方は此の野村安趙の弟子の中に山田盛熹氏、桑江良眞氏などの大家が居た。山内盛熹氏は今より七年前に亡くなられたが、今日その子息の山内盛彬氏といふ人が之を繼いで居られる。此の人は技術家といふよりも寧ろ學者肌の人で、琉球音樂の理論や歷史に就ては非常に熱心に研究して居られる。

桑江良眞氏も今から九年前に亡くなられたが、その人の弟子の中で、城間恒有氏、伊差川吉瑞氏、知念績仁氏、饒平名光德氏、安元詠礪氏などの名家が今日琉球音樂の牛耳を握つて居られる。

琉球音樂の節は御前風、昔節、大古節、中節、端節の五種に分れて居る。「カギヤデ風節」「恩納節」「長伊平屋節」「コティ節」などといふ節は御前風と稱し、節も長く伸び、中々難かしい。それから「作田節」「首里節」「ヂャンナ節」「諸屯節」などは昔節と稱し、古風な上品な節である。太古節といふのに「茶屋節」「仲節」「十七八節」の類で、之れも昔節と同樣に古風で上品なものである。「十七八節」は我が聲明に似て佛教味のある唄ひ方である。中節といふのは澤山ある、例へば「柳節」「天川節」「仲村渠節」「仲風節」の如きもので、孰れも巧妙な節廻しを持つて居る。端節はつまり端唄といふ意味で、先づ我が古い小唄のやうなものである。例へば「早作田節」「花風節」「チルレン節」「踊クワデサ節」の如きもので短かい粋なものである。此の外に種々の「口說」がある、例へば「上り口說」「下り口說」「四季口說」「東風原口說」の如きもので之れは勿論我が京阪地方から傳はつて行つたものが基になつて、之れが變形されたものに相違ない。此の口說とい

ふのは唄が主になつて、同じやうな節を幾回も繰り返して唄ふのである。

此の外に又山原(ヤンバル)本部今歸仁の節として「宮古ン子」といふ輕快な面白い節があり、又久米島から來た「阿嘉柄節」とか「仲地ハンタ前節」などいふものがある。現今富原(トミハル)勇といふ人が蛇皮線の曲彈きなどをして、此種の曲を巧妙に奏するが、之れを野村流や阿富祖流の正統の派の人々は非常に賤んで、之れと座を共にすることを恥辱として居る樣である。

以上の各節の多くには踊が附いて居る。此の踊は若衆踊や二才踊、笠踊などといふ種類のものがあつて、振袖を着たり扇子や花笠などを持つて踊るのであつて、此の踊り方は全く我が京阪地方の元祿以前に行はれたもの、例へば若衆歌舞伎時代のものが輸入されて出來たものに相違ないやうである。

又沖繩では八橋流の箏曲が大に行はれて居る。生田流や山田流は行はれて居ない。箏の形や爪の形も全く昔の八橋流の儘である。それで調子の合せ方が八橋時代のやり方であつて今の生田流や山田流とは違ふ。それで八橋當時の曲が澤山殘つて居る。例へば「一段」「二段」「三段」「五段」「六段」「八段」「九段」「源氏節」などがあり、「六段曲」も八橋當時のやり方であつて、今の生田流や山田流の「六段曲」とは大體は同じであるが、調子の合せ方や、少しの指遣ひが違ふから古風で面白い。今は以前に俳優として名優と稱せられた所の王城盛重氏といふ人が此の八橋流の箏の師匠をして居る。

沖繩本島に關することはそれ丈けとして、次に先島列島中の宮古島に移る。宮古島には別に大した音樂はないが、唯一つ「クイチャ踊」といふものがあつて、非常に面白い。所が今は之れを警察が禁止して居る。その理由は男女が一緒になつて夜間に戸外で踊るから不都合だといふのである。

八重山群島には非常に立派な民謠が澤山ある。その音樂的の價値からいふと、民謠としては恐らく日本中第一のものであらうと思はれる。八重山群島中の各島にそれぞれ面白い民謠がある。例へば鳩間島には「鳩間節」、波照間島には「波照間節」、黒島には「黒島節」、與那國島には「與那國節」などがある。最も大きな島は石垣島で、此の島の中には澤山の村があるが、それぞれ面白い民謠を持つて居る。それにやはり沖繩本島から蛇皮線が輸入されて、それに合せて唄ふやうになつて居るが、然し沖繩の歌謠と違つて、熱帶の氣分を持つた快活な歌謠で音階も西洋式に近い。殊に「鷲の鳥節」「戀の花節」「川良山節」「安里屋節」「崎山節」「デンサ節」などは如何なる點から見ても民謠として第一流のものである。

此の外に石垣島には農民等がユンタ、ジラバ、アヨウなどといふ聲樂を持つて居る。之れは全然[illegible]器の伴奏なく、農民男

女の合唱である。その合唱の中に屢々和聲的の聲の組合せが現はれて居ることは驚嘆すべきことであつて、民謠としては實に世界的の價値を持つて居る。所が今は知識階級の人が此の種の民謠を賤んで排斥するので、農民自身も何となく之をやる者が少くなつたのは殘念である。然し私が大に口を極めて賞讃したので、彼等も今後は大に之を奬勵すると言つて居たから、之が滅びる樣なことはなからうと思ふ。

臺灣の音樂

臺灣が我が日本の領土となつてから、此の島に居住して居る人種は三つに大別される。一は舊來の日本人が此島に移住したもので、之れを内地人と呼び、二は今から三四百年位前から對岸の支那大陸から此島に移住したもので、之れを本島人と呼び、三は極めて古くから此島に占據して居たもので、之れが所謂生蕃人である。今で最も人口の多いのが支那系の本島人で、マレイ系又は熱帶系に屬する生蕃人は約十三萬五千人程居る、内地人は最も少ない。

内地人は多くは都會に居るに過ぎない。廣く臺灣全土を見渡すと、全島の約六割の面積を占むる所の山間は凡て生蕃人が占めて居り、殘りの四割に當る平地に多數の本島人が居るのである。今此の三種に區別して其音樂の狀態を次に簡單に述べて見ようと思ふ。

（一）内地人の音樂　總督府關係の若い役人達の間には洋樂も行はれて居るが、先づ内地人の音樂と言へば花柳界が中心になつて居る。臺灣に於ける内地人關係の花柳界の藝風は凡て關西及九州趣味である。箏なども山田流は少なくて生田流が多い、踊は目下名古屋の西川流が全盛を極めて居る。然し臺北に藤村ユキといふ京都の片山流の舞の名人が居て、此の人が基隆の日本亭の人々に敎授をして居るので、基隆の一流の藝妓の間には京都風の舞が勢力を持つて居る。然しこれも追々と西川流に壓倒され行く傾向がある。

（二）本島人の音樂　臺灣に居る本島人即ち支那系の人は主として福建省の人と廣東省の人との二種に分たれて居る。之等は凡て支那音樂をやつて居る譯であるが、一概に支那音樂と言つても、支那は非常に廣大な國であるし、又非常に長い變遷に富んだ國であるから、各地方に依つて其の音樂が著しく違つて居る。例へば北方の北京天津を中心とする地方の音樂と中部の楊子江附近の音樂と、南に近い福建省の廈門(アモイ)を中心とする地方の音樂と、最南端の廣東の音樂とは、孰れも其の性質が著しく違つて居る。そこで臺灣の本島人は福建省の人と廣東省の人とから成つて居るから、主として福建の所謂廈門音樂と廣東音樂とが行はれて居る筈であるべきだが、實

際さうでない。それは福建省から來た人は多くは生活に餘裕のある人が多いが、廣東省から來た人は勞働に從事して居る人が大部分を占めて居るので音樂などに沒頭して居る人が少ない。そこで廣東音樂は臺灣には低級な劇風のもの許りあつて、福建の厦門音樂のやうな高尚なものは尠ない。

所で近頃臺灣に輸入される音樂は主として上海邊から來る俳優などに依つて持ち來されるのである。そこで北方の支那音樂が非常に勢力を持つて居る。殊に劇の音樂は上海系統のものである。之に依て臺灣では本島人の音樂を二大別して北管と南管とに區別して居る。北管といふのは主として今日の支那及中部の音樂であつて、劇の音樂が其の極めて重要なる部分を占めて居る。又南管といふのは支那の南部なる福建省の厦門附近の音樂であつて、之れは一種の古い聲樂であつて非常に風雅なものであり、全く紳士の藝術として遊蕩社會から全く引き離されてしまつて居る。

北管の音樂は一般に俳優及び藝人の取扱つて居るものであつて、之れを劇樂と純音樂との二方面に分つて考へることが出來る。劇樂といふのは支那の演劇から出た音樂である。一體に支那の演劇は日本のものと異つて、全く音樂的であるといふ點に於ては西洋のオペラに極めて類似して居る。又日本の能樂とも幾らか近い。そこで西洋でも歌劇の音樂が其一部づつ面白い所丈け取出されて全く劇の動作を離れて一つの音樂として取扱はれることが平素行はれて居るし、日本でも能樂に對して其の音樂が引き離されて謠曲として平素行はれて居ると丁度同じことで、支那の劇樂が所作を離れて一つの音樂として行はれて居るのである。

此の劇樂はその調を以て區別されて居るが、その中で臺灣に行はれて居るものは二簧、反二簧、西皮の類の調である。之等の調は清朝の中頃までに主として行はれて居たもので（勿論今日も支那に多く行はれて居る）非常に刺戟が鋭く騷々しいものである。清朝の末頃から支那では梆子調の音樂が現はれたが、之れは全く臺灣に入つては居ない。此の梆子調の音樂は有名な西大后の頃から盛になつたものであつて、餘程技巧的な唄ひ方で、又前の各調のやうな、刺戟の鋭いものではない。それ故一寸耳に感じよく響くが、然し何となく亡國的の調を帶びて居る。臺灣人が此の調を卻けて居る理由は、清朝は此の梆子調の音樂などが行はれたので滅亡したのだと稱して此を排斥して居るのである。

二簧、反二簧、西皮などの調の音樂は樂器は胡弓、月琴、喇叭（太平簫）小さな鼓類を用ひるのであるが、非常にその刺戟が鋭く、耳を突き刺すやうで騷々しいと恐らく世界第一であらう。馴れない人の耳には頗る不快であるが、然し之に馴

れると中々面白いもので、實に未來派の藝術とも稱すべきものである。殊に之れが芝居として行はれる場合には實に何とも言へない趣がある。

劇樂以外の純音樂としては小曲の類が多く行はれて居る。之れは民謠風の小さな聲樂で、伴奏は主として琵琶を用ひて居る。臺灣の藝妓即ち藝姐がよく之を唄ふ。支那の藝妓は盛んに時調即ち端唄の如きものを唄ふが、臺灣の藝姐は小曲を多く唄ふ。小曲の方が時調よりも古風で上品である。

南管と稱するものは支那の廈門の音樂で、泉州から起つたものである。恐らく南宋時代の音樂の今に傳はつて居るものらしい。樂器は今日では琵琶、三絃、胡弓、洞簫を用ひ、歌ふ人は別に一人定まつて居て柏板を打ちつゝ唄ふのである。之れは紳士のやる音樂といふことになつて居て、藝妓や俳優などのやるものではない。宴席で主客打ち交つて、よくこれをやつて居る。此の音樂を御前清曲又は御前清音といふ。此の名稱の生じた理由は清朝の初めに皇帝が各地の優れた音樂者を北京に集めて之を聞かれたときに、孰れを聞いても氣に入つたものがない。然るに夜更けて月明らかなる時に城外で實に何とも言へぬ美妙な音樂が聞えたので、急に夜中之を宮中に召して聞かれた。之れが廈門の音樂である。皇帝は之を聞かれてその妙音を賞された後に賞與として多くの金を與へられようとした頃、此の音樂者の言ふのには、此の廈門の音樂は紳士の修養にやるものであつて、藝人が職業にするものではないから、此の音樂をやつて金錢を得るといふことは全くないと言つて之を斷はつた。そこで皇帝は然らば他に何か望む所があるかと問はれたので、彼等は此音樂に何か適當なる命名をして頂きたいと願ふので、皇帝は之れに御前清曲といふ名稱を下されて、今後は何時でも此の音樂を演奏して居る所では其前を通る人が馬又は車から降りて禮をして行くべきものといふ勅命を下されたといふことである。此種の音樂は今日支那の廈門で盛んに行はれて居るが、臺灣でも臺南邊では可なり行はれて居る。凡て紳士がやつて居るのである。臺南の瑪祖廟の大祭の時などには行列の中に臺南の紳士が此の音樂をやりながら歩いて行く。

(三)　生蕃人の音樂　臺灣の生蕃人はタイヤル族、サイセット族、ブヌン族、ツオウ族、パイワン族、アミ族、ヤミ族の七種に區別される。その中にサイセット族といふのは北部の極めて一小地方に居るものであつて、タイヤル族の影響を受け今日では殆んどタイヤル族と見別けが附きにくい樣になつて居る。又ヤミ族といふのは臺灣の南端から東方に十何里と離れた紅頭嶼と稱する一小島に居住する極めて原始的の未開人である。それ故生蕃人の音樂といへばタイヤル族、ブヌン族

ツオウ族、パイワン族、アミ族の五族が問題になるのである。

蕃人の樂器は極めて小種類で、大體に於て孰れにも共通して居る。その最も普通なるものは笛と絲琴である。笛には横笛もあるが、最も多いのは竪笛である。凡て竹を以て作られ孔は蕃社に依て違ふが四乃至六孔である。吹口は恰度西洋の縦笛（フラジヨレット）のやうな裝置になつて居て、之れを上端の口から吹けば直ちに音が出るやうになつて居る。南方のパイワン族などには支那の明笛のやうに竹紙を張つた孔などを設けたものがある。音階も支那風になつたものがあり、ライ社などの吹き方は頗る進歩したものである。タイヤル族は盛んに首狩をやるが、その蕃人の間には首狩笛といふものがある。陰氣な音を出す笛である。此外に鼻笛と稱し鼻で吹く笛がある。之れは大抵は二本並んで居て兩方の鼻孔で吹くのである。これは音は割合に弱い。

絲琴は又口琴とも言はれ手の指の長さ位の竹片に細長い孔を穿ち、それに眞鍮の薄い孔を附け、竹片の兩端に絲を附け短かい方を右手に持ち、長い方を左手で引張り、簧（リード）を口に當てながら長い絲をピン〱引張ると簧は鳴ります。その音が口腔に共鳴して強く響くのである。先つピヤボンと稱する玩具に似たものである。音は頗る弱い。一體に生蕃の樂器は音が弱くて、強いものが一つもない。ツオウ族の阿里山蕃などになると小さな弓に絲の彈つたものがあつて、之を口に當てて彈くと音がする樂器がある。之を弓琴と稱する。生蕃の音樂器はそれ位である。

生蕃は樂器は樂器で別に奏し、歌の伴奏にすることは少ない。歌は別に歌丈けを唄ふ。歌は多くは卽興的であつて、簡單な節に喜怒哀樂をよく現はしてある。その歌の意味は例へば遠來の客を歡迎するとか、男女間の愛情を表はすとか言ふ種類のものと、首斬りをするとか、攻撃に行くとか、凱旋の時とかの如き戰爭の歌とが主要になつて居る。その他に耕作とか舟漕とか、家を建てるとかいふことの動作に伴うた歌もある。南方のパイワン族などになると節も非常に複雜になつて來て「ボワリバン」、「ジナロワン」、「オリジユマヘ」などといふ曲がチヤント出來て居て、之れが古くから傳統的に歌はれて居る。タイヤル族では卽興的のものが多い。

又日月潭といふ湖水の附近では杵を打つ音樂があつて、それが有名になつて居る。卽ち多數の女子が孰れも長短種々の杵を持つて交互に地又は石を打つので、その音が音階して居て、一つの音樂になる。それに又傍らに水を容れる爲め竹筒にそれ〲水量で調律をして、それを地に打ち附けて伴奏をする。月夜などに湖水に舟を浮べて此の音樂を聞いて居るとピアノを聞いて居るやうな心持ちがする。此の杵の樂はブヌン族では方々で行はれて居る。

ヒマラヤの山笛の響

――西藏地方の音樂――

永田龍雄

印度及び西藏の民族音樂と言ふものは、實に特色のある地方的色彩の富んでゐるものである、彼等の音樂は耳から耳に、づつと先祖以來傳はつてゐるのであつて、音譜といふものはないのである、だから種々雜多な音調があるのである、然しそれは、みんな、單調極まる愚昧なものであることは申すまでもない。

歌謠と言つても、なんの深みもないものばかりである。つぎにしるす民族の謠ふ詩は、もつとも彼等のあひだに普遍なものなのである。

お前の女房が立つて眺めてゐるぞ
早く家へゆけ亭主よ
女の眼玉は絶えずなにかさがしてゐるぞ
女の舌は悲しさうにもつれるぞ亭主よ
早く家へゆけ亭主よ

それからこんなのがある。

惚れたはれたでお前は勝つたよ、だがこのわたしを忘れちやいやだよ
こゝな男の薄情ものめが！
覺えてお置き、わたしの眼にはお前がしよつちうゐるんだよ
わたしが顏をあらふのがこはいのは、そのお前の姿が眼から消えるからだ
惚れたはれたでお前は勝つたよだがこのわたしを忘れちやいやだよ

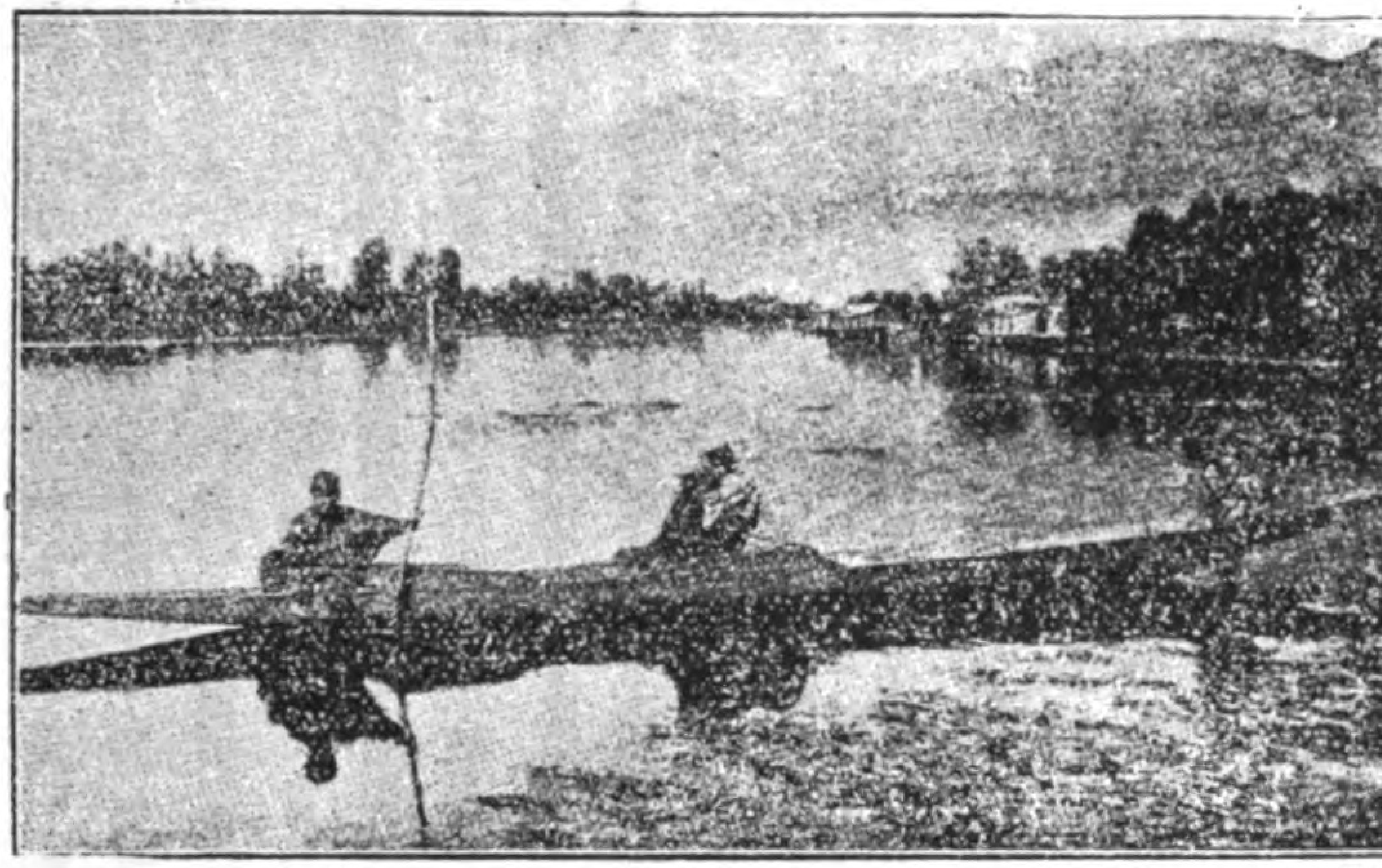
この歌謠などは、素朴な愛すべきものだと思ふ、眼に戀人がゐる、顏をあらはうと思ふけれど、お前の姿が消えてしまふからあらはないなどと言ふ處は、萬葉集中の戀歌の趣がある。

わたしはお前に珊瑚の數珠をあげやう

かう男性が謠ふと女性がつづいて謠ふ

けれどもわたしの家の路はせまい――お前はいつも僞(うそ)つ

きだ（お前の舌は、わたしにこない、とかう書いてある、即ち僞つきだ）と言ふ意味なのであらう。



こんな單朴な二重唱(デユエト)の形式が彼等のあひだにあるのである。

これらの歌謠に伴奏されるものは笛である、多くの場合彼等は笛のみをつかふのである彼等の肉聲は山中人の常である粗野愛すべきものである、その笛吹きのうちに指揮者みたいものがゐるのである、笛のねは、ちやうど古い須格蘭高地人の吹いた風笛のおとに似てゐるのだ。哀調掬すべきものださうだ、この響がヒマラヤ連峯のいづくにも響くのである、月のうつくしい夜のカシミールのダル湖上なぞに、棹のおとと月光の水上に、この山笛の響を聽けばこれまたなんとも言へない風韻が、近代音樂の理智的な響を超越してある感動を與へることであらふ。あるひは、ひまらや松のこき綠をけぶらす春日の影に、ラロブの谿谷の上に、山民が鳴らす木の篳篥の哀音は、おほく『鸚鵡』と題するテーマをかきならすのである、そのテーマは、カシミール地方の傳說の音樂である、ある姫の愛寵する鸚鵡が戀人へのつかひで山の空に飛んでいつて舞ひ戾らぬと言ふ意なのださうである。

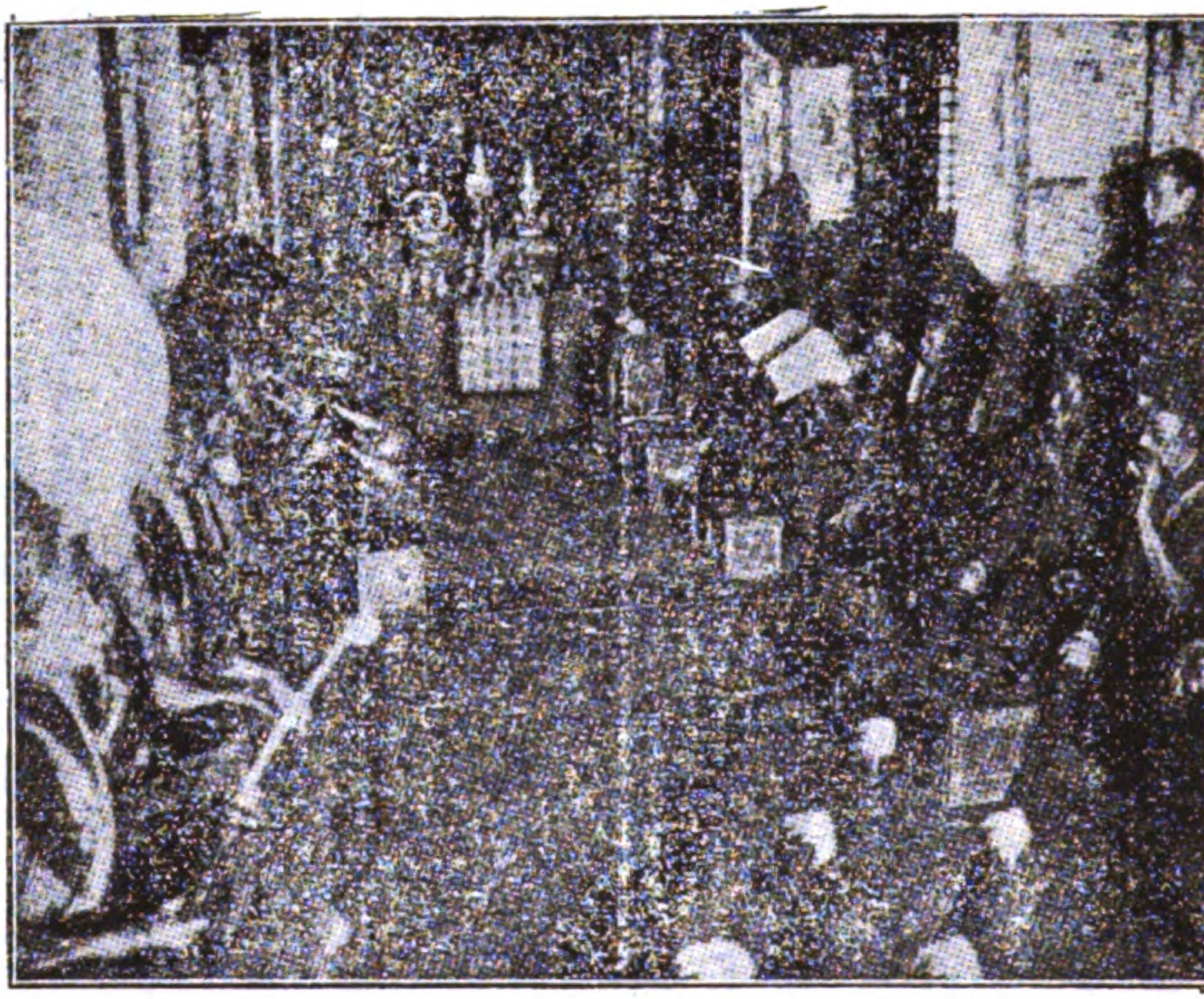
山地でも平野に於ても印度で、いちばん重きをなす器樂は笛である、笛こそは印度の人の情熱をもるに、もつとも、適した樂器である。窓の中でも山上でも湖畔でもこの笛の響は、悲しみを語り歡喜を述べ涙をこぼすのである。

新らしき印度は、きつと、これに滿足はされないであらう。この吠陀時代の藝術は必らず滅びる日がくることであらう。

印度の人々の原始音樂と土民藝術及び手藝との比較は興味深く研究されて好いものである、われわれは印度美術及び工藝と印度刺繡が、いかにわれわれの生活に迫つてきてゐるかをも考へたい、しかし音樂は、どうであらうか――この問題は後日に殘さうと思ふ。

西藏の山族にヴアテイアと言ふのがある、これは西藏人の

意味ださうである、西藏の種族制度は二階級にわかれてゐる、ひとつの種族は饗筵と嫁娶を司どる役ひとつは剌麻教の僧侶である彼等が互ひに覇を稱へあうてゐるわけなのである、この剌麻がまた二つに分れてゐて西藏地方の人民の精神的な方面を司どるダライ・ラマそれからタシ・ラマと呼ぶのがそれなのである、この二つのラマが音樂のメロデーをしよつちう司どると言つては變であるが、まあ、雅樂所のやうに、いつも祭司や祝典のとき樂を奏するのである、どんなものを謠ふかと言ふと『聖なる蜂のうなり歌』だとか『增へよ讃へよこの宗教』と言ふやうなテーマのものである。



まだこのほかに『慈しみと幸福との諧調』だとか『花が雨できれいになる』などと言ふのがある、此『花が雨できれいになる』は非常に彼等のあひだに愛されてうたはれるさうである。

これらは全西藏卽ちシッキムーネパルーブウタン地方で現今行はれてゐるものである。

彼等は心願をするときにムウコオと言ふ式をやる、これは剌麻教の一種の普通教育でやるひとつの形式なのだ。これは呼吸のだしいれに瞑默して、そしてその自然の呼吸でもつて笛をふくことなのだ——これなどは冥想的な笛のもつともよく現はれた音樂だと言ふことを思はせるものである。

笛のわれわれの觀念は竹でつくられるものだといふことをすぐ思ふが西藏には竹がないのである、生じないのである、で、笛は木笛なのである、木でこしらへられるのである。

だからラサ附近からその邊境にかけて、この笛のためにつくられる植樹をしてゐる、ラサが笛の供給所なのである。しかし笛になる樹は、なかなかできないさうである。

笛がそのやうに、なかなかえがたいものになつてゐる、で、

この笛には、もつと高價なものでつくられてゐるのを見る、——夫は金銀の絲細工でできた笛である、セルナイといふ美くしい笛は黄金と土耳古國の裝飾がしてあつて、普通のより大きい、開いたところは喇叭に似てゐる、この笛は、こんなに立派でも西藏の好い階級のものがふくとは限らないのでダアヂイ族即ち裁縫師階級が專ら吹いてゐるのである。

この笛が唱ふときに伴奏することは、前に言つた、この笛ばかりで小さなバンドをつくるやうになつてゐる、さうして合奏をするのだ。

マハラジヤ王が旅行でシルキムにきたときなどはこの合奏がきかれるわけである。

この笛に七つの音階がある。

この山笛が、ヒマラヤの山のなかにも響く——この山笛が印度にきて印度の笛の音樂史ができたのである、印度歷史の始めに吠陀の笛のヴアーナがヤマ——これは死のことだ——のなかにかくれてゐたと言ふ傳説がある、で、古代印度の詩は笛の響から生まれでたものなのである。

印度の佛教美術——その彫刻繪畫には、みんな笛を吹く人が顯はれてゐる——ヒデラバツドのアジヤンタの洞窟の壁畫ジヤバのボロブダアにせよ近く發掘された中央亞細亞のタアフワンそれらの場所に見出すものは、きつとフリユト・プレーヤーの姿がある、いかに古代印度に於て秀でた音樂家がこの笛吹のなかにゐたかは、これらの發掘物によつてもわかる次第である。

（二人の笛吹）





印度の心がこの笛のなかにこもてゐると言つても決して過言ではないのである

西藏では笛のことをバンセリと呼ぶ、語源はバンスからきてゐるのである、バンス即ちバンブウ——竹である、このバンセリが一般竹笛の呼び名である、前に言つたやうに西藏高原には

この竹がないので笛などもパンセリとは言はない、リングブスと言つてゐるのである。

それからその笛でもチユグリと呼ぶのやモレリと呼ぶのがある、七つの孔があつて細い小さな、そして吹きかたのかんたんの笛である。

さうでないのでは四孔のがある――そしてこれらの笛は父祖傳來の重寶として傳へられるのである、日本の尺八のなかが紅漆で塗つてあるが、もとはこの西藏人の笛がさうなのでいまでも笛には紅塗りが多いのである。

笛の音は日本のとはちがふやうである、蘆の葉になる風の趣であつて哀韻の實によくこもつたものであるさうだ、全音樂がこの笛に集中されたものであるから、さうあることも、うなづかれる。

彼等の迷信でよく水邊で音樂をやる、それは水の精をなぐさむる笛の音樂である、彼等は水の精を神のやうに尊敬するさうである。

處女が水浴にゆくとき、澄んだ水のなかでこの笛をふきつつ水浴をすることなどもあるのださうである。

愛すべき古代の世界は冷たき近世の科學の量(はかり)には觸れなかつた――もう「世界」はとぢられてゐる「自然」もとぢられた、けれどもこの西藏の人々ばかりは地の精水の精と仲よく遊びさうして尊敬しあつて生活してゆく――音樂をかなで、さうして仲よく暮してゆく――なんと言ふ靜かな暮しかたをしてゐることであらう。

ひるすぎ午後一時になると　彼等は笛をふく、それ　地の精が、その時間は遊んでゐる時間だといふのである、そして巖上に腹這つて笛のねをたのしみ聽くとしてある。山の人は哀しく或ひはたのしく、思ひぞんぶんに笛に思ひを託するのだ、そして病死や不幸やが、われわれの身にこないことを深く願ひあげると――いふやうな祈りの言葉をも笛に吹いて地の精にたてまつるのだ――その響きは、たくまざる自然のままのこゑのやうな響きださうである。

その橋をだれが渡つてきたのだえ
ラジヤが渡つてきたんだよ
そんならなにをやらうかなあ
ラジヤは土地と家屋がまつとほしいんだ

その橋をだれが渡つてきたのだえ
ラマさまが渡つてきたんだよ
そんならなにをやらうかなあ
ラマさまには本をやらねばならないんだ

その橋もだれが渡つてきたのだえ

わたしの親爺が渡つてきたんだよ
そんならなにをやらうかなあ
親爺には高い綱の肩かけをやらなければならないんだ

これが笛の伴奏でうたはれる西藏民謠のひとつです——愛すべきは未開の國の音樂です、そこには天然がゆたかに、ゆがめられないで保存されてゐる——音樂と自然——これが近代にゆけばゆくほどかけてくるのである。

スコットランドの音樂

永田龍雄

スコットランドの音樂を語ることは、なかなかのことである、いまスコットランドで特に音樂として書くべきは、スコットランド風笛のことなのであるが、しかし風笛の歴史を、のべたところで、あまり興味あるものでもなし、スコットランドの音樂史は、到底いまわたしには、やつてゐられない身邊のいそがしさがある。

そこでスコットランド特有な風笛と風琴で彼等高地人の踊る「劍の舞踏」(スオウドダンス)と「フリング」と民族音樂のことを、ちよつぴりと書いて、この題の責をはたさうと思ふ、だからスコッチのシストルと呼ぶ薊勳章(あざみくんしやう)は貰へないかもしれない、さうしてスコットランドの勇士に、劍の責をくふかもしれない、しかし、まあその時は、ハイランド・フリングで蹴飛ばしてしまふつもりである。

スウオド・ダンスもフリングも共にこの高原人の精悍な氣象を表現した踊であつて、昔は戰場でこれをスコッチが踊つたものである、今でもスコットランド人は、この踊を甚だ尊敬してゐると言ふのは、この舞踏には幾多祖先の血のあとが殘つてゐると思ふからであらう。

高原人は昔からつくつた強いハイランド・ウヰスキイをのみ、さうして快活に藝術的にこのフリングを踊るのである、形式は伊太利舞踊の系統からきてゐるのである、地中海の潮風にふかれた山松の風に吹かれてゐるが如き、伊太利舞踊

の姿に、前言つた精悍の氣が溢れてゐるのがこの踊りの姿である。

この踊の步調にふたつのマンナアがあることだけを言つて置かう、スコッチッシュ・ミリテヤアと呼ぶのであつてどうしても軍士と縁はきれぬ踊であることは名を聴いただけでも想像がつくはずである。

もう、ひとつの名はバッテメントと呼ぶ、これも戰爭のバットルに縁がある名から來てゐるのである。

步調の簡單なことは、すこし飛び、すこし廻る、といふぐらゐなもので、足の動きなども、ごくあつさりしたものである。

しかし簡單なテーマであつても、なかなかに藝術的なものであることは、この踊が、現在に於いても尊敬さるゝ所以なのである。



スコットランドに於ける踊手と風琴を彈く人

スコットランドの舞踊者は精神なくして踊らないのである。精神なければ藝術的の想像が踊にできぬであらう。踊には想像が必要である。

スペインの踊手には、それがない、いつも冷靜である、舞踏の踊手もさうである。

スコットランドの踊手は情熱がある。風笛の響きが彼等の踊に大なる感化を與へてゐるのである。

スコットランドの踊に必適すべきはイタリイのタランテラの踊、小露西亞のコサックの踊、ハンガリイのザアダスの踊であらう。

情熱と精神と、戰鬪の魂と──いま、あげた各國の踊にはみなそれがある、それらの佗發がある。

このスコットランドの山の舞踏は、古曲舞踏（クラシック・バレー）と言つても、

よいのである——パベエンでもミヌエットでも、もう既にメリイ女皇時代にその舞踏室の樣式に彩られてゐるのである。

ハイランド・フリングなども傳說のなかの踊のやうな氣がする——山々は雪にうづもれて、冬季彼等の遊戯はこの踊をするのが、たゞひとつのたのしみになるのである、踊るところは雪に埋れた教會のなかである、燈影のあかあかと洩れるなかに彼等は、たのしく踊りあかすのである。

この踊のなかに民謠がうたはれるのである、スコツトランド特有な民謠が——鄙びた、しかし音樂的なリズムをもつて——一體民謠は野蕃な姿をもつてゐるほど、その情緒と感情の表現が、民謠のなかに、うまくメロディアスなものにできてゐるのである。彼等の敍情詩が彼等の口から雨が降る如く嵐が吹く如くに洩れてくるのである。さうして彼等野蕃な民の民謠の始は傳說を口ずさむのが源であると言はれてゐる。

スコツトランドの古人もさうであつたのである、だから、こんな、むごい民謠も殘つてゐる——これは、こどもがうたうてゐるのださうである。

　おふくろは、わたしをころしてパイに、こしらへた
　おやぢはそれをたべてうまいと言つたふたりの妹も、わたしの骨をつゝついた。
　それからわたしを冷たい石の下に葬つた。

これは最初の民間の傳說を民謠にした證據となるべきであつて、これはスコツトランドに殘つてゐる英國傳說のひとつであり、これと同形式のものが獨逸にもあるさうである。今日スコツトランドに殘る民謠の音樂で、美くしいメロディをもつてゐるのは、隨分ある。

「あるお月夜の晩」—「ボンニイはよく働く兒だ」—「クリスマスカロル」—「シャムロックの濱」—「牡蠣の入つてゐる籠」まだまだあるが、まあ、こんなテーマのものである。

これによれば、もう高原人の民謠も、よほど藝術化したものを、うたふやうになつたことが最初の童謠にくらべてわかると思ふ。

こゝに入れた民謠はスコツトランドの、もつとも早く音樂化した民謠の代表のもので「グリーンスリーブス」といふ、ひとつの形式の早期民謠である。時代は十六世紀である。

終りに、わたしは高原人の戀唄を書いて見よう。

　わたしやねえボンニイお前にほれた
　わたしやほんとに誓つただ
　ほんにわたしは死ぬまで惚れた
　だからよう

わたしや、わたしのこの胸に
家を建てたよ逢ふ家を…………
それから戀唄でも、むかしのトラディショナルな匂ひがしてすこし慘いものもあるのである。

(Earliest form) 16th Century



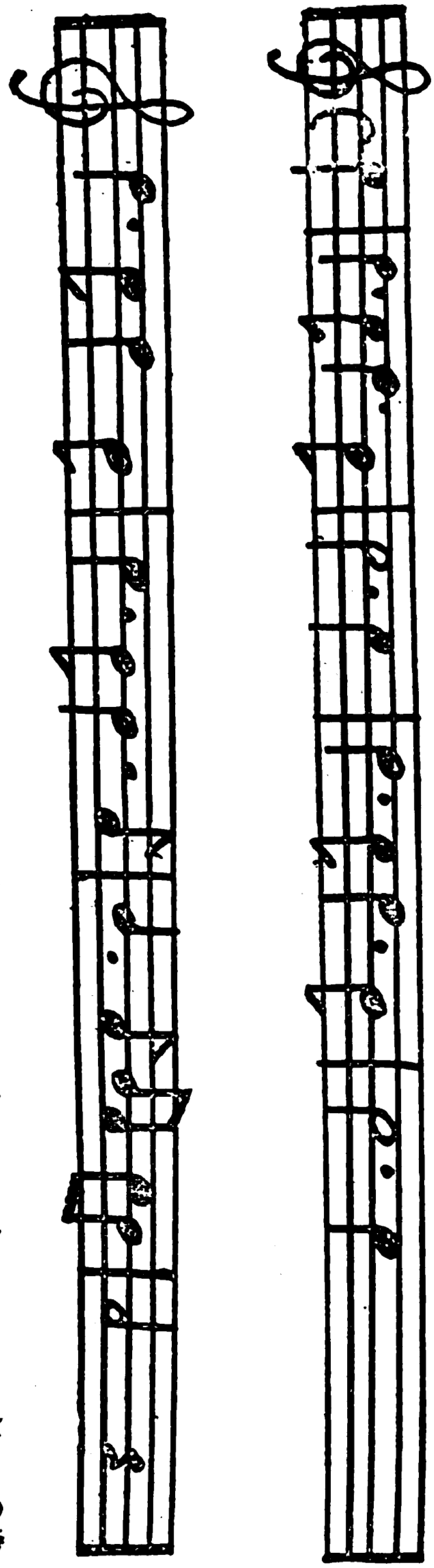
わたしの戀にふいてくる
風はめつぽう寒うござる。
雨までにくや寒う降る
なんで
そなたは忘れやう
だが、ほんとの戀にしちや?
あいつをころしてしまひたい

くりかへして言ふがこの項はスコットランドの音樂としてあるが民謠及び舞踏の紹介にとどまつたことを讀者に詫びるしかしスコットランドは、このふたつのものが音樂として研究の價値のあることだけを記憶して置いてもらひたいのである。

さうして他日、わたしは改めてスコットランドの音樂史を執筆したいと思つてゐる、それからスコットランドの舞踊それについてモーリス・ダンスのことなどをくはしく紹介するつもりである。うつくしい高原人の舞踏及音樂をかく日をわたしはたのしみにしてゐる。

古代埃及の音樂

埃及音樂と言ふものは、今日もう、あとかたもないのである、そしてその古代に、どんな種類の樂器があつたかもつまびらかではないのである、たゞ今日では埃及人の墳墓や壁畫に



あらはれたる繪畫及び彫刻などによつて、からうじて推しはかるばかりの狀なのである。

それらには彼等の生活の記錄が明らかに殘されてゐる——政治もある、私人の生活もある、それから彼等の音樂的生活もあるのである——その音樂的生活に描寫されてゐる樂器によつて古代埃及音樂が、どんなものであつたかを知るばかりなのである、——そこには竪琴の幾種類かゞある、リラの多くの形が描かれてゐる、それから、笛の形も見えてゐる——竪琴とリラと笛とが、古代埃及人の音樂器であつたのかも知れないのだ——さうして、これら音樂家が一團になつて音樂の演奏をやつたものであるらしい——さうしてその傍に唱歌手が立つてうたふことになつてゐたのであらう——で、この時代の彼等の音樂は、外の政治や社會的の權能と同一に置かれてゐたものなのである——挽歌にも祝祭にも舞踏にも獻祭にも——その音樂が重き位置にあつたものである。

その樂器のうちで、いちばんの、すぐれたものは竪琴であつたのである、さうして古代埃及人はその竪琴を呼ぶにテブ

ごと言つてゐた、希臘人は笛の發見に就て埃及人に負ふところ大なのである

　疑ひもなく埃及人の音樂は原始的なものであつた――これは、ほかの古代民もみな一様なので、彼等の自然のまゝの心が、やがて原始的な音樂をつくつた所以である　サー・エドワード・ウイリヤム・レーン氏は千八百三十六年に埃及人の古代の音樂のメロディを蒐集してゐる、併しそれによつても古代埃及人の心情は、わかるべき筈のものではなかつた、そのメロディには四聲の音階があつたのである――これは古希臘の音樂と同じ組織になつてゐるのであつた、これがすべての古代歐羅巴音樂の基となつてゐたものであることがわかつた。リヅムの形式が非常に規則たゞしく興味のあることが、これを見ればわからう――何んと言ふシンプルだらう、なんと言ふ尊い聲であらう。

　しかしそれとても古代の埃及人の響きでなく近代歐洲音樂の影響をうけてからのリヅムであるからして、完全な古代のものとは言へないのである、しかしそれでさへ、もう今日では、あとかたもないものになつてゐるのである。彼等が古代につかつた樂器は前にあげたほかにパイプがある、タンボラがある、クロトラと、それから竪琴の數種類があるのである。

ペルシャ民族と音樂

荒木茂

　玆にペルシャの音樂に就き簡單に述べたいと思ひます。凡人間が此世に生存するやうになつてから、その心的作用を具體的に表現する爲めいろ／＼な方法が採られた事は申すまでもありません。而して音樂も亦言語や繪畫彫刻のやうにその一方法であつて、その本質に於て最初全く獨立に起つた内的衝動の發露であります。卽ち喜悅感謝の表現であり、又進んでは悲哀の表現となつたのであると思ひます。されば人類の歷史を溯つて原始時代の事を考へて見ても、人間が内的に或は外的に滿足して始めて心地好い音聲を發し、喜悅を示し感謝の意を表はしたのであつて、その自發的な發露が發達して今日のやうな複雜なる音樂になつたのであると思ひます。然らばペルシャ民族は彼等の内的衝動を如何に音樂の上に表現

して居るのでありませうか。

今日までの研究に依りますと、ペルシャ民族も他の民族の如く音樂的發展の初期に屬する歌には、最も古き歴史を持つて居るやうであります。ペルシャ民族が最古より傳へて居ります歌の主なるものは、宗教的色彩を帶びて居ります。その内には彼等の信じて居つた神アウラマヅダ等に對する頌、又或る學者が對惡魔の戰曲であると說いて居るものなどもあります。是等は久しく口碑につたへられたもので、後世編輯されたヅロアスター教經典中に見出さるゝものであります。西紀前數百年頃、ペルシャをして四隣に知らしめ歐洲の東南部より印度に及ぶ大王國を築いた彼の有名なるダリアス大王も此等の歌に招顯(インヴォーク)されて居る神アウラマヅダを深く信仰して居つたと云ふ事が、當時彼自ら命じて岩上に銘刻し、今日に傳へて居る碑文中に明かであります。其故彼も亦戰線に或は帷中に於て前述の如き頌又戰曲を口吟んだ事を想像されると思ひます。多くの斯る歌が、今日迄傳へられなかつた他の諸種の歌と共にペルシャの音樂の基礎となり、中世期より近代に至るペルシャ詩人の作品が、東洋風な憂鬱さと單調で歌はれるやうになつたのであると思ひます。故に多くの旅行家の記錄を見ても馬子や案內者のやうな者でさへ、有名なる詩人フッダウシーの史詩「シャーナーマー」とか、ニザームの戀愛詩「ライラーとマジヌーン」とか、ジャミーの抒情詩「ユースフとヅライハ」などの此處彼處を種々なる音調で歌つて居る事を話して居ります。往時幾多の外患を蒙つたペルシャであるに拘らず、聲樂上には何等他の民族の影響を受けなかつたやうであり、又他方面から見ると他の影響を受ける丈の基礎的なものもなく、さりとて他民族より、優れたる聲樂をとり入れようとするやうな熱意ある民族でもなかつたやうであります。

然らば彼等は如何なる樂器を所有して居るか。第一に述べたいと思ふのは各國の樂器中で最も原始的な跡を遺して居る太鼓類であります。太鼓には約三種あつて、丸く扁平なる胴の兩面に皮を張つたタブルと稱する手鼓(タンブリン)、ドウーウルと呼ぶ鼓のやうなもの、及び擂鉢の形をした木製又は土製の胴で、その大なる一面に皮を張つたナカーレと稱するものがあります。タブルとドウーウルの二種は片手にて支へ他の手で鳴らすものでありますが、ナカーレは一個或は二個を地上に据ゑ棒を持つて打つものであります。此等の三種の太鼓は或る地方では必ず同時に叩かれます。又或はペルシャの城廓、王宮等にある所謂ナカーレ・ハーナ(太鼓堂)に於て、ナカーレを角笛と共に用ゆる地方も多くあるやうである。さて此ナカーレ・ハーナと稱する太鼓堂では、時として兵卒を集める爲め前述の樂器を鳴らす事もありますが、毎日必ず日の出と日沒に此等の太鼓を合奏する風習があるのであります。その風習には古い歴史があります。二說あつて何れが眞であるか判りませんが、一說には太古に於ける太陽崇拜の遺習であ

ると云ひ、他説にはムハムマッド教と共にペルシヤに傳來した風習であると云ふのであります。何れにしても斯る亢奮を誘ふ樂器は如何なる民族の間にも原始的感情を滿足せしむる樂器として喜ばれるものでありますから、ムハムマッド教傳來以前からペルシヤ民族の間に使用された樂器で、他から輸入されたものとも思はれません。

次に原始的なものは吹奏樂器であると思ひます。その內最古より傳へられたものには角笛があります。種々な形をしたもの又後世になつては立派な彫刻のあるものもあるやうであります。ナイと稱する二尺餘の蘆で作られた縱笛も一般に使はれて居ります。初期に屬するもの程、構造は簡單で孔が少なかつたやうであります。然し現今は表裏で十以上の孔を有し、又複雜な彫刻などあるものがあります。その他吹奏用の樂器には喇叭類がありますが、それ等は寧ろ他より輸入されたもので、軍樂隊の如きは全く西洋化した點を明かに示して居るやうであります。

ペルシヤの樂器で最も複雜なものは、他の民族に於けるが如く、絃樂であると云へませう。絃樂には種々なる形のものがありますが、先づ三種に大別することが出來るかと思ひます。第一にターと稱するもので、その構造は大體に於てバンジョーのやうなものでありますが、只胴の構造が異なつて居ります。バンジョーの胴は半球の一平面に皮を張つたものでありますが、ターの胴は球狀で只その一部が切り拔かれ其處に皮が張られてあるのであります。大きい瓢簞形をした胴もありますが、その場合には上球の一部分に皮が張られてあるのであります。五絃以上がバンジョーよりも長い琴頸に張られ、膝の上に胴の末端を置いてバンジョーやマンドリンのやうに彈くものであります。彈くにはその目的の爲めに特に延ばして居る爪、又はマンドリンに用ひらるゝ爪の樣なものを使つて居ります。音調はその胴の大小に依り異なつて居る事は申すまでもありません　次はケマーンチエと稱する絃樂でありますが、之れは西洋のヴアイオリンのやうなものであります。胴の構造は大體前述のターと同樣でありますが時として球の裏面に可なり大なる穴を設け、反響を良くするやうになつて居ります。又胴の末端には金屬製又は木製の支柱があつて、馬の毛を以て作られた弓で、セロのやうに彈かれるものであります。元は三絃のものもあつたやうでありますが、今は五絃以上のものが普通のやうであります。第三には我が琴に類似し、長さ琴の四分の三位であるチヤングと稱する絃樂器であります。此樂器には琴柱の如きものを用ひず、普通十本以上の金屬製或は動物の腸皮より精製した絃を適度に張り、金屬製又は木製の細き棒を以て絃を打つのであ

ります。

以上に述べた諸樂器は獨奏又は合奏に使用せらるゝものでありますが、最近西洋風な合奏法が紹介される迄は、如何なる場合にも同種の樂器が一個以上使用された事はないやうであります。其故一人が單調な歌を歌ふと同時にナカレーとか或は他の絃樂器が伴奏すると云ふ類であります。斯る諸種の樂器を有して居るペルシヤ民族が、各器を巧みに演奏し得るに到るまでには、各相當の努力を必要とすることは、明かであります。けれども今日の西洋樂器の巧妙さには到底及ばず、殊に諸樂器の合奏に到つては勿論同日の比でないのであります。又此等の諸樂器に共通なる特質として、總ての音調は憂欝で律は單調であります。日本民族の持つ音樂が抒情的な特徴を有し、民族性の或る特質との內的關係を示すが如く、陰欝で單調なるペルシヤの音樂は、又彼等の或物を代表して居るのではありますまいか。

斯く述べ來つて私共の第一に考へさせられることは、一民族が有した環境は、その民族の音樂の發達上非常に重大なる關係を持つて居ると云ふ事であります。然らばペルシヤ民族は如何なる環境を有して居つたか。彼等は最初印度民族と共に一族に屬し、居を共にして居つたが、後分離して中央亞細亞より南下し、牧畜を業として水草を追ふ生活を續けたのであります。彼等が居を定めて國の基礎を築き、遂にその威力を四隣に振ひ始めたのは紀元前第六世紀でありました。然るにその生命も忽の間であつて、紀元前第四世紀の前半には、彼のアレキサンダー大王の配下に屬するやうになつて仕舞ひました。それから紀元第三世紀サセーニアン朝の頃、暫時暗雲の絕間より現はれた平和の曙光も失せ、續いて侵入せるトルコ族、モンゴール族、印度族、スラブ族等に苦められ、或は內亂に飽きて今日まで殆ど有名無實な國家を續けて來て居るのであります。斯る環境に生命を繫いで來たペルシヤの音樂は、勢、憂欝ならざるを得なかつたかと思ひます。

「起ちて天界に灰塵をなげよ、
酒を飲み、麗人の歡興に急げ、
禮拜者何の遁辭がある、祈禱何事ぞ、
總ての世を辭せるもの歸り來らず。」

と歌ひし、オムマ・ハヤムの絕望的な氣持もよく察せられるかと思ひます。

亞米利加の音樂

山田耕作

凡ての國、凡ての地方の民族は、その國々、又その地方地方の民謠を持つて居ります。それ故、世界のあらゆる民族は、各自、その國獨特の、その地方特有の音樂を持つてゐるといふことが出來るでありませう。然しながら、此處にいふ、各民族に具有してゐる音樂とは、ごく廣義に於ける音樂のことであります。言ひ換へれば、民謠といふものは音樂發達の原始的階段にあるもので、その民族本來の、又獨特の深いにほひや藝術味を包含してはゐるけれども、民謠がそのまゝに藝術であるといふことは出來ない、つまり、民謠の中にはぐくまれてゐたその民謠のよい藝術的萌芽が、文化の勢ひにつれて次第に組織的學術的なものとなり、さうした學理的根據の上に開花したものこそ、眞實の藝術と呼ぶことの出來る音樂なのでありませう。

一つの民族が民謠時代から組織化學術化の諸段階を踏んでしつかりした形式を持ちながら而かもその國獨特の芳香に充ちた眞の音の華を咲かせるまでには、かなり長い年月を要します。移住後幾何もない新興の北米合衆國は、二千五百年の歷史的背景を持ちながら最近に到るまで我から文化の潮流に超然としてゐた晩熟の日本と等しく、いまだにその國のものとして世界に誇示するに足るほどの音樂を持つて居りません。が、強ひて亞米利加に特有な音樂を搜めるなら、移住民の持つてゐたものと、土着のアメリカン・インディアンの持つてゐたものとの混血的音樂を擧げることが出來るでせう。いつたい音樂上の混血の行はれる場合には、音階は必ず東洋が勝ち韻律は西洋が東洋を征服するものであります。それ故、歐羅巴から移住して來た白色人種が、亞米利加の土民の音樂に接した時にも、果實の外皮の如く、車の車輪にも比すべき土民の音階の表面を取つて、外皮に對する核の如く、車輪に於ける心棒の如き位置にある西歐の韻律に乘せて、そこに一種の混血的音樂を作つたのでした。然しながら此の混血的音樂は古い歐洲の血を引いた開拓時代の亞米利加人と、未開の土の中に眠つてゐた亞米利加大陸の心との皮相的な混合で開

拓後の大陸の土上に建設せられた新しい亞米利加合衆國のものでもありませんし、又亞米利加の精神を表現した藝術であるといふことも出來ないのであります。

が、かういへばとて亞米利加は亞米利加自身の作曲者を持つてゐないといふのではありません。却つて、亞米利加の作曲者の數は豫想外に多いのであります。一時代前の亞米利加は純然たる獨逸音樂の影響の下に置かれて居りました。グリークに比すべきマクドウエル、亞米利加のフランツ・アブトともいふべきエセベルト・ネーヴィン、ホレーシオ・パーカーの如き作曲者は、悉くその作品の中に獨逸的色彩を色濃く見せて居ります。最近亞米利加自身の音樂を助產せしめようとする運動が盛んになつた爲　亞米利加作曲者と名のるものは殆んど無數にあるといつても差し支へないやうな狀態になつて居りますが、それらの作曲者の所產は、マクドーウエル・パーカー時代の獨逸的色調を全然なくして、漸次佛蘭西的に變化しつゝあるやうであります。從つてこの音樂は、獨逸的色彩の中にあつた時代の理智的な眞面目さ、嚴肅さの代りに、著しく官能的な、陶醉的な、同時に又頽廢的な華麗さを湛へて居ります。現代の亞米利加作曲者が好んで用ひる「增の和弦」は、近代の作曲者の誰しもが用ひる和弦で、華麗な官能的色調を出すに有效なものであります。が、しかし、それとても惡化の力が獨逸から佛蘭西に移つたといふまでのことで、近代佛蘭西の主潮には伍してゐるもの丶、いまだに亞米利加自身の姿はその音樂に現れて來ない、從つて亞米利加自身の藝術はまだ呱々の聲を擧げてゐないといふことになります。私は近き將來に於いて必ず亞米利加の音樂が政治上に於ける Americanism や、文學上に於ける American Short Story の如く、一つの特殊な形式の下に亞米利加自身の心を語る時の來ることを信じて居ります。たゞ先にも一言したやうに、音樂は文明の極に咲く華のやうなものである爲、新興國に於ては開花を見るまでに比較的長くの準備的期間を要するのでありませう。

最近恐ろしい勢ひで戰後の世界を侵害しつゝあるジャヅ音樂は亞米利加音樂の代表のやうに見られて居りますし、私なども歐米漫遊の道すがら各所でジャヅ音樂の奏せられてゐるのを耳にして、亞米利加はジャヅによつて世界を征服しつゝあるのではないか、とさへ思つたほどですが、實際に於いてこれは戰後の頽廢と、アルコールへの通口を封ぜられたエピキュリアンの心の隙とを突いて暴威を逞うしてゐる病魔のやうなもので、亞米利加の眞相をこれによつて推しはからうとするのが無理であるのは勿論、健全な、平和な社會狀態が恢復せらると同時に、ジャヅ音樂は必ず萎び落ちて影をひめて

しまふべき運命を持つてゐるのではないかと思ひます。ただジャヅ音樂に就いて見逃すことの出來ぬ事實は、その音階が西洋のものであるのに、そのリヅムは全然東洋のものであるといふことです。此の點に於いてジャヅは、前に述べた音樂上の混血を裏切る例外とも見ることが出來ますし、又それとはうらはらに、混血の法則から推して、ジャヅは本來亞米利加のものではないのだといふことも出來るでありませう。

國としては加速度の發育を遂げながら、いまだに眞實の音樂の萌芽を見せてゐないからといつて、亞米利加は、決して音樂に對して冷淡なのではありません。反對に、亞米利加ほど音樂を可愛がり、音樂者を大事にする國はないのであります。歐洲大戰の爲歐羅巴の藝術市場が封ぜられた爲であるとはいへ 世界の名手が競うて北米に走つたのは、亞米利加が音樂乃至音樂者にかうした優遇を與へるからでありませう。實際亞米利加ほど音樂的設備の整うた國はありません。單に資本家階級が音樂的設備やその維持に惜しげなく投資するばかりでなく、音樂界といふものが社交界と不可離の關係にある爲か、社交界の婦人がこぞつて音樂者の後援をし、各自の家庭生活に音樂を調理して具へるといふやうなことも、今日の隆盛を來した大きな原因になつてゐると思ひます。

紐育は北米社交界の中心であると同時に、又音樂の中心地でもあります。音樂家が亞米利加に於ける聲名を得る爲には是非とも紐育の本舞臺に立つてその力量を示さなければならないことになつて居ります。從つて此の市に集る音樂家の數は殆んど無數といつてもいゝほどです。日本に置いたら大家以上の列に昇さるべき、學識なり、技倆なりを持つたピアニストが此の一ツ市の中に二千人以上も棲息してゐるといふ一事實を擧げただけでも、音樂者の數が如何に多いか、同時に又その多い音樂者の群の中から頭角を拔出することが如何に困難であるかといふことを、容易に推察することが出來るでありませう。

紐育には、メトロポリタン、マンハツタンの二オペラ座が連夜の開演をして居る外、"New York Symphony Orchestra," "New York Philharmonic Orchestra," "Russian Orchestra," "New Symphony Orchestra of New York." 等の管絃樂團がカーネギー、エオリアン等の樂堂で、少くとも一週五回以上の演奏會を開いてゐます。その間を縫つて、殆んどしつきりなしに、外來の管絃樂團や世界的獨唱奏者の音樂會が開催せられるのですから、季節の間の賑はしさといつたらありません。なまじい社交界にでも足を踏み入れようものなら、連日連夜寸暇も得られぬほどの忙しさを經驗せねばなりません。たゞ、しかし、殘念なことは、こんな大仕掛な背景の前

で演奏せられたる音樂が、演奏としては此の上なく立派なものである場合にも、前に述べたやうな理由の爲、何處か統一がなく、一貫した心の流れが見えぬやうに感ぜられることです。卽ち亞米利加人は自國の中に求めて得ぬものを他から受け容れ、受け容れながらなほそれだけでは充されないでゐるのではないかとも思はれます。

果して亞米利加は、最近に到つて、素晴しい自國藝術家の後援愛護の運動を起しました。今亞米利加の作曲者は、駈けぬけることも出來ぬほどの同胞の後押しを受けて、華々しく樂界に乘り出しつゝあります。が、過分の滋味は胃壁を傷つけこそすれ、その含有する養分の量が如何に大きくても、身心の成育を助けることにはならなくなります。亞米利加の作曲者は必要以上の愛撫に甘やかされ、實力以上の名聲に毒されがちな爲、後援者の恩惠に答へ得るほどの成績を擧げて居りません。これは前にも申しましたやうに亞米利加の音樂が必要な過程をまだ踏み終へてゐないからで、徐ろに時を待てばそのうちにはきつと何かいゝものが生れて來るのだらうと思ひます。

とはいへ、此の一つの缺陷を除いた亞米利加の樂界の盛觀は實に羨むべく、又驚歎すべきものであります。戰後の歐洲樂壇に[illegible]識した私は、やはり亞米利加の樂界を最上のものとし、最も多くのものを將來の亞米利加の音樂に期待しないでは居られません。よき子を生むことは、若いものにのみ許された特權ですから。──一九二二、一二、二──



ようとして蓄積毒殺を敢へてする老人。女といふ女を一目でたらしてしまふ凄い色魔なぞが活躍して、全篇血なまぐさい殺人やねば土のやうな情慾の匂ひで充ちた恐怖すべき大作。しかもそれを裏づけて大ゾラの深甚な人道觀念はまるで潮のやうに凄じく漲るのである。この作者の三十に餘る長篇の中で一ばん人間的な魅力を持つたのは何と言つてもこの『獸人』だ。

詩

時評

創作

アインシュタイン博士の日本音樂觀

稻垣守克

東京に來られて以來アインシユタイン博士は十一月二十日に明治座を見物され、二十三日には上野の音樂學校で日本樂を聞かれ、二十五日は市村座を見物され、二十六日は寶生會で能を見られ、三十日は宮内省音樂部で雅樂を聞かれた。私はいつもお伴をしてゐたから博士の日本音樂觀はお顔と言葉とを通してうかゞつてゐた。それを思ひ出しながら紹介をする前に博士御自身が私の爲めに口述された一文を掲げて見よう。

『私が日本へ來ることを決定した時、すぐ思ひ浮んだことは日本の音樂を聞きたいと云ふ希望でした。日本の音樂は必ずや歐洲のそれと異つて獨特の發達をしてゐると信じて居りました。此想像は果たして事實と一致致しました。

日本音樂が歐洲音樂と異ッてゐる第一の點は音の調和の點であらうと存じます。西洋音樂に於ては和階音が一般的條件であり缺くべからざるものとしてありますが、日本音樂に於ては此點が餘り顧みられないやうです。但し八音に分れてゐる點は兩者は一致してゐます。日本音樂は直接の感じ又は理解を表した音の韻律的連續のやうに思はれます。

日本音樂に於ては正確なる音程が左程重大の意味を持つてゐないのではありますまいか。寧ろ人間の感情を表したもの又は自然の聲　例へば鳥の鳴く聲、波の音を表示したものゝやうに思はれます。

音の高低よりも拍子を主とするところの撞打樂器が日本音樂の重要なる地位を占めてゐることを見まして私は益々此感じを深くしました。

日本音樂が私を惹きつけた最も主なる點はそのきもちのよいうるはしい曲であります。日本音樂の眞價はまだ私には批評出來ません。それには餘りに月日が淺うございます。音樂を眞に理解するのには永い經驗を要するのは勿論でありますが、私が殘念でしたのは日本の言葉が分らない點であります。多くの音樂に於て言葉は非常に重大な要素をなすものですから。

又日本の音樂には西洋　音　のやうに金屬製の吹奏樂器がなく、やさしい笛があるのみのやうに思ひます。これは日本の氣分のやさしいのを示す證據でありませう。日本國民の日常の生活に使用する器具を見ても、日本の輸藏を見ても日本人が可愛いもの、やさしいものを愛する國民であると云ふことがすぐわかります」

博士はいつも非常に感激されて聞かれてゐた。非常に面白がられてゐた。但し日本音樂をめづらしいものとして批評する以外に博士の批評を求めるには無理であらう。西洋音樂と比較して博士は次のやうに云はれてゐた。

「西洋音樂は多くの民族が上へ上へと重ねて積みあげて行つたものである。音樂には國境がない。言語には國境があるし、輸遞も運搬が不便だ。然しながら音樂は耳から耳へ、心から心へ。そこに何等の障壁がない。であるから西洋音樂はあのやうに複雑な發達をした。日本は島國である爲め日本音樂は日本國民の中に限られて、獨特の發達をした。日本國民だけで作つたものだから獨特の色彩はあるが、どちらかと云ふと原始的のものゝやうである」

日本音樂が調和よりも拍子が主だらうとは始めから云はれてゐた。特にお能を見た時其拍子の面白さに感心されてゐたが、時々笛が急に高く鳴るので「あの氣分は吾々にはどうしても了解出來ぬ」と云はれてゐた。

最後に雅樂を聞いて喜ばれた。其前に聞かれた三曲よりも感心された。但し私にはどの意味に於て感心されたかわからない。多分極度にめづらしいものと云ふ意味に於てゞあると想像する。

博士が音樂を好まれることは想像以上である。芝居に於て、能に於て、食堂に於て、博士の顔は音樂の中に解け入るの

を私はいつも見てゐる。東京のプログラムは、博士を隨分疲らした。招待、講義、見物、――それを終つて私どもはやれやれと思つてホテルに歸る。私は博士にお伴してお部屋に這入る。博士はすぐピヤノをひき、「今日も忙がしかツたね」と云ツて今度はバイオリンを手に取る。私は靜かに腰をかけてゐる。博士は、バイオリンをひきながらさも氣持ちよささうに頸を傾けて室の中を歩く。

十二月一日は改造社主催の招待會で帝國ホテルに百數十名の人々が集つた。食後私どもは博士にバイオリンをお願ひした。博士は心よく承諾されて來會者の好みに澤山ひいて下された。一同は博士の奏するベートーベンの曲に醉はされた。



日本音樂の印象

レオポルド・ゴドウスキイ

あなたは、日本音樂に對する印象及感想を言へと仰しやるのですね、さうです、わたしは幸田延子さんのところで、したしく日本の音樂を聽きえました、その音樂を奏した人は一人の男性と一人の女性でした（譯者註それは今井慶松氏のことです）一人の男性は琴音樂を奏しました、一人の女性は三味線音樂を奏しました、わたしは琴音樂と三味線音樂のふたつの結合の音を聽きました、どちらの音樂が主音であるかわからなかつたのですが、この場合三味線音樂が伴奏音樂であることが、説明を聽いてわかりました。わたしは日本音樂が音譜の保存がないことをふかく悲しみます、なぜそれが不可能のことなのでせう、音譜のない音樂といふものは野蕃な音樂であらうと思ひます、わたしはこの道の人に切に望みます、日本の音樂のために音譜の保存といふことを、心から忠告したいのです。耳から耳の記憶の音樂が、いかに、夕（ゆふぐれ）の沈みゆく音樂であるかを考へて見て下さい、わたしの聽いた琴音樂は纎細な感じのものでした、（この音樂は横のリラです、リラの感じです、リラの硬音を減じれば、この琴音樂の音色になることゝ思ふのです）男性の音樂者は、すぐれた盲樂人でした、われわれは盲人の感觸の常人にすぐれてゐることを日常から知つてゐます、この樂人もその感觸の天才的にすぐれて

ゐることをしりました。

この琴音樂を評すれば徹頭徹尾——技巧の音樂と言ふことができます、技巧の藝術です、靜かなる技巧です、これより以上の技巧はないでせう、日本人がもつ技巧です、歐米人には、眞似のできぬ技巧です、われわれはヴァイオリンをひきます、ピアノをひきます、ヴァイオリンは指さきの技巧と言はうより手の技巧です、指をたまたまつかふときはピアチニッシモのときだけです、これほど指をつかひません、われわれはピアノを彈きます、しかしピアノの鍵は琴音樂の糸より觸れ得る面積が多いのです、指の運動は迅速にはたらきます、しかしこの琴音樂ほどの微細な神經の疲勞をもとめないでもできうるのです、指を斯程までに技巧的に、はたらかし得ることは、ひとつの驚異です、しかしこゝに考へねばなりません、この驚異だけの心勞に對してその音樂效果といふものが、この音樂に對して、日本の人々は、豐富に拂ひ得てゐるでありませうか。

三味線音樂をひいた人は女性でした、日本の禮裝をして、きちんと坐して、さうして、長い杖と、その身體とを抱きかかへるのでした、彼女は、うやうやしく日本の禮をしました、それから琴音樂と結合音を始めました、ふたつの樂器は、ふたつの音色を互ひにたすけつゝ進みました、ふたつの絃樂器の音色は、ともすると、わたしの耳にもつれました、どちらが、どちらであるかを、ときどき忘れさせられたのです、しかし、わたしは三味線音樂の三つの絃から發する音を、十五の絃より發する音よりは、すぐれたる音程を、もつてゐるのだと思ひます。

絃音に對するわたしの解剖は、わりにしてきて居りませんけれど、それは器音とひとしい理論の上に立つてゐるのです。

この理論から推して、わたしは三味線音樂を好むのです、これには弓にひとしい象牙の三角形のもので糸を發音させるものがあります、あの三角形の一端のみを糸に觸れて、三つの絃の音を發せしめるのです、さうして音樂をかなでるのです、この音樂は、心勞に對する充分の音樂效果を酬いうるものであらうと、わたしは考へるのです。

この二重奏の前後に、男性と女性とのデュエットがありました、說明によれば、それはその音樂の曲目の解說を言葉であらはしたものだと言ふことです、この解說の聲樂は、鈍い讃歌の感じでした、快活にうたふのでもなければ、たゞ祈るが如き、形式的なものでした、そして生命あるが如き感じはしませんでした、日本音樂が經て來た路――それは東洋の隣邦や印度傳來の佛教思想と云ふものが、色濃くその聲樂にまつはつてゐる感じをしました。

わたくしは、この三味線音樂が、いろいろの形式の異なつたものがあるときゝました、その時は竹笛を共にした演奏もあると言ふことです、わたしはこの音樂の音譜を、もとめようとしたのです、しかしそれは、だめでした、なかつたのです。これまでわたしの言うたことは、日本音樂に對しての、ドンキ・ホテの態度であるかもしれません、しかしこれはゆるしていたゞけるものと思ひます、なんの知識もない未知なる音域にきたときの印象は、たとへ、わたくしが音樂家であつても、その音色に對する感じは、常人とおなじことであることを記憶して置いていたゞきたいのであります。

わたしは日本に於て、幸田延子さんの、音樂のホールで經驗したことを一生忘れません、日本の振袖の衣裳をきた二人の令孃が彈じたピアノの音は、やがて日本の西洋音樂の、あけぼの、響きのやうな感じがしました。

その室にはヴエトウベンの、すぐれた胸像がありました、彼は雄辯にこのホールにあつまる人々に對して音樂的靈感を與へてゐるに、ちがひないだらうと思ひます。

わたしはこの感想――きれぎれの感想を帝國ホテルの、特にわたしのピアノ演奏に使ふ室で書いてゐるのであります、わたしはこの室を甚だ愛します、この幻想的なホテルの建物全體を愛します、この感じは夏の班の感じです、わたしとわたしの妻は、このホテルの室で鼠の――大きな鼠のために恐れをなすものです、この室の壁のうへを鼠が走るのです、これは建築者のライト氏とても思はなかつた副産物であらうと思ひます、決してオール・ライトとは言ふことができません。

この室の花は舞臺からもつてきた花です、日本の菊は歐米いたるところで培養され愛玩されて居ります、もつと科學的

の研究をもつて、大輪の花も見うけます、けれども國の花はやはりその國の風土に於て見るときに、一層の光彩をもつものです、わたしは櫻の花を見ぬことを殘念に思ひますが、このミカドの花を見ることをできたのがうれしいのです。

わたしは日本に關する本を讀んでゐます、ラフカディオ・ハアンの著書なども十年前に讀んでゐます、ですから印象はうすれて居ります、しかしその國にきて始めて風物に接したとき、その讀書の印象が浮かびあがつてきました、富士山を見て、わたしは日本人のするやうに坐して、禮をしました、日本の――しかも中央の都市の家屋があんな西洋風な建物の模倣をすることを、心から悲しみます、そしてそれらをとり去りたく思ひます。

日本には片假名だとか、平假名だとか、本字だとか、實に覺えにくい、雜多な文字があることは、船中で知りました、そして、どれが、もつとも普通につかはれる文字であるかを訊ねましたら、それらの種類を日常みんなつかふのだと言ふことをきいて驚ろきました、日本の人が、そんなに難かしい文字をつかふことを、わたしは記憶のために、わづらはしくはないかと思ふのです、實にこんな驚ろいたことはないのであります、よほど賢明なる人々でなければ、この煩雜に堪へ得るものではあるまいと思ひます。

わたしは今、日本に來て、日本のあらゆるものを汲みとつて味はつて見たいと思ふのです、しかしこの文字をおぼゆる勇氣だけはありません、その勇氣があれば、わたしのこの頭髮のうすくなつてゐるのを隱して、青年ファストにならなくてはならないのですから――わたしはエスペラントをやります、これこそ、あなたがたが知つてのとほり世界語です――日本の人でこれをやつてゐる人がありますか、この言葉は、實に簡單です、この言語で世界各國が旅行されうるやうになる日が來ることを、わたしは望むのです。

麻雀の言葉は、國によつてちがふかも知れません、しかし人類の言葉は、國を絶して共通であるべきではありませんかわれわれは世界の青春の爲に人類の平和の爲に盡してゐるのです。

それがために言語の共通であることを望むのです、日本の言葉も歐米の言葉もその言葉の語源にさかのぼつてみれば案外にも同一であるかも知れません、いや、さうでなくてはならぬであらうと思ひます。

なぜならば人類は一です、神は決して異なつたものを、その劫初の始めにつくらなかつたらうと考へます。

言語が共通であれば、われわれの思想は、もつと融合されるのです、決して、沈默で過ごす、不愉快な時がなくなります、わたしは羈旅でおほかたの月日を送りました、この感が殊のほかに人一倍催ほされるのであります。世界各國、その國々にいつて、その國人と物語をするとき、わたしはまづ言語の、よく徹せぬうらみを覺えます、これが實に不快なのです、このやうな不快は旅をした人にはよくわかることでせう、日本にわたしがきて日本及日本人に、心の細かな物語をしてもそれは言語の通じぬため徒勞に歸したら、わたしは、甚だ悲しみに沈むのです、それを消すために、世界共通語がほしいのです、それで、わたしはエスペラントを學んだのでした。

音樂の感情は世界共通であります、ヴエトウベンにしろショパンにしろ、みんな共通です、卽ちヴエトウベンの殘した作曲は曲譜によつて永久に物語られるものです。

わたしの感情は日本語で物語ることはできません、しかし、わたしの作曲であります、これは雄辯に物語ができます。實に愉快です、眞に幸福を覺えます。

日本音樂が孤立しないで世界に共通となるべき日が一日も早く來らんことを望みます——日本の萬物が國民性の上に根ざして世界共通となられんことを望みます、外形の模倣でなく、ふかき心のなかから共通であらむことを望みます。

その時こそ海を離れて世界のどこかにゐる、わたくしも、あなた方のよき友となりうるのです。



聲樂の道

柳兼子

聲學に關しては、有名な歌手や教師によつて書き著はされたものが少く御在ません。技巧の方法のみに就いて說かれたのもあり、又單に技巧のみならず、藝術の內面的の方面に渡つて論じられたのもあり、いづれにしてもその道をいそしむ者にとつての好伴侶と信ずべきもので御在ませう。その內には既に邦語に譯されたものもある樣では御在ますが、音樂に携はる上に實際上の諸方面から、洋人とは多少立場を異にして居る日本人の爲に、十餘年の經驗を土臺に自分の思ふまゝを說き述べてゆかうと思ひます。經驗は未淺く、而も自分自らも途上の者であり、その上書く事に不慣れな事を顧みながらも、研究者の爲めに幾分の參考となるべき事を信じながら筆を起しました。

如何に唱ふべきかといふ事に就いては技巧の方法から先づ順を追うて說き進めてゆくのが、初學者の爲に最も便利かと思ひますのでその方面から書き述べてゆかうと思ひます。

一　發聲に先だつ二三の用意

Ａ　姿勢

歌の技巧を稽古するに際して、先づ第一の用意として整へなければならないのは姿勢で御在ます。勿論、唱ふ場合や歌の內容によつて（多くは劇的な場合）樣々な姿勢をとつて唱はなければならない事も出て參りますが、さういふ事は後になつてからの事で、發聲その他初步の階段を會得し終へるまでは音聲を聲樂上一番自然に出す爲に、一番好適な姿勢をとつて練習に當らねばなりません。

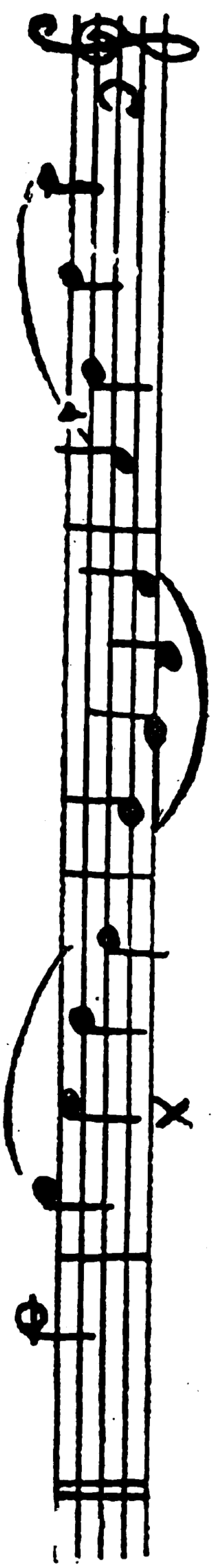
先づ、顎を突き出さない様にして頸を眞直に置いて御覧なさい。そして肩を後下に引きますと胸が自然に緩やかに張られる様になります。お腹は突き出さない様に、脚は揃へて眞直にお立ちなさい。頸を曲げたり、一方の肩が上つたり下つたりする癖のある人は、特に體全體が眞直である様に注意する必要が御在ますが、身體の局部々々に力を入れてしやちこばらせたり、力みかへつたりしてはいけません。只體をふらつかない様にして姿勢を正しい形に極自然に保てばよろしいので御在ます。

B　吸

呼吸の仕方は、普通、吸ふ時には口を結んで鼻腔から胸に深く吸ひ入れ、口から徐かに吐くものゝ樣に思つて居られる方が多いと存じます。併し唱ふ場合の呼吸法は少し要領が違つて居ります。

息を吸ふ場合には、胸の方とは少しも關係なしに、(つまり肺臓内へ吸ひ込まうといふ事を思はずに)口を結び、心の中で極緩かに一、二、三、四、と數へ乍らお腹を徐かにふくらませて御覧なさい。息はお腹のふくらむに從つて腹部へと吸ひ込まれて行きます。そしてお腹が全く脹りきりましたらば又、一、二、三、四、と前と同じ緩さで數へ乍ら、お腹を次第に凹ませつゝ息を吐くので御在ます。

音聲はつまり、吐かれる息によつて發するので御在ますから、發聲の場合には、自然にお腹が凹むわけで御在ます。胸で呼吸致しましたら、とても長い音譜の連續を唱ひきれるものでは御在ません。せい／＼お腹の息を絞りつくした時に、始めて胸に溜めて置いた息で補ふ樣になさい。



此の例の終りの方×記號のついた音あたりへ來ると、普通我々の息(腹部に吸ひ入れた息)は大概盡きてしまふもので御在ます。そこで始めて胸の息で補つて、音を繫げる樣に致します。

右の呼吸が出來ましたら、今度は咄嗟の間に大急ぎで呼吸

する練習で御在ます。それは鼻腔で吸ひ込むに限りません。鼻腔でしては、急いで強く吸ひますと、第一、スー〱云ふ事が御在ます。又忙しい歌詞の切れ目に、鼻で吸ふ爲に一々口を結ぶのは、煩はしくもあり、可笑しくも見え、その他歌の響きの上などにも細かな障害が起る事も御在ます。瞬間に吸ふ息は、口の方が、より樂に、より深く吸ひ込み得るので御在ます。口から吸ふ樣にして、お腹を一でふくらませ、二で絞る樣にして、一二、一二、と割合に速く心の中で數へ乍ら練習するのがよろしう御在ます。

よく歌の切れ目に、呼吸の音が聞える人が御在ますが、お腹で呼吸を司る法を會得すればさういふ障害はなくなります又元々禀質の弱い人は兎も角、普通の健康を持つ人が、聲樂を學び出してから胸の病氣を起したなどと云ふ事は、呼吸の方法を誤つて居たと云ふ事が一番多くの原因をなして居る樣に思はれます。初學者が熱心の餘り、未呼吸の方法も會得しない内に長時間の練習をしたり唱ひ續けたりする事は特に注意をしなければいけません。

臍のあたりを指で押へて加減を見ながら、呼吸に伴ふお腹の運動をよく練習なさい。

生理上から申しましたなら、お腹へ息を吸ひ込むなどといふことはなく、本當は矢張り肺臟で呼吸する理窟なので御在ませうが、私達の氣持ちから申しますと全くお腹でする樣な鹽梅に感じられるので御在ます。

C 口の開き方

口の開き方は、下齒が下唇から露はれない樣に注意し、舌を平に、舌端が丁度齒の裏に輕く觸れる位に置きます。此の場合決して舌端に力を入れてはいけません。舌端に力を入れると、舌が持ち上つて發聲が妨げられます。舌の持ち上る癖が中々直らない人は、匙の柄で舌が平になる樣に押へて練習なさい。又舌が奧へ丸まる癖のある人は、舌をずつと出して、下唇の上にのせ、癖のとれるまで、極端な形をとつて練習なさい。上顎や下顎、口の廻り、唇等の筋肉は出來るだけ自然にゆつたりと保つ事、上齒下齒の間を常に少くも一本の指が樂に通ふ樣に開ける事等をお忘れにならぬ樣になさい

二 發聲

A 地聲(Chest voice)

發聲の場合に必要な要件として先づ述べて置きました二三の事柄によく注意しながら、下のa音あたりから順々に發聲の練習を致します。Soprano(高音唱ひ)の人は低音部から始めてe音迄を地聲で、f音から上聲に變へ、Alto(中音唱

ひ）の人はｆまでを地聲で、ｇ音から上聲に變へて發聲致します。例のａを御覧下さい（ｓ）記號の處からはソプラノ（ａ）記號の處から、アルトは上聲に變へるので御在ます。



地聲とは、歌を稽古なさる程の方は誰でも知つてお出の筈で御在ますが、胸に響いて出る聲で御在ます。吾々日本人の話しする時には普通地聲が用ゐられて居ります。又在來の日本樂では何處までも地聲を張つてゆき、上聲を使ふ場合は殆御在ません。時々ずつと高い音を裏聲（日本樂の方では裏聲と呼びますが丁度上聲の響きを奧の方へぬかせてしまふ樣な聲で御在ます）にぬく樣な場合も聽きますが、あれは地聲が美しく張り得ない場合に聲をそらすので、地聲で張り終せたら張る方がいゝ樣になつて居る樣で御在ます。（尤も洋樂の方でも、男聲の方は全然地聲のみ使はれて居ります。）

洋式の聲樂上使はれる音域は、女聲にとつては丁度上聲を使ふべきｆ音、及びｇ音以上の音が最も多く使用されて居ります。それ故地聲は上聲程多くは使用されて居りません。併し屢々歌曲中に現はれる低音の箇所に於て大いに地聲の美の價値の現はれるものである事を忘てはいけません。殊にAlto の歌手にとつては、地聲の美の價値が、自分の持てる音聲美）半を占めるものである事を思はなければいけません。

地聲の發聲練習をするには、息を深く吸つて聲をよく落ちつけて充分にお出しなさい。怖々そつと出してはいけません。又始めから crescendo（＜）や decrescendo（＞）をつけて出す事は禁物で御在ます。音の幅が終始一貫して同じである樣注意なさい。

B　上聲

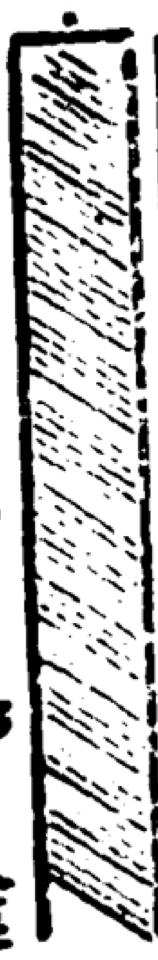
上聲は、胸部には絶對に響かさず、成る可く上顎から鼻柱に聲を響かせる樣に致します。初めは、地聲の練習の時とは反對に、弱い聲で練習した方がよろしう御在ます。殊に上聲が如何なる性質のものであるかといふ事の解つて居ない人は強く出すと聲が胸に響いて、地聲になつてしまふ事が御在ます。

總て聲樂上の音聲は、必ず頭の前半部に響かなければなら

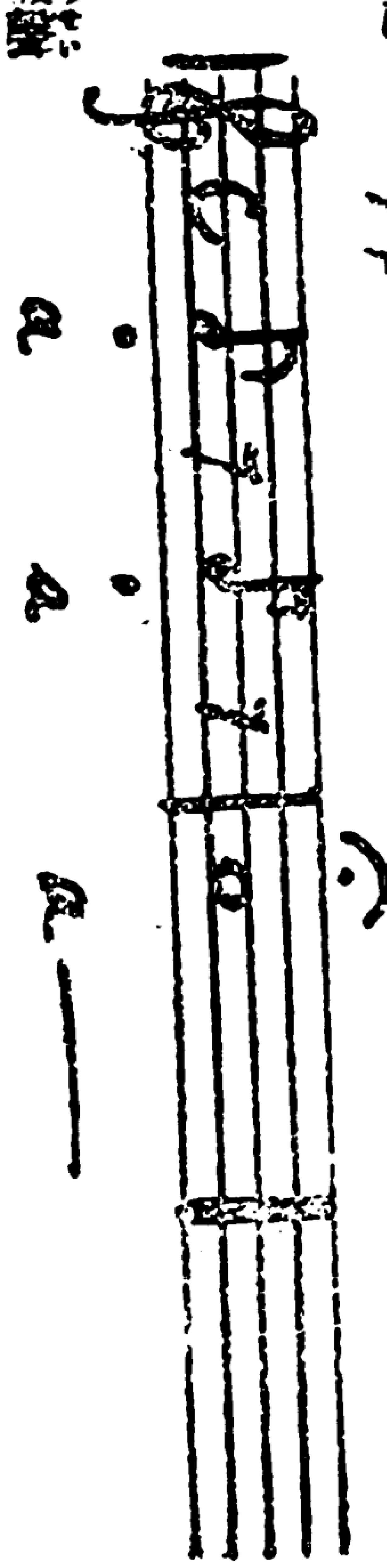
ないものであると云ふ事をよく心得て置いて頂かなくてはなりません。頭の半分から後にゆく時は、ゆけばゆく程外部への響きが不充分になります。聲を成るべく前方に響かさうとするには、上顎へ聲を響かせると同時に、鼻の方へよく響く樣に工夫なさい。初歩の方に「鼻に響かせて」と申しますと上顎の方へ響かす事はかまはずに、鼻の先へ直接に響かせてまるで鼻くたの樣な聲を出す事がよく御在ます。鼻へ響かせると同時に、上顎への反響を必ず忘れない樣になさい。上顎から鼻の方へ響かせる爲の練習には、口を結び、ンの音で、octave 即八度音程の上下を唱つて見るのも一つの方法で御在ます。鼻柱を輕く挾む樣に指を當てゝ試みて御覽なさい。鼻の方へよく響きがかゝつて來ますと、指先に微かに響きを感じます。

此處に申添へて置き度いのは音聲のattackといふ事で御在ます。普通一般の日本人に發聲させますと、殆ど必ずattack無しの發聲を致します。日本語では此の場合のattackといふ言葉を何と譯したら適當であるか存じません。圖で書き現はしたらまづ次の樣な形になります。

attack なしの聲……

attack をつけた聲……

つまり發聲の始めを attack する結果は、圖の如く必ず發聲の頭が確然とするので御在ます。丁度毛筆で書いた「一」の字に例へましたら attack のあるものは筆頭に當りのある「一」の字で、無いものは筆當りなく只横に引かれた線の樣な「一」に當るとでも申しませうか。ともかく、發聲の强聲、弱聲にかかはらず必ず始めに attack されたものの方がよいので御在ます。(但し後に說かれる頭聲の場合は違ひます)。attack の方法は外國人の先生が專門的に敎へる以外に、一般に冷視されて居るので、普通の方々には實例によつて示されなくては見當のつかない方が多いと思ひます。まことに說明致し難い事で御在ますが、せめて attack されて發聲された聲とはどういふものか實例によつて知る機會を得られた時の御參考までに出來るだけ書き述べて置き度いと思ひます。即、息を直接にいきなり聲帶を通じて發聲せずに、瞬間咽喉の處で留めて、それから一寸あてゝ音聲に頭が出來る樣にして發聲するので御在ます。音の accent とは區別して頂き度う御在ます。決して聲を押したり、しやくつたりする事なしに、音聲の頭が極めて自然に出來る樣に注意なさい。例の如く極めて弱い、極め



て短い（スタッカット）音の連續によつて上聲の音域間を練習するのが一番よろしう御在ます。

音聲の attack といふ事は、詞の accent や、曲譜に表はれた[illegible]音部、曲想上力強さを表はした箇所等、その他種々な所に應用されて非常に效果を齎らすもので御在ます。この樣に[illegible]は本來から申しましたら必ず上聲發聲に伴るべきものであり、又一方併せては聲を前頭部殊に前額に響かせる方法の便宜ともなるので、此處に挾んで附け加へたので御在ます。

此の他、上聲を前額に響かせる爲には、初めaの音で練習するよりも、o又はuの音を用ゐる方がよろしう御在ます。[illegible]音が高くなる程聲が後部へ引き込み易いもので御在ますから、高くなる程、餘計に前頭部に響かす樣に注意をする事が肝要で御在ます。

こゝに、上聲發聲練習に際して、斷じて陷つてならない注意すべき事が御在ます。それは音聲の tremolo（顫はせる事）で御在ます。此の tremolo の可否に就いては、Lilli Lehmann がかういふ皮肉な言葉を以て語て居ります。「聲を始終 tremolo [illegible]ませる事によつては唯一つの結果のみが得られる。それは聲を[illegible]くする事である。」と。實際、素人や初學者の多くは、先生によつてそれが惡いものであると敎へられない限り、聲を tremolo 顫音させ度がるもので御在ます。唱ふ最中、よく練れた聲の上に自然と現はれる緩やかな音聲の波こそ美しいもので御在ますが、ブルブル細かく顫へるのは、美的觀念から申しましても美しく聽えない事は勿論であるに違ひないので御在ます。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰

〜〜〜

圖に現はしましたら右の樣な線になるで御在ませう。それを上手な人の聲の波を眞似る爲に、或はさうする事が玄人らしく聽えるやうな氣がして、如何なる音聲の動き方がよいのか、眞に美しいのか判斷もなく、最も避くべき道に踏み入り容易に直し難い癖をつけてしまふ例が隨分御在ます。一端此の癖のついた人は、不斷の注意と特別な熱心によつて、發聲を根本的に嚴重に改革しなければ、容易に直りません。一番 tremolo の癖のつき易い上聲發聲法を說くに當つて特に注意として述べる次第で御在ます。

C　頭　聲（Head voice）

是も實例を示さなくては、素人の方には一寸どんな聲だか見當のつかない方が多からうと存じます。即、上の ミ 以上の音を出すのに重に使ふ聲で、鼻柱、前額（眉の附け根あたりの所に、見當をつけ、極弱聲で、極短く、續け樣に發聲して御覽なさい。全然前頭部のみから音聲が發せられて來る樣に聽えたら、頭聲の性質が會得出來たと申してよろしいで御

在ませう。此練習にはア行の音を(a e i o u)を用ゐず、ハ行の音、即(ha he hi ho hu)を用ゐた方がよろしう御在ます　就中三の音で練習すると一番容易に出來ます。

前にも述べました樣に頭聲及び上聲の練習は、初めは弱聲を用ゐ、出し方の會得がゆきましたら、普通の強さでなさるのがよろしう御在ます。

三　音域

各自の持つ音聲の區域は練習によつて或る程度までは擴げられるもので御在ます　例へば始めせい〴〵＊位までしか出なかつたものが、上聲や頭聲等の練習を積んだ結果、自然に＊位まで出る樣になつた例はいくらも御在ます。但し高い聲が出て來る樣になると同時に、その方へばかり注意して努力する結果、低聲部の音域が狹められる傾向を來し易う御在ます。高音の域を擴めるべく努力される方、殊にに三の音聲美を持つ方はその點を特に注意して、高音への練習を積まるゝと同時に自分に惠まれた低音の美を失はぬ樣よく守る事を忘れてはなりません。

四　練習時間に就いての注意

聲樂の技巧の練習は、要するに肉聲の訓練に外ならないので、過度に渡つては咽喉に直接の影響を受ける事は申すまでも御在ません。日本樂の方では俗に聲をふつきらす爲に隨分つめておさらひする樣な事も御在ますが、聲樂の方は音聲の要領が違ふのと、一つには技巧が特に鮮かに目立つので、その方面の訓練の爲、充分に音聲を使はなければならないので聲を大事に扱ふ必要が御在ます。それ故練習時間を、聲の發展に相應させてゆかなければなりません。

先づ聲を出す事に馴れて居ない初步の人は五分間練習したら十分休み、聲の疲れを休めてから又練習する樣にして、間に十分の休み時間をとつて、五分位づつ、一日の總練習時間を卅分位に止めて置く樣になさい。それから聲がいくらか馴れて來ましたら、今度は反對に十分唱つては五分休んで、一日の總練習時間も少しづつ殖し、無理をしない樣に追々と唱ふ時間を延してゆく樣になさるのがよろしう御在ます。聲が充分に馴れさへすれば、遂には一時二時間と唱ひ續けても平氣になります。習ひ始めの人はどうしても熱心の餘り、無理をして咽喉を壞す事が多く御在ますから[?]、調子に乘らない樣に注意しなければいけません。聲樂の練習ばかりは聲を疲らせてはどうにもなりません。先へと練習を運ぶ事も出來なくなります。くれ〴〵も咽喉を大事に、練習に不自由を缺かない樣にして置く事が大切で御在ます。前にも申しました樣に呼吸の要領をよく心得ない内にそのまゝ無理な練習をする事は積極的な禍さへ起す樣な結果になります(つゞく)



議會に對する雜感

室伏高信

□

また議會がきました。年中行事とはいひながら物憂い年中行事だと思ひます。私だけがさう感んずるのではなく、私たち日本人の一般に、議會に對する興味が氷點以下に下がつてきたかに思ひます。

無論、今でも政黨はある。代議士はある。院外團はある。若しくは議會にいろ〳〵と請願運動までしようとする人たちは年とともに増加したのかも知れない。しかし、それにもかかはらず議會は人々の心から遠ざかつた。政黨や、代議士や院外團や、大小の野心家や、いろ〳〵の請願運動者やが政治季節とともに一段の馬力をかけて密議し、公議し、運動し、喝采し、妨害しようとしつゝあるにもかゝはらず一般國民はたゞ白い眼で見てゐる。

加藤內閣が官僚政治の形式で出來上つた。憲政會あたりから例のとほりに非立憲內閣だといふ非難をもつて國民に訴若しくは國民を煽動しようとした。しかし日本の國民は最早や十何年か前の日本の國民ではなかつた。十何年か前に尾崎犬養氏等の憲政擁護運動に感謝した日本の國民は、同じ問題

である排官僚政治、從つて所謂憲政擁護運動に對してたゞ白い眼で見てゐる。何のためにさうなのであらうか。日本の國民が官僚政治を謳歌すべく宗旨更へをしたためなのであらうか。日本國民は後ろへ向つて歩るいてゐるだらうか。さうした兆候がどこかにあるだらうか。さうでない兆候ばかりではないだらうか。それなら日本の民衆は憲政會あたりの政治屋と一緒になつて加藤内閣攻撃運動に加はらないのであらうか

民衆にとつては勿論加藤内閣を喜ぶ筈がない。しかも尚ほ民衆にとつてはどつちでもいゝ。加藤内閣でも、政友會内閣でも、憲政會内閣でも、若しくは革新倶樂部内閣で、どのやうな内閣ができたつて何のかゝはりもない。少くとも今の民衆はかういふ態度をとるやうになつてきた。加藤内閣に對する反對の聲が高まつてこないのはこの内閣が人望があるためではない。反對黨が人望がないからである。官僚政治に對して反對の氣勢の高まつてこないことは官僚政治が強いからではなくて議會政治が弱いからである。加藤内閣は實に幸運な内閣である。丁度よい潮時に出てきた。そは反對黨の不人望を絞り取つて出來上つた。議會政治の不人氣を絞り取つて出來上つた。民衆が今までのまやかしものにあき〳〵して議會でも内閣でもどうでもいゝと云ふやうな態度をもち始めた時に加藤内閣がこの時代の機運に愛されて生れてきた。だから加藤内閣はどうでもいゝ内閣である。無くてもいゝとともに有つてもいゝ内閣である。支持力もない代りに反對力もないこゝが加藤内閣の唯一つの頼みの綱なのである。現代政治に對する民衆の無關心なことは今ではその極度にまで達してきた。内閣大臣の名前なぞは一々覺えてゐる必要もなくなつてきた。覺えてゐない方が却つて常識になつてきた。生きてゐたか死んでゐたか分らないやうな人が大臣になつた。そして大臣になつてからも生きてゐるのか死んでゐるのか分らないやうな人で殘つてゐる。大臣といふものはもう輝く人ではなく埋もれてゐる人となるやうになつてきた。私はある所で講演した時に今の總理大臣の名前を加藤定九郎と云ひ誤つたことがあつた。うつかりすると總理大臣の名前が定九郎だか友三郎だか思ひ出せない位ゐに、政治家の名が民衆から遠ざかつた。民衆の頭が進んでゐればゐるほど益々さうなつてゆくのである。こゝに加藤内閣の強みがあるのである。若しあべこべに民衆が政治に熱心であつて、民衆の監督が八釜しいとしたら今の内閣員のたゞの一人だつて試驗に及第するものはないであらう。

□

民衆は何故こんな風になつたのだらう。それは直接には代

り榮えがするかしないかの問題である。加藤内閣を倒したらどうなるか。高橋是淸か、加藤高明か、どちらかの名が新聞に出てくるであらう。民衆の失望するのはその瞬間なのである。どつちでもいゝと云ふのはその瞬間なのである。どつちだつていゝぢやないか。どつちだつて同じやうに民衆とは何のかゝはりもないではないか。その何のかゝはりもないものを、あるかのやうにわれ〳〵は見せられてきた。政黨、議會民衆政治家の諸君たちは無いものを有るやうに見せてきたのだ。日本の民衆はもうこの種のまやかしものに飽いてきたのだ。

日本人は慥にこの種のまやかしものに飽いてきた。日比谷の燒打事件、桂内閣彈劾事件、海軍シイメンス事件の反對運動、一々數へてくると過去十何年かの間にわれ〳〵は幾度となく謂ふところの民衆運動を試みてきた。それは慥に民衆と何かのかゝはりのあるかに見えてゐた。しかもそれ等のたゞの一つでも民衆の血となり膏となつたものがなかつたばかりではなしに、凡てが民衆の血と膏との搾取であつた。民衆はまたそれに劣らざる程度において政黨から議會から新聞から官僚から軍閥から藩閥から血と膏とを絞られてきた。そして政治屋から絞られてきた。民衆の前には常に吸血鬼が控へてゐた。藩閥や、軍閥や、官僚やがさうであつたやうに、政黨も議會も「民衆政治家」もまた一つの吸血鬼であつた。民衆はだん〳〵とこのことに氣がついてきた。意識的に若しくは無意識的に民衆が議會から遠ざからうとする動機の一つは慥にこの點にあつた。嘗つて民衆が議會に冷淡であつた時には民衆は無智だといつて非難された。しかしその時からまだ幾年もたゝないうちに民衆は賢明であるが故に議會に冷淡になつたとして再び非難されなくてはならないの時がきた。

民衆は議會よりも賢明になつた。議會の外面ばかりを見てきた民衆は内面の方を見るやうになつた。その時が失望の時であつた。失望ばかりではなしに反感さへもつやうになつてきたのだ。この失望と反感とをどうして慰やすことができやうか。

□

今年も普通選擧の問題が繰返されるであらう。普通選擧が何ほどか議會の人望を回復するであらうと云ふことは想像ができるのである。しかしさうしたらどうなるのか。どうもならないに決まつてゐるのだ。外國の事實がもう長いこと私たちにそれを敎へてゐるのだ。同じことをやつたら同じ結果が出るのだとしたら、普通選擧が實現された後のことも無論想像ができるのだ。普通選擧が人氣のありさうに見えてないの

もこれがためなのだ。

議會政治が不人氣になつたのも却つて普通選擧の後なのである。議會政治がその登るところへ登つて見た時に山の頂上が禿山であつたことが分つたのだ。だから議會政治の不人氣を救ふために普通選擧をもつてきたとて駄目に決まつてゐる駄目とは決まつてゐながらもやつてゆくのが政治家の仕事なのだ。

だから議會が不人氣になつたのは一時の不景氣ではないのだ。行くところまで行つての不人氣は窮極の不人氣なのである。今の世界で議會が不人氣になつたのはかうした根本的な不人氣なのだ。それは救ふことのできない不人氣なのだ。それは癒やすことのできない傷であるのだ。

□

そこで議會の不人望は現在の議會が善いか惡るいかの問題ではないのだ。政治家は世界の各國を通じて第二流以下の人物である。第一流の人は政治家にはなつてゐない。ロシアのやうな革命國では第一流の人間が政治に加はつてゐる。獨逸のやうな革命と反革命との火花を散らしてゐるところでも第一流の人が政治の表面へ出てくる機會がないことはない。しかも大多數のところでは政治家とは第二流三流以下の人に限られるやうになつた。何故なのだらうか第一流の人が凡てアナキストやサンヂカリストであるからではないのだ。第一流の人は政治家とはなれなくなつてきたのだ。またなりたくもなくなつてきたのだ。騒々しい、聲だけの大きい、押の强い自己を賣ることを何とも思はないで、自己をありのまゝの何倍何十倍にして見せようとするやうな人たち、——內生活のゼロな人たちだけが政治家になれるやうになつてきたのだ。そのことは金持政治家の場合でも勞働政治家の側から云つても同じことになつてきたのだ。それが議會政治の必然の果實であつたのだ。その果實が熟したのだ。

選擧の時には、あること無いことの自家廣告をして、戶別訪問で無闇にお辭儀をして、演說の時に水杯の水を飲みながら机を卓いてゐるやうな男でなくては代議士にはなれるものではない。しかもさうした男が一度代議士になるともう「國民の代表者」なのだ。自家廣告と、厚顏と、お辭儀と、買收とを名づけて國民の代表者と云ふのだ。民衆のうちの自家廣告と厚顏と賄賂とお辭儀とを代表するのだ。だから代議士が出た瞬間には國民はもう政治とは關係がなくなるのだ。國民はたゞ血と膏とを絞られるだけなのだ。この點がだん／＼と人の頭によく分つて來たのだ。そしてこのことは普通選擧が行はれたつて同じことなのだ。

議會政治は一つの專制政治なのである。議會は古い專制政治を破壞するために生れてきた。しかも議會もまた一つの專制政治であることが分つてきたのだ。だから議會の不人氣はたゞ一時の問題ではなくなつてきたのだ。それは制度の問題になつてきたのだ。

□

私は政治と云ふことが再び考へられなければならない時がきたやうに思ふ。政治を救ふためにではない。人間を救ふためにだ。

政治によつて人間を救ふことができるだらうか。議會の制度でもいゝ。ソビエットの制度でもいゝ。かうした政治上の制度によつて人間を救ふことができやうか。それとも政治は今私たちから遠ざかつたやうに永久に遠ざかつてあるべきであらうか。

外面的なものから未だ嘗つて眞實なものが生れたことはない。一切の騷しい雜音から音樂が出來上つたことはない。政治が若し人間を救ふことができるとしたら、政治は單なる外面的の動きであつてはならない筈なのである。しかも政治は內面的でありうるか。內面的な政治原理と政治制度とが押し立てられることができるであらうか。

ボルシエヴヰキとマアクス主義とは政治をわれ／＼に復活しようとしてゐる。彼等のかゝはる範圍では政治は舞臺の中央に立つてゐる。しかも尙ほそれがわれ／＼を救ふであらうとは思はれない。アナキストとサンヂカリストは一切の政治を否認することによつて人を救はうとしてゐるのである。しかも政治の否認によつて人を救はうとすることは、同じ觀念のうへに立つてゐるものではないだらうか。

私たちは政治運動に行く前にも、政治運動を否認する前にも、ゆつくり考へておきたいと思ふ。われ／＼はあまりに多い外面的な生活に囚はれ過ぎてきた。思索のない世界にわれわれはあまりに長く住んできた。何處を見てもほんとうのものがない。あるものは廣告ばかりになつてきた。ぎら／＼して見える凡てが廣告であり、プロパガンダであつた。この八釜しい雜音の世界から物靜かな世界に人々は眼を向けなくてはならない。さうなつた時に政治のほんとうの價値が分つてこようと思ふ。



下獄二年

神近市子

一、颱風後の好晴

五年前の九月五日、私は上告を取り下げて下獄した。

丁度、八月の三十日に珍らしい颱風が日本の中央を襲うた後で、その被害の噂で世間が何となく騒然としてゐた時であつた。が、颱風の後をうけた空はまことに申分なくよく晴れて一望のうちを遮つてゐる片雲もなく、セル着の袖に通ふ暖かい氣流が、長い夏に虐げられた人間を慰め顔であつた。

午後になつて、私はその頃下宿してゐた瀧之川中里の下宿を出た。宮島麗子さんが本郷迄一緒だつた。

『では、皆お達者にね。』

私はかう云つて右手を差出した。

『一人の方が好いのなら、では行かないわ。』

麗子夫人は、さも私が痛ましいと云つた風にヂッと私の顔に眼を据ゑた丈けで、外に何とも云はなかつた。

私は、サッサと自分の電車がとまる方角に歩いて行つた。麗子夫人が一緒に控訴院迄來たがつてゐることをよく知つてゐる私には、背後を振り返る勇氣がなかつた。一度振り返つたなら、二人は又歩み寄ることは知れてゐた。そして私の『一人行く、』と云ふ決心に緩みを見たら、夫人は何時でも私と一緒の電車に乘る用意を藏つてゐたのであつた。

私と一緒に控訴院に來たがつた友人達は決して少々ではなかつた。皆私に名殘りを惜しんでくれた。皆がせめて檢事局迄送つて來て、これから二年の苦役をつとめる私の最後の自

由の時間を氣持よく過さしてやりたいと望んでくれたのであつた。

私は、皆の申出をことわつた。私は自分の不名譽な犯罪の道連に、深切な友人達を引合に出すことがいやであつた。私は友人達には少しの相談もなく自分で判斷して自分の好んだ行爲をやつたものであつた。そしてその行爲の爲めに社會から復讐をうける時になつて、遙かに友人達の背後にかくれるやうな眞似はしたくなかつた。もつと別な云ひ方をすれば私は自分ではする丈けのことをして了つたのであつた。そしてその行爲が濟んで見ると、一時の興奮と焦躁とが去り、實に氣が淸々として落付いた好い氣持で、その氣持は更に又その行爲に對する善惡褒貶のいろ／＼な批評を實にたまらなくいやなものに考へさせるやうになつてゐた。そして友人達が私が苦痛を抱いてゐるものであることを知つて殊更によく、殊更に深切にあらうと努めてくれるのですら、私は苦痛に考へ始めてゐたのであつた。

又もつと別な云ひ方をすれば、私がこれからうけようとしてゐる復讐は、私は犯罪の當時から覺悟して待つてゐたものであつた。何も今更に驚き慌てるほど、珍らしく思掛けなく起つて來たものではない筈であつた。私がほんとに自分の熱情に殉じようと云ふ決心をし、その決心を行ふ勇氣を持つものであるなら、今の場合私に殘されてゐたことは只だ一つある筈であつた。それはうけるべき復讐の苦い杯を、悪びれることなく最後の一滴迄のみ干すことであつた。そして私のほこりは、その復讐を更に堪へ難く更に苦しいものにしようとさへした。そこに私の友人達への好意の返上と、囚人に許される隔月の面會の拒絶とが生じたものであつた。

これが當座の間の別れになるのだと思ふと、私には電車から見る情景でさへ見過しに出來なかつた。空は蒼く澄み、大地は黑く喘ぎ、人や馬や犬はいつものやうに忙しく行つたり來たりしてゐた。凡てのことは今ある通りに昨日もあつたし、又一昨日もその前のその前の日も同じであつたし、そしてそれは又明日も同じである筈であつた。けれど、そんなことは私にはどうでもよかつた。道々に電車の窓に展開して行く一つ／＼の風景が、私はたまらなく捨て難かつた。そしてそれは電車を下りてからもさうであつた。私は私の新しい草履に踏れる時、大地が私の足に觸れやうとして私の前にダンスをしてゐるやうな感さへした。

二、五人の仲間

東京監獄には、私はタッタ一晩しか止めては置かれなかつた。丁度典獄が病氣で大學出の若い典獄補が代理して事務を

見てゐたが、この人は私を意味もなく毛嫌ひした。私が知識階級のもので物などを書くと云ふ丈けのことが、この人の囚人待遇の概念に混雜を來させ、私を特に好く待遇して好いか特に峻厳に待遇して好いか、急に決定を與へることが出來なかつた。特に私自身が、その何れでも別に嬉しがりもせず又辛がりもせず受けようといふ、無關心な態度を見せてゐたことが、一層この人を一種の興奮した狀態に置いたやうであつた。そしてこの人は、この種の人がこんな場合に何時でもすることをその通りにした。それは、足下から鳥が立つやうに慌しくその部下をせき立てゝ、その前夜おそく收監された私を六日の正午前にもう八王子に送り出したのであつた。かうして彼は一方で私の待遇について責任ある先例をつくる仕事を八王子分監の主任の上に轉嫁し一方不愉快な私の觀察から自分を救つたものであつた。

九月六日の正午頃、私は急に造へられた五人の仲間と、特別待遇の護送自動車で八王子の分監に移された。私の仲間は皆窃盜罪であつた。私は今その中の三人の顔をよく覺えてゐる。が、あとの二人は二年後出獄する時には、私はどうしても思ひ出すことが出來なかつた。

この五人は、短いのは四箇月から六箇月、長いので十箇月、一年位の人達ばかりであつた。私共は、八王子についてから東京の役人が私共を彼地の役人に引渡さうとして、話をしたり書類をよんだりしてゐる間、訊問所の三和土の上に一寸の間ほつて置かれた時にお互ひに一人づつ刑期で名乘り合つた四箇月と云つたのは十七か八の毛髮の房々とした一寸樣子の整つた娘であつた。一圓か二圓の極く一寸した反物かをくすねたと云ふ初心者であつた。

「四箇月！　四箇月なんか夢の間だ！好いな。」

その娘が名乘つた時、私は心の中でかう考へた。私よりも一年八箇月丈け社會の方に近くゐると云ふ丈けで、私はその人を幸福なうらやむべき人であるやうに考へた。その上にその人は年が若く身體ものび〳〵として丈夫さうであつたことが、私にその運命について少しの不安を抱かせなかつたと云ふ點もあつた。何年かの後、電車の雜沓の中などで赤い手柄か何かでサッパリした姿をしてゐるその人を見ることがあらうとも、ジメ〳〵とした淫賣宿で惡病に祟られてそのスンナリと彈力を含んでゐる肉體を滅して行くその人を見ようとは思はなかつたからである。何と云ふことはなかつたが、その明るい、惡怯れてゐる樣子のなかつたことが私にそんなに考へさせた。

今一人の仲間は、やせてどこか病身じみた蒼黑い顔の人であつた。まだ三十を一寸出たばかりかと考へられたが、その

顔にはもうはげしい疲勞と、いく分の智能の衰退さへも見えてゐた。唇がいやらしく眞黒で、それで始終ゴホ〳〵と咳をした。東京監獄を出る時には、帶を卷帶か何かにしてゐて役人に探し出され、もう子供のやうにメソ〳〵と泣いてゐたのもこの人であつた。が、八王子についてそこの三和土の上に置かれた時には上機嫌で、誰よりも餘計に騒いだ。あとで、ホンの一寸したことではあつたが、この人は餘興もやつた。

「皆どうであつたかね。」

ズッとあとで、別の役人が順々に二三度出代りした後をついで入つて來た女の部長が、かう云ふ何とも分らない突拍子の訊問をした時であつた。最前少し騒ぎ過ぎて劍突をくつた後ではあつたし、部長は決して人の好い優しさうな顏の持主ではなかつたし、簡單なそれ丈けの問では始めて逢つたその人の氣持を推測出來るものは誰もゐなかつた。私共はだまつて頭を下げた。と、また

「何うであつたかね？」

部長は又同じやうなことを尋ねた。

「何がどうであつたと云ふんです？」

私がかう云はうとしてのび上る途端に、私のとなりにゐたその人が、急に、

「へい、二三日前にはどうも大變に暴風まして。」

と云つた。それ丈けでなく、彼女は自分丈けが部長の問を正しく早く解したことをほこつてゐる風で、いく分誇らしく得意げにかう云つた。が、そのチョイとした得意でも、私共は打ちこはさずにはゐなかつた。場合が場合であつたのと、その調子が滑稽味を帶びてゐたのとで、側に並んでゐた者が、皆クス〳〵と笑つて了つた。

「役人が、そんなドヂ利くかい？おい等は役人が叱らうとしてゐるのか、でなければ始めてのおい等に挨拶をしようとしてゐるのか、それを考へてゐたんだい。」

これが監房の中であつたら、その囚人は一流の簡潔な啖切れの好い調子で、皆にこづき廻されたことであらう。そして彼女は又きつと涙を流したのであつたらう。

けれどその時は、訊問所の中のことであつたから、部長がそれを救つてやつた。

「あゝ、大變な暴風雨でこの邊もひどかつたが、東京も同じことであつたゞらう。今日は又仕合せに好い天氣で、皆汽車にゆられても別に疲れも出なかつたかね。」

部長が訊いたことは、こゝで始めて皆にハッキリとした。そこで私共は又頭を下げた。

すぐ後で、私共は浴場に連れて行かれて、行水を使はされた。その病氣の囚人は妊娠らしかつた。やせ萎びたそのどつ

ちかの二の腕には、「銀之助命」とした入墨をしてあつた。下手な字並などもよく整はないその愛着の印を見た時に、私は何だか情なくなつて了つた。「銀之助命」——妊娠——病氣——入獄——その徑路が一直線に私の頭にハッキリと寫つて、見誤るところが無いやうに思へたからであつた。

この病因は、十ケ月位の人であつた。あとで私は三四度出逢つたことがあつた。一度見かけたのは風呂場であつた。驚いたことにそのお腹が以前の儘であつた。私がビックリして取締りに訊ねて見たら、妊娠ではなくて腹膜炎にかゝつてゐるらしいと云ふことであつた。

こんなに寒くなりかゝる頃になると、私はよくこの人はどうなつたらうと考へることがある。もしかしたらこの人はもう死んでゐるかも知れない。

もう一人の人は一年ゐた。どこか子供でもある世帯持らしいところのある人で、「お手當」の櫛を一寸さしにして、稍々拔衣紋に着物を着た好い年增であつた。この人はいつ迄も私をおぼえてゐて、私の部屋の前を通る時には役人に隙があると何時でも聲をかけて通つて行つた。刑期がすんで歸る時には、私の監房の並びに來て二日ゐて歸つて行つた。

私は前に、私と一緒に送られた人は皆窃盗罪であると云つた。私と一緒に送る爲めに特に窃盗罪の人を五人殘してあつた筈もないから、一緒に行つた人が皆この罪種の人であつたと云ふことは、偶々女囚の中で窃盗罪がどんなに多いかと云ふことを證明してゐる。

八王子の女囚監には、三百から四百の女囚がいつも出入してゐる。そしてその中の三百以上が、窃盗かそれに類する犯罪である。尚ほ一般にはその種の犯罪とは全く違つた別の罪名で知られてゐる犯罪も、その形の上丈けでなくその心理上の狀態を考察の中に入れて見る時には、廣く「經濟的の理由」によるものと云はれる犯罪が、殆どその全部を占めてゐるのではないかと云ふことは、誰にも想像されることである。現在の經濟組織が、現在の大仕掛の監獄を造へたと云ふことは、監獄を怖れ、又は監獄を輕蔑する人に、よく頭に入れて貰ひたいことの一である。

三、陰氣な監房

さて、私は私の道連と別れて、これから始まる二年の生活をどんなに送りどんなに苦しみ、又どんなに樂しんで來たかそれをお話しなくてはならない。

私共は、訊問所を出てそこの三和土の上で東京から着て行つた新しい晴着を拔いで、これから八王子の秋を凌ぐ粗末な袷に着かへた。そこで直ぐに私共は別れ〳〵になるのだと云

ふことを知つた。私は一番に一人皆と別れて、獨房に入ることに極められた。

「ご大事にね。」

皆が私にさう云つてくれた。私も思はず、

「ご大事にね。」と云つた。

この時には、私は何の氣もなくさう應酬したのであつたが、それでもこの人達は何と云ふ要領の好い挨拶のしかたを持つてゐることだらうと考へた。が、すぐその後でこれは監獄內で囚人が役人の眼を窃んで交はす只だ一の挨拶であることが分つて來た。朝 別れ／＼になつて工場に出かける時、道で行逢つた時、夕方工場から歸つて監房に一人々々入る時、囚人が交はす挨拶は屹度これである。そして私が一人淋しく監房の中に閉ぢ込められ、それがのび／＼と手を振り足を踏むと云ふ丈けのことではあるが、それでも尙ほどんなに濟々とした好い氣持を與へることであらうかと監房の外を通る人々をうらやみ乍らのぞいてゐる時、見知り越しの人々が私に投げて行つてくれた挨拶もそれであつた。

「ご大事に！」

それを聞くとその瞬間丈け、しめつけられたやうな私の心が一時に暖かくゆるんで來たものである。まことに監獄で暮すものにとつて、これ以上によくお互ひの立場をあらはした言葉があらうか。大抵の人は社會にあるうちは、自分以外の者の注意と介抱とによつて自分の身體を護つてゐる。一人一人が決して全くの孤立に陷ることはない。それが監獄のことになると、事情がスッカリ變つて來る。こゝでは人は全くの孤立の狀態に置かれて了ふ。役人によつてさうすることを無理に强ひられる。一人々々に自分丈けで飢餓と苦痛との凡てを忍ぶやうに命令される。この中から自分の身體と心とを救つて置かうとすれば、私共は自分で注意して自分の健康と慰樂とを、不愉快で單調な生活の中からひろい出して行くより外はない。

間もなく私は自分の監房に送られた。敎誨堂につゞく廊下の兩側に雜房より少しはなれて十室ほどある獨房の、北側のとつゝきの部屋であつた。そこで私は二年の刑期を送つた。部屋は二疊で、そのうちの半疊が便所になつてゐた。便所の上は平生は板がはまり、そこに手洗の小さな水桶が乘つてゐた。窓は高く、鐵の棒がはまり、硝子はいつも曇つて部屋は更に陰氣であつた。廊下に面した方は一方にドアがあり、別の一方に可なりな差入口がついてゐた。差入口の直ぐ下に內側には小さな棚がついてゐて、そこに土瓶と茶碗が一つあつた。湯は炊事掛りが食事の時三度々々土瓶に入れかへてくれた。扉は半分は板になつてゐたが、上半分が鎧扉やうになつ

てゐた。そこの扉の前に一番よく光線が落ちて來たので、そこに壁の方を向いて坐つて、私は二年間マニラ麻の綵つなぎをした。

けれどその仕事が始まつたのは、翌々日であつた。二日は心と身體とを新しい生活の爲めに準備させようとして、休養させられることになつてゐる。

ピーンと云ふ高い音を立てゝ監房の丈夫な扉が自分の背後にしまるのを聞くことは、監獄に長く居るものにも又新しく自分は囚人であると云ふことを思はせるに充分なものであるまして入つた許りの初心者にあつては、あの音は不愉快な、反感と涙とをさそふ音である。

「入つた當時は、扉のかげでシク／＼と泣いたものであつたが…………」

あとで私にかう話した囚人があつた。私も扉の陰に坐つて暮したこの時の二日は、あとで話さうとしてゐる最初の大晦日の夜にまさるとも決して劣らない慘めな物悲しい日であつた。

何もかも落付くところに落付いて、私がホッとした氣持でゐたことは事實であつた。この事は私は前にも一寸書いて置いた。うるさく騷がしい社會をはなれ、全く獨ぼつちに置かれた時、私は始めて一分の安心と平和とをとり返したやうな氣さへするのであつた。久しく何となく騷然と暮したあと、私は休息と靜思の機會とを可なりのぞんでゐたものであつた。

けれどさすがに別れて來た社會、別れて來た人々がなつかしくないことはなかつた。私は二年の苦役を濟したあとは、これ迄の社會、これ迄の人々とも遠く別れて、全く別の、全く異つた階級の間で暮さうと考へてゐた。さうとすれば、今の別れは一時の別れであつて又決して一時的のものではなかつた。さう考へると、一時は相當に幸福であると考へたこともある、自分がこれ迄生活して來た社會がなつかしまれた。別離の哀愁が可なり強く心を打つて來た。

又、一方に人を憎み人を怒る氣持が全然ないこともなかつた。暫時は殆ど忘れたやうに暮してゐたその感情も、さうしていよ／＼苦役の生涯に入つて見ると又新しく事件當時の印象が眼ざめて來て、憎しみの涙は新しく湧いた。

行末についての不安、老いた母への愛慕、——凡てのことがゴチャ／＼になつて頭の中を往つたり來たりして、私の心はその度に痛み且つ悲しんだ。

が、それには幸にも一の救ひが見つかつた。私は入獄と共に食事をしないでゐたので餓えの爲めに身體がつかれ、猛烈に居眠りをし始めた。そして一度氣をゆるして壁により作ら眠ると時折に眼をさます丈けで直ぐに又眠るのであつた。

私は嬉しかつた。少しも眠つてゐる間だけ、私は自分の生涯が失敗に了つたことや、今の生活の慘めなことや、一切合財のことを忘れて了ふことができた。そして今の場合さうする事より外に、心を救ふ方法がなかつた。快よい陶醉する眠りを私はどんなにかよろこんで樂しんだことであらう。

四、單調なルウチーン

仕事を始めると間もなく、食事もどうにか出來るやうになつた。始めて與へられた食事を全部たべて了つた時など、いく分か味らしいものさへ覺えたので私は少し驚いた。そして同時に一寸ではあつたが到頭囚人になり切つたことを情なくも感じた。

一週間すゝうちに、私は自分が八王子で送らうとする生活が、大抵どんなものであるかと云ふことが想像できて來た。朝は六時半に起きて髪をとかし顔を洗ひ、部屋の掃除をした。そして間もなく運ばれる食事を濟ますと、仕事の始まる時間迄は、私は自由に讀書などした。

十時頃になると、六七人の「衞生」とよばれる雜役が、役人につれられて私共の監房の廊下を掃除に來た。そしてその時監房の扉があいて「衞生」が私共の桶の水をかへてくれた。皆が私の顔を見ることをきびしく禁じられてゐた。それで桶を私の部屋の前に置くや否や、にげるやうにして立ち去つたけれど、「衞生」にもいろ〳〵な人が順々に出來て、案外、要領の好い大膽な人は、役人の隙を見ると監房の前に話に來てくれた。話と云つたところで立働く風をし乍ら、小さな聲で一言二言口を利く丈けである。第一に刑期の話、それから犯罪の話に役人の噂、それから喰物のことなどが囚人の重な話である。一人の「衞生」はいつか役人に聞かれて叱られる迄、毎日晝食のお菜を朝のうちに教へてくれた。ある一人は寒くなつてから桶に水を入れる代りに湯を入れてくれた。

「衞生」が掃除に來る時分か、でなければ午後の一時から三時迄の時間のうちで、私は三十分から四十分位運動に出された。運動と云つたところで、編笠をかむつて監獄の庭をクルクルと歩く丈けのことである。單にそれ丈けのことではあるが、それでもそれが心身にとつてどれほど保健と慰めとになつたか、想像の外である。

休息はこの外に晝食時の三十分と夕食後の一時間とがあつた。私も晝間の糸を袋にしまひ、夜業には別の袋の仕事をとり出した。夕方には工場はすべて閉ぢられ、囚人は皆自分の監房に歸つて來て夜業にかゝるので、晝間は淋しい私の監房も燈がつくと急に賑かに、私の心迄が極く僅かではあつたが怡々としてよろこんだ。何と云ふことはなかつたが、只だ仲

間の近くにゐると云ふこと――一緒に苦しんでゐるのだと云ふことが、どれほど私の心を和げたか、それは私にも充分に云ひ盡せない。

勞役は、晝夜を加へて十二時間であつた。東京監獄の十時間に較べて、私は何時もそれを不滿に思つてゐたが、それは皆その時の分監長をしてゐたM――と云ふ人の改惡の結果であつた。この人はこの外に囚人の食物を改惡し、囚人の勞働條件を改惡した。看守から上つた今の位置を後生大事に勤めようとして、專らこれらの改惡が行はれたと私は善意に解釋をして歸つて來た。然し後から出て來た囚人が監獄内の噂話として傳へたところによると、この分監長はその監獄の改築に關した不名譽な嫌疑の爲め、引立役であつたある典獄の盡力でお情け的な轉勤を命じられたと云ふことであつた。この話を聞いた時私は改惡の多かつた理由が略々分るやうな氣持がした。

囚人を教誨し囚人に道德を說き常に囚人に改悛を强ひる役人が屢々自分自身で監獄行の候補者であると云ふことは、餘りに皮肉過ぎた現象である。このM――と云ふ人に關した噂話がある外に、私が服役してゐた頃の役人の一人で、矢張り竊盜の現狀を押へられて免職になつた人があつた。その人と云ひM――と云ふ人と云ひ、囚人に對しては最も峻烈で、道を敎へるに手段を選ばなかつたことを考へ合はせてゐると餘り多くを敎へようとする人が常に人を敎へるに足りない人だと云ふことも一寸證明されたやうに思へて來る。

夜業がすんで眠る時は嬉しかつた。眠つてゐる間だけ、その間だけは少しも悲しみも苦しみも恨も不安も忘れてゐた。監獄からの解放、人生からの保釋！ 眠る私達には束縛はなかつた。それ丈けでなく夢は私共を待つてゐた。夢の中に於いてのみ、私共は味あるものを口にし美しいものを樂しみ、戀し勞働し交歡した。私共にとつては人生は實際には夢の中にあり、現實には只だ惡夢だけがあつた。かうした生活に長くゐると、夢と現實とをハッキリと區別するものがなく、私は屢々晝も夢みてゐたことがあつた。そして當時私の頭を往來してゐたことの中で、自分にも區別がつかなくてどうしても事實から夢を加へた部分を切りはなすことの出來なくなつて了つたものがいくつかある。このことは私が文章を面白くする爲めに、事實を僞つて書いてゐるものでないことを、特にこゝに斷つておく。

この外に、日曜は勞役は半日で終つた。そして病監にゐる人と私とを除いて、凡ての囚人が教誨室で教誨をうけた。私は何時でも自分の部屋で書物をよんだ。書物をよまない時には、扉の際に耳をはさんで、聞くともなしにあの馬鹿々々

しい教誨を聞いた。風呂は冬期は三日に一度で、午後にあつた。

これが私の日課の一般であつた。二年間、この單調な悲しみと沈默との生活をどうして忍んで來たかと今では自分自身で不思議に思ふ位である。が、それでもその當時は非常に堪へ難くも思はなかつた。却つてその中から幾多の思ひもよらない事實と教訓とを學んだものであつた。

極く多くの云ふべきことがあつても、かうした限りある記事に盡すことが出來ないから、私はその一のことを書いて見ることにする。それは例へば勞役の仕事についてゞあつた。私は最初仕事を怠けられる丈け怠けることにする積りであつた。そして又實際に一定の課される仕事はあるとは云つても、個人々々の能力と云ふものは不同なものであつて、甲のことに非常に早く上達する人で、乙のことをさせては他人の半分も出來ない人もあつた。かうした能力の微妙な差等は、頭の惡い(又は惡くさせられた)役人達にはどうにも救助できない暗礁と映じてゐるものゝやうであつた。注意深くさへやつて行けば、私の考へてゐたことなんか容易に實行できることであつた。

けれど他に何と云つて興味をよするべき刺戟のない監獄の中であつては、仕事は只だ一つ興奮と刺戟とを（そして僅かではあつた慰樂とさへも）與へるものであつた。仕事に熱中してゐる爲めに、不幸な生活を忘れて暮してゐる日があることを私は間もなく發見した。そして特に私のやうに身體を動かす機會のない者にとつては、絲を選つてはつなぎ、つないでは卷くその單純な動作が、どれほど身體の運動を助けてゐるかと云ふことを學んだのもそれから間もなかつた。續いて二日仕事を休むと、私は消化不良に陷つた。

これらのことに氣がつくと、私は特に努力することもないが、又特に怠けるにも當らないと云ふことを考へ始めた。そして平々凡々と仕事をして暮したが、その後になつてこの仕事だけがまだしも私共の健康を救ひ、私共の精神を救つてくれてゐるものであることを知るやうになつた。

五、最初の友人

八王子に行つて間もなく、私は閉された自分の部屋と監獄内の社會とをつなぐ鍵を見出した。

下獄する時に、すぐ私が思ひ出した一人の囚人があつた。それは橫濱で姑を傷けたと云ふ理由で、擦り傷を負はせたに過ぎない罪に十二年(?)の不當な刑罰を課されてゐたN——と云ふ若い婦人のことであつた。その事件が起つた當時は、私はまだ世の中をひろく暮してゐた頃で、その事件によつて

興奮と名のつくやうな興奮は與へられなかつたが、自分が犯罪の結果横濱に入ると、そこの監獄では役人達がその人をよく印象してゐて、何時も私に噂をしてくれた。そして私はその人に對する同情を呼びさまされると同時に、その人を好ましくよく印象するやうにさへなつた。私は入る時にどうかしてその人を尋ね當りたいと考へた。

で、入つて第一夜か第二夜に私に興味をよせて私の扉の前に立つた役人があつた時に、私は機會を失はなかつた。

「N——と云ふ人はどこに居ります？」

私はかう訊ねた。

「N——？」その役人は小首を傾けた。

「もと女優をしてゐたことのあると云ふ人です。」

「あゝ、それではT——のことだらう。T——と云ふのではないかね？」

その役人は聲をひそめた。私もヒョイと氣がついた。

「さうかも知れません。N——と云ふのは主人の方の姓に相違ありませんから、その事件で確か離縁になつた筈です。」

「T——だ。T——だ。T——はそれさ。」

役人は私の前の監房を指さした。

私はもうその監房の主を見知つてゐた。よく調つた美しい顏と、スラッとした背とよく透る抑揚の自由な聲を持つた人であつた。美しく澄んだ眼を認めた最初の時、私は、

「若しかしたら？」と考へたのであつたが、その私の推測はあやまらなかつた。

一週間ほどして、その人が私に興味を持つものゝやうに、夕方工場から歸つて來て私の監房の前に立つて私をヂーッと見始めた頃、私は立つて差入口に顏を見せた。丁度私の差入口がT——の監房の開き放たれた扉と向合つてゐて、夕方のゴタ〳〵の爲めに役人が少しはなれてゐる獨房を閉めに來るのは、何時でも少しおそかつた。

私がお辭儀をすると、立つてゐたその人がいくらかドギマギとして輕く頭を下げた。そして役人の聲のする方を見返へると直ぐ「安心」の合圖をした。

「何年？」彼女が訊ねた。私は指を二本示した。すると向ふが十二年と云ふことを矢張り指で示した。それにもう三年目を服役してゐると云ふ事迄加へた。もう一度「安心」の合圖をまつて、

「私も横濱で第一番をうけ、あすこの役人にあなたの話を聞いた。」

と、今度は私は小さな聲で話した。すると彼女は笑つて、

「あすこの部長さんは好い人で深切だ。」と云ふ意味のことを云つた。

「何で來た？」彼女は又すぐにかう訊ねた。私は人を殺す眞似をした。すると彼女も自分の鼻をさして同じやうなことをした。

その晩は私共はそれ丈けのことを話した。役人の足音を聞くと私共は二人ともパッと身體の向きをかへた。けれどこの晩を最初にして、それからは殆ど毎日私共はいろんなことを語り合つた。私は最初のうちは努めて社會のニユースを話したし、T——は主に役人の性格や遣口を話して私を警戒した。いろ／＼のことを想像して見ると、T——はもう何時か私の犯罪についてくはしく聞いてゐた風であつた。顏を出しさへすると屹度何か話題を造へて置いて、話をしてくれた。後では私共は尚ほ親しくなつて、一身上の話など迄して、監獄を出たら親しくしようと約束した。

この人は、私が歸つてから少しすると假出獄になつて歸つて來た。私共は文通を始めた。出獄後は東京に出て住むと云つてゐたが、病身と老母の愛を捨て兼ねるとで、まだ故郷の實家に居られる筈である。「前科者」と云ふことが何時迄も祟つて、何事も思はしく行かぬと云ふやうなことを云つて來たことがあつたが、極く最近には私も少し打ち絶へてゐる。

この人によつて、私は監獄内の事にもよく通じ、極くボンヤリとした形ではあつたが、社會の推移なども少しは學ぶことが出來た。今思ひ出してもハッキリと覺えてゐることの一つは、ロシア革命の起つた時であつた。ツアーとツアーの家族の刑殺とを、私共は非常な興奮で長くかゝつて（四五日もかゝつて）漸くに話した。三つの工場内に起つたことも、重なことは私は大抵この人によつて知つてゐた。

その後になつて、私は隣室の若い放火犯の娘とも友達になつた。どこからどう盜んで來るものか、紙など私がかくすところがなくて困るほど澤山持つて來て、差入口から投り込んだり電燈をはめた壁の間の穴から投り込んだりしてくれたが、一度話してゐるところを窓外を廻つてゐた看守に聞かれたと云ふことで、敎誨師か何かにウンと油を絞られたとか云ふことで、暫時は弱つてふさいでゐた。急に私によそ／＼しいので私は大抵のところを推測してゐると、暫時して何時か自分からさう云つた。

で、話は矢張り向合つてゐるT——とが一番やり易かつた。段々寒くなつて正月が近づく頃には、正月の素晴しいご馳走の獻立のことをいくらかの微笑でもつてこの人がくはしく（餅がいくつと云ふこと迄）數へてくれた。

「三日は三度々々お菜がつくなら、餅もあるしそんなに惡くはないな。」こんなに考へ始める頃には、私もスッカリ監獄馴れがして來てゐた。（つゞく）

叛逆をたくらむ女囚

藤範晃誠

「放免囚で御座います。」

女監取締は、馬鹿叮嚀に敬禮して　個人教誨室から引退つた。

後には、すらりつと姿勢のいゝ、初々しい、併し何所とはなしに淋しさのひそんでゐさうな美しさを持つた女囚がうなだれ立つてゐた。

女教誨師が病氣缺勤のため、女監兼勤を命ぜられて、まだ間もない若いR——教誨師は、囚衣を着るにあまり相應しからぬ彼女の容姿に先づ驚き、更に教誨原簿を見るに及んで、墮胎が彼女を此所にまで引入れたのだといふ事を知つて、一層驚きを深くした。と同時に、數奇であらうところの彼女の過去に對する想像が、ゆたかに流れ出でて、常ならば形式一點張ですませる筈の釋放教誨に、非常な興味を覺えつゝ取かゝつた。

「第二百十九號、川村芳江ですね。」

彼女はうなづいた。

「四ヶ月の刑期がすんで、いよ〳〵明朝は歸るのですね。」

「…………。」彼女の唇は動いたけれども聲は聞きとれなかつた。

「うれしいでせう。」

「…………はい。」辛うじて答へて、一寸上げた顏は、さすが微笑んでゐた。

「何所へ歸る心算です。」

教務主任ならば「何所へかへるつもりかな。」と、猫なで聲で、語尾に力を入れ、老僧ぶつて聞くのだと、其の樣子を思ひ浮べ乍ら、R——教誨師は、くすぐつたい思ひで、歸郷

を、とひたゞした。
　サツと、彼女の顔には暗い蔭が走つた。
「…………。」
「何所へ歸る心算ですか。」
　R——敎誨師は、あやしみ乍ら、敎誨原簿の裏の歸住地欄を見た。——未定、保護會へ送るより途なかるべし——女敎誨師の細いペンが、さう走つてゐた。
「何故、原籍地へ歸らないのです。兄さんが居るぢやありませんか、兄さんが。」
　女敎誨師のいゝ加減な釋放準備敎誨に對して、R——敎誨師は腹立たしさを感じながら、とげ〳〵しく、さう言つた。
　が、女のおど〳〵してゐるのを見ると、急に氣の毒になつて、
「何か歸れない理由でもあるのですか。」と優しくたづねた。
「…………はい。」
「どういふ？」
「…………………」
「默つてゐては判りません。言つて御覽！」
「…………」女は怖る〳〵敎誨師を見上げた。
　言葉つきとは反對に、その瞳の色は羊のやうにやさしかつた。
　彼女は、安心して答へた。
「村では、此麼罪を犯しますと、大變、やかましく申しますので……」
「外の罪よりも？」
「はい。」
「どうしてです？」
「………………」
　彼女は眞赤になつて、うつむいた。
　原簿の記事欄の、本囚は萬事告白をいとふ狡猾者なりとの女敎誨師の例月敎誨の感想を見てあつたR——敎誨師は、如何にもさうだな、と思ひ乍ら、更に追求した。
　——が、女の答は得られなかつた。
「何故、そんな事位、言へないのです！？」
　さう言つて原簿から目を放したR——敎誨師は、女の頰と前に置かれた小さなテーブルが涙で濡れてゐることを發見した。顏は苦惱のさまを、あり〳〵と表してゐた。
　たゞ事ではない！
　直覺的に、R——敎誨師はさう思つた。で、靜かに、彼女の心のおちつくのを待つた。
　やるところのない目は、自然、敎誨原簿の方へもどつた。
（八月八日例月敎誨、本囚は猜疑心及び反抗心、稍ありて敎

誨上都合惡し。」
（九月八日例月教誨、頑くなに墮胎の理由を述べざりしに、本日終に、自分は穢多なる故をもつて情夫に捨てられ、やむを得ずかゝる手段を執るに至りし事を告白、慟哭せり。）

穢多！　穢多！

その文字がR――教誨師の網膜にやきついた。身體中が火のやうに熱くなるのを覺えた。

……一瞬、我にかへつたR――教誨師は、眼前に大理石像のやうに蒼ざめ、顫へてゐる女囚を見た。

「泣くんぢやあない！」壇を飛び下り、彼女を抱擁して叫びたかつた。「泣くまい！　あなたと同じ事で苦しんでゐる私の前だ！」

併し、彼はR――といふ單なる人間として彼女に接してゐるのではなかつた。教誨師、教誨師、K――監獄教誨師。呪ふべき職名を持つてゐるのであつた。

R――教誨師の瞳からは熱い涙が流れた。

作業工場の方が急に靜かになつたと思ふと、「敬禮――」の號令が、秋の澄み切つた空氣を透して聞えて來た。R――教誨師は、典獄の巡視であることを知つた。

いつまでも泣いては居れなかつた。打ふるふ聲を叩して、教誨してゐるらしく裝はねばならなかつた。

「……あなたの心持は判つてゐる。あなたもわたしの心持を察してほしい。（R――教誨師は、どうしてもそれ以上のことを言ひ得なかつた。如何に自心に鞭打つても――）そして、何の心配もなく總てを話して下さい。きつとあなたの爲になるやうに取計ひます。ほんとにわたしは、急に妹でも出來たやうな思ひで、かう言つてゐる。

典獄は、コツ、コツと靴音にまで、威嚇のための威嚴を保たせようと力め乍ら、教誨室の前を通りすぎた。

彼女は罪を犯して以來、未だ嘗てない、こだはり、うたがひ、さからひ、から離れた心持で、しみ〴〵とR――教誨師の前に泣いた。そして、過去の總てを語つた。

二

憍陽の炎天に狂ふ八月。

南の國の少さな町の工場。女工たちは、けだるさうな音をさせ乍ら機を動かせ

「暑いねや。」

「たまらんのうし。」

「まつこと暑いねや。」

「水でも飲んで來うか。」

「さうやな。」

「あんたもいく？」
「あゝ、行くよ。」
　四五人が機から離れた。
「みんな、どこいくのや。」
「水でも飲まんと死んで仕終ふが。十七や八で、またあののさんになりたうないきにのうし。」
「やめとき！そのお茶碗！」窓際に坐つてゐる女が叫んだ。
「どうしてや？」
「これが飲んだきに」女は指四本を突出して見せた。
「や、きたな！」
茶碗を持つてゐた女工は、如何にも穢いといふ風に、茶碗を捨てた。
「や、われた！」
「なんや、おきぬさん。茶碗わつて仕舞うたやないか。」
　とがめるやうにいふその言葉に、反感を覚えたらしく、おきぬとよばれた女工が言つた。
「えゝやないか。どうせ奴穢多の使うたものは、もう一ぺんと使はれやせんきに。」
　みんな、どッと笑ひ崩れた。そして、一せいに北の隅に小さくなつて一生懸命、働いてゐる女工の方を見た。
嘲笑と侮蔑の瞳を無遠慮にあびせかけられたのは、漸く満十六歳になつた許の川村芳江であつた。
　うつむいて泣いてゐる彼女を見ると、女工たちは元氣づいて益々猛烈に襲撃した。
「穢多のくせに何やな、公平さん等の用ふ茶碗を用うたりなんかして。」
「くさいぞね。あんな茶碗で飲むと。」
「さうやとも。側に居つてさへ、くさいのに。」
「何であんなものを工場へ來さすんや。」
「旦那はんもえゝ加減な人やな。」
「大きな聲で言はれんけんど、旦那はんは大分助平やよつて別嬪さんならエッタでもモッタでもみんな連れて來るわ。」
「旦那はんより若さんがどうや、この間な、あの娘は何所から來てるのかつて、わしに問うてゐたわよ。」
「あゝあ、わいかつて別嬪に生れて來たかつた。若旦那に好いてもらへるのに。」
「そやかつて、穢多やあつたら、しやうなかろが。」
「かまはんきにの。若旦那に好いて貰へる位なら。」
「はゝゝゝ、お駒はん、大分熱うなつとるのうし。東京へ連れていつて貰ひや。」
「此麼、へちやはあきまへん。因果なもんや。」
「其麼ことというてたら罰が當るわよ。なんぼか喜ばいで。穢

多になんか生れんかつたことを。」
「ほんまやな。」
「ほんまやとも！」
「もう、そないに言うたりな。なんぼなんでも可哀さうや。」
「穢多つてな。牛を殺したり、犬を殺したりしつけとるよつて、可哀さうなことも悲しいことも知んてな。」
「けんど泣いてるが。」
「…………」
「…………」
……やがて機の音ばかりになつた。
芳江は大聲あげて泣きたかつた。手當り次第、あたりの物を打こはして走り歸りたかつた。が、病床の母から、いつも、
「辛抱や、辛抱より仕樣がないのや。こんな不仕合せな村へ生れて來たのが因果やと諦めんと仕樣がない。わしらのお父さんも、お祖父さんもそのお祖父さんもみんな辛抱して來たのや。今は昔にくらべると、餘ッ程ようなつてるのやからなあ――」と、諦觀から來た忍苦道を說きつけられてゐる彼女、殊に此の仕事以外にこの仕事ほどの賃銀を得ることの出來ないのを知つてる彼女、土間に莚一枚敷いて草履許りを作つてゐる村の女達を蔑んでゐる彼女としては、この不合理な壓迫を、たとひ、泣きつゝでも堪へねばならないのであつた。
なに、此麼事位！
彼女は我慢して、時間まで働いた。が、工場を出て町はづれの住吉神社の森にまで來た時、急に嗚咽が喉をついで出て來た。
爛れたやうな夕燒が、次第次第に、淡く、蒼く、黝く、そして寶石のやうに町の家々の灯が輝き始める頃まで、彼女は大きな松の根に打伏し泣いてゐた。
泣くことなく、嘆くことなく、憤ることなく、呪ふことなく、村の人達は滿足し切つて孜々と働いてゐる。その奇蹟的な平安さを祝福せずには居れないやうな、羨望せずには居れないやうな思ひをさへ、彼女は起し始めた。と、同じ人間だ卑下することはいらない、といつて自分を町の工場へ通へるやうにして吳れた若い先生、いつもは佛さまのやうに敬つてゐた先生をさへ恨めしく思はれ出すのであつた。

三

「川村とかいふ部落の娘、今日隨分、外の女工たちからいぢめられたさうですね。」
夏期休暇で東京の學校から歸つてゐる工場主の長男が、夕飯の時、父にさう話しかけた。

「あれには困るよ。いつもいつも。」

「此の頃、S――社とかいふ、かなり過激な團體があつて、侮辱的な行爲を受けたときは、極めて猛烈に糾彈するつていふぢやありませんか。今日のなんかも、その人たちの耳にでも入らうものなら、たしかに大問題ですね。」

「ほう！　そんなのが出來てゐるかな……」

父は驚いて言つた。心には米騷動の時の事を思ひ浮べ乍ら

「どうでせう。問題にならないうちに、何とかしては。」

「というて、どうすればよいかな。」

「僕、すぐ、行つて來て見ませうか。」

「そりや嶮い村ぢやぞ。」

「かまひません。さうして置かぬと後で困るやうな事が起つては大變ですから。」

……芳江が村の誰にも告げて無い事を知つた彼達は安心して、今後に於ける處置を考へた。

勿論、何の落度もないのに斷るわけにゆかないし、他の女工たちの口をとめるといふ事も不可能だし……父子の最後の考案は、都會の廣さは身分を自由にかくしおほせ得る事を說いて、憧憬を持たせ、彼女を出京せしめる事に落着した。

「僕の友人には立派な家庭を持つた華族さんなんかも多いんだから、何にも不愉快な思ひをし乍ら田舍なんかで働いてゐなくとも、何處かの小間使にでも世話してあげますよ。」

丸石工場安全のための權謀に、川村芳江は九月、工場主の長男の歸校に同行して上京した。

病床の母は泣いて所謂「出世」を喜んだ。彼女も一個堂々たる人間としての門出のよろこびと、希望に滿てる瞳を、どんなに輝かせたか。

が、それは一瞬にして夢の如く滅びて仕終つた。

「芳、珈琲持つておゐで。」

社會事業家として聞え高いA――子爵家の小間使をして立働いてゐる彼女はW――大學に籍ばかりを置いてゐる長男Y――の命令に恭しく珈琲を運んだ時。

「おい、これは君がこさへたのか。」と、不快げに聞かれてはッとした。

「……………はい。」

「君のこさへたものが僕たち、平氣でいたゞけると思ふか。」

「……………」彼女は眞赤になつてうつむいた。

「併し、心配することはないよ。丸石君から聞いて知つてゐるのは僕一人だから……せいぜいものはきれいにさへすればいゝんだね。」

――その翌晩。

純潔なる處女が、虎狼の前に、被征服者の極みなき弱さを

悲泣悲歎しつゝ、至高至純なる靈肉を、犧牲の捧物としなければならなかつた。

狼は、あくことを知らなかつた。

「お暇を――。」

その言葉は、いつも「お前のやうなものは何所へ行つても雇つては吳れないよ。そんな事いはずに、うちに居るがいゝやがては子爵の令夫人だ。」との狼の言葉にごまかされた。

とてもとは、如何に正直な田舍者とはいへ彼女も思つたが、全く心にもないならば、此處までも弄びはしないだらうと考へた。

併し、それは見事裏切られた。

身體に異狀あることを訴へると、子爵長男の態度は、急に變つて仕終つた。

「もう出て行け。お前は此處へ來るまへから汚れてゐたんだ。僕は妊娠なんかしないやう完全に方法を講じて接してゐたのだ。お前は何といふ圖々しい女だ。それだからこそ穢多なんて言はれるんだ！」

吐出すやうにいはれて、彼女は家を追はれた。一金百圓也靈肉の償け料としての零細なその金を、あまりの腹立たしさに、いやといふのを無理に握らされて。

四

妊娠三箇月、身をかくし能ふ程の暗い夜、村を出て五箇月目に、川村芳江はしのびやかに、歸つた。

「おゝ、美しうなつて來たな。もつと此方へおゐで。東京はえゝ所ぢやらうな。見よ。もつとランプの火を大きうせえや芳江が見違えたやうに美しうなつて來たわ。」

しみ〲と眺められる度に、彼女は冷や冷やした。

さりげなく、そこいらに散ばつてゐる古新聞を取上げ、讀む風をして、お腹のあたりへの母の視線をさへぎらずには居れなかつた。

新聞――それから彼女は、ふと墮胎といふ事を思ひついた。よくそれの爲に告發されたといふ記事が掲載されてゐることを知つてゐたから。

實行方法。

たゞ、それだけが問題として殘された。

翌日、東京で知り合ひになつた友人の所へ遊びに行くといふ事を口實に、彼女は家を出た。そして名高い墮胎村であるJ――を心ざした。

それはどこでも同じやうに漁師たち許りの住むJ――は、マッチ箱の連續とも思しき破れ家許り、悲慘なみごとさで打

ならんでゐた。
わめき立てゝ喧嘩をしてゐる家もあつたが、さすがに、自分の村に見るやうに、子供許りうよ〳〵としてゐる家といふのは一軒も無かりさうであつた。

「みんな墮胎してゐるんだ。」さう思ふと彼女は心強くなつて來た「誰かに一寸聞きさへすれば、總ての心配はなくなつて仕舞ふ。」

すると、荒くれだつた男、眞黑な女たち許りのおそろしげな村も、彼女にはよろこびの園のやうに見えた。

が、いよ〳〵尋ねようとすると、心の許せさうな人は一人も見當らなかつた。

あやしむやうにぎろりとにらまれたり、かゝはりもないといふ風についいと行かれたり、無遠慮に

「ハイカラ行きよらあ、見いや。」を浴びせかけられたり……

どうしても機會は與へられなかつた。

仕方なしに濱へ出た。

海は劫初未來の蒼さに、平穩な波歌をくりかへしてゐた。人間の持つあらゆる苦に對しては極めて冷淡に。

彼女は松原を、行きつ戾りつした。

冷々しい白砂に腰を下して、まろび落ちる涙をも凝視した。

長い歔欷のあとの空虚、その空虚から來も色濃い憂鬱—

「あゝ、いつそ海へでも飛び込まうか。」

本心からではないけれど、彼女はそんな事をも思つて見た。

すると、前よりはローマンチックな、センチメンタルな、心が、孕女の溺死體が砂の上に引上げられてゐるシーンと共に湧いて來た。

彼女は、たゞ、何といふことなしに、小說などで讀んだ通りに、小石を袂に拾ひ込んで見たくなつた。

「おい、娘さん！　短氣を起しちやあいけないぞの！」

もう大分重くなつたなと思つて、袂をさぐつてゐる時、突然、うしろから聲をかけられて吃驚した。

見れば、其所には五十餘りの漁師が、太い繩を持つて突立つてゐた。

「どうして死ぬ氣になつたのかと思へや、ははあ、お前さんの腹具合がどうやら變だな。」漁師はしげ〳〵と彼女を見入つて言つた。

「どういふ事情か知らないけんど、そん位のこつて、あつたら生命をほるに及ばんぞの——墮胎せばえゝが、墮胎せば。」

彼女は、たゞ、泣いてゐた。

「穢多ばつかりや、よう墮胎さんのは。あいつらは、なんまいだぶつを信じてゐよつて、因緣あつて生れて來るのは佛法を聞くためやから、罪なことは出來んなんぞいうてな。見受

けるところお前さんはそんな穢多のなかまでもなかりさうなが、どうや、え〻、墮胎しては……』

彼女は矢張泣いてゐた。

漁師は、長い眉毛を、ぴりりッと動かせ、窺ふやうに四邊を見廻し、一段聲をひそめて言つた。

『……實はな、わしは人助けと思うて、難儀をしてる娘さんたちにな、墮胎す法を敎へてやつたことは何遍もあるのや。判りやあせんきに、な、命を持つて歸つたらどうや。心配せんでもえ〻、一寸やつてやるきに……。』

さう言つて、凝と彼女の顏色をうかがうた。

それは願うても、かなはない事であつた。彼女は非常に喜んだ。が、いよ／＼となると、穢多は墮胎さないといふ言葉が妙に氣にか〻るのであつた。

躊躇は少時續いた。

漁師はうながすやうに言つた。『どうするぞね。いやならいやと言ひ―　わしも働きに行かにやならんきに。』

言葉は鋭どかつた。

威壓されたやうに、彼女は、小さくはあつたけれども力强く答へた。

『どうぞお願ひします！』

(若し斷われば、自分は穢多だと斷定されるんだ)(普通の人のすることとなれば、いくら穢多だつて、して差支へはありやしないだらう。)

一つは消極的と、一つは積極的な、人間としてのほこりを持ちたさに、たうとう彼女はさう答へて仕舞つたのであつた。

五

川村芳江は、いそ／＼と漁師のあとに隨つた。

妙に意味ありげに、にやりと笑ふ村の女もあれば『德左衞門さ、もうけ口やな。』といつて行きすぎる荒くれ男もあつた。

漁師は、だ〻、ひつ、ひつ、ひ、と小さく笑ふだけであつた。その聲が、妙に彼女に不安と恐怖の思ひを起させた。

村から二三町離れた桑畑の中に、漁師の家――といつても藁小屋とより思へない――があつた。

『ひつ、ひつ、ひ、此麼小つほけな家での。けんど、どんなことをして居つても、誰にも知れやせん。』

なかば獨語のやうに言ひ乍ら、漁師は大きな鎌を取出した。

彼女はおど／＼し乍ら、漁師の一擧一動を見てゐた。と、漁師はすぐ裏へ飛出して、何かしきりに切り取るやうな音をさせた。

煤けた天井、黒い疊、血痕とも思しきその上の斑點、彼

女は、もう逃げ出して仕舞はうかとさへ思つた。
　このさし迫つた時にでさへ、彼女は穢多と思はれたくなかつた。
「かまふものか、誰だつてするんだもの。」
　打ふるふ心と體に對し、絶對なる命令をするやうに、彼女は、さうつぶやいた。
　やがて漁師は、○○の○を五六本、ほゞ同じ長さに切つて持つて來た。
「……痛うもなけりや搔ゆうもない、樂なもんや。なんにもこはがらんでもえゝ。」にやにや笑ひ乍ら、漁師は彼女に近づいた。「……そりやさうと娘さん、五圓ばあ（許り）さきに出しといて貰はうか。安いものやろが。大事の生命がたつた五圓や。」
　彼女はそれをわたすと、命ぜらるゝ儘に仰臥した。それには死ぬやうな覺悟が必要であつた。
「動いたらいかんぞの。あゝ、えゝ肉附やなあ。○○○○○○○、○○○○○○○○……」
　漁師は、さう言ひ乍ら、○○○○○○○○○○○○○○○
　○○○○。
　彼女は羞恥に、全身の血が顔に集り上るやうに思へた。それには、かゝはりなく、漁師は馴れた手つきをもつて、○○○○○○○○○、○○○○、○○○○○○○○○○○○。
「あつッ！」
「ぢつとしてゐな！」漁師は更に○○○○○○○○○○○「……○○○○後が惡いでな。」
　彼女は、死人のやうに動かなかつた。○○○○。
○○○○○○○○○、○○○○○○○。○○！○○○○○と漁師はいつた。
「これでえゝ。」
　ほッと我にかへつた彼女は、起上らうとすると、ふら／＼と目まひを感じた。
「二三時間、ぢつとやすんで居るがえゝぞね。」
　漁師は、さう言ひ乍ら、あとのかたづけを始めた。
　赤黒い、どろ／＼のものを、汚い布片に包んで、裏の畑の方へ行つた漁師の後姿を見ると、彼女は、急に自分の罪に對する怖しさを感じた。
　一刻も早く、いまはしい此の場から逃げ去りたい思ひが、しきりに募つて來るので、止められるのをも聞かずに、無理に其所を出た。

しかし、到底、家まで歸れさうにないのでＩ——とある小さな町の、ある旅舍にその夜を明した。

朝、大へんな熱が出てゐた。

醫師に診察して貰ふ事は、怖しかつた。

三日、五日は空しくすぎた。頭痛もやまなければ、出血もやまなかつた。家へ歸つて母たちにそれを知られてはといふ事と、此邊にゐて警察の手に上げられでもしてはといふ二つのおそれが、無謀にも、再び上京を企てさせた。

神戸東京間の急行列車がＫ——市に着かうとする時、三等車の一隅で、脳貧血らしい症狀を呈して打たふれたのは正しく彼女であつた。

足下の血痕が原因となつて、總ては判つて仕終つた。

六

刑事被告人としての川村芳江は、ひた泣きに泣いてゐたが襟に番號のついた赤い囚衣をまとうてからは、急に變つて仕終つた。

工場でも監房でも、口をつぐんだきりであつた。地藏さん地藏さんと、他の囚人たちは彼女を稱んで、ひそかに笑ふ程であつた。

石。

石。

石。

よく、彼女は心にその文字を思つた。役人の眼を盜んでは工場の板間、監房の柱、浴槽などに、その文字を爪で刻りつけた。

日曜日の總囚教誨がすんだあとの囚人たちにとつて一ばん嬉しい雜談——絶對に禁ぜられてゐるけれど、ある程度までは公然らしくする——の時間にさへ、その同房囚三四人のサークルから離れ、格子戸を通して見える石ころを凝視するのであつた。

大きいのも小さいのも、同じやうに取締の靴にふまれた。浴場、或は炊事場へ行く女囚の、はゞのせまい杉下駄にも踏まれた。あとは、以前の如く默つて轉つてゐる……

石、

石、

石のやうな生活を、これまでの自分がして來たのであつたなら、決して此麼ことにはならなかつたのだ。世間は、穢多を石ツころのやうに思つてゐるのだから。

Ａ——子爵家のＹ——に踏みにぢられ、捨てられた妾は、ほんとに石ツころではないか。石ツころより哀れでないか……

……」

「石」同樣の心で生きる。

赤い血のたぎる人間として、自由を持つ人間として生くることを許されぬものが、しかも尚生きようとするには、死といさゝかもかはりなき「石」同樣の心で生きる事より外、一つの途もないのであつた。

涅槃「石」にまで到達しようとする彼女の熱心なる信仰、熱心なる苦行は、刑期の過半期まで續いた。が、その諦觀に入り、さとりすますには、餘り悲しすぎる出來事が起つた。

ハハシス、イサイフミ。

彼女は愕然として醒めた。矢張、血の通へる人間であつた。

「……おまへのしたことは、新ブンで、みなしつた。けんど、おれは、おなん(母親)にはいはざつた。アんまりわるい事ぢやきに。それに、おなんは、いつのマにやら、村の人ラに聞いて、たゞ、クヤシイ、クヤシイとばつかり、言ひよつてゐたわ。アカぎものをきせられたのか、ヨシえのヤツはニクイ、ヨシえのヤツはアほぢや、そんなことばあいひよつたぞ。けンど、ときどキ泣きもうて、ヨシえにアひたい、アひたいと、おまへのをる方をばかりむいて、一にちぢうねよつたこともある……おれは、おまへのあにではナイ。そんで、おまへもおれのいモトとおもてくれんな。この手がみかぎり、あにとイモトのエんは切つて仕まふ。これはおなんのいひごんんぢやきに、おれをわろうおもてくれンなよ。……けんどおなんもおまへを心から、ワルイヤツヤとオモふて居んのとちがふ。世ケンもあることやで、キようだいのえんを切れといふただけや……わしはシンでからは、ヨシえのカラだにつきまとうて、かあいゝヨシえをクルしめた世ケンのものをみな、くるしめかヤシてやろ。ヨシえのまもりがみになつてやるとイつて、おなんは、歯をギリギリいはせもつて死によつた……」

平假名、片假名のまざつた讀み難い手紙は長く續いてゐた。

彼女は繰返し／＼讀んだ。

何回でも涙が同じやうに溢れた。

つゝましく忍從の鎧に身を守るには、あまり悲しみが大きすぎた。

虐げに對する不平不滿の絕頂から流れ出でた涙によつて、終に、呪咀反逆の血染の旗が擧げられた。

「――遠い昔から、果てしない末に至るまで、數知れない、「穢多」と呼ばれる人間が、みんな自分のやうに苦しめられいぢめられて來たのだ。しかもそれを、泣き乍ら默つて忍んで來たのだ。自分もさうしようと今迄、努めて來た。何といふ腑甲斐ない馬鹿な人間だつたのだらう？！」

七

『教誨師さま。わたくしはくやしくてくやしくてなりません。お母さまにあんな思ひをさせて死なせたのは、もと〳〵自分が惡いのでは御座いますけれど、A——子爵の……。』女は上氣した顔を一寸上げて、更に言葉を續けた。『……そんな考へを起すやうな奴だから、世間から穢多なんて言はれるんだと。昨日も取締部長さんからいはれました。けれども妾は、妾はどうしても、どうしても、心のゾッとするやうな復讐をしなければ安心出來ません。死ねません。うらみをのんで死んで行つたお母さまの魂が妾に乘りうつつてゐる！ さう思ひますと、妾は、ぢつとして居れません。明日、出獄したら！ 教誨師さま、教誨師さま、妾は出獄の日許り待つてゐたので御座います。ぢつと、こんな心を胸底にかくしまして……』

涙もろいR——教誨師は、斷えず泣いて彼女の言葉を聞いてゐた。

『……堪らない話を聞きました。もう、何にも言ふ勇氣はありません。が、役人としてではなしに一個のR——として、私達は、紳士的な、淑女的な態度で社會へ挑戰しようではないかといふことだけを……』

『教誨師さま。妾には、妾には、もうそんな資格か、とうの昔に……思へば泣き出したうなります。恨めしうなります。呪はずには居れません。』女は歔欷きつゝ言つた。『どうせ、此屍身體で御座います。肉彈に相應しい身體で御座います。ただ、もう、どうなつてもいゝ、この恨みを、氷のやうに冷い社會へ、思ひきりおくりたいので御座います。そして、教誨師さま、につこり笑つて死にたう御座います。』

『あゝ、私は何といつていゝか……』R——教誨師は嘆じた。そして更に何か言はうとしたとき、けたゝましく汽笛がなつた。『あゝ、もう十一時半が鳴つてゐる。あなたは監房へかへらねばならない。あとで監房教誨の名義で話しに行きませう。

『…………。』彼女は嬉しさうにうなづいた。

『教誨すみ！』

R——教誨師は出來るだけ平氣を裝つて女監取締をよんだ。

コンクリートの廊下を羊の如く柔順に、女監取締に連れられて行く大叛逆兒の背にも、温い陽光がこゝろよく流れた。うるむ眸に、彼女を見送つてゐる——教誨師の心には、惨殺されたA——子爵の長男Y——の蒼ざめた屍や、辭表を呈出して、自由なる、解放運動への門出に就かうとする悲壯な自分の歸郷姿などあり〳〵と浮んでゐた。(一九二二、九、二、夜脫稿)

——(完)——



母子の爭闘

生方敏郎

一

此處に一人の子供がある。

彼は父の子か？それともまた母の子か？

冗談ぢやない。世に父ばかりの子があるか、また堀川夜討の辨慶がお淺をなじつた文句ではないが、世に母親ばかりで生んだ子があらうかい、と皆さんはお笑ひなさいますか？

笑ふのは止したまへ。世には確かに母親ばかりの子があるのだ。水は酸素と水素の化合物で、酸素ばかりで出來た水のないことは三尺の童子も知つてゐやう。子供が父と母との間に生れること位は態々云ふのもあまりに平凡過ぎる程明白な事柄だ。が然し、事實として世の中には母親ばかりの子があるのだ。イエス・キリストは乙女マリアが精靈に感じて生んだ子だ。彼は神の子であつた。それ故、肉に於てはたゞマリアばかりを親として生れた子だとされてゐる。然しその當時のナザレ村の役場にある戸籍帳の表には、マリアの夫、大工職ヨセフの長男と記入されてあつた。だからキリストは實は母ばかりの子だけれども、表面的に、名の上では、父もあり母もあつた。

だが、日本には名實共に母親のみの子である子供が、そこら中にうよ〳〵してゐる。役場への屆出に、父の名はなく、何の何子私生兒何某と云ふのがそれだ。少しも驚くことはない。世に澤山私生兒はある。

だが、父親ばかりの子が世にあるか？どう考へても父親ばかりで子は出來さうに思はれない。矢張り子供はお母さんの

ほん／＼から生れないでは出て來ない。馬鹿の與太郎もお母さんのほん／＼から生れ、英雄豪傑もまたお母さんのほんほんから生れた。

二

子供に向つて、

「いゝ子ちやんはお父さんの子か、お母さんの子か？」

と聞いてご覽なさい。十人が十人まで、

「あたい、お母さんの子よ」と答へるだらう。

極めて稀には世にお父さんの子と云ふのがある。男の子ばかり多い家の一人娘なぞ、父が特別に鍾愛するので、子もまた父に敬意を表して「わたしはお母さんよりお父さんがいい」なぞと云ふ。つまり子供にとつて、甘い方の親か、または尊敬すべき親の方に子供はつく。だが、これは平々凡々、和氣靄々、無事泰平の家庭に於てのことだ。天下泰平の家庭に於ては、子にとつては父も母も大差がない。多少甘くしてくれる方がいゝと云ふに過ぎない。親もまた同樣に、この子は俺に似てゐるから可愛いとか、あれはわたしに似てゐるから可愛いとか、氣まぐれに同じ兄弟の子供の中に多少の差別は置くけれども、要するに子は皆子だ。一人が大病に陷つた場合、この子の代りにあの子を殺すと云ふことを願ふ親達があるか？何の父母にとつても、この子も大切だが、あの子も大切だ、どれもこれもかけがへはない。そこまで行けば、差別と云ふ程の差別は認められない程平等に、子は大切だ。だが、これは前に云つた通り、極めて天下泰平な幸福な家庭に於ける話である。

一度家庭に波瀾が起るとする。それは極めて有勝ちのことだ。波瀾のない家庭の方が寧ろ少なからう。表面にまでは現はれて來ないまでも、つまり血で血を洗ふ恥は表に隱してゐても、家庭の底の底には狂ひ逆卷く風波が絶えない場合が多い。家の奥を若し透視することが出來たならば、どこの家庭を見てもスヰート・ホームなどと云ふものは殆んどあるまいスヰート・ホームはまだ結婚をしたことのない若い同志が夢みる夢か、浪漫詩人の白晝夢に過ぎぬと云つても、さう過言ではあるまいと私は思ふ。さて、その波瀾、或るものは母に死別し、またはより不幸にも生別し、または父が死別し、または生別する。其の種類は實に種々だけれども、その不幸なる家庭と云ふに於てはどこも同じやうに晴れ輝いた太陽は滅多に家庭を照らさない。

かう云ふ不幸が見舞ひ、試錬の日が來ると、そこで始めて子は父のものか、子は母のものか、その所有が明かになつて來る。夫婦離別し一家別れ／＼となる場合には、權利義務の關係に於て、子供は多く父のものとなり、骨肉慈愛の情實に於て、子供は多く母に伴はれて、母の里まで從いて行く。

子供が母について出て行くのを無理には引留めないところ

の父親は無數にあらう。だが、多くの子供を振り棄てて自分一人夫のもとを去る妻はこの世に滅多にあるまい。

父がより多く子を愛するか、母がより多く子を愛するか、泰平の時には殆んど分らない。一旦緩急と云ふ時になつて見ると、よく／＼やくざな母親でも、父よりは子に對して人情が厚いことが知られやう。

成程男は一見、女よりも子を可愛がるもののやうに見える者が多い。子供は形が小さく、心が幼稚で、我儘で無邪氣で、可愛らしいから、それで情味のある男は誰しも子供を可愛がるだらう。時として男は女以上に子供好に見える。男が子供を愛するのは、それが必ずしも自分の子であるがためではない。子供は子供だから子供が可愛いんだ。他人の子でも美しくて、悧巧であれば、やはり可愛い。男の眼に映る子供と云ふものは、玩具の人形のやうでもあり、犬ころのやうでもある。子供のあどけなさは、屈托の多い、生活に疲れた男の心を樂しませる。

然るに女が子供を愛するのはその意味が全く違ふ。女は、子供は子供であるから可愛いのではない。女が子供を愛するのは、それが自分の子であるからだ。女にとつて、他人の子なぞ少しも可愛いことはない。女が他家の子供に菓子を呉れたり、おん負して歩いたりするのは、全くその親達へのお追從か、一寸した氣紛れに過ぎない。(自分自身子のない女、未婚の娘の場合は少し違ふ)

女は――少なくとも母が子供を愛するのは、自分の子なればこそ愛するのだ。母となつての女は、子供と云ふものには飽き飽きしてゐる。既にお腹にゐる時から、立居にも、飲食にも、子供のためには隨分束縛せられ、分娩の際には生命を賭け、生れてからは一層子供に使はれる。朝起きるから夜寢るまで、そして夜中はなほ更のこと、糞小便の世話から、乳を飲ませることから、着物を着せる、湯へ入れる、寢冷をさせぬやうにする、全く子供のためには奴隸の生活だ。一日二圓五十錢の定まつた手當の外に心附けまで貰ふことの出來る一等看護婦は、三度の食事は上膳据膳で、夜は交代に眠ることも出來る。母は全く無報酬で、心を碎き、體を勞し、終日終夜子供に奉仕して、それが一月、一年、五年、十年と長いのだ。健康の時でさへその通りだ。まして子供が病氣にでもなつたから、眠る眼も寢ずに看護をした上に、身をきるやうな心配までもする。取越苦勞をする。はては自分が代れるものなら代りたいとさへ思ふ。女が、あの罪障深き女が、我執深く淫慾強く、理性乏しき女が、しほらしくも神佛の前にひれ伏すのは、茶斷ち鹽斷ちまでして神や佛に仕へる心を起す動機の十中十は、子供の病氣を救ひたいためだ。如何にその

數理が勝れてゐたとて、愛兒の病に利益を垂れない宗教などを、なんで女が信じるものか、利益はないが、數理が道德的だからなどと揚言して、敎會へ行くとすれば、その女は虛榮のために信者の假面を被つてゐるに過ぎない。

女はこの通り、子供のためには骨を折る。もう子供と云ふものには、自分の子だけで飽き飽きしてゐる。だから女は男が子を見るやうには子供を見ない。女は子供を可愛い人形として、また可愛い犬ころに似たものとして見はしない。女は他家の子供を見て、くさ〱した胸が晴れるやうなことはない。

女が子供を愛するのは、それ故男とはその動機が全く違ふ。女が子供を愛するのは、自分の勞力を價値づけることから來てゐる。それは自分の勞力讃美の心理から來てゐる。その證據には、女は自分の手しほにかけて育ててこそ、子供を可愛がるが、例へ自分が生んだ子供にもせよ、一旦里へ出して他人の手で育てさせた日には、決してその子供を愛しはしない。乳母が自分の育てた他人の子供を愛するのも、之と同じく自己の勞力讃美の心理から來てゐる。乳母は決して子供好きで醉狂から他人の子供を可愛いがるのではない。

三

忠と云ひ孝と云ひ悌と云ひ信と云ひ、又婦人の夫に對する貞操と云ひ、皆その報恩感謝の感情から出發してゐる。孝は決して外から强ひられてやる道德的行爲ではなく、本當の孝子の本當の孝行は、孝行が道德的行爲なるが故に孝行するのではなく、親の慈愛に對する感激からするのだ。謝恩の念からするのだ。

親に愛せられて育てられた子が、若しその慈愛に感激したならば、子の多くは孝子だ。少くとも孝心を持つ子だ。その孝心を實行にうつして孝行をつくさずとも、少くとも心の中だけには孝心がある。

世には孝心があり餘つてゐながら、不孝の行爲に出る子供が多いが、たとへ不孝の行爲はあつても、彼に孝心が無いと、誰か云へやう。

孝が親の恩愛に對する感謝の情に出發するとしたら、子供は母により厚く報いるか？それとも父に厚く酬いるか？これは極めて明白なことだ。

母は子供に對し、子供が胎に在る時以來、襁褓に在る時以來の心づくしを、つぶさに一々語つて聞かせはしないけれども、子は母の苦心を、無感覺で見てゐるものではない。少くとも賢い子は、母の丹誠を知つてゐる。だから賢明な人々の中には、母に對して孝行の子であつたものが非常に多い。淸盛入道のやうな我まま者さへ生母にはやさしかつたやうであ

る。豐太閤でも、徳川家康でも、又もつと近代の英雄豪傑でも皆その母親を大切にした。現代我々の、諸君の目の前に於いて見得るところから、さういふ例は幾らでもとれやう。

成功するやうな男に限つて、利己主義で他人を蹈みつけにする者が多く、成功者必ずしも道徳的君子ではないが、彼等は不思議にもその母を大切にすることに於いては一致してゐる。働きの有るやうな、一癖ある男といふ者は恩怨共に感銘が深刻なものである。彼等は母の愛を感激することが深い、それ故、他の惡事は壯んに爲し乍ら、母孝行だけの美德は不思議にも備へてゐる。

私はこゝに敢へて母孝行といふ。何となれば彼等の多くは母には必ず孝行であるが、父に對しては常に必ずしも孝行ではないからだ。父に對して不孝でないまでも、特に父に對して孝行ではない。心理學者フロイドに從へば、それは母と男兒との戀愛の現はれとも云へるだらう。孝擧と云ひ母子の戀愛といひ、言葉は違ふとも事實は必竟同一だ。

ところが、母と子――殊に男の子との間が圓滿に行つてゐる例が極めて多いのに反し、父と子――殊に男の兒との間には、爭鬪の起る場合が又實に多い。

父と子が思想が衝突する場合は極めて多い。否、父と子とが調和して行くと云ふ家庭こそ世に少ない位である。父の思想が古いか、子の思想が新らしいか、必ずしも子の方が若いからと云つて進歩した思想の所有者と云へず、また父が老いてゐるからと云つて必ずしも思想が劣つてゐるとは云へない。衝突はただに思想上のことばかりではない。思想上の爭鬪と云へば如何にも上品だが、物質上の慾望からも親子が隨分爭ふことが多い。甚たしきは一人の女が父と子と二人で爭ふ場合がないとも限らない。

父が子供を何うして教育して行かう。父が子供を何うして操縦して行かうといふ問題に就いて、ハマアトンといふ思想家が曾て議論したのを讀んだことがある。母が子供を教育するのは世に珍らしいことでなく、今では何處のお母さんも子供が學校から歸つて來れば、算術や讀み方等まで溫習してやつてゐるのが多い。別けても有名なるは孟子の母の教育逸話で世に『孟母三遷』と云ひ、誰も知つてる話だ。だが、父がその子を教育しようとして骨を折ることは、滅多に聞かない話である。太平記には楠正成が櫻井の驛でその子正行を教訓した話が記してあるが、これは一つの遺言に過ぎない。父は多くの場合子供を教育しようとしない。昔は父が子に職業教育をやつたが、それは今のやうに學校が無いので止むを得ず家業を紹ぐ必要にせまられやつたので、本來から云へば、父は子供なんぞ教へ度くない、又子も父から物を教はり度くな

い。論語にも孔子とその一子、鯉との話が記してあるが、鯉が一日庭を走つて過ぎるのを見て孔子が「汝詩を學びたりや詩を學ばねばいかぬ」といひ又「汝禮を學びたりや」など問ひかけた位で、論語のあれ程多い教訓は總て三千の弟子たちに向ひなされたもので、孔子が子を教へたところは恐らくこの一ヶ所であらう。そこで、その時見てゐた弟子さへ驚いて

「我れ今、詩を學び禮を學び、併せて、君子の其子を遠ざくるを知つた」

と言つた位だ。君子といふものは子を近づけて自ら教育しないものだ、といふ事を知つたといふのだ。

そこでハマアトンだ。イギリスで我子の教育に骨を折つた人といへは、誰しもそれはジョン●スチュアート●ミルのお父さんだと答へるだらう。ハマアトンは、そんな事から筆を起して、父が子を如何に教育し如何に操縱せんとして骨折り、遂に大失敗に終つた話をいくつも語つてゐる。西洋でも、君子はその子を遠ざけるを知つた人が多い。子は仲々父の手におへぬ。いつまでも呉下の阿蒙たるに甘んぜぬ男兒は、仲々父の手にはおへないのである。

子が父と爭ふのは、必ずしも詰らぬバカげたことに於いてばかりではない。父を苦しめるものは、必ずしも放蕩息子ばかりではない。不肖の子のみ父を苦しめはせぬ。

古來、英雄傳説に於ける父子間の關係を見たまへ。常に英雄兒は父に反いてゐる。親父のハゲ頭を古い〳〵と罵倒するのは、近代のハイカラ青年のみではなく、古代の傳説の中の英雄も亦然りだ。イディポスが、その父を殺して母と結婚す可き呪はれた運命悲劇はその代表的なものだ。イディポスはギリシャの英雄兒だ。イディポスは父と知らずして父を殺し母と知らずして母と婚したが、父はイディポスが生れた時、その兒後世父を殺す可しといふ神託を恐れて、嬰兒の中に彼を殺さうと謀り、家來に殺せと命じたのを、家來が山に捨てたのだ。父子の爭鬪的運命はここに初まつてゐる。だが、さういふ事とはちがふが、子に父を無視し父たることを否認するのも又子の父に對する反逆であらう。プルタークの記すところに依れは、アレキサンダアはジュピタア神の子であつて、父ヒリップの子ではない。母の陰部に獅子のサインを神に捺されてアレキサンダア大王は生れた。即ち彼は父を否認してゐる。又キリストは何うだ。彼も父を否認してゐる。彼は母のみの子と聖書にも記されてある。彼は神の子だ。大工ヨセフぜいの種ではない。あんな平凡人を父とはしてゐないんだ。けれども母だけは認めてゐる。まさか自分を天から降つた神とはしない。肉に於いてはたしかにマリヤの子といふとを承認してゐる。信者も母だけは生母マンドナとして敬慕し、

歌にも唄ひ繪にも描いた。ボッチセリだのラフアエルだのを初めとして、マドンナに敬意を表するところから、多くの名畫が生れた。しかるに、一人の藝術家もヨセフなんかはてんで對手にしなかつた。信徒も亦た聖父ヨセフとはいはなかつた。

日本の神話傳説には、父に反いた子は流石に見あたらぬ。併し、實際あつた事として歴史に記された事實の中には、父に背いた英雄はいくらもある。

私は先に豪い息子は母孝行だといつたが、豪い子供は不思議とまた父には不孝である。不孝といふ字が不穩ならば、父に反對すると言ひ換へても宜しい。昔から忠臣孝子の儀表と仰がれてゐる平重盛を見よ。父淸盛が法皇を押し込めようとした時、極力父の意見に反對したのは重盛だ。淸盛の他の多くの子供たちの中に一人として父に反對したものはない。皆御左樣御尤もと服從した。一人重盛が反對した。しかもその重盛こそ、後世、敵からも味方からも「小松殿さへ健在であつたなら、よもや平家は亡びはすまい」と誰にも望みを囑された人間だ。

古來の束縛を捨てゝ、人は何事でも自由に奔放にやつてのける時代が來た。これは戰國時代だつた。この時代に於ける群雄の中でも出色的であつた英雄、武田信玄は、父信虎を追放してしまつた。西洋の英雄傳説に在ることを、彼は實行したのである。

孔子は「父死して三年、父の趾を改めざる、孝といふ可し」と敎へたが、働きの無い無能の子なら、父死して三年が十年でも二十年でも、父の業を改造しはしない。父のやつた通りをやつてゐる。そして反つて働きのある豪い子は、父が死ぬと父のやつて置いた家の掟なんか氣に食はない。どん／＼改造する。孔子に從へば不孝の兒だ。

四

この通り、父子の間にこそ爭鬪はあれ、母子の間に爭鬪の起ることは、人々の殆んど考へ及ばぬところといつていい位、類例稀れなることであらう。母は子を愛するのあまり、干渉し過ぎてお互に不愉快に暮すことは往々ある。又母が子供を理解せぬために子を憾む場合もあらう。しかし、母が子を憎む場合は、子が嫁にのろく、嫁と同盟して母と爭ふ時くらゐのものだ。但し、これは純粹の母子の爭鬪でなく、むしろ姑と嫁との爭ひと見る可きだ。

悧巧な子供が、そして孝心深い子供が、母に對して全く仇敵と成る場合は唯一つある。そして之れより他にはなく、そして之は何うしても避けがたい。それは何だ。母が父を賣つた場合だ。父を賣つて他の男へ走つた場合がそれだ。この際

賣られたのは、實は父ばかりではない。さういふ場合、何うしても子供自身も母に賣られたものだからである。

母は涙ながらにその子を抱いて

「私はお前の父以外の男を戀した。決してお前を捨てたのぢやあない」

といふであらう。母が父を見捨てて、若しくは父に愛想をつかして、若しくはお人好しの父を裏切つて他の男に走つたに就いては、いろ〳〵深い事情のある事だらう。モウパッサンの小説の『ピエールとジュアン』の場合を採つて云へば、ローラン夫人がジュアンの父と道ならぬ戀に落ちて不義の種まで宿すやうに成つたに就いては、深い〳〵事情の有ることなのだ。ローラン夫人が自分自身それを告白小説に書いて天下に公表したら、それと同じやうな物質的な良人に愛想をつかしてゐる多くの夫人たちや、因襲結婚から『妻』と呼ぶ奴隷生活に陷れられて世に男の眞の愛と云ふものを知らずにゐる夫人たちや、否それよりも浮氣で常に戀をしつづけてゐる夫人だちやは、必ずローラン夫人に心から同情したことだらう、女の小使錢に依つて金儲けをしやうとする婦人雜誌や、その執筆者等は必ず大に同情し場合に依つては辯護の勞をとり、場合に依つては提灯持ちをさへもしたであらう。ローラン夫人に若し歌集の原稿の持ち合せでもあれば、進んで出版しやうとする際物師もあつたであらう。甚だしきは、ローラン夫人の良人に宛てた絶縁状なぞ僞作して大新聞に發表したオッチョコチョイの新聞記者も現はれたであらう。他所の細君の姦通事件など全く誰にも午後の茶飲み話なのだ。

「あの細君も男をこさへて子供を置いて逃げたつてねえ。驚いたねえ。猫がとても食はない顔をしてゐたが」

「や、併し無理はない。よく事情をきいてみるとね」

『別ぴんさんだつたかい』

「ちよつと澁つ皮がむけてゐたよ、それにハイカラさんでね誠に當世むきさ」

などと好いお茶飲み話の材料である。

だが、この話を成人の後に其子が聞いたら、何んなに母を怨むだらう、何んなに母を憎み、自分の運命を悲しむだらう。母を怨むはまだよし、彼は自分を恥ぢるだらう。自分の母が犯した罪は、自分の罪よりはづかしい。子にとつて其の母は神聖な偶像なのだ。その神聖だと思つた偶像のバケの皮がはがされた時、子供は如何に幻滅の悲哀を感じるだらう。母の罪を知つた子の前に、世界の女は皆淫婦と見える。むしやくしやして道で會ふ奴らを皆殺しにしてやり度いやうな氣がする。

「實際俺は獸だ」

と母の不義を知つたピエールは叫んだ。初め一寸したこと

から母の行爲を疑つた時にさへ、ピエールは
「俺は一たい氣でもちがつたか？自分の母を疑ふなんて」
と云つた。母が子を愛し子の爲めにつくすのも獻身的だけれども、子が母を見る目は神以上だ。子の見た母は神聖だ。その母が不義をすることなぞ、全く正氣で疑ふ者はあるまい。氣でも違はなければ母に疑ひをかけはしない。

けれどもピエールの疑ひは不幸にも的中した、そしてその邪貨なるを知つた時、彼は青い顔をして人目を避けて一室に籠り、たまたま會ふ人々はガミガミ噛みつくやうにあたり散らした。母には皮肉をいつて、いぢめ払いた。それでも胸の痛みは堪へられず遂に家を捨てて旅に出る。

デンマークの皇子ハムレットの場合がまたこれと似てゐるこれも母が叔父と姦通して父を殺したのだ。ハムレットはその仇を報いたが、それで決して胸が晴れはせぬ。四十七士の仇討の如く又宮本武藏の仇討の如きは、仇を討てば胸は晴れる。だがハムレットには、父が殺されたことよりも、母が犯された事の方が、より多く苦痛なのだ。彼は獨り歩き乍ら、「To be or not to be」と唧つてゐる。長らへて仇を討たうか？今ここで死なうか？と云ふのだ。

故に姦淫する母は、その子供の世界から日を奪ひ星を奪ひその生涯を闇へ突き落すのだ。子はたゞ母の罪を攻めるだけでない。子は母の罪を身に引き受けて苦しみ恥ぢるのだ。

五

無論、之は母の場合とかぎらず、父が母以外の女と通じたことを知つた時も、子の苦痛は少くない。父を神聖と思ひ込んでゐる子は、どんなに失望することだらう。併し、父は前にも言つた通り、いよいよの場合それを忍ぶ。父が母以外の女と通じる場合は極めて多く、ほとんど數ふるに暇が無い。父の多くは左樣に子にとつては怪しからぬのだ。子供が父より母を敬慕する理由の一つはここにも有る。

父は子を思ふことが薄いことは前にも云つた。父は母が死んで、後妻を貰ふと、多くの場合妻に氣兼して後妻の生んだ方の子を前妻の子よりも可愛がる。帝舜の父は、後妻に惑ひ後妻の生んだ象を愛して常に舜を殺さうとまでした。と支那の古代史にあることは、現今に於いても多く見られる實例だ。父は如何に子煩惱でも、それはサイノロジーの延長なのだ。妻可愛ければこん子が可愛いんだ。不義をして去つた妻が殘した子なぞ、父は決して愛しはせぬ。

父は元來子の愛が薄いからこそ、母以外の女に多く通じるのだ。子その物が眞に可愛ければ、その母を大切にし他の女に通ぜぬ道理だ。

父は子以外のものに――女とか事業とかに自分を嗜みおほ

れさせろ。

母も果して父のやうに子を捨て事業や戀に惑溺することが出來るか？母と子との間柄は、もつと近い、もつと眞劍なものではなからうか？

六

私は良人として妻に貞操を强ひない。それは私自身が妻に對して少しも貞操を守つてもゐないし、又守る氣もないからだ。それはお互ひさまである。

世間の良人の心の中も恐らく恁うであらう。それ以上に出て、自分は勝手な眞似をし乍ら、妻にのみ貞操を守れといふのは、婦人道德を利用して婦人を奴隷とするものだ。

さうだ、今日女が貞操を守るのは、決して良人への義理ではない。だが、女が貞操を守らなかつたら、その子は淺間しい亡びと悲みと闇の淵へ落ちることを思へば、女は良人の行爲が何うならうと、自分は貞操を守らねばならぬ。母が貞操を守るのは、良人のためより子のためだ。子が可愛いと思つたら、如何なる場合にも徹底的に女は貞女であらねばならぬ。

子は母の寶、母は子の太陽だ。

子を捨てて戀に走つた女の罪の報いが、如何に深刻であるかは、經驗したものでなくては分るまいが、その一端を描いたものはハムレットの悲劇とモウパスサンのピエール・エ・ジヤンである。ハムレットは坪内博士の好翻譯あり、ピエールは「兄の憂愁」と題し、こなひだ前田晁君の良い譯書が出た。世の母たる婦人たちには是非一讀してもらひ度い。あれを讀んで子供の苦悶悲哀を知らば、母は必ず貞操を守らずにはゐられまい。

女の戀愛と母の姦通心理とに就いては、尚ほ他日詳論したいし、又母ならぬ單に妻の貞操論に就いては別に議論したいが、今日は寒くて手がかじかんで書けぬので筆を擱く。

當今、子を捨てて走る母が流行するから、後年その人たちの悲劇を豫想し、母の貞操論を說いたのであつて、決して捨てられた宿六から頼まれたわけには非ず。

（大正十一、十一、二〇記）

イソアワモチの生殖

山本宣治

需給的生殖の多角關係

夏汐の引いた磯邊を逍遙し、波に取殘された水溜りや其に近い岩の上を漁ると、銀紙包のチョコレート位の大さで、見下せば小判形な暗褐色の軟體動物が、靜かに爬ひ廻つて居る。其の名前を形に因んでイソアワモチといふが、此動物が幾疋も頭尾相接して列んで居る事を時々發見する。私の友理學士東光治君は此動物の專門研究者であるが、彼の知識を借りれば、其列を作つて居るのは、交尾を行うて居るのださうだ。元來此動物は一疋の體內に精巢卵巢を兼た兩性腺を具へて居り、其中では精子卵子が雜居して居るが、斯樣に兩性細胞が密に接觸してもまだ成熟して居ないから、其時自分の精子で自分の卵を受精させる事はない。通常卵は熟すれば其周圍から一種の化學的物質を分泌し、其が周圍の液の中に擴がると、精子に運動の刺戟を與へて、精子が卵の方へ泳いで行くものらしく、斯樣なのを生理學では陽性走化現象といふ。卽ち或一定の化學的物質の存する所を目掛けて薄い所から段々濃い所へ溯つて行くといふ意味である。若し反對に一方が遠ざかれば其際陰性走化性を與へて居ると云ふ。それでイソアワモチの體內で、同居して居る卵と精子とは互に未熟だから誘ふ物質が出來て居ないので陽性走化性がないのか、それとも態と同一個體內の受精を避ける作用のある反撥性物質があつて陰性走化性があるのか、それともどの走化性も無く唯互に超然冷然として路傍の精子路傍の卵と沒交渉であるのか此三つの場合のどれであらうか、其は東理學士の研究中の問題の一である。所で斯く同居して居る卵と精子はやがて別々の管に分かれて行き、別々の入口と出口を以て外界に對して居る。

扨話は前の交尾に戻る。今甲なるイソアワモチは精液を乙のイソアワモチの卵に注ぐ。乙は斯く自己の卵を受精せしめ

ると同時に、一面に於て他の丙に精液を供給する、以下順を逐うて斯の如く、順列のはて迄需給關係が繋がつて行く。若し諸君の眼下にある數多の此雌雄同體動物が一列をなして居るならば、一端の個體は唯精子を他に與へる許りで自己の卵を受精させる爲に他から精子を求むべきやうもない。他の端にある個體は自己の卵に他から精子を受ける許りで精液は徒らに體内に貯へられて居る。之を見た倫理學者は一方は極端な利他、他方は極端な利己に卽した典型、跡の多數は利己利他を一身に兼て居るのだと解釋もしよう。文學青年の或者は其は『愛は惜み無く與ふ』のと『愛は惜み無く奪ふ』姿だと無暗に感激もしよう。失戀を最近にしたらしい人は其無言の動物の列の爲飜つては又憐れなる自己の爲に一滴の涙を濺ぐ事もあらう。併しイソアワモチ共は別に『勝手にしやがれ』とも何共申さず、唯默々と岩上を爬ひ廻つて居るのだ。

生殖の輪舞

今述べた樣な縱に列んだ式のが、消費生産と交互に進んで行き、列の一端に生産專門の個體があり他端に消費專門の個體が居る。そして生殖物質の進み方が一方から他へ恰もリレー競爭の如く及んで行き、遂に終點に於て止まる。所が其列か曲つて列の始めと終りとが接觸してそして其間にも交尾が始まる場合がある。よく觀察されるのは甲乙丙丁の四疋が、ロの字形に列んで居り、甲は乙に、乙は丙にと順に精子を與へ最終の丁が又最始の甲に精子を與へる事になる、其所で普通の列式交尾では他から精子を受くる事も出來ぬ甲所有の卵も此時は受精する事が出來、此所に廻れど端無き生殖の輪舞が成立する。

所で輪舞といへば、シュニッラーの傑作を我々は思ひ出し易い。嘗ては燈の明く輝いた維納の町の内外を舞臺として辻君は兵士に、兵士は下女に、下女は主人にと順に仇し契りに果敢ない束の間の歡樂に醉うて居る場面であるが、其仇し契りはやがて紳士から又辻君へ終に廻り廻つて戻つて來る。人生萬事斯くの如しと人を厭ひ世を嘲り色慾を罵らんとする者は、今此大洋の汀に下り立つた時さへ此イソアワモチの環を見て嘆息の叫を吐く事もあらう。併し聯想は自然であり、又其想像で人とイソアワモチと結び付けるのは其人の自由であるが、此二種の輪舞は根本から其性質を異にする。如何となれば人は男か女かどちらかである（生物學上の雌雄異體）。イソアモチの一疋は之に反して同時に雄であり雌である。卽ちBなる個體はAなる個體から精液を受け自己の卵を受精させると同時にCなる個體に精液を與へて其卵を受精せしめる。（雌雄同體）。複數の役者が順々に性的接觸をなす點は双方に

共通だが、シュニッツラーのそれは多くの接觸各々の起る時に前後があり同時に起るのでない。イソアワモチの生殖器が其役目を果すのは全體を通じて同時であり、種族保存の目的から見て互惠的に其目的の宜しきに合うて居る。然るに前者は理智情を具へた人間が行ふ、遊戯性交であり、後者は吾人の所謂理智と全然沒交渉な反射生活を送る下等動物の生殖性交である。だから今若し人生の果敢ない戀の獵人が此軟體動物の輪舞を見てひそかに會心の笑を漏す時、イソアワモチ若し理智あらば定めし苦笑するであらうと申したいが、斯樣な考へは後に申す通り動物心理學上頗る時代錯誤的傾向を帶びて居るものだから、斷然撤回させる。

物々交換の樣な相互生殖

イソアワモチでは需給關係が渾全體となつて始めて完成する。列の場合に生殖物質は順に一方へ送られる許り、丁度、マルクス資本論の一節に掲げられた「AはBニ等シ」といふ形の方程式の組合はせの如く、兎に角始め終りがある。經濟組織の進化に比較すれば割に高度の文化を遂げたものに相當するのだが、其より簡單に物々交換に相當する樣な現象が矢張生物界にもある。

京都や東京の氣候では春三月ごみための落葉や藁の腐り掛けた下を掻探すと、一定のミミズが體の一部に瘤の樣な膨脹部を生じ互に癒著して一見單頭兩尾の樣な形をして居るのを屢々發見する。其がミミズの交尾であるが、此動物も雌雄同體で各々自己生産の精子を他に與へ、各々對手より精子を受けて自己の卵に受精させる。平生でもミヽズを調べると、體の一部に少し膨脹して滑かになつた特別の帶が肉眼で見える此部分が雌雄生殖器の存する所で同じ一定の體内に前に精巢後に卵巢が具はつて居る。此帶に近い方の端に口があるから口端と名づけ、他の端を尾端と云へば、其際二つのミミズの一は口尾を東西に、他の一は口尾を西東に列べて相接近し、前に述べた帶状部分を以て互に接觸し互に組織を新に生ぜしめて、一時癒著合一したのが、其一見して單頭双尾の如く見えるものである。丁度位置が互違ひになつて居るから、一の卵巢は他の精巢に向ひあふ位置をとり、且又双方から膨れて出來た組織が精液を空費させぬ樣にトユになつて居る。此場合双方各々は同時に雌雄を兼て居て、恰も子供が辨當のお菜を取換るやうな按配に他の個體の生殖物質を利用するのだが生殖物質に關して自給經濟を行はずに態々物々交換を行ふ仕掛に何故なつて居るのか、自家受精を行はず交互受精をせねばならぬのは何故か、深い理由もあるらしいが其解釋は長くなるから唯今は差控へておく。

時を隔てた物々交換

「蝸牛角振分けよ須磨明石」其かたつむりの一疋が径路に向ひ他が播磨に向うた位置で相接近して、名々體の一側面を以て半ば接觸し、四本の觸角を角振分けよにし東、角振分けよ北南と動かして居るのを發見するならば、其は蝸牛の交尾である。此動物もミミズと同様に雌雄同體であるが、唯それと異るのは雌雄生殖細胞の成熟に早晩があり、先にまづ精子が熟し後に卵子が熟するのだから、ミミズの様に双方各々が同時に雌雄としてあづかるのでないらしい、つまり一方の者が先づ雄として他に精子を與へ其後時を隔てゝから又雌に變つて卵を受けるのかも知れぬ。さうすれば生殖物質に就て物々交換と云ふよりも寧ろ物資をまづ渡しておいてから後に必要な物を受取るといふ一種の信用制度にたとふべきものであらうか。

壯士が蛇をはふり出す様な交尾

イカやタコの類の雄が生殖期に入ると其多い腕の一本のさきが特別の形を呈し、其腕其自身も他の腕より長くなるので之を化莖腕 Hectocotylus と呼んで居る。所で交尾となると、タコでは體の大きな雄が其長い化莖腕を水平に差延べて突出し、其端にぶら下がる様な位置にある小柄な雌の體の外套腔に入れると、やがて其化莖腕がちぎれて其腔内に居殘る。之がイカやタコの生殖の仕方で歐州では水族館の水槽内でもよく見る事があるといふが、私はまだ實見しない。所で今申した外套腔といふのは我々がタコ坊主をひつさける時に指をさし込む所なので、昔或動物學者が其所を解剖した所が當時未知の一種得態の知れぬ管形の寄生蟲らしいものが盛んに活躍して居るのを發見したので、之は新種の動物だと思ひ早速、Hectocotylus argonautae と學名をつけ其特徴を記載して澄まし込んで居たのだが、何ぞはからん其は雄の取殘しておいた化莖腕其物に過ぎなかつたのである。斯様な行掛りから、吾人は今でも其化莖腕を其當時種名であつたヘクトコチルスの名を以て呼んで居る次第だ。淨瑠璃ならば辨慶御所櫻の播州書寫山の稚兒後に武藏坊辨慶の青春ローマンス『つい暗りの……』の記念品たる片袖に比ぶべきものであらうが、此様な擬人的説明は餘り上品でない上に種々餘計な想像が追加されるから感心しない。其上タコと武藏坊辨慶とをゴッタにすると辨慶に怒鳴りつけられさうだが、記憶に便利な様に否々ながら添へておく。扨其離れて、殘された化莖腕に、首をチョン切つた蛇の通りに、又逃げ去つたトカゲの後に取殘された尻尾の様に、暫時反射的に活躍して外套腔の中を動き廻るが、

此腕には更に小さい精莢といふ筒が數多ついて居り、其筒の中には精子が充滿して居り一方にバネ仕掛けで雌の體内に入つた時に此内容物を發射する樣に仕掛けが出來て居るから、丁度敵の塹壕向けて竿の先に縛り着けた爆彈を抛り込んだ樣な按配に、精子を外套腔内に蒔散らしてやがて完全に受精の目的が遂せられる。自然淘汰と外界に對する適應とはいひ乍ら面白い仕組になつて居るものだ。

どんな心持で此樣な活動をするのか

斯樣な色々の性的結合の樣式を述べたてれば、生殖學研究の割に幼稚な今日でも獨佛語の助けを借りさへすれば（品行方正なアングロサクソンの語たる英語では、月おくれ年おくれ半世紀おくれ七割引位の犧牲、社會奉仕、賤賣知識しか得られない）虎の巻は可成豐富だから、いくらでも請賣りは出來るが、今度の所は限がないから此位でやめる。

併しいつも生物學の門外者に質問される問題が殘つて居るといふのは、斯樣な事を色々の形で行ふ其動物自身がどんな氣持で行ふかといふ問である。答に至つて簡單だ。曰くわからない。イソアワモチがずらりと列ぶのは、ミミズの合體でも、マイマイの須磨明石でも、タコの爆彈投入にしても一體全體どんな氣分でやるのか其御本尊になつて見なければわかりさうな筈はない。進化論啓蒙の急先鋒たる大家ハクスレーは、さきに「蝦になつて見なければ蝦の心理はわかりつこない」と喝破した。研究を看板にしてわからないと許りではすむまいがなと突込まれても仕方がない。人間の心理で以て近い猿犬牛馬の心理を推測するさへ危險無謀である實證があがつて居る。まして花咲く頃歌ふ鳥の氣分や春を迎へて鳴くかはずの心持がわかるか、更に之以上體制の根本から違ふエビ、カニ、タコ、マイマイ、イソアワモチさてはアメバの類に迄輕率な憶測を試みるのは唯今の所危險千萬である。此危險がわかつて遠慮し得るに到つたのが、最近の動物心理學進步のおかげである。

人に擬した動物心理の解釋

然るに例へば大杉榮氏の才筆によつて紹介された佛蘭西の學者ファーブルの昆蟲生活の記事を見よ、人間味豐かな筆を以て甲蟲の求婚や戀愛事件を說明して居るではないか。白耳義の文豪マーテルリンクの蜜蜂生活の記事を見よ、返つて我朝當代に秀れた詩人北原白秋の雀の生活を讀め。此後の二者は文人であり專門學者でないから、幾分其說の價値を割引するにしても大昆蟲學者ファーブルをいかにせん……。と恐らく斯樣な正面攻擊が來やうが、私も矢張興味を以て

其等の著書を讀む事は讀むが、誰が見ても間違ひの無い事實と詩味に豐んだ想像力を自由に働かせて著者が勝手に下した解釋を混合しない樣に、充分注意して其說に耳を貸す。そして人に例へて面白い解釋を下し甲蟲や蜜蜂や雀の氣分を當推量した所にぶつかると、成程詩人丈あつてかうも解釋がうまく下せるなあ、かうも見れば印象も深いし早合點も出來るわいと割引し乍ら感心する次第である。詩と科學とが極めて巧みに織込まれてある時、趣味からは其を全體として鑑賞するに躊躇しないが、其を科學的見地から見る時は經と緯と分明に區別しなければならぬ。「花笑ひ鳥歌ふ」といふ樣な擬人的解釋は、雷鳴に恐れ日蝕に慄く野蠻人や自轉車に突飛ばされた時其自轉車にかみつく犬などの原始的な萬象有魂主義的態度とは同一視すべきものではあるまいが、科學知識になるべく誤解の生ずる事の無い樣におまけの修飾を施すのは危險である。

人間至上と其反動氣分

西洋諸國で未だ進化論の公けにされなかつた前には、基督教會が何か無しに科學的知識も無く人間は萬物の靈長獸畜は汚はしい者と許りに祭り上げてあつたが、進化論の人猿同祖說發表此方前の反動で生物學者がイコヂになつて人間が[illegible]犬馬と共通な點のみを摘まみ出すのに苦心した樣な傾があり、人以外の動物が案外賢いと思はれる所許りが力說された。之は前に敎會の强ひた盲目的人本主義を打破する爲の藥りが少し利き過ぎた樣な觀があり、近頃の種々な動物心理の實驗で賢いと思はれた動物も案外賢くない事もボツ〳〵わかり始めて、一度傾き過ぎた秤が平衡しやがて科學的人本主義を建設しようとして居る。現に生存する生物學者でも前世紀末の反動氣分の惰性を有する人と左樣な惡戰苦鬭の後のイコヂな氣分をもたぬ近代の自由人とが混合して居るのである。

先入第一それから我田引水

人は人、獸は獸、成程共通の點は認めるが、人獸無差別に動物心理を人間心理の寸法で測らうとするのは愚である事は前に述べたが、今度は其と反對に動物生活の或ものを模範として、我等人間の生活を律しようといふ試みの事である。此傾向は前の擬人的解釋を不當に普遍化としたのと反對に、特殊の位置に位する人間の生活に擬獸的解釋を下さんとするのである。

古來鳩に三枝の禮烏に反哺の孝ありといひ、鳩や烏が我々に孝行の德を敎ふる敎師たとした。そして其外に因襲道德に背く行だと大抵獸行だとけなし付けた反面もあるが、絕對に

あらゆる動物の行動は吾人人間の模範たと考へたのではないのは、特に其當時の道徳にあてはまりさうに當時の人が考へた例のみを選んだ事を見てもわかる。併し誰でも自分の人生觀に共鳴する者に逢ふと嬉しがる。自分の宇宙觀を裏書きする樣な現象を發見すると大に心強く思ふのは人情の然らしむる所だ。つまり始めに自分の考がチャンと定まつて居て、其から役に立ちさうな材料を集めて來て之にコヂッケ理窟をつけるのだから、一寸體裁丈は辻褄が合ふといふカラクリ、其種を明かせば至極簡單である。

辻占と豊富な材料

所で自然界で其材料を探す段になれば、此多數多樣の生物界でお好みのものは選み放題、西洋諸國の風俗の一に今目を瞑つてムニャ〳〵云ひ乍ら卓上の聖書を出鱈目に開いて、ぶつかつた其頁の第一行を自分の抱いて居る問題に對する答案だとする。之は御神籤の樣に吉とか凶とか待人來るとか思ひ事叶ふといふ風に明瞭具體的でないから、其文句が文學的であればある丈朦朧として、どうとでも自分のすきな方へこぢつける事が出來る。四辻に立つて始めて會うた人の風體や語り合うて居る語から自己の運命を卜するといふ辻占も此類で大抵其與ふる答案は始めから心の中にきめてある。聖書の文句で禁酒を主張しようと試みる人が居るかと思ふと、他の人は又同じ聖書の他の文句を引用して飲酒宣傳を試みる事も出來る、辻占に限らず、聖書に限らず、何でも皆此調子で行ける。だから生物界の諸現象に對してもすきな物を勝手に取出す事が出來る。例へば人間の性的關係に就て亂交狀態を是認したいといふなら、一寸の早合點丈で前のイソアワモチの樣な生殖輪舞を例にとつて、生物學者の敎ふる所によればかうかうだ「動物に於て然り、況んや人間に於てをや」と來る。往年自然主義全盛の頃其を履き違へた文學青年が遊蕩耽溺の生活に陷つたのは、理性をもたぬ獸が本能の爲に引ずり廻されて居るのを見て、其例を我々人間に適用し此所で又「動物に於て既に然り、況んや人間に於ておや」と考へ誤まつたのに幾分其原因があつた。

文字通りの男殺し

今此所に兩性鬪爭の意識と男恨めしの鬱憤とを抱いて何でも男といふ馬鹿者が近寄つて來たら取つて食はうと考へて居る恐ろしい女性が居ると假定して、彼女が悦びさうな一例を述べて見よう。

蜘蛛類の雄は、其雌の近くに居る事を第二の肢即ち鬚に具はる嗅覺で知るものらしく、此對を切取れば最早交尾も出來ぬし其傍に雌が居ても一向知らぬ顏である。或種類では其前肢を振上げて雄は雌の周りをグル〳〵廻り歩き、時には異樣の興奮を以て虛空に飛上つたりする。之が交尾をするすぐ前の藝當であるから「求婚の舞踏」と名づけてあるが、之も亦蜘蛛自身になつて見なければどんな積りでやつて居るのか、わかりさうな筈がない。

更に其中の避日類といふ部類の或者では、雄が雌に接近した上で、自分の生産した精液の團子になつた塊を第一肢卽鋏角といふので取上げ、不用意な雌の隙をねらうて其生殖門に矢庭にはうり込み早速雲を霞と後を見ずに逃げてしまふ。此際雄がグズ／＼して居ると、氣が荒くなつた雌の爲に取つて食はれる、無論いつでも屹度食はれるとは限らないが、兎に角此動物の雄にとつて生殖は命がけの一冒險なのである。人間の戀愛葛藤にしても時としては一種の雌雄鬪爭であり互に隙をねらうて相手を取つて食はふといふ恐ろしい場合も起るが、何も蜘蛛の眞似をして迄グズの雄を取つて食はねばならぬといふ樣な必要もあるまい。

例くさ〴〵と結論

鶴や鳩やが一夫一婦の關係を嚴に維持して居て、頗る感心なものだと宣傳せられて居るが、鶴はいざ知らず鳩の貞節に至つては可成其誇張を割引しなければならぬ節々を發見する。其外鴛鴦の例といひ色々の話もあるが、所謂逸話は神社の緣起や國自慢の名勝記を賑はす丈で我々の科學のたしにはならぬ。

動物に模範をとりさへすればよいのなら、好色な男は海豹や獺虎の多妻生活を引用して云譯もしよう、鷄を買ふ算盤づくから雄一羽に雌幾羽といふ風な比例を楯にこぢつけもしよう。併し人は人であり、海豹や獺虎や鷄でないのだ。

蜜蜂の巢で一の女王の下に若干少數の種取りの雄蜂が居る其外に勞務に服する無性の（本來は雌なのだが）働蜂が多數活動して居る。生殖の任を專ら引受けて居る女王の體内に一度入れば可成永く精蟲は貯へられて居るから、世智辛い冬が來よことすれば穀潰しの種取りには最早用がないと許りに、其何疋かの雄蜂を刺殺してしまふ。又春が來れば必要になつた時自家製の種取り蜂が出來るから種族保存には差支ない。之を人間社會に考へ直して見れば、不景氣になつたら役に立たぬ下級月給取を馘首したり工場閉鎖して憐れな勞働者を餓死させたりするのに似て居るから、人道に悖ると世話燒の人なら蜜蜂社會に抗議を提出しもしよう。併し蜜蜂の方が斯樣な習慣を取るのは環境に相當して居る適應現象なのだから、よし『人道』には悖つても我々の『蜂道』には決して悖らぬといふて、氣の早い蜜蜂なんかはいらぬ餘計なおせつかいより自分の頭の上の蠅を拂うたがいゝと、ブン／＼怒り出しさうな氣もするが、世に賢いと稱せられて居る蜜蜂で其心的生活の内容に入つて一々調べると、我々の理性の樣なものは痕跡もなく唯一種反射作用許りなのだが、そんな理窟を考へさうな筈がないから一安心する。

要する處、動物は動物、人は人、彼等の生活は何とあつても參考にはなるが、我等の人間生活の模範とすべきものでない。處で人の性生活は之等の參考とすべき事實を基礎として如何にあるべきものか、之は近く他の機會に充分述べさして貰はう。（一九二二年十月一日京都市外宇治町にて）

アインシュタイン博士にお伴して

――博士の東京に於ける行動の全部――
――博士の言行を通しての人格――

稲垣守克

十一月十三日に上海に博士をお出迎へして、十七日に神戸につき十八日に上京して十九日に第一回の講演があつたまでのことは女性改造十二月號に書いて置いた。こゝには廿日から十二月一日までの間に博士のなされたこと、見られたこと其間に私の博士から受けた、印象とを書きたいと思ふ。

明治座から淺草へ

十九日の講演は午後の六時半頃終つて私どもは先生のお伴して、すき腹をかゝへてホテルに歸り早速食堂に這入つた。博士も中々お腹がすいてゐられた。食後博士はお部屋に這入るや否やすぐバイオリンを彈かれた。これが私が博士のバイオリンをきいた最初である。

廿日の日程は明治座見物。夕食が少々おくれたので、七時半頃行つたので一時間きり見る間がなかつた。博士には始めての芝居で何から何までめづらしい。觀客の全部も博士にとつては芝居であつた。芝居は金時が母から分れるところの幕であつた。其時の舞踊について博士は『日本のをどりは感情の表示又は物語りであつて西洋の意味のをどりではないやうである』と云はれてゐた。

明治座から淺草へ行つた。其晩は非常に寒い風が吹いてゐたものだから中店にも人は稀であつた。店の半分は閉ぢてゐた。時々行く人の下駄の音が石の道にカラ〳〵云ふのを博士は興がつてゐられた。暗い晩に觀音堂に御案内した、私どもは馬鹿だつたが、博士は暗い空に黒く現れてゐるお寺の屋根を

熱心に見られて喜ばれてゐる。電燈の光りが銀杏の木を照し、その銀杏の葉の殿堂の屋根に投じた影を私に示して其色彩の面白さを説明されてゐた。

淺草を去つて銀座に來た。人ッ子一人通つてゐない。千疋屋の二階で一寸休んだ。もう大分おそい。奥さんにしかられるのを博士は心配してゐる。山本さんが果物をお土産に買つたが持つてお歸りになるかと云へば「博士はどうかそんな出費はして下さるな」と云うて再三斷つたがとう〳〵「それでは妻にしかられない爲めに持つて行きませう」と云つて果物の籠を持ち歸ることゝなつた。

ホテルに歸つてお部屋をあけた。奥さんは立つてゐた。博士はその籠を前に出してたゞ〳〵と後へ下つて小學校の生徒が先生にしかられまいとしてお世辭をつかふ時のやうな顔をして見せた。奥さんもしかれない。私どもは博士の無邪氣な戯れに限りない親しみを感じた。

觀菊の御宴（廿一日）

――フロックコートの件――

觀菊の御宴に招かれたはよいが、フロックコートの一件で昨日から今日にかけて私の耳へ受話器が何十回となく接近する。博士は可なり大きい。知り合ひの日本人のフロックでは間に合はない。モーニングでよいと云ふ御許可は中々得られない。シルクハットは山本さんが其昔十三年前買つたもの、十三年間隠居してゐたものを博士が御使用するとなつた。但し小さすぎるので只手に持つてゐるのみ。

其間にフロックも或外人より借り受けることゝなり、觀菊の御宴も事終る。

博士夫妻は非常に疲れて歸つて來られた。新聞記者諸君は博士の感想をと要求されてゐたが私は畏れ多きことゝて中傳へず……。

增上寺

――日本食と百姓家――

十一月廿二日、朝十時半改造社訪問。ア博歡迎の旗を立てたる改造社の前に社員數十名集つて博士を迎へた。社員は喜びに泣いた。博士は感激されてゐる。

社を辭して博士は增上寺見物。丁度坊さん達の朝食のところ、數十の僧が味噌汁を吸ふところを博士は喜んで見てゐられた。

建築を好む博士にとつては增上寺の見物は何よりの慰めで

あつた。博士はいつも表面的に澤山見るよりも少しの物をよく見たいと云はれてゐた。その爲め此日も吾々の豫定の見物の大部分を捨てゝ増上寺に時間の多くを費さなければならなかつた。

寺を去つて芝公園をぬけて、目黒の山本社長の家に行つた。山本さんは博士の爲めに日本の家の全部を説明された。博士の觀察によれば『日本の家は家具が少ないから掃除が樂である。生活を容易にし、簡單にするのに都合よく出來てゐる』さうであるが私どもには多くの不便の點が見える。博士には日本の家が美的であり且つやさし味のあるところが如何にもよくてたまらぬらしい。

山本夫妻の手料理で博士は牛肉のすきやきをうまがつて食べた。奥さんは砂糖を入れて煮るのを好まない。博士は握りずしの各種を食べられた。博士は食物でさへも研究的である。少しもたべず嫌ひをしない。さしみのすし、のりまきのすし等は西洋人には中々食べないが博士はのこらず試みられた。

山本社長の家を辭して、近所の百姓家を見た。それから細民の家の裏に廻つて臺所や便所までのぞいた。細民でさへ清潔であるのに博士は驚かれてゐた。

日本の新聞

二十三日の午餐に改造社は東都の新聞記者を招待した。博士は新聞記者の質問に答へられて日本に關する印象を話された。博士には日本のことが一から十まで氣に入つてゐる。博士はすべてを詩的に觀察される。日本の家、樹木、人間、箸、器具、すべてが日本を表象するもの、やさしいもの、可愛いもの、美術的のものである。博士の心を痛めるものは只一つ人力車のみである。そのことも此日博士は記者諸君に話した。吾々日本人も全くさう感じてゐる。どうにかして人力車のやうなものが必要でない世の中にしたい。金さへ出せば人に車をひかして自分が樂に乘つてゐられるといふ氣もちの惡い世の中を改善したい。此考は外人のみならず誰でも少し人情あるもの〻當然の考である。然るに翌日博士の奥さんが一寸獨逸大使館を訪問したら館員が『一寸奥さん、重大な事件が……』と云つて奥さんを別室に招いて『昨日博士は人力車についてかう〱云つたさうだが、どうかお氣をおつけ下さい、間違ひがないやうに』と注意した。奥さんは『良人は多分獨逸官憲から思想上の壓迫を受けることを賛成しますまい』と答へられた。博士はこれを聞いて笑つてゐられた。

博士は新聞記者諸君に對し『日本の新聞は個人の私生活上の私事に干渉するさうだが、その爲め個人に迷惑をかけることあるでせう』と云はれた。或記者は答へて『日本では社會

の制裁が弱いから新聞が代つて制裁するのである」と云はれた。

銀ぶら——天ぷら

廿四日の朝、私は博士を連れ出して「銀ぶら」した。途中で知つてゐる人に殆んど會はなかつた。小僧などが「アインシユタイン」と云つて行くのもあつたが、ともかく「お微行」が成功した。歸りには電車に乗つた。魚がし歸りのさかな屋が二人臭かつたが、博士は一寸も臭くないと云はれた。藝者が二人乗つてゐた。博士には素人と區別が出來ない。私は眼つきや着物で區別することを説明してあげたが、此點では博士の了解力は中々にぶかつた。但し博士曰く「かゝる種類の女を標準にして其國民がわかる。日本の藝者は非常に嫌遜な態度で上品ぢやないか。歐洲のに比較して大なる差がある。日本國民の上品で、ゆかしいことが此一事で知れる」と。

お晝は天ぷらをたべた。天金の廣間の隅に陣取つて博士は巧にお箸を使つた。蝦の天ぷらを博士は二つ平げた。それから御飯を二杯。

日本畫と日本の庭

天ぷらで滿腹に成た博士は或立派な日本のお家に案内された。御主人は御自慢の古畫を後から〳〵と見せて下さつた。博士は日本畫は音樂に次いで博士の心を惹くものであつた。博士は山水、佛畫を好んで見られたが、浮世繪には餘り感心されなかつた。日本人は骨董を好む。年月さへ古ければ之を尊ぶ風がある。博士は藝術的價値のものだけを好む。石のかけらが何千年古いものでも博士は一寸も感心しない。

繪畫を拜見して博士はお庭を拜見した。日本人の吾々でさへ一生の中に見ることの出來ぬやうな美しい日本の庭であつた。庭の中の茶室の門が小さい入口なので博士はくゞる時に門の板を少しばかり破つてしまつたので大いに恐縮されてゐた。

所有と藝術

東京の眞ん中に廣大なる庭園を有し、さながら山間のやうなのどかな天地を作り、藝術的にも立派な日本の家を作り、氣持ちのよい生活をすること。數百萬の東京人の中の極く少數の人間のみあの恐ろしい程の特權を有してゐる。所有は權利とも云ふ、又「所有な盜みなり」と云ふ人もある。何れが正當だか、各人の考へやうによるだらう。何はさて置き、ともかくも美術品がよく保存されることは美術愛好家から觀れば結構なことである。其意味に於て博士も「國家としても手が

行きとゞくまいから、あのやうな人々が力を盡して美術を集めて保存しておくのは、今の世としてはよいことだらう」と云はれてゐた。

原始的生活を好む博士

博士は贅澤を憎む。すべて簡單のもの質素のものを好む。博士は日本の家にも住へると云ふ。日本の旅館でも差支ないと云ふ。それは決して表面的ではない。私はそれが博士の心からのあこがれであることを信じてゐる。博士は日本の金持ちの家を見て藝術的には稱贊するが、博士の眞に親しみを感じるのは簡單な日本家である。

博士の洋服、シヤツ、髪、

東京の滯在中博士は毎日同じモーニングを着てゐた。歐洲人に似合はぬ位洋服のちりを拂はない。私どもが時々ブラシをかけてあげないと博士の服の襟には白くちりが積んでゐる

博士はワイシヤツを中々代へない。きたないのが好きなわけではないが、少しも氣がつかない。それ程身なりに無頓着である。招待會に行く時でもカフスが黒くなつて飛び出てゐることが毎々ある。

博士の頭髪はめづらしいちゞれをなしてゐる。理髪屋に行く必要がない。獨逸より日本への旅の間に、北野丸船中で奥さんが一度はさみで切つてあげたゞけである。

隨分儉約になる。其髪を私の妻は奥さんから頂戴して持つてゐる。千年も經つと大變な寶になるわけである。

第二回講演

二十四日午後五時半より、青年會館は滿員であつた。切符を買つて入場し得ざりし人に對し山本社長は仙臺までの旅費を支辨することを宣言された。

博士は例の如く、やさしい、崇高な態度で講義を始めた。聽衆の中には東京の知識階級の大部分を網羅してゐるやうであつた。中途にして一時間程休憩して、此間に晩食を濟ませ、又講演を繼續した。

特別講演

專門の學者ばかり約百名に對し二十五日より十二月一日まで(中二十六日休み)毎日二時より四時或は五時まで特別講義が帝大理科の教室で行はれた。

博士の希望による樣に優れた學生に聽講の機會が與へられた。

博士は毎日愉快な顏を以て歸つて來られた。講義は博士に

とつては一つの慰めである。博士は満足されてゐた。

帝大學生の歡迎

特別講義開始の日、三時半より法科の大講堂で帝大學生全部の歡迎會が開かれた。學生は講堂にあふれた。博士は感激して涙ぐまれた。

熱狂する學生に押されて博士は自動車の中へ這入つた。自動車が動き出しても熱する學生は車の左右に崩れかゝつて博士夫妻に握手を求めてゐた。それ故に奥さんの黒い絹の手袋は四つばかり穴があいてしまつた。私はどうしても博士の自動車へ近づけなかつたから他の自動車で博士のあとを追つた。其爲め歸りに市村座に行く豫定であつたのに一先づホテルの玄關まで來てそれから引き返して市村に向つた。

市村座見物

今日は二度目の芝居である。折角招待されたのだが時間が少ない爲めゆる〱見てゐられない。『やっこ』『かち〱山』『とんびにあぶらげ』のやさしいをどりがあつた。博士はいつものやうに研究的に熱心に見てゐられた。名優尾上菊五郎氏が私のそばで說明してゐてくれた。幕間に菊五郎氏の室までも案内された。博士にはすべてが研究でありすべてが詩であつた。博士には清元がお氣に入つた。そのやさしい氣分に引き込まれてゐるやうであつた。

奥さんは餘り面白がらず、特に音樂がとても聞いてゐられないので引きあげやうと云はれる。ともかく自動車に乘ると云はれるので、『それでは自動車の中で待つておいでなさい』と云つて博士は私のうでを引いて席へ歸られた。五分と云ふ約束が約二十分になり、奥さんは私の妻と共に二十分間自動車の中で待つてゐられた。時間がないので殘念ながら切りあげて自動車の中に歸つた。博士は奥さんの顏を見ながら私に『女はしやべることが澤山あるから……』と云つて笑はれた。

藝者のをどり

をしいところで市村座を去つて、平のやに來た。東京の新聞記者聯合の博士招待會である。約三十名の記者諸君に圍まれて博士は床の前に席をとつた。座布團七八枚持つて來て博士夫妻の腰の下に入れて日本座敷椅子の代用とした。幹事の挨拶、博士の答辭があつて『ゲイシャ』さんのをどりとなる。袖の長いきれいなきものを着た十四五才の子が二人で舞つた博士夫妻の喜び一方ならず。

平のやからホテルは近いので社長と私どもはお伴して歩いて歸つた。奥さんは日本食は大よわりで、とてもたべられな

かつた。お腹が非常にすいてゐる。どこかに食べに行かうかと思つたが十一時近くだつたのでそのまゝホテルにお送りした。

博士は日本式の宴會が非常になつかし味があつて、四角ばらないのに感心されてゐた。歐洲に行つてゐる日本人は學者か官吏か商人か軍人であるから、皆研究しよう勉強しようとして町をあるき、人と接してゐるので日本人は非常に眞面目すぎる國民であると位に思はれてゐたが案外元氣で、さわぐこともやるので意外のやうに感じられた。それと同時に日本人を一日〱とよく知つて行くことを喜んでゐられた。

美術館

二十六日は集古館に案内された。博士には古叢、奥さんには佛像が最も氣に入つた。こゝでも時間がないので急行列車のやうに通り過ぎざるを得なかつた。博士は一日に多くを見るよりも「少なく、よく見る方が」と、いつも御希望である。吾々のプログラムはいつも博士を强制する形だつた。それでも博士は一度も不快な顏をせられたことなく、何でも聽き入れて下さる。

大倉家の立派な日本家、その御自慢の庭園を拜見した。博士は驚嘆するばかりであつた。集古館は財團法人である。「佛像一つ位は寄附しないで自分のものにとつて置きになつてもよかつたらうに」と、云はれて奥さんは日本人がその美術品全部を公のものとしたことを不思議がられてゐる程感心された。

寶生會

急行自動車は奥さんをホテルに殘して神田の寶生會へ飛んだ。道路修繕なので遠方で止つた。博士と私は雨のぼつ〱降る中をぐしや〱の東京の道路を四五丁歩いた。

寶生會は博士の爲めに特に羽衣を演じてくれた。能に於ては「演ずる人が極く少し動くこと、靜かに動くことによつて大なる効果が生ずる」のを博士は驚かれ、稱賛された。「私も少しの間あのやうな靜かな生活をして見たい」と云はれた。博士にはすべてが他の世界の生活のやうに思はれた。音樂も面白い、めづらしいと云ふ意味に於てお氣に入つた。拍子が上手なのに感心されたが、時々急に高い笛が鳴ることや、すべての曲が全く耳に馴れない異樣な感じを受けられてゐた。

商大の歡迎

博士は毎日（日曜以外）特別講演をされなければならぬのに、其他に毎日四つ五つのプログラムがある。改造社に來た

招待は大部分お断りせざるを得なつたが其中止むを得ざるもののゝみ承諾して見たが、それでも博士のおからだは一つで、年中牛馬の如く――失禮の言葉だが其位私どもは濟まないと思つてゐる――お使ひ立て、御案内したものだからもうへとへとになつておゐでだ。此上とても御無理は申上げられない然るに學校關係等は先方で準備をしてゐるから先方の都合も考へねばならぬ。玆に於て私どもは板ばさみになり、商大の歡迎を始めとして、早稻田、教育會、學生聯合等の各招待會にお連れ申すのに非常の心配をした。

商大では歡迎の辭について博士は『若き日本の人々よ』と親切なる答辭をされた。學生は拍手を以て迎へ、熱誠なる萬歳を以て送つた。博士は心から滿足されてゐた。

改造社員の夕食

社に働いてゐる人々三四十名集つて、新橋ステーションの食堂で、夕食に博士をお招きした。今日は内々の會である。博士もくつろいで色々と話をされた。食卓で『あの一番若い子供は東京驛に博士をお迎へした時一人社に殘されて、留守番を仰せ付かつた子であると申上げたら』博士は指ざして『あの子か』と云はれ、すぐ立つて席の末にゐたその十二三歳の社員のところに行き握手された。一同は博士のやさしいお心に感激した。

食後一同は博士を取りまいて快談にふけつた、博士は子供のやうな笑を浮べながら『皆さん、山本社長が伯林からその一番若い雇人を東京へ呼び寄せました。社長は伯林にゐる此雇人は極く若い小僧と思つてゐました。それを今回用事あつて日本へ呼びました。來たところを見たらもうすッかりおぢいさんでした。』

お茶

日本の行儀作法に對して『お茶』が大なる役目を有してゐることを博士に申上げて置いた。博士はすでに船中でも『日本へ行つたら是非一度お茶の會を見たい』と云はれてゐる。十一月二十九日朝、赤坂の高橋家の門前に自動車が止る。丁度ホテルを出ようとする時に來た訪問客があつたので止むを得ず自動車に同乘してその英人も私どもとお茶の客となる。今日も時間がないので急行のお茶の會。御主人高橋さんがすべてを實際にお示しになり、御説明下さる。私は一々博士にお話する。一擧手一投足に意味があり味があるので博士は非常に喜ばれる。うす闇い茶室の中に大きなからだの博士が洋服で日本式に坐つてゐる。博士は高橋氏の手、腰、膝――炭火、やかん、茶碗――をぢッと見つめて感心してゐられた。

奥さんは今日の偶然の同行者英人とお話をしてゐなさる。博士は私に向つて曰く『女はどうも此茶の儀式の中に在る詩を了解しないと見えますね。』

早稻田

一萬の學生が待つてゐる。昨日になつて『行けるかどうか』不明になつたので早稻田及私どもの心配は大したものだつた幸に萬事都合よく行つた。お茶の客を乘せた自動車は早稻田へと進む。拍手と萬歲に送られて博士は學生の大群の間を通る。控室から會場たる校庭に進む時、博士の次ぎに奧さん、其後に私が行つた。奧さんまでは無事通過したが私は遂に大群の中に挾まれた。身動きもならぬ。死ぬる生きるの騷ぎだ。向ふの方では博士の答辭が始まつてゐるやうだが、私の近所は地獄のやうだ。倒れゝば人につぶされる。死力を盡してきりぬけて後に出た。服のボタンが一つなくなつてゐた。

自動車は一萬の學生の垣を破つて出た。早稻田の森には勇敢なる校歌がひゞいてゐた。

教育の團體の歡迎

――博士女學生の群におしつぶさる――

特別講演を終へた時、博士に又御無理をお願ひする。自動車はお茶の水女子高等師範へ向つた。都下の教育者の各團體が、聯合してお迎へする。博士は澤柳博士の歡迎の辭に答へて、

『若し私が日本語を了解し得たならば、定めし今の歡迎の辭に對して恥ぢなければなるまい。

幸にして日本語を解せぬ爲め、はづかしい顏もしないで皆樣にお目に懸る。日本の文化が獨特の發達をしてゐるのを見て喜んだ。特に繪と建築と音樂とが私の心を惹きつけた。又日本人の人と人との間の關係卽ち人情は西歐の人も學ばなければならないよい點が澤山ある』と云つて日本をほめ日本人の好意を感謝した。

會場を出たら、自動車に行く途中、女子高師の女學生が押し寄せた。博士は女學生の間に這入つて身動きもならぬ。キアー／＼、キユー／＼云ふ聲で火事場のやうな騷ぎだ。博士の兩方の手は女學生の大群の爲めに無理やりに握手に忙殺されてゐる。やうやく自動車の中に這入る。窓ガラスをたゝいて又キャー／＼云ふ。博士は大喜び？『生れて始めてです、こんな大勢の若い婦人に大騷ぎされたのは』と云はれて窓の兩側を見て『中々別嬪もゐますよ』と云つて笑はれた。自動車は神田のあかるい道を走つた。『いや今日は面白かつた』と云つてあの騷ぎを思ひ出されてゐた。

歸りが少々おくれたので奥さんは『どうかしたかと思ひました』と云つた。博士はにや〳〵笑つて『稻垣さんにきいて御覧、面白かつたよ』と云つて私に說明させる。博士は奥さんが大して面白がらないので『いや、子供どころか、十七八から二十一二の年頃の娘さんがそんなに大勢でさ――』と云つて笑はれた。

雅樂

先日博士に或人が昔の支那の音樂をきゝたいかと云つた。音樂となれば何でもきゝたい博士は出來ることなら是非と云ふので話が早速まとまつて宮內省の音樂部で特に博士の爲めに雅樂を奏してくれた。約十六人の人が笛、太皷、しやう、しちりき、びわ、琴、皷それに和する歌を奏じ出した。奥ゆかしい氣分に博士は恍惚としてゐられた。先日の近代の日本音樂よりもお氣に入つたやうだつた。終つて博士は樂器を一一手にとつて說明を聞かれた。

學生聯合の歡迎

特別講演で疲れた博士を又々招待會へお連れしなければならぬ。學生事局研究會が主催で東都十六の大學專門校から集るもの千數百上野精養軒の廣間は若い人々を以て埋められた。二人の學生及女學生の歡迎の辭についで博士は答辭を述べられた。

『……何か科學上の發見をすることは偶然と云つてもよいかも知れない。多くの若い人々の中には確にその能力はあつても色々故障の爲めに遂に達せられない。私の如きものも偶然の一人である。』と自己の偉業に對し謙遜な言譯をなされ、『科學の進步は國際的協力を必要とする、どうか日本の青年も人類愛の基礎に立つて、世界の科學の進步に貢献せられんことを希望す』とて將來の國際的協力、國際的組織の必要に關し青年によい注意を與へられた。

博士のバイオリン

十二月一日の晩は改造社の招待會、集るもの學者及社友百數十名、帝國ホテルの大廣間に歷史的意義ある會合が開かれた。食事終つた頃山本社長の挨拶、其他學者の挨拶あつて、博士は立つて答辭を述べられた。特に『日本の青年は必ず將來國際的組織、協力の上に大なる力を與へるだらう。それを希望し、期待する。』と結ばれた。

それから別室に移つた。どうかして博士のバイオリンを伺ひたいと云ふ希望が出て、博士にお願ひしたら、直ぐ承諾された。

忽ちバンオリンが運ばれた。一同は緊張して此大偉人のバイオリンに注視した。

百數十人の人々は或は近くに、或は遠くに。約一時間博士の手の動きを見た。博士は想像したよりも名人である。眞面目なる、一生懸命なる其態度に、さへたる音とは一同に不思議な感動を與へた。

博士の人格に接し、博士自身奏する糸の音に一同は醉うてほんやりとして散會した。

靴のひも

博士は日本式の家にあがる時急いで靴をぬぐ。『カバーの用意があるからぬがずに』と申上げてもどうしてもぬぐ。或時ひもがこんぐらかつてしまつた。下女下男が澤山見てゐて『よろしいからどうぞおあがり下さい』と云つても博士はどうしても自分で解かうとして止まない。私が博士の手から靴をとつて解いてあげやうとしてもどうしても自分でするとて聽かない。靴したのまゝたゝきに立つて手をどろだらけにして靴のひものこんがらかりを解かれた。

カバー

博士は靴の『カバー』も他人にさせないで、御自身する。日本の道路が悪くて靴がどろだらけになつてゐるから手がよごれる。私は博士の手からカバーをとつて、靴にかけてあげようとしても中々聽き入れない。

握手

博士と私は握手する時びく／＼する程、力を入れて心から強く握られる。私の手はしばらくしびれる程痛む。それほど情がもつてゐる。

脱帽

博士は道を行く時、汽車の中にゐる時、坐してゐる時、其おつれの一人に向つて挨拶をする人がある時、その時は、その人が子供であらうと子供であらうと脱帽してきつと一緒に禮をして下さる。ホテルから一寸出る時はボーイにでも、下女にでも必ず心のこもつた顔をして帽をとられる。

食物

博士は何でも召しあがる。食物は丁度そこにあるものを食べるに限る。文句を云ふものでは決してないと云はれてゐる。

又餘分にたべるものでもないと考へられてゐる。何を好み、何を好まぬと云ふものがない。

但し衞生上コーヒーを餘りのまず、お茶はうすくしてのむ。酒は一すも召し上らず。これは主義ではなく「のみたいと思つたことがないから」である。但し煙草は大のお好み。

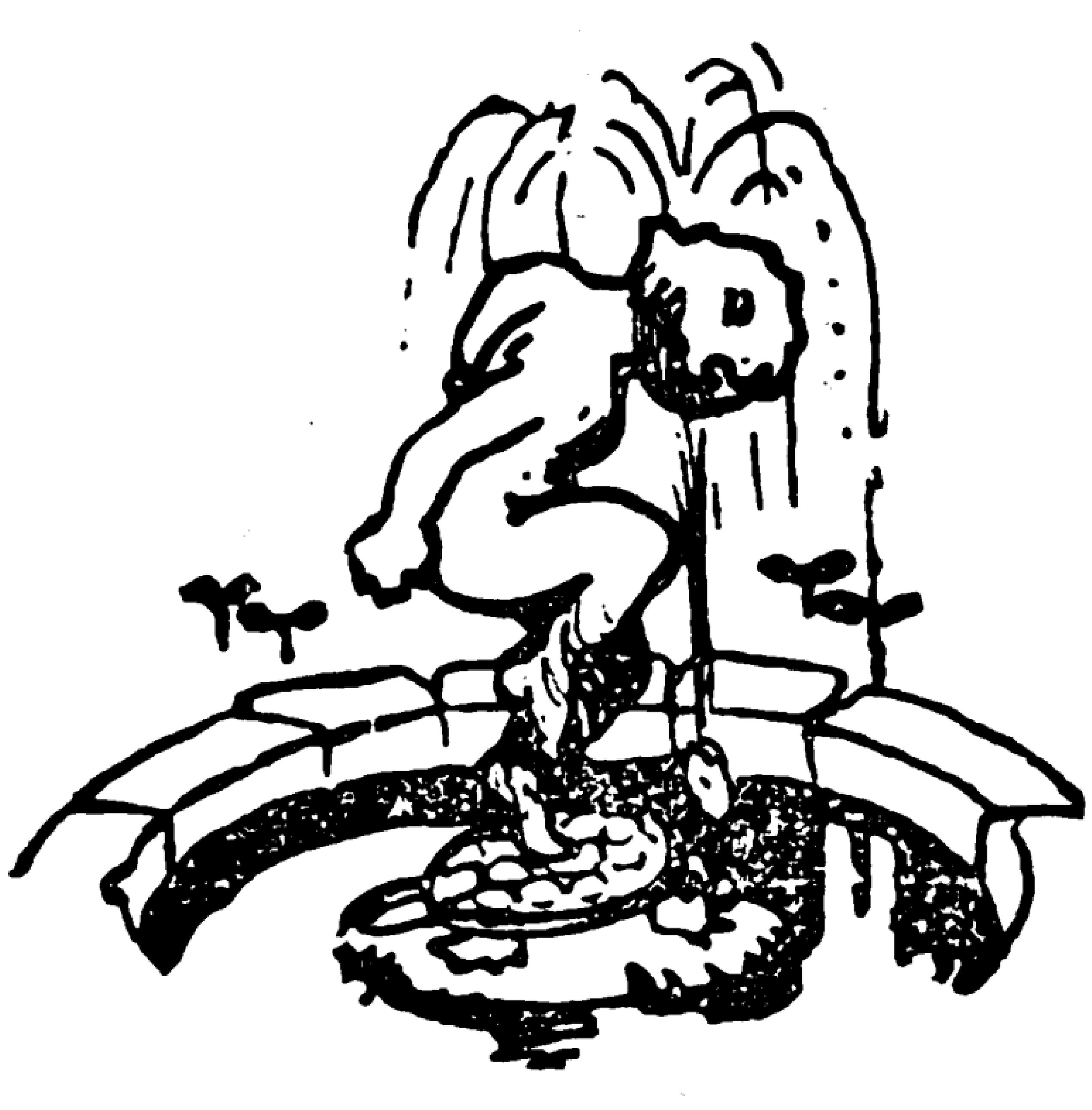
贈物は刑罰

方々から色々と贈り物が來た。取らなければ先方に氣の毒だ。受ければ心苦しい。博士は客の去つたあとで私に「これが本當の刑罰です」と云はれた。

地方に於けるプログラム

十二月三日仙臺にて講演、松島見物、四日五日は日光、六日東京、其晩箱根行き、七日は箱根、八日は名古屋の講演、十日は京都講演、十一日は大阪講演、十三日は神戸講演、それから奈良、京都を見物し、私と二人で方々登山する。それから一週間ばかり人間世界を離れたところで靜養される。此場所は發表しないでおく必要がある。それから福岡で講演されて十二月廿六日門司出帆榛名丸でシンガポールに向はれる。それからジャバ、パレスチナ、スペインを經て伯林へ。

（十二月三日仙臺にて記）





ソウェート・ロシヤの詩壇

昇曙夢

革命後に於けるロシヤ文壇は殆んど詩の獨占舞臺と言つてもいゝ位ゐ詩が盛んに行はれて居る。ソウェート政府の宣傳書類を除く外、凡ての出版事業が殆んど中絶した中にあつて、獨り詩集だけは驚くほど無數に出た。ソウェート・ロシヤに於て出版された純文藝に關する書籍の大半は詩集であると言はれて居るくらゐである。それにはいろ〳〵な原因を數へることが出來る。第一に革命時代の刻々に變動して行く刹那の印象や氣分や經驗を表現するには詩が最も適當な形式であるといふこと、次に經濟的關係に於て詩は小説戲曲などよりも安價に、それ程手數を要しないで、比較的僅かな資本と勞力とで發表が出來るといふこと、第三に他の藝術と比べて詩ならばそれ程深い素養のない勞働階級の人にも作り易いといふこと、それから詩は國民の精神的運動に於て國民の無意識的必然性が第一に自己を表現し自己を意識する所の言葉であるといふこと、最後に最も主なる原因として、恐怖と暗黒と悲劇とに充ちたロシヤ革命は多くの詩人達に是迄に無い鮮やかな力強い題材を與へたといふこと――是等が最近ロシヤ詩壇の隆盛を來した直接の原因である。

斯くして發表された多くの詩には種々樣々な感情と氣分と詩的色彩が反映されてゐる。その中には眞の天才と認めらるべき大きな精神的緊張を示したものもあれば、拙劣見るに堪へざる蕪雜なものもある。當面の新時代に對する歡喜の祝福、來るべき大なる幸福に對する信仰、淋しき失望、憤激、血の渇望、冒瀆、忌はしき野獸性の叫び、新生活に對する悲觀、祖國に對する愛情、熱烈なる期待と冷靜なる忍從――凡て是等の感情が革命時代のロシヤ抒情詩の内容を成して居る。是等の内容を一々作品に照して詳説することは更に他の機會を待つことゝして、茲にはソウェート詩壇の根本傾向と一般性質とを大體に亙つて極めて輪廓的に述べておく。

一概にソウェート・ロシヤの詩壇と言つても、その中にはいろ〱な傾向が現はれて居る。謂ふ所のプロレタリヤ詩人に就いては後に說くことゝして、先づ第一に擧ぐべきは、マヤコーフスキイ、マリエンゴフ、セルセニエーウイチ、フレブニコフ等によつて代表されて居る未來主義（フユーチユリズム）である。未來主義がロシヤ文壇に現はれたのは帝政時代の末であるが、その當時は惡化せる都會デカダンの藝術として、寧ろ藝術の破壞者として、文壇の背後に蹴落され、誰も相手にする者が無かつたのである。ところがボリシエウイキイの十月革命後急に未來派詩人が頭を擡げ出して勞農政府の御用詩人に祭り込まれ、一擧にして革命文壇の支配者となるに至つた。斯うした奇緣が誤解から來て居ることは言ふまでもない。つまり未來派なるものが藝術の革命家であるかの如く、若くは舊美學說や陳腐な藝術的定說の破壞者であるかの如く思はれてゐたところから、舊制度の破壞者たるボリシエウイキイは彼等を自己の宣傳に利用すべく兄弟分として歡迎したのである。渡りに舟の未來派の得意想ふべしである。マヤコーフスキイ以下のイマジニスト等の不可解な諧語や、玩具のブリッキ喇叭を逆さにしたやうなタトリンの繪畫や、立體派の無意味な斑點などが眞の革命藝術であるかの如く考へられたのは此の頃のことである。けれども未來派の詩はロシヤ革命の最も粗々しい瞬間を反映したに過ぎない。時として彼等の革命描寫は革命の仇敵によつて考へ出された擬狂詩（パローデイ）のやうなものである。彼等はその荒廢した心と、自己の精神的滅亡の意識と、それより生ずる無限の哀愁とを、强ひてその愚劣なるお道化た醉興によつて紛らさうとして未來主義の奇術を弄したに過ぎない。是れでは如何にボリシエウイキイと雖も我慢出來る筈がない。迷ひは何時か醒めなければならぬ。果然兩者の提携は破れた。時恰も勞農詩人の間に堅實なる寫實主義に立脚した客觀的藝術を要求する新らしい藝術運動が起るに際して、桂冠詩人としての特權は解頽せる未來派から剝奪されて此の新らしい一派の上に移された。だから未來主義の得意時代は革命後僅かに一兩年の間に過ぎなかつた。その後はボリシエウイキイの御覺え目出度からず、文壇からだん〱影が薄くなつて、今では藝術界の最も野蠻な反動派として、プロレタリヤ詩人と仇敵の關係に立つて居る。考へて見ると、是れが當然の歸結でなければならぬ。本來未來主義は表現主義と同く一切の物を美術家や詩人の主觀的經驗に移入しつゝ、外的客觀世界を無視して、底知れぬ主觀主義と個人主義とを藝術方面に表現するのである。だから未來主義は個人主義的無政府主義の藝術たることは出來るかも知れないが、決して集中主義（コルレクチウイズム）の藝術ではない。事實未來主義の如く、社會主義や共產主義に反對な藝術は他に無いのである。然るにロシヤ共產主義者が、たとへ一時でも、未來主義に心醉したといふことは驚くべき誤解であつたと言はなければならぬ。

ソウエート・ロシヤの詩壇に於ける第二の傾向は田園的民族的傾向である。この派の代表者として最も有名な詩人にはクリュエフとエシェニンとがある。この派はロシヤの農民生活と基督教々義とから取られた藝術的形象を描かんとするもので、その原始的な點に於て、その神祕的な點に於て全くロシヤ獨特の産物である。けれどもこの派の詩人に於て基督教は變質された異端的性質を帶びて居る「手風琴の醉つぱらつた音に合せて、私は死を踊らしめる。」と、斯うエシェニンが歌つて居る時、我々の頭に直ぐロシヤ岐教徒の熱狂が浮ぶ。手風琴の醉狂な伴奏に合せた死の舞踏――是れがこの一派の詩である。この新しいスキフ人の革命的熱狂は古代ロシヤの酩酊せる托鉢僧のワッカ祭の變形に過ぎない。是等のスキフの詩人も未來派のイマジニストと同じく聖物冒瀆者ではあるが然し彼等の冒瀆は矢張り異端岐教徒的性質を帶びて居る。この岐教徒的醉興と農民風の神祕的革命主義とは遠い時代と鬱蒼たる密林の中から傳はつた古の原始的精神から發したもので、その聲にはまだ開けない野蠻人の吼聲が響いて居るとはいへ、その作品は近代的詩作の最後の要求によつて綴られて居る。勿論農民のロシヤは無限の世界である。その世界には他に多くの傾向や氣分が彷徨うて居る。革命的異端的希求は單にその傾向の一つに過ぎない。そしてそれは恐らくローマ、ゼルマンの西歐より移入された都會文明に對して、世界的共産主義革命に向つたロシヤ革命の初期に最も適當した傾向であつたに違ひない。けれどもこの派の藝術的將來は、その國民精神が見透しのつかない神祕の世界であるが如く、矢張り大なる謎である。

第三は革命の意義をロシヤ歴史の背景に於て解釋しようとする傾向である。これには帝政時代から既に詩壇の代表者であつた第一流の詩人が多く屬して居る。昨年死んだブロークを初め、ベールイ、バリツルシャイチス、ウォロシン、イヴァーノフ等がその主なるものである。ロシヤ革命を歌つた彼等の詩を通じて認めらるゝ特徴は、革命に對するその態度が曖昧なことである。彼等は革命をロシヤが或る歴史的目的のために通過しなければならない、十字架のやうに觀じて居るが、その内容が非常に曖昧なところから、革命に對する關係に於て革命の非難とも辯護とも、讃美とも呪咀とも二樣に取れる。是れは恐らくボリシェウィキイの壓迫に對する一種の思惑から明白にその意志を表明することの出來なかつた事情があつたからでもあらうが、一つは革命其物の結果が未知數であつたからでもあらう。例へばブロークの『十二』と、ベールイの『基督は復活し給へり』とは何れも最近の革命を取扱つた有名な詩であるが、兩詩人の革命に對する態度は如何にも曖昧である、ブロークの『十二』は夜間巡察の折罪業を行つて居る、十二人の惡漢を描いたものであるが、革命は茲にその兩面を出して居る。醜汚なる犯罪的な現實と、その理

實の血なまぐさい懐に生れつゝ而も現實とは似もつかぬ或る新しい清明の生活と、一體ブロークは革命を讃美したのやら呪詛したのやら分らない。

ベールィの詩に於てはブロークの罪と淺薄との代りに、宇宙の神秘と底知れぬ永久の崩落とに久しくおびやかされて何所にも平安と靜寂とを見出すことの出來ない心の苦悶とヒステリックな心持とが出て居る。けれどもその内容は同じく革命の非難とも辯護とも兩樣に取れる。勿論詩人がその作を『復活』と名けて居る所から見れば革命を讃美したやうにも思はれるが、その内容から言へば基督の磔刑とロシヤのゴルゴタと卽ち二つの磔刑（十字架）を描いたものである。そして復活卽ち罪なき者の苦痛と死とによつてロシヤを罪の支配から解放することに就いては、ブロークの詩に於ける基督のそれと同じく、何時か將來實現するだらうと言つて居るだけに過ぎない。ロシヤが復活しない限りロシヤ革命はロシヤ自身の磔刑でなければならぬ。

バリツルシャイチスの革命に對する態度は最初からロシヤが或る必要な歷史的目的のために通過しなければならない苦しい十字架の道に對するやうな心持であつた。また事實ロシヤはバリツルシャイチスの觀る如く、世界的歷史的攝理によつて彼女に負はされた十字架を擔つて居る。一九一八年に發表した『悲哀の戒律』は、新生活のために荊棘の冠を從順に受けんとするその忍從の態度に於て、バリツルシャイチスが革命の意義を如何に解して居るかを語るものである。

ウォロシンは元來何等の拘束にも縛られない不羈獨立の詩人であるが、革命にも彼は餘り熱中しなかつた。彼は祖國の革命を、度々死者の骸骨を以て埋められたロシヤ史の背景に於て觀察して居る。卽ちロシヤが過去に於て屢々繰返した不安な歷史を背景として、最近に革命に就いても古代の傳說的な力強い言葉を以て多くの聰明なことを言つたのである。

抒情詩の方面に於て最も感動すべき作品を見せたのはイヴアーノフである。彼が一九二〇年の作に屬する『冬のソネット』は現代のロシヤ詩壇に於て稀に見る所の最も悲痛な詩の一つと言はれて居る。彼が從來の博識と技巧とを脫して、單純な新らしい形式のうちに、今日ロシヤ詩人の精神が如何なる惡夢と恐怖とに充たされて居るかを示したものである。『冬のソネット』――それは淋しい夜である、凍えるやうな大寒である、爐邊に薪を抱かんとする者の配慮である、原始的な穴居の生活である、暗夜に於ける死の幻影である。

以上の傾向はソウエート・ロシヤの詩壇に於ける傍系であつて、必ずしもその中心傾向ではない。勞農詩壇の中堅は何と言つてもプロレタリヤ詩人である。然しそれは彼等が非凡な天才を發揮したとか又は多くの藝術品を出したからだといふ譯ではない。この點に於ては寧ろ彼等はその技巧から言つても才能から言つても最後の地位を占むべきものである。玆に彼等を勞農詩壇の中堅に數へるのは、彼等が文壇に於ける

全く新らしい現象であり、また或る程度までは革命精神の表現者であるからである。少くとも彼等が革命の一面卽ち都會勞働者を代表して居ることは疑ひを容れない。

プロレタリヤ詩人は最近の革命と共に現はれたばかりであるが、今では既にモスクヴア同盟に統一せられ、更に全露プロレタリヤ詩人同盟を組織するほどの勢ひに達して居る。

今日詩壇に活動して居るプロレタリヤ詩人の中にはゲラシモフ、アレクサンドロフスキイ、サモビイトニク（マシロフ）、キリイロフ、オブラドウイチ、ポレタエフ、ポモールスキイ、アールスキイ、サンニコフ等がある。何れも耳新らしい名前ばかりであるが、その中で最も注意を惹いて居るのはゲラシモフとアレクサンドロフスキイである。彼等は毎月幾種かの機關雜誌や創作集に作品を發表して居る。彼等は詩作の試みに於て互ひに共通點を持つて居る所から、彼等の間に個人的特質を識別することは困難である。

プロレタリヤ詩人の創作の藝術的價値は今の所甚だ疑問であるが、我等はその藝術的價値を問ふよりも先づその詩作のモチイブに注意しなければならぬ。彼等は第一に勞働革命と十月革命とを讃美して居る。是れは彼等に取つて最も自然な題目であり、また彼等の出所から言つても豫期されたことである。たゞこゝに注意すべきことは同じ十月革命を讃美する中にも、彼等が他の革命詩人と異つて、よく中庸を保ち、現實の意識を忘れなかつたことである。彼等には神祕的迷信もなければ、破壞の渴望もない。この革命は彼等の眼には勞働階級の自由解放の歴史的場面として、また社會的正義と合理的勞働との幸福なる生活の新紀元として映じて居る。

此の革命的プロレタリヤ藝術の特質に就いてはゲラシモフの抒情詩『十月』によつて判斷することが出來る。この詩はワレーリイ・ブリユソフの主幹する文務人民委員會文學局時報『フドーヂエストウエンノエ・スローウオ』に掲載されたものであるが、茲にはその中の最も特色的な數節を拔粹しておく。

一

黑い葬龕のやうな工場、
陰慘な勞働者の群、
煤んだ圓屋根からは
眼を蔽ふやうな黑煙。

消えた蠟燭のやうな煙突は
星の流れを遮り、
葬送の鐘の音は
柩のやうな鑄鐵の塊を打つ。

建物は鐵の牢獄、
土窖には剛力の死人、
鎔鑛爐は燃ゆる骨壺、
その中に勞働者の心臟の灰が入つてゐる。

彼はいつも夕暮の火の中に、

香爐の煙の中にゐる。
重たい荊棘からは
墓場の響きが聞える。

二

ところがこゝに石は開かれた、
鋼鐵の如き死人は蘇つた、
生命創造の焔は
凡ての心臓に觸れた。

射撃の閃光は
旋風のやうに怒氣を浴せた、
久しくあくがれた日のことを
旗は鳥は叫んでゐる。

ほこりがに○○を歌へよ、
脈搏を○○○に合せよ
苦痛は解けて
歡喜が讃美歌のやうに響く。

偉大なるクレムリから
我々は王冠を捥ぎ取つた、
彼所では鐘の音で
土地がねんねをさせられた。

彼所には我々の悲哀の殿堂がある、
彼所には髑髏の城壁がある、
彼所ではゲフシマネヤの杯で
精神が讃揚された。

五

十月は窓を叩いた、
雨の翼に春を濡らした、
けれど傾いた穀倉は祈つてゐる、
眼を伏せてゐると、パッと火が輝いた。

蓬々たる頭髪を摑んだ、
彼女の頭が搖れた、
彼は大聲で叫んだ
藁屋根よ、起きよ！

僧侶の誹謗はもうたくさんだ！
春が十月に花咲いた……
權威（ちから）ある明快な聲が
村の藁屋根を通して響く。

旦那の玄關口で、ヒステリィ女のやうに
泣き喚くのはもうたくさんだ！
心には太陽が躍つた、
涙ぐんだ顏にも。

雪堊の下の慟哭は
花のやうに生え出した、
我々は星の穀粒を
處女地に播かう。

農民の足跡が
薔薇のやう生え出すやうに、
我々は火の鎌で
雪の煙を刈り込まう。

晴やかな野原の彼方は
美しく、そして爽やかである、
菩提樹は新らしい木皮靴（ラーポチ）のやうに
雪に當つてサラ〳〵と鳴る。

七

雷のやうに湧返る製粉機で
憂愁（トスカ）は打碎かれた、
そして乳色の花粉のやうに
星の花瓣に擦合はされた。

歡喜が消え失せないやうに、
生ける眼の水銀が消え失せないやうに、
我々は太陽の脂肪を
我々の胸に注ぎ込まう。

機械の神經と筋肉とを
我々は光線で塗沫しよう、
起てよ、ロシヤ最初の
ソウェートの巨人よ！

八

工場の建物の
低い垣根の彼方に
我々は火の橇で
標語の飛沫の下を漕ぎ行かう。

進め、進め、輝やかしい
〇〇せる心の獨木舟よ、
〇い翼の波に
湧返る渦卷の中に。

照れよ、消ゆることなき
心の燈臺よ、
消え行く白髮の闇暗に
矢を射通しつゝ。

心と心とは合して
勝利の悦びに充ちてゐる、

そして勞働の波は
鐵のやうなリヅムを打つてゐる。

十一

煙突の脚は鎔鑛爐に凭たれ、
雨雲のちぢれ毛は肩から落ちた、
我々はタコだらけの黒い手から鐵鎖を取つて
太陽の如き暖爐に投げ込まう。

金色と群青の天なる
青い粘土を鎔解して、
灰色の雲の背を
我々は嵐の鞴で吹膨らまさう。

我々は灰色の世界から塵埃を捲き上げ、
教會の蠟燭の煙を吹拂つた、
○○は慧星の如く輝やくがいゝ、
電光の如き○○は響くがいゝ。

○○の靈は建設の靈である、
力強い創造の靈である。
地は燃えよ、建物は○○せよ、
心の焔が消えないやうに。

以上の引例によつても分る通り、この詩には特殊の詩美といふものが殆んど感じられない。詩形は他から假借したものであり、また内容に於ても人を動かすやうな熱情や感激が一向發露してゐない。この派の他の作品とて同じことで、今の所是以上の價値を持つてゐない。たゞ茲に注意すべきは、十月革命を讃美した是等のプロレタリヤ文學の中に何等の共產主義的要素が認められないことである。そこには血の渇望もなければ復讐の念もなく、また舊文化やインテリゲンチヤに對する階級的憎惡心すら極めて少なく、況んや一般的破壞を煽動して居るやうな點は殆んど見當らないのである。それよりもプロレタリヤ詩人達は自己の日々の勞働を歌つて居る場合若くは自己の新らしい力を意識しながら新たに芽生えつゝある自己の文化的價値を語つて居る場合に於て、ヨリ多く自己の使命を自覺して居る。またこの場合に於て彼等はヨリ多く眞實であり、ヨリ多く感激に富んで居る。從つてこの場合彼等は眞に自己の勞働と自己の工場とを愛し、プロレタリヤ勞働の歷史的意義を解し、新らしい勞働生活を期待しつゝある文化勞働者の詩作の典型ともいふべき作品を見せて居る。この關係に於て次に引用するゲラシモフの『我等』は最も特色的な作である。

我等は一切を獲得しよう、我等は一切を認識しよう。
深淵の底の底まで徹底しよう、
春の心が、金色の
花の五月に陶醉するやうに。

驕れる豪膽に適度は無い。

我等はヴァグネルであり、ウインチであり、チヽアンである。
我等は新しい博物館の建物に
モンブランのやうな圓屋根を蓋かう……

アンゼロの大理石の結晶體には
パルナスの驚異であつた一切のものがある、
それは河水のやうに我等に流れ込んだ
創造の力でないか？……

我等は蘭を育てた、
薔薇の搖籃をゆすぶつて、
キリストが愛を教へた時
ユダヤに居たのは我等ではないか？……

我等はパルフエノンの礎石を置いた、
巨大なるピラミッドの礎石をも、
我等は凡ての神殿とスフインクスとパンテオンのために
響きある花崗石を伐り出した……

プロレタリヤ詩人の創作は藝術品としては素よりそれ程の興味はない。形式も技巧も未熟である。それは彼等がまだそれ程の熟練を積んでゐないのだから止むを得ない。彼等は屢屢偉大なる感情を表現しようと努めて居る。例へば最近の反亂や革命や大變革によつて經驗した感情の如きそれである。新しい光明な生活に對する期待と闘爭に行はるゝカタストローフに對する恐怖とが衝突し合つて居る感情、それを描かうとして居る。けれどもプロレタリヤ詩人の詩人能力は斯種の荒々しい恐るべき激情を描くべく餘りに薄弱である。それ故に斯うした葛藤を描いた彼等の作品の多くは冷たい修辭學に過ぎない。彼等の焔は一向人を燒きつけるだけの力がない。彼等の誇張した假借した形容は屢々不正確で冷やかで退屈である。この點は彼等の詩の内容が同情に富んで居るだけ、積極的であるだけに特に著しく目立つ。その代り彼等の作品のうちには光明、知識、社會的正義、健全なる幸福なる勞働生活に對する心からの渇望が溢れてゐる。彼等は自己の工場や製造場を愛し、光明と技術の奇蹟とに充ち滿ちた大きな小説的な都會を衷心より愛して居る。彼等は勞働を讃美し、都會工場勞働の力強いリズムを感じてゐる。それに彼等は最近田舍の土地をまだ離れて都會の工場に來たばかりであるから、浪費されない精力を有つてゐる。それ故に彼等の詩の支配調は雄健であり、樂天的である。左に譯出するポレターエフの「女織工」の如き、その若々しい樂天的な調子に於て慥かにプロレタリヤ文學の特徴を發揮して居る。

金色の小川で凡ての物が燃えてゐる、
春に浮かれたやうに馳ける、響く、どよめいてゐる、
小山の上では黒い鴉が
叫んでは頻りに水を罵つてゐる。

屋根の奥には何所も彼所も

雪が薄黒く和らいで溶けかゝつてゐる、
子供達は腰まで水につかつて
鴉に劣らずガヤ／＼騒いでゐる。

愉快さうな車輪の響きと騒音、
どつしりとした荷車の轟き、
日向(ひなた)では少女の金色の鎌が
黄金のやうにピカ／＼光る。

凡てが流れてゐる、迸しつてゐる、
異常な火のやうに燃えてゐる、
凡てが歌ひ、凡てが話してゐる、
凡てが空色の日に充満してゐる。

春は輝やかしい空色の
繊細(きやしや)な少女の體格に溢れてゐる、
耳を聾するやうな織機に坐つて
まばゆきばかりの織物を織つてゐる……

おゝ如何に戯れてゐるよ、如何に徘徊してゐるよ、
何所を見ても金色の絲である！……
如何に自由の勞働にあくがれてゐることよ、
如何に金色の日向に出たがつてゐることよ……

光は熱い青春の火で
身體を貫くがいゝ
高空のやうに、周圍の生活のやうに、
私の生活も空色になつた！……

若し藝術史の見地より觀るならば、プロレタリヤ詩人の藝術運動は詩の方面に於ける標象主義(シムボリズム)と主觀主義(スブエクチウイズム)とに對する反動だと言へる。これは明かに寫實主義と實生活と客觀的藝術とへの復歸であると同時に、また抽象的藝術と病的なまで纖細なる形式とに對する反抗である。その結果内容が再び形式よりも尊重されるやうになつた。そして此の運動の藝術的理想としては單純と明瞭と精神的健全とが標榜せられ、その典型としてはプーシキンとゲーテとが認められて居る。この運動はまだその中から代表的な天才を出してゐないが、その希求に於て、その努力に於て現代の凡ゆる文藝運動中最も健全なる最も活氣ある運動である。それはプロレタリヤ詩人自身が未來に生き殘るからではない。來るべき時代がロシヤ復興の時期に於て少しも無理のない純眞な藝術を要求するからである。斯くしてロシヤ藝術は曾てロシヤ文學の誇りであつた寫實主義的傳統に歸るであらうと思はれる。(完)

長篇小説

炎の路（四）

—エセル・デル原作—

三上於菟吉



九　戀の遠乘

ムリエル・ロスコエ孃はその晩今日のニックとの會見を何度となく思ひ出して眠りを成し兼ねてゐた。疲れ切つてゐる頭はやがて紡錘のやうに旋り出した。彼女は急に自分の生活に闖入して來た新らしい要素に脅やかされるやうなことはなかつた。それどころか何の期待もない日の光も射さぬ隱れ家で長いこと日を送つてゐた身には、前途に何か目當とすべきものが出來たといふことは救濟でさへもあるのだつた。が、こんなに陰欝な生活に慣れた彼女は俄かにこれ程までに荒つぽい動搖に搖蕩されることに一種の不安を感じないわけには行かないのだつた。その上、當然亡き父と與にしなければならなかつたあの怖しい運命から、あゝした力勁い腕で自分だけ救ひ出してくれた此の青年に對してある恐怖を忘れてしまへなくもあつた。ニックは全く辛抱强い、勘忍深い、女のやうに柔しくすらもある男だ。しかし、それにも拘らず彼女はあの微笑ましげな黄色い假面の奥に、猛々しく血みどれな惡魔を藏してゐることを忘れてしまふことは出來なかつた。

ムリエルは自分があんまり易々と男の言ふままに承諾いてしまつたことにわれながらびつくりしたが、どうにも免れやうのない仕儀だつたのだと自ら辯解して見た。彼女は不幸にすつかり打ち負かされて、男を拒む力も自分が好むことを行ふ力も失つてしまつてゐるのである。それに父親の望みを實行したまでだと申譯出來ぬでもない。とは言ふものの、ニックのあの人を迷はせる力にいつの間にか捲き込まれてしまつたのだと自覺して驚かないわけには行かないのだつた。

疲れ果てゝ彼女はやつと眠りに落ちた。夢に一羽の荒鷲があらはれて、彼女を掴んで、高く〳〵舞ひ上つた末高嶺の巣に運ぶのであつた。●

それは息も付けぬ飛揚であつた。限りない昂奮と發揚とは痛苦のやうに彼女の軀内を突き貫ぬいた。ふと、何人かの人聲にホッとするよりも寧ろ失望を感じながら目を醒すと、窓の下に馬蹄の音が聽えて、それにまじつて元氣のいい口笛がひびいた。

彼女は頭がはつきりした。そして笑ひ出しさうになつた。昨夜の一切の疑懼は闇の亡靈のやうに消え亡びてしまつた。ニックは去り際に今朝一緒に近所を遠乘しようと言ひ出して彼女に約束させてしまつたのだつた。ムリエルはベッドを離れて窓のブラインドを引き退けた。

生々しい男の聲が彼女に呼びかけた。ムリエルはサッとブラインドを下してしまつた。しかしその瞬間にニックが逞ましい馬に騎つて、手を伸べて招く姿はすつかり目にはひつた。別に女鞍を置いた馬は小童に口を取られてゐた。朝日は山の彼方に上りつつあつた。

ムリエルは朝寢坊なバセット夫人が夢を破られてどんな顔をするだらうと考へて、聲を立てて笑ひ出したい氣がした。たうとう大急ぎで外へ出て見ると、ニックは馬を降りて、ベランダの階段のところまで迎ひに來てゐた。

「お早う、さあゐらつしやい。もうジャッコオの嶺が赤くなつて來ました。よく眠れましたか？」

ムリエルはありのままに答へた。

「で、僕を夢に見てくれましたかね？」と彼は言つた。「甘い特別な夢でしたらう。」

彼女は答へなかつた。そして彼は荒つぽく子供のやうに笑ふのだつた。

「適中らなかつたですか？　さあお騎んなさい。素晴しい遠乘をしませう。お腹が空いてゐるだらうと思つてチョコレートを持つて來ましたよ。いいですか！　そうら！　おゝ輕い軀だ、お孃さん。君はもつとうんと御飯を食べなけりやお駄目ですよ。」

「あなただつてまるで鯡みたいに痩せてゐるぢやあないこと！」と、ムリエルも不思議に明るい氣持になつて答へた。

彼女が鞍に身を落付けると、彼は歯を露はした顔を上げて黒い着物の裾に接吻するのだつた。まるで奴隷になつたもののやうに謙遜に恭々しく――

彼の接吻は彼女に怪しい戰慄を感じさせた。しかし彼女にはまだその戰慄の依つて來る意味を理解することは出來なかつた。二人は肩を並べて馬を歩ませ出した。彼女は頬が燃え

るやうになつたのを感じて、相手に見られまいとして顔を反けた。

それは驚くべき朝であつた。人を陶酔させるやうな松の匂ひは一めんに流れてゐた。あたりの雰圍氣は胸を轟はせるやうであつた。二人は手綱を引き緊めて微風に追はれながら空想の世界に馳け入つた。彼女はまだこのやうに暴つぽい、このやうに誘惑的な遠乘をしたことはなかつた。ニックが止れと叫んだ時、彼女は顔を火のやうにし眼を輝やかして馬足を止めた。

此處は全く草原に坐つて刻々に變り行く日の女神の織物の光彩を眺めるにいい場所であつた。ムリエルはジャッコオの頂きの淡紅色から琥珀色に變つて、數秒間銀色の光耀が山上の空明にきらめくのを眺めた。そして彼女の胸にはまたしてもあの怪しい夢が――一羽の荒鷲が彼女を掴んで高く翔る夢が思ひ出されるのであつた。

彼女はニックの方を見た。するとニックはもう馬に拍車を當てて、平原の方へ下りて行かうとしてゐた。彼女は彼が今どんなことを考へてゐるのだらうと思ひ迷つた。ニックは馬上に彫像のやうに坐つたまま、彼女の方を見ようともしないのである。急に山々の怖るべき寂寞が彼女を冷たい手で掴んだ。まるでたつた二人切りで此の世にゐるやうに思はれるのだつた。

彼女は追ひついた。

「寒いわ、ニック。」と彼女は相手の沈默を破るのを濟まなく思ふやうに言ひかけた。「どこまで行くんですの？」

彼は振り返らずに此方へ手を差し伸べた。しかし彼女はその手を握らなかつた。何だか怖いやうな氣がした。

しばらくして、彼は急に吐息をして、馬をぐるりと彼女の方へ引き向けた。

「え？ 寂いつて？ 僕達はアナンデエルへ馳け下りようとしてゐるのですよ。まだ充分時間がありますからね。時に僕は君を僕の親友に紹介したいと思つてゐるんです。ダイジイ・マスグレーヴー御存知ですか？ ブレーク・グランジユはあの女の從弟です。君はあの女が好きになるに違ひないですよ。あの女と僕とは既に親友なんですから。」

ムリエルはその女のことはグランジユ大尉から聽いたことがあるのだつた。そしてそのダイジイの良人をばいつだつたか見たことがあつた。

「私、マスグレーヴさんは嫌ひぢやなかつたわ。何だか大變お若いやうな方でしたけど――」

「えゝ。まだ赤んぼですよ。」とニックは言つた。文官に奉職して牛のやうに働いてゐるんです。夫人はデリケートな方で

すよ。生れて間もない子供を連れて此の土地へ來てゐるんです。あの女は氣の弱い性でね、今でもあまり他所へ出かける勇氣がないんです。ですからどうかして君に訪ねて來て貰ひたいと思つてゐるのですよ。行つて遣つてくれますか？」

ムリエルはちよつとためらつた。

「ニツク。」と彼女は言つた。「あなたはあの事を――約婚のことをみなさんに話したの？」

「勿論。」とニックは直に答へた。「どうして話して惡いね？」

彼女は何と言つていいか解らなくなつてしまつた。

「昨日夕方に僕はバセット夫人にもその事を話して置きました。」と彼は續けた。「あの女は何とも言ひませんでしたか？」

「えゝ、仰有つたわ。あの方は歡ばしい事だと言つて私に接吻しましたわ。」

ムリエルの頰は追憶で燃えた。

「いい女ですねえ――あの女は！」とニックはチラリと横眼を呉れて言つた。「バセット夫人はいつでも正しい時に正しい事を言つたりしたりするのを怠たらない。それだからこそわれ〳〵すべての人間はあの女を好くのです。」

ムリエルは答へなかつた。ニックの言葉には何か裏があるやうに思はれた。そんならニックもあの女を憎んでゐるのであらうか？　なぜだらう？

「われ〳〵がもう間もなく結婚するのは定り切つた話です。で、世間でもかうしたことは全く一私事だと認めてゐますから、あまりの噂なんかにビクビクしてはいけませんよ。」とニツクは言つた。

「で、マスグレーヴのおくさまも知つてゐらつしやるの？」と彼女は訊ねた。

「眞先にあの女に話しましたよ。」とニックは言つた。「しかしあの女のことを氣にかける必要はありませんよ。あの女は空騷をするやうな人物ぢやありませんから。」

ムリエルは神經的に笑つた。彼女は何か言ひ出して話頭を轉へようと思つた。が、何だか息が詰まつてしま　たやうな氣がして口に出なかつた。

ニックは馬を彼女とすれ〳〵に乗り寄せた。

「そこでたつた一言言つて置きたい事があるんですが――」

「何です？」とムリエルは眞面目な顔で相手を眺めた。

「びつくりしなくつてもいいのです。」とニックは彼女の注目に答へて言つた。「先刻から言はう〳〵と思つてゐたんだけど恥かしかつたのです。これを見て下さい。」と彼は何か握つた手を差出して開いて見せた。掌には薄葉紙に包んだものが載つてゐた。「君にはめて貰はうと思ふ指輪なのです。中に大事なことが書いてあります。ひとりになつたら讀んで下さい。」

ムリエルはすぐには小さな紙包を取らうとはしなかつた。やがて紙のやうに蒼ざめて言ふのだつた。

「ぢやあの事はほんたうに本氣なのね?」と言ふ聲は聽えない程微かであつた。

「本氣かだつて！　僕は勿論本氣さ。」

「まあ、でも笑ひ事ぢやあないことよ。」とムリエルは震聲で言つた。

「笑ひ事どころか！」とニックは寧ろ激しい聲で呟やいたが急に明るい調子になつて、

「勿論僕は本氣なんだ。さあ、取つてくれ給へ。」

彼女は言はれるまゝに受けた。しかしどうしたらいいかといふやうな躊躇が十分に見られた。ニックはそんなことには氣が注かない顔をしてゐた。

「今見てはいけませんよ。」と彼は言つた。「僕が行つてしまうまでお待ちなさい、今は收つて置いて、もう一駈け駈けさせませう。」

彼女は贈ものをかくしに辷り込ませながらチラリと男を眺めた。

「私、あなたにお禮を言はなけりやあならないわ。」と彼女は恥かしげに呟やいた。

「まあ、あとで見て下さい、つまらないものですよ。さあ、いいかね、一、二、三！」

拍車は馬腹に當てられた。血は彼女の頬に歸つた。胸は生生しい歡びで充された。しかし心の奧の奧にはどうしても忘れることの出來ないある名付け難い恐れが殘つてゐるのであつた。

一〇　愛はすべてを征服す

ムリエルがバンガローに歸つた時には、朝飯の卓はもうヴエランダに待つてゐたけれども、バセット夫人の影は見えなかつた。ムリエルはソッと自分の部屋にはひつてお湯を使ふ準備をはじめた。全く恰好な遠乘だつた。彼女はひどく疲れ果てた氣はしたが、いつになくお腹が空いて食慾が募つてゐるのを感じた。

彼女は乘馬服のかくしからニックの贈物を取り出したけれどもすぐに開いて見ようとはしなかつた。夏の爽やかな朝は今や庭苑に溢れ漲つてゐた。彼女はその涼しさを歡んで貪ほるやうな氣持になれたのもニックのお蔭だと考へた。

ふと、テーブルの上に一通の手紙が載つてゐるのが目にはひつた。彼女はためらひがちに封を切つた。見なれない手蹟であつた。彼女は好奇心に充されて讀み下して見た——

親しきロスコエ孃——とその手紙は書かれてゐた——面倒なことを言ふ私だとお蔑ずみなさらずに下さいまし。あなたが今日お午すぎにごく親密者のお積りでお訪ね下されば有難いとお待ちいたしてゐます。子供はゐますけど、赤んぼは一人前にかぞへられないので、私は全くひとりぼつちで暮してをりますの。もしあなたがさう仰有ればニックはよろこんで私のところまでお連れ申すだらうと存じます。それは心からよろこんでお連れ申すだらうと思ひますの。もう禮儀上の紹介とか何とかいふやうなことは要らない程速やかに私たちはお友達になるに違ひありません。いろ／＼なことをあなたのお口から伺ひたいんですけど、默つてゐらつしつても何でも了解出來ると信じてをります。ニックにはこんなことは會得が行かぬやうに見えますけど——何分ああいふ人ですから——しかしあの人にはあの人の美點があるのです。では、もうすぐお友達になれると歡びつつ——

ダイジイ・マスグレーヴ。

ムリエルは微笑んで手紙を卓上に置いた。その中に含まれた天然の親情は温かい抱擁のやうに彼女を包んだ。ええ、勿論行かなければならないわ——と彼女は決心した。そして生生した心でお湯を浴びた。彼女は行つて逢ひさへすればその生面の女性とすぐに姉妹のやうに親しくなつて、肉身も及ばない同情を受けることが出來るといふことを直覺するのだつた。そしてたより稀い彼女はさう思ふともうゐても立つてもゐられない程、さうして人間愛へのあこがれに燃え立たずにはゐられないのであつた。

彼女はその手紙を手にしてヴェランダの方へ出て行つた。そこにはもうバセット夫人も來てゐた。

バセット夫人はいつも優雅婉麗を極めた態度を見せるのを忘れなかつたが、しかし朝のうちは何となく不機嫌なのが恆であつた。彼女は微かな疲れたやうな笑を浮べて接吻しようとして相手の頰を引き寄せた。

『まあ、早起の小禽さんね、あんたは！』と彼女は言つた。『ニック・ラトクリッフさんの御訪問は近所の方々をみんな目を覺させてしまつたに違ひないわ。私の所ではあの方と日の出前に外出するのはよくないと思ふんですがね……若しあんたが相談してくれれば私無理にも引止たのですけど——』

ムリエルは眞綿で首をしめるやうなお叱りに顏を紅めた。

『ですけど、』と彼女は靜かな聲で言つた。反抗的な氣持になればなる程靜かな聲で物を言ふのが彼女のならはしだつた。『ニックと日の出を見たり月が上るのを見たりしたのは今朝がはじめてではありませんの。』

バセット夫人は柔しく吐息をした。

「私、あんたが不作法なことをしようとしたり不仕だらをしたりしてゐるとは思ひませんわ。世の中の不身持な娘の眞似をしてゐるとは思ひゝせんわ。ですけど、私はあんたを監督する役目を持つてゐるのでこんな面倒なこともいはなければならないんです。私の位置にすればあんたをどうかして世間の口の端にかかるやうなことの毛頭ない立派な女にしたいのですから……ねえ、ムリエル、だからこれからは出來るだけ行狀に氣をつけて下さい。さあ、コーヒを上がれ。」

ムリエルは食卓の向側に坐つて、大きな、暗い眼で夫人を眺めた。その目には憤りも恥ぢもなかつた、たゞ一種言ふべからざる輕蔑が含まれてゐるだけだつた。

しばし沈默してから、彼女はもうバセット夫人のあてこすりなどには構はずに自分の用事を片づけてしまはねばならぬと決心して言ひ出した。

「私、おひる過ぎにニックのお友達に逢ひにまゐりたいと存じますの。」と彼女は突然言つた。「マスグレーヴのおく樣とはお知合だと思ひますけど――。」

バセット夫人の額はかすかにひそんだ。ほんのわからない程ひそんだ。

「マスグレーヴ夫人に逢つたことがあるんですの？」と彼女は訊ねた。

「いゝえ、一度もありませんの。ですけれど、あの方はニックがお親しくしてゐる方で、それに從弟にお當りのグランジユ大尉はよく存じ上げてをりますから――」

バセット夫人はさうしたことに耳を傾けずに言つた。

「勿論あんたは自分で何でもしたいことをしてもいゝ年齢になつてゐます。ですがねえ、あんたのやうに最近間違ひがあつたばかりの方が社交界に顏出しをするのはあまり感心したことではありませんからねえ。」

この言葉のあとへ不思議に壓迫的な沈默がつづいた。ムリエルの顏は眞紅になつた。そしてだん／＼また眞青になつた。

「私、さうするのが一番いい事だと考へたので厶います。」と彼女は息が窒つたやうな聲で言つた。

バセット夫人は物靜かにつづけた。

「いゝえ、私は結婚のことを言つてゐるのではありません。よくつて。結婚といふ事は必要から來た問題だ――さうしなければならないところから來た問題だとは、あんたの場合私だつて氣が注いてゐるわ。だけど、それにしても周圍の事情をもう少し考へてからしてくれたらよかつたと思つてゐるのよ。世間といふものは一般のしきたりを破つた者へは遠慮のない待遇を與へるものなんです。とりわけあんたなぞは氣ま

ぐれにそんなことの出來ない身の上なんですのに――。」
　彼女は突然ムリエルが突立ち上つたので言ひ止めた。ムリエルの目は白い顔の上に燃え輝やいてゐた。
「あなたはどうして私の結婚を必要から來た問題だなぞと仰有るんでせう！　レギナルドさまから伺つてをりますけど、亡父は私のために財産を遺してゐる筈で厶います。」
「勿論よ、勿論よ――」とバセット夫人はかすかな、わざとらしい笑みで呟やいた。「そんな財産の何のといふ意味ではありませんよ。あんたはそんなにすぐに腹を立てるやうな赤んぼだから詳しく説明して上げたつて無駄だけど、しかしあんたには早晩結婚といふことが起らなければならなかつたの――そしてそれが早ければ早い程よかつたの。でもそれはそれとして、どうか出來るだけ氣をつけて擧動つて下さいよ。よう厶んすか。」
　ムリエルは默つて聽いてゐた。相手の言葉にほのめかされた、何か意味ありげな、奥底のありさうな言ひ現はしを考へて見ようとはしなかつた。そんなことは思つて見るのも穢らはしい氣がされた。バセット夫人なぞといがみ合つて時を消す程ばからしいことはない。そして相手が何と言はうとも自分でしたい訪問は自分ですればいいのだと決心して、その旨を斷つて食卓を離れた。
　バセット夫人はもうその上厭味を言はうとはせずに、たゞほんの少し「雄辯な」肩を上げて見せた。ムリエルはしつかりした足どりで、毅然として頭を上げて自分の部屋の方へ引き取つた。ニックからの贈物はある祕密な歡びを胸に感じさせてゐた。それにしても、どうして怖れを抱かねばならぬのであらう！　すべての娘は結婚の約束をすれば指輪を受けてはめるが當りまへなのである。
　好もしい部屋隅に行つて隱し場からそれを取り出した時あやしい昻奮が全身を走しり流れた。
彼女は松の木かげのハンモックに身をゆだねた。熱い日光は暗い枝の茂みから降り注いで寶石の上にきらめいた。彼女は眩惑されて包み紙を指から辷り落した。
　彼女は美しい彫刻を持つ金環にルビーを切りはめた古典的な指輪を眺めた。美しいものを見る歡喜が言ふべからざる身震ひを感じさせた。彼女は指にはめて、日光にかざしてつくづくと眺めた。
　ルビーは心臟の血のやうに紅く紅く、炎のやうに激しく輝やいた。彼女は輝やかしく蠱はしい目でいつまでも眺め入つた。
　ふと、彼女はニックの言葉を思ひ出した。大事なことが書いてあると彼は言つてゐた。指輪の内側をあらためることを

忘れてゐた彼女は、それを指から拔いて、頬を熱くして検めて見た。

おゝ、その大事な言葉はたしかにあつた。古風な書體でたつた三語だけ内側に刻まれてゐた。長い間には磨滅して消えてしまふだらうと思はれる程小さく書いてあつた。あんまり細かい文字なので讀み取るのが中々困難だつた。が、たうとう彼女は意味を讀むことが出來た。

彼女はその文字を何物かが耳元で讀んで聽かせでもしたやうに了解した。

その三語は——

OMNIA VINCIT AMOR

といふラテンの成句だつた。

愛はすべてを征服す

そしてさう彼女は讀み返して見て胸を震はせた。この指輪はもう誓約のしるしとしての單に外的な目に見る證據ではなくなつた。これは愛といふ言葉をひと言も呟やかなかつた男に依つて與へられた愛の保證だつた。

一一　指輪の祕史

『ぢやあニックを連れていらつしやらなかつたのね。』とタイジイ・マスグレーヴ夫人は愛想のいい微笑をたゝへて言ふのであつた。『その方がよかつたんですの。私、あなたとすつかり仲良しにならうと思つてゐたのですから——そんな時男の方は邪魔ですものね。』

彼女は客間の居心のいゝ一角に訪問者を導いて、安樂椅子を勸めてから、溢れるやうな愛の微笑を注ぐのであつた。美しい顔は友情で輝やいた。歡迎の意を表はすお世辭なぞは必要でなかつた。

ムリエルはあのやうに長い〳〵憂欝な日を送つてゐた後なので、一倍さうした心持がうれしいのであつた。此處まで出向いて來るにはなか〳〵努力を要したが、來て見れば出て來てよかつたとわれながら心に祝福せずにはゐられなかつた。

『お招き下すつたのはニックのためだとは存じてゐたのでムいますけど——』とムリエルは言つた。

『いゝえ、とんでもないことよ。』とダイジイはすぐに答へた。『あの人は私にあなたのことを打明けてくれました。で、私もあの人の言ふ事にすぐ贊成いたしましたの。けれどもそのうちに私、あなたを私のものにしてしまひたくなつたんですの。でもよくいらつしやつて下すつたわね。私は行々しいことは何でも辛抱がなりませんのよ。あなただつてさうだわね。あなたの目がちやんとさう言つてゐますもの。私、どなたとも四角ばつたおつき合ひはしたくないの。バセットのおくさ

まは私を開け放し家だつておつしやるの。屹度生れの星の關係だらうと思ひますわ。それでニックとすぐに意氣投合したのだらうと考へてゐますのよ。あの人も私に似た氣質ですから。』そして彼女は椅子をしづかにムリエルの方へ近づけて、『あの人はほんたうにいい若者だわ。ねえ、さう思し召さない？』それからおもひやり深く言ひ添へた。『これはあの人の指輪？　ちよいと拜見ね。いつぞや見たことがあるやうに思ふわ。いゝえ、拔いてはいけません。緣宜が惡いから。』

　しかしムリエルはもう指輪を拔き取つてゐた。

『美しい指輪ですね。』と彼女は温かく言つた。『何かあなたは御存知ではいらつしやいませんこと？　この指輪には歷史がありさうに思はれますわ。』

『えゝ、私思ひ出したわ。』と相手は答へた。『英吉利にゐた頃あの人のお兄さまのお邸で見たことがありました。大そうあの人を可愛がつた叔母さまから遺産を相續なすつた時のおゆづりのひとつだつたのです。その女はお亡くなりになる前にあの人に一ばん此の世でいとしい娘が出來た時に贈物にするやうにと遺言なすつたといふ話でした。』

『でも此の指輪には――』とムリエルは言ひかけてためらつた。

　ダイジイは娘の顏に浮んだ柔しい羞恥を見て答へた。

『これは OMNIA VINCIT AMOR といふのでせう？　で、その歷史は隨分悲しいのよ。話してもいゝけど隨分悲しいのよ。』

『私、悲しいことには慣れてゐますわ。』とムリエルは窓から見える山々の方へ目を投げて言つた。

　ダイジイは娘の手を握りしめて話した。

『これは佛蘭西の指輪なの。恐怖時代にある貴族が持つてゐたものださうです。斷頭臺に上らうとする時その貴族がある娘に召使に持たせてやつたのですつて――何といふ名の人達だか知りませんけど、その娘は英吉利人だつたに違ひありませんわ。』

　ムリエルは興味を抱きはじめた。

『まアー　で、その娘は？』

『娘ですつて！』とダイジイは硬い聲で答へた。『その娘は六ケ月の間操を守つてからある英吉利の紳士と結婚しました。遺言を守つたのだとその娘は言つてゐたさうです。それでもその年の中に娘は死んださうですが、却つて仕合せだつたかも知れませんわ――死に際に子供を遺したのださうですけど――。』

　ダイジイは急に立ち上つて部屋の中を歩みはじめた。

『それは百年も昔の話です。女といふものはいつまでも馬鹿なものねえ。愛してゐる男と結婚が出來ない破目になると、どんなものとでも結婚してしまふものです。』

　ダイジイは娘の側に歩み寄つて指輪をはめてやつた。

『でも、いつの代でも愛はすべてのものを征服しますわ。』さう言つて彼女はムリエルを柔しく搔き抱いた。『あなた方の戀物語は幸福に始まつて幸福に了るでせう。ニックの叔母さま

は此の指輪を結納に貰つてから外のははめなかつたさうです。そしてその指がリユウマチで動かなくなるとニックに讓りました。息子さんはクリミア戰爭で亡くなつてしまつたんですのよ。此の話があなたを泣かせたら許して頂戴。でも、愛のある時は死もほんたうの悲しみではありません。みんなは死は愛をも征服するやうに言つてゐますけど、死をさへ征服するものが愛なのです。」

　ムリエルはダイジイの肩に顏を押し當てた。

「ほんたうにさうでせうか？」と彼女は呟やいた。

「私はさう信じてゐますわ。」と相手は確信に充ちた調子で答へた。「しかし良い女性はそんなことを信じる必要さへないのです。神さまのみが一切を知ろしめすのですから。」

　彼女はムリエルを抱きしめた。そして沈默に落ちた。しばらくの間部屋の中はしいんと靜まり返つた。ムリエルは顏をあげた。

「ありがたう――ほんたうに――。」

　彼女の目は涙で一ぱいになつた。唇はダイジイのそれと合つた。が、もう少しで接吻が交されようとする時、彼女は急に顏を反けた。

　ダイジイは微笑んだ。

「さア、いらつしやいな。赤んぼに逢つて遣つて頂戴。お醫者はもう大丈夫だといふのですけど、良人がまだ英吉利へ歸すのが心配だと言ふものですから――。」

「あなたは英吉利へいらつしやりたくない？」とムリエルは訊ねた。

「私從弟のグランジユに逢ひたいの。」と夫人はそれに答へずに頭を振るやうにして言つた。「その内に歸つてくるでせう。何でもヴイクトリア勳章を頂くとかいふ話ですけど、あの人に呉れる位ならニックにも呉れていゝと思ひますわ。」

「私、さうは思ひませんわ。ニックは何もしなかつたのですもの。」とムリエルは答へた。「誇るべきことは何ひとつしてゐないのですもの。」

　ダイジイは娘の顏を兩手に挾んで微笑した。

「こんな立派な娘を救ひ出す外はねえ。それで十分ではないこと。さう〳〵、ムリエル、私、どんな理由であの人があなたを望んだか知つてゐるのよ。びつくりなさらずともいいわ。何も言はうとしてはゐないわよ。兎に角ニックは印度中で一ばん幸福な男です。まあ、この髮の毛は何て美しいのでせう。結婚の時には私が結つて上げてよ。どんな召物を召すおつもり？　黑い着物はあんまり淋しいわ。それはさうと、あなたは宅のウイルに逢つたことがおあり？」

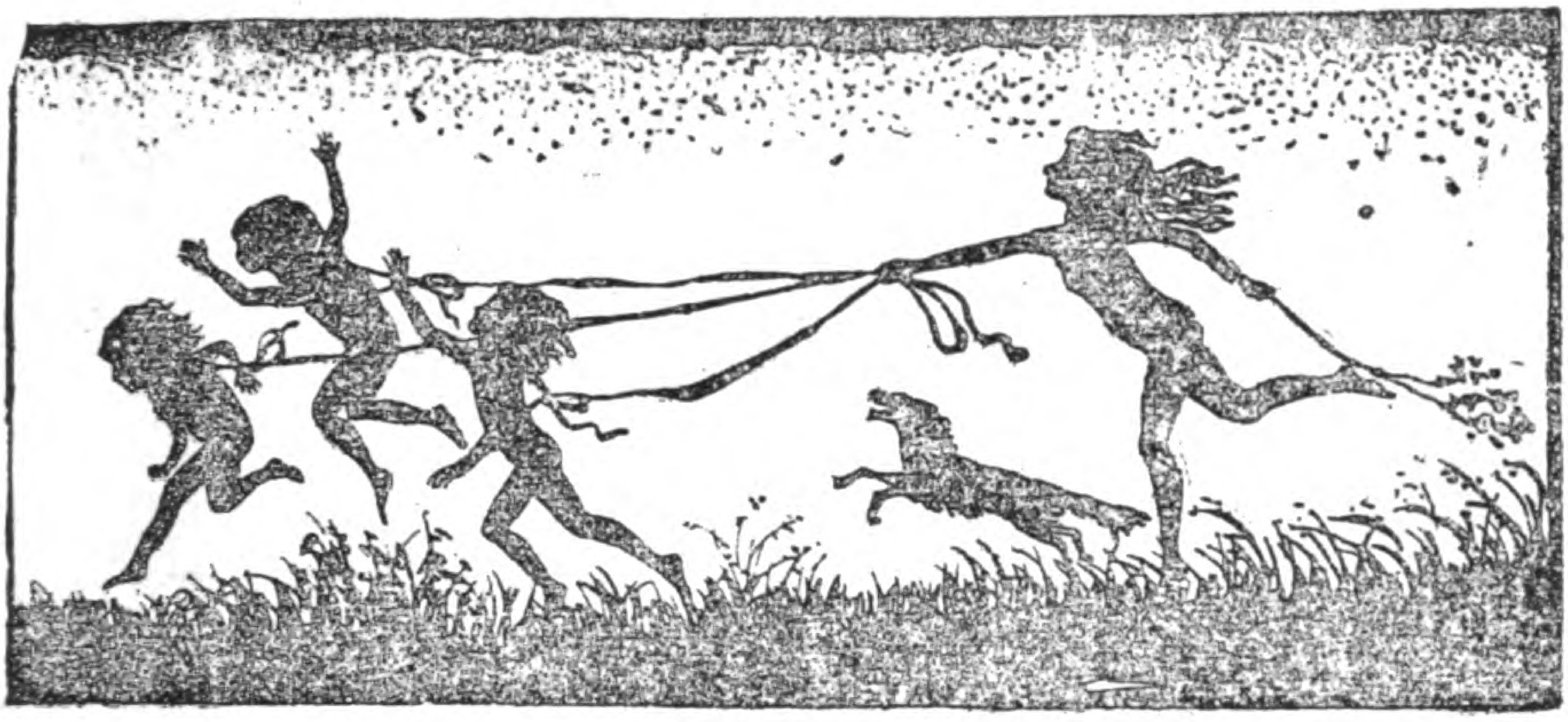
「一度お目にかゝりましたわ。」とムリエルは言つた。「去年の初夏、プーナの舞踏會でだつたと思ひますわ。」

「私、あの時はマヘエブルシヨワにゐましたわ。良人は立派な舞踏家でせう？　あの人は何をやつても器用なの。」

　そして暖爐の上の寫眞を示してつけ加へた。

「十六の子供ぢやあないのよ――かう見えてももう廿八なの。これから赤んぼを見て下さい。」（つゞく）

創作



アナルキスタの夢

武林無想庵

ユングフラウヨホ

（濃霧。

（しばらくすると、その濃霧が見る〳〵剝げはじめる。と、青空が現れ　やがて全く霧の消え終つた時、雄大極まる景色が浮上る。

（左に『メンヒ、』右に『ユングフラウ、』共に永劫の雪を頂いて峙つ。中央は雪原の大傾斜、『ユングフラウ・フイルン』から、『グロツサア・アレッチ・グレッチャア』へかけて、悠揚迫らざる大曲線を劃しながら、刻々なだれ落ちつゝある、所謂大氷河。）

銀髯黒衣の老人。

アルピニストの服装で固めた、『過渡時代』の一青年。

老人。——もう大丈夫ぢや。

青年。——(漸く愁眉を開き得た面持。)

老人。——それ、あすこの、あの、鉛色をした、雪の少し溶けかゝつたやうな、一寸したところが見えるぢやろ?

青年。——ア、見えます。見えます。

老人。——あれがヨホのギャラリィの出入口ぢや。お前の妻の待つてをる、ユングフラウヨホぢや……

青年。——有難うムいました。お蔭様で、再び人間に還れます。

老人。——(微笑して、)人間にナ?

青年。——はい。

老人。——そんなに人間に還りたかつたのか?

青年。——はい。

老人。——(憫むやうに、)お前が霧の中で迷つてゐる間、人間の世界では、どのくらゐ時が經つたものか、お前には分らんぢやらう?

青年。——霧の中であなた樣にお目にかゝつたまでの時間でムいますか?

老人。——さうぢや。お前がアイガアヨホから出て、あの恐ろしい霧に包まれたまでの時間ぢや。

青年。——(懐中時計を見て、)左樣でムいます……八九時間も經つてゐたでムいませうか……

老人。——八九時間……さうぢや。さうしてその間に、フインステルアールホルンと、ラウテルアールホルンとが、二度物を言ひ合つたのぢや。その間にな……

青年。——と申しますと?

老人。——その方角にあたつて、お前は二度遠雷をきいたであらうがの?

青年。――さう仰ッしやれば、どうやら聞いたやうにも覺えます。
老人。――それが卽ちフィンステルとラウテルとの問答ぢや……ナ？
青年。――(催眠術にでもかゝつたやうに、)ア、分りました。分りました。それなら昔トウルゲーニエフの散文詩で讀んだ事がムいます。
老人。――で、その散文詩には何と書いてあつた？
青年。――…………
老人。――人間世界の時間の事が書いてはなかつたか？
青年。――…………
老人。――第一の問答は、巴里にコンムユーヌの革命が起つた話をしてゐたものぢや。
青年。――(再び不安に襲はれはじめて、)さう致しますと、第二の問答は……
老人。――勿論、ペトログラードで爆發した、あのスモルニィ館の出來事に關してぢや。
青年。――(不信用らしく冷笑しつゝ、)過去の話でムいますか？
老人。――(嚴然と、)未來の話ぢや。
青年。――併し……
老人。――アルプスでは現在ぢや。
青年。――併し…………
老人。――永遠に現在ぢや。
青年。――………

老人。　現在ばかりぢや。

青年。——しますると……

老人。——刹那ぢや。

青年。——（混亂して、）刹那？

（メンヒとユングフラウの絶頂が、サツと血潮を濺いだやうに眞紅になる。）

老人。——（叱咤するやうに、）あれを見よ！

（暗くなる。）

青年。——（化石のやうに凝然と目を瞠る。）

（メンヒとユングフラウと、その双方の山麓から、それ〴〵一團の群集が湧出して、中央なる大雪渓へ向つて、山颪のやうに突進する、メンヒからのそれは悉く黒人だ。悉く裸體の男性だ。ユングフラウからのそれは悉く白人だ。悉く裸體の女性ばかりだ。）

老人。——（再び叱咤するやうに、）あの音をきけ！

（小銃、大砲、機關銃、爆弾の音が、一齊に鳴きわたる。黒煙、白煙、黄煙、綠煙が、濛々と立昇る。その煙の間々を劈いて、稲妻のやうな焔が閃々と縱横に逼ひまはる。阿鼻叫喚が起る。瀧のやうな流血の爲に、雪渓の全部がまたゝく韓紅の色に染まる。

（と、眞の闇となる。ベメリと物音が靜まる。老人の姿が消える。化石のやうな青年の立像だけが、ポンヤリと浮上つて殘る。

（メンヒの絶巓が、ボウツと薄あかるくなる。そこに菩提樹下の釋迦のやうな、寂然たる黒人の坐禪姿が現れる。ユングフラウの絶巓も同時に薄あかるくなる。と、そこには、肱枕して、ウツトリと横たはつた、金髪を亂した白人の女の裸體姿が、夢のやうに現れる。）

青年。——（昂奮しきつた聲で、）お、ユングフラウだ！　妻だ！　昔の妻だ！　裏切つた女だ！　俺の子を生んだ女だ！さうして俺を棄てた女だ！……

昏倒する。と、全く闇黒となる。やがて、最初のまゝの背景へ戻る。)

昏倒した青年。

妊婦。

(少しづつ霧が運び出して來る。)

妊婦。——(男の耳元へ口を寄せて、)あなた! あなた!

青年。——(微かに眼を開き、)誰だい?

妊婦。——オ、お氣がおつきになりましたか?……わたくしでムいます。ソエヤでムいます。

青年。——ソニヤ?(と、起上つて、ヂツと相手を見つめる。で、愕然と氣がついたやうに、いきなり女の兩手を握りしめ、)おゝ、お前だつたか?……

妊婦。——あなた! あなた!

(兩人感極まつたやうに、緊と抱合ふ。)

青年。——(暫くたつてから、)クライン・シャイヂックでお前に別れてから、もう何千年も經つたやうな心持がする。迷つた。迷つた。俺は霧の中へ閉ぢ籠められて、路を失つた雪の上を、さん/\に迷つた。無我夢中に迷つた。生きてゐるのか、死んでゐるのか、全く分らなくなつて了つたほど迷つた。で、迷つた揚句……(と、始めて夢のさめたやうに、)あゝ、さうだ。やつぱり幻覺だつたのだ……

(だん/\霧が濃くなる。)

妊婦。――お約束したとほり、終列車に間に合ふやうに、お迎へにまゐつたんですけれど、あんまりお歸りが遲いので、今晩はもうシャイデックへは歸れません。

青年。――（時計を見て。）ウン、終列車はもう出て了つた……仕方がない。今夜は岩屋のレストランで泊めて貰はう。

（遠雷がきこえる。）

青年。――（ギョッとして。）やッ、第三の問答だ……

妊婦。――（急に苦しみ出して。）あなた！　あなた！　わたくし、お腹が痛くなりました……あなた！　あなた！　どうしませう？……あゝ、あなた！　あなた！……（と、青年へ縋りつく。）

青年。――（動顚して。）こりや、いかん！　爰ではいかん！　シッカリ！　シッカリして！……レストランまで辛抱して！……

妊婦。――（前後不覺に。）あゝ、苦しい！……えゝ、シッカリします！　シッカリしてます！　ですから、早く……あ、あ、あなた！　あなた！……

（スッカリ濃霧に包まれ了ふ。）

ビアッツア。サン・マルコ

（ヌウーリカ・サン・マルコのバルコーネ。

（モザーイコを鏤めた、金色燦爛たるボールメ・マッウオーレの、その半圓をなせる上層だけが、脚下から現れてゐる。左右に大理石の高欄がつゞく。中央に四基のカヷールロ、即ち青銅塗金の神馬像、二頭づつ押並んで、眼下のビアッツアを睥睨する。うしろは例の庭を斷れたやうな、中央は格子の、左右はモザーイコの壁面。その上に圓屋根の一部。

（月夜。海上のゴーンドラから、夢のやうなメルカルオーラが、絶間なしにきこえて來る。）

ヴエネチア風の長い肩掛を纏うた女。

若き〇〇〇〇〇。

肩掛の女。――私はユングフラウで生れた女です。

アナルキスタ。――ユングフラウ？　アルプスの……

肩掛の女。――えゝ、その雪の中で生れたんです。

アナルキスタ。――永遠に消ゆる事のない雪の中でねえ？

肩掛の女。――えゝ、えゝ、だからこんなに美しいのです。貴兄は？

アナルキスタ。――僕？　僕の生まれたところかね？

肩掛の女。――えゝ。

アナルキスタ。――さア、どこで生まれたらよかつたらう？……なんでも日本で生まれたんださうだ。だが、僕はまだ日本といふ國は見た事もない……

肩掛の女。――ぢや、貴兄は日本人？

アナルキスタ。――人はみんなさう云ふね……でも、自分ぢやさうは思つてゐない。

肩掛の女。――それぢやア、どこの國の人間だと思つてゐるの？

アナルキスタ。――ボオドレエルの國の人間だと思つてゐる。

肩掛の女。――フランス人だと思つてたの？
アナルキスタ。――ボオドレエルはフランス人ぢやァないよ。
肩掛の女。――アラ、ぢや、どこの人？
アナルキスタ。――エトランジエさ。
肩掛の女。――まア、よかつた事！ チンガーロだつて仰ッしやいよ。
アナルキスタ。――なぜね？
肩掛の女。――私もチンガーロの一人だからよ……でもね。私、ほんとうは、日本人なの。
アナルキスタ。――へえ？ アルプスの雪の中で生まれた女かね？
肩掛の女。――私のおとうさんは日本人なの。日本人のくせに、日本といふ國がいやになつて、まだ二十五六の頃、日本を飛出して了つたんですッて。
アナルキスタ。――へえ？ なぜ日本がいやになつたんだらう？ 大さう景色のいゝ國だつて話ぢやないか？
肩掛の女。――景色ばッかりいくらよくたつて、致命的に〇〇を異にした國ぢやァ、人間としての幸福は、とても求める氣にはなれなかッたんだものですとサ……昔の人はをかしいほど偏狹だつたのね
アナルキスタ。――ハヽハ、偏狹かい？ さうすると、君のおとうさんは何主義だつたんだい？
肩掛の女。――〇〇〇〇〇よ。
アナルキスタ。――なァんだ、〇〇〇〇〇か……それぢやァ、ロシアへでも逃出して行つたといふわけかい？
肩掛の女。――さうよ。さうよ。さうして私のおかァさんと結婚したものよ。
アナルキスタ。――ロシアでね？

肩掛の女。——えゝ、モスクワで。

アナルキスタ。——なるほどね……つまり、コロンターイのエピコーネンの一人に、早速つかまつて了つたわけなんだね？

肩掛の女。——さア、そりやどうだか知らないが、とにかく結婚して半年ばかりたつと、二人でスヰスまで出かけて來たもんですとサ。

アナルキスタ。——へえ？　半年たつて？　ボリシエヰキの新婚旅行は、さすがにブルジョアとはちがつたところがある。

肩掛の女。——まさか新婚旅行でもなかつたんでせうよ……私のおとうさんは、そりやアルプスが好きだつたんですツて……

アナルキスタ。——アルプスなら、僕も好きだね。君はユングフラウで生まれたさうだが、僕はエーギツヒ・シユネエ・フエルトに埋づまつて死にたいね。

肩掛の女。——あなたの名前は何て仰ッしやるの？

アナルキスタ。——え？　僕の名前かい？

肩掛の女。——えゝ。

アナルキスタ。——さア……さうナ……アナルキスタといふのサ。

肩掛の女。——アナルキスタ？　まア、をかしい！　○○○○○ッて名前なの？　妙ね……一體、誰がそんな名前をつけたの？

アナルキスタ。——ハヽハ、僕サ。

肩掛の女。——アラ、御自分でつけたの？

アナルキスタ。——さうサ。自分でつけちやァいかんかね？

肩掛の女。——そんな事はないわ。でも、人はあなたの事を何ンてッて呼ぶの？

アナルキスタ。——サミデアーノと云つて呼ぶね。

肩掛の女。——ホヽホ、よかつた事。でも、あなたは氣に入つたわ。あんまり氣に入ッちやッたから、お禮に私の名前を教へてあげませうか？

アナルキスタ。——どうぞ。

肩掛の女。——（カヴールロの一つに擦りよつて、その跡の一端を指さし、）爰を御覧なさい。見えて？

アナルキスタ。——（懐中電燈を取出して、それをば女の指さしたところへさしつける。）へえ？　こりや希臘語ぢやないか？

肩掛の女。——貴兄、希臘語は讀めない？

アナルキスタ。——少し位は讀めるがね……

肩掛の女。——ぢや、讀んで御覧なさい。

アナルキスタ。——フリジスさ。

肩掛の女。——私の名前はフリジスよ。

アナルキスタ。——これが？　フリジスか？……フリジスと云つたら、君……

肩掛の女。——アレクサンドリアのお女郎の名前よ。

アナルキスタ。——それが、どうして？……どうして、また……

肩掛の女。――私のおとうさんが、私の生まれた時、アルプスからこのヹネチアへ來て、大變このお寺が氣に入つて、記念の爲に、爰へ私の名前を人知れず彫りつけて置いてくれたのよ。變なおとうさんね。

アナルキスタ。――へえ？　併し、なぜフリジスなんて名前をつけたのだらう？

肩掛の女。――フリジスといふ女は、人間でゐながら、アフロディチエにならうとした女だからですッて。

アナルキスタ。――ふうむ、なるほど、變なおとうさんだ。

肩掛の女。――ところが、それどころぢやないの。まだ、もつと變なのよ。

アナルキスタ。――まだね？

肩掛の女。――（意味ありげに）　まだよ。まだ、もつとよ。

アナルキスタ。――どう變なの？

肩掛の女。――反對の側のカヅールロの一つの、今度は胴體の一部を指さし）爰を御覽なさい。

アナルキスタ。――（再び電燈をさしつけて）　ほう、今度はサムスクリタかい？　君のおとうさんは中々學者だね。

肩掛の女。――讀めて？

アナルキスタ。――シユーニヤターイヴ・ルーパン、か、さうだらう？

肩掛の女。――何の事だか分る？

アナルキスタ。――字面(づら)だけなら分るよ。

肩掛の女。――感心ね。だが、念のため、一寸直譯して御覽なさい。

アナルキスタ。――ハヽヽハ。まるで試驗されてゐるやうだね。

肩掛の女。――さうよ。無論、試驗してるのよ。

アナルキスタ。——及第したら、どうにかなるのかい？

肩掛の女。——私の亭主にしてあげるのよ。嬉しいでせう？

アナルキスタ。——ふうむ、なるほどね。

肩掛の女。——あんまり嬉しくもない？

アナルキスタ。——さア、デメトリオス扱ひぢやァ、少々ね……

肩掛の女。——それほど美男子でもないくせに……

アナルキスタ。——ハヽハヽハ。まア、さうサ。

肩掛の女。——にくらしい！

アナルキスタ。——併し、君のおとうさんといふ人は、とにかく、よッほど變り者だ。

肩掛の女。——でも、あなたほど變り者でもなかつたやうよ。

アナルキスタ。——僕ァ少しも變り者ぢやない。

肩掛の女。——ぢや、何なの？

アナルキスタ。——たゞの平凡の人間サ。

肩掛の女。——うそ、うそ！

アナルキスタ。——あたりまへのプロレタリアさ。

肩掛の女。——うそ、うそ！

アナルキスタ。——ぢやァ、アヴローキテーシュヴラだ。そんならお氣に入るだらう。

肩掛の女。——及第だわ。

アナルキスタ。――さア、キスしよう。

肩掛の女。――（押しのけて）まだ駄目よ。もう一つの試驗に及第しなけりや、本當の及第にはならないの。

アナルキスタ。――今度はヒエログリフォでも讀ませられるのかね？

肩掛の女。――いゝえ。學術試驗はもうすんだの。だけど、それだけぢやパスは出來ないのよ。

アナルキスタ。――すると？

肩掛の女。――これからすぐにカプリのグロツタ・アツチウラへ行つてらツしやい。

アナルキスタ。――ほう、何しにね？

肩掛の女。――琅玕洞の中へ跳び込んで、水の底に沈んでる、私のおかアさんの眞珠の腕輪を取つて來てもらふのよ。

アナルキスタ。――とう〳〵デメトリオスにして了ふ氣だね……そりや本當の話かい？ まるでお伽噺のやうだがね。

肩掛の女。――本當よ。私のおかアさんは肺病になつて、ソレントオで死んだのよ。そのおかアさんの遺言によつて、おかアさんの大好きな、大好きな、日本產の、薔薇色の、全く世界に類のない、大きな眞珠の三つ並んだ、死ぬまで離さなかつたプラチナの腕輪をね、これもおかアさんの大好きな、大好きな、あの美しい琅玕洞の水の底へ、おとうさんがコツソリと、人知れず沈めて置いてあるわけよ。

アナルキスタ。――ポリシエヰキは不思議な事をする人種だね……そこらがオリエンタリスモの趣味の遺傳かも知れない。で、君の聟さんになる人には、どうしてもそれを探し出して來る義務があるといふわけだね？

肩掛の女。――さうよ。さうよ。さういふわけよ。

アナルキスタ。――さうして、君のおとうさんは、まだ生きてるのかね？

肩掛の女。――えゝ、生きてるわ。

アナルキスタ。――どこにゐるの。
肩掛の女。――ヹネチアにゐるわ。
アナルキスタ。――ヹネチアに？　愛に？　この町に？
肩掛の女。――えゝ。
アナルキスタ。――で、何してるの？
肩掛の女。――コミサロよ。
アナルキスタ。――（ギヨツとしたやうに、）コミサロ？　ヹネチアのソヴイエトォの？
肩掛の女。――えゝ。
アナルキスタ。――へい？　さうかい？　さうとは一向氣がつかなかつた！　僕ア、また、やツぱり君を、たゞのダンチスチノオだとばつかり思つてゐたよ。
肩掛の女。――たゞのダンチスチノオぢやありませんか？
アナルキスタ。――そりやさうにちがひはないけれどね……
（突然、花火の揚る音がする。）
肩掛の女。――（高欄へつかまつて、ピアツツエツタの方を覗き、）さア、來るわよ。來るわよ。
アナルキスタ。――（やゝ緊張した顔付となり、）何がね？
肩掛の女。――プロツエツシオネがよ。
アナルキスタ。――はゝア、行列かい……これで歐羅巴も、とう〳〵全部、〇〇〇〇の國家ばかりになつたといふわけか……

肩掛の女。――(おどけたやうに、)アナルキスタのあなたにはお氣の毒ね?

アナルキスタ。――(さあらぬ體で、)どう致しまして……僕の天地はこれからサ。

(大衆のフラアー!といふ喝采が起る。引續いて、花火がポン〳〵と揚る。樂隊の吹奏がきこえはじめる。群集の〇〇〇〇〇〇〇聲が合唱される。と、バジーリカのバルコーネが遠去かつて、だん〳〵にピアツツアが前面に現れる。行列がいくつも〳〵サン・マルコの前を通り過ぎる。)

(二つ三つ行列の過ぎた頃、バルコーネは再びだん〳〵に近づいて、全く元のまゝとなる。バルコーネの下では、間を置いては行列の通りすぎつゝある心持。松火の煙など、折々濛々と舞ひ上つて來る。)

肩掛の女。――(しきりに手を叩いて、それから眞紅なハンカチを出して、夢中になつてそれを打振り〳〵、)來たわ。來たわ。とうとう來たわ……フラアー!　おとう……さアん!

アナルキスタ。――(キツとなつて、ポケツトへ手を突込み、)え?　君のおとうさん?　どれ?　どれが君のおとうさん?

肩掛の女。――あれよ。あれよ。あの旗のすぐあとから來る日本人がおとうさんよ……おとうさアん!　フラアー!……あれ、こつちを向いて笑つたわ……フラアー!

(アナルキスタ、矢庭に擲彈を取出して、高欄の下へたゝきつける。凄じい爆音。ワアツといふ怒鳴が起る。)

肩掛の女。――(仰天して、アナルキスタへ武者振りつき、)氣がつかなかつた!　氣がつかなかつた!　お前はやつぱり!……

(二人はバルコーネの上で、くんづほぐれつ大格鬪をはじめる。格子の下から、どやどやと民警が六七名現れる。直ちに入亂れて格鬪をつゞけ、トヾ、二人とも取押へられる。)

アナルキスタ。――(高手小手に縛められながら。)この女に關係はない!

肩掛の女。――(同じく縛められつゝ。)この人は私の夫です!

アナルキスタ。――うそだ。うそだ。この女はコミサロの娘だ。

(民警、顔を見合せる。)

月かくれる。

ボッチイ

(水底の石牢。暗黒。)

アナルキスタ。――(姿は全く見えず、聲ばかりが悲壯にきこえる。時々、鐵鎖が、ガチャリ、ガチャリと鳴る。)權力のある間は暴力がある……血をもつて支配するものは、必ずまた血をもつて酬いられる……この世界を支配するほどのものは、悉く〇〇〇〇をもつてのみ敢へてするのだ。〇〇〇〇〇を離れては、この世の中に支配はない。〇だ。〇だ。すべてが〇だ……帝王は何をもつて支配したか? 〇〇〇〇ではないか? 〇〇主義は何で倒れた? 〇〇〇〇ではないか? ブルジョアは何をもつて支配したか? 〇〇〇〇ではないか? 資本主義は何で倒れた? 〇〇〇〇ではないか? プロレタリアは何をもつて支配したか? 〇〇〇〇ではないか? 〇だ。〇だ。すべてが〇だ……平和? 平和はどこにある? どこに平和がある? 〇〇のある間は、〇〇〇〇〇ものゝある間は、平和なんぞは斷じてない。この世は暗だ。修羅場だ。〇〇〇〇〇の世が來るまでは、この世に光明は斷じてない……なぜ人間はいつまでも愚かなのだ? なぜ同胞を〇〇〇ないのだ? なぜ幸福を蹂躙するのだ? あゝ、愚かなる人間よ!

肩掛の女。――（同じく姿は見えず、同じく聲ばかりきこえる。但し、壁一重隔てたほどの音調で。）おとう樣は殺された。おとう樣は殺された。誰が殺したんだ？　誰がおとう樣を殺したんだ？……私の夫だ。永年こがれ求めてゐた私の夫だ。私ばかりぢやない。おとう樣自身すら、私のためにいろ〳〵と工夫して、尋ねてゐて下さつた、その現在の私の夫だ……その私の夫の手にかゝつて、おとう樣は殺されたのだ……私の夫は何者だ？　アナルキスタだ。おとう樣の敵だ。アナルキスタはなぜおとう樣の敵なのか？　おとう樣がコミサロに選ばれたからなのだ。支配者になられたからなのだ。權力者の地位に就かれたからなのだ……なぜ人間はいつまでも愚かなのだ？　なぜ〇〇に服從したいのだ？　なぜ奴隷生活を續けてゐたいのだ？　なぜ自分から幸福を蹂躙したがるのだ？　あゝ、愚かなる人間よ！……

アナルキスタ。――おゝ、フリジス！　その聲はフリジスぢやないか？

肩掛の女。――あゝ、あなたは私のエッツオ！　あなたはまだ生きてお出でになるの？

アナルキスタ。――生きてゐる。生きてゐるとも！　どうして俺は死なれやう！　人間と生まれながら、當然受くべき幸福を受けぬうちに、何として俺は死なれやう！

肩掛の女。――あゝ、あなたはそんなに幸福が得たかつたんですか？

アナルキスタ。――得たかつたんぢやない。得たいのだ。得ずにはどうしても死なれないのだ。

肩掛の女。――それなら、なぜ、あなたは私のおとうさんを殺したのです？

アナルキスタ。――お前のおとうさんはコミサロぢやないか？　俺はお前のおとうさんを殺したんぢやない。俺はたゞコミサロを殺したのだ。〇〇を倒したのだ。人間同志の社會から〇〇そのものを消滅させたのだ。

肩掛の女。――私のおとうさんは人間です。人間を殺して、あなたは人間としての幸福が得られるものと思つてゐるんですか？

アナルキスタ。――お前のおとうさんはなぜコミサロになつたのだ？　人間同志の幸福を妨げるものは、〇〇〇〇〇〇の制度ぢやないか？　〇〇〇〇の肯定ぢやないか？

肩掛の女。――私のおとうさんは過渡時代の人間です。さうして今はまだ過渡時代ぢやありませんか？

アナルキスタ。――過渡期を葬るのがアナルキスタのミシオなのだ。

肩掛の女。――そのミシオこそ、人間の幸福を否定してるのぢやありませんか？

アナルキスタ。――あゝ、人間と人間との幸福の間には、なぜ、いつまでも、萬里の長城が横たはつてるのだらう？

肩掛の女。――その萬里の長城こそ、このボッヂイの壁一重です。あなたには、アナルキスタのあなたには、なぜこの壁一重が破壊して了へないんです？

アナルキスタ。――…………

（うす明るくなる。）

鎖につながれたアナルキスタ。

血にまみれたコミサロ。

（コミサロの脚下から、眞紅の焔が、炎々と黒煙を吐きつゝ燃えあがる。）

アナルキスタ。――おゝ、あなたはフリジスの父上様！

コミサロ。――さうして、君はわしのボフイロぢや。

アナルキスタ。――ボフイロ？……（絶望したやうに）　が、今となつちやア……

コミサロ。――わしは君に一言お禮を述べに來たのぢや。

アナルキスタ。――お禮を？　あなたが？　僕の擲彈で殺されたあなたが！

コミサロ。――さうぢや。

アナルキスタ。――な、な、なぜですか？

コミサロ。――立派な君が君自身のミシオを果してくれたからぢや。

アナルキスタ。――ふうむ？　併し、あなたはボリシエヰキぢやないですか？

コミサロ。――ボリシエヰキはコムニスモオの前衞ぢや。アナルヒストオも、もと〳〵コムニスモオの獨立枝隊ではなかつたか？

アナルキスタ。――でも、あなたと僕とは敵味方ではないですか？

コミサロ。――さうぢや。たゞ〇〇〇〇ものをば、人間社會から消滅させる、その手段の上でだけナ。

アナルキスタ。――さうすると？

コミサロ。――ブルジョアジイを撲滅しつくして了ふまでは、ボリシエヰキは權力の肯定が必要ぢやつた。アナルヒストオはそれには耳を貸さなかつたものぢや。

アナルキスタ。――無論です。

コミサロ。――それが今日まで、歐羅巴に、だら〳〵とブルジョアジイを生きながらへさせてゐた、アナルヒストオの根本的の失策ぢや。

アナルキスタ。――いや、失策は却つてボリシエヰキにある。權力肯定にある。

コミサロ。――然らばブルジョアジイを掃蕩し得たのは何者の力ぢや？

アナルキスタ。——然らば、なぜ立ちどころに、ボリシエヰキはコミサリアトオの支配制度を撤廢しないのか！

コミサロ　——歐羅巴ばかりが世界ぢやない。世界はまだ——過渡時代ぢや。

アナルキスタ。——それゆゑに、我々は飽までも○○○を叫ぶのだ。

コミサロ。——それゆゑに、わしは君にお禮を述べに來たわけぢや。

アナルキスタ。——分らん！

コミサロ。——ボリシエヰキの權力肯定は、たゞ〳〵權力を否定する爲の肯定にすぎぬ。

アナルキスタ。——分らん！　否定の爲の肯定？　分らん、分らん！　否定の爲には、たゞ否定のみがあり得るばかりだ。肯定を否定するから否定なのだ。

コミサロ。——アナルヒストオはあまりに單純ぢや、

アナルキスタ。——ボリシエヰキはソフイストだ。ソフイストはブルジョアだ。

コミサロ。——わしのお禮が君には受けられんのか？

アナルキスタ。——分らんお禮は受けやうがない。

コミサロ。——さうか……（と、愁然として、血にまみれた首を垂れる。）

（紫色の焔が、一隅から新たに燃えあがる。）

（銀髯黑衣の老人現る。）

老人。——（コミサロに、）わしに見覺えがあるぢやらうの？

コミサロ。——おゝ、あなた樣はアルプスの……

老人。——アルプスで見たものは何ぢやつた？

コミサロ。——…………

老人。——メンヒの上のシムボーロを覺えてゐるか？

コミサロ。——はい。

老人。——あのシムボーロは何者の姿ぢや？

コミサロ。——ルパン・シユーニヤターの姿で厶いまする。

老人。——ユングフラウの上のシムボーロは？

コミサロ。——シユーニヤターイヴ・ルーパンの姿で厶いまする。

アナルキスタ。——（愕然として、）おゝ、シユーニヤターイヴ・ルーパン！

老人。——（アナルキスタに、）どうぢや、分つたか？

アナルキスタ。——…………

老人——否定から出た肯定ぢや。

アナルキスタ。——……は……はい。

老人。——シユーニヤターイヴ……

アナルキスタ。——お、ルーパン！　分りました！

老人。——アヴローキテーシユヴラぢや。

アナルキスタ。——おゝ、さうです。さうです。さうでした……

老人。——（聲を勵まして、）分つたか？

アナルキスタ。——（喜ばしげに、）……は……はい。

コミサロ。――わしのお禮が受けられるか？

アナルキスタ。――受けられます。受けられます。……有難う。ミア●ボパトロ！

コミサロ。――おゝ、ミア●ボフィロ！

（兩人握手する。）

老人。――お前達にはまだ分らぬ。

兩人。――え？

コミサロ。――何がでムいまする？

老人。――お前達はボパトロでもボフィロでも何でもない。

兩人。――え？

アナルキスタ。――では、何なのでムいます？

老人。――敵味方ぢや。

兩人。――え？

コミサロ。――とは、また、どうしたわけでムいまするか？

老人。――この青年は何者ぢや？

コミサロ。――は？

老人。――お前を棄てた、お前に呪はれた、さうしてその憎しみのお前の種を宿した女の子ぢや。

コミサロ。……えッ？　すると、あの……

老人。――さうぢや。あのブルジョアの巴里の女の子ぢや。

コミサロ。——…………

老人。あのユングクラウの子ぢや。

アナルキスタ。——えッ？　それでは僕のおとうさんが？　僕の本當のおとっさんが？

老人。——卽ち、このコミサロぢや。ポリシエヰキぢや。お前の敵ぢや。

アナルキスタ。——（決然として）いゝや、僕にはもう敵はありません。絕對的にありません。主義の爲には、實の親まで、肉親の父まで殺して了つた人間です。

コミサロ。——さうして、わしを殺したのは、わし自身の憎しみぢや。わし自身の憎しみから生まれた、アナルヒスモといふ憎しみそのものゝ權化なのぢや。

アナルキスタ。——さうです。僕は憎しみの權化です。從つて、この世に於ける人間の幸福を追求する資格がなかつたのです。

老人。——シユーニヤターイヴ・ルーパン……その憎しみが、卽ち幸福ぢや。卽ちフリジスぢや。

兩人。——おゝ、フリジス！

老人。——眞珠の腕輪を、なぜ探しにゆかぬ？

兩人。——琅玕洞！

老人。——ギヤテー、ギヤテー、パーラギヤテー、パーラサムギヤテー、ボードヒ、スヷーハー！

（暗黑に戻る。）

グロツタ・アツチユウラ

（水中の石窟、そのまゝに琅玕洞となる。

（瑠璃末を溶かしたやうに、驚くべき空色、その色彩を湛へた水中には、一箇の男性の裸體姿が、浮沈する毎に、プラチナのやうな銀色を燦爛と散らしながら、恰も何物かを探り求むるもののやうに、縱横に泳ぎまはつてゐる。

（ブク〳〵と泡沫が上昇する。

（その泡沫の群叢が、各方面から水上の或一箇處に集中して、次第々々に形ちをなし、やがて恰も帆立貝のやうな一大介殼舟となる。

（嚠喨たる音樂が起る。

（ボツテイチエリの『ヴイナスの誕生』を思はせる、フリジスの裸體像が、介殼舟の上へ、朦朧と現れる。

（アナルキスタ、片手に腕環を掲げながら、水中から浮かび出る。

（フリジス、腕をさしのべる。アナルキスタ、舟中へ這ひあがつて、喜ばしげに、フリジスの腕へ腕輪をはめる。フリジス、にツこり笑ふ。）



呪ひ

加藤一夫

A―市の講演會は案外永い時間がとれた。

最後の順番になつて居た中原が演壇に立つた時はもう室内がほの暗くなつて聽衆の顔さへはつきりとしない位であつた。事實彼等の一行がその汽車に乘つて歸る事にして居た一日たゞ一回の急行列車の到着する午後五時半にはほんの半時間位の時間しか殘されて居なかつた。

中原は、その朝彼の旅館に訪ねて呉れた土地の主催者側の一人から『出來るだけながく、充分に話して下さい』と云はれて居たので、自分も、此處でこそは充分に自分の思想の本質を話して行き度いものだと思つた。で、始めて會つた土地の人々とゆつくりと話し合ひ度いのも割愛して、みんなと離れて獨り想を練ることに腐心して居た。ところが、時間の都合上、それがすつかり無駄になつてしまつた。彼はそれを殘念にも感じ、當惑も感じながら壇上に立つた。聽衆は彼に大いなる期待をもてる如くに、彼がその小さな肉體を演壇に運んだとき、熱狂的な拍手をもつて彼を迎へた。

彼は當惑した。第一彼は、十分や二十分で話し終へるやうな講演の準備をして

居なかつた。また、聽衆のうちの一部の——しかしそれが彼を迎へた主なる人々である——意向が、彼に要望して居るやうな內容の話しは、今までの講師のそれは著しく種類が違つて居るものであつた。而もそれを、短時間の間に端的に語つてしまふのは、まるで水と油とを混ぜ合はす樣なもので、甚しく調和のとれないものであるのがわかつて居た。

彼は殆んど夢中で何かをしやべり出した。それはまるで支離滅裂な斷片語のつぎ合せに過ぎなかつた。たゞ、時間の切迫と急に暗くなつて、もはや全く、聽衆と辯士との顏も見えなくなつた一種の昂奮と緊張味とが、彼の講演のボロを隱くしてしまつた。當面の事實の上からよりは、彼が一身上に起つた重大事からの、彼の苛々しさが語らせる絕望的な彼の激語が聽衆の拍手を迎へた。そして彼自身も何時の間にかその昂奮のうちに捲き込まれて、汽車の着く殆んど十分程前にその不出來な講演を終へた。

彼が演壇を降りた時分には、聽衆の大部分はもう場外に溢れ出ようとして居た。そのうちに何處からとなく××歌が唱へ出され、×××萬歲が叫び出された。主催者側の人々が彼の周圍に集つて來た。彼はそれ等の人々と遽しい別辭を交はして、公會堂の表ての出口に急いだ。車が二臺、そこに待つて居て、彼の妻はもう、末の兒と共に車上の人となつて居た。彼は今一つの車に、上の子と一緒に乘つた。

かうして彼等はやつとのことで汽車に間に合つた。彼等の一行は上野行きに乘り、主催側の人々は靑森行きに乘つた。一二分間先きに發車した靑森行きの車窓から、同志の面々の顏が現はれ、手がのばされ、そして彼と×××の萬歲が、發車と共に叫ばれた。彼もこちらから、萬歲を叫んで彼等の眞情に應へた——心の中には云ひ知れぬ空虛と寂しさとを感んじながら

靑森行きの汽車は段々と遠くの方へ去つて行つた。やがて彼等の急行車もその反對の側へと動き出した。

彼はほつと一息ついた。心の中の空虛と寂しさとが、ドッと潮時の波のやうに寄せて來た。この一週間餘りの講演旅行

の間、彼にはほんとうに××の熱情に燃えて居たであらうか。かつて彼が、はじめて×××の團體を組織して、關西地方にその宣傳旅行に出かけた時のやうな感激と希望とを胸の中に藏して居たであらうか。否々、彼には今、そんな感激や昂揚は心の隅の何處を探したつて存しては居なかつた。彼の胸を充たして居るものはたゞ、重苦るしい憂愁と、絕望的な喪心とより外の何ものでもなかつた。

二等室のベンチは客でもつて殆んど一ぱいであつた。汽車は、まるで大浪に搖られるやうに烈しく動搖した。加ふるに車室を通るスチィームは室内を溫める程度を越えて、眩暈が起りさうな程蒸し熱かつた。

惱みに終始して居る妻は、汽車が動き出すと直ぐ、氣分がわるいと云つて、頭を車窓に凭らせながら鬱ぎ込むだ。昂奮して居る二人の子供達は、キャアキャア云つて窓から外を眺めたり、靴を穿いて車内を驅けまはつたりして、徒らに親の氣をばかりもませた。そしてその上まだ、お腹が空いたと云つて食堂に出かけることを強請(ねだ)つた。

「何うだね、食堂へ行かない？」と彼は、妻を誘つた。けれど妻は「私、氣分がわるいから……」と云つて、行かうとはしなかつた。それでも、子供が餘りに八ケ間敷いので、一緒に出かけて行つて見たが、狹い食堂は客で一ぱいだつた。仕方がなく彼等は、喫煙室に腰をかけて客の去るのを待つて居た。が、客は何時までも食堂にへばりついて動かなかつた。彼等はたゞ、苦るしい時をその喫煙室で過すばかりであつた。

やつとの事で一人の客が去ると、彼はそこに一人の子供を坐らせた。そして彼は食事の注文をして他の客の去るのを待つた。一人の子供が食事をすますと、彼はそれをつれて室に歸つた。そして妻には今一人の子を共に食事を濟して來るやうにと、殘り少なになつた財布を渡した。

暫く經つて、妻が、蒼い顏をして歸つて來た。

「馬鹿に早かつたね、もう濟んだの？」

彼は驚いて訊ねた。

「いゝえ、待つて居る間に、胸がわるくなつたので、子供にだけ食べさせて歸つて來たの。」

かう答へながら妻はまた、車窓に凭れかゝつた。

「横になつていらつしやい、こゝへ」

と彼は、妻の寢ころべる丈けの場所をとつて、彼女の枕になるものを與へた。そして自分は二人の子供の世話を見た。何とかして早く、子供を眠らせようと、彼は努めた。けれど、昂奮し、神經質になつて居る子供達は容易に眠らうとはしなかつた。

「さあ、はやくねんねしませう」

膝の上に抱いて居る子供に斯う云つて、氣持ちよく眠らせるやうにしようと思ふと

「いやあ、眠くない」と、子供は反對して、居睡りしかけて居た眼をまで、わざとぱつちりとあけるのであつた。

別の室に乘込んで居たFから、一緒に食事をしようと使ひをよこした。彼は勿論、中原と一ぱい飮むつもりで居たのだ。中原も此の寂しさを酒で氣晴らし度いと望んで居た。けれど子供は何時まで經つても眠らなかつた。中原はまた苛々し出した。

とは云へ、それも何うにもならない事であつた。彼は到頭腰を落着けて、子供には何とも云はず、たゞ彼を膝にのせたまゝ、眼をつぶつて考へに耽つた。

云ふまでもなく、さうした場合に、一番先きに頭に浮んで來るものは、妻の問題であつた。

一度若い愛人の許に走つた妻は、彼が此の旅行に出る二三日前に歸つて來たのである。だけどそれは、彼女が愛人に飽いたからではなく、中原のところに殘して來た子供の愛にひかされた苦しみから、ほんたうに憎みも嫌ひもして居ない

夫のところに歸つて來ただけの事であつた。だから彼女は、愛人が狂者のやうに嘆き悲しみ苦しむのを見るにつけ、日に二通三通の手紙をよこして、今一度來て呉れ、來て呉れねば氣が狂ふとか迚ても生きられないとか云はれるにつけ、今更彼をふり捨てる事はすまないと感じると共に、それ程自分を愛して居て呉れるのかと思ふと、男に對する愛着の氣分が愈々强く深く慕つて行くのであつた。中原には十分その苦しみが諒解された。自分の受けた侮辱をも苦しみをも無念をも、一切押へつけ、思ひ流して、ひたすら彼女の苦しみを救はうとばかり努めたのであつた。さうして、現に今、妻のかうした苦しみから惹き起される寂しさをも――その寂しさは彼にとつては、彼の全生命を奪はれたのにも等しかつたのだが――深手とこらへて、彼女の眞の幸福のために自分の一生をも犧牲にする氣で居たのであつた。だが、餘りに早く、彼の家に歸つて來た妻にとつては、彼女の經驗した悅樂は、要するにそれは、見果てぬ夢であつた。そしてその悲しみは大きく、その苦しみは深かつた。

――何うしても彼女は、自分の家には落着かないだらう。運命は彼女を今一度彼女の愛人の許につれて行くだらう。かう彼は何等の疑ひもなく考へるのであつた。

――運命ならそれも仕方がなからう。けれど此の自分の疵は？　成長して行く彼女の悲劇は？

彼はもう耐へやらぬ懊惱に襲はれた。

冷たくひえた妻の足が彼の膝の側に置かれてあつた。かゞめて寢て居る彼女の肉體は窮屈さうに彼の眼に映じた。彼はそうと、彼女の足をとつて、抱いて居る子供の小さな膝の上に載せ、重みが子供にかゝらぬ樣に自分の手で支へながら、彼女の脚をのばしてやつた。その刹那、彼女は眼をあけて彼を見た。

「何うだね、まだ氣分がわるい？」

彼はやさしく彼女に訊ねた。

「えゝ、少しはいゝやうです。」

彼女もうるんだ眼をして彼に答へた。

中原は、何時か食堂で氣分のわるくなつた人はその由を云つて吳れるなら、いゝ藥をあげると云ふ意味の事が書かれてあつたのを見たことを思ひ出した。そして妻に云つた。

「待つていらつしやい。今、藥をもらつて來てあげるから。」

やがて子供等は眠つてしまつた。彼はその小さな兒を妻の傍に寢かせつけて、車掌を探しに行つた。

藥は車掌によつて與へられた。彼はそれを妻にのませてから、彼女がまた、疲れはてた病人のやうにすや／＼と眠るのを見て、自分一人で食堂に出かけた。

食堂にはＦとＫとが居た。

彼の姿を見るとＦは、

「あんまり遲いからもう二人で飲んでしまつた」

と、醉つた元氣で色々のことを彼に話した。卓子の上には正宗の二合瓶が二本と、食ひさしの皿とが載つかつて居た。

そこへボーイが勘定の釣錢をもつて來た。

中原も一二品料理を注文して、酒を命じた。二人はもう飲めないと云つてサイダーを注文した。そこへ折りよくＳがやつて來たので、中原はＳと二人で飲むだ。

講演會のこと、ＳとＦとが、中原が滯在して居た溫泉地の別の宿で一夜を飲みあかした事なぞが語られた。けれど、中

原にとつては、彼自身の問題の他のどんな話しも興味がなかつた。話しはたゞ、中原の寂しさを深めて行くばかりであつた。

　彼は醉はなかつた。けれど酒には味がなかつた。苦しんで居る妻を打つちやつといて、自分一人がこんなところで永く居てはならない樣に彼は思つた。で、勘定をすまして歸らうとして居るところへ、Uがやつて來た。旅行中にUとくだらないいがみ合ひをしたFもSもKも、Uの姿を見ると直ぐ、自分の車室に歸つて行つた。Uは寂しがつて中原をとゞめた。

「でも、今度の講演會は成功でしたね、これ位にいければ結構ですよ。」

　Uはこんなことから、T——に於ける講演會のエピソードを話し出した。

「昨晩、Tの勞農社できいたんですがね。Tには貴方の熱烈な崇拜者が居るんですよ」

　その言葉に中原は、胸に釘をさゝれるやうな驚きを感じた。それこそは彼が、Tで講演する事を、何よりも恐れて居た事に相異ないと感じたからであつた。

「それは男かね、女かね。」

　中原は顏の色をかへて訊ねた。

「それが女なんですよ」と、Uは、中原を喜ばせるつもりであるやうに、ニヤ〳〵と笑ひながら答へた。

「うむ、何と云ふ女だね」

　中原は恐る〳〵訊ね出した。

「何とか云ひましたね。さう〳〵、川口よみ子ッて云ふんです。」

「川口よみ子？」と中原は不審に思つて首を傾けた。それならば、彼の胸の中にある對象は違つて居た。事によると別の女かも知れないなと考へながら、彼は更に訊ねた。

「そしてその女の年は幾つ位？」

「年はもう四十を過ぎて居るらしいんです、ですけれど、それはもうほんたうの貴方の心醉者、何でも中原さんでなければと云つて、今度の講演會の切符も、その女一人でどんなに澤山賣つて呉れたか知れないんですつて……」

中原はもう疑ふべき餘地を見出さなかつた。Tーには他に知つた女はなし、年恰好から云つても、てつきりさうでなければならぬと考へた。

「ところが、その女は講演會には來て居なかつたらう。僕も隨分氣をつけて見たんだけど目つからなかつたんだ」

「それが不思議だつてみんなが云つて居たんです。講演會に來たら、みんなでお禮を云はうつて云つて居たんださうですけど……」

――あの女が何麼に俺を戀ひ慕つて居たかを俺は知つて居るんだ。今もどんなに俺のことを氣にして居るかも知つて居るんだ。

と中原は心の中で思つた。

けれど、その思ひは彼の、何等の喜びも慰めも與へはしかつた。それどころか、悲しみと苦しみと恐怖とをさへ起させた。彼はどんなに眞劍に、その女が彼を愛して居つたかを知つて居たのだ。けれど彼は、何うしても彼女を愛する氣にはなれならなかつたのだ。彼はたゞ、彼女の境遇とその運命とに同情したのだ。そしてたゞそればかりであつたのだ。けれど彼女は、人知れず彼を愛し慕つて居た彼女は、彼の同情を彼の戀でと思ひこんでしまつたのであつた。そして彼に、戀人としての愛をさゝげたのであつた。だが、それが彼に、どんな恐怖を起させた事だつたらう。彼は彼女の言葉にも、行爲にも、顏にも、肉體にも、蛇のやうな執念を感じるばかりであつた。彼は安珍を執念の火で燒きとろかせた蛇の女、淸姫を彼女に連想した。小さいときに、ちよつとした惡戯から半殺しにした蛇を、蛇と云ふものは執念深いものだときかされて居たに

も拘らず、半殺しにして置くのは尚更残酷な事だと云ふ考へから、ぴく〳〵慄へながら遂にすつかりとその生命を奪つて川に流してやつた事を思ひ出した。そしてその蛇が今、此の女になつて自分を呪つて居るのだと云つた風に考へて、ぞつとしたのであつた。

その女である。その執念の蛇である。

勿論そんな馬鹿氣た事があらう筈はないと彼は考へた。けれど、酬いられなかつた彼女の愛の、そんなにも深い嘆きを彼女の身になつて考へて見ると、彼女の苦しみが、無條件に自分を呪つてもいゝやうな氣がするのであつた。

恐怖にふるへながら中原は訊ねた。

「そしてその女は何をして居るの？」

「何でも夜まはりをして居るんださうです」Ｕも段々と眞面目な顔になつて答へた「而もそれが、白装束で、頭に五德を頂いて、金の杖をチャリン〳〵云はせながら歩るくんで、氣味がわるくてたまらないんださうです」

「牛の時詣り、」と云ふ観念が電のやうに中原の頭の中に閃いた。彼はもう危くそこに打ち跪れようとするところであつた。彼は兩手でしかと卓子を掴んだ。そして「酒……酒……」とＵに口走つた。Ｕはあわてゝ彼に酒を注いだ。彼はたてつゞけに幾杯かの盃を傾けた。

「何かあるんですか」彼はもう顔を眞ッ蒼にして訊ねた。そして、そんな事があるんなら、こんな話しをするんではなかつたんだがと、更に彼に酒をすゝめた。

中原は酒を飲んだ。しかし幾ら飲んでも酔ふ事が出來なかつた。遂に彼は、突然立ち上つて、

「俺はもう行く、もうこんな話しはやめた」

と、夢遊病者のやうに、ひよろ〳〵とよろめきながら食堂を出た。

寢室に歸つて見ると、子供も妻も、すや〳〵と眠つて居るやうであつた。けれど彼は、默つて居る事が出來なかつた。彼は寢て居る妻の肩に手をかけて、一二度ゆすつて見て、

「何うだい、まだ氣分はいけない？」

と訊ねて見た。

「えゝ、あのお藥のおかげでずつと樂になりましたよ」

と妻はやゝ晴やかな眼をあけて答へた。

「ゆつくりおやすみ」

かう云つて彼は、寢て居る子供の前に僅ばかりの空席を見つけて、そこに腰をかけた。

「俺達の不幸は、屹度あの女の呪ひからだ」

と中原は考へた。

勿論彼は、彼女が謂ゆる牛の時詣りをして居るのだとは信じなかつた。けれど、少くとも、さうした異樣な裝束をして夜まはりをして居る心の底には、さうした恨みが無意識の間に行はれて居るのだと云ふことは疑ひの餘地がないと考へないでは居られなかつた。

彼は、彼が結婚をした當初まで、屢々彼女の惡夢に襲はれた事を思ひ出した。

或るときは異樣な鬼が、或る時は異樣な女が、不意に彼を襲ひ、彼の前に現はれて來た。彼はそれを、直覺的に彼の女の精だと思ひ込んでしまつた。そしてその異樣な精と格鬪を初めるのだつた。それは夢ではなかつた。彼は明に、その妖

魔の肉體を感じて居た。格鬪する妖魔の、肥え太つて居る腕を感じて居た。そして、早く眼をさましてその本體を見とゞけてやらうとあせるのだつた。けれど眼はあかない。そのうち妖魔は逃げうせさうになる。彼は遂に、せめては彼女の肉の一片をでも、眼がさめたときの證據にと、ガブと彼の女の肩の肉を噛み切るのだつた。妖魔の姿が消えた。そして彼の眼がさめた。けれど、確に噛みきつた筈の肩肉が見えないのだつた。

かうした夢魔に襲はれたことは一度や二度ではなかつた。結婚後、何時の間にかその苦しみからは逭れて居た。けれど折にふれ事につけて彼女のことは思ひ出された。そしてその事を妻にも話し、友人にも話した。そして『彼女は今、何處に何うして居るだらう』と、彼女を哀れみいたはりながらよく語つたものだつた。

永い間、彼女との交渉は斷たれて居た。ところが、不意に彼は彼女からの手紙を受けとつた。それは、彼の妻が病氣のため、彼の一家が湘南の地に轉地をした時のことであつた。さうだそれは、あの到るところに拔け穴のついて居る、黝んだ血痕が今も尙、一番奥の四疊半の疊にくッついたまゝに殘つて居る、よく、妻も彼も、夜る夜中うなされた氣味のわるい家に移つてからの事であつた。

その手紙で彼女は、ふとした事から或る人のところで、彼の著書の一つを見つけて、そこで始めて、彼が今何をして居るか、何處に居るかを知つたのだと書いてあつた。そして、自分が東京で苦しんで居る時、どんなに彼の世話になつたかを感謝して、若干の金を送つたから、彼の著書全部を送つてほしい、もし幾分でも殘つたら子供の玩具でも買つてあげて下さいと記して居た。

その金を受取つたものか、何うしたものかと、彼は迷つた。けれど彼には、何うしてもその金を送りかへすべき理由はなかつた。それに彼女の眞心であるのに相違がない、その眞心を突つかへしては、どんなに彼女の氣がふとらされることかそれを思ふと、素直にその好意を受け納れるのが一番穩當な行爲だとしか思はれなかつた。

ところが、その後また、彼女から百圓の金が送りとゞけられた。その金とともに寄越した手紙には次のやうな事が記されてあつた。

「私は今、割合に樂な生活をして居ます。これは甚だ失禮ですけれど、往年の御恩がへしに、何になりとも使つて頂きたいと、取つてあつた金です。何うか、何とも云はないで納めて下さい。その代り私には、奥樣やお子供さん達と一緒に撮つた寫眞を一枚送つて下さい……。」

中原は當惑した。

成る程彼女は今、昔の姓と違ふところから見ると、何處か富裕な家かなんかに片付いて居るのかも知れない。そして自分のために、自分の事業を少しでも助け度いと云ふ心になつて居ると云ふことも自然な心の成行きだとも考へられる。けれど、自分は果して、こんな金を受けとつてもいゝものだらうか、少くとも自分自身の生活のためには絕對に受取つてはならないやうな氣がする。と云つて、これを返したならば何麼に恨まれるかも知れない。だが、受取つても亦、再び瀕々と文通が行はれ、彼女の執着を増さしむる樣では尙更苦るしい。何うしたらいゝものかと考へて居るうちに、ふと中原の心の中に思ひ浮べられた事は、丁度その頃、彼等のグループの間で計劃して居た講演會のためにその金を寄附してもらはうと云ふ事だつた。

彼女の金によつて講演會が行はれた。そしてそれは非常な波紋をその近傍の村々にまで及ぼした。中原の名は近村の農夫や、百姓や勞働者の愛敬の念をもつて迎へられた。だが、その代りまた、官憲や富豪の明らさまな敵となつた。それはもとより覺悟の上の事だから、中原には何等の痛痒も感じられなかつた。けれど彼自身の私生活の上には決してよい事が此の講演會から起つて來なかつた。中にも一番いけなかつたことは、氣味のわるい家だと云ひ〳〵、今はもう馴れて來て居る家から追ひたてを食つた事であつた。莊大な大洋と美はしい岬とを一眸のうちにをさめ、ちよつとおりると綺麗な砂

の横　出る事が出來、冬の日も、夏の朝夕も、病身な妻や子の健康を留するには此上もない好適の地に立てられた家だ。而も、住むのには不自由でない位の大きさをもつて居ながら、六疊一間の室代よりも安い位の家賃しか拂つてなかつた家だ。けれど彼は何うしてもそこを立ちのかなければならなかつた。

それから後彼は、二度ほど引越したが、ろくな事が起りはしなかつた。そのうち彼女からは、寫眞を早く送れ〳〵と矢のやうな催促が來た。

「私、私の這入つた寫眞を送るのはいやですよ。呪ひ殺されるかも知れないから」

と妻は、先方の要求である一家全族の寫眞を送るのをいやがつた。中原もやはり、同じやうな不氣味さを幾分は感じないではなかつたが「そんな事があつてたまるものか」と、到頭何時か、みんなの寫眞を送つてやつた。

中原は、これでもう彼女との交渉は打ちきり度いものだと願つた。けれどそれは空なる願ひであつた。彼女は、彼が社會運動のために獄屋につながれたと云ふ噂さをきいたが本當か、心配をして居ると、彼の妻のところへ手紙をよこした。彼のことが屢々夢に見はれて來るとも云つて來た。

彼はたゞわけもなく彼女の眞心に恐怖を感じて居た。するとまた今度は、彼女が住んで居るT－で講演會をやる事になつたのだ。

「Tに行くのはいやだな。行くならお前も一緒に行つて呉れ」

此厭凰に彼は彼の妻に云つた事があるが、その頃はもう、彼の妻は彼女の愛人をもつて居た。妻は冷かに彼に答へた。

「いゝぢやないの、行つて會つていらつしやい」

彼は妻の此の冷淡な言葉には何とも云へぬ寂しさを感じた。

だが、運命は到頭行くところまで行つてしまつたのだ。妻は彼から離れ、彼は生れて始めての寂しさと苦しみとを抱い

て、Tーの講演會にのぞみ、そして今、かうした戰慄すべき事實を教へられたのだ。
「自分は呪はれて居る。たしかに呪はれて居る」
彼はまたかう感じた。
時々妻は眼をさました。眼をさます毎に彼は「何うだい？」と訊いた。けれど妻の方では、彼の此の寂しい岑愛を少しも感じて居ないらしく見えた。
――酬はれざる愛、その寂しさ。
彼は自分の今の心持ちと、Tーの女の心持ちとを比較して見た。そしてTーの女に限りなき同情の涙をそゝいだ。

旅行から歸つて來ても妻の顔には晴々しては來なかつた。否、一層に暗く、憂鬱になつて行つた。續けざまに來る若い愛人の手紙は、一週ごとに妻の憂愁を増して行つた。
或る時には妻は、ほんとうに彼を愛して居る様に見えた。その時には中原は、妻の幸福のために彼女を彼のもとに遣らうと決心した。けれど或る時にはまた、妻は彼を左程愛して居るのではない、たゞ行きがかりと煩悩とのために悩んで居るのに過ぎない様に見えた。そして心の奥底に潜められた中原への愛が猛烈に復活して來る様にも思はれた。その時には中原は、何うしても彼の幸福のために彼女を去らしめてはならぬと考へた。
けれど凡てはみな成る様にしかならなかつた。男は自分でも如何ともする事の出來ない力に引づられて遂に妻をつれ出しに來た。妻もまた引きづられて遂に彼について行つた。
運命には遂に從はねばならぬのだと、中原は諦めた。諦めはしたが、斷ち切れぬ愛着の絆を如何ともする事が出來ず、

殆んど絶望的な心で彼女を送つた。

人の心の中には何麼苦悶が行はれて居るのかも知らないで、多くの人々が彼を訪問した。そして、彼には今、そこどころではない多くの問題を持つて來て彼を困らせた。それが彼の寂しさを紛らせると共に、一層その密度をも強めさせた。妻が去つて二日目の朝だつた。中原が是も愛して居る友人の一人が彼を訪ねて來た。彼は中原の妻が再び彼の許を去つた事を知らなかつた。そして自分自らの、中原に似た心の苦悶を訴へた。

彼等はつれ立つて街に出た。友は中原の紹介によつて得た仕事からの報酬を受取つた。そしてその金で或るカフェーに寄つた。二杯のウイスキーが彼等の憂鬱を幾分誤魔化した。歸りに、電車を待ちながら中原はTーの女の事を話した。

「その女は何をして居るんですか。」

と若い友は訊ねた。

「夜まはりをして居るのさ、そんな異様な風采をして……」

と中原は答へた。

「夜まはり？」と若い友は、案外感じの鈍い男だと云はないばかりの顏をして云つた。

「夜まはりぢやありませんよ、夜詣りですよ。そんな風をして夜まはりなんかするものがあるもんですか。その服裝にきまつて居るぢやありませんか」

——さう云へばさうだな、と中原は考へた。そしてだん〳〵と夜詣りに相違ないと信ずる樣になつた。今まではたゞ、無意識的に恨んで居るのだらうと思つて居た事が、今はもう、意識的に自分を呪つて居るのだと云ふ事を信じないでは居られなかつた。急に彼は、戰慄を感じた。

——何も呪はれるべき理由はない。と彼は自分を勵ます樣に云つた。しかし何と云つても呪つて居るのは事實だと考へ

ないわけには行かなかつた。

——俺達の家庭は最初から呪はれて居たんだ。そして俺が先づその呪ひにかゝつたんだ。そして妻も今、それにやられたんだ。そして尙、此の呪は成長するだらう。おゝ、俺は何うなるんだ。妻は何うなるんだ。

眞ッ蒼になつて中原は自分の家に歸つて來た。母親に去られて小さい胸に、人生最初の不幸である寂しさを感じて居る子供達は、眠むいのも耐らへて父の歸るのを待つて居た。

「パゝだつこして」と小さなのが飛びついて來た。

「パゝ何處へ行つて來たの？」と大きい方が馳けよつて來た。

だが、足りないものが一つある。そしてそれは家庭に於ける全部だ。中原は今、全部を失つた寂しい家庭に歸つて來たのだ。

彼は子供達をすかして眠りにつかしめた。そして自分は、離れの書齋にこつそりともぐり込むやうに這入つて行つた。

書齋に這入ると、何時もの通り大卓子の前に自分の席をしめた。けれど、もとより何等の仕事をするのでもなく、本を讀むのでもなかつた。彼は凝乎と眼をとぢて思ひに耽つた。

Tーの女の顏がどんな風であつたか、彼は思ひ出さうと努めた。けれど何うしてもそのはつきりとした印象が浮んで來なかつた。たゞ、背の高い、色の蒼白い、蛇のやうに人間の感じしか表はれて來なかつた。しかし、それ丈けでも彼の神經を脅かすのには充分であつた。彼はその蛇のやうに細長い肉體の白衣をつけて、五德を頭に頂いた女の姿を明に想像する事が出來た。たゞその顏だけが明白と彼の意識に上つて來ないのであつた。

ところが、さうして居るうちに、不意に彼はその顏を見た樣な氣がした。それは頭に角の生えた、眼のくるりとした大きなへの字型に結んだ口の兩端から醜い牙かはみ出て居る鬼のやうな恰好をした顏であつた。

彼は眼を閉ぢたまゝ凝乎とその顔に見入つた。するとそれは、何時の間にか自分の小さな子の顔となつて居るのだつた。

今度の旅行から歸ると直ぐ、子供達は「お面」を買つて呉れと彼にねだつた。仕方がなく彼が二人の子供をつれて行つて自分でその好きなのを選ばせると、弟の方の子は、鬼の面を見つけて、それを買つて呉れと云ふのだつた。彼は子供の云ひなりに鬼の面を買つてやつた。すると彼は、その面をかぶり、腰に日本刀をさげて、活動で見る松之助の眞似をして喜ぶのであつた。子供はそれに無類の興味を感じて居るらしく見えた。けれどその子供の顔に、かうした醜惡なそして不氣味な面を見ることは、父である中原には餘りに氣持のいゝ事ではなかつた。彼はその面に呪と憎しみとの表情を見ないでは居られなかつた。或る時には、自分の子が、さうした呪はしい醜い妖魔になつてしまつた樣な氣になつたり、或る時には、さうしたものになつて自分を脅かして居る樣な恐怖をも感ずるのであつた。そして彼は時々、やりきれなくなつて、

「坊ちやん、そんなお面を被るものでないよ」

と、たしなめるやうに云ふ事もあつたが、さうすると子供は、却つて、自分の演劇的功果があらはにあがつたことを喜ぶかのやうに、眼をむき齒をいからして松之助の型を眞似て見せるのであつた。

中原の眼には今、その鬼の面の自分の子の顔が現はれた。そしてそれはさながら、自分の子のほんたうの顔であるやうに思はれるのであつた。

「おゝツ」と彼は、思はず身ぶるひをした。そしてきつと兩眼を見ひらき、腕を拱いて坐つた。

その刹那、その不思議な鬼の面の幻覺が消えて行つた。そしてその代りに彼は、亂雜に眼の前に置かれてある原稿紙の切れッ端の間に一筋の髮の毛を見つけた。

彼はそれを、さつきから絶えず無意識の間にいぢつて居た自分の頭の髮の毛だと思つて、そつと右の手の指先きに摘みあげて見た。

短い髪の毛だと思ひの外、摑みあげて見ると、ぞろ〳〵原稿紙と原稿紙との間から、さながらとぐろを捲いた蛇のやうに、ぞろ〳〵と長い〳〵體をあらはして來るのであつた。ギヨッとしながら彼は、それを兩手の間にピンと引きのばして見た。そしてそれが、男の髪の毛ではなくて、長い長い女の髪の毛であるのがわかつた。

「誰の髪の毛だらうと中原は考へた。」そしてそれが、自分の妻の髪の外の何ものでもないのを知つた。

彼はその髪の毛に抑へ難き懐しみと寂しみとを感じた。彼は暫くそれを凝乎と眺め込んで居たが、さながら女の唇を吸ふやうに、熱情をこめて自分の唇と唇との間に引き入れた。

再びそれが兩手の間にピンと張られたとき、その髪の毛の一端が二またに別れて居るのを見た。さながらそれは、分裂せる妻の心の象徵でゝもあるやうに中原は思つた。たつた今、あれほどの感激をもつてそれに口つけした熱愛の情が、ぶつかけられた冷たい水で、急に氷のやうに冷されたかの如く中原は感じた。

「分裂した心！　分裂した肉體！」

中原は口の中で呟いた。そしてその二またのところから、細い毛を引き裂かうと試みた。一本の髪の毛はだん〳〵と二つに分たれて行つた。黒い皮膚の間から白い毛髓が表はれて來た。やがて一方が太く、一方がだん〳〵と細くなつて、あはやもう全く二つに別れてしまはうとした。

中原はそれを思ひきつて引き裂いてしまふことが出來なかつた。何れは引き裂かるべきものだ、けれどそれを引き離してしまふことはいやだ。

その思ひは恰度、妻が再び彼の家を去らうとして居た刹那のやうな彼の心持ちであつた。そしてその時彼は、ふら〳〵と彼の家にやつて來た妻の愛人の、痩せ衰へて、眼ばかりギヨロッとした、背の高い、執念の焔の燃えた幽靈のやうな姿を見た。

彼の姿を見たとき感じた、怒りと哀れみとの混淆した同じ感情を、再びまた彼は經驗した。そして一瞬間さうした感情に浸潤した彼の神經は、何時の間にか、その男の姿と、Tーの女の夜詣り姿とを混同して居るのであつた。

まことに彼は今明らかに、白衣のだらりと垂れたヒヨロ長い肉體の上に、色の蒼白い、口の尖つた、眼のギヨロッとした、物思ひに沈んだ女の顏を見た。だらりと垂れた頭髮の上には五德の脚が三本、角のやうに空を指して立つて居た。

恐怖にふるへて彼は衝つ立つた。

女の顏に向けられた彼の眼は怒りに燃えた。心臟は亂れ打たれる太鼓のやうな響きを傳へた。彼はそつと、左の手を後ろにまはして、直ぐ側にあつた硝子戶をあけた。そして、右の手をツッとのばして、擴げた掌で、女の姿を押しやるやうにした。

女はしかし、遁れ去らうとはせずに、無言のまゝ、ニッと笑つて、彼の方に進みよつて來た。彼は右の手を前にのばしたまゝ、ヂリ〳〵と後へ〳〵としだつて行つた。

退だれば退だるほど、女の像は次第〳〵に進み寄つて來た。彼はしかしそれを止める力はなかつた。一步〳〵彼は退いた。彼はもう硝子戶の外に在つた。けれど彼は尙そこに踏みとゞまる事が出來なかつた。あゝ、そして遂に彼は、そこにあつた狹い緣側の最後の尖端を踏みはづしてしまつた。ドターンと、地に倒れる彼の胴體の音が、夜更けの郊外の空氣に重い波動を傳へた。

氷のやうに澄み渡つた月が、蒼白い光を、庭の常磐木の葉に、柵外の薄の穗に、枯れた葉の落ちつくした骨のやうな樹の梢の上に、萬遍なく光被して居た。底ひ知れぬ蒼空の深淵に、キラ〳〵と輝く美しい星が、無數の球のやうに懸り碎いて居た。亂雜な家々の屋根は蒼白い光に反射し、高臺の二階屋は沈默の黑い影を空中に浮べ、そして、まだ——恐らく朝まで消される事のない黃金色の電燈が、窓々の硝子戶を通して點々たる光を投げて居た。

すべてはみな眠つて居た。

自然はたゞ無心の進行をつゞけて居た。



枯木

園池公致

私は最早枯木だ、さう濟富は彼れ自身の事を考へた。始め彼れは文壇に立つて行かうとした。今の文壇はいゝものを書きさえすれば直ちに認められて一躍流行作家になれる時だと思つた。それはさうかも知れなかつた。然し彼れにどれほどの才能があつたのか？藝術家と云ふ名は若い者を惑誘するものだ。一人の藝術家が現れるときつとその周圍に友達とか、兄弟とか、親類の者とかに、藝術家志願の者が現れるものだ。彼れ自身が實にその一人だつたのだ。

それに濟富は內心、自分に出來る行き方では第一流の文學者と云ふ譯けにはゆかないかも知れないと思つて居た。二番目のもの、金の次の銀、それがむしろ自信のない彼れの狙ひ處だつた。否、むしろ初めからの狙ひ處だつたのならいゝがそれは妥協だつたのだ。而も藝術の神樣は正直だつた。文壇と云ふものも盲目千人で又目明き千人であつた。

彼れは、沈默を持つて迎えられ、默殺され、亢奮の過ぎ去つた時には破產の跡に尙ほ殘つた負債のやうなものが取り殘されたばかりだつた。そしてその負債が實生活の氣持ちの上へにも一々附いて廻つた。たとへば僅かの享樂の上へにも、

一々利子を取り立てられなければならなかつた。彼れは方針を替えて他の職業らしい職業に就かうと決心した。そして生活を替える爲めに兎も角東京を去り、京都の伯母を尋ねて其處へ落ち付かうと考へた。

夜行で東京を立つ日の夕方、清富は一人の友達と築地の三十間堀を歩いて居た。東京に居る此の友に總ての事を打ち明けて置く事は何んとなく彼れを氣丈夫にさせた。それで彼れは一年程前から望んで居た結婚の話しが少し前に駄目になつた事もその時、その友に話した。話し乍ら彼れは噎る位に泣いた。これは彼れ自身にも意外であつた。おゝ、自分にもまだ泣ける。一脈の血が枯れずに殘つて居る。と其時清富は秘かに思つた。

時間が逼つて彼等は舊い新橋のステーションの方へ引返した。驛前の西洋料理屋へ手荷物が預けてあつたが清富は最早ウエートレスの澤山居る其處へ這入つて行く氣になれなかつた。それで彼れは荷物を友に頼んで自身はステーションの石段の上へに立つて待つて居た。

清富が殆んど忘れて居たやうな、十年の餘も逢つた事もなく便り一つした事のない伯母を思ひ出して、京都へ尋ねて行く氣になつたのは、路自ら通ずと云ふ心持ちだつた。彼れは久々で此の伯母に逢つて伯母さんらしい親みを感じ、こんな懐かしい伯母が自分にあつたのを今迄感じなかつた事を不思議に思つた位だつた。そして自分の境遇が俄に變り、そんな伯母が急に出來て現れたやうに思つた。そして嬉しく思つた。

伯母と云ふのは清富の父の本統の妹で、未亡人になつてからひどく肥つて、坐つて居ると膝が盛り上がつて居るやうに見えた。伯母の家では駒子と云ふ伯母の娘がお茶を運んだり、汽車の疲れを勞ふ爲めに玉子の半熟を瀨戸物の葡萄酒の盃のやうなものに載せて匙を添えて持つて來たりした。

清富は駒子とも十年以上逢はない譯けだが別に變つたとも思はなかつた。清富が駒子に逢つた最後は東京で、駒子が伯母に連れられて來た十位の時の事だつた。清富は伯母に頼まれて上野の博物館と動物園を案内した。それが既に女學校を

卒業して居ると云ふので濟富には多少の興味も或る時期もあつたのだが、逢つた瞬間には昔の面影はあり乍ら矢張り急に濟富の眼の前に現れたその年頃の一つの娘だつた。然し次の瞬間には直ぐそれに馴れて濟富は今の駒子を見馴れたもの、やうに思つた。

駒子の他に同じ位の女學生らしい美しさの目立つ娘が駒子を手傳つて色々なものを座敷の外迄運んで來た。それが女中らしくもないので、伯母はよく男や女の學生の世話をして居ると云ふ事を聞いて居たので、濟富はさう云ふ人だなと氣が付いた。濟富の堅い表情の爲めか其娘は彼に挨拶をしそびれたやうになつて、間もなく濟富の前に姿を見せなくなつた。あとで伯母の口から、それが今迄目茶苦茶な生活をして來た濱子と云ふ名の人で、頼まれて據なく引取つて世話して居るのだが、始終目が放せないので心配して居るのだと云ふ事を濟富は話された。それが濟富には自身に對する警戒の何にか豫防線のやうにもとれて輕くいやな氣がした。然し伯母は先方をこそ不信用であれ濟富に對しては充分信用して居るので、それに彼れの此頃の頑さうな感じから、少しも彼れを監視すると云ふやうな眼は向けられなかつた。教會の何にかの役員をして居る伯母は割りに忙がしくもあり極めて呑氣な性でもあつたので、其實始終濱子を監督して居ると云ふ程の暇もなかつた。濱子にしても伯母の云ふ程の目茶苦茶な生活と云ふのは想像出來なかつた。

濟富は京都へ着いてからは暫く毎日靜かな素人下宿を探がして歩いた。中々思はしいのがなくて夕方になるとがつかりして伯母の家へ戻つた。そのがつかりさも馬鹿に出來ない偉力を持つて居た。濟富は何にもかもいやになつてもう東京へ歸らうかと思つた事も度々であつた。

伯母の家では濟富は二階の一室に寢起きした。日曜には伯母の長男の保一が高等學校の寄宿舍から歸つて來た。或る晩保一が友達を三人連れて來たので歌留多會が開かれた。駒子も濱子も加はつた。そして伯母が讀み手になつた。讀み札と取り札とで組みを分けて今度は誰れと誰れとだと云ふやうな場合、駒子は「誰れさんと此の方と……」と云つ

て隣りに坐つて居た清富の膝を叩いて人數を差した。それは從兄妹らしい親しさで誰れも變に思ふものはなかつた。むしろ從兄妹としての關係が露骨に示めされて居るだけ、それだけ他の關係が考へられなかつた。

保一の友達が殆んど日曜毎に此の家へ歌留多會に集るのは、駒子や濱子に興味を持つてだと云ふ事は、さう年の違はない清富には自然に察せられた。それも惡くは思へなかつた。誰れ彼れにしてもそんな事を荒ら立てゝ考へる者はなかつた。學生の客が歸つてしまうと伯母や駒子や濱子の間にその人達の批評が交はされた。一番むつゝりした味も素ッ氣もない醫者志願の男が、今に大人物になると云ふので評判が良かつた。氣樂で快活な學生は一番話し相手にされ、其場の主要人物とされて居たに係はらず、蔭の評判は惡かつた。

濱子はさすがに伯母が苦手らしかつた。で左う云ふ學生の噂なぞも自分から立ち入つてはあまり口を利かなかつた。そして清富とも殆んど口を利く事はなかつた。濱子は新しい生活に入る爲めに伯母に預けられ其處から教會にも通つて居るのだと云ふ事を、清富は駒子の口から聞いたが、彼女自身も意氣込んで居た處の宗教生活に、それは唯教會の、もしくは基督信者のと云ふ位のものであるが、最早現滅（ディスイリュージョン）を感じて居るものらしかつた。

伯母の留守の晩なぞ階下で駒子と濱子の破裂したやうな高笑の聲が上げ潮のやうにリズムを置いて響いた。清富は一人二階でその聲を聞いて孤獨さと變な嫉妬を感じる事があつた。

朝になつて女中も駒子も忙がしいやうな時には、良く濱子が二階を掃除に來た。兩方の袖口を少し折り返して机の上なぞはたいた。濱子は清富が文學をやる人間だと云ふ事を駒子から聞いて清富に逢ふ前から彼れに興味を持つて居た。そして濱子は清富に近づき度かつた。

折り〳〵の機會が追々に清富と濱子に話しをさすやうになつた。濱子は清富の止むを得ず引き出されるやうな、氣の差すやうな脫殼の文學談を喜んで聞いた。此處にも不良少女、文學少女を感はす程度の藝術の魅力はあつたのだ。

「オイケンとベルグソンと何方がいゝのでせう」濱子はかう云つて淸富に訊いた。

淸富は自分が恥かしいやうにボーッとした。實際その頃の文壇は猫も杓子もオイケンとベルグソンの論だつた。然し淸富はオイケンもベルグソンも何んにも知らなかつた。濱子にしたつて尙ほ更らそんな事はどうでもいゝ筈であつた。

女のある一種の魅力のうちには時々こんなボロの一面が含まれてある事を淸富は感じないでは居られなかつた。

二週間程して淸富は鹿ケ谷の方に貸間を見付けた。そして引移つた。淸富の生活は單調と孤獨に責めさいなまれるやうだつた。一時間が立ち一日が立ち一週間の立つのが、そればかしが待たれた。淸富は唯近所を散歩して近くの山へ登る位が仕事だつた。彼れは家を出て山へかゝるといつもきまつて腰かける石に成る可く我慢して長く休むやうにした。そして退屈し切ると又先きへと登つた。

高い處へ登つて京都の街を見降ろすと騷々しい雜音もなつかしく耳を樂ませた。麓の學校の廣い運動場に、授業時間と見えて人影が一つもなく、テニスコートにネットが張られてあるのを見てゐると、淸富は淋しくて淚が出て來た。

伯母の家を尋ねるのは淸富にとつて一番良かつた。彼は駒子や濱子と話すよりも伯母と話しする事が一番樂しかつた。伯母の紹介で淸富は御所の近くに外國人の宣敎師を一週に三度宛定めて尋ねた。そして聖書の講義を聞いた。人の良い英吉利人の宣敎師は喜んで淸富の爲めに日本語で話しをしてくれた。それは聖書の方々の句を拔き集めて贖罪と云ふ事を說いて吳れるのだつた。然しその宣敎師の話は、疑問はいつもツルリと辷り拔けて進んだ。淸富はそんな方から宗敎に入らうと云ふ期待を持つて居るのではなかつたが、唯話しは話しとして、自分は自分だけのなにかをそれから得やうとした。そして隔日に晝めしを濟ますと聖書を持つて宣敎師の處へ出掛けた。それは可なり續いた。

そのうち淸富は風を惹いて熱を出した。他人の家へ寢て居るのが不自由でもあり心細くもあつて彼れは風を惹いたなと思ふとすぐ俥で伯母の家へ行つた。そして二階で寢た。そんな事から意氣込んだ彼れの宣敎師訪問もその後遂に頓挫した。

伯母の家に寝て居る頃、濱子はよく濟富の枕元に坐り込んだ。やがて熱もなくなつて濟富も少しづゝ話すやうになつた。濟富が何んの氣もなく、下宿の方に郵便が來て居はしないかと氣にかけて居る事を、濱子に話したが、すると濱子は濟富に默つて用に託つけて家を出ると大急ぎで濟富の下宿まで走つて行つて、留守に來て居た郵便を濟富の前に持つて來た。濱子のその好意にも係はらず濟富にはそれがよく感じられなかつた。

濱子が生國の北日本の風俗から盆踊りの話しをする時、その地方では新佛のあつた家の前で村の若い男女が集つて盆踊りを踊ると云ふ事を話した。そして濱子のすぐ隣の家の娘がある戀情で自殺したその翌年の新盆には、一番村の者の同情が集つて盆踊りが盛んだつたと云ふ事を話した。その娘の死んだ原因が戀であると云ふやうな事が口に出して濱子に云へなかつた。濟富はそんな言葉は話し悪く、仕懸け悪い人になつた居た。それ程彼れは血の氣のない道學者のやうな人間に人からは感じられたのであつた。

濟富は五日程伯母の家に居て、風が鎭まると又下宿へ歸つた。ある晩下宿の家の人が皆用達しに出て、濟富が一人留守して居る處へひよつこり濱子がやつて來た。濱子は教會へ行く處だと云つて聖書の包みを持つて居た。その包みには自分の細工したものが濟富に贈る目的で一緒に包まれてあつた。二人は火鉢を間にして話した。そのうち教會の始まる時間は過ぎた。濱子はそんな事は少しもかまはない風で專ら自分の身の上の事を色々と濟富に相談した。濱子の兄は朝鮮の傳道學校の教師である事、その兄が心配して濱子を教會の關係から濟富の伯母に預けたのだと云ふ事、その兄が今度結婚して朝鮮で家庭を持つた事、濱子は今迄何んにも解からず全く自覺なしに生きて來た事、京都へ來ても生活を更えてしつかりしたものを掴む事が出來ずむしろ教會の信者と云ふ人々に愛想を盡かすばかしだと云ふ事などを話した。そして自分は先々どうしたらばいゝのだらうかと云ふ事を濟富に相談した。

然し濟富も眞面目な結婚を進めると云ふ事のほか、それ以上濱子への答へを知らなかつた。唯それに就て色々と話した。

二十代の失意の底に居る清富が、かう云ふ經歷の少女と人氣のない家の二階で、ある晩火鉢に手を翳し合つて、然も眞面目に若い女に結婚を說いて居る。そして其時、清富は自分の思想にも、或は自分の淸淨さにも、毫も自信は持なかつた。濱子が唯一人で、何んの不安もなく平氣で清富を尋ね、かゝる話題を話すのを、清富は全く自分の人に與へる枯木の感じからだと考へた。そして自分の安心さを皮肉に眺めた。

濱子は教會の終るを見計らつて聖書の包をかゝえて歸つた。

暫くして、清富が伯母の家に訪問した時、清富は駒子から濱子が近々朝鮮の兄の處へ行くと云ふ事を聞いた。濱子にも逢つたが濱子は伯母の前でもあつたので清富には何んにも云はなかつた。それが變に白らけたやうな心持ちを清富に起させた。

その後半年程して清富は北海道で思はぬ處から濱子の消息を知つた。それは朝鮮で土木技師をして居る昔の友達からで、平常文通した事もないこの友達は、この事に興味を持つてわざ〳〵便りを寄來したのだと云ふ事を清富には想像させた。それには「君は河田濱子さんと云ふ人を知つて居ますか、河田さんは君に京都で逢つて知つて居ると云つて居ました。その人は此間數々な事から又故鄕へ歸りました。實に淪落の氣の毒な女だと思ひます」とあつた。



逢曳

江口渙

彼は玄關で母の手から三四通の手紙を受取ると、いささか慌て氣味に顏をそむけて、あたふたと梯子段を登つて行つた。その中の或る一本の手紙について、何も知らない母の顏を見ると、流石に變な後めたさを感じたからだ。

その一本の手紙は、如何に男の手に似せた字で書いてあつても、亦、差出人をちやんと男名前にしてあつても、それが何人からの、如何なる手紙であるかは、無論、一と眼で直に解つた。だから、普通の手紙に對するやうに、母の眼の前で封を切る氣なんかには、到底もなれなかつたのだ。で、出來るだけ何氣なささうな風をしながらも、出來るだけ早く母の眼から逃れたかつたからだ。

だが、一旦二階へ逃け上つて、彼の居間である西向の六疊へ入ると、その一本だけをぬいて無雜作に机の上へ投り出したまま他の手紙をさつさと讀みにかかつたのだ。

一通は本の豫約出版の廣告見本だつた。他の一通は今年の夏、彼と同じ九州の或る高等學校を卒業して、彼と同じく福岡の大學へ入つた同級生の手紙だつた。久し

振りに親しい友人と話をしてゐるやうな愉快な氣持になつた彼は、時々微笑をさへも洩しながら、可なりに長い手紙をよみつゞけた。西日に照りつけられてあぶられるやうな部屋の暑さも、首筋から滲み出す油汗も、讀み終るまで格別氣にならなかつたほど、友人の手紙は彼の心を晴々させたのだつた。

やがてそれを讀み終つた彼は始めて先刻机の上へ投り出した手紙に眼をやつた。だが、その男に似せてあまりに似ない書體を見ると、一寸手に取る氣になれなかつた。殊に、中に連ねられた言葉の意味が、封を切らない前から、もうちやんと解つてゐるのだと思ふと、尙更氣遲れがして、一層彼をためらはせた。

「どうせ男の手に似せるのなら、何故もつと太い筆できちんとした楷書でも書かないのかしら。變に心書きなんか使ふから、却つてはつきり解るのだ」

細い墨で殊更肩下りに書いてある封筒の字を眺めながら、彼は一寸不機嫌な眼色をした。そして、この手紙も亦何時ものと同じやうに自分勝手に返事を待ちあぐんでゐるものであるに違ひないと思ふと、早くも一種かすかな壓迫さへも感じ出した。

この手紙は東京から百五十哩ほど隔てた關西の或る町から來たものだ。彼の家がこの春東京へ引つ越して來るまで、彼はそこで殆ど七年を過した。勿論、中學卒業後彼は九州の高等學校に入つてゐたから、後の二年は謂はゞ夏休だけを二回そこで過したと云ふ方が當つてゐるかも知れないが。

この手紙の女は、矢張、同じ町に彼の家に近く住んでゐたのだ。彼の妹と女とは、女學校の同窓生だつた。又女の弟は彼と同じ中學の下級生だつた。そして、中學時代から卒業後まで、彼の腰巾着の一人として隨分彼と親しかつた。そんな關係で、彼はずつと前から、好く彼女を知つてゐた。

彼が彼女から始めて手紙を貰つたのは、高等學校の二年の一學期だつた。新學期と云ふ愉快な新鮮な感じに包まれて

彼が如何にも活き活きと飛び廻り、跳ね廻つてゐた最中に、可なり濃やかな情愛を、然かも可なりにぶしつけな態度で示した彼女の手紙を、突然、受取つた時、彼は實際一寸不思議な氣持がした。

何故なら、それまで若い女性の心を曳く事について何の自信もなかつた彼だ。又、彼女に對して、長い間姉の友達として、同時に、彼の友人の姉として、唯それだけの存在をしか認めなかつた彼だ。然かも、それが手紙の或る部には彼と彼女とがどうやら相愛の間であるかの如く、彼女一人で勝手にきめ込んでゐるとも取れるやうな言葉遣ひがしてあるのを見た時、彼は何だか狐につままれてゐるやうな氣持さへした。そして、一寸不愉快だつた。

「誘惑だ。たしかにさうだ」

彼は不圖こんな感じを起さないわけには行かなかつた。何故なら彼女は彼より一つ歳下であるにも關らず、氣持の上ではずつとませてゐたからだ。その上、當時の彼はともかくもまだ高等學校道徳に、しつかり縛りつけられてゐた所謂善良な青年であつたからだ。

「誘惑だ。それでなければ今頃突然こんな手紙を寄越す可き筈がない」

彼はかう物々しく口先で叫んだものの、心の底の底では可なりその誘惑に乘つて見たい感じがないでもなかつた。その結果、きつぱり彼女の言葉を退けるどころか、却つて返事を出して終つた。無論、何でもよい唯の返事である。すると又手紙が來た。前よりも更にこまやかな手紙だ。矢張、こんども返事を出した。又手紙が來る。又、出す、又、來る。矢張出す。かうして返事は出すものの、何時でも彼の手紙は何處へ出されても、誰に見せられても、一向困らない程度の返事だつた。それは彼がそれだけの用心を十分意識の中に置いて書いたものである事は云ふまでもない。

「俺はあんな女なんか愛してゐるものか。何時も物欲しさうな眼色をしては、若い男を眺めてばかりゐるあんな女を、誰が愛してゐるものか。第一に、あの女の眼つきも口元も、きらひだ、その上如何にも媚るやうに胸元を突き出しては、に

つと笑つて見せるあの樣子を考へると、堪らなくいやだ」

彼はこんな言葉を心の中で繰かへす度に何時も彼女に對して明らさまな人格的侮辱をさへ感じたのは事實だ。そのくせ矢張返事を出しては、心ひそかに手紙の來るのを待つたのも亦事實だ。

「如何に彼女が切ない愛を訴へて來るか、又、彼を愛する、愛してくれと云ふ彼女の言葉が、如何に澤山書き連ねられるか。それを俺は出來るだけ冷かな心で見てやらう。俺は戀愛を欲してはゐる。だが、彼女なんかを欲してはゐない」

彼は絶えず自分に向つてこんな事を云つてゐた。だが、これは實のところ、唯の云ひわけに過ぎなかつたのだ。何故なら彼は彼女の手紙の中に絶えず書き連ねられてゐるところの、愛する、愛してくれと云ふ言葉の無數の積み重ねの間から自然に生み出される一つの世界、甘くこまやかな戀愛の世界のうつとりするやうな醉心地に知らず知らず興味を曳かれ、心を曳かれてゐた事は覆ふ事の出來ない事實だからだ。

さうして二年がすぎた。後の一年の時には「貴女のお手紙をまつてます」も書いた。「お手紙が來ないと寂しい氣がします」とも書いた。「當時、お手紙が來ませんが、他に戀人でも出來たのですか。それなら結構です」。などとさへも書いた。無論、彼の返事には彼女を愛すると云ふ文字は一度も書かれた事は無かつた。それさへ書かなければ好いのだと、彼は一人で勝手にきめてゐたからだ。そのくせ「で、あるかの」如き、思はせ振りの文字を何時も好んで書いたものだ。

その間にも、彼がゐた九州の或る町の下宿へ、彼女から何度も菓子と鑵詰が届いた。きれいな肘突が來た。幾つも美しい「しをり」が來た。その頃の女學生の愛の表象としては、大抵、肘突と「しをり」とを送る事にきまつてゐたから。その上、手巾が來た。靴下が來た。手巾は麻で、靴下はスコッチでどちらも學生の使ふものとしては、贅澤極るものだつた。

菓子は來る度に友人達と遠慮なく喰つて終つた。肘突も「しをり」も、手巾もどしどし惜し氣もなく友人に分けてやつた。殊に、靴下は如何にスコッチの上製であらうとも、元來高等學校三年間、靴と云ふものを持たずに過した彼にとつては、

何の役にも立たなかつた。そして、それも同窓の同級生が片つ端から穿いて終つた。それには彼も流石に苦笑しないわけに行かなかつた。

彼と同窓の友人は、無論、彼と彼女との事を知つてゐた。然しそれは彼が自分に都合の好い程度に話した範圍に於いてであつた。そして、その男は好く彼を煽てては彼女から屢々菓子と罐詰とを送らせた。彼もむしろ喜んで煽てに乘つた。何故そんな事をしたかと云ふと、かうして煽てに乘る事は、彼が少しも彼女を愛してゐないと云ふ事を、その男に證據立てる一助になるとも思つたからだ。そして、その結果は、何時も同宿の男だけを、一人無條件で滿足させたにすぎなかつた。何故なら、その男は彼と彼女との間がどうあらうとも、相愛であらうが無からうが、唯、菓子と罐詰とにありつく事が出來さへすればそれで好かつたんだから。

さうして、前にも云つた通り二年がすぎた。その結果彼は高等學校を出て、この九月から福岡の大學へ入る事になつたのだ。その間に、彼の一家は永年住んだ關西のT町から東京へ出て來た。そのため彼は大勢の舊友とも遠くはなれて、こんどの夏休は一人ぽつねんと東京で暮さねばならなかつた。凡ゆる新大學生が、ピカピカ光る眞新しい徽章を夏帽子の横につけて、嬉しげに郷里の街を歩いたり、得々として出身中學の門をくゞつたり、これ見よがしに知り合の若い女性に挨拶をしたり、乃至は後輩の受驗生に勿體ぶつて顋をつき出す、その記念す可き最初の夏休を、彼は多く上野の圖書館で過して終つた。

その間にも、男の手に似せた書體で認めた彼女の封筒が度々彼の机を訪れたのは云ふまでもない。現在の彼はそれを受取る度に、もはやいささか五月蠅い感じがしないでもなかつた。然し、初めての東京の夏の、友達のない寂しさを、堪へられない退屈とのために苦しんでゐる彼は、三四日間も躊躇しては矢張、返事を送つたのだ。そして、もう七八回にもなつたらうか。

『自分は彼女の指にも、唇にも、體の何處にも、いまだかつて振れた事はない。さうする事はつまり結婚への小切手を小出しに振出す事になるのだから。そして、その小切手が大きな嵩に積つた時、何時かはいやでも決濟しなければならない負債になるにきまつてゐるから。さうだ。今の程ならば、自分は何時だつて彼女にどんな云ひ譯でも立派にして見せる事が出來る』

彼は心ひそかにこんな事を云つては、自分自身に云ひ譯をした。だが、云ひ譯をする心の蔭から、彼女に對する、彼女の甘い愛慾の世界に對する、何かしら、強い惱しい誘引を感じるのだ。彼女の媚を含んだ眼、熱く染つた唇、甘えるやうに突き出す胸、それ等の凡てから一齊に放射する、甘く濁つた惱しい感じ、愛慾に飢ゑたやうに、物欲しさうな媚態、それ等の凡てが眼に見えぬ幾筋の絲となつて、ひしひしと強く彼の心を打つのだ。そしては、如何に逡巡してゐても、彼をして何時か返事を書かないではゐられなくして終ふのだ。

今も彼は男の手に似せたその封筒を眺めながら、そして、いささか五月蠅いなあと云ふ感じを抱きながらも、矢張、眼に見えぬ惱しい絲でもつて、又ひしひしと心を打たれた。殊に、夏だ、全身の細胞が烈しい勢で分裂し、成育しつゝある夏の盛りだ。若い彼の心は、彼の體は、如何に踏み止まらうとしても、ついその甘く濁つた世界の中へ、何時の間にか誘ひ込まれざるを得ないのだ。

彼がこんな事を一人ぼんやり考へ込んでゐると、突然、梯子段に足音がして、間もなく母が彼の部屋へ入つて來た。母は何時もと同じ柔和な眼付をしてはゐるが、然し、何故かいささか氣づかはしさうな樣子をしてゐないでもなかつた。

『どうも暑いね。一寸も風がないぢやないか。二階は一寸は涼しいかい』

母は庭の植込みの上を越えて、低く見降せる大都會の、ぎらぎら光る波のやうな無限の屋根ひろがりを眺めながら、暑

さうな顏をして見せた。大部分の屋根の波は、日没時の光と熱とに照射されて、如何にも苦しさうに喘いでゐる。彼も母の言葉に誘はれて、見るともなくぢつとその際しなく擴がつた屋根の波に眼をやつたが、何となくちからが脱されるやうな氣持がして、思はず顏を背向けた。

「かう暑くつちや堪りませんね」

「ほんとうだね。こんなに風が無くつちや却つて二階の方が暑いね」

「全くですよ。日が近いだけ二階の方が暑いやうです。それにかう西日が射しちや」

彼は茹つたやうな顏附をしながら如何にも暑く照りつけてゐる窓の障子の日射を見入つた。すると何時か、母はぢつと眼を据ゑて、彼の机の上に投り出されてあつた彼女の封筒を眺めてゐた。封筒は裏を向けて置いてあるので、自然差出人の名前の方が上に出てゐた。

「これ誰だい。好くこの人の手紙が來るね」

しけしけと名前に見入つた後で、母はかう云ひながら、何となく不安らしい眼色をして、彼を見詰めた。彼は思はずどつきんとした。それでも出來るだけ顏色を押し隱して何氣ない風を裝つた。

「T町にゐた頃の舊い友人です」

「さうかい。………でも、こんな人は家へ一寸も來なかつたやうだね」

「えゝ。だけど」

かう云つた彼の答は如何にも苦しかつた。

「何處の學校へ行つてゐる人だい」

母は再び封筒の上書きと彼の處とを見較べた。

「慶應へ行つてゐるんです。中學時代の同級生なんですが、高商を二度受けて駄目だつたもんで、慶應へ入つたんです」

かう口から出委せを云つた彼は、實際、心の中で苦笑しないわけには行かなかつた。

「家は何をしてゐる人だい」

「好くは知りませんけどね。相當大きな家にゐますよ」

母は又ぢつと瞳を据ゑて、封筒を見た。男の手に眞似ようとして、すつかり眞似損つてゐるこの書體が、母にだつて解らない筈はない。母の柔和な眼に浮ぶ、疑念の色が濃くなればなるほど、彼は母に對するすまないやうな氣持と深い不安に襲はれないわけには行かなかつた。

「去年あたり家へ遊びに來たT町の若い學生はみんな不良學生なんだつてね」

「そんな筈はありませんが」

「でも、みんなさう云ふやうな評判だつたよ」

「どんな點が不良だつて云ふんです」

「だつて、夏休に歸つて來ると、女學生連中と追つ懸けつこばかりしてゐるさうぢやないか。手紙をやつたり、取つたりして。あの冬子さんなんかも、あれでなかなか不良連の相手になるんだつてね」

冬子とは彼女の名だ。彼は再びぎつくりとして、まじまじと母の顔を見詰めた。

「どうですかね。僕はそんな事、ちつとも知りませんけど」

彼は殊更大業に首を振つて見せた。だが、それに對して母が如何なる答を發するかと思ふと、何だかもうぢつとしてゐられない程、息苦しい氣持がして來た。

「だつてね。家にゐた女中のはまがさう云つてたよ。冬子さんもあんなおとなしさうな顔をしてゐながら、あれでいろんな評

判があるんだつてね。第一あの大きな束髪だつて若い不良連の眼を引くにきまつてゐるからね。ああ大きくつちや」

「ああ。あの牛鍋ですか。ハハッ……」

彼は殊更大きな聲で笑つて見せた。かうして笑ふ事に依つて、せめて押し寄せて來る母の疑念を、何とか他に轉じたかつたからだ。

「牛鍋つて何だい」

母はそれに乘せられたものか、如何にも興味あるらしくかう訊いた。

「あの女の束髪が、牛鍋を冠つたやうに大きいんで、みんながそんな仇名を附けたんです」

「みんなそんな事を云つちや喜んでゐるんだね。もうもう決してあんな不良連と交際つちやいけませんよ」

「もう東京へ來ちやつたから、大丈夫ですよ」

「あんまり手紙なんかも、遣り取りしない方が好いよ」

「ええ」

「ほんとうですよ。ろくな事を覺えやしないから」

母は幼い子供にでもたしなめるやうにかう云つたと思ふと、やつと安心したらしく眼を柔らげた。母の追窮がかうしてどうやら横へ反れた時、彼は初めてほつと安心した。そして、如何にもさあらぬ體にその封筒を取つて、急いで机の抽出へ入れたのであつた。

八月も終りに近い或る日だつた。又々、彼女からの手紙が來た。夏休みになつてから恰度第九本目の手紙である。何時もは三錢か長くつて六錢なのが、今日のはどうしたのか、三錢切手が三枚もはつてゐる。青味を帶びた封筒の右の肩に、

赤い切手が細長く三枚つゞけてはつてあるのが、先づ異常に彼の注意を引いた。二十枚以上の書簡箋が入れてあると見えて、封筒はかなりの厚味に膨くれてゐる。

それを見ると、彼は開けない先からいささかうんざりした。又かと思つたからだ。何時もと同じやうに、あの甘く濁つた、そして、變に熱し切つた菓物の匂をかぐやうに、媚態の限りを盡した文句が、何の選擇も配列もなしに今までの三倍の數量で數限りもなく並べてあるのかと思つた時、彼は何時かその甘く悩しい世界の誘惑と、それから逃れようとする努力との苦しく渦巻き起るのを、早くも心の底に感じた。

彼は頭を重く壓しつけるやうに、蒸し暑く濁つた空の曇を仰ぎ仰ぎ、窓際に身を凭せながら、又、何時もと同じやうに暫時封筒の字を眺めた。

今日の字はこれまでと違つて、大分慌しく書いたらしく書體が變に亂れてゐる。それだけ一層男の手に似てゐると云へば云へる。だが一行の中にも、肩の上つたのや、下つたのが雜然と入り亂れてゐるので如何にも故意とらしく書いたやうにも取れば取れる。今日の手紙も茶の間で母の手から受取つたのだ。その時、母は何も訊かなかつたけど、これを見て或は一層疑念を深くしたかも知れない。さう思ふと、彼は何時までもこんな事をして、こんな手紙を往復してゐる事の冒險に對して、不安の感じを増せば増すほど、そろそろ後悔しないわけには行かなかつた。

だが、彼は又しても甘い氣持に引き摺られて、とうとう封を切つて終つた。ところが凡ては意外だつた。全くあまりに意外だつた。

如何にも昂奮し切つて、そして、如何にもせつぱ詰つた氣持でもつてぐんぐん書いたらしい大きな書體は、長く巻かれた巻紙の上を、狂ひ躍る蛇のやうに走りながら、全く思ひもよらなかつた事を、次から次へと彼に訴へた。それを見ると今まで濁つた醉心地に鈍く澱んでゐた彼の心に、突如として怖しい暴風の中へ捲き込まれて終つたのであつた。

手紙は冒頭の前置きなどはてんでない。そのすつかり畏縮し切つた氣持を、手當り次第に摑み出して、叩きつけたやうな感じだ。

「もう何にも彼にもすつかり解つて終ひました。本箱の奥に隱してあつたあなたのお手紙の束を、今朝どうしたのか弟が引き摺り出しました、そして、私に内所で母に見せて終つたのです。

今朝茶の間で母が私を呼びますので、何の氣なしに行つて見ますと、母は火鉢の傍で何時もとはまるで違つた、嶮しい顏をして坐つてゐました。見ると母の膝のまはりに、一杯手紙が散らかつてゐます。一と眼それを見ると、私はもうすつかり體中が冷え切つて、手足が一度にすくんだやうな氣持がしました。みんなどの封筒もどの封筒も、片時も忘れる事の出來ないあなたのお手紙なのですから。私は頭の中も心臟も何處も此處も一度に鐘を叩くやうに烈しく鳴り始めたので、何も彼も解らなくなつて、暫時、ぼんやりとそこへ突つ立つてました。

母は私を自分の直ぐ前へ坐らせた後で、手紙をつきつけて、さんざん叱りました。そして、今までこれほど信用してもたのに、こんな事をしてくれたのかと云つて泣きました。私も何とも云へなくなつて、一緒に泣いて終ひました。

母は私のことを不良少女だと罵りました。貴方の事をも、見かけによらない不良少年だと云ひました。そして、私と貴方との間が二年の裡にどの程度にまで進んだのかと云ふ事について、四方八方から責め立てては、根掘葉掘問ひつめました。

私がありのままを正直に答へても、母はどうしても承知しません。二人の間に、何時かもう汚い出來事があつたもののやうに思ひ込んで、どうしても私の言葉を信じてくれないのです。

貴方のお手紙の處々を私に見せて『こんな言葉が使つてあるぢやないか。これでは如何したつて綺麗な間とは思はれない』と云ふのです。貴方のお言葉………貴方が私を愛して下さるあまりにお書きになつたそのお言葉が、母には唯、

悪い、強い意味にしか取れないのです。私は全く泣くにも泣かれないやうな事になりました。
父は今旅行中です。父が歸つたら、母は私の事を殘らず父に話すでせう。さうしたらあの昔氣質な父は、私をきつと撲るに決つてゐます。
ほんとうに如何したら好いでせう。どうか私を救つて下さい。是非是非私を助けて下さい。
私は父の歸らない前に、この家から逃れようと思ひます。そして東京かN市かの親類へしばらく身を隠したいと思ひます。私は怖しくつて到底父に顔を合せる事なんか出來ませんわ。
一週間以内に何とかして當地へ來て下さるわけに行かないでせうか。もとより絶對に祕密です。それとも私が東京へ行きませうか。そして、私の生涯の運命について、どうか私とゆつくり一度御相談をして下さい。
若しどつちも御都合が悪ければ、何處か途中の驛で、お逢ひする事は出來ないでせうか。私にはそれが一番好いのですが。そして、一と晩ゆつくり落ち着いて御相談いたしたいと存じます。
どうか、どうか私を怖しい破綻から救つて下さい。私は今、生涯の運命の岐路に立つて、身慄ひしながら茫然と立ちすくんでゐます。
是非是非、至急御返事を下さい、御返事の上書きは必ず女名前で、女文字にして下さい。でないと何事もすつかり露つて、終つた現在では、お手紙を見す見す母に差押へられる危險がありますから。
狂ひ廻る蛇のやうに亂れ切つた書體で認められたこの手紙を讀み終つた時、こんどは彼の方が却つて茫然と自失して終つた。
今の今まで、二年の間、單に彼女の戀愛の遊戯、否、愛慾の飯事のお相手をつとめさせられてゐるのだとばかり思つてゐたのが俄かに怖ろしい最後の斷崖の上へつきつけられたやうな氣持になつて終つたからだ。全く、面白半分の火い[illegible]

から火事が起つたやうに感じた。然かも、その火事は見る見る怖しい勢でもつて、彼の體を、彼の家を燒きつくさなければ置かないらしい。

「もう、否でも應でも最後の決心をしなければならないんだらうが、一體、俺は如何すれば好いのだ。一番怖れてゐる最後のものが、彼女との結婚が、とうとう俺の體にぶつかつて來たのだ。ほんとうに俺は如何すれば好いのかしら」

彼の氣持は突嗟の裡に、今までとは全く變つたものになつて終つた。先刻まで心の上に湛へてゐた甘く濁つた、そして鈍く澱んだ醉心地などは何時かすつかり消えて行つて今までにない怖しい不安と昂奮と苦しいほどの緊張とが見る見る一度に彼の全面積を壓して終つた。

彼は蒸し暑く蔽ひ被さつた曇り日の空を仰いで、心の底から苦しく切なく喘がざるを得なかつた。

彼はとうとう最後の決心をした。否しないわけには行かなかつたのだ。東京とT町との途中の、何處かの驛で彼女と逢はうと云ふ決心である。彼がT町へ行くよりも、彼女が東京へ來るよりも、それが一番好いと思つたからだ、それには無論、彼女と人目を避けてゆつくり話し合ふ事が出來ると云ふ事以外に、彼女ととにかく一夜をともに過せると云ふ考が、意識の奥の奥に私かに然かも力強く動いてゐたのは爭はれない事實だつた。そして、直ぐ樣、それに對する返事を書いた。

彼は先づ二人が落ち合ふ場所として、N驛を選んだ。それはT町を通過してゐる鐵道線路が東海道線に結びつく大きな驛である事と、驛前のCと云ふ旅館には彼が一度泊つた事があるので、萬事に勝手を好く知つてゐたからだ。その事を書きながらも、彼はかつて泊つた時に、彼を全然子供扱ひにしながら、好く面倒を見てくれた、あの眼の大きい背の高い年増の女中が、まだゐるかしらなどと云ふ事を考へたりした。

彼は旅行案内を繰つて見て、汽車の時間を正確に指定した。逢曳にはそれが何よりも肝要だからだ。

「私は、二十九日の夜の十一時に東京を發ちます。あなたは一番の汽車でT町を發つて下さい。さうすればあなたの列車は私の列車より約三十分早くN驛につきますから、着いたら直ぐ東海道線のホームに出て私を待つて下さい。私は最後から二番目の汽車に乘ります」

これだけ書いた後で、彼は用心のためにもう一つこんな事をも附け足した。

「若しあなたが何等かの事情で、その時刻にT町を發つ事が出來なかつたら、その事を次の所へ宛てゝ御通知下さい。これは私の友人の家です。私は京都見物傍々、同所に三四日滯在します」

最後にその京都にゐる友人のアドレスを書き添へた彼は、彼女の注文通り封筒の上書きを細い新書きで、出來るだけ女文字に似せて書いた。そして、それを母に隱れて投函したのであつた。

もう骰子は投げられた。後は、一が出るか。六が出るか。五が出るか。唯出るのを待つより外の途がなかつた。果して何が出るだらうか。かう強い疑惧の念をもつて考へるその心の蔭から、それは彼女との結婚以外の何物でもないと云ふ豫感が極めてはつきりと浮き上つて來る。

『今まで二人の間には、一度も結婚についての何の約束も交されなかつた。だがかうなつては、唯、結婚より外に何の途もない。少くとも彼女の救はれる途はないのだ。過去二年間、自分が取つてゐた不眞面な不徹底な態度の當然の酬いとして、とうとう自分は結婚と云ふ大きな負債を決濟しなければならなくなつて終つたのだ。さうだ。お互に體の上の何の交渉も、亦、結婚についての何の約束も、少しもなかつたと云ふ事だけで、彼女の把握から逃れようとするには、俺の良心はあまりにあまりに强すぎるらしい。だが、先方の家庭でも、亦、俺の家庭でも、殊に、彼女をあまり褒めない俺の母が、果して二人の結婚を許すだらうか。まあ。とにかく凡ては彼女と逢つた上にしよう」

こんな事を考へながら、彼は直ぐ樣、慌しい出發の準備に取りかかつた。無論、それについて何事をも知らない母を巧

みに瞞したのは云ふまでもない。

彼が突然、二十九日の晩に發つと云ふ事を告げた時、母は流石に不審を抱かずにはゐられなかつたらしい。

「どうして、さう急に發つんだい。大學はどうせ來月の十日すぎにならなければ、始らないんだらう」

かう訊いた母は、何かを見逈さうとするらしく、ぢつと彼の眼を見詰めた。

「無論、十日頃でなけりや始らないんですけど、途中で京都にゐる友人の家へ寄らうと思ひますから。それに、新入生ですから少し早く福岡へ行つてゐないと。萬事に都合の惡い事もありますから」

彼は案外落ち着いてかう答へた。無論、その言葉には必ずしも嘘はなかつた。唯、一つの大きな秘密を裏に隱してゐると云ふだけなのだ。

「京都のお友達つて、どんな人なんだい」

「矢張、こんど一緒に高等學校を出て、京都の醫科へ入つた男です。福岡へ行く途中、少し早目に東京を發して、是非寄つて行けつて云ふんです」

これも、矢張、嘘ではなかつた。だから彼は何のやましさもなくかう答へる事が出來た。

「さうかい。そんなら寄つても好いけどね」

「第一、僕は京都と云ふ處を少しも知りませんから、少しゆつくり見物もしたいんで」

「だけど、今頃京都へ行つたつて、暑くつてとても見物なんかゆつくり出來やしないよ。ほんとうに京都は暑い處だから無闇に外ばかり出歩いてゐて、體を惡くしちや駄目ですよ」

母がかう眞顏になつて心配らしく云つた時には、彼も流石に氣の毒にならないわけには行かなかつた。

「そんな事は大丈夫です。少々位暑くつたつて、僕達にはこたへやしませんから。今まで九州でさんざ暑い目に逢つたん

ですから」

「でも、よくよく氣をつけなけりやいけませんよ。折角、大學へ入つたのに、入學早々病氣なんかしちや困りますからね」

母は年の行かない子供にでも云つて聞かせるやうな樣子で、こんな事まで附け足した。かう云はれると、彼は今更のやうに、新しい後めたさを感じないわけには行かなかつた。そして、かうまで彼の言葉を素直に受入れて、眞顔に心配してくれる母を、見す見す瞞す事のすまなさ加減を、更に一倍しみじみと感ぜざるを得なかつた。だが、とうとう彼はその最初の噓を押し通した。

彼は東京をたつ時、とにかく京都までの切符を買つた。無論、N驛では途中下車をしさへすれば、彼女に逢ふのに一向差支へなかつたからだ。

夜汽車は人で一杯だつた。豫定通り最後から二つ目の車に乘る事の出來た彼は、その車室の一番前の向つて右の座席をも、目的通り占める事が出來た。ここにゐさへすれば、明日N驛のホームに彼を出迎へる彼女を發見するのに、一番、都合が好いからだ。彼はこんな事にまでも細心の注意を拂つた。

夏の夜の汽車は、蒸されるやうな暑さだつた。殊に彼の座席は片隅であるだけ、折角窓を開けても、一向風が入らない彼は袴も帽子も網棚へ上げて終つて、出來るだけ着物をゆつたりとくつろげながら、せつせと扇で風を入れた。それでも矢張、生溫い汗がじつとりと全身に沁み出た。

彼の前には若夫婦らしい男女が腰をかけてゐた。男は薄い絽の羽織を丁寧に疊んで、それを網棚へ上げたと思ふと、心持女に肩を倚せかけて、頻りと小聲で話をつゞけてゐた。女は汽車の動搖で男の頭が、ともすると丸髷の髮に觸れるのを氣にしながら、時々、首肯いたり、笑つたりした。そのつゝましやかな中にも、こまやかな情愛の溢れてゐるらしい感じ

が、絶えず彼の若い心を刺戟せずには措かなかつた。

わけても、人いきれと煙草の煙との中に混つて、女の髪の艶めしい匂がほのかに漂ふのが、彼には何物にか媚び唆かされてゐるやうな息苦しさを與へ始めた。そして、それが直ちに彼女との明日の會逅についての樣々なシーンを思ひ描かせては、彼の心をすつかり甘く濁つた惱しさでもつて覆ひ盡したのは云ふまでもない。何時か彼の空想は、あの物欲しさうな眼色や、刺戟に飢ゑてゐるらしい唇や、乃至は殊更の媚態を見せては突き出す胸の形を思ひ浮べる事に依つて、姿な程度にまでも煽られ擴げられて行つたのだつた。

彼は不圖去年の夏休中の、或る日の事をまざまざと思ひ起した。それは日盛りの堪へ難い暑さが、凡ゆる物の息の根を止めたかと思はれるほどの、風のない靜かな靜かな午後だつた。

その時、彼は彼女の弟と並んで、彼女の家の二階の欄干に凭れてゐた。夏休になつてT町へ歸つてからも、彼はつひに一度も彼女と唯二人切りで相對した事はなかつた。それはどんな機會にどんな事から、結婚に關する言質を、或は何かの證券を彼女に取られはしないかと云ふ事を怖れたからだ、その日も、彼女の弟の處へ遊びに行つたのだ。そして、「俺は彼女の處へ遊びに來たのではない弟の處へ來たのだ」と、一人心の中で云ひわけをしてゐた。

すると間もなく、彼女が何時ものやうに下から上つて來た。そして、彼を見ると、矢張、何時ものやうに、胸を突き出して、眼を艶めかしく見張つて、媚びるやうににつと笑つて見せた。又かと思ひながらも、彼も笑つて挨拶を返した。

ところが二人がまだ言葉さへ交さない裡に弟は不圖下へ降りて終つた。表の格子の開いた事から考へて、外へ出て行つたものらしい。彼はかつてその弟が、彼女の手紙を彼に二三度送げ届けた事から推しても、「又、今の如何にも唐突な席の外し方から考へても、今日は彼女と弟との間に何かの諒解があるのではないかと疑はざるを得なかつた。そしてその疑が一層彼を變に用心深くさせたのだつた。

かうして始めて二人切りで相對した時、彼はつくづく「困つたな」と思はざるを得なかつた。無論、彼の口一つで、態度一つで、彼女が如何に物狂はしく身を投げかけるかも知れないと云ふ事は解つてゐた。解つてゐればゐる程、彼は尚更立ちすくまざるを得なかつた。そのため止むなく彼女の方へくるりと背中を向けたまま、彼は永い間ぼんやり外ばかり眺めてゐた。

最初、座敷の眞中邊で躊躇しながら佇んでゐた彼女は、何時かそろそろと彼の側へ寄つて來た。背を向けてゐる彼にも疊のきしる音でそれがはつきりと解つた。だが、流石に女だ。敷居のあたりまで來たと思ふと、彼の態度を探るためか、そのままぢつと立ち止つて終つた。

「今日もえらい暑さだすな」

關西訛りの柔かな言葉が、彼の直ぐ後で響いた。三尺とは離れてゐない眞後だ。

「ええ」

彼は振り向かずに、唯かう答へた。

「此頃はもう水泳には行かはらしまへんのか」

「ええ」

彼の眼は相變らず外にばかり向けられてゐる。段々の畑を隔てて、二三丁前は一體の丘だ。丘を埋めて茂つてゐる雜樹林も、段々の畑を彩つてゐる麻も茄子も南瓜も、酷熱の白い光を眞向に浴びて、如何にも苦しく喘ぐかの如く萎へてゐる。そして、何處にもそよとの風のけはひさへない。その上丘の林の茂みの奧から流れて來る油蟬の、如何にも身を絞られるやうな啼き聲が、一層あたりの感じを暑くしてゐる。彼はそれにぢつと眼をやりながらも、全身の神經は唯徒らに後の方へばかり注がれてゐた。

「何時頃までこつちやにおいでなさるのです」

「さあ。解りませんね」

「九州はまだ暑うおすやろな」

「ええ」

「來年御卒業だすか」

「ええ」

「大學は東京だすか」

「さあ。解りませんね」

何を話しかけても「ええ」か、でなければ「さあ、解りませんね」。としか彼が答へないのですつかり話の接穗を折られたらしく、彼女はもうそれつ切り何事も彼に問ひかけなかつた。彼は、無論、少しも彼女に話しかけない。うつかり話しかければ、今の場合、話の絲を何處へ引つ張つて行かれるか解らないからだ。そして、苦しい心と心との戰が三十分つづいた。

間もなく彼女の溜息が聞え始めた。最初は靜かに、そして愼ましやかに、如何にも吐かずにゐられなくつて吐くかの如くに聞えてゐた。だが、やがてそれは可なりに、大袈裟に、可なりに烈しく繰り返へされた。恰も殊更何事かを訴へて、相手の心を壓倒せずには措かないとでも云ふ風である。彼はいよいよ息もつけない位に立ちすくんで終つた。

「今だ。この瞬間だ。この危機をさへ切りぬければ、それで好いのだ。さうだ。今、振り向いたら、今、敗けたら、もう永久に彼女の支配の下になるのだ」

かう思つた彼は、凡ゆる苦しさと有ゆる重壓とを我慢して、尚も執念く畑を眺め丘を眺めて空を眺めて、何時までも何

時までも欄干に凭れて立ち盡した。そして、とうとう彼女が最後の溜息とともに、下へ降りて行くまで立ち盡したのだ。その時、麻畑の青々とした鮮やかな茂みの中に、白い犬が二匹、嬉しさうにじやれてゐたのを、彼は今でもはつきりと覺えてゐる。

その時の事を、その時の凡ての感じを、又新しくまざまざと思ひ起した彼は、その時あれほどまでに苦しい戰を戰ひ通してやつと支へ得た最後の貴い一線を、明日はN驛で惡くするとこのままむざむざと奪ひ取られるのかと思ふと、何だかそれが如何にも殘念に思はれて堪らなかつた。

「だが、かうなつた上はもう仕方がない。凡ては自分が惡いのだから、何事も成り行きに委せるより外に途がない」

かうは思つたものの、矢張、ああして一時の亢奮から輕卒にあんな返事を出した事が、如何にも一生取り返のつかない破綻になつたやうな氣持がした。そして、その事をそろそろ心私かに後悔しだした。

濱名湖を通る頃には、もう朝になつてゐた。朝になると、彼の頭は何時かすつかり白けてしまつた。それとともに、かうして彼女に會ふ事が心私かに嫌になつた。段々と莫迦げて來た。僅かあんな手紙一本位でああまで亢奮して、取り返しのつかない最後の斷崖へ好んで馬を進めてゐる自分を、自分で嘲りたくなつた。そして、何とかして會はずに濟むなら濟ましたいものだとさへも考へ始めた。

「だが、この列車は否でも應でもN驛を通過せずにはゐないのだ。若し、車室の中に隱れてゐる自分を、彼女が窓の外から見附けたとしたら、そして、大きな聲で呼び立てたとしたら、俺はどうしたつて降りないわけには行かないだらう。降りたら、もう駄目だ。凡てが最後のところまで行つて終ふにきまつてゐる。かうして、俺は是が非でも、とうとう彼女の征服する處となるのかしら」

かう思ふと、彼は何時か如何に地段駄を踏んでもどうしても、もう追つつかないとでも云ふ風な堪らない氣持にさへもなつて行つた。

だが、間もなく彼は不圖こんな事を考へて見た。それは彼女の手紙が全部好い加減な出鱈目ではあるまいかと云ふ事である。手紙ではあんな事を云つて來たが、考へて見ると處女としてはあまりに大膽すぎる態度である。あまりに後先見ずなあまりに輕はづみな態度である。一體、俺と何を相談しようとするのだらう。不良少年とまで罵つた俺との結婚を、彼女の兩親が果して許すかどうか。それさへ怪しい。だのに、あんな手紙を寄越すなんてどうも變だ。あの手紙だつて、何處までほんとうだか解つたものではない。或は俺の心を試みるための變な小細工ではないのかしら。それに、俺の父や母が最初から彼女を信用してないのに、俺はこれほどの危險を冒して一體彼女と何を相談しようとするのかしら。さう思ふと俺も變だ。俺はほんとうに何をしにここまでやつて來たんだらう。」

かう考へると、彼には彼女が何だかN驛へ來てゐないやうな氣持がしてならなくなつた。そして若し來てゐなかつたらその時こそは思ひ切つて罰つてやらうその不信を、その無恥を、その淺果敢な小細工を、思ひ切り責め罵り蔑んでやらうその上、これを絶好の機會にして、きつぱり彼女との不眞面な腐れ緣を斷ち切つてやらう。

彼は一人心の中で、こんな事を考へて見た。すると、先刻まで唯徒らに重苦しく壓せられてばかりゐた彼の心が、何故か不思議に活き活きとした明るさにまでも返つて行つた。そして、彼は彼女がN驛へ來てゐない事を、或は時間を間違へるとか、或は汽車に乘り遲れるとか。どつちでも好い、とにかく來てゐない事を、ますます心の底から願はざるを得なかつたのだ。

やがて汽車はとうとうN驛へ着いた。着くと同時に、彼は怖る怖る車窓から首を出して一心にホームを見廻した。だがどうも彼女の影が見えない。更にぐつと首を出した。こんどはずつと大膽に、ずつと心を落ち着けて出來るだけ丁寧にあ

たりを見廻した。矢張り見えない。ぞろぞろと列車から吐き出された客の大雪崩が、慌しいそして疳走つた下駄の音を響かせながら押し合ひへし合ひ、ブリッヂの階段に吸ひ込まれて行つた後になつても、尚、長い長いホームを端から端まで見渡したけれども、何處にも彼女の影さへ見えない。彼は始めて、ほつと安心した。ほつとすると同時に張りつめた氣が一度に緩みでもしたものか、變にがつかりしたかの如く、どさりと座席へ腰を卸した。

『矢張、來てゐないのだ。來る氣がなくなつて來なかつたのか。それとも、來られなくつて來なかつたのか。それは知らない。とにかく、來なかつた事だけはこれで確かだ。俺は約束通り來たのだ。そして、とうとう逢へなかつたのだ。もうこれで十分だ。これ以上の何物も要らない』

かう思つた時、彼は何だか非常に安心した。否、彼女に對して、最後の勝利を決定的に掴み得たやうな氣持さへした。そして、その事がひどく彼を嬉しがらせた。『何も彼も凡てがこれで終つたのだ。過去二年間の不眞面不徹底な歴史が、これで最後の頁を閉ぢたのだ。まあ、好かつた』――こんな事を思ふと、彼は却つてはしやぎたくさへもなつた位だつた。

やがて、發車のベルが鳴つた、だが、矢張彼女の姿は、否、彼女らしい女の姿さへも、つひに何處にも見えなかつた。

それから四五日の間、彼は豫定通り京都の友人の家にとまつた。そして、生れて始めて見る舊都を熱心に見物して歩いた。その二日目の事だ。突然、その友人の家へあてて彼に手紙が來た。彼女の弟からの手紙だ。彼は弟がどうしてこんなアドレスを知つてゐるのかを怪しみながら、早速封を切つた。ところが意外にも手紙にはこんな事が書いてある。

姉は一昨々日、突然家出をしました。その次の日に女の手に似せた男子字の變な手紙が來ましたから、念のため開けて見ましたら貴方のお手紙てした。これで始めて貴方ともこんな事情になつてゐた事が解りました。實は姉は一昨々日の朝書き置きを殘してN市へ逃けたのです。N市には醫學專門學校を來年卒業するS君がゐます。姉はS君と婚約をしてゐるやうです。そのS君の處へ逃げたのです。二人は多分結婚を許されるでせう。かうなつた以上はもう仕方がないからです。貴方には實にお氣の毒ですが、どうか萬事を諦めて下さい。それからこんどの事は姉の名譽のために、是非是

非一生秘密にして下さい。お願ひします」

ここまで讀んで來た彼は、もうそれ以上讀み進む勇氣をすつかり奪はれて終つた。そして、變に安心してぼんやりしてゐた最中に、いきなり向脛を搔つ拂はれて不様にぬかるみへ引つくりかへされたやうな氣持がした。

彼女は兩天秤をかけてゐたのだ。否。俺がうまうまと懸けられてゐたのだ。Sは俺より卒業が早い。そのためSを選んだのかも知れない。或は、Sの返事が俺の返事よりも早くついたのかも知れない。否。Sと彼女との間が、俺と彼女との間よりもずつと深く、或は肉體的にまでも進んでゐたのかもしれない。さう思ふとどうも彼女は處女でなかつたらしい」

最後の一句は、彼にも自分ながら苦しい負け惜しみである事がはつきりと解つた。が「とにかく俺とSとは彼女の手で見事に天秤にかけられたのだ。そして、俺の方が輕かつたと見えて、俺を乘せた天秤の皿は、俺が何事をも知らずに一人で驚いたり、怖れたり、苦しんだり、慌てたり、亢奮したり、輕蔑したり、迷惑がつたり、好い氣持になつたり、にやにや笑つたりしてゐる裡に、何時かぴんと上の方へ上つて終つたのだ。天秤の皿の上で、彼女のために好い加減な踊を踊らされてゐた俺の姿は、實際、何と云ふ莫迦らしい程の醜態だらう。そして、その醜態を今まで知らず好い氣になつて演じて來た俺は、一體、何と云ふ莫迦なのだらう」

かう思つた時、この貴い人生を、平氣でおもちやにし、この大切な結婚を遊戯と打算とで取り引きしてゐる彼女に對して、心からの嫌惡を感ぜざるを得なかつた。否。彼女に對するよりも、遙かに多く彼自身に對して、心からの、嫌惡を感じた。自分ながら汚く唾を吐きかけて、土足でもつて、いやと云ふ程、蹂躙りたい程の嫌惡を感じた。

その上、かうして貴い人生を平氣でおもちやにしてゐた過去二年の自分自身を何物かに對して恥ぢ怖れ、かつ謝罪したいほどの氣持にさへもなつたのであつた。そして、飽くまで貴びいとほしまなければならない筈の戀愛を、過去二年間、ああまで弄んでゐた自分自身をつくづくと後悔した。

Sは彼よりも中學時代には三年ほど上級だつた。何時Sと彼女が接近したか、それは彼には解らなかつた。

（一一・一一・一五）



翡翠

室生犀星

一

魏國の介弟、徐青君は、けふも庭へ出てひすゐの玉を翳しながら、日の光りを仰ぎみてゐた。その光が透明に日光をうつし得たときに、何かの喜びを迎へることができるし、そのひかりに曇色あるときは、身邊に何かしら悲事がある。かれのさもしい心願は、まづ毎朝、蓮池のほとりでその綠玉をすかし見ることによつてほとんど一日の暮し向きが定められたのである。

曇色ある朝は徐青君は何ごとも手につかぬ容子をしてゐた。どこからか理由のない凶事がいまにも身のあたりに來さうで、絶えず胸さわぎがしてならなかつた。中山公子としてのゆたかな暮しは、それとは反對にかれの心にさまざまな日常のひとつびとつに、重い天邊につらなつた吉凶を豫測させるまでに食ひ入つてゐた。それゆゑ彼はくもりを帶びた光をみるとき、胸にさげた錙つものひすゐの玉を取り換へては日の光をすかしながめた。しかしそんなときはどの玉にもみな曇ある日光が、曇あるまま悲しげにかれの眼底に殘つた。

さういふ曇ある日がつづいたため、かれは日に日に瘠せおとろへた。なぜかと云へば、何かしら悲事が起りさうな氣のするため、かれの心は安まるひまもなかつたからである。そのため平泉金谷に形どつた庭をも、いまは眺めるに物憂く淀

らな茉莉花や芝蘭の匂ひをかぐだけであつた。

徐青君は或日、離亭に居る眉生をたづねた。久しい間徐青君の來なかつたのを愁ひてゐた眉生は、美しいむき玉子のやうな手の甲を、徐青君の肩に置いた。そして篠の戦ぐ窓際へ彼をいざなふた。そして徐青君の蒼ざめた顔を心に案じながら言つた。

「お顔のいろがたいさう惡うございます。どうかなさいまして？」

「わしは永い間心持ちがわるい。おん身にもさう見えるか。」

「まあ、ほんとにおやつれになりましたのね。」

徐青君は胸にさげてゐるひすゐの玉を弄くりながら、その美しい濡れたやうな緑玉に、窓からやはり癖になつてゐるらしい天日を仰ぎ見た。

「かうして毎日わしは日の光を見てゐるが、一日として晴れがましい光をみたことがない。毎日いくすぢかの曇りがかかつてゐるのは、天下に何か凶事があるにちがひないと思ふのだ。」

徐青君は、悒鬱な瘠せて尖りをみせてゐる顔に、なほ一そうの憂色をうかべた。

「毎日でございますか。」

眉生は、徐青君の胸にある、青い玉を見入りながら言つた。

「毎日だ、一日として皓然としたことはない。」

「ではわたくしにちよいと見させてくださいまし。」

眉生は、さういふと緑色のひすゐの玉を手にとり、そして徐青君が、よくするやうに、日の光を覗き見た。そこにはどんよりと沼の上を見わたすやうな不思議な曇色が、かさなり合つて鬱つて見えた。——緑玉を眼から放した眉生は、これも憂はしげな色をすぐに顔色にうかべた。

「何といふ寂しい曇つた日のいろでございませう。わたくし、何年にもない寂しい光を見ました。」

「何かしら變化つたことがあるらしい、幾日經つても曇つてゐるのはその前知らせだ。」

徐青君は、坐つたまま溜息をついた。そして靜かに言つた。
「みんな人間がちりぢりになることがあるかも知れない。母も父も、さうしてお前とも。……人は誰もこれを信じまいし信じかねるところもあるのだ。だが人間はきまつて死ぬやうに、またちりぢりに別れることもあるだらう。」
「そしてあなたとわたくしもでせうか。世に凶事があれば、ちやうど引いてゆく波のやうに浚はれてしまふのでせうか。」
眉生は、あきらめのよい女がそれを心に決めるまで、永く思ひ惑ふやうな綿々たる調子で言つた。
「それも爲方がないことだ。誰のせゐでもない。しかし人間がその心に持ついがみのある間はそれが續いては繰り返されるだらう。」
徐青君は、離亭を立ち出て、眉生と併んであるいた。そして日に日に心がやつれる思ひを話した。
「早く變化つた世が來ればよい。さうなつてもわしは何一つ怨むことはない。この庭もわしはすぐにでも人に呉れてやつてもよい。」
美しい公子である彼は、その廣濶な庭を眺めわたしたが、しかし憂色はこの鉅萬の豪侈をつくしたかれの面持ちにあらはれてゐた。羽扇をつかふ手つきさへ平常からみると力なく眉生には見られた。
「わたくしはそのときはどうしたらようございませうか。」
眉生は、美しい臈たけな額に、悲しげな色をたたへた。
「わしと一しよに來てくれればよい。世はかはつても。」
眉生は、徐青君に感謝した。——かれらは蓮池のあるところに廣がる空をみたときもう一度徐青君はその青い玉に、日光をすかしながめた。
「ああ、悪い曇りだ。」
さういふと、池心にゆらぐ一點の遲い白花を眺めた。氣のせゐか、その雪花になほ參差たる曇色が窺ひ見られた。徐青よは、眉生と顔を見合せながら默つて哀しさうに佇ちつくしてゐた。

二

明の亡びた清の順治二年の秋、囚人獄の門前に、一人のやせ衰へた男が迫うてゐた。破れた靴を引いだその男は、なほ一食をも取らないほど蹌踉として歩いてゐた。かれは或る職人軒に、己が仕事の口を託んだがその穢ない衣幣にひとびとはみな面を覆うたばかりでなく、職を数へるものさへなかつた。そしてなるべく此男を自家の軒先きから遠退けることによつて、何となく己が危險を未然にふせがうとするところがあつた。

「お前のやうな汚ないなりをしてゐては、獄屋にだつて使つてくれいなかも知れない。しかし獄屋にはお前らしい仕事はあるにはある。」

長い煙管を啣へながら、とある日南の壁ぎはに靠れてゐた男は、さういふと、外方を向いて嘲笑つた。――しかしその男はしつこく訊ねた。

「仕事があるならば教へて下され、わしにはどういふ辛氣な仕事でも厭ふやうなことはない……」

「うむ。」

その男は、黄ろい脂唾を吐いて、上唇を舐めてゐたが、居坐りながら言つた。

「では錢二百文の儲口を教へてやらう。それはな、罪人のかはりに己れが肌身を打たれるのぢや、一撲ち二文ぢや、十撲たれれば二十文ぢや、百撲ちは二百文ぢや。どうせ犬のやうなお前の肌身を打つても錢を出すものはなからうゆゑ、この仕事は儲口ぢや。」

「では罪人の身代りに鞭打ちをされるのかな。」

「それも金のある罪人に限るのだ。文なしでは仕方がない。どうだ、その仕事を遣る氣があるかの。」

身すぼらしい男はしばらく考へてゐたがはつきりと答へた。

「その仕事を遣りませう。まだ朝來一食を攝りませぬ。」

さういふ垢面になほ品のある凛々しさがあつた。

「ぢや拉れて行つてやらう。」
二人は連れ立つて、囚人獄へ行つた。その日にも鞭うたれるばかりになつた五人の罪人が、砂利の敷いた處刑場に、膝をそろへて坐つてゐた。下役は、竹の端割れのした棒をしなへ、棒算役は、墨筆を持つて用箋を抒べて控へてゐた。
「棒代りの申出があるか希みのものがあるか、百撲ち二百文ぢや。」
さう下役が罪人にいふと、眼の黒い瘠せた囚人が、その錢を支拂うた。そして身すぼらしい男は、その身代りに打たれることになつた。あと四人の囚人は、樂々と鞭逃れした同囚が、下淨戸から歸つてゆくのを、羨ましげに見送つてゐた。
男は、鞭の下に坐つたが、衣幣を取除いた肌身を露き出しにしなければならなかつた。その肌はやつれてゐたが、どこか高貴の人人によくみる品のある白蠟のやうな光をもつてゐた。
「よく應へるか。」
下役がさう言つたとき、男は、默つて肯いた。その鞭は卸ろされた。鈍い棒讀みの聲が虹の唸るやうに起つた。……男の肌身はいつの間にか裂け、血が滲んだ。それでも男はつッ伏さうとしながら、その白い肌を激しく波打たせてゐた。
「二百でございます。お約束申しあげたのは？」
男がさう言つたときには、既う二百の數を越えてゐたばかりでなく、棒讀みはもはや鞭算の筆を擱いてゐた。
「いやよしぢや。」
「そりやなりませぬ。」
「なぜならぬ。」
「鞭打ちは君だちの決めたものではない。しかも囚人を僞るといふことは無法だ。」
その男は、怒つてさう言つたとき、上座にゐた林公といふ上役が、手をあげて下人を制した。そして靜かに男の顔を見戍つた。男も林公を見上げた。
「あなたは徐青君ではないか。よう似てゐるが」
「由崇帝の御代の徐青君です。が、今はあなたがたのお聲がかりを受けるには、あまりに零落れて居ります。」

上役の林公は、立つて徐青君を扶け、そして別の離亭にさそうた。しかもその邸後は、もと徐青君の庭園になつてゐたが、手入せぬ樹木は蓬のやうにむだ枝を伸しながら、樹並みが亂れがちだつた。

「何といふ世の變化りやうでございませう。あなたが囚人に身代るなどとは……」

林公は、徐青君のかはりはてた姿を見つめた。そして「唯一つあなたの望みとほりのものを私は差し呈けよう。」と言つた。徐青君は考へてゐたが、靜かに手を伸しながら言つた。

「わしには眉生といふ女がありましたが、今は離れてどこにゐるかわかりません。わたしのいまの望みはその眉生でなくてなんでせう。」

林公はうなづいて「では眉生を搜しおたづねさせるやうに致しませう。」と言つた。

徐青君は役所を出ると、街裏の汚ない自分の居間にかへつた。それでも靜かに胸のところにある綠色の翡翠をとり出すと、やはり天日を仰ぎ見てゐた。

三

徐青君は、街裏の汚ない垣を結へた小屋の中にゐた。吹きさらしの秋風は、寒さに顫へてゐる徐青君の衣帑に沁みた。そして僅かに得た錢で、花を購ひ、床の一隅に挿して置いた。かれはそこに坐ると、風にそよぐ草草の莢がからから鳴るのに心を傾けてゐた。

その翌晚、燈の下に沈んでゐた徐青君の耳もとに、かすかな靴音が聞え、そとには、やつれてゐるが、朗艷とした素足に短かい靴を履いてゐる、一人の女が佇んでゐた。夜目にも白い半顏が徐青君にはすぐ首肯かれた。それは美しい眉生であつた。

「眉生であつたか。」

徐青君は、懷しさうに手を伸した。その手に冷えた女の手がむすびついた。

「おなつかしうございます。」

かれらは、床上に坐ると、何から話してよいか分らずに、ただ微笑と哀愁のこもつた沈默とが、かはるがはるお互ひの胸をゆきゝすることを感じた。

「世はいつの間にか變つた。そしてお前に會へたことは喜ばしい。」

徐青君は、瞼のまはりに小皺の寄つた眉生をながめると、梢の裏に返り花を覗き見たやうな、或る清純を感じた。

「わたくしどのやうに捜してもあなたのところが分りませんでした。金陵に出てからも三年になります。」

徐青君は、ずつとむかしの夢を辿るやうに、胸から翡翠の玉をとり出した。

「この玉であのやうな曇りを見た毎日が、このごろ晴ればれしく見えるのだ。それゆゑわしはお前に會へるやうな氣がしてゐた。見てごらん、そのやうに美しい日の光がはじめて映つてくるではないか。」

眉生は、その玉を手にとると、うすら日ではあつたが、寂落たる秋日を仰ぎ見た。しかも一點の曇りがなかつた。

「あゝ、美しい。」

眉生は、夫の手に青い玉をかへし、幾度もさう呟いた。

「わしらは破れた垣根を結んで、そして行けばあのいやな曇色ある日の光をみることはなからう。わしには彼の廣大な庭園など欲くはない。」

徐青君はさういふと「それにお前は不服はないだらうね。」と言つた。

「その玉に美しい影ばかりが映るやうに、それだけがわたくしの望みでございます。」

眉生はさういふと、徐青君の胸の上の、その綠色の翡翠に手を遣つた。かくて二人して見る日の光りは永い間曇色を見なかつた。――かれらはかうして金陵の市に珍石草本を賣つて渡世してゐた。――



姉の問題

佐々木味津三

まさかとは思つたが、一度ならず三度迄も同行異曲な密告に接したので、流石に私も或はと言ふ疑を抱いた。

最初私はその密告を濱松の小父から聞いたのである。此頃で又くにの姉の身持がよくないんださうで、いつ頃からか時日のところはよく解らないがとにかく對手は村の者ださうで、家へも始終出入りの男と言ふことであつた。

此九月末鐵道新設期成同盟とかと言ふ小父一流の運動のために、二三日がけで上京した砌、特に秘密の咄しがあるからと言ふやうなことを言つて、わざわざ淺草の來々軒みたいな人込みの中へ引つ張り出して、さも小父自身見て來たやうな口調でもつて打明けたのである。

一體くにの姉と言ふのは、私の口から言ひ憎い咄しであるが、元來があまり身持のいい方ではなかつた。東京の女學校を卒業前で已に十八の年、男の問題で學校も退かされた位で、是も弟の私としては言ひ憎い咄しであるが、姉はそんなにきりやうも惡いと言ふ方ではなかつたので、自身その點で何か多少の自惚れでも持つてゐたせゐか、

くにへ帰つてからでも結婚する迄二年の間に一再ならず又男と問題を惹起した位だつたのである。

大體が父も母もその方では少しひらけ過ぎたと非難される位凡てそんなことにはおほやう過ぎたが、姉には流石に手古摺つたと見えて、無理矢理従兄の新君と結婚さしたのは丁度私が中學四年の秋であつた。

從兄の新君が私と五つ違ひの二十三の年で、無理矢理以上に新君はよつてたかつて周圍から因果を含められて、それも只姉を貰つて呉れではいかにも可哀さうだからと言ふことで、言はば姉の貞操と私が家の財産とを引換へのやうな條件でもつて、二人に家業を繼がせると言ふ名目の本に、私の家へ養子として新君を貰ひうけたのである。

新君と姉に繼がせるとは言ふものゝ、それはいはゆる田舍式の本家顔がけんぺいづくで分家の新君を犠牲にしたやうなもので、行く行くはやはり私を中心に、つまりは新君を顧問格と言ふ風な位置に祭り込まうと言ふのが、その當時父が一世一代の遠謀深慮だつたさうであるが、しかし私は見事それを裏切つた。

中學が濟んだら大阪高工の醸造科へと言ふのを、獨斷以つて私は見當違の辯護士になつたのである。相前後して父が頓死して、その一年たつと今度は新君が病死して、以來姉は二人の遺兒を抱え乍ら、母と番頭を對手にどうにかこれ迄家業も大きなさてつなくして盛り立てて來ることは出來たのであつた。

新君を失つた年が姉の數へ年二十六の年だから、以來まる三年間二十九と言ふ女ざかりから言へば、濱松の小父が言ふ不身持の事もその姉にして萬更やりかねないとは斷言出來なかつたが、しかし私は小父が小父故に一概にはそれを信じなかつたのである。

元來濱松の小父は、父が死んだ當座母に就いてもそんな風な事を現にこの私に打明けたことがあつた。番頭の陽吉となにかをかしな關係でもある樣な口吻で、大いに前途を憂へ顔で囁いたことがあつたのである。一體がその小父と云ふのが、鐵道新設期成同盟でも一つ作つてみようと言ふやうに、變な所へ有力者顔をしたい方のたちで、高が田舍の微々たる藥屋の

くせに、東京へ來たらそれも淺草の來々軒みたいな所で支那料理の一つも食つてみようと言ふ樣な、妙に生半解に通人がる所があつたので、元來私は蟲が好かなかつた。

父が存生の折からも父に取つては親身の兄弟に拘らず、私以上に矢張りその小父が大嫌ひで、死んでからと言ふものとかく母方の親戚の者が私一家に重んぜられると言ふ風が見えたので、そんなこんなで折があつたら、何とかあらぬ難辭迄も言ひふらして、甘い汁でも吸ひたいと言ふあさましい所があつたのである。

實際是が昔なら、確に小父は御家騷動の張本にでもなつた人間に相違なく、凡てがそんな風にひどく柄がわるかつたので私はてんで頭から姉の告げ口に耳を借さなかつたのであつた。かつてその昔母の告げ口を聞いた時と同じやうに、平然と私の方で默殺してゐたら今にその風評も必ずや消滅するに違ひないと信じてゐたので、そのご大體對手にならなかつた。

小父は果して尾つぽを卷いて二度と再び姉の問題を口にしなかつたが、しかし私はその旬日を出でない間に、今度はくにで銀行に勤めてゐる從弟から同じ告げ口を受け取つたのである。

小父と一緒で對手の男は誰とはッきり名ざしてはなかつたが、姉は最早妊娠三ケ月と言ふやうなことをつけ足してあつた。

その從弟と言ふのが、存外人は良い方であつたが、此頃銀行で有卦に入つてゐるので夫子自身柄になく妄狂ひなぞやり出して、何かと他人の告げ口なぞ嘘にも言へる義理でなかつたので、寧ろ却つて彼の方を片腹痛く感じて、私は又てんで頭から問題にしなかつた。それ以上に親身の姉により善意な信用をかけたかつた。

しかし此十一月、私は又三度目の密告に接したのである。

『頃來久しく御消息に不接、それだけいちだんの御健弁と拜察罷りあり候。さて今日は甚だ不快なる風說特に御耳に入れるべく候。吾兄にこれを小生より申上ぐるはこと少しく僭越の沙汰にも渉るべくは候が、吾兄と吾と年來の舊誼に甘えて、

聊か苦言を申上る次第に有之候。或は已に御高聞のことにも候はんが、吾兄令姉近來とかく風評香しからず、共に心外に不堪候 風評告ぐる所に從へば何か番頭陽吉氏との間にとかくの噂有之、その上聊か面白からぬ事迄小生直々に發見も致し候只なる風評に終る事も有之は勿論小生共に不快は解くべく候も、殘念乍ら今はその翹望遠きにあると存ぜられ候。かゝることは啻に吾兄一人の御不快のみならず又小生友人としても吾兄のためにこのまゝ一刻も座視するに忍びず、今を期して斷然吾兄が御勇裁の程可然と存ぜられ候。とかく村の風評と言へば、半分は閑人の問題ずきに依るべく、又半分は佞人の愚ろかしき猜疑にも依るべく、孰れに御勇斷下すと言ふも、事迅速を選ぶが何より賢明と存ぜられ候。吾兄が今の位置からしても、此宿題は今を置いて他に適當な機會のあるとは存ぜられず、愚生がそれ迄氣に病む所以のものは、元より聊か婆心の故に不過候。そのため敢て一微の進言致度、それもこれもみな今の吾兄に何等顧みるの必要なきとあらば、吾亦何をか言はんやに候。」

と言ふやうな詳細に渉つたものを、私が舊知の友人から受取つた。大體手紙でも伺はれる通り、寧ろ誠意ある忠告と言ふ方に近かつたのである。

小父や從弟やみうちの者であつたならば、みうちと言ふその點で、忠告以外に不純な臆測と不愉快な想像迄伴つてかんぜられるが故に、頭から一切默殺しておきたかつたが、しかし最後に友人の此の一札には自ら私も考へざるをえなかつた。何の利害關係もなき一友人が只誠意をもつて忠告して吳れただけに、みうちの姉を信じたい以上に、又いはゆる友人が婆心にも耳を傾けたかつたのである。

手紙に言ふがごとく、番頭の陽吉がその元兇であるかないかは別問題として、友人がいはゆる此機會を期して、多年宿題であつた一家の今後將來の問題をも他に適當な解決をつけたかつた。

生前父が深謀をめぐらしたごとく、私も新君も滿足に家業にいそしんでもゐると言ふなら元よりそれは問題でなかつ

たが、特に今の場合、事案外に紛糾してゐたら、又益々出でて事めんだうな場合に陷したら、甚だ殘念至極であるが、いはゆる私が勇斷を以つて、永代家業の造り酒屋も、或は又くにの一家をも、次第に依つたら疊まうと言ふ決心を作つたのである。

幸ひ十一月へ這入つてからと言ふもの、裁判所の方も別に重だつた事件は豫定のうちになかつたので、つひに私はその三度目の友人が忠告に從つて、とにかくと言ふ考へを以つて、突然一年振りで歸郷の決心をつくつた。

淫雨朝からしきりにたやみないと言つた樣な時雨空で、そして私は十一月三日明治神宮鎭座記念祭の當夜警告なくしてひそかに東京を立つたのである。

三河路もやはり秋の淫雨であつた。

定期自動車も亦豫定のごとく見事遲れて、私はめそめそ頃に家へ着いた。無警告であつたために、果して母は先づ驚いたのである。より以上に問題當面の姉は已に何かと狼狽したらしく、さかんにそわそわ氣もおちつかなくて、滅多に私に口も切らなかつた。東京を立つ砌には、何より先づ第一發に、いはゆる姉が姙娠の有無を、自身私も正確に見當をつけておきたいと思はないではなかつたが、しかし私は已になんかしら暗然と胸が一杯になつたやうにかんじて、意久地なくもなるべく自らその方へ眼をさけた。

「お前なんぞい。今頃時でもない時にひよつくりかへりおつて。まあこの泥は自動車のはねづらに、早く着物を替へさつせい。風でも惹くとわりいに。」

母はさも驚いたやうなことを口では言つたが、大した屈托も別に心にはなさうに例のごとく已に母親らしい心配に氣を

まはして、姉に向つて着替へのこと迄なにくれとなく命じたのであつた。

姉もろくろく返事はしないものゝ、矢張り甲斐々々しく土藏へいつて、着替への一着をちやんと用意して來てくれたので、とたんにはッと姉が股の邊へ意識的に注意を向けようと言ふ誘惑に捉したが、無理にも他意なくそつぽへ顏をねぢむけると、

「ほう、こいつあ新君の一張羅だね、新君こんな背がちつちやかつたかな。」

しかしわざと一言ぴりりと痛いところへ承知し乍らさはつてやつたのであつた。

「馬鹿言ふぞい。お前の方が新よりはちさかつたづらに。」

姉ではなくて母の方で勘違ひした合槌を打つたので、私はそのまゝ默殺すると、先づなによりと言ふやうに、母達を促すごとく離の八疊へ先へ立つてとつとと坐り込んだのである。

事迅速を尊ぶ以上に、今となつては短兵急に凡て問題に突入した方が、なにかと結果をこじらさせなくて濟むと考へたので、私は今にも母達の這入つて來るのを、胡座を掻き乍ら心待ちに待つたのであつた。

しかしそのご何故か母も姉も予想を裏切つて、一寸小半時姿を見せなかつた。それと反對に、甥の信坊がまだ學校にも一兩年といふ年のくせにませた顏つきで、

「あら、おひげのをぢちやん。」

雜作なく私をおひげの小父さんに片附て了つて、とことことこと離れへ這入り込んで來たので、姉達でなかつた不滿を信坊に向け乍らも、しかしつひ心から相好を崩して、

「どうだい坊主、をぢさんのおひげ少し土産に分けてやろか。」

すぐ手を出すと、引ッ抱えるやうにもう膝の上に、むしや振りついたのであつた。

「痛いよう。痛いよう。おひげなんかであたいの唇つついちや。」

信坊は兩手の中でばたばた手足をあがいたが、私は瞬間凡て昔の無心に還つて、ぎゆッと兩手に力をこめた。とたんにしかし、はッと姉の問題に又平和をかきみだされたので、

「かあちやんは？」

私は稍々顔色をむづかしくすると、それとなく信坊に訊ねた。

「ね。ばあちやんとあつちへ、吉やの方へいつたんだよ。」

「吉や。陽吉かい？」

「うん三人で。」

信坊は凡て無心であつた。しかし私はどきりと胸に厳冬の暗い冷さをかんじたのである。果して！そんな氣がしたのであつた。そして、先づ全體が穏やかでなかつた。凡らく私に違ふ前に先だつて、彼等は彼等並に可然打ち合せをしてゐるに違ひなかつた。

「こら、ばあちやんもかやあちんもすぐおいでつて連れて來い。」

であるとすると、已に甚だ怪しからんと言ふ氣がしたのである。とたんに私は持ち前の短氣をひよいと感じて、いきなり信坊を心ならずも突ッ放した。力あまつて信坊が二つ三つ郎下先へよろめくやうにのめつたので、瞬間はッと別な後悔に襲はれたが、しかし信坊はおどろいたごとく、まるくなつて郎下を母屋の方へばたばたと飛んでいつたのであつた。

又一人に立ちかへると、私は已に徹頭徹尾心穏やかでなかつたのである。しかしやがて、母親一人がそれと覺悟はついたもののごとく、先程の平氣さは全然なくて、憚るやうに這入つて來たのであつた。

『姉さんどうしたんです。』

何んの新らたなる根據もなく只餘勢にまかせて詰じるやうに訊ねると、已に母はぎくりとなにか萬事に就いて尋問でも受けたかのごとく勘違ひして、

『おとしもお前に面目ないと言ひおつて、よう顏も出しえんのぢやわい。』

凡て姉をかばふごとく辯解するがごとくに頭からわびごとのやうなことを言ひ出したのであつた。

今の今迄、どうか噂さが嘘であつてくれ、と言ふやうな身びいきを持つて、ひそかに私はその嘘ならんことを祈るやうに心に念じてゐたが、又新らしく果して、と言ふ見當が確然とつくと、言下に私ははッと胸先がつまる感じに接した。

『なんづらいなあ。東京でもその噂さをきいたで來たんづらいなあ。』

『勿論。』

今は私も躊躇しなかつた。

『全くわしも途方にくれたぞい。』

『姉さんはなんしてるんです。』

しかし母は答へなかつた。答へる代りに、

『どうせなんとか形をつけるなら、なんだでな。このまゝ內輪でぐぢぐぢ言つてもならんよつてな。出來るならみんな親類衆も呼んで、いつぺんにはつきり仕末つけて貰へるといいんぢやけれど。』

母一流の考へを述べた。

しかし私は先づ不愉快であつた。今となつては姉の問題はこの次として、解決を以つて先づご親類衆に諮らうとするその態度が氣に喰はなかつたのである。

總じて田舍の、恒に問題は是を大にして四角張らうとするやうな、もろもろの方寸が一體私には苦手だつたのである。新君が養子問題の時にしろ、ずつとそのかみ姉の不身持が起つた時の場合にしろ、又近くは私を東京から連れかへる歸へらない時の場合にしろ、又初めとかくご親類衆の面々と言ふのが、恒にいはゆる親族會議風の羽織袴で相談なるものが好きであつた。

好ききらひの問題ならまだ諒とするに足りない所もないが、是迄さう言ふ風な羽織袴の解決にいい結果のあつたためしは一つもなかつたのである。新君の場合は言ふを憚るとして、第一この私がいい見本であつた。

辯護士を棒にふつて、肝心の私が退耕しようとならば、何も人手やご親類衆のひびの入つたもみ苦茶の御智慧は借りる迄もなく、自身さツさと大手をふつて、已に二年も三年前にも、股引法被で杜侍の仲間にでもなつてゐたに違ひなかつた。

しかも今の場合姉の問題に至つては、ことおろそかにすべき性質のものではないのである。元より姉自身の出様にも依ることは依るが、しかし肝心の姉の方で、槍が降つても骨になつても飽く迄かりに陽吉と添ひ遂げようと言ふ決心ならば、勿論ご親類衆の皺苦茶頭なぞには歯も立ちえない事に相違なかつた。

單にさう言ふ表面的な理由のみでなくて、とにかく姉にとつて生命を左右するがごとき、事眞劍な問題にかゝはる以上、世にいはゆるご親類衆と言ふがごとき、ひゞの入つたもみ苦茶のいびつな年寄り智慧は一牟たり共私が見識を以つてしても、斷じて拜借したくはなかつた。

たとへ問題は姉の身邊を遠く離れて、私が一家の將來に立ち及ぶやうなことがあつても、家を去つて遠い東京で家業をよそにこそしてゐるが、瘦せても枯れても私は現在加賀屋の當主である。凡て方寸は私の胸中を以つてするのが理の當然であつた。

たとへ何百人の小父御小母御が詰じり寄らう共、大體いはゆるご親類衆なぞ物の數でなかつた。誰かに力を藉りる段に

なれば、寧ろ私は赤の他人の一友人を選びたいのである。

ご多分に洩れない、ひびの入つたもみ苦茶のいびつ頭なる母としては、ごく尤もな考へに違ひなかつたが、しかし私は産みの親の言としても、わが信ずる考へを曲げたくなかつた。

「又親類會議ならよして下さい。」

そして私は斷乎として言ひ放つたのである。實際自身明言する以上に、私はそれだけの自信もあつた。姉の出様次第によつては、このまゝ凡て全部を諒として默認もしようし、場合に依つては一家もこの場に疊んで悔も貽さなかつた。

第一猜疑と陰口以外にはこの世になにも持つて來ることを置き忘れたやうな、ご親類の老人連に、姉や私なぞの纖細な若い訓練を經た心の世界を百姓手でもつてむざむざと掻きみだされたくはなかつたのである。

しかし母にその正しき心持がわかる道理はなかつた。

「そんなこと言つたつて、今迄もみんな親類の衆にたのんだぢやないかい。わしの代になつてから、ろくろく相談もかせん言ふよつては、みんなの口もやかましいんだでな。」

母一流の立場をもつてたやすくは讓らなかつた。

「あなたの代としてやるんぢやないんです。僕の代として僕が信ずるやうにやるんです。」

私も決して退かなかつた。

「そりやお前の代だでな。お前が信ずるやうにも存ずるやうにもなんとでもやるがいいぢやけれど、そいぢやあとで困りやせんかと思ふんだわい。」

「斷じて困らないんです。」

實際どんな場合に遭遇しようとも、たとへ自ら齒を喰ひしばつても決して將來困るまいと言ふ樣に、なんとなく只なら

ぬ意氣込を以つて、私は稍々亢奮し乍ら言葉を押さへた。

「それより姉さんを呼んで下さい。」

そして私は四五分前に確かに姉が廊下先へ忍び足でやつて來て、そつとひそかに聲耳を逆立ててゐるらしい氣配をちやんと已に感づいてゐたので、言葉も幾分歎け乍ら、姉にも自決を促すごとく機會を與へたのである。

母は漸々座を立たうとした拍子に、

「いいのよ。今いくわ。」

果して姉が消えでもしたひやうなかほそい聲を立てゝ、うつむきかげんで這入るとすぐに、室の隅へちひさくなつてかしこまつた。

とたんにはッと私は視線をそらうさうとしたが、しかし本能的にちらりと瞥見すると、嘆ずべきことには、矢張り姉のおなかは尋常でなかつたのである。そこを自ら注意して姉自身なにか神妙に恥ぢらうごとく、わざと寒さうに兩手を合せて、無理にも袂でかくさうとしたのには、私もいさゝかだぢだぢとならざるをえなかつた。

見れば見る程姉は凡て昔とは面やつれて、稍とんがつて感ぜられるおちくぼんだ兩の澄み切つたまなこと、ひたいに少しぬけ上つた薄いまばらな髮も、うつむいたうじなに、肉の落ちた青い無血色の襟足も、寧ろ私には痛ましかつた。

神妙に只うつむいて、ぢつと無言にうつむいただけで、凡ての裁決を待つがごとき、姉の全體が樣子を見ては、瞬間私も萬事宥したく感じた。

いたいたしい瘦せこけたうなじを見ては、已に青春もうせ切つたやうな姉が肉體を瞥見しては、恥らうごとく寂しげにう

つむいた容子に接しては、凡てが神妙に謝罪を表はしてゐる様にさへ感じられて、瞬間なにも咎めたくなかつた。

しかし母親は無智なる年寄であつたのである。

『お前なにも默つとるところはないぢやないかい。出來たことは出來たで仕方がないよつて、謝るところは謝つて思ふことはずんずん言つたらいいぢやないかい。』

はぢらふ姉を、神妙な姉を、强ひるやうに顧みたのであつた。

私の心をも同じやうに亦かきみだした。

謝ればすむと言ふ風な表面的な母の考へをなにより私は憎んだのである。

『おわるうござんした。』と言ふやうな他人行儀を、決して私は欲しなかつた。謝る謝らないは問題でなかつた。より以上姉の心で私の心で、姉が氣持を私の心に、言葉以上にぢきぢき感じたかつた。のつぴきならぬその姉がぢきぢきの心持に依つて、宥すべきはどこ迄も宥し、考ふべきはどこ迄も考へたかつた。

『お前も亦かれこれ咎めだてせんでもいいだでな。』

憎むべき母は、又私を顧みたのである。勿論私はそれを母から制御され强要される迄もなかつた。寧ろそんな風に、さも分別顏をして、因果でも含めるやうな口吻を洩されると、瞬間私はぐつとつむじを曲げたく感じたので、

『しかしほめたこつちやないですね。これ迄がこれ迄ですからな。姉弟として氣がひけるんです。』

意地になつてもいやみたらしを勢ひ言はざるをえなかつた。

ぱつと面を眞赤に染めて、一層姉は神妙にうづむいたと言ふのに、

『お前だつてそんな威張れた義理ぢやないかい。自分で嫁は追んだしておいたくせに。』

しかし母は、要らざること迄、黠く論法を平然と用ひた。言下に私は、

『なに言ふんです！』

危ふく怒鳴らうとした位だつたのである。

なる程私は此の三月、立派に妻も追ん出した。しかし私はそのいきさつを、私以外に誰にも打明けたくなかつたのである。茲で私が今白狀するだけでも、さも何か爲にせん所あるが故に、一人美名にかくれようとでもするかのごとく他人には聞きとれないとも限らなかつたので、萬事私一個の胸中に固く祕めておきたかつたが、全く私は自身妻を追ん出したのでなくて、事實は妻から追ん出されたやうなものであつた。

なにをかくさう、私の妻は、私を棄てゝ自身勝手に男の元へ走つたのである。それをろこつに白狀するのは、たとへ肉親の母親にしろ、本來一個の男子が面目の上からも、亦去り行く妻が人格の上からも、決して香しいこととは思へなかつたので、今迄決して母にさへ他言は憚つてゐたのに、私がその苦衷はいさゝかも知りもしないで、只妻を離別した故を以て、それをしも猶姉が不身持と帳消にでもなるかのごとき論法に至つては、母乍ら私は呆れ返らざるをえなかつた。

しかし母は一層頓着なかつたのである。

『わしが後家だし、おとしも後家だし、お前も後家だでな。一人位誰か對手が出來たつて、罰もあたるまいづらに。』

にやにや下品な微笑さへ洩らして驚くべき言を吐いた。

『なに言ふんです！』

流石に私も言下に叱りつけた。理由にならないみだらなる放言は、聞く耳を持たなかつたのである。

村うちの愚ろかしき佞人ばらが、加賀屋の三後家と稱して、ひそかに手を打つてさゝやき合ふを敢て屑よしとしてゐる位のことも、決して私は知らないではなかつた。元より高が無智朦昧のやから達である。

それに耳を借す方が愚の骨頂以上に、母が三後家なぞを理由とするに至つては、寧ろ一層おどろくに絶えた。

とたんにしかし私は、はッと縁先に人の氣配を確かに聞きつけたのである。
「誰だ。」
急々出でて急々おろかしき母のためには、尋常以上に私も氣を苛立てた矢先だつたので、腹立ちまぎれに怒聲を擧げて叫んだ。
が、聲はなかつた。しかし再び確かにことりと植込みの方へ誰か急いで消えたらしい人の足音を聞きつけたので、
「おい。誰だ。」
私も、つと立ち上りざまいきなり障子を押し開くと、追ッかけるやうに叫んだ。
と一緒に私は意外にも稍々豪然として、
「おれです。」
と言つて振り返つた陽吉の姿を認めたのである
「おれだつて？おれとはなんだ。どこのおれだ。」
そのおれと言つた不遜な言葉がぐつと癪にさはつたので、私も勢ひ言葉をからんで氣色ばんだ。
「陽吉です。」
「陽吉？陽吉がなに用があつてこんなところに忍んでゐるんだ。さきさつきからこゝで立ち聞きしてたんだな。」
しかし私は逃さなかつた。
「立ち聞きなんか致しません。」
「致さないものがなぜ逃げる！きゝたければきかしてやるから神妙に上つて來い。」
私はむきになつて詰め寄つたのである。實際私は最早、何んの自然さも失はずに苛立たざるをえなかつた。

「上りますとも。えゝきゝますよ。」

所が陽吉は驚くべき態度に出でたのである。已になに故か喧嘩腰のその態度には、勢ひ私もぐッとこたへたので、

「よし上れ！」

自然に又氣色ばんだ。とたんにはッと姉が面を上げて、双方へはらはら一人氣を揉んでゐる容子には、流石に私も幾分の氣の毒さを感じたが、今は私も只餘勢故にこらへかねた。

「お前、濟まないとは思はないかね。」

そして先づ頭から切り出したのである。

「いゝえ。」

ところが彼は、おどろくべくも泰然たるものであつた。

「いゝえだつて。きさま満足な良心は持つてゐないのか。」

已に私も平衡を失つてゐたのである。實際是が若し陽吉の方でも只ひたすらに神妙な態度でもとつてゐようものなら、嘘にも神妙らしい氣振りを見せたならば、私に勿論宥すだけの度量がないわけはなかつたが、さも一人前の當然顔には、何んの番頭の分際で、と言ふやうな感情さへ手傳つて、袈裟迄憎い氣になつた。

「そんなに頭からがみがみ言はなくたつて良いんでしよ。なにも私一人でやつたこつちやないけにね。」

所が決して陽吉は負けてゐなかつたのである。

私はしかし怒り心頭に發した。私一人でやつたこつちやないと言ふに至つては、その不遜の言たるや甚だしかつた。責を左右に託することが已に不神妙も甚だしいのに、姉に迄事件の責任を負はさんとするその男らしくない口吻には、怒らざらんとするも怒らざるをえなかつたのである。

「馬鹿。きさまよつほどのぼせてるんだな。俺はな主人顔してこれ言ふんぢやないんだぞ。主人顔したければな、意地になつたつて辯護士なんぞ棒にふつてみせらあ。死んだおやぢがお前一人に目をかけてゐたんだからな。俺その心持を尊重したかつたんだ。俺から見ればお前なんぞに初めツから信用はなかつたんだ。お前を信用する位なら、他に友達だつていくらでもあらあ。粉骨碎身馬鹿になつて御家重寶で働けつて言ふんぢやないんだ。お前が俺たちみたいな者にでも信用をかけてゐるだらうから、それを傷つけたくないばつかりに、默つてお前にまかせておいたんだ。それを何んぞやあべこべに傷つけるやうなことを仕出かしておいて、お前なんざ初めつから白鼠だつたんだ。」

實際白鼠と言ふ點に於いては、いくらでも材料は上つてゐたので、言はないでいゝことゝ迄も勢で私は洗ひ立てた。

「わたしこそ、あなたを初めツから他依つちやゐません。あなたなんぞうちの旦那と思つてたんぢや、六尺一本滿足なは出來ませんでな。どうせあなたなんぞ東京くんだりで間借り辯護士にでもなつてりやいゝんですからな。ろくでもない金ばかり使つて、今だつて家の方から仕送りしなかつたらどうなさるんです。」

しかし陽吉は愈々不遜だつたのである。

私は彼が何が故にそんな風に豪然と喰つてかゝるのかそこの眞意が解せなかつた。若し萬が一姉を現在完全に所有してゐるが故に、それをしも何か大きな强味とでも思つてゐるとするならば、蓋し彼の勘違たるや甚だしかつた。

姉を宥す宥さない心持は、決して一陽吉に左右されなかつたのである。或はどこの要吉だらうと、いづこの養吉だらう共、姉が知る男故に度量を云爲するのではなかつた。

いかにも姉がその性格の上に於て、その生ひ立ちの上に於て、過去數年の歴史に就いて、弱い女の姉としてさもありぬべき自然さを感じるに過ぎなかつたので、只それが故に私は姉を出來るだけ咎めたくはなかつた。

それを今陽吉にしておのが强味のごとく楯にとるかのごとき感を抱かせをるに至ては、そのあさましさ圖々しさに開い

たロがふさがらなかつた。しかし姉は決して一言も言葉をさしはさまなかつたのである。只終始默々とうつむいて瞬間さえも面はよう上げえなかつた。ちらりとさへも視線は私に向けえなかつた。

　それを生意氣にも亦母親が出しや張つて、

「二人共今こんなとこで内輪爭ひをしたかつて、つまらん啀しだによつてな。又お前にしたからつて今からうちへ歸つて商賣の出來るもんぢやあるまいし、陽吉だつておとなしくそれ相當の形つけてもらつた方がいゝづらに、なにもかもその樣に打ちとけて相談したらいゝぢやないかい。」

　私の方へ向き直つて、要らざる仲人顔をしたのである。

「いゝえ私形なんかつけて貰ひたかあありません。そんなこちらから頭をさげて謝りたかあねえです。おとしは私が連れて出さいすりやいゝでしよ。」

　それを又陽吉が言下に毅然と私の方へ喰つてかゝつた。

「馬鹿。控へろ。」

　實際私も頭からつい控へろと云ひ切つた。母も母だつたのである。陽吉の肩を理由なく持つは二の次として、お前にうちの商賣が出來るもんかいの一言に至つては、已に沙汰の限りであつた。うちの稼業が出來る出來ないでそれを以つて陽吉を中心に私を言下に鉗口しようと言ふに至つては、その出しや張りたるや甚しかつた。

　陽吉も亦陽吉だつたのである。こちらから頭を下げたくありませんは二の次として、おとしは私が連れていくなぞに至つては、放言も亦甚しかつた。よしどんなに姉との間に聞くに堪ゆべき誓約があらう共、今にしてさも得々と姉を以つて猶ほおとしなぞと呼び棄てるに及んでは、その豪慢たるや言語に絶えた。

　そして私は、よし！と思つたのである。

今にみろ、と憤らざるをえなかつた。きさまらがその考へなら、俺だつて男だぞ。と一人歯を喰ひしばらざるをえなかつた。

人を總領の甚六扱ひにこき下ろいて、俺が獨り辯護士をやつてゐることさへも、きさまらたばになつて何かけいべつでもしようとならば、よし！と思つたつたのである。

意地になつても死に身になつても、俺は俺一人の考へを飽く迄決行してみせる、と一人只憤らざるをえなかつた。

今は全く姉も母もおしなべて、凡てが一切たばになつて私が眼のかたきに思へたのである。そして私はきつとなると、

「みんなこうくわいしないね。」

決然と言ひ放つた。

「あとで四の五の言ふな。陽吉は今から出入りの帳簿に〆をつけろ。糀はくさつたつて構はないから、明日にも杜侍に暇を出せ。古酒はありッたけあしたから投げ賣りの張り札をしろ。六尺も半切りも空いた樽は全部競賣に附するからな。のれんなんぞ一文にだつて價にならんでも問題にならんからな。おッかさんはあしたにもお寺詣りにいつていらつしやい。僕が身上たゝみますと言つたつてご先祖さまに告げ口してらつしやい。序でにこのうちは貸家札でも張る勘考をしてね。」

ぴしぴしと一刀兩斷の考へを言ひ渡した。

「まあなんぞい。氣短かに。そんなに怒らんでもいゝぢやないかい。お前うちでもたゝむ氣かい。」

「勿論。あなたなんぞ默つてらつしやい。僕は長男の責任として家累代のお位牌だけ風呂敷に入れて背負ひ出せばけつこです。あなた方にはもう決して一言半句も相談かけません。」

實際その通りな決心を眞劍に考へて、おめずおくせず、きつぱりと言ひ切つた。

「馬鹿だな。そんな子供みたいなこと言はないかつてすむぢやないかい。」

『まッぴらです。要らざる講釋はきゝたくありません。僕不愉快な思ひしてなんのかのとこんなこッぱ身上張りたくないんです。その位なら氣の濟むやうに、誰にも掻きみだされない自分たちだけの家庭を作ります。姉さんも子供を連れてあすにも東京へ引き上げる覺悟をつくつておきなさい。』

實際こんな煩はしい累世中途半端なだらしない家庭は、今にして快刀亂麻の冴えを以つて、見事にすばりと切り棄てた方が、どんなにせいせいするか解らないと思へたので、決心通りを又きつぱりと言ひ渡した。

それに依つて姉の問題が、今にしてきれいに結論がつくものかつかないものか、又今後一層紛糾を重ねべきものか、それは勿論今斷言は出來えなかつたが、しかしとにかくみうちだけのちんまりした家庭が、この十年來にして昔に還ることを得ば已にそれだけで大いなる慶事に相違なく、又年來私が家庭的の饑渇も充分今にして癒されると思へたのである。

しかし流石に母も今は豫想以上の私が猪突な固い決心に、すつかり度膽をひしがれたと見えて、そのごぴたりと口を緘した。より以上に姉のおどろきはその顏の色にさへ一層蒼然と現れて見えた。

しかし私は決してひるまなかつたのである。單なる意地を已に遠く突破して、私は眞劍にあすにも家庭をまとめる空想に只醉つた。永世充されなかつた家庭的溫愛が、今にも目前に實現されさうな想像に浸つて、只一徹に將來せんとする實現を夢みた。

どこからそんな結論が降つて湧いたか了解に苦しむやうな顏つきをして、少しく呆然と陽吉一人が取りのこされたごとき不滿の容子をつくつてゐたが、私は毫末も顧みなかつたのである。

案外早く瓢箪から駒が出て、と言つたやうなのびのびした心持さへかんじて、私は凡て獨り天下の屈托がなかつた。

言ひつけ通りに杜侍の暇は出さなかつたがしかし陽吉は翌日から何かに反抗の憤慨面で、果してせつせと帳簿を〆め上げにかゝつた。

母も母で母並に義憤でも感じたものか、いちにち姿を見せなかつた。姉は一人何か言ひたげに、しきりに私のあとを追ふやうな様子があつたが、しかし私はわざと姉の追及をさけたのである。

いちにちおいてその翌日は、午後からの初雪で、そのあけの日は又朝から裸體の洗濯以上にいともうらゝかな日本晴であつたので、私はとにかくと考へると一人おひる時分にお墓詣りを思ひ立つた。

「よう。をぢちやんつてばよう。おひげをひねつてどこへゆくのよ。」

出がけに甥の信坊がステッキの先を引ッ張つたので、

「いくか坊主。ぢいちやんの御墓詣りよ。」

首つ玉を抱きしめ乍ら玄關先へひよいひよいと二三歩高い高いでさげ出すと、

「行くよ行くよ。」

とわめき乍ら言下に已にずりぬけてばたばた土間へはだしになつてゐたので、まるくなつて信坊がゴム靴をツッかけるのを待つて、やがて私は信坊をからだごとステッキに引つかけると、すたすた大股に雪どけの道を歩き出した。

「ねえ。とうちやんこんなでつかい石、あたまへのッけてたら痛いよ屹度、おつむのところが。」

墓場へ着くと已に信坊はてんてんと先へ走つて、勝手知つた新君の石碑の上へいきまり飛びのると、ゆさゆさからだで重しをかけるやうな恰好をつくつて茶目坊らしくどんどん力足を踏んだのであつた。

「坊主坊主それよかお前東京へいつたらどんな洋服着るんだい。」

私はしかし只將來せんとする空想に浸つて、おのが父親の顔さへ知らぬ茶目の信坊が首つ玉を無理にもこつちへ横向き

にねぢ向けたのであつた。

「いやだよう。痛いから。」

しかし信坊が駄々をこねるやうにいきなり身を飛鳥のごとくずりぬけやうとしたその途端、何のはづみかあッと思ふまに新君の石碑がぐらぐらッとやにはに向ふへつんのめつた。

「あぶないッ。」

叫び乍ら本能的に信坊を力まかせに抱き取るや否や、とたんに彼はわあッとベソをかき出した。

「なんだい馬鹿。」

私は軽くたしなめ乍ら、ひよいひよいと二三べん抱きしめるやうに高い高いをしたのである。瞬間にしてしかし信坊には千切つて棄てたごとく、ぴたりと泣きやむと、不意に又けらけら笑ひ出し乍ら、やにはに上から私のおひげを引ッ張つた。

「ねえ。かあちやんがそいつてよ。おひげのをぢちやん大好なんだけどね。東京へゆくのは辛いつらいだつて。」

何の考へもなく無心に言つた言葉に、しかし私は突然はッと心を打たれた。

「かあちやんが？いつよう？」

そして反射的に訊き返へすことは訊きかへしたが、

「ゆんべ。坊をだいてね。かあちやんベソをかいたよ。馬鹿ねおとなのくせに。」

再びなんのわだかまりなくおひげをつんつん引ッ張り乍ら無心に呟いた信坊の言葉に、はッと私は又強く胸を刺されたとたんに私はお恥し乍ら、自らまなかに灼けるやうな涙が暗然とにぢむのを押へかねたのである。

今にして私は確然と、姉のせつぱつまつた眞劍の心持が、のこりくまなく解つた氣がしたのであつた。はしたない言葉

は一言たり共決して自身口にしないで、みだらな涙は一滴たり共決して誰にも見せないで、只神妙に情熱をたくはえたそのひめやかな姉の心根が、今にして私にはッきりと心ゆかしく諒解出來る氣がしたのあつた。

そして私は默々と一人ひそかにかうべを垂れたのである。靜かにひそかにかうべを垂れ乍ら、そしてぼろぼろ暗涙を呑んだ。

それを無理にも信坊の袖のところで、おしぬぐふ樣に顏ごと抱きしめると、

「さあいこう。」

他を顧みてひよいひよいと抱いたまゝ私は馬道を降りた。

一本橋の上に立つて、下駄に嵩ばつた雪どろをとんとん橋桁ではたき乍ら、ほとりと落ちた雪の塊がぷかりと浮いていつのまにか、とけて流れて消えて行くのを、暫くぢつと見つめ乍ら、しかし私はついひとりごとで、

「蓋し自然の數かな。」

思はず自身呟かざるをえなかつたのである。

「なによう。しぜんて。」

信坊が又兩手の中でこまつちやくれた顏をしやくつて、つんつん痛いほどおひげを引ッ張つたが、

「うゝん、お前のおでこのことさ。」

他を顧みて默殺すると、又ひよいひよいと大股に雪どけの道を歩いた。

そしてそのあけの朝、私は定期自動車で又ゝ警告に東京へ立つた。

しかし間もなくびらうど出來の洋服一着を買ひ整へると、私は特に信坊宛に默つて小包で送り屆けた。(完)

歸郷雜詠

原阿佐緒

その一

ぬばたまの夜なればうつる汽車の窓の自が顔を見つつ寂しくなれり

おのづから凝視めつつ寂し窓にうつる窶り極まれるおのれの顔を

わが顔のしろくにじめる汽車の外の暗をつきて火の粉走れり

吾子を見むよろこびだにも全からずのこせる人を心にもちて

ひと夜さの汽車にゆれつつ目も合はぬ悩ましさもちわが子にゆくも

都さび吾がよそほへる姿にだに母怒らさむゆるされぬ吾は

その二

しくしくに涙ぞ湧かゆつひに來しふるさとの土をまのあたり踏み

ゆきすぐる山裾の畑蕎麥の葉群月夜にしありて青々と照れり

月の光りほのかに溜る山裾の蕎麥畑を過ぎ肌冷えをおぼゆ

人も吾もいゆきためらひかなしみしこの山路をいまひとり越ゆ

夜に越ゆる山峽の道しづもれる芒の穗群ほのぼのと見ゆ

夜の山路わがひとりあゆむ靜けさを樹深に落つる木々の實の音

ここに來て思ひはふかしふるさとは栗の實のゑむ頃にてありしか

むかへ來む吾子が足音聞かまくをあせりつつあゆむ山路は遠し

人目なき安らひもちて抱きたし吾子よこの山の月の下びに

その三

吾子も母も居ぬ家にして眠らなと誰か思ひけむはるかにも来て

この家にかくて来にける苦しさを吾子のみにだも告げたき苦しさ

一年を見ざりし吾子よわが抱けばはぢらひにつゝ面よする吾子よ

ものいへばうなづくのみにほほゑめる吾子を抱きて思ひ逼るも

親なればさらにかなしもかくのみにうらぎられつつひとり堪ふるを

母といへどいまこそはわが慎り正しきがまさにうべなはれけり

吾を生ましし母はそはの母よわが生くる世にはもつひにゆるしまさぬか

いまはすべなし親をも子をも歎きて人にゆかむと涙垂りつつ

その四

別れ去なお吾子と思へば寝顔だに切に愛しく吾が描かむとす

やうやくに心和ぎたれど眠られずひたすらに吾子が寝顔を描くも

描きつつ涙ぞおつれいついつと思ひし吾子をまのあたりおきて

はるかにものこし來し人の言々を思ひ出でにつつ子に添臥せり

安寝せる吾子が邊に寝つつはるかなる人の手紙をひそかにも讀めり

吾子見れば吾子に生くべくはるかなる人もかなしくまどひは深し



黑谷夜話

中里介山

四

多度津から室津への船の中で乘合の客がおもひ〳〵の話をしてゐた。

おもひ〳〵の話は其のうちに、おのづから中心點を見出して一つになつては、また崩れて、いつしか異なつた中心にまとめられては崩れて行くうちに船はゆるゆると小豆島をめぐつてゐた。

そのうちの幾人かゞ晴れ渡る海の景色をながめてゐたのみで、乘合の多くは景色よりも話の方に興を取られてゐた。けれども、四方の景趣と會話の內容とは全然相觸れてゐないものではない。氣に留めてよく聞いてゐると、やはり風景と會話とは見え隱れの交渉を保つてゐる。內海の歷史でなければ地理である、地理でなければ風俗である、どれほど會話に興が乘つて飛び離れても、その出發點と到着點とは畢竟この三つを出でなかつた。

內海の歷史と云つても、これは昨日今日の歷史である、つい何年かの昔に平家が亡びて源氏が勝つたといふ軍話が中心になつてゐる。その軍話も勝つた源氏の方は勝ちぱなしで東國へ引き去つてしまつたから名殘は杳として遠いのに、負けた

平家の魂魄はいつまでも此の内海の津々浦々に殘つてゐるから軍話は、どうしても敗けた者の恨みの方に傾いて行くのである。

この中には屋島から壇の浦までの平家の運命を目のあたりながめた人が一二では止まらないらしい。平家の勇將猛卒の最期の有樣から、その恨みに殘る怪異傳説が、それ〴〵の經驗を基として、誇張されたり、誤まられたりしながら話頭に上つて行くが、聞くほどの人は其れを皆本當の事と信じて聞いてゐるらしい。それから少し時代が經つての後は此の内海では平家の滅亡の事を語るのを禁ぜられてゐたが——それは平家の怨靈が、いつまでも海底に殘つてゐるから、その話を持ち出されると折角、しづまりかけてゐた怨靈が其の古創を發かれて急に動き出して來る、さうして海が荒れて船が覆へるのだといふ迷信が、誰いふとなく起つて來たから、船の上で平家滅亡の事を云ふのを船頭によつて固く禁ぜられてゐたもので、殊に明月の夜などは、遊魂が、船のあたりへ靜かに遊びに來てゐるのだから、平家の平といふ言葉も禁句である。幸に、この時はまだ、その迷信を作るには時代が少し若過ぎたせゐか、内海航中の船客の誰もが、大びらで平家滅亡の歴史を語つて敢て憚からうとはしなかつた。聞く人も亦、最もそれに興味をそゝられて、指して示す山や浦をながめてはいとゞ感慨を深くするのが常であつた。

平家亡んで後の官女の運命を説くものがあると、それを聞いて眉をひそめないものはない。大宮にかしづいて綺羅に身をやつしてゐた花のやうな官女達が、生き殘つた生涯をつながんが爲に、色を賣るの身となつて、緋の袴を着て客を迎へてゐたのが、幾年か經つて緋の袴が赤い前垂に變る頃には彼等の容色も潮風に吹かれて浦の乙女と見まがうばかりになつたといふ。

海に沈んだ勇士猛卒は、恨みのやり場が無くて蟹となつた。その蟹を取り上げて甲羅を見ると、齒を喰みしめて無念の形相をしてゐる。やはり明月の夜には、磯へ這ひ出して合戰の眞似をしては遊ぶのだが、遂に打ち負けて無念々々と叫びつ

つ、あの怖ろしい形相でまた海の中へ這ひ込んでしまふ。蟹が海の中へ消えると、美しい上臈女房が十二單衣に檜扇を携へて夢のやうにボーッと海上へ現れて眞白い眼をして源氏の無情を罵り罵りして海上を渡つて行く間に、その慶爲な面が、いつしか平家蟹の無念な形相に變つてしまひ、十二單衣や、檜扇が、バラ〳〵と、くづれ出すと、それが見てゐる間に大きな八本の足となつて、海中に消えてしまふ。月明の夜、船頭は、よくさう云つた光景を眼のあたり見るのだと云つてゐる。

彼等の或者はまたこの内海の一つにある姉弟島の來歴を持つて來て、平家の落武者と結び合せた。昔、播磨の國の津に一家擧つて船に乘つて田の仕事に出かけた者が、船を岸に乘り捨て、仕事をしてゐる間に、船は中に寢てゐる十二になる姉と十になる弟とを載せたまゝ風に吹かれて沖へ沖へと出てしまつたのを親達が氣のついた時分には、もう船も形も見えなかつた。船はやがて内海のうちのとある無人の島に漂着したが、姉弟は二人でそこへ上陸した。幸にして船の中には稻の苗が多く積み込まれてゐた。二人は水田をこしらへてそれを植ゑて見た。稻は漸育つて穗を出したけれども、この島へ寄りつく船も人も無かつた。その稻を穫り上げて磨つて食べて、その種の若干を、また水田に植ゑて再度の稔りが來たけれど、やつぱり人も船も此の島には尋ねて來なかつた、斯うして米は幾度も穗を出して幾度も實りしてゐるうちに、二人は年頃になつた。彼等の子々孫々が稻の穗の殖えるやうに殖えて島中が今はその部落をなしてゐる。この島ではその部落以外のものとは婚嫁を通ずることをしない習慣で今日に至つてゐるが、平家の落人でそこへ隱まはれたものがあるに相違なからうと云つてゐる者がある。

また、それ等の島の中の或島では婦女子といふ婦女子が殘らず浮れ女のつとめをして、それを親も許し夫も許して、かせぎの一つとしてゐると語る者がある。沈痛な歷史の興亡のあとも、いつしかざれ言となつて乘合の者共は笑ひ興じてゐたが、そのうちに話の仲間にも入らない、笑ひもしない、けろりとしてゐた四十餘りになる旅の男が、波の中へ手を入れて

二面の圓い鏡を捜り出して頻りに持ちあつかつてゐた。話が興に入つて乘合が笑ひ崩れて、ちよつと途絶えた時分を見計らつて、その男は二箇の鏡を一つゞつ兩方の手に分けて持ち、人並よりもズツト長面の自分の面を兩方から照らし見るやうにして

「どなたか、鏡を買つて下さるお方はございませんか、鏡を一面だけ」

と云ひ出した。興味が熟して可なり緊張してゐた一座の場合には、あまり唐突な云ひ分であり、またその言葉つきが間が拔けたやうなものであつた。それで誰もが云ひ合せたやうに此の男の面を見た時に、その長い面に薄いのろい皮膚の色を見て、白け渡つた氣分になる。

「お前さん、その鏡を賣らうといふのかい」

「はい、この二つのうち、どちらでもお氣に召した方を一面だけ、どなたかに買つていたゞきたいのでございます、實は恥をお話し申さんとわかりませぬが、私は阿波の者でございます、都の地まで參りたいと思つて國を出て參りましたが、途中、象頭山へ參拜を致しましてその宿で路銀を惡い奴に盜はれた儀でございます、よつて、所持の鏡のうち一面だけをどなたにか買つて戴いて、それを旅費に宛てたいと存じますのでございます、この鏡も、もとを申せば由緒ある鏡でございますが、今はそれを申しても詮ないことでございますから、たゞ、性のよい處だけにお目が留まりまする御仁があらば相當の價にてお求めを願ひたい儀でござりまする」

そこで乘客は更に向き直つては見たが、さりとて進んで其の鏡を買はうと云ひ出でるものも無かつた、打ち見た處では、たしかに古雅にして優美な品物である、餘程祕藏して此處まで持つて來たものと見えて、悠長らしい物の云ひやうのうちにも、可なりに賣り惜しみの氣色が見えないではない、よく／＼困つたればこそ、さいぜんから幾度も取り出しては思案に暮れて、思ひ切つて賣りに出したものと見える、その位だから、たとへ捨價にしても安くは手に入るまい、どの道、無

くてならぬ品ではない、へたに價踏みをして、さげすみの種に爲らうより手を出さない方が無事だと尻込みをする者が多かつたやうである。だから、折角、賣りに出しては見たものゝ、件の男を手持無沙汰なものにするに過ぎなかつた。

「阿波のお客人、見たところ、それは滅相古雅なものゝやうだが、價段につもつても安いものでは無からう、まあ、見るだけ見せて下さいまし」

乘合の甲が手に取つて見た。

「どうぞ、よく御覽下さいまし、裏には雌蝶と雄蝶とが打ち出してございます、兩方あつて雌雄揃ふのですが、お讓り申したいのは此の……雌蝶の方と致しませう、雌雄、いづれをいづれと分けたくは無いのですが、分けるとなれば雄をとゞめて雌を手放すのが順序でございませう、品の由緒と性とは、わざと申上げませぬ、ちト、やつがれが急場の處を御覽下し置かれて、相當の價段にお買上げが願ひたいのでございます」

阿波の男は乘合の甲の手に鏡を渡しながら雌蝶雄蝶の說明をしたが、斯うなつて見ると却つて賣り惜しみをするやうになる、買ふ方に取つても、折角揃つた雌蝶と雄蝶とを二つに分けて買へと云はれるのは、いゝ心持はしない筈である。

「阿波のお客人、成程これは結構な品と見える、併し、こゝで斯うして不意に買へとお云ひなさつても、ちよつと誰も手が出しにくからう、お前さんも亦、滅多なことで手放すのも心殘りでせうから、どうです、これから室津まで我慢して、船が室津へ着いた時に買手を探がして見たらどんなものですネ、室津は繁昌してゐますよ、室津なら幾らも此の位の品を買ひ人が無いといふ限りはございません、有りますとも、大有りです、さうです／＼、誰彼よりも、あそこへ行つて遊女たちに一つ買はせることですね、おそこの遊女には大したのがゐます、全盛がゐます、良い品ならば糸目をつけずに欲しがつてゐる者がゐます、殊にこれは女の命と云はれる鏡ではございませんか、我々には眼が屆かないながら、若し、眼の利いた人があつて、この品が良いと、定まつたら、引張凧で賣れますぜ」

「成程」

乘合の者はよい處へ氣がついたといふ面をした。

阿波の男は、それほどに氣が進んだとも進まないとも見えなかつた。

「さうですネ、あそこへ行つて遊女たちに買つてもらつたらと思はないこともありませんでしたが…………やつぱり、さうした方が宜いかも知れません」

「それに限るよ、それに限るよ、今、室津では花漆の時代が去つて、友君と宮城の時代になつてゐる、東の友君と西の宮城が、お互に室津の遊女の全盛を爭つてゐる。どちらにも其の背後には都で高名の公卿衆や諸國の大名がついてゐる。若し友君の方へ持つて行つて欲しいとなれば、それを賣り渡さずに其のまゝ持つて歸つて宮城へ持つて行つて見せることですネ、さうしてお互に欲しいとなれば意地になりますからね、當人たちが意地にならずとも、その主人達が意地になりますからね、主人達が意地にならなければその後援者……つまり最屓々々が意地になつて、各々自分達の姫に買はせようとするに定まつてゐる、さうなると値段の問題ではありません、天井知らずに飛び上がつて馬鹿値が出てしまひますよ」

「成程」

船中は鏡の糶市を豫想して興に入つたが阿波の男は相變らず浮かぬ面である。あんまり浮かぬ面だから、早くも此の男は幾らかの痴呆性を帶びてゐるのではないかとさへ思はれた。そのうちに、いつしか此の男は問題の蔭にされてしまつて、鏡も亦いつしか袋の中へ藏ふともなく藏ひかくされて、當人も帆柱の蔭へぐつたりと身をうづめてしまつた。

そこで、次に話題となつたのが、室津の遊女の噂であつた。その頃の室津は西國第一の船着である、西國から都へ參る人は是非共此の港を立脚にしなければならなかつた。港の賑ひは内海第一であつた。いつの頃か此處へ現れた花染といふ遊女は普賢菩薩の化身であつて、衆生を濟度せんが爲に假に遊女のわざをなしたのだといふ信仰(?)がある。日本に傾城と

いふ者が出來た最初の地は此處だといふ自負(?)がある。書寫山の性空上人も此港へ來て遊女と寢たといふ話がある、その他帝京の公卿縉紳等此港へ來て浮名を流さぬといふは極めて少ない。從つて此地の遊女には他に見られない敎養と品位があるといふことを唱へた。

「花漆といふのは、まだ生きてゐますか知ら、生きてゐても、もう宜いお婆さんだから、此港にはゐまい、いづれ果敢ない彼等の生涯とは云ひながら、あれだけに全盛を極めたものだから、まさか老後に到つて路傍に飢ゆるまでの事はあるまいが、花漆去つて後、またあれだけの風流女が此の港からは出ますかな」

「花漆は生きてゐるさうです」

「何處に生きてゐます」

「音戶の瀨戶に庵を結んで平相國の菩提を弔うてゐる老婆がそれだとも云ひ、嚴島の明神の不消の火を守つてゐるのがそれだとも云ひます」

花漆の話は斯ういふ譯である。一とせ、建禮門院が立后の初、父なる太政入道淸盛が皇子を欲しさの餘り、月々安藝の嚴島の明神へ祈りに行つたものである。一夜、この室津の港に船やどりしてゐると、こゝで名ある遊女が競うて小舟に乘つて御機嫌を伺ひに來た、淸盛入道の船を取り捲いては盛んに歌をうたうて漕ぎめぐるのを平家の侍達はそれ〴〵物を與へて去らしめた。その夜が更けて月が高かつた、江灣一方に湎り三面山につゝまれた室津の港の海は磨き立てた鏡のやうであつた。その時一つの遊女の小舟がするする〳〵と濱邊から浮んで出た、船は月に棹して中では白拍子を數へてゐる。御機嫌を伺ひに來るほどの遊女は皆來てしまつて、物を賜はつて歸るほどの遊女は皆歸つてしまつて船も人も眠りに入つてゐる時に、何故か此の一つの小舟のみが飽かずに月に棹して來た。小舟は入道の船の傍らに進むと、舟の中の音節が忽ち變つて愁ひを含むの聲となつた。暫らくして舟の中から朗詠の聲があつた。

花漆ぬる人もなき我身かな
むろあいとても何にかはせん

船の中で眠に就いてゐた入道は此の風流に夢を破られて、自ら起き出でて花漆の小舟を自分の船に招き寄せ、花漆は船へ召されて歸る時には越中の次郎兵衛をして巻絹百巻と沙金百兩の纏頭を與へられた。

「つまり、此れも室津の遊女の意氣を見せたものなんでせう、室津に名ある遊女といふほどの者が競うて御機嫌を伺ひに來ても誰一人太政入道のお氣に召すものが無く、入道殿をしてあたら長夜をひとり寢の憂き目に遭はすといふのは、室津の遊女全體の名にかゝはるとでも思つたのでせう、そこで夜更けて、ひとり押かけて來たのですが、その押しかけぶりも斯うすると風流なものです、祇王祇女を追ひ出した佛御前も、さうして押しかけて行つて入道の寵遇を得たものなんです、太政入道殿は時の最大權力者であつたからといふ理由のみではなく、なかなか美い男であつて、女の方から打ち込まれる處があつたものなんでせう、併し、室津の遊女には、その位の氣慨……氣慨と云ふのもをかしなものですが、負けず嫌ひがあつたもので、その氣風が今でも殘つてゐないといふ事はありません」

「さうでせう、その氣慨がたゞに、羽振の宜い者に好かれようといふだけなら話りませんけれど、彼等にはまた敗者に對する同情も可なりに持つてゐるやうです、熊谷直實殿に討たれた敦盛卿のお墓を、わざわざ一の谷へ持つて行つて立てゝ供養をした遊女さへあると云ひます」

「さうです、その意氣と張合とが、今、室津では東の友君と西の宮城との勢力爭ひとなつて現はれてゐるのです、來年の歌姫の役が友君になるか宮城に定まるといふのが、室津の町に取つては源氏と平家の天下分け目の戰よりも、もつと劇しい雲行になつてゐるのですから、室津へ上ると、友君派の前で、浮かり宮城派を賞められません、宮城派の處で友君黨を賞めようものなら撲られてしまひます」

そこを附け込んで鏡を兩方へ持ち込めを教へた男は商賣氣のある男であつた。

小豆島の港で日が暮れる、荷物の間に暇取つて、こゝを出たのは可なりに夜が更けてゐた、乗合の客は皆んな船底にゐて眠に就いた時分に寢られない男があつた、それは例の鏡を賣りたいといふ阿波の男であつた、感激の無い面で深く考へ込んでゐたが、皆が寢しづまつた時分に、そつと出て船の甲板の上を歩いてゐる。後生大事に胸にかゝえてゐるのは例の賣りそこねた鏡である。この男は鏡を抱いて船緣に立つてゐる。それでも感激のない面に相當に覺悟の色が浮んでゐる。誰にも見つけられまじとして氣を配つてゐる模樣がある。さうしてはまた海を見込んで、たしかに泣いてゐるらしい。

「ちよつと、お待ちなさい、あなたは海へ身を投げるつもりですね」

と云つて不意に後ろから押へたものがあつた。さすがに阿波の男は愕然として振り返つた。そこに立つてゐるのは黒の法衣を着た坊さんであつた。

「はい………」

阿波の男が狼狽するのを出家は落着いてゐた。

「晝のうちからお見受け申してゐると大そう心配がお有りなさるやうだが、死ぬことはお見合せなさい、辛いこともありませうが、死ぬのはお見合せなさるが宜いと思ひます、若し、拙僧で宜しいならば、あなたが死なねばならぬほどのお胸の中をお打ち明け下さいますまいか、私とても出家の姿はして居りますが、自分で自分を救ひきれない人間でございます、どうして、人樣をお救ひ申すと申しませう、併し、膝とも談合といふことがございますから、兎も角、暫らくの命を、拙僧に預け下さることは出來ますまいか」

「有難うございます」

阿波の男は、やはり鏡を後生大事に抱えながら僧の前に跪いた。

「お話を申上げると長いことになりますが、私は故郷の阿波の國で妻にも死なれ子供にも別れ、たつた一人で身上を疊んで、これから都にゐるといふ娘を尋ねて參りたいのでございます、ところが晝のうちも乘合の方にお話し申したやうに、象頭山へ參詣致しました宿で、持つて參りました財を、すつかり盜まれてしまひました、僅かに殘つてゐるのが此の兩面の鏡でございます、この鏡にも相當の由緒がございますので……それをお話し申すと長くなりますが、これは手放せない品なのでございます、けれども、斯うなつては背に腹は變へられませぬから、一面だけを賣つて、一面だけを携へて都へ上るつもりで居りました、けれども、どなたも買つて下さる方がありません、室津へ行つて遊女たちに賣れと敎へて下さる方もありましたけれど、それは當にはなりませぬ、當になりましたところで、この鏡を心なき人達の弄び物として賣り歩くことは出來ないわけがございます。誰しも自分の娘を好んで遊女に出さうといふ者はありません、そのやうに、やつがれも、たとへ高金になりましても、これを心なき人に賣りあるく事は忍びないのでございます、さうかと云つて、實は、この船賃もまだ拂つてゐない始末でございますから、船が港へ着きましても上ることが六つかしうございます、上れましても一歩も旅へ出ることが出來ますまいと思ひます、その位ですから一その事、此の身を亡き者にしてしまひ、大事の鏡も誰にも渡されない處へ持つて行つてしまつた方が增しと考へました、その心持で、此處まで出て參りましたが、誰もゐないと思ひの外、あなた樣に見つけられたのが幸か不幸か、わたしにはわかりませぬ」

「成程、事情をお聞き申して見ますと、さもこそと思はれることです、併し、斯うして、多くの人の中で、拙僧が、あなたの危急を見つけるといふのも何かの御引合せ、あなたが拙僧に見つけられたといふのも何かの因緣と思はれます、惜しいことには、見つけられた、あなたの運命が斯くまで危急に迫つてゐるのに見つけた拙僧の力が餘りに微力で、とてもお力になりきれないだらうと思はれることです、併し、善惡はさて置いて、この因緣を我々は粗略にしてはなるまいと思ひます、兎も角も、この微力な坊主にお任かせ下さいまし」

「重ね〴〵有難うございます、因縁と仰有られると、私もそれを踏み越えて我意を通さうとするほどの我慢は張りきれませぬ、何事もあなた樣のお心任せに致しまする、どうぞ、わたくしの今宵の命をお預かり下さいませ、さうして、いつでも御都合の時にお見放し下さいませ」

「あなたの云ふことが神妙のやうに聞えます、拙僧とても今申す通り、微力に於ては、あなた以上かも知れませぬ、あなたは兎に角大切になさる鏡を持つて居りますけれども、拙僧は何も持つて居りませぬ、併乍ら、生きて行くといふことは大きな不思議な力の御支配にあるものと思ひますから、お互に、それに打ち任せて行かうではありませんか、丁度、海上を渡るこの船に、多くの人が生命を託して行くやうに、前路に雨が降らうと風が吹かうとも、それに任かせて行つて見ようではありませんか」

「よくわかりました、私は、あなた樣のお導を下さるやうに致します」

「さう云はれると恐縮します、實は、わたくしは人を導く力はありません、あなたに伺つて此んな事を云ひ出すのも、一時の氣休めに過ぎないやうな氣がして、本當に根本から我に縋れ、我汝を救はんと云へない事が恨みです、悲みです、兎も角、こゝで長く談義をしてゐると人に怪しまれますから、下へ入つて寢ませう」

「一切お言葉に從ひます」

僧は阿波の男をたづさへて船底に入つてしまつた。船上に人なき船は風波のおだやかな家島群島の沖を通つて、夜の白々と明ける時分には韓術島の鼻をめぐり、旭日のきら〳〵と昇る時分に室津の港へ着いた。

この時になつて船頭は乘合の人達に向つて定めの船賃を請求した。昨夜の僧は阿波の男を小蔭に呼んで、ひそかに一包の金を授けて云つた。

「あなたは、此れを持つて先へお上りなさい、もつと差上げたいのですけれども、丁度、船賃だけしか用意して參りませ

んでしたから」

「お禮の申上げやうもございませんけれど、ではお言葉に從ひまして」

阿波の男は甘んじて出家の好意を受けた。乘合の人々は、すべて定めの船賃を拂つて、それ〴〵上陸した。阿波の男も、どうぞお先きにと僧に先を讓つたけれども、僧はまだ殘つた仕事があると云つて船底へ引き返したから、阿波の男は是非なく一足先に上陸して砂濱で待つてゐた。

暫らくすると、船頭の罵る聲が高く聞えた。

「船賃が無ければ無いと、なぜ、船にお乘りなさる時にさう云はなかつたのだ、たとへ出家たとて知らぬ面の横着をしてあとで許してもらはうとは蟲がよ過ぎる事である、船頭冥利で、それを許して置いた日には、あとの横着者の見せしめにならないのだ、どうしても、錢が無ければ無いやうに、我々仲間の處分をするより外はないのだ」

斯う云つて二三の船頭が取り捲いてゐるのは例の僧であつた。僧は慇懃に首を下げてそれの申譯をしてゐる。

「最初から左樣な横着な心で船に乘り込んだわけではないが、今となつては何と申譯をしようにもそのすべが無いことになつてしまつたのは悲しい、さうかと云つて、身に貯への無い出家の身には、これぞと適當に差上げる物もござらぬ、こゝ一日二日の猶豫さへして下さらば、必らず何とか都合をして差上げたいと思つてゐるが、それが許されなければ、やはりあなた方の御處分に隨つて神妙にお詫びをするより外はありませぬ」

「我々の處分といふのは、そのやうな乘逃の横着者に對しては、あの海岸の誰も見える處へ引き出して、錢の數だけ打つて打ち据ゑるのだ、痛い思をさせたくは無いけれども、さうしないと、あとの横着者に對しての見せしめにならない」

「是非に及ばないことです、その御法通りの處分を願ふより外はございませぬ」

僧は觀念して、砂場の方へ引き出されて行つた、この一場の騷動は早くもその附近の[illegible]を騷がした。上陸して町の々

へ出かけた人さへも引返して來た。
「乘逃がある、乘逃がある、あの出家が乘逃げしようとしたのを船頭につかまつて、見せしめに打たれるのだ、出家の姿をしてゐて横着をするズルい奴だ」
人達の罵る高聲を聞いて阿波の男は胸がつぶれた。彼は笈を抛り出して、數多の船頭に拉せられて濱邊へ引張り出されて來る僧の傍へかけ寄つて行つた。
「あなたは、私の爲に打たれるのでございますか」
「左樣ではありません、私が此處でこの人達に打たれねばならぬ理由は別にあるのです。あなたは默つて暫らく見てゐて下さい」
「否え、それは違ひます、たしかに貴僧は私の爲に船賃を立て替へて下すつて、その責を御自分でお引受けしようとなさるのです、それを私が默つて見てゐるわけには參りません」
「それは、やはり考へ方が違ひます、私の心が弛みかけてゐるのを引締めて下さる爲に恰度この出來事が與へられたのです、あなたは疲れてゐる、私は打たれるのが却つて藥になります」
僧と阿波の男との問答を聞いてゐた船頭達は此の時に阿波の男をハネ飛ばしてしまつた。自分は打たれるやうに出來てゐて、打たれるのが却つて藥だといふ言分が船頭達には癪にさはつたものらしい。飽迄自分達を甘く見てゐる横着者とうつつたらしい。そこで僧を砂場へ引き据ゑて、
「一つ——」
「二つ——」
數へながら手酷く打ちはじめた。
朝まだきではあつたけれども人は早くも黒山のやうに立つてしまつた。
「皆樣、打たれておゐでになるあの御僧に罪があるのではございませぬ、斯うしてゐる私の爲に、あの御僧が代つて打たれて下さるのでございます、打たれる御僧よりも打たれない私の心が痛みます」

斯う云つて阿波の男は大きな聲で還來の間に辯明した。たゞ辯明して歩くのみではなく、どうしても身を以て、この笞の雨を受けなければ濟まない心で船頭達の手許をグル〳〵廻つて割り込まうとしてゐる。打たれてゐる僧は、この時以前よりは少しくおごそかな聲で、

『あなたは聞き分けのないお人だ、どの道打たれなければならぬやうになつてゐるのに、あなたが打たれるのは無意味でわたしの打たれるのは修行である、あなたは打たれなくても罪にはならないが、拙僧は打たれなければ行きどころが無いのです』

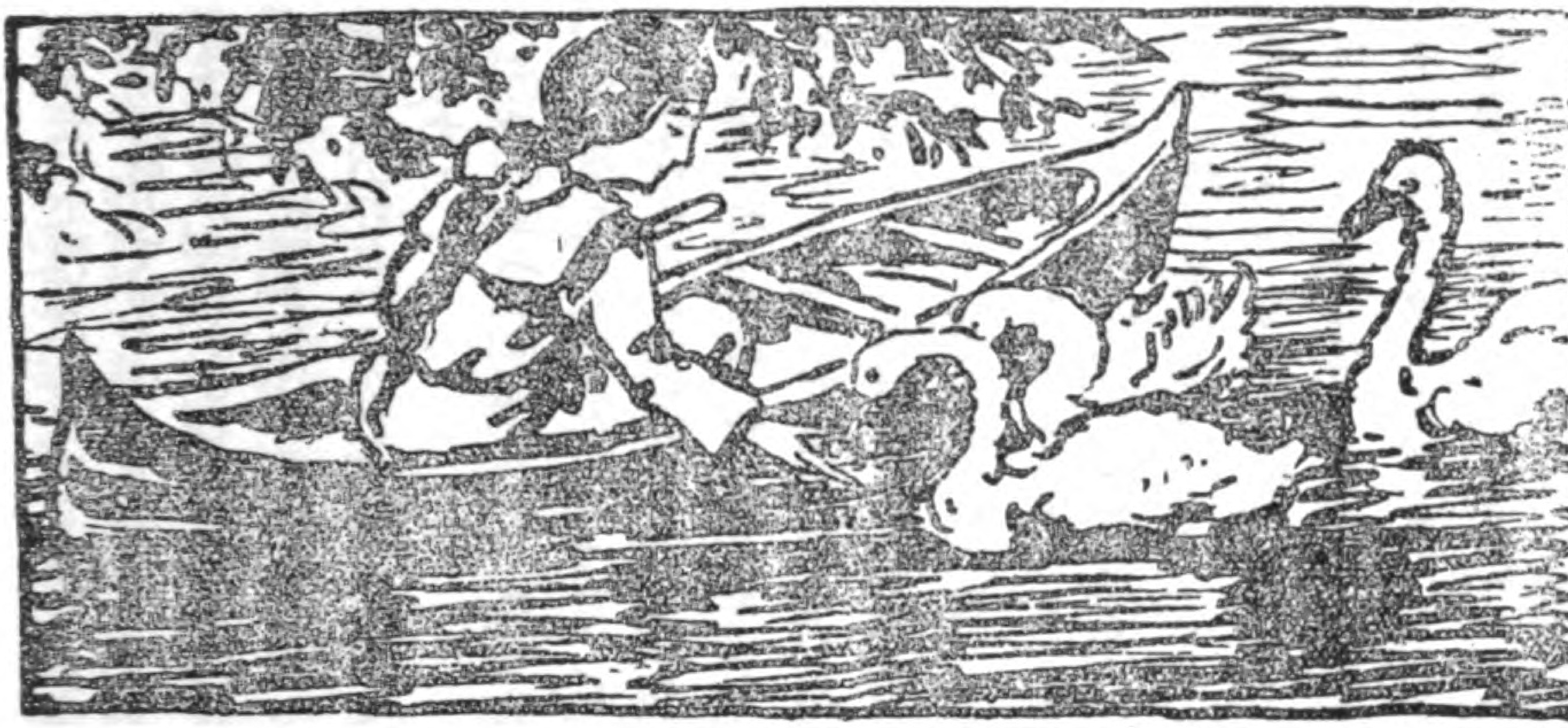
この僧の云ふ事は誰にもよくわからなかつた。何故に打たれねばならないのか、よく分からなかつた。この僧と阿波の男との關係もよくわからなかつた。たゞわかつてゐるのは、この僧が打たれることを喜ぶ風情と、この僧の打たれるのを自分が打たれるよりも苦痛としてゐるらしい、阿波の男の雙方の態度の相違だけであつた。

船頭達に取つては、打たれる事になつて、あやまりもしなければ、苦痛をも訴へず、寧ろそれが當り前だといふやうな氣色に見える坊主の態度が憎くなつた。彼等は斯う考へた。この坊主は不死身である、打つても切つても痛くないやうに出來てゐるから、覺悟の上で船賃を踏むのだ、何處の渡しでも斯うして圖々しく只乘りをして歩くのだ、渡船場荒らしだ、とこんなに考へたものだから憎しみが一層加はつた。その儀ならば、こつぴどく打ち据ゑてやれ、不死身だつて人間の生身のうちだ、丸つきりこたへない事は無からうといふ氣になつて笞に力を籠めて打つた。それでも打ち殺すほどの殘酷はようしない、急所を避けて打つには打つが、錢の數だけ打たれる間には骨が碎けないまでも肉が離れるだらう。

『船頭さん、では此の鏡を上げますから、これを船賃の抵當に取つて、わたくし共を許して下さい』

阿波の男は例の鏡をまた此處へ擔ぎ出した。無論、この場に於て、そんな妥協が採用さるべくもない。

僧は船頭達の手によつて盛んに、併乍ら悠々と打たれてゐる。前へ俯伏しになつて背中を丸めて打つに任せてゐる。他で案ずるほどの事はないらしい。



鳩ポッポ

加能作次郎

富美子は四度目のお產をするについて、いろ〳〵考へ迷つた末に、結局矢張り鄕里の方から姑に來て貰ふことにした。まだ三十には三四年も間のあるほど若さであるが、もう既に三度も安產の經驗があり、それに健康で氣丈な女なので、自分のお產そのものには、『なに、人手を借りなくとも大丈夫だ』といふ自信は持つて居たが、何しろ六つを頭に四つ二つと、間の近い、手のかゝる最中の三人の幼兒が居り殊に今度は年兒で、末の兒がまだ乳にぶらさがつて居るやうな有様なので、それらの子供等の世話や何かの爲にも、たとひ夫の敬介が社を休んで面倒を見て吳れるにしても、まだ年の行かぬ子守女ときりでは、迚も手がまはりきれないことは分つて居た。富美子の母親は、彼女の結婚以前に既に世を去つて居たので、初產の時には祖母に來て貰つたが、その祖母もその後間もなく死んで、かうした場合に自分の身內から看病に來て貰へる者を一人も持つて居なかつた。で二度目の時にも三度目の時にも、いつも夫の敬介の繼母、卽ち富美子の姑に來て貰はうといふ話が夫婦の間に持ち上つたが、富美子は却つて窮窟で氣苦勞だからといつて反對したのであつた

が、今度は迚もそんなことを言つては居られなかつた。殊に三人目の時に、手が足りないばかりについ無理をして、その爲にかなり酷い病氣をしたので、第一、その敬介が承知しなかつた。それで、一旦それと話をきめたが、尙ほ富美子はいろいろと苦に病んで、夫れよりも看護婦か働き婆さんを雇つた方が氣樂だし、お禮だお土產だといつて餘計な心配をする必要もなし、經濟の點から言つても却つて得だと、幾度も敬介に相談し直して見たりした。

「まあそれでもよからうけれど、矢張り何といつても身内の者の方が都合がいゝよ。それに鄕里の方でも却つて喜ぶよ。そんな場合には何時でも上京するから遠慮なしに言つて寄越せと常々言つて來てるのだし、この前失敗つた時にも、何故さう言つて寄越さなかつたと不服を言つて來た位だからな。それは滿更お世辭ばかりでもないんだよ。向うでもこちらから親しみをもつて賴んでやつた方が、外々しく遠慮されたりするよりか氣持がいゝんだよ。お前が氣苦勞に思ふ氣持は、俺にも分らないことはないけれど、なに、さう氣にしたもんでもないさ、それはお前が嫁姑といふ因襲的な先入主に、幾らか囚はれ過ぎて居るからでもあるよ。その氣持が、普通一般に嫁と姑との間を疎隔する基なんぢやないかな。」

さう敬介は穩かに宥めるやうに言つた。

「あなたの本當のお母さんならいゝけれどね。」

と富美子は言つた。

「そんな心配はしないがいゝよ。俺とも繼しい仲だけれど、決して惡るい人ぢやないよ。極く親切ないゝ人だよ。お前はまだよく交際つて知らんからだ、親しみがないからだよ。」

「さうでせうか。」

實際富美子は姑とは少しも親しんで居なかつた。鄕里の方で敬介と結婚したが、婚禮の翌朝すぐ東京へ出發して來て、その後一度二三年前に舅と二人連れで東京見物に來た時の、僅か五日ばかりの短かい交際しかないのであつた。而もその

時印象は、富美子にはあまりいゝものではなかつた。夫敬介の實父、即ち彼女にとつて舅である人は、極めて純粹な温良な、彼女がその後よく誇張して「まるで佛樣のやうだ」とまで評したほど善良な人だと思つたけれど、姑の方は、陰險とまでは言れなくても、あまり賢こ過ぎるやうで、何となく冷かな親みにくい、油斷のならぬ人だといふ印象がどうしても離れないのだつた。それで彼女は、「お祖父さんのやうな人ならいゝけれど。」と始終言ひ〳〵して居た。

「女といふものは皆なそんなもんだよ、殊にこちらの方で、初めから姑だからといつて疎々しい敵對的な感情を以て眺めるからさ。なに關ふもんか、向ふもその積りで來るんだもの、大威張りで使つてやるさ、こちらだつて別に一軒家を持つて、もう子供の四人も出來るやうになつて居るんだもの、向ふの方で却つて遠慮してちやほやする位だよ。決して煙たがることなんかないよ。」

かう敬介は力をつけると、もう既に賴んでやつて、向ふからも喜んで上京するといふ返事が來て居るので、富美子は今更仕方がなかつた。

お產は十二月の中頃の豫定であつたが、何時どうなるかも分らないといつて、十一月の中頃から來て貰ふことにして置いた。それまでに十日ばかりの日があつたが、富美子はその間に、非常に緊張した氣持で、身重にも拘らず、夜も遲くまで起きて一生懸命に家の中の整理をし始めた。整理といつても、主として自分達の冬を迎へる準備に外ならなかつた。お產の準備は既に出來上つて居たが、子供や夫の敬介や自分自身の冬着の仕度は、まだ大分嵩張つて殘つて居た。ところへ丁度その頃敬介の方に、少しまとまつて金が入つたので、彼は珍らしく、彼自身を始め家内中の者に、新しいちよい〳〵着の反物をそれ〳〵買つてやつた。富美子は非常に喜んで、さしあたり必要な平常着の縫ひ直し物など澤山あつたのに、それをさし置いて、早速、而も彼女自身のものを先づ第一に仕立て始めた。これは彼女にしては珍らしいやり方だつた。新しい反物を買つて貰つた喜びから、一日も早くそれを仕立てあげたいのは女らしい普通の人情ではあつたが、併しそん

な場合にも常ならば先づ最初に子供等のものを片附け、それから敬介のもの、最後に自分自身のものに取掛かるのが例であつたが、その時は全く違つた氣持から、彼女は先づ自分のものに取掛つたのであつた。

「何だ猾るいな。自分のものを一番先に仕立てるのか。」

　それを見て敬介は笑ひ〳〵言つた。

「えゝ、猾るいけれども御免なさいね。」と富美子は氣まり惡るさうに笑ひながら答へた。「まだ平常の縫ひ直し物で、急いでしなくちやならんものもあるんですけれど、少し譯があつて、早速今繰り合せてこの方を縫ひ始めましたの。本當なら子供のものから始めるところですが。」

「何故だい？何處か急に着て行く所でもあるのかい？」

「いゝえ、そんな譯ぢやありませんの、來年にならねば要らないんですけれどね、……もうぢき田舍の祖母さんがいらつしやるから、それでですの。子供やあなたのは、お祖母さんがいらつしやつてからでもいゝんですけれど、私のだけは是非それまでに縫つて置かねば具合の惡いことがありますの。」

　敬介には詳しく聞かなくても大體その理由が察しられた。

「それが、嫁根性といふもんだな。」と彼は富美子を咎める氣持でなしに言つた。

「えゝさうなのよ。私も非常に卑しい醜い心だと思ひますけれど、どうすることも出來ませんわ、本當に厭なもんですね、これで私の母が來るんでしたら、態とでも母が來てから、これを子供に、これを私に買つて貰つたといつて、眼の前に擴げ散らして見せびらかしもするし、母もまた一緒に喜んで呉れますけれどね。」

「下らない遠慮をするもんだな、いゝぢやないか、嫁が亭主に着物を買つて貰ふのは當然ぢやないか、誰が何んと思ふもんか。」と敬介は幾らか苦々しげに言つた。

『さうでもありませんよ。理窟はさうに違ひありませんけれど、決してお祖母さんなんか好い感情を持ちませんよ、あんたに苦勞させて、私が强請てゞも貰つて着つたやうに思はれますからね、それに、碌に家へ金を送りもしないで、始終新しい絹の着物をこしらへて着てるとでも思はれるのが厭ですからね。だから早く私のだけでも縫ひあげて隱して置かうと思つて。』

『馬鹿な…』と敬介は不快さうに呟いて。『そんな卑劣なこと思ふもんか。』

『さうぢやありませんよ。』と富美子は頑固に言ひ張つて『あんたの親に對して、こんな僻んだ考を持つのは惡るいけれどそこが姑根性ですよ。東京ではどうか知りませんけれど、田舍などでは、嫁が息子に着物なんかこしらへて貰つたりすると、決して姑は好い顏をしないもんだつて、私の死んだ母なんかもよく言ひましたよ。全く煩さい厭なもんです。これが矢張りあんたの所謂嫁根性で、自分ながらも淺間しいとは思ひますけれど、仕樣がありません。』

さう言ひながら富美子はせつせと針を進めるのだつた。そして彼女は、尙ほ、母の來て居る間は、たとひ何處へ行く場合でも、決して敬介にこしらへて貰つた餘所行の着物などは着ないつもりだとさへ打明けて話した。敬介は馬鹿々々しくもあつたが、一方にはまた、そんなものかな、といふ氣もしてそれきり默つて了つた。事實彼にとつてはそんな事は、どちらだつていゝことだつたが、もとよりいゝ氣持はしなかつた。何となく寂しい、すさまじい氣持がしてならなかつた。

富美子は尙ほ、嫁といふものが姑に對して、如何に下らない卑小なことにも氣を遣ひ心を勞するものであるかといふことの適例として、ずつと以前に隣家の細君が初めてお產をする時に起つた一種悲慘な滑稽ともいふべき一つの挿話を引合に出した。それは敬介もよく知つて居ることだつたが、事實はかうであつた。隣の細君は近所でも評判の美人で、瘦ぎすのすらつとした容姿もよかつたが、細面の色白の顏には何とも言へぬ嬌媚を湛へ、眼を少し細くし、口をほつかり開けて微笑する時などは、大抵の男は實際いきなり抱きつきたくなるほどの魅力を持つて居たが、身體は弱い方で、臨月近くになつ

てからは始終床に就いて居たので、近くに嫁づいて居る姉の人がやつて來て萬端の世話を燒いて居た。何しろ初産のことでもあるので、いろ〳〵と健康が氣遣はれて居たが、何よりも營養が缺けて居るから極く滋養物を取らなければならないと、醫者からも産婆からも注意されて居た。そこでその姉の人が特別に氣をつけて、主人にも半分は內證で、牛乳を飲ませたり生卵を吸はせたりして居たが、その時偶然にか或は態々介抱の爲にか、主人の母親である姑が郷里からやつて來たすると細君でも姉の人でも、非常にその姑婆さんを恐れ憚り、御飯のお菜でも、彼女や主人など、同じものを食はない位にさへ氣をつけた。勿論牛乳や卵などは彼女の眼の前では口にしなかつた。のみならず牛乳の罎の如きは一々臺所の緣の下へ隱して姑の眼に觸れないやうにし、卵は割る度に一々その殼を戸外の塵芥箱に捨てに行くやうにして居た、愈々産期が近いて、細君は産褥に入つたが、それからも尙ほ一週間も、今にも生みさうになりながら、難産で生み得なかつた。彼女は褥に就いたきりだつた。自分一人で臺所へ出て行つて、こつそり牛乳を飲んだり生卵を吸つたりすることも出來なかつた。姑婆さんは大抵側について居るので、その前では勿論遠慮せねばならなかつた。そればかりではなく、彼女でも姉の人でも、それらのものが姑婆さんの眼に觸れることを恐れ、臺所や戸棚の中などに藏つて置くのも不安に感じ出した。而も産婆は毎日やつて來ては、出來るだけ力のつくやうなものを食べろ〳〵と勸めた。で最後には細君の姉は、當時まだ左程親しくなつて居なかつた隣家である富美子の家へ鷄卵やバナナなどを預けに來た、牛乳も富美子の家へ配達させるやうにしたそしてどうするのかと言へば、姑婆さんが一寸外へ出たとか、奥の間で主人と話して居る時とか、夜寢た後とか、甚しきは便所へ行つて居る際などを見計つて、細君の姉が慌てて富美子の家へ臺所口から飛び込んで來て、卵を割つたりバナナの皮を剝いだりして、こつそり前掛の下へ忍ばせて大急ぎに持ち歸つて細君に食べさせるのであつた。富美子も敬介も全く呆れる外はなかつた。可笑しいといふよりも寧ろ痛ましかつた。これは少し極端過ぎると思つたが、そんなにまで姑に遠慮しなければならぬものかと、敬介は何とも言へぬ暗い不快な憂鬱に襲はれるのであつた。ところが或る日、矢張りそ

んな風にして一日に何度も姉の人がやつて來て、或時は牛乳を持つて行き、或時は生卵を持つて行き、或る時はバナナを運んだりして居た。するとその夜細君が俄かに産氣づいて苦しみ始めた。眞夜中のことだつたが、かなり難産だといふので醫者も呼び迎へられて居た。烈しい呻吟苦悶の叫びが隣の富美子の家まで聞えた。富美子も飛び出して樣子を見に行つた。それより少し前に、細君の姉が卵とバナナとを持つて行つたのであつたが、富美子が行つて間もなく、細君は突然烈しい嘔氣と共に多量の吐瀉をしたが、一寸前に隱し食べた卵やバナナなどが少しも消化されずにその儘そこらに穢なく吐き出されたので、本人はもとより姉の人も、姑婆さんの手前眞蒼になつたといふことだつた。富美子が歸つて來て、その時の氣の毒さといつたら。お産の苦みを見て居るよりも甚しかつたと敬介に話した。

「まあ一例がそれ位なもんですからね。」と富美子は今もその當時の思出話をしてから言つた。

「まさかお前はそんなことはしないだらうな。」と敬介は笑ひながら言つた。

「えい〳〵！そんな食べ物のことなんか、私何遠慮するもんですか。」と富美子は卑しむやうに快活な調子で言つた。「餘計旨しい物をこしらへて食べますわ。」

「まああまり露骨に嫁根性を出して呉れるな。」

「えい、私もとうからそんな氣持から超越したいと思つて居ますけれど、氣をつけるだけのことは氣をつけなければね。」

姑がやつて來たのは十一月の廿日過ぎ、大分寒さに向つてからであつた。彼女はもう六十を越へて居たが、非常に健康で、頭髮もまだ白くならず、顏色も元氣に艶々して居た。富美子が、遠國から態々年寄に來て貰つて濟まなかつたと謝すると、

「何のあんた。ようこそ呼んで下さいましたと喜んで來ましたわいね。」と姑が口上手に言つた。「あんたらが遠慮して、不自由なのを怺へて呼んで呉れんと思ふと、あまり氣持が良うなけれど、手が足らんで困ろさかい來て呉れと遠慮なしに打ち

明けて言うて貰うと嬉しいわいね。」

「さう仰有つて頂くと、本當に私も嬉しう御座います。お氣の毒ですけれどお願ひ申します。」と富美子が言つた。

「何の氣の毒なことがあるもんかいね、役目やもん。あんた等の世話をしようと思うて態々出て來たのやさかい、一寸も遠慮などせんと、どんなことでも關はず、どんどん命令けてさして呉れようぞ。お客樣に來たのではないさかい。」

「えい、どうぞお願ひします。今當分は、私もまだ達者ですし、お産の仕度もすつかり出來て居ますし、別段これと言つて爲て頂くものもありませんから、まあゆつくり休んで見物でもして下さいまし、追々に厭なことでもお願ひします」

「見物なんか、あんた、この前來た時に十分さして貰うたし、何爲たからうやいね、そんなことは一寸も氣にかけんで何でも教へてさして下さいませ。免倒でも一々やかましく指圖して貰はねば、田舍者で何していゝやらさつぱり分らんさかい。」

そして彼女は、恰も下女にで雇はれて來たかの如く、その日からでもすぐ仕事をしようといふ氣組を見せるのであつた。

それは決して輕薄なお世辭ではなく、純粹な好意からであつたらうが、さういふ風に餘り口上手に言はれると、富美子は却つて一種の重い壓迫を感ずるのであつた。油斷のならぬ、氣の張つた人だといふ最初の印象が、着いたその日からもう既に富美子の心に蘇つて來て、新しく警戒の念を起させた。

併し極めて穩かに平和に十日ばかり經つた。姑は別にこれといふ用事もなく、只だ女中の德に代つて、去年生れた末の兒の守をさせられるだけだつた。彼女と富美子との間には何等感情の疎隔を來すやうな出來事も起らなかつた。二人は互に相手を冒すことなく、互に敬し合ひ遠慮をし合ひ機嫌の取り合ひをして居た。

富美子は姑などを當てにはせず、一人でまめまめしく立ち働いた。それは姑の手前、特に意識的に忠實な嫁振りを發揮

しようとしたのではなく、ふだんからさうなのであつた。家族の多い家庭の主婦として、爲なければならぬ仕事も却々多かつたが、のらくらと遊び暮らしたり、何事でもいゝ加減にして見て居たりすることの出來ないやうな彼女の性分からでもあつた。ちやん〳〵と物事を片つ端から片付けて行かねば氣が濟まず、事によつては女中などに命じたり頼んだりして、口數を使ひ氣を揉むよりも、自分で飛んで行つて爲るといつた風な女であつた。三度の食事、三人の子供の世話、裁縫、水仕事、それに年の暮に迫つての出産なので、それ以前に正月の支度もあら方手廻しをして置かねばならぬので、彼女は臨月の身重にも拘らず、割合に達者なのを幸に、朝から夜寢るまで殆ど休む暇もない位に立ち働いた。

もう十二月に入つて、冷たい北風がピイ〳〵吹いて居るやうな日にでも、彼女は臺所の土間に大きな腹を突出して蹲踞んで、冷たい水道の水でせつせと洗濯をして居ることが屢々あつた。さすがに苦しく厭だなと思はぬでもないのだつたが女中などが寒がつてうぢ〳〵して居たり、霜焼の手をいたはつたりして居るのを見たり、姑が梟のやうに寒さうに身を圓めてのろくさして居るのを見たりすると、勝氣な彼女はつい反抗的に自分で爲る氣になるのだつた。

「あんた、そんな身體して居つて、そんな無理なことをしてはいけませんぞ、この寒いにそんなことをして居て、若しも冷え込みでもしたらどうしますいね、取り返しがつきませんぞね、そんな事は、言うてさへ呉れりや、下手でも俺達が幾らでもするわいね、その爲に德も居るし、俺も遠い所から出て來とるのに。」

かう或時も姑が幾らか機嫌を損じたやうに叱言らしく言つた。

「えい〳〵、今に幾らでもお願ひしますよ、厭と言うてもして貰ひますよ。」と富美子ははき〳〵した調子で言つた。

富美子にして見れば、子守位のことは、さし當り特に姑にして貰ふほどのことはなかつた。否、無いのではなく爲て貰はうと思へば幾らでもあるのだつたが、第一、幾ら手傳に來て居るのだといつても、兎に角相手が姑であり、且つ年寄つた婆さんを、この寒いのに追ひ使ふのも氣の毒だといふ遠慮の氣持もあつたのだ。が姑にとつてはまた、富美子が氣樂に

打ち解けて、自分に適した仕事をあれこれと指圖してさせて吳れぬのが物足りなかつた、何となく外々しくされるかの如くにさへ思つた。富美子が一人で何でもかんでもやつてのけて了ふのを、何だか自分などは間に合はず却つて邪魔つけだといふ風に思はれて居るやうにも疑はれ、家庭の上のことなどに一切手出し口出しをさせまいとして居るかの如くに僻まれもするのだつた。富美子が負けぬ氣の働き者だといふことには好感を持てないことはなかつたが、矢張り彼女としてはたとひ富美子が怠けて寢轉んで居てもいゝから、『お母さんこれを爲て下さいあれを爲て下さい』などと、氣輕に頼んで吳れたり、『これはどうしたらいゝでせう、あれはどうしたもんでせう。』といふ風に相談して吳れたりして欲しかつた。——勿論、實際さうだつた場合には、彼女が果してどういふ感情を抱くか、それは保證出來ないことだつたが……。

さういふ所に、既に二人の間には、互に氣まづい淺ましい感情が生じかけて居た。

主人の敬介は、その頃彼の職業である書き物の仕事が忙しいので、每日朝から夜更まで書齋に閉ぢこもつたきりで、彼の女とゆつくり打寛いで話をすることもなく、時によると終日顏を合せないことすらあつた。無口で神經質で、いつも不機嫌な憂欝な澁面を作つて机にかぢりついて居るので、彼女は常に恟々と怖れ憚り、一寸寄りつくことも出來なかつた。殊に我子と言ひながら彼女には繼しい仲であり、最早四十近い年輩になり、一家の主人として、相當の地位を得て居る敬介だつたので、尙ほ更彼に對して頭が上らず、又眞實の我子として親しんで行けない遠慮氣兼をしなければならなかつた。そして敬介からも、肉身の親子らしい溫かい何物をも受取ることが出來なかつた。これが互に血を分けた眞實の親子であるならば、たとひ終日顏を合せず物も言はなくとも、只だ一つの家に居るといふだけで、十分抱き合つたやうな溫かい心持にもなれ、嫁との間の何となく疎ましい感情も、自然にその捌け口を見出すのであつたらうが、矢張りそこにも彼女は自ら或る冷たいものに突き當るやうな氣がするのだつた。

かうして彼女は寂しかつた。敬介に對しては親として望み且つ甘へることも出來ず、富美子に對しては姑としての權威を振ふことも出來なかつた。敬介からも富美子からも親として尊敬され大切に取扱はれて居ながらも、まるで居候か雇人かのやうな佗しい氣持にしかなれなかつた。

彼女は每日幾度となく末の兒を負つて外へ出て行つた。それが彼女の唯一の主なる仕事だつた。

「ポッポッポ、鳩ポッポッポッポ。」

かう彼女は途々口にし續けて、歌ふのでもなく呟くのでもなく、變に頼りない寂しげな調子で、殆ど無意識に口吟むのであつた。それは背中の子供をあやすやうでもあり、又自分自身を慰めあやして居るかのやうにも聞えた。そして彼女は何處といふ當て途もなく、近くの町々をむづ／＼と蟲の這ふやうなのろい歩調で譯分らずに只だ足にまかせて歩きまはつた。

「前世で蟲けらであつた時分に通つた路を、現世で人間になつてから必ず通るものだといふが、自分が蟲けらの時分にはこんな所を通つたのかなあ。」

時々道の眞中やお寺の前などに立ち止つては、彼女はあたりを見廻しながらそんなことを感慨深く思つたりした。

「道理で、今も矢つ張り蟲の這ふやうにむづ／＼歩いて居るわい。」

己れを嘲けるやうな憐れむやうな氣持で、そんなことを呟いても見た。

或る時敬介は富美子に言つた。

「どうだいお母さんは？」

「えい、よく働いて下さいますわ、子供も可愛がつて、よく面倒を見て下さいますし、大に助かつて居ますわ。」と富美子は感謝するやうに言つた。

「さうかい、そりや何よりだ。」

「却々落着いた、しつかりした、いゝお婆さんですね。」

「さうかい。」

敬介は富美子の口裏には、或る反語的の意味の含まつてゐることを察知したが、何氣なく言つた。

「えい、どうして／＼！默つて知らん顔をして居らつしやるけれど、何もかもちやあんと承知して居ますからね。」

「さうだらう、あれで田舍でも評判の婆さんだからな。却々機嫌が取りにくいだらう。」と敬介は富美子の意を迎へるやうに言つた。

「そんなことも御座いませんけれど……」と富美子は半ば自分の手腕を誇るやうな、半ばそれを肯定して敬介に訴へるやうな調子で言つた。「うまく調子を合せてやつて居ますけれど、時々困ることもありますよ。此頃ね、何時私が寝るやうになるかも分らないから、食事のことなんかもぼつ／＼やつて貰ふやうにして居るんですけれど、却々頑固なんですね、つまり外のことは兎に角、その點では自信があるといふものですか、田舎風の我流を出して困るんですよ。幾ら言つても駄目なの。」

そして富美子は魚や野菜物の切り方や煮方や味の附け方などについての意見の衝突をいろ／＼例を擧げて説明した。

「それで餘り執く言ふのも惡るいし、知らん顔してこつそりやり直したりしてるんですけれど、時々本當に困ることがありますのよ。何しろ私が敎へていゝのか、敎はらねばならんのか、その邊が誠にやりにくいの。」

「まあそんなことは我慢するさ、お母さんだつて、外に何にも俺達に對して親らしく姑らしく出來ないんだからな、せめてそんな所にでも自己を主張したいだらうよ。」と敬介は母に同情して言つた。

「そりやさうですわ、隨分遠慮してなさるからね、氣の毒な位よ、經濟の點からでも、子供の躾け方についても、隨分眼にあまることや歯痒いこともあるらしいんですの、私に面と向つては何とも言ひなさらんけれど、德なんかに時々それとなく言ふさうですよ。」

「さうかい、そりやまア仕方がない、そんなことあんまり氣にかけない方がいゝ。」と敬介は富美子が何かそれについて訴へようとしさうなのを知つて、それを押へるやうに言つた。「まあ出來るだけ劬つてあげて呉れ、お母さんも寂いだらうからな。義理の仲だから、俺に對しても遠慮して居るし、お前には勿論、俺に對する義理からでも、言ひたいことも言へないだらうからな。他人の間に居るより却つて寂しい氣持がしてるかも知れないよ。お母さんが赤ん坊を負つて、ポツポツポつて出て行く後姿を見ると、何だかいやに寂しさうな頼りなげな氣がして、氣の毒でならないよ。俺は忙しいもんだから、ゆつくり話相手にもなつて居られないので、お母さんも冷つこい感じがして居るだらうし、俺も濟まない／＼と思つて居るんだが、まあもう暫く仕様がない、その代りお前がその邊うまくあしらつて、暖かい氣持で居られるやうに慰めてあげて呉れ。」

「えい、さう努めますわ。」と富美子もやさしく、その氣になつたやうに言つた。「そりやね、おばあさんもお國に居れば、自分の本當の息子やら娘やら孫やらで可愛者澤山だし、嫁さんを顎で使つて居られるのに、こちらでは反對ですから寂しいでせう。」

併し心の底では口で言ふほどの同感も同情も湧いて居なかつた。子供に對する孫婆さんとしての姑の態度や何かについても、富美子は卑小なことだと思ひながらも或る不滿を感じて居たし、その他にもいろ／＼と夫の敬介に甘へ訴へたいものを持つて居たのだつた。

富美子の出産は、もう豫定の時期が來て居るのに、まだ一向それらしい樣子も見えなかつた。姑が來てからもう二十日あまり經つた。彼女は非常に待ち遠しく思つた。

「もう私が來てから幾日になりますいね。」と或る時彼女は富美子に言つた。

「もう三週間ほどになりますね。」と富美子はまたかと眉をひそめながら答へた。

「早いもんやね……あんたが早う惡るなつて下さらねば困りますね、早う惡るうなつて早う良うなつて下さらねば。」

「本當ですね、いつ生れるんですかね、もう間もないと思ひますけれど。」

「こんなに間があるのなら、私やこんなに早く來るのでなかつた。」

さう言つた姑の言葉が、呼び寄せ方が早過ぎたとの不平であるかのやうに富美子の耳に痛く響いた。事實さうでもあつたのだ。富美子はそれに酬ひるやうに、言葉は優しく併し氷を包んだやうな冷かさで言つた。

「濟みませんでしたわね、お國の方でもお忙しいところを、早くからお騷がせ申して。」

それがまた姑の胸にぐつとこたへた。

「そんなことはないけれど、毎日御馳走食べさして貰うて遊んで居て、あんた達にも氣の毒でね。何かあんたの手傳でも出來りやいゝのやれど、何をしようにも私みたいな能無し猿は一向役に立たんし。」

富美子は默つて唇を嚙みしめた。いやな皮肉な婆さん、と彼女は心の中で呟いた。歸りたければ歸つたつていゝといふ

やうな氣さへ起つた。

「おばあさん、嘸御窮屈でせうね？」

「何のあんた、我子の家へ來とつて窮屈ちうことがあらうかいね。私ァはや、好きなやうに手足を伸して、好い正月をさして貰ふとるわいね。」

「こんな我儘者で、いろ／\お氣に召さんことも御座いませうけれど、大目に見逃しといて下さいましね。」

「あつはつは。」と姑は大きく笑つた。

「ふだんでも、お金なんかももつと澤山お送りしたいと思つて居るんですけれど、この通り子供も多いし、それに何と言つても新世帶で、世帶道具一つでも何から何まで新に調へねばならないし、心はあつても却々思ふやうに參りませんのでね。あんた達も定めて不足に思つていらつしやいませうけれど、まあ／\暫く我慢して下さいまし。」

　富美子はそんなことを言ひ出した。彼女の腹の中では、自分達が家庭を作るにしたつて、箸箆一本親から貰つたではなし、親の補助を受けるどころか子供が出來たつて、何一つ祝つて貰へない位だのにこちらからは、いや屋根の葺き換へだ、いや土藏の修繕だ、いや漁船の新造だと、始終何だかんだと言つて苦しい中からも仕送りをしなければならぬ、おまけにそれも、親達が亡くなつた後に何かの形で自分達へ還つて來るものならよけれど、結局は田舍の家の後を嗣いで居る敬介の弟の健吉――姑の實子――のものになつて了ふばかりで、隨分損なつまらない馬鹿らしいことだといふ不平不滿が蟠つて居るのだつた。

「えい／\、そりやあんた、そんなことは私達も何とも思つて居らんわいね、誰が二つ立てられんちうことはよう知つてますからね。」

　さう言ひながらも、姑は姑でまた、貧乏な爲らぬ中から苦心慘憺して敬介を大學へまで出したのだといふ自分の苦心談をして聞かせて、そんなこと位は當然だといふやうな意をほのめかした。

　そんな風に二人はいつも何處かで背中合せになつて居るやうな冷たさを抱きながら、默つて探り合をして居るのだつた。

「ホッポッポ、鳩ポッポッポ。」

姑は不相變さう口吟みながら、北風の吹く寒い冬枯の街中を歩いて居た。窮窟と退窟と寂しさとで、彼女は故鄕の暖い家庭の團欒が戀しくてならなかつた。孫の顏が見たくてならなかつた。自分が居ないと言つて、どんなに孫達が寂しがつて居ることだらうと可哀相な氣がしてならなかつた。そして富美子の出產の意外に遲れるのがもどかしく、憎くらしくさへなつてならなかつた。

同じく孫ではありながら、彼女はどうも敬介の子供達が好きになれなかつた。鄕里に居る實子の健吉の子供や、村に嫁づいて居る姉娘の子供達は、全く眼の中へでも入れたいほど可愛くてならぬのに、東京の家の子供には、どうしてもさうした深い愛情を持つことが出來なかつた。今自分の背中に居る赤ん坊には、さすがに幾らかの愛情も湧かぬでなかつたが、他の二人の男の子供が、呆れるほどやんちやで腕白で放縱なのが、時として小面憎くさへ思ふことがあつた。而も敬介でも富美子でも、全く子供の爲たい儘に放任して居るのが齒痒くもどかしくて見て居られないやうな氣がした。東京と田舍と育て方が違ふか知らねど、あれでは子供の將來の爲にもよくないと忠告したいと思ふこともあつたが、それも怺へて默つて見て居なければならなかつた。遠く離れて居て、親しみがないといふのも、孫達に對して愛の起らない原因の一つでもあつたが、矢張り何と言つても血が通つて居ると居ないとでは、大變な違ひであつた。そこには到底穿つべからざる深い溝渠が掘られて居た。孫達も彼女に深く懷きはせず、彼女もまた彼等に對して、何となく繼子に對するやうな冷たい氣持にならずには居られなかつた。往來をぶら〳〵歩きながら、吳服屋や玩具屋の前に立つては、彼女はよく鄕里の孫達へ何を土產に買つて行つてやらうかと今の中から物色しながら、その時の彼等の喜び上る顏を思ひ浮べては獨り自ら便なく樂しんだ。それだのに、彼女は未だ一度も、東京の孫達に何一つ買つてやらうといふ心が起らなかつた。

その氣持がまた、富美子の心に自然に反映せずには居なかつた。姑が東京へ來た當時、何一つ孫達に手土產を與へて吳れなかつたのが、富美子には旣に不滿であつたが、その後長い日數の經つ中に、安い玩具一つ、蜜柑一つでさへ買てやらうともしないのを富美子は子供の爲にたまらなく可憐に思ひ、情ない悲しい氣がして居た。

「いかに何だつて、自分の孫ではないか、たまには蜜柑の一つも買つて與れないもんか、さもしい心で思ふのではないけ

れど、可哀さうに子供等だつて、自分のお祖母さんが來たのに、錢一錢貰はれんと思へば、どんなに寂しいか知れない。」
かう彼女は時々思つた。そんなことを思つてはならないと自分をたしなめながらも、これが自分の實の母親であつたならば、つい敬介の所謂嫁根性が出て來るのだつた。そして姑が歸郷する時には、こちらからは向うの幾人もの孫達に、内孫にも外孫にもそれ〴〵何かか土産として贈らねばならないことなど考へて、益々疎ましい感情を育ぐむのであつた。
或る日富美子と姑とが連れ立つて買物に出掛けた折、姑が或る吳服屋の店頭に吊つてあつた色々の小布類をいぢくつて居て、却々その前を離れようとしなかつた。富美子が何か欲しいものがあるのかと聞くと、郷里の孫のチャン〳〵にしたい美い布があるのでと、如何にも欲しさうに言ふのだつた。今から土産物の心配かと富美子は少し不快に思ひつゝ、
『それなら何れ又改めて、私が達者になつてからでもゆつくり買ひに參りませうよ、まだお歸りまでに大分日もありますし、幾らもまだ〳〵好きな色柄のが出ますよ。何れ私からもお土産に何かあげたいと思つて居るんですから、あなたがお錢をお出しにならないかつて。』と何氣なく言つた。
でその時は姑は默つてその儘歸つたが、翌くる日外へ出た時、彼女は昨日見たその實用ぎれを買つて來た。
『土產は土產でまた後で買て貰うふとして、もう大分寒くなつたさかい、正月までにこれを一枚こしらへさせて着せますわいね。』
かう姑は言ひ〳〵早速これを小包にした。少しばかりの菓子類まで一緒に加へて。
富美子は勿論嬉しくなかつた。それどころか彼女は非常な不快な腹立たしい氣持になつた。自分に多勢子供が居ても誰もあんなにして貰れる者が居ない、同じ孫でありながらと、彼女はさもしい嫉妬だと思ひながら、ついさう僻んで腹の中で泣いた。
『おばあさんはもう、お國の孫達に何を土產に買つていつて上げようかと、ちやんと考へていらつしやるんでせうね。往來を步いて居ても、そんなものにばかり眼をつけて步きなさるんでせう？』
富美子は姑の心を見拔いて居るやうに、幾らか皮肉な微笑を浮べながら言つた。
『はつは。』と姑は苦笑した。『そんな譯でもないけれど、矢つ張りそんなものが眼につくもんやね。』

「今からよく考へて置いて、何でも好きな物を、遠慮せずに買つてお貰ひなさいね。」と富美子は當てつけるやうに言つた。
「えゝ、孫ばかりでも兩方で五人も居るさかい、安い物を少しつゝと思うても優しいお金で調へられんのでね、こゝのお父さんに苦勞をかけて氣の毒なれど、又何か買うて貰はねばならんと思うとるわいね。」
「おばあさんのお土產だといふて、どんなに喜ぶか分りませんわね。」
「えい／＼、何土產に買うて來て呉れるやらと言つて、待ち焦れて居るやらうぞいね。」と姑は富美子の氣持に關せず思つた通りに言つた。
　富美子はそつと姑にかくれて涙を拭いた。自分の孫達を喜ばし、同時に自分も喜ぶその土產を誰が買つてやらねばならぬのか考へて見て呉れと言ひたかつた。
「ずつと後の話なれど、おばあさんには何をお禮したらいゝでせうね。お父さんはお父さんで何れ何かしませうけれど、私は何か粗末な着物の一反もお上げしたいと思つてるんですが、何でも欲しいと思ふものがあつたら、今から考へといてさう言つて下さいまし。同じことなら必要なものがよう御座んすから。」と富美子が言つた。
「私は何も欲しくもないし、子供のお產の世話に來て禮なんかは貰はうとらんないね、それよか若し私に何か買つて下さる心があるなら、健吉が碌な着物一枚持つても居らんすかい。あの子に何でもいゝさかい上に羽織るやうな柔かい物の一枚も買うてやつて下さいませ。」
「まあどうだらう！」と富美子は呆れた。このおばあさんは自分の實の子供や孫のことばかりしか考へて居ないのだ。こちらは直接世話になつたこのおばあさんに何か心ばかりの禮をしなければと思ふばかりに言つたのに、女房子まである立派な一人前の自分の息子にとは！矢張り自分の子である敬介を可愛相だとは思はないのか。」
　富美子は良人の敬介の爲に、寧ろ憤激的にさう思つた。
「ポッポッポ、鳩ポッポ。早くお產が濟んで呉れ。ポッポッポ、鳩ポッポ。」
　さう歌ひながら、姑のお婆さんはその後も富美子の末の赤ん坊を負つて師走の往來を歩いて居た。
　富美子もまた別の心持で、早くお產が濟んで呉れと祈つて居た。

―十一年十二月作―



父と娘（完結）

武者小路實篤

第三幕

（次郎の室、粗末な二階の室、間借り）

次郎。よく家がわかつたね。

大林。わからなくつて、しかし隨分思ひ切つた所に引越して來たね。

次郎。之で僕も氣がせい／＼したよ。僕は今迄、蝶子さんの父に自分の居場所を知らせることは出來なかつた。こゝにゐれば來てもらつても別に恥かしいことはない。僕も今迄あの家にゐるのはいやだつたのだ。どうかしてあの家を出たかつた。しかし出る時を待つてゐた。それは蝶子さんの家から遠のくのもいやだつた。又一方、蝶子さんを立派な家に住はしたいと云ふ氣もあつた。僕は金持を憎まない。そして金持の生活がこの世に一方あつても、今の世の中では反つていゝ位いだと思つてゐる。贅澤と云ふものが、まるで生きられない社會は、景氣がよくないやうに思ふ。しかし僕自身は貧乏な生活を愛する。僕は他人の贅澤は興味をもつて見ることが出來る。しかし自分は貧しい生活をしてゐる方が氣がらくだ。父は僕に月に何百圓でも出さうと云つてゐる。しかし僕は三十圓あればくらせると云つて斷つた。僕は今の世では貧しい生活をしてゐる方が氣がらくだ。尤も僕は贅澤に生れつき、神經質に生れついてしまつてゐるが、

しかしこの簡單な生活をしだしたら之が又隨分氣に入つた。元より金が一文もなくつては困る。だから僕は貧乏な人を今のまゝにしておく社會をそのまゝ是認しようとは思はない。だが一人の人が五十圓位いとれば、あとはとらうと骨折る必要はないと思ふ。しかしそんな理窟は僕は他人に任せようと思ふ。僕は其處に蝶子さんが立つて、往來を見おろす姿を空想して、それを實現させることを一番强くのぞんでゐる。それは不可能なことではなくなつた。

大林。その後萬事がうまくいつてゐるのかい。

次郎。まあ、うまくいつてゐる。お父さんの方はすつかり僕を苦學生だと思つてゐる。そして僕を有望な人間、掘り出しものと思つてゐる。そして僕の原稿を雜誌に世話までしてくれて、二十圓許り原稿料までとつてくれた。僕はすまない氣もしたが、その厚意をうれしく思つた。そして僕がゆくとどんなに機嫌のわるい時も機嫌がよくなるのださうだ。そして僕の云ふことは一々賛成する。尤も僕も、あまり不愉快を與へさうなことは云はない。そして一緒に金持の惡口もする。實際惡口を云つてもいゝ金持はこの世の中にいくらでもゐる。僕は人間を金の奴隷だと思つてゐるもの、金で買つてはならないものを金で買つて得意になつてゐるものには反對だ。そして貧乏人を輕蔑し、金のない人間が食へないのはあたりまいだと思つてゐるものに反對する。彼等は、自分は怠けておきながら、職工や百姓が金が出來ると怠けるからいけないと云つて得意になつてゐる。自分はそんな人間は嫌ひだ。自分は金持に生れたことは恥づべきことで、傲るべきことゝは思つてゐない。たゞその金をうまく利用して自己を許された範圍で最も立派な人間にしようとするものには同情する。勿論一方、金がないために勉强したくも出來ない人には同情する。だが勉强する氣のないのに、金があれば勉强するのだとか、頭がわるいくせに金があれば大學者になれるやうなことを云ふものには反對する。それと同時に金があつても道樂せずに、自分の天職のために一層責任を感じて忠實に働くものには尊敬をはらつていゝと思つてゐる。たゞ天職のない人間が、金があるがためにのらくらして得意になつてゐるのを見ると、人間のくづだと云ふことをはつ切り感じる。

大林。實際、僕達は有望な人があつたら、パトロンになつて、自分に出來ないことをその人にやつてもらひたく思つてゐる。有望な人間にいやが上にも立派な人間になつてもらふことに金に立つことが出來るのはいゝことゝ思つてゐる。

次郎。さうだ。それはたしかに、最も有益な金のつかひ方だ。だが本當に有望な人間と云ふものはさうころがつてはゐないものだね。

大林。本當にさうだ。僕は有望な人を私かに捜してゐるが、まだこの人ならと云ふ人にお目にかゝれずにゐる。

次郎。お目にかゝりすぎてゐるのぢやないか。

大林。僕達は別としての話だ。

次郎。僕達より偉い人間、そんな人間が、さうころがつてゐてはたまらない。だがその僕達がこんな有様では仕方がない。もつとうんと勉強して何か仕事らしい仕事をしたいと思ふのだが、この頃は朝から晩まで、足音がする度に蝶子さんが來るのではないかと思つてゐるのだからたまらない。もう君はそんな時代は通りこしたらう。僕も早くそんなことには卒業してしまひたい。

大林。蝶子さんは來るかも知れないのか。

次郎。來ない方が本當だらう。だが不意に來てくれさうな氣もするのだ。處は敎へてあるし、くることをすゝめてもあるのだ。だが當人は上りたいけれどもまだ上る勇氣はないと云つてゐる。まだ運命の神の意志を信頼出來ないのだ。そして深淵にひきづりこまれるものゝやうに、その運命に手向はうとしてゐるのだ。僕は蝶子さんのお父さんにいつか、實は僕は金持の息子なのですと云つてやりたい。そして矢張り人間でせうと云つてやりたい。蝶子さんはそれをこはがつてゐる。僕は時々、もう變裝にあきるのだ。そのくせ僕は父に向つては金持の悪口を云つてやる。そして金を持つた以上は仕方がないから、それを何か生るやうに使ふやうにすゝめてゐる。しかし父は、金をふやすことを仕事にしてゐるから仕方がない。だがこの頃は段々金をためるだけでは心細くなつて來たやうだ。

大林。君のお父さんは僕にさう云つてゐた。いくら金をためたつて息子の代になればなくなるにきまつてゐる。太郎だつて次郎だつて金をつかう方にかけては名人らしいからな。だが少しはつかひ甲斐がある身代にしておいてやらうと思つてゐる。男子に生れた以上は、何かで圖抜けられたら圖抜ると云ふことは面白いことだつて、だが金に未練を殘すやうな馬鹿なことはしない、一代でつくつた金だから一代でつぶしたらいゝだらう。之から[illegible]するのだつて金があつてわ

ゐいと云ふことはないかゝなーとおつしやつてゐらつした。

次郎。お父さんの財産は兄さんが勝手にしたらいゝだらう。金と一緒にそれにくついてゐるいろ〳〵のうるさいことを、背負ひこむことは僕は閉口だ。金で出來る仕事は僕でなくたつて出來る。僕は自分でなければ出來ない仕事がしたい。僕は金の方の心配はいらない。なぜかと云ふといくら僕が餓ゑ死にしようと思つたつて、君や、僕の兄がそれは承知しないことを知つてゐる。だから僕は金には冷淡なのだ。僕には生きることが必要なので、金が必要なのぢやないのだから。そして多くの人は金がなければ生きられないのだが、僕は金がなくなつても生きられるのだ。だから僕は金を輕蔑することが出來るのだ。それだけ僕は自分の仕事に忠實にならなければ恥だと思つてゐる。

大林　本當に僕達は何かで生たゞけのことはしたいものだ。僕達は僕達の出來る方法で何か人間の役に立つことがしてゆきたい。この世にはどの方面にもしたいことが多すぎる。殊に今の日本ではどの方面もあまり貧弱だ。何處の方面にもしたいことがありすぎる。それだけ僕達、若いものにとつてこんな面白い時代は又とないだらう。全世界から滋養分をとることが出來るのだから。

次郎。實力のある人間にとつて、こんな面白い時代は少ないだらう。あらゆる方面で、我等の力を待つてゐてくれるのだから。僕はこの家が氣に入つたのは、こゝからかうやつて見てゐると、何萬と云ふ家の家根が見える。そしてこゝから往來を見てゐると、あらゆる人が急がしさうに歩いてゐる。それを見ると、ホイットマンの大道の歌を思ひ出す。自分はその人達にこゝから私かに愛をおくる。生命の流れを感じる。何かしたいと云ふ氣が強くしてくる。あゝ、あすこをくるのは蝶子さんのお父さんにちがいない。僕の家がわからないので、一軒々々のぞいて見てゐる。

大林。それなら僕は又くる。

次郎。さうか。それは失敬したね。その内、こゝで二人で君を迎へる時があるだらう。

大林。さよなら。

次郎。さよなら。

（二人退場、まもなく次郎時次と登場）

時次。之はいゝ處ですね。
次郎。おかげでいゝ處が見つかりました。隨分さがすのに、お骨が折れたでせう。
時次。いえ、家をさがすのがまづいので、今日もきつとさがしそこなつて歸つてくるだらうと蝶子に笑はれたのでしたがすぐわかりましたよ。
次郎。さうですか。來て戴けてこんなにうれしいことはありません。
時次。私も一度上りたいと思つてゐたのです。これはお粗末ですけどお引越しの祝ひにとつておいて下さい。
次郎。先生からそんなものを戴いてはすみませんね。ですけどよろこんで戴いておきます。
時次。どうか。どうもどんなものを持つていつていゝかわからないので、お湯のみがいゝだらうと娘も云ふので持つて來ました。
次郎。ありがたう。
時次。それからこないだの原稿が又賣れましたので、今度は三十圓くれましたから、持つて來ました、實はそれを少しでも早くとゞけたいので來たのです。何かとお引越しで御不自由だらうと思ひましたので。
次郎。それは本當にありがたう御座います。ハガキでも下されば、大急ぎでとりに上るのでしたのに。
時次。それでも、あなたのおすまいも見たかつたので。こゝにおちつきになつたら、どん〳〵いゝものがおかけになるでせう。
次郎。どうかしてかきたいものと思ひます。
時次。私も段々齡をとるので、あなたのやうな有望な方が出てくれると實にうれしいのです。
次郎。御期待に背かないやうなものになりたく思ひます。
時次。之は誰の顏ですか。
次郎。ホイットマンです。
時次。あゝ、ホイットマンですか。よくある寫眞と少しちがひますね。だがいゝ顏してゐますね。

次郎。ええ、この顔を見てゐると元氣になるのです。生ると云ふことが何んだか力強い氣がしてくるのです。

時次。あなたはまだお若いから本當に元氣で何にも氣になることがないからよろしいが、私のやうになると、もう生活にすつかりしひたげられて、生る元氣なんかなくなつて、ねながらずつと目がさめなかつたら、どんなにいゝだらうと思ひますよ。

次郎。今、あなたが死んだらあとの方が随分御困りになるでせう。

時次。あとゝ云つたつて、娘が一人のこつてゐるだけですからね。だけど、私の處に養子にくると云ふ人もありませんから、娘は氣の毒ですよ。

次郎。そんなこともないでせう。

時次。あいつは親の口から云ふとへんですが氣だてはいゝ子なのですが、それに器量だつて十人並の顔はしてゐますが、私のやうな貧乏人の所には來てくれるものはありませんからね。私の近所に山田とか云ふ金持がゐますが、御存知ありませんでせうね。

次郎。いえ、知つてゐます。

時次。あすこの次男に次郎とか云ふ子供があるのですがね。それがどうしてか、私のあの娘に執着しまして、是非くれと何度も云つて來たのですが、金持と云ふものは生意氣なもので、私がすぐよろこんで承知すると思つてゐるのが、目に見えてゐるので、腹が立ちましたよ。

次郎。あの息子の次郎と云ふのなら、矢張り小説をかく男でしよ。それなら僕も名だけは知つてゐます。中々有望な人ださうですね。

時次。あてになるものですか。きつと花柳小説のやうなものでもかいてゐるのでせう。さもなければどうせお坊ちやん小說にちがひないでせう。

次郎。およみになつたのですか。

時次。誰がよむものですか。

次郎。よまなければ、いくら先生でもおわかりにならないでせう。

時次。わかりますとも。どうせ道樂にやつてゐるのですからね。それに人生の苦しみなんか知つてゐるわけはありませんからね。文學は苦しまないものにはかけないものですから。

次郎。だけど、金持の息子だつて、又何かちがふ苦しみがあるでせう。

時次。あの親爺を見たことがありますがね。とてもあの親爺の子では碌なものが生れるわけはないと思ひますよ。いつも自動車で人もなげにのりまはして悠然とかまへてゐますが、あんな男に人情があるわけはありませんからね。

次郎。さうですかね。僕にはさうと許りは思はれません。人間は一人々々よく知ると皆愛すべき處を持つてゐるやうに思ひます。皆自分のことはそれ相應によく考へてゐると思ひます。あとは境遇に支配されてゐるのにすぎないのです。

時次。だが他人を人間と思はないものは我慢が出來ませんからね。自分達だけが人間で、他は蟲けらのやうに思ふと云ふことは我慢の出來ないことです。

次郎。勿論、さう云ふ傾向があつたら、それは憎むべき傾向です。しかし自動車にのりまはしたい人間は自動車にのせておくことはいゝことだと思ひますよ。自分はのらないでも、自動車が勢ひよく走つてゐるのを見ると、人間と云ふ奴は中々利口な奴だと思つて微笑ひたくなります。

時次。さうですかね。あなたの考へ方はかはつてゐて面白い。私達は自動車を考へ出した人間のことは考へずにのつてゐる人間のことを考へますが、あなたは乘つてゐる人のことを馬鹿にして、考へ出した人のことを考へる。其處が面白い處ですね。

次郎。さう云はれるとお恥しいのですが、私は人間がいろ／＼のものをつくり出したことを讃美したいのです。

時次。それはさうとして、齡頃の娘をもつた親になると隨分心配なものです。娘を一人おいてでると、留守にどんな奴が來ないとも限らないやうに思ふのです。山田次郎のやうな奴はいくらでもゐますからね。文學や、口さきで女を釣らうと云ふ人間はいくらでもゐますからね。あなたのやうに女に冷淡な方はないと云つて、私はいつも娘にほめてゐるのです。

次郎。それは恐縮ですね。僕は父に冷淡と云ふわけではないのです。たゞ自分が妻子を養ふ資格がないことを十分知つてゐますから。

時次。いやあなたのやうに責任觀念の強い方は珍らしいのです。女を玩具ぶこと切り考へてゐない人が多いのですから、親の身になると心配です。早くしつかりした方と約束だけでもして安心したいと私は常に思つてゐるのです。へんなことを聞きますがあなたは許嫁の方がおありになるのですか。

次郎。そんなものはありません。

時次。私は露骨なことを云ふやうですが、氣をわるくしないで下さい。私は正直な處、あなたに惚れてしまつたのです。あなたのやうな方を息子に持つことが出來たらどんなにうれしいかと思つてゐるのです。勿論養子に來て下されば、それに越したことはないのですが、私の家名をのこしたつて仕方がないのですから、養子がおいやなら、私の娘をもらつていたゞければありがたいと思ふのです。勿論今すぐにと云ふのではないのです。あなたがもつと有名になつて定收入が出來てからでいゝのです。御遠慮のない、御返辭をきかして下さい。

次郎。御こゝろざしはありがたいのですが、もう少し考へさして下さい。私はあとであなたがあの男は見損なつた、あの男にだまされたとお思ひになるやうなことがあつてはすまないと思ふのです。正直な處、あなたのお娘さんは私にはすぎた方と思ひます。ですからその方には少しも不服はないのです。しかし私の本當の價値をあなたはまだ知つてゐらつしやるとは思へないのです。あとでだまされたとあつては、私も男として恥ですから、萬事がおわかりになつてから、その上許して下さつたら、お孃さんを戴くことにしませう。

時次。いえそのことなら安心です。私はたへずあなたの擧動を見てゐました。私はもつと前にあなたを信じ切つてゐたのです。ですけど私も買ひかぶつてゐはしないかと思つて何度も何度もあなたを觀察しました。ですがもう私は安心してゐるのです。どうかもうさう云ふ遠慮はしないで下さい。

次郎。遠慮と云ふわけではないのです。

時次。それでは私の娘をもらつて下さるのですね。

次郎。それは今こゝで御答へすることは出來ないのです。

時次。それは體よくおことわりになるためにさうおつしやるのですか。それならはつ切りさうおつしやつて下さい。實は娘をもらひたいと云つて來てゐる所もあるのですがあなたがもらつて下されば、その方はすぐことわらうと思つてゐるのです。あなたはなんでも正直に云ふ方ぢやありませんか。

次郎。それなら云ひます。私はあなたの娘さんを心の底から愛してゐます。

時次。それならもらつて下さるのですね。

次郎。あなたが、いくらお孃さんを私に下さるのがおいやになつても私はあなたのお孃さんを無理にも戴きたいと思つてゐるものです。ですけど、あなたの方がその前に私についてもつとよく、お知りにならなければならないことがあるのです。あなたは赤裸々の私を愛してゐらつしやるのではなくつて、私の苦學生の姿を愛してゐらつしやるのです。私は赤裸々の私をあなたに愛して戴きたいのです。

時次。私は赤裸々のあなたを愛してゐます。あなたは無一物で、なにも持つてゐない、私はそのあなたを愛してゐるのです。あなたが未來に金持になるとも何とも思つてゐません。私はあなたの赤裸々の價値を信じてゐるのです。

次郎。それならあなたは、私がかりに金持の息子たつたら、あなたはどうします。もし私がかりにあなたの輕蔑してゐらつしやる山田次郎のやうな金持の息子だつたらどうなさります。あなたは私に娘は下さらないでせう。

時次。それは勿論、上げませんね。私は娘を金持にはやらないことにきめてゐます。私はいくら貧乏したつて、娘の緣故で金持にはならうと思ひません。そして娘の處へ行くのに氣がねするやうなことはいやです。

次郎。それは御尤です。

時次。ですからあなたは御自分の貧乏なことは氣になさらないでいゝのです。私には其處が氣に入つたのですから。それではあなたは私の娘をもらつて下さいますね。御遠慮はぬきにして下さい。

次郎。僕は貧乏なことを氣にしてゐるのではないのです。私は二三年のちになれば妻子を養へないとは思つてゐません。

時次。無論二三年たてばあなたは私より多くの收入をとるでせう。

次郎。私の心配してゐるのは、私の本當のことを知ると、あなたがだまされたやうに思はれることです。私はあなたをだましたまゝ結婚するわけにはゆきませんから。
時次。何をあなたはそんなに恐れてゐるのです。矢張り許嫁の人でもあるのですか、それなら遠慮なくさうおつしやつて下さい。
次郎。そんなことはないのです。私の心配してゐるのに……矢張り今は云へません。
時次。どんなことでもかくさないで下さい。あなたは御病身なのですか。
次郎。いゝえ。
時次。何か恐ろしい遺傳でもあると云ふのですか。
次郎。いゝえ、そんなことはありません。
時次。あなたは何にも私にかくすことはないぢやありませんか。私はあなたを愛してゐるので、あなたのお父さんが何をしてゐらつしやらうと、何んな身分の方であらうと私は氣にはしてゐません。
次郎。しかし私が金持の息子だつたらどうします。
時次。あなたは金持の息子ではないのだからいゝぢやありませんか。
次郎。私が今に大金持にならないともかぎりません。
時次。山田のやうな不正なことをせずに金持になつたらかまはないと思ひます。第一そんな心配はする必要はありません。金持には中々なれるものぢやありません。
次郎。それではともかくもう少し考へさして下さい。
時次。それなら蝶子をもらつて下さる氣はおありになるのですね。
次郎。よろこんで戴きたいのです。なんならあなたの養子にして戴いても惡くないと思つてゐるのです。
時次。しかしいざと云ふ時になると御斷りになるのでせう。私は蝶子と結婚して下さらないからと云つて、原稿のお世話をしないやうな男ではありません。又それであなたの友情を失なふやうな男でもありません。私は正直なことが聞きた

いのです。私が原稿料を今日持つて來たのも、あなたの友人として一日も早くおわたしゝたくつて持つて來たのです。決して娘をもらつて戴かうと思つて原稿料をもつて來たのではないのです。私は娘のことは別としてあなたの生活のためにはよろこんで働かして戴かうと思つてゐるのです。その點は誤解なさらないで下さい。

次郎。その點は御安心下さい。私は先生の御心がどの位い美しいかと云ふことはよく知つて感謝してゐます。又蝶子さんが私には勿體ない位い立派な方だと云ふことも知つてゐます。しかし私はもう少しさう云ふことをきめたくないのです。なぜかと云ふとあなたはあまりに私に惚れ込んで下さるので私はなんだか恐ろしいのです。私はあなたのお孃さんを死ぬ程、ほしいからと云つてあなたをおだましするわけにはゆきませんから。

時次。あなたは實に美しい心の方だ。よろしい私にあなたにだまされてゐないことをその内はつ切りお目にかけます。その時は蝶子をもらつて下さいますね。

次郎。その時、あなたが私にお孃さんを下さると云ふなら、私はよろこんで戴きます。養子になつてくれとおつしやればよろこんでなります。どうせ同じことですから、私はお孃さんと御一緒になれば、先生の老後をおらくにすることは私の仕事の一つになりますから、名はなんだつて私は赤裸々の自分さへ人類の御役にたてばいゝと思つてをりますから。

時次。あなたを養子にすることが出來れば、私はこんなに嬉しいことはないのです。ですが、何がそんなに御心配になることがあるのでせう。私はあなたが萬一新平民だつてそんなことは恐れはしません。あなたのやうな美しい人格者をうむことが出來た階級を私はよろこんで讃美します。

次郎。まあ、さう大げさなことはおつしやらないで下さい。それに第一、お孃さんが私をお嫌ひになつてゐらつしやるかも知れません。

時次。それは御安心下さい。蝶子は始めてあなたがいらつした時は、隨分ひどいことをいたしましたが、今ではもうあなたのことをほめて話せば、どんな時でも嬉しさうな顔をしてゐます。あなたがゐらつした日は一日機嫌がいゝのです。親がそんなことを見ちがへると思ひますか。私は今すぐきめてくれとは申しません。ですけど何をあなたがそんなに氣になさるのか、それがわかりません。

次郎、今にわかる時があるでせう。私にあなたの思つてゐるやうな生れではないかも知れないのです。私にそのことは恥てはゐません。しかしあなたがそれを聞いたら、すぐ怒つて今迄云つた言葉をおとりけしになるでせう。

時次。あゝ、あなたは私生兒なのですか。私生兒結構です。御両親がわからなかつたにしろ何が恥になります。それはあなたの罪ぢやありません。さういふ境遇から、あなたが出たとしたら、それはあなたの誇りと云ふものです。

次郎。いゝえ、私は私生兒ではないのです。父も母も生きてゐます。

時次。生きてゐらつしたつて、ちつともかまはないぢやありませんか。私生兒でない？ 私生兒でなくつても元より結構です。そんなことはあなたにとつて不名誉にはならない、名誉……名誉とも云へませんがね。

次郎。（笑ふ）本當に先生は面白い方ですね、私はすつかり先生に惚れ込んでしまひました。

時次。さあ、そんなら私の娘をもらつてくれ玉へ。そして僕の娘をよろこばしてやつてくれ玉へ。あいつは實際いゝ奴なのだ。親の口で云ふとおかしいが、本當に親切な、やさしい兒だ。僕はあの娘が不びんでならない。あの娘をよろこばすことが出來たら僕は死んでもいゝのだ。それまでは僕は死ぬことは出來ないのだ。

次郎。先生は、親がどんな仕事をしてゐても息子の恥にはならないと思つてゐらつしやるのですね。もし親がかりに高利貸をしてゐたとしても。

時次。かう、かう、高利貸、勿論、かまはない。さう云ふ所から君のやうな眞面目な人間が出たら、反つて面白い。

次郎。いゝえ、僕の父は高利貸しではないのです。

時次。高利貸でない。なくつて元より結構。

次郎。私の父が金持だつたらどうです。

時次。金持！ 金持？ 金持だけはどうも困る。友人間に金持の息子には娘はやらないと廣言してゐるのだから。僕は世間の親が金持に娘をやりたがるのを常に憤慨してゐるのだ。しかし君はまさか、金持の息子ぢやあるまい。金持の息子がこんな室に住んで、そんな着物をきてゐるわけはない、それに第一君のやうな人間が、金持の内に生れるわけはない。金持の息子に、あんなものがかけるわけはない、第一僕の家の養子にならうなぞと云ふわけはない。

次郎。しかし何處にも例外と云ふものはありますからね。
時次。しかしまあ、おどろかさないでほしい。君はまさか金持の息子ぢやあるまい。
次郎。處が僕は金持の息子なのです。だから僕は困つてゐるのです。
時次。それは本當なのですか。
次郎。本當です。
時次。それは困りましたがしかしあなたは、今は勘當されてゐるのでせう。
次郎。さう云ふわけでもないのです。
時次。それならなぜこんな生活をしてゐるのです
次郎。正直に云へば、先生となかよく御交際したかつたからです。先生は金持をお嫌ひになつてゐらつしやることを知つてゐたからです。金持の息子だと云ふことがわかつたらあなたは門前拂ひをなさるでせう。
時次。それはやりかねませんがね。しかしそんなにしてまでなぜ私と交際したかつたのです。
次郎。先生を崇拜してゐたからと申したいのですが、正直に云ふと、お孃さんがほしかつたからです。
時次。娘がほしいので、あなたは私をだましたのですかね。
次郎。まあ、さうです。
時次。それではあなたはまるであの恥知らずの山田の息子の次郎のやうな人ですね。
次郎。さうです。私がその當人です。あなたのお嫌ひな山田の息子の次郎なのです。かう申してもお孃さんを下さいますか。
時次。誰が上げるものですか。あなたは本當に恐ろしい色魔だつたのですね。
次郎。それ御らんなさい。あなたは赤裸々、私を愛するとおつしやつたが、矢張り私の苦學生の姿を愛して下さつたのにちがひない。しかしあなたのお孃さんは本當の私を愛してゐて下さるのです。
時次。あの娘はあなたが山田次郎だと聞いたら、おどろくでせう。あの娘は山田次郎の惡口を始終云つてゐます。

次郎。誰が、私に苦學生の風をしろとお教へて下さつたのはあなたのおやさしいお孃さんだつたのです。

時次。私はあなたの云ふことが少しも信じられない。之が夢だつたら、早くさめてほしい。

次郎。之は夢ではありません。事實なのです。

時次。それが事實なら、私はあの娘を之からすぐ歸つてたゝき出してやる。

次郎。どうかさうして下さい。私は御門までお伴していつて、さうしたら蝶子さんを戴いて歸ります。

時次。私はあの娘を裸のまゝたゝき出してやる。

次郎。さうしたら私は赤裸々の先生のお孃さんを戴いて歸ります。

時次。もうこゝにゐるのはけがらはしい、一こくも早く歸つて逐ひ出してやる。

次郎。どうか、さうして下さい。善は急げと云ひますから。

時次。すてたものはひらうのはいゝが、ひろつた以上は一生大事にしないと承知しませんよ。

次郎。元より大事にいたします。そして先生のためにかげで働かして戴きませう。

時次。私は時分の子でないものには世話にはなりません。

次郎。それでも、何かの時隣人の世話になつたり、病氣の時、看護婦の世話になると云ふことは悪いことではないでせう。

時次。何とでもおつしやい。私は親をだますやうな子供には用はないのです。あゝこれでさつぱりしました。あなたはまたすぐ引越すのでせう。

次郎。いゝえ、こゝにをります。私はもう金持の生活はしたくないのですから。

時次。それは御勝手です。もう之であなたとも絶交ですから。

次郎。何も絶交なさる必要はないぢやありませんか。

時次。私は私をだました人間とは交際は出來ません。

次郎。私は着物ではだましました。見かけではたしかに先生をだましました。しかし本心では先生をだましたことはありません。私は先生を本當に知つてからは本當に先生を愛しないではゐられなくなつたのです。どうか末ながく先生の弟

子として、先生のために働かして下さい。

（時次泣く、次郎も泣く、下から『女のお客さんですよ』と云ふ聲聞える）

次郎。どうか、お通し下さい。

（蝶子登場）

蝶子。お父さん。お客さんよ。是非お目にかゝりたいとおつしやつてゐらつしてよ。何かあのこの方の脚本のことでいゝお話があるのですつて。何でも何處かで芝居にしたいと云つて來たさうです。

時次。さうか。それならすぐゆく。それからお前はな。よくも俺をだましてゐたな。もう俺は我慢が出來ないからお前を追ひだすからさう思へ。

蝶子。えゝ、お父さん、何をおつしやるのです。

次郎。僕が山田次郎だと云ふことがわかつたのです。しかし御心配なさらないでもよろしい、先生があなたをお捨てになれば、私がすぐ戴いて來ますから。

蝶子。私は父を一人にするわけにはゆきません。

時次。馬鹿！　親をだまして一人にしておけないもあるものか、俺はもう一日もお前をわきにおいておくわけにはゆかない。

（次郎退場）

時次。（暫くして、あたりに注意し）お前は仕合せものだ。だが俺は金持の息子には娘はやらないと皆に云つてある。だから俺はお前をよろこんで追ひ出すのだ。だからお前もよろこんで出るがいゝ。

蝶子。それでもお父さん、お一人では。

時次。そんなことは心配しないでいゝ。敏子もゐるし、どうにでもなる。俺は實にうれしいのだ。あいつは金持の息子にしては珍らしい。お前の何處がそんなに氣に入つたのか。お前も中々すみにおけない奴だ。あいつに苦學生の風をさせたのはお前ださうだね。

蝶子。えゝ、私ですわ。ですから、私は時々あなたが身なりのいやしいのを軽蔑してはいけないとおつしやつた時、笑つて怒られたのですわ。

時次。だがお前は金持の妻になりたがつてはいけないよ。そしてあいつを立派な男に仕上げて、俺の鼻を高くしてくれ。あいつの芝居をやることになつたのか。

蝶子。えゝ、さうですつて。

時次。俺は今日程うれしい日はなかつた。あれが山田の息子だとは思はなかつた。萬一お前は金持の妻になつても、すべての人間を尊敬しなければいけないよ。

蝶子。大丈夫よ。あの方は質素な生活をして本當に勉強して、立派な仕事をしたく思つてゐらつしやるのですから。私はあの方が金持の息子だから愛したのではないのです。赤裸々のあの方を愛したのです。

時次。何とでも云ふがいゝ。あいつは俺が怒つて歸つてお前をたゝき出してやると云つたら、よろこんで門までついていつて、お前をもらつてくると云つた。善は急げだから早く一緒に行つてお前を逐ひ出してくれと云つた。あいつは本當に面白い奴だ。あいつが金持の息子でなかつたら、こんなにいゝことはなかつたのだがな。しかしまあ、そんなことはどうでもいゝ。私の腹の蟲はうれしくつてをどり出してゐる。

（次郎登場）

時次。それならお前を逐ひ出すからさう思へ。

蝶子。えゝ、さう思ひますわ。

次郎。それならもうあなたの家まではひろいにゆかなくつていゝのですね。

時次。めん倒ですから、こゝにすてゝおくことにします。

次郎。しかしあなたの處へ泥棒に入つてもいゝでせうね。

時次。泥棒なら歡迎します。何にもとられるものはありませんからね。

次郎。居すわり強盗にも入り兼ねないと思ひますよ。

時次。え丶、どうか。それでは失禮します。萬事よろしく願ひますよ。

次郎。承知しました。

時次。さよなら。

次郎。さよなら。

（三人退場。まもなく、次郎と蝶子登場。）二人接吻する。

次郎。之から、本當に二人の生活が始まりますね。

蝶子。父に親切にして上げて頂戴ね。

次郎。大丈夫です。僕はあなたのお父さんを愛してゐますから。

蝶子。それさへ伺へば私はもう心配なことはありませんわ。

次郎。私は之から皆にこのよろこびを知らせてやります。あなたはあすこの窓の所に行つて往來を通る人を見てゐらつしやい。私はこゝで原稿をかきながらあなたが其處から往來を見てゐる姿をよく頭に浮べました。さうです、その形です。寸分もその形とちがひありません。なんだか前世で、あなたとこんな生活をしたことがあるやうな氣がしますね。

蝶子。本當に。

（顏を見合はせる）　幕（二二、一一、二一）

数の冠詞、前置詞（prepozicio プレポジツィーオ）接續詞（konjunkcio コンユンクツィーイ）等の助辭の外は皆一定の語尾によつて品詞を區別するのです。

patro といふ名詞の終の o, bela といふ形容詞の終の a は、その品詞を表はす語尾で、patr' bel' は語根と云つて語の意義を示すものです。從つてもし patr に a をつければ

patra 父の、父としての

といふ樣な形容詞が生れます、この應用の自由なことは後に委しくわかります。

扨動詞の不定法の語尾 i の代りに、語尾

as をつけると現在（estanteco エスタンテーツォ）の動作狀態を表はします。

現在の動作といふのは、今現に起りつゝある動作は勿論、習慣的の事柄、又自然現象とか眞理を表はすに用ゐます。

La suno brilas. 太陽が輝く。
ラ　スーノ　ブリーラス

La infano ploras. 幼兒が泣いてゐる。
ラ インふアーノ プローらス

Birdoj flugas. 鳥がとんでゐる。
ビーるドイ　ふルーガス

（單語）krajono 鉛筆　tero 地面　fenestro 窓　ŝtono 石　plumo ペン
クらヨーノ　テーろ　ふエネーストろ　シユトーノ　プルーモ

domo 家　stari 立つてゐる　ĉapelo 帽子　arbo 木　antaŭ 前に
ドーモ　スターリ　チヤペーロ　アーるボ　アーンタウ

〔譯を一々つけませんが、前掲の單語をよく覺えさへすればわかりますから、勉强して下さい〕

(1) Sur la fenestro kuŝas krajono kaj plumo. （窓の上に）
スーる　ラ　ふエネーストロ クーシヤス クらヨーノ　カイ　プルーモ

(2) Sur la tero kuŝas ŝtonoj. （地上に）
スーる　ラ　テーろ クーシヤス シユトーノイ

(3) Jen kuŝas la ĉapelo de la patro.
イエン クーシヤス ラ　チヤペーロ　デ　ラ　パートろ

(4) Antaŭ la domo staras arbo. （家の前に）
アンタウ　ラ　ドーモ　スターらス　アーるボ

(5) Blankaj paperoj kuŝas sur la tablo.
ブランカイ　パペーろイ　クーシヤス スーる ラ ターブロ

そこで、第一に起るのは「どこに」あるのかといふ疑問、それは kie（キーエ）といふ疑問副詞を文章の前に置いて作ります。

(6) Kie kuŝas krajono?（鉛筆はどこにあるの）。といつたら、場所をきかれたのですから
キーエ クーシヤス クらヨーノ

Sur la fenestro.

と答へます。（つゞく）

(5) La manoj de la fratino estas puraj. (姉の手)
ラ マーノイ デ ラ ふらチイーノ エースタス プーライ

(6) Ĉu la infano estas en la ĝardeno? (庭の中)
チユー ラ インふアーノ エースタス エン ラ ヂヤるデーノ

庭の中にゐるのは誰だか知らない、誰がゐますかときくには、

(7) Kiu estas en ĝardeno?
キーウ エースタス エン ヂヤるデーノ

どの子ともきまらない、一人の子供(knabo クナーボ)がゐるならば

(8) En la ĝardeno estas knabo.
エン ラ ヂヤるデーノ エースタス クナーボ

Knabo estas en la ĝardeno.
クナーボ エースタス エン ラ ヂヤるデーノ

どちらでもよろしい。

〔規則〕 3. **複數の語尾は j.**

4. **形容詞の數は名詞の數に一致する。**

5. **疑問文は ĉu を文章のはじめに置く。**

Leciono Tria.

段々單語を覺えましたが、只 estas だけ知つてゐたのでは、種々の事柄を言ひ表はすには不便になつてきました、それにはどうしても動詞(verbo ヴェるボ)を澤山知らなくてはなりません。〔estas を媒語(本質動詞)として說明した關係上、動詞には屬性動詞といふやうな言葉を用ゐないと折合がつかないやうですが、うつかりすると偉い Esperantisto(エスペランティースト)からそんな言葉を用ふべきでない等と、嚴しい意見が出るのは明かですが、文法は筌蹄にすぎず吾吾が必要なのは文法上の解釋よりも、本當のエスペラント文を味ふことですから、些細な文法上の用語の當不當や見解の相違は、暫く御看過を願ひます〕

動詞のもとの形は語尾が i で終り、これを不定法(infinitivo インフィニテイーヴォ)の形と申します。

不定法といふのはよくない言葉で、つまり未だ働きを示さない形、變通自在、無限法とも云ふべきでせう。

esti である、存在する plori 泣く。
エースティ　プローリ

paroli 話す、kuŝi 横たはつてゐる。
パろーリ　クーシ

これではまだ働きを示しません、それで動詞が動作や狀態を表はすには語尾によつて表はします。

そこで今迄語尾といふ言葉を用ゐてゐましたが、エスペラントの言語は、少

云へば、父も母も共によい人、形容詞は複数になります。

bona patro kaj patrino

と云へば何でせう？この時は，bona が單數の形ですから patro は bona ですが、patrino は bona かどうかわかりません。もし

bonaj patro kaj patrino

と云つたら、父も母も bona です。

belaj fratinoj kaj frato (?)

この時は fratinoj も frato も共に美しいのかどうか、これだけでは不明ですから、特に fratinoj だけが美しいといふには、

fratinoj belaj kaj frato.

双方共美しいときには、

belaj frato kaj fratinoj 或は fratinoj kaj frato belaj

言葉の言ひ廻しが、段々微妙になつて、面倒くさいやうですが、文章のあや (nuanco ヌアーンツォ) を覺えこみ、慣れることが必要です。

(例) floroj ruĝa kaj blanka (赤い花も白いのも一つ宛)。

floroj ruĝa kaj blankaj (赤い花一つに白い花多く)。

floroj ruĝaj kaj blanka (赤も白も數多く)。

(單語) infano 幼兒 (インふアーノ)　ĝardeno 庭園。(ヂヤるデーノ)　dento 齒 (デーント)

pura 清い (プーら)　mano 手 (マーノ)　akra 鋭い (アークら)

ĉambro 室 (チヤームブろ)　de の (デ)

libro 本 (リーブろ)　en 中に (エン)

tablo テーブル (ターブロ)　sur 上に (スーる)

(de, en, sur: 前置詞)

(1) La libro estas sur la tablo.
ラ リーブろ エースタス スーるラ ターブロ

〔後に委しく說明しますが、日本語では、「机の上に」とか「室の中に」とテニヲハを後につけますが、エスペラントでは前置詞として名詞の前に置きます、從つて「某の本」と云ふのは「本 de 某」と某は de といふ前置詞の後に來ます〕

(2) Ĉu la libro estas en la ĉambro? (室の中に)
チユー ラ リーブろ エースタス エン ラ チヤームブろ

(3) La dentoj de leono estas akraj? (獅子の齒)
ラ デーントイ デ レオーノ エースタス アークらイ

(4) Ĉu la dentoj de la patro estas puraj?
チユー ラ デーントイ デ ラ パートろ エースタス プーらイ

ESPERANTA KATEDRO

エスペラント講座

伊藤德之助

LECIONO DUA （承前）

ruĝa floro 又は floro ruĝa どちらでも差支ありません。前に置かなければならないとか、フランス語の或る形容詞の樣に、位置によつて意味が違ふといふ樣な事はありません。口調のよい樣に、その人の勝手に置いてよろしい。

るーヂャ ふローろ　ふローろ るーヂャ

patrino bona 又は bona patrino （善い母）
パトりーノ ボーナ　ボーナ パトりーノ

fratino bela 又は bela fratino （美しい姉妹）
ふらティーノ ベーラ　ベーラ ふらティーノ

inko nigra 又は nigra inko （黒インキ）
イーンコ ニーグら　ニーグら イーンコ

兄弟でも姉妹でも、二人以上ゐますと、エスペラント語では、名詞を複數の形にして、語尾に j をつけます。この j は子音とも亦は半母音とも呼ばれてゐる音で、前の語尾 o と一緒になつて、一つの二重音 oj （オイ） といふ音になります。決して （オ・イ） といふ二つの音ではありません。oj といふ一つの音ですその爲めに名詞は單數の形より一音節殖えたのではありませんから、強音節の位置は變りません。

leonoj　fratoj , fratinoj
レオーノイ　ふらートイ　ふらティーノイ

複數の形で「兄弟達は利巧だ」といふには

Fratoj estas saĝa.
フらートイ エスタス サーヂャ

と云つてはいけません、この時は屬辭も亦複數のしるしに、語尾に j をつけます。

Fratoj estas saĝaj.
ふらートイ エスタス サーヂャイ

もし「賢い姉妹達」といふには、

saĝaj fratinoj 又は fratinoj saĝaj. と云ひます。

「父と母」、「兄と妹」といふ、「と」といふ接續詞は kaj （カイ）;

La patro kaj (la) patrino estas bonaj.

校正室から

◆愛讀者の皆樣と共に、生々とした氣持で、新らしい年の輝く光を迎へることは全く喜ばしいです。大正十二年といふ年は、私共にとつては種々な意味で、最も望ましい、意義あるものにして行きたいと思ひます。生涯を振返つて見た時そこに拭ひ去ることの出來ない悔いを殘さないやうに――。

◆『近代の世界音樂』は、非常なる苦心と努力とを要しました。何分十二月號が十日以上もおくれたため、僅かな時日の間によくもあれだけの原稿が集められたと今更のやうに自分達で感心されます。然し世界各國の音樂があれだけまとめ得られたといふものは本誌の誇りであると同時に、前例のない大きな意義ある企てだと信じます。音樂全盛の現代に在つて、而も新年劈頭第一に斯くの如き意義あるものを提供し得たことを此上もなく喜ばしい次第です。同時にこの企てが我が日本の音樂界の發展に資する所があれば併せて幸福だと思ひます。

◆ゴドウスキー氏の『日本音樂の印象』は、如何にもよく鋭い見方をしてゐる。日本音樂家にいろ／＼數へる所があります。同じ意味でアーンスタイン氏の『日本音樂の印象』もいろ／＼と數へてくれます。面白いことは兩氏共殆んど同じ見方をしてる點です。

◆コロンタイ女史の『家庭解放論』は、現在の日本の因襲的な家族制度に、新しい力强い刺戟を與へ、家庭に對する人々の從來の考へ方を新らたにすることでせう。

◆新年號の本誌の今一つの誇りは、十篇の創作を載せ得たことです。殊にその中で、武林氏の『アナルキスタの夢』は、氏の最初の戯曲であるだけに壇に大きな響きを文與へることでせう。この作が舞臺にかかる日を私達は望みます。その他の作は行詰まつた現文壇に夫々何等かの意味で新味を與へることゝ信じます。只殘念なのは、南部修太郎氏の『カテリイナ』の一篇が出來ないため、二月號廻しになつたのは返す／＼も遺憾に堪へません。

◆永井博士が病氣のため『婦人生理學講座』が休載しなければならなくなつたことを愛讀者諸姉にお詫びしなければなりません。

女性改造 定價表

冊數	定價	郵税
壹冊	五十錢	送錢五厘
六冊	參圓	郵税共
十二冊	六圓	郵税共

註文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇注文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵税拾六錢を申受く（但し支那を除く）
◇見本は發送せず
◇郵税切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等 百圓 ／ 二等 七拾圓

◉本社廣告取次所 日本電報通信社 博報堂 弘盛舍

（一月號金一圓）
大正十一年十二月十七日印刷納本
大正十二年一月一日發行
編輯兼發行者 印刷者 東京市芝區伊皿子町四十番地 平田貫一郎
印刷所 東京市小石川區久堅町一〇八番地 株式會社博文館印刷所
發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話芝（長）一六三八 二八五四 四三〇三
振替東京 八四〇二

文學博士 瀧精一著

文人畫概論

定價二圓 送料拾七錢

挿畫拾五葉 菊版上製

最新刊

◇錦繡の我秋を華る本書を見よ◇

人畫の流行今日より甚だしきはなく、またそれほど喜ばしく美はしきことはない、されど悲しいことには文人畫の概念を得るの一書だにないことだ、斯界の第一人者瀧博士は、深くそれ等の缺陷を遺憾に思ひ、本年東京帝國大學にて「文人畫概念」てふ趣味深き講演をなされた、本書は實にその講演を基礎として（一）文人畫の起源（二）文人畫の流派化（三）文人畫の原理（四）文人畫と南畫（六）文人畫の精華（六）將來の文人畫を說いたものだ、挿畫も麗しきコロタイプ十五圖を挿入したれば、美術の國の人々か必ず一讀せではすまぬ含蓄多き著書。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

VIRINA REKONSTRUO
(MONATA REVUO PLEJ ALTAKLASA POR VIRINOJ EN JAPANUJO)
UNU EKZ. 50 SEN; JARABONO 6 JEN.
ELDONEJO · KAIZO-SHA, TOKIO, SHIBA-KU, ATAGOSHITA-MACI 1.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年一月一日發行（毎月一回一回）大正十一年十二月十七日印刷納本
第貳卷第一號
新年號 特價金壹圓（送料參錢）

復刻版　女性改造（戦前編）　第1回配本（第1巻〜第3巻）
2007年6月25日　発行
揃定価（本体60,000円十税）
発行者　船橋　治
発行所　不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
☎03（3812）4433
印刷所　三　進　社
製本所　青木製本
乱丁・落丁はお取り替えいたします。
ISBN978-4-8350-6070-5（全3冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6068-2）